

茨城県教育財団文化財調査報告書Ⅺ

常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

昭和 56 年 3 月

財團法人 茨城県教育財團

「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」正誤表

東橋戸古墳、尾原古墳群、温氣遺跡、大塚新地遺跡、松原遺跡、南原古墳群

ページ・行	誤	正
67-27	標は序大く	牌は広大く
67-28	麻は植えんには	麻を種えんには
131-25	溝状土備	溝状土礎
160-5	教 点	数 点
174-2	□ほど	深さ10mmほど
190-27	壇	坏
191-24	多 土	燒 土
496-32	SAT	STA

序

茨城県の大動脈として大きな役割を果たすことが期待される常磐自動車道の建設は、日本道路公団により進められておりますが、その予定地内に存在する埋蔵文化財については、記録保存をするため、昭和53年度より財團法人茨城県教育財團が日本道路公団より委託をうけて発掘調査を実施しております。この調査により、多くの貴重な資料を発掘し、郷土の歴史の解明に大きな成果をあげることができました。

この報告書は、昭和53年度に実施した谷和原村の東橋戸古墳をはじめ、昭和54年度に実施した岩間町の塚原古墳群、内原町の湿氣遺跡、水戸市の大塚新地遺跡・松原遺跡・南原古墳群等について本年度に整理・執筆したものであります。

この冊子が上梓されるまで種々御協力いただいた日本道路公団、谷和原村・岩間町・内原町・水戸市の各教育委員会、それぞれの地元関係者及び御指導いただいた茨城県教育庁文化課等の各位に対し、心から感謝を申し上げます。

おわりに、本書が学術研究の資料としてはもとより、教育資料としても広く活用されますことを希望してやみません。

昭和56年3月

財團法人 茨城県教育財團

理事長 竹内藤男

例 言

1. 本書は、日本道路公団による常磐自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団より委託をうけた財團法人茨城県教育財團調査課が実施したもので、昭和53・54年度は調査第3班が、昭和55年度は企画管理班が担当した。東郷戸古墳他の調査に関する組織は次のとおりである。

理 事 長	竹 内 藤 男 (茨城県知事)
副 理 事 長	大 金 新 一 (茨城県教育長/昭和52.4~54.6) 古 橋 靖 (茨城県教育長/昭和54.6~)
常 務 理 事	川野辺 四 郎 (昭和52.4~)
事 務 局 長	大 内 秀 夫 (昭和52.4~55.3) 小 林 義 久 (昭和55.4~)
調 査 課 長	川 保 吉之助 (昭和52.4~55.3) 大 塚 博 (昭和55.4~)
企画管理班長	井 田 秀 雄 (昭和54.4~)
企画管理班	川 縛 鶯 (昭和52.4~54.3) 錦 木 三 郎 (昭和52.4~) 栗 田 孝 志 (昭和53.4~)
調 査 及 び 整 理	高 根 信 和 (昭和53年度班長/東郷戸古墳調査) (昭和54年度班長/大塚新地遺跡調査) (昭和55年度班長/東郷戸古墳調査・扶筆) 山 本 静 男 (昭和53年度/東郷戸古墳調査) (昭和54年度/塙原古墳群調査) 佐 藤 正 好 (昭和54年度/塙原古墳群調査) 中 村 幸 旗 (昭和54年度/塙原古墳群調査) 加 藤 雅 美 (昭和55年度/深見・大塚新地・松原道路調査) (昭和55年度/深見・大塚新地・松原道路整理・扶筆) 小 田 邦 男 (昭和55年度/深見・大塚新地・松原道路調査) 石 井 稔 (昭和54年度/大塚新地・松原道路・南原古墳群調査) (昭和55年度/大塚新地・松原道路・南原古墳群の調査・整理・扶筆) 渡 边 俊 大 (昭和55年度/大塚新地遺跡調査)
補 助 員	宮 内 良 隆 (昭和54年度/大塚新地 須崎調査) 仙 波 亨 (昭和53年度/東郷戸古墳調査、昭和54年度/塙原古墳群、松原道路・南原古墳群調査)

3. 本書における用語等については、次の略号を用いたものもある。

SB=建築址 SD=溝状遺構 SE=井戸状遺構 SK=土壙

SI=住居址 P=穴 SX=その他の遺構 001=第1号の意

4. 発掘調査および本書の作成にあたっては、地元の方々をはじめ、下記の諸機関に多大の御協力、御指導、御助言を賜った。記して深甚なる謝意を表する次第である。日本道路公団土浦工事事務所、同石岡工事事務所、水戸工事事務所、茨城県教育厅文化課、谷和原村教育委員会、岩間町教育委員会、内原町教育委員会、水戸市教育委員会

目 次

序

例 言

目 次

第1章 調査の経緯.....	1
第2章 東横戸古墳.....	3
第1節 位置と環境.....	3
第2節 調査経過.....	4
第3節 墳丘.....	4
第4節 埋葬施設.....	4
第5節 出土遺物.....	5
第6節 まとめ.....	6
第3章 塚原古墳群.....	15
第1節 位置と環境.....	15
第2節 調査経過.....	15
第3節 1号墳及び周辺遺構.....	17
1 1号墳.....	17
2 2号住居址.....	18
3 土壙.....	19
第4節 まとめ.....	20
第5節 2号墳及び周辺遺構.....	20
1 2号墳.....	20
2 1号住居址.....	21
3 土壙.....	21
第6節 まとめ.....	21
第4章 湿気遺跡.....	38
第1節 遺跡の立地と環境.....	38
1 地理的環境.....	38
2 歴史的環境.....	38
第2節 調査経過.....	38
第3節 遺構・遺物.....	42

1	第1号竪穴住居址	42
2	地下式塙	46
3	縄塙	49
4	溝	53
5	上塙	53
6	その他	53
	第4節 まとめ	55
	第5章 大塙新地遺跡	66
	第1節 遺跡の立地と環境	66
1	地理的環境	67
2	歴史的環境	67
	第2節 調査の経過	68
	第3節 遺構・遺物	72
1	住居址	72
2	土塙	252
3	井戸状遺構	259
4	掘立柱建築址	264
5	方形周溝遺構	266
	第4節 まとめ	357
	第6章 松原遺跡	370
	第1節 遺跡の立地と環境	370
1	地理的環境	370
2	歴史的環境	370
	第2節 調査の経過	370
	第3節 遺構・遺物	373
1	住居址	373
2	上塙	446
3	井戸状遺構	448
4	掘立柱建築址	448
5	円形周溝遺構	450
6	溝状遺構	453
	第4節 まとめ	480

第 7 章 南原古墳群.....	496
第 1 節 遺跡の立地と環境.....	496
1 地理的環境.....	496
2 歴史的環境.....	496
第 2 節 調査の経過.....	496
第 3 節 遺構・遺物.....	499
1 塚.....	499
2 溝状遺構.....	500
3 住居址.....	502
第 4 節 まとめ.....	506

第1章 調査の経緯

常磐自動車道にかかる埋蔵文化財の発掘調査は昭和53年5月、筑波郡谷和原村東橋戸古墳から開始し、新治郡桜村、千代山村、石岡市、西茨城郡岩間町、東茨城郡内原町、水戸市へとルートにそって北上し調査をすすめ、今日に至っている。昭和54年度は千代田村内の遺跡の報告書を刊行しており、本年度は、前年度発掘調査の出土品の整理をすすめるために、調査員4名が埋蔵文化財整理センターに配属され、ぼう大な資料に取り組み、報告書の作成に従事した。以下、3ヶ年に調査・整理した遺跡は下記のとおりである。

整理 No	道路名	遺跡略号	昭和53年度		昭和54年度		昭和55年度		報告書
			発掘	整理	発掘	整理	発掘	整理	
1 東橋戸古墳	JHN	○					○		常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ
2 下広岡遺跡	JSH	○			○			○	常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ
3 上福吉西原古墳	JKN	○				○			常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
4 上福吉西原A	JKN-A	○				○			※
5 上福吉西原B	JKN-B	○				○			※
6 上福吉西原C	JKN-C	○				○			※
7 中佐谷卜百遺跡	JNT	○				○			※
8 中佐谷殿内遺跡	JNTU						○		
9 中佐谷A遺跡	JNS-A	○				○			常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
10 中佐谷B遺跡	JNS-B	○				○			※
11 大塚1号古墳	JOT-1				○	○			※
12 大塚2号古墳	JOT-2				○	○			※
13 大塚3号古墳	JOT-3				○	○			※
14 大塚4号古墳	JOT-4				○	○			※
15 大塚5号古墳	JOT-5				○	○			※
16 大塚6号古墳	JOT-6				○	○			※
17 大塚7号古墳	JOT-7				○	○			※
18 大塚8号古墳	JOT-8				○	○			※
19 大塚9号古墳	JOT-9	○				○			※
20 大塚10号古墳	JOT-10	○				○			※

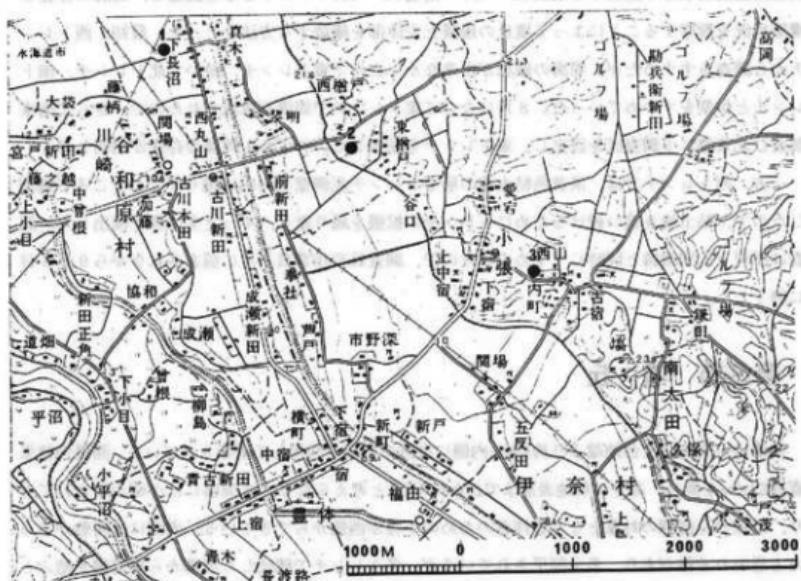
整理 No	遺跡名	遺跡略号	昭和53年度		昭和54年度		昭和55年度		報告書
			発掘	整理	発掘	整理	発掘	整理	
21	大塚11号古墳	JOT-11	○	○					常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書上
22	大塚12号古墳	JOT-12	○	○					タ
23	大塚13号古墳	JOT-13	○	○					タ
24	大塚14号古墳	JOT-14	○	○					タ
25	大塚15号古墳	JOT-15	○	○					タ
26	松延1号古墳	JMN-1	○	○					タ
27	松延2号古墳	JMN-2	○	○					タ
28	志筑遺跡	JSZ	○	○					タ
29	宮部遺跡	JMB	○						
30	鹿の子A遺跡	JKK-A	○						
31	鹿の子C遺跡	JKK-C	○		○				
32	塙原1号古墳	JTH-1	○		○		○		常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ
33	塙原2号古墳	JTH-2	○		○		○		タ
34	湿気遺跡	JSK	○		○		○		タ
35	大塚新地遺跡	JOA	○		○	○	○		タ
36	松原遺跡	JMII	○		○		○		タ
37	南原1号古墳	JNH-1	○		○		○		タ
38	南原2号古墳	JNH-2	○		○		○		タ

昭和55年4月から報告書作成にかかる計画をすすめ、図面等に重点をおき、整理作業を開始した。あわせて遺物の洗浄、注記、復元作業に入り、写真撮影を行なった。調査によって得た資料はぼう大であり、報告書の体裁として常磐自動車道にかかる遺跡の出土品の量により、下広岡遺跡と他の6遺跡（東摘戸・塙原・湿気・大塚新地・松原・南原）の2冊に編集するという形をとることにした。

挿図は、発掘調査で記録した実測図を遺構ごとに平面図・断面図（セクション）・出土遺物実測図を掲載した。写真是、遺構の挿図と合わせた形をとりたかったが、頁数の関係から選択して載せた。特に遺物については、実測図を中心としたので相当少なく記載されている。

第2章 東櫛戸古墳 鳥居

第1節 位置と環境



第1図 東櫛戸古墳・周辺遺跡位置図

小貝川は過去において何回も洪水をくりかえし、そのたびに上流から肥沃な土砂を運び、その流域は県下でも有数な穀倉地帯となっている。

東櫛戸古墳は、この小貝川の氾濫原である水田を南西方に見おろす洪積台地の端、筑波郡谷和原村西櫛戸字舟戸841・843番地に位置している。台地は標高20~21mで畑地がみられるが、近年ゴルフ場や工場の進出がめざましく、宅地化の波が筑波研究学園都市方面から押し寄せてきている。古墳の北側は県道（土浦一小網線）が走り、小貝川を渡って国道294号線に接続している。村内には、下長沼貝塚（図1-1）をはじめ9ヶ所の遺跡（注1）が確認されており、昭和53年7月に洞坂畠遺跡（注2）の発掘調査が行なわれ、住居址群（縄文時代後・晩期）を検出している。

小貝川左岸流域には、宮後古墳（図1-3）（伊奈村）、東櫛戸古墳（図1-2）、並木古墳・福岡南古墳群が点在しており、本墳はその中位を占め、付近の鹿島神社境内にある古墳を含めて小群を形成していたものと考えられる。

第2節 経過

本墳の調査は昭和53年5月下旬、雑木の伐採や調査区の設定のための杭打ち作業から開始し、墳丘測量後墳頂部で直交する東西(B-D)・南北(C-A)トレンチ2本を設定し、周溝の存在と構築状況を観察することによって墳丘の規模と主体部を確認する方法をとった。最初、西トレンチから調査をすすめたが、周溝の確認が出来なかったので東トレンチ、続いて北トレンチ、南トレンチと作業をすすめていった。8月になって東トレンチで周溝が確認されたので、さらに南東部及び北東部に小調査区を設定し、東トレンチを拡張した。いずれも周溝の存在が判明した。

一方、西トレンチでは、淡黄色粘土塊の層をトレンチ北側壁を約64cm掘り下げたところで確認したので、粘土塊を追い続けるためにトレンチの拡張を繰り返し、やっと主体部を検出した。調査は桜村下広岡遺跡と同時にすすめていたので、調査員や作業員不足に悩まされながら9月8日に終了した。

第3節 墳丘

本墳は、突出した台地端より約400m内側に自然の地形を利用して構築されている。測量の結果直径22.9mを測り、高さは現地表面より2.0mの円墳と考えられる。墳頂部には小祠が祭られており、近世から信仰の対象となり参拝者のための小径が西側からできている。南側には屋敷があつたと思われる跡があり、多少削平されているが、各トレンチで確認した周溝から推定線を結ぶと平面プランは東西に比して南北がやや長くなる不正円形を呈している。盛土は東西トレンチの北壁のセクションで観察すると、最下層のローム層の上層として旧表土層が平均約38cm堆積し、若干東側に流れるように傾斜していたが、おおむね水平に土層が積まれており、構築時においては比較的単純な構築がなされた事と考えられる。

東トレンチの周溝は幅4.5m、深さ0.5mで墳丘側で急激に落ち込むが、反対側では緩くなっています。溝底は平坦でその中から土師器を出土した。また、南(C-A)・北(A'-A)トレンチにおいては、周溝が確認できなかった。これは後世において墳丘裾部の削平によるものであるか、あるいは構築当初から周溝を設置しなかったものなのかを判明することが困難である。なお、埴輪・瓦石等の施設はなかった。

第4節 埋葬施設

埋葬施設は粘土層が墳頂部下の墓壙内に築かれていた。墓壙は旧表土から掘り込まれて、その

規模は南北(長さ)約8m、東西(幅)約2.35mの長方形を呈し、深さは旧表土層下0.65mである。主軸はN-35°-Wを指している。

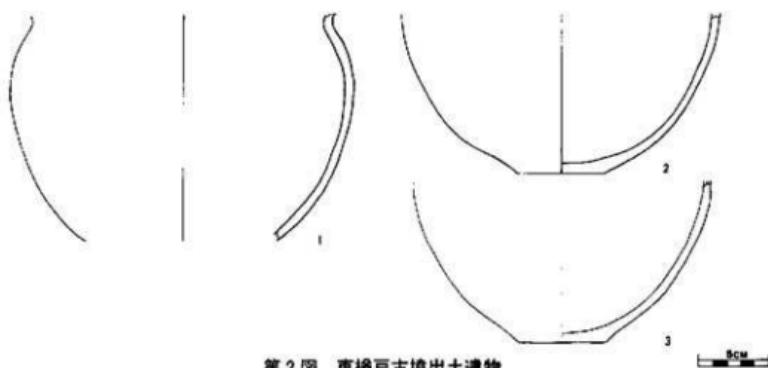
粘土層は墓壙底面に淡黄色粘土が敷かれ、粘土塊が棺に沿って断続的に置かれた状態で出土した。全長約7m、幅1.13mである。調査中にトレントによって多少削ってしまったのであるが、その断面の状態はU字形を呈しているところから割竹形木棺ではなからうかと推定する。棺内からは遺物は発見されなかった。土層は單一で、黒褐色土が粘土塊と混って堆積されていた。

第5節 出土遺物

調査に際して発見された遺物は、古墳に直接伴うものとして粘土層直上付近より出土の土師器及び東トレントで確認された周溝底から出土した土師器と、古墳築造以前の遺物包含層を盛土に使用した深埋入した绳文式土器及び墳丘再利用によって擾乱された土層より出土した遺物等である。第2図-1は、粘土層の西壁南端部直上に頸部を上に10片の破片で出土した。おそらく棺との関係が深いのではないかと考え、付近を精査したが発見されず、これが唯一の出土遺物である。口縁部及び底部を欠き胸部破片のみである。復元すると、胸部径24.4cm、頸部21.3cmの壺形土器と思われる。胸部は球形を呈するが、胸部最大径は中位より上である。わずかに残る頭部より胸部分にかけてヘラ削している。器厚は0.4cmで、色調は暗褐色で黒ずんでいる。胎土は石英を含んでおり、焼成は普通である。

第2図-2は、東トレント周溝内底に横位の状態で出土した。底部径6.2cm、現存高11.4cmほどの底部から胸部にかけての破片で壺形土器と思われる。胸部はゆるやかなカーブをえがき、最大径が中位となる球形を呈している。底部は平底である。整形は胸部上方から底部にかけてヘラ削り、底部は粘土で貼りつけ、撫で接合し、ヘラ削りで仕上げている。器厚は胸部で0.7cm~0.8cm、底部分で0.7cmである。胸部内面はヘラ削りを横位に施し、色調は明褐色、内面は淡黄褐色で胎土に砂礫を含み、焼成は良好である。

第2図-3は、ほぼ同じレベルの周溝内に破片で出土したものである。底部径6cm、現存高11cm、口縁部及び頸部を欠いている壺形土器と考えられる。整形は胸部の内外とともにヘラ削りが施されている。器内外は赤色顔料によって彩色され、しかも土器破碎後破片の状態の時に朱がぬられており、それは断面にも彩色されていることから判断できる。器厚は0.5cm~0.6cm、色調は淡黄褐色で、胎土中に砂粒を含み、焼成は良好である。



第2図 東橋戸古墳出土遺物

第6節 まとめ

本古墳は小貝川左岸の台地端に築造された古墳である。墳丘規模は直径23mの円墳と考えられ、主体部は地山を掘り込んで墓室をつくり、その上に木棺を置き、その周囲を粘土でおさえたものと推定される。副葬品は椁内より発見出来なかったが、椁直上に壺形土器が出土し、被葬者とそう遠くない年代を示唆している資料を得た。壺形土器は球形を呈し、和泉期まで下降するものではなく、五頭期に比定するものである。又、周溝底から出土した壺形土器は破碎された上器の断面とも朱が塗られているところから、他所で破碎され古墳に供献された事実が明らかであり、埋葬後墓前祭を行なったものと考えられる。

茨城県内ですでに調査された前期古墳は、西茨城郡岩瀬町狐塚古墳(注3)、稲敷郡桜川村原1号墳(注4)、行方郡玉造町動使塚古墳(注5)、筑波郡筑波町山木古墳(注6)、新治郡八郷町丸山古墳(注7)、八郷町佐白塚古墳(注8)、岩井市上出島2号墳(注9)の7例をあげることができるが、本墳もこれらのグループに位置づけられる可能性が強い。

(注1) 茨城県教育委員会「茨城県遺跡地図」昭和52年

(注2) 洞坂細道跡発掘調査会「洞坂細道跡」昭和54年

(注3) 岩瀬町教育委員会「常陸狐塚」昭和44年

(注4) 浮島研究会「常陸浮島古墳群」昭和51年

(注5) 大塚初重・小林三郎「茨城県動使塚古墳の研究」『考古学雑刊』2・3 昭和39年

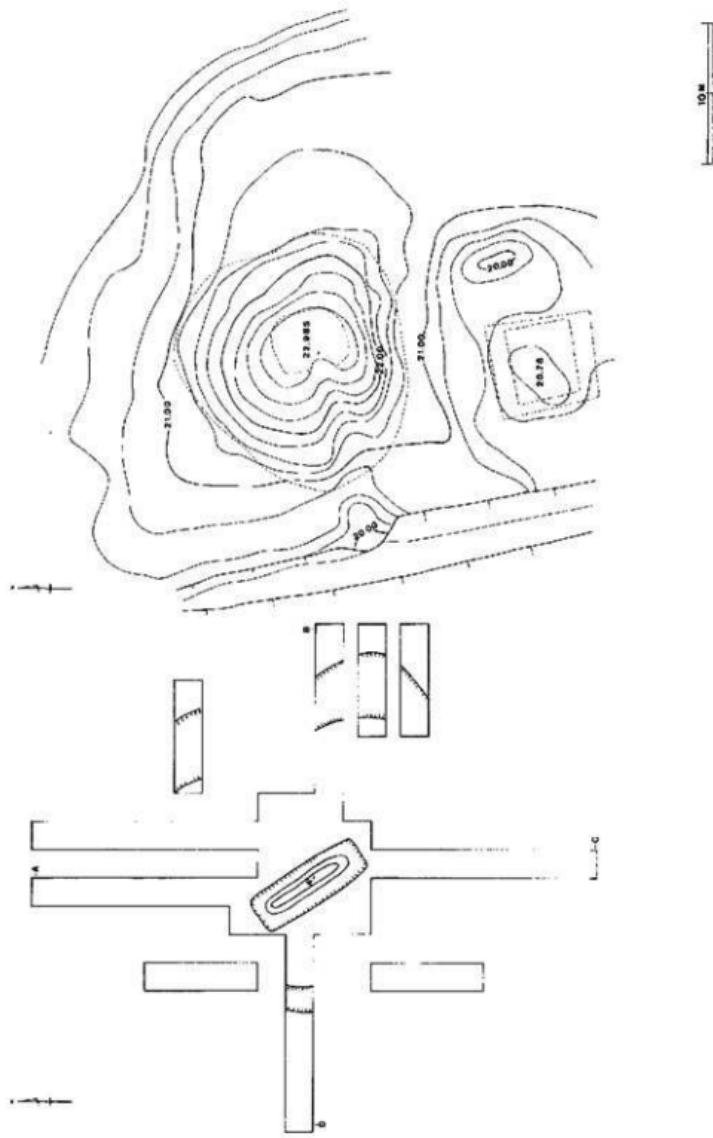
(注6) 茨城考古学会「茨城県筑波町山木古墳」昭和47年

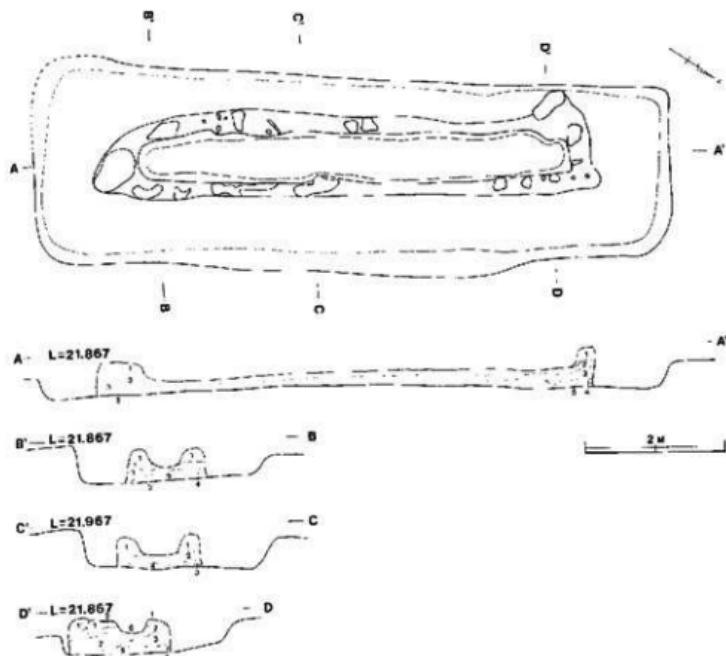
(注7) 大塚初重「丸山古墳」『茨城県資料』考古資料編古墳時代 昭和49年

(注8) 茨城県教育委員会「佐白塚古墳調査概要」昭和37年

(注9) 岩井市教育委員会「上出島古墳群」昭和51年

第3図 東柏戸古墳全体測量・トレンチ配置図





東柏戸1号墳主体部土層解説

- A-A'
- 1層、褐・白 ハードロームがロック及び粘土を含む
非常に固い
 - 2層、暗褐色 ハード、ソフト。黒色土の混ったもの
 - 3層、暗褐色 上層より黒色土の割合が多い
 - 4層、 ハードロームを主体とした軟
 - 5層、暗褐色 フットローム及び黒色土や若干粘性がある

東柏戸1号墳主体部土層解説

- B-B'
- 1層、 ハードロームを含むする非常に固い層
であり粘土を含む
 - 2層、 黒褐色 ハード、ソフト。黒色土の混った層である
ハードロームを主体とした層でびびり
している
 - 3層、 暗褐色 ハードロームの小ブロック及び黒色土
を含むする。こまり倒し
 - 4層、 黑褐色 粘性を帯びている。ソフトロームのブ
ロックを含むする

東柏戸1号墳主体部土層解説

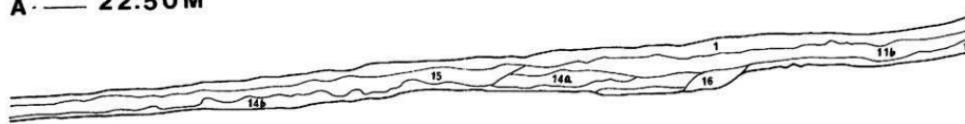
- C-C'
- 1層、茶褐色 ハードブロックのロームを含み非常に
硬い
 - 2層、暗褐色 ソフトロームの小粒子を含みきらっと
しててしょりはない
 - 3層、暗褐色 ハードブロックのロームを含みこま
りがある
 - 4層、黒褐色 さめこまかた土層でやわらかい

東柏戸1号墳主体部土層解説

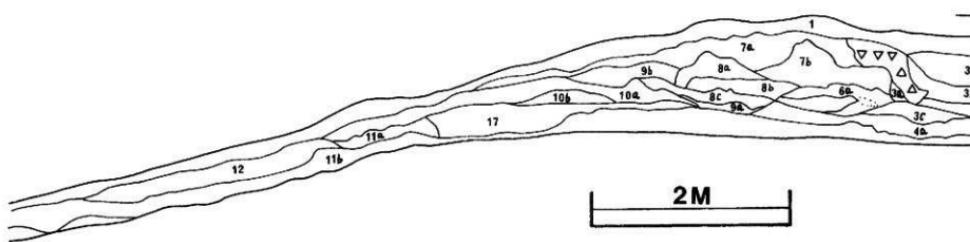
- D-D'
- 1層、茶褐色 ハードブロックのロームを含み、非常
に硬くしまりがある
 - 2層、 黏土ブロック
 - 3層、茶暗褐色 ハードブロックのロームを含み、こ
まりがある
 - 4層、暗褐色 ソフトロームの微粒子とハードローム
の小粒子を含むし、しまりがある
 - 5層、 黒褐色 さめこまかた土層でやわらかい
 - 6層、茶褐色 ハードロームの小粒子とソフトセーム
を含みしまりがある
 - 7層、暗褐色 ハードロームのブロックを含み非常に
硬い

第4図 東柏戸古墳主体部

A —— 22.50M



— A'



2M

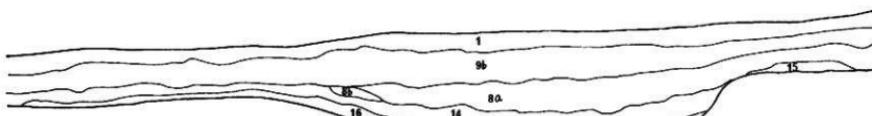
北トレンチ東壁上層解説

- 1層. 黄褐色 基岩地、粗面局である。
- 2層. 褐褐色 ハードロームの小ブロック含む。バサバサした感じ
- 3 a層. 黄褐色 ハードロームの小ブロック含む。ソフトラック含む。3 a層に比へるとボリューム
- 3 b層. 黄褐色 ハードローム及びソフトロームブロック含む。3 a層に比へるとボリューム
- 3 c層. 黄褐色 ハードロームブロック及びソフトラック含む。3 a層に比へて黒色を上に持っているため、地下油味がかり悪いながら硬り岩はなる。
- 4 a層. 黄褐色 ハードロームブロックを多く見に個人、因くつきかたわれたように見受けられる。
- 4 b層. 褐褐色 ハードロームブロック、ソフトロームブロック及び褐色色の存在でありバサバサしている。
- 5層. 褐褐色 ハードローム及びソフトロームの小塊を含む。バサバサした感じ
- 6 a層. 褐褐色 ハードローム及びソフトロームの微細粒子を主体とした層。バサバサしている。
- 6 b層. 黄褐色 ハードロームブロック(1mm程)及びソフトローム含む。袖立間くバサバサしている。
- 6 c層. 褐褐色 ハードロームの基盤がソリウムの微細粒子を含む。法板的感があり有
- 7 a層. 褐褐色 ハードローム(5mm程)含む。硬りなくバサバサしている。
- 7 b層. 褐褐色 ハードローム(12mm程)及びソフトロームブロック含む。バサバサしている。

- 8 a層. 暗褐色 ハードローム及びソフトロームの小塊を含む。硬り無い。
- 8 b層. 暗褐色 ハードローム、ボック(1mm程)及びソリウム含む。ぞわらかい。
- 8 c層. 暗褐色 ハードローム及びソリウムの小塊を含む。ぞわらかい。
- 9 a層. 暗褐色 ハードローム及びロック(粒子3mm程)及びソフトローム含む。硬りなし。
- 9 b層. 暗褐色 ハードローム及びソリウム含む。やわらかい。
- 10 a層. 黄褐色 上に硬り岩。ヤメ軟岩。
- 10 b層. 黄褐色 ソフトローム含む。バサバサした感じ。
- 11 a層. 黑褐色 ソフトローム含む。バサバサしている。
- 11 b層. 黑褐色 ソフトローム4粒子含む。バサバサしている。
- 12層. 明褐色 硬りなくバサバサしている。
- 13 a層. 黑褐色 ソフトロームを主体として、硬りなく有りない。
- 13 b層. 黑褐色 ソフトローム含む。バサバサしている。
- 14 a層. 黑褐色 ソフトローム少量含む。比較的硬り岩。
- 15層. 黄褐色 キメ解かく若干硬りを帯びている。
- 16層. 明褐色 ハードロームブロック及びソリウム主主体とした土層で弱いが硬りを帯びている。
- 17層. 黑色土

第5図 北トレンチ

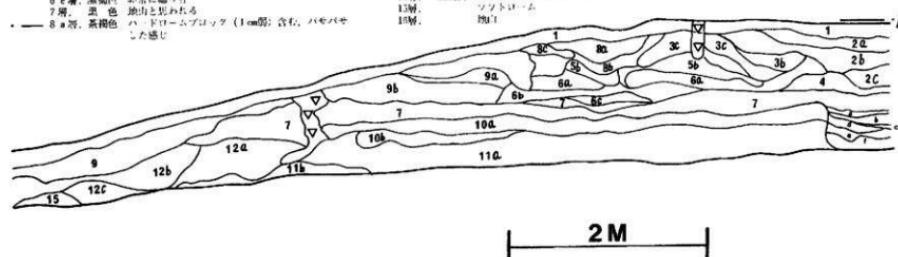
B —— 22.50M



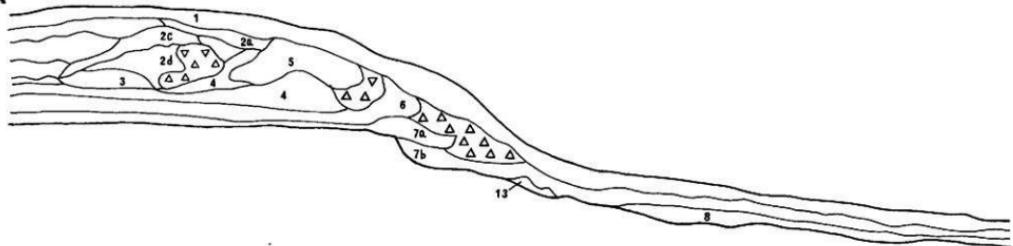
東トレンチ北壁上端解説

- 1層、
表層である。突出層である。
- 2 a層、
茶褐色
ハードロームブロック少量含む。繊り巻くやわらかい。
- 2 b層、
茶褐色
ハードローム小粒粒子含む。比較的繊り有り。
- 2 c層、
茶褐色
ハードローム [1cm厚] 含む。繊り弱い。
- 3 a層、
暗褐色
ハードロームの小粒子含む。比較的繊り有り。
- 3 b層、
暗褐色
ハードロームの小粒子含む。繊り弱い。
- 3 c層、
暗褐色
ハードロームブロック [1cm厚] 少量含む。比較的繊り有り。
- 3 d層、
暗褐色
ハードローム含む。バサバサした感じ。
- 4層、
茶褐色
ハードロームブロックの大塊で成り立つ層。非常に固い。
- 5 a層、
黒褐色
比較的繊り有り。
- 5 b層、
黒褐色
ハードロームの小粒子含む。繊り有り。
- 6 a層、
黒褐色
ハードローム及びソフトロームの微粒子含む。比較的繊り有り。
- 6 b層、
黒褐色
ハードローム及びソフトロームの微粒子含む。比較的繊り有り。
- 6 c層、
黒褐色
地山と見られる。
- 7層、
黑色
ハードロームブロック [1cm厚] 含む。バサバサした感じ。
- 8 a層、
茶褐色
ハードロームブロック [1cm厚] 含む。ハサハサした感じ。
- 8 b層、
茶褐色
ハードロームブロック [1cm厚] 少量含む。ハサハサした感じ。
- 8 c層、
茶褐色
ハードロームブロック [1cm厚] 含む。非常に繊り有り。固い。
- 9 a層、
暗褐色
ハードロームブロック [1cm厚] 少量含む。ハサハサした感じ。
- 9 b層、
茶褐色
ハードローム及びソフトロームブロック含む。ハサハサした感じ。
- 10 a層、
黑色
ソフトローム含む。
- 11 a層、
暗褐色
黒色土とソフトラームの混った層。
- 11 b層、
暗褐色
地質としてほぼ1番と同じ。
- 12 a層、
暗褐色
ソフトロームブロック含む。バサバサした感じ。
- 12 b層、
暗褐色
ハリハリした感じ。
- 12 c層、
暗褐色
ソフトロームを多量含む。キメ細かい十層。
- 13 a層、
黑色
ソフトロームの粒子含む。繊り巻くサラサラしてサラサラした感じの上層。
- 13 b層、
暗褐色
ソフトラームを多量含む。比較的繊り有り。
- 14層、
出露層
ソフトラーム。
- 15層、
地山

A'



A' — 22.50M



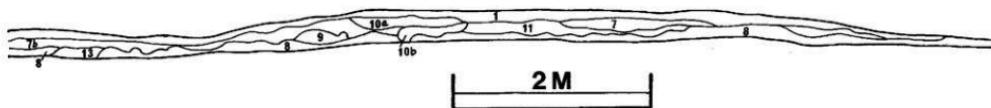
J II N古墳南トレンチ西壁上層解説

- 1層. 表土。松花層である。
- 2 a層. 茶褐色 ハードロームの小粒子含む。バサバサした感じ
- 2 b層. 茶褐色 ハードロームブロック (2cm強) 含む。土粒的繰り有
- 2 c層. 茶褐色 ハードロームブロック (小粒子2cm強) 含む。繰り聚くバサバサして
いる
- 2 d層. 茶褐色 ハードロームブロック (小粒子3cm強) 含む。比較的繰り右
- 3層. 茶褐色 ハードロームブロック (小粒子1cm強) 多量に含む。繰り弱い
- 4層. 茶褐色 ハードロームブロック (小粒子2cm強) 多量に含む。非常に繰り有、
部分的に粘土小粒子含む
- 5層. 新褐色 ハードロームブロックの小粒子含む。繰り弱くバサバサした感じ
- 6層. 無褐色 ハードローム及びソフトロームの微粒子含む。繰り弱くバサバサした感
じ

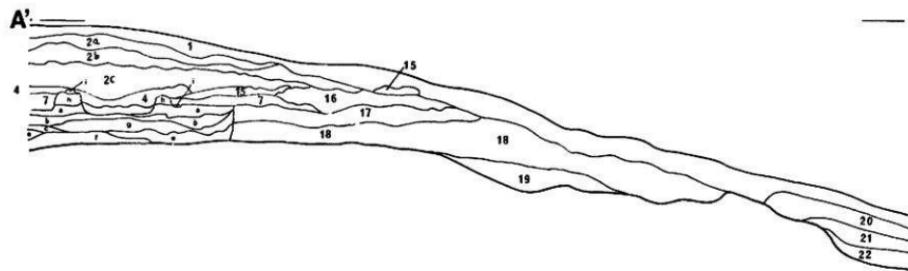
- 7 a層. 時褐色 ソフトロームの微粒子含む。キメ細かく比較的繰り有
- 7 b層. 時褐色 ソフトロームの微粒子含む。キメ細かく比較的繰り有
- 8層. 茶褐色 ハードローム及びソフトロームの小粒子含む。比較的繰り有
- 9層. 茶褐色 非常に繰り有、弱い
- 10 a層. 茶褐色 粘土を部分的に含む。非常に弱い
- 10 b層. 茶褐色 粘土を部分的に含む。非常に弱い
- 11層. 黒色 ハードローム小粒子含む。非常に弱い
- 12層. 黑色 粘土を主体とした土層
- 13層. 黑色 ハードロームブロック

C

2M



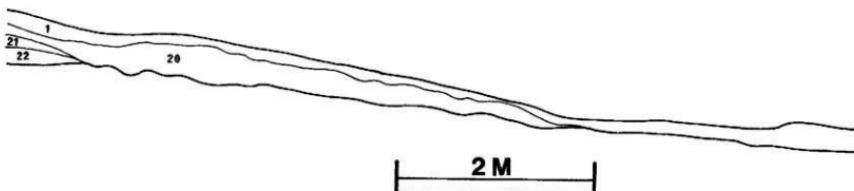
第7図 南トレンチ



西トレントン地層解説

- 1号～7号は東トレントン下部地層
- 15号：暗褐色　しまりは薄く、サクサウした感じである
- 16号：黒色　ソフドロームのアリックを含む。若干しまりを帯びる
- 17号：黒色　赤褐色風化（田畠色）である
- 18号：黒色　赤褐色風化（田畠色）である
- 19号：黒色　赤褐色風化（田畠色）である
- 20号：暗褐色　しまりは薄く、やわらかい
- 21号：暗褐色　しまりは薄く、ローム粉を少量含む
- 22号：暗褐色　ローム粉を含む。しまりを認める

- a層：褐 色 パンチカがなされており非常にかたい
- b層：暗褐色 ハードローム小アリックを含むししまりを帯びる
- c層：黒 色 ハードロームアリックを主体とする
- d層：暗褐色 ハードロームアリック、及び強化土産在
- e層：黒 色 少量のロームアリックを含むする
- f層：黒 色 少量のロームアリックを含む
- g層：出露色 若干粘性を帯びる
- h層：暗褐色 ハードロームアリックを含むししまりを帯びている
- i層： 黒 色 ハードローム及び粘土を含みししまりを帯びている



第8図 西トレントン



1 東橋戸古墳遠景
東北土出古墳群 藤原町



2 東橋戸古墳近景
東北土出古墳群 藤原町



3 北トレンチ



4 東トレンチ土層断面(部分)



5 粘土櫛断面(部分)



6 粘土櫛

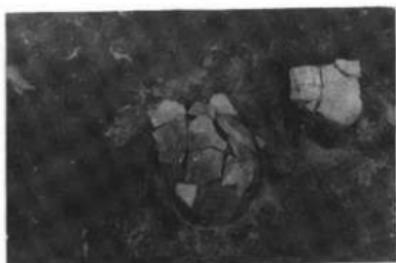


7 粘土櫛南端部断面



8 墓壙(粘土櫛除去後)

写1



9 東トレンチ遺物出土状態



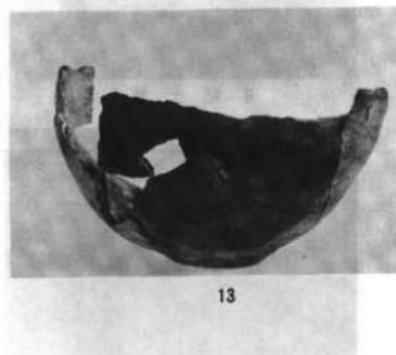
10 東トレンチ遺物出土状態



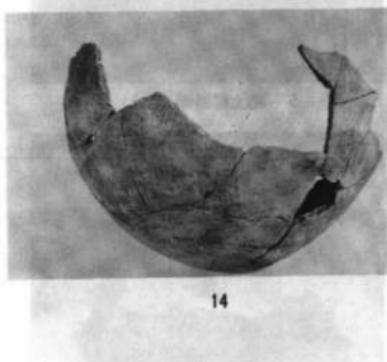
11 粘土管附近遺物出土状態



12 出土遺物



13



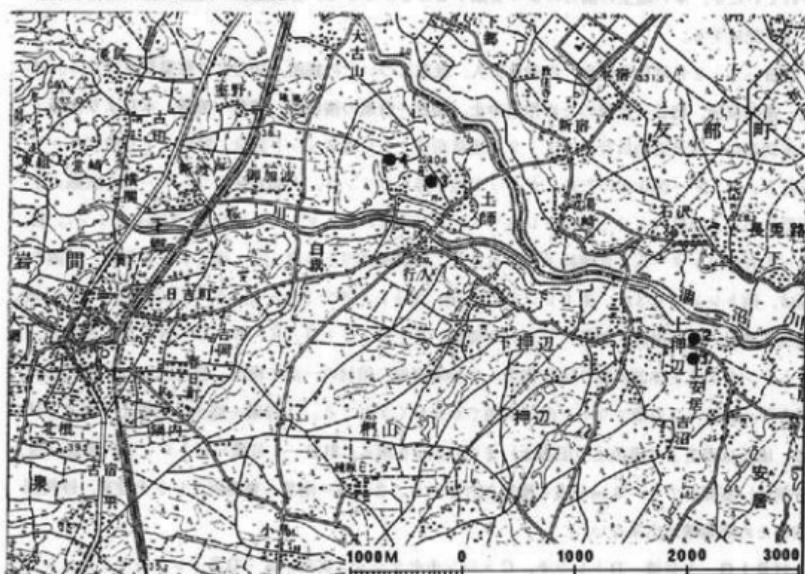
14

粘土管附近遺物

面端部附近遺物

第3章 塚原古墳群

第1節 位置と環境



第1圖 捷徑吉增：周辺進路位置圖

酒沼川は栃木県との境界鶴足山塊に、源を発し、笠間盆地を経て小規模な蛇行をくり返し、酒沼に注いでいる。塚原古墳群はこの中流部の右岸低地、西茨城郡岩間町大字安居1974番地外に所在している。これらの低地は酒沼川の氾濫原の微高地で集落と水田地帯となっている。

古墳群は以前は30基以上存在したといわれるが、現在は前方後円墳1、円墳5の計6基である。岩間町内には26遺跡(注1)が確認されているが、そのうち7遺跡が古墳群もしくは古墳であり、この河川に沿って、塚原古墳群(図1-1・2)、十三塚古墳(図1-3)、高靈神社古墳群(図1-4)が右岸沿いに点在している。塚原1号墳と2号墳の間に県道(岩間-奥ノ谷線)が走り、それと常磐自動車道が直交している。

第2節 経過

本古墳群の発掘調査は、昭和54年10月17日、古墳前においての警界警戒実行から11月30日終了す

までの約32日間であった。

すでに常磐自動車道のルート内に1号墳は完全に入っていたが、2号墳の北側がルート外にのびており、古墳を二分してその内側を調査するという変則的な調査をせざるをえない状況下におかれていたが、幸い地主の協力により全掘することができた。各調査員の発掘調査日誌をまとめて以下記述する。

17日—1・2号墳作業開始、作業員37人、就業についての説明、10時より慰靈祭を行なう。18日—遺跡清掃、19日—台風のため作業中止。20日—台風の後始末。22日—清掃、本日より佐藤・山本調査員、仙波補助員合流。1・2号墳草刈り。1号墳グリッド設定。24日—1号墳グリッド杭打ち、センター図作成のため、グリッド杭下部レベリング、大試験区のコーナー部を試掘。土師器片出土。25日—グリッド杭下部レベリング及び墳丘のセンター入れ(頂部より80cmライン)。26日—1号墳センター入れ作業終了。本日より、周溝確認のため東・北・南トレンチ発掘。周溝の幅は、南トレンチで3m、東トレンチで1.5m、北トレンチで1mと北に向うにつれ狭くなる。墳丘全体測量・写真撮影。29日—トレンチ発掘、A・B・C・D・E・F・G・Hトレンチ設定、Hトレンチより主体部の掘り込み検出。2号墳測量、棺材の一部を検出、長径2.3m、短径0.9mの長方形。30日—2号墳マウンド南・東側でかなりくずれてる。1号墳—盛土を旧表土まで下げる。墳丘は表土より黒色土(旧表土)まで1.25mを測る。31日—1号墳—Hトレンチ内調査(四分割法)基部まで5~8cmと浅く擾乱されている。2号墳—南北・東西両トレンチ設定、砂利採取のため周溝確認出来ない。

11月1日—1号墳—Dトレンチ、Cトレンチセクション実測。A・D各トレンチセクション写真撮影、周溝確認グリッド拡張、
2号墳—墳頂部表土下5cmに石棺の一部が出土、周溝は東のみ残っている。2日—1号墳—AトレンチBトレンチセクション実測、周溝確認のためグリッド拡張、E—7グリッドにおいて高壙出土。2号墳々丘発掘。
5日—1号墳

一周溝発掘、墳丘抜張発掘。6日—1号墳周溝発掘。7日—1号墳—周溝の内側をもう1本の周溝がめぐっている。2号墳—東・南トレンチ調査。8日—2号墳—東側トレンチ(幅4m)、南側トレンチを発掘したが周溝は確認出来ず、東側トレンチの北側に2m幅のトレンチ設定、東トレンチ東端に住居址、土壤検出、1号墳の東~北ベルト除去。
E・F・G・Hトレンチのセクションコメント入れ。実測のため40m方眼のメッシュ組み。9日—1号墳40m方眼メッシュ組み作業終了。墳丘部旧表土除去、地山まで掘り下げたが主体部は発見されなかった。北西・西・南西部の周溝内のベルト除去。2号墳東西・南北の調査区を旧表土下まで掘り下げたが主体部を確認出来ず。東西トレンチの北西側に新調査区を設定したが、すでに盗掘穴がある。E・Fトレンチ東側に弥生時代住居址確認。12日—1号墳の主体部土壤セクション引き、実測後コメント入れをする。南西部周溝付近に土壤1基(1号)発見。2号墳トレンチ発掘。13日—1号墳主

体部セクションベルト除去。主体部は正方形を呈する。1号土壙は平面プラン及び遺物から土壙墓であることが判明。14日—1号墳—2号土壙調査終了する。2号土壙は1号墳Dトレンチに検出長楕円形で深さは50cm、遺物はない。1号墳付近に位置しているので古墳との何らかの関係をもつ可能性がある。2号墳—南北トレンチの西側トレンチ充掘、東トレンチセクション実測、写真撮影、東側トレンチセクション実測、コメント入れ、写真撮影等をする。15日—1号墳—平面実測。2号墳—東西・南北ベルトをはずし、新たに北側部分の1号住居址・1号土壙(円形)調査する。16日—1号墳主体部・土壙 エレベーション実測。 2号墳北側の調査。19日—1号墳—3・4号土壙セクション引き。5・6号土壙 セクション実測。 東側住居址(2号住)は数基の重複か。2号墳—東側トレンチ・南側トレンチ延長部セクション実測、コメント入れ。1号住居址の平面実測とエレベーション図作成。方形プランで土師器片を出土する。20日—1号墳—3・4号土壙実測、コメント入れ。5・6号土壙コメント入れ、2号住居址より須恵器を出土する。2号墳—エンベーション実測をする。21日—1号墳—2号住遺物をとりあげ、セクション実測、コメント入れ、ベルト除去。3・4号土壙全掘へ。2号墳—全剖写真撮影。22日—1号墳—2号住居址の精査、周溝(地山部)清掃。3号土壙平面実測(午前中で終了)。雨。26日—雨で作業中止。27日—1号墳周辺土壙(3・4・5・6号)平面実測。全景写真撮影。2号住の調査。作業日解雇。28日—1号墳主体部実測、エレベーション図作成。30日—エレベーション図作成、AからFまで6本作図。

第3節 1号墳及び周辺遺構

1 1号墳 (図2)

墳丘 本墳は常磐自動車道のルート内のほぼ中央、センター杭(STA-149)より西方5mに位置する。近年まで農地として陸稻、梅林などに利用されていたが、開発が近づくにつれ雑草がおい茂り、それを刈り取るとわずかに墳丘が残存し、長方形を呈する小丘となっていて、いも穴に利用されていた。測量の結果、墳丘の最高点は17.8m、裾部で16.3m、比高1.5mである。

わずかに残っていた墳丘に、東西・南北方向にトレンチを設定する。発掘して観察すると、旧表土は耕作によって消えてしまっているが、ここから掘り込んで周溝をつくり、盛土したものと推定される。周溝をそれぞれのトレンチで確認し、それを結びあわせると、主体部付近にくびれ部があることが判明したので、前方後円墳の可能性がでてきた。墳丘の主軸方向はN-44°-Wを指す。後円部はやや正円形に近い形状で、くびれ部から前方部先端コーナー部にかけて開いており、くびれ部の幅の2倍が後円部の直径に相当するよう築造されている。周溝は、墳丘の周囲を一周し、前方部のくびれ部で幅が少し狭くなるが、ほぼ3mで、溝底は平坦である。

埋葬施設(図3) 埋葬施設は前方部の主軸線上に設置された箱式石棺であるが、ほとんど破壊され、わずかに土壌の範囲を示す棺材(粘板岩)の破片が散在しており、その破片を除去すると土壌の底部であることが判明した。長径2.3m、短径1.93mの規模で、石棺の板石が立っていたと思われる四形状の溝があり、それから推定すると、内法長辺1.7m、短辺0.6mの規模の石棺が存在したようである。

遺物 周溝部及び盛土内より、若干の土器片が出土したのみで、本墳築造時期を決定する遺物は検出することが出来なかった。

2 2号住居址(図4)

遺構 本住居址は、1号墳の後円部EトレンチとFトレンチの拡張区において、周溝調査中に確認されたものである。主軸方向はN-118°-Eで、長辺約6.2m、短辺6mを測り、隅九方形を呈する住居址である。全体的にみて、壁高が12cmと低いのは、古墳の調査で、削平されたためである。床は平坦で比較的硬く西壁側に焼土が検出され、炉と考えられるがきわめて小規模のものである。ピットは8個検出されP₁~P₄が主柱穴と考えられるが整然としていない。住居址内の覆土は、少量のロームブロックを含む暗褐色土層の下に少量の炭化物を含む比較的やわらかい褐色土の堆積がみられる。なお住居址内から炭化材が床面に検出されたことから焼失した可能性もある。

遺物(図10-1~3、5~10、図11-11~21) 住居址内から出土した遺物は遺構に伴う上師器と若手の須恵器、弥生式土器が覆土中より出土した。

塙原古墳群出土遺物一覧

番号	種類	法寸(㎝) (L×W×H)	最大径	器形の特徴	整 形 法		色調	底	土	質
					外 面	内 面				
1 瓶	甕	15.8X(8.3)X-		口-「ぐ」の字形にはば 直線的外反	ローマコナデ 斜-テナ	ローマコナデ 斜-ヘラズリ	明赤褐	1~2mmの石 英-チャート 板を含む	墨10個 成形一品 裏返り有り	
2 瓶	甕	15.6X(9)X-	周部	口-外反角度は少なく はば直線的外反 底-最火延あり、底 部は黒らまない。	ローマコナデ 斜-ヘラズリ ヘナナ		棕			口は下部を除き全 面にスミが付着
3 盆	- X(18)X33	周中位	圓筒形	底はば直線形に近い	ヘラズリ	ヘナナ	浅黄褐	良好	砂粒を含む	成形一品
4 磁器盃	-- X15X -	不規	瓶	瓶底は直線形、口縁部 へ向ひゆるく外反する	直線形系文	ナゲ	棕	良好	精緻	底部に薄い落書き つた。全周にスミが 付着。みぞ入二品
5 盆	- X(8.7)X3.8	周中位	小ぶりの土器、口-「ぐ」 の字形に立ち上がる。 底は直線形	ヘラズリ	粘土貼り付け痕 脚内にハケ目状 變形	粘土貼り付け痕 脚内にハケ目状 變形	明赤褐	良好	1~2mmの石 英-チャート 板等を含む	底部がわざかに上げ て置いた上に黒いトゲが見 成形不良
6 坛	- X(7)X3.9	周中位上	圓筒最大径が中央より 上へ向ひ円形剥離	ヘラズリ後ヘ ナナ		ナゲ	赤 褐	良好	1~2mmの石 英-チャート 板等を含む	底部がわざかに上げ て置いた。全体にていねい な成形

3 土 壤(図5・図6・図7)

土壤はいずれも1号墳の後円部西側(1号)と前方部付近(2~6号)に集中して検出された。古墳に關係のある土壤と考えられ、1号土壤より管下1個が出土した。1号土壤は $1.95m \times 0.86m$ の長方形を呈し深さは0.53mであり、西壁寄りに出土した管下(1個図11-22)は碧玉製で暗緑色を呈する。長さ2.5cm、径0.925cm、重量3.8g、形状は正円柱状で穿孔は片面より開孔部から終孔部に一方から穿っているが、最初に穿孔を試みた小穴が径0.156cm、深さ0.12cmほど穿かれている。これは、最初の穿孔行為が中央をのがしたので改めて開口部を求めたものと考えられる。

No	形 状	規 模 長辺×短辺×高さ (m)	覆 土	備 考
1号土壙	長 方 形	1.95×0.86×0.53	自然堆積	管王(図11-22)出土
2号土壙	長 方 形	2.07×1.05×0.50	※	
3号土壙	長 方 形	2.22×1.05×0.50	※	
4号土壙	長 方 形	2.57×1.33×0.56	※	
5号土壙	長 方 形	1.76×0.81×0.47	※	
6号土壙	長 方 形	2.40×1.03×0.50	※	

第4節 まとめ

本墳の調査は残っていた墳丘と周溝を全掘するという調査方法をとった結果、帆立貝式の前方後円墳を検出することができた。主体部はすでに盗掘にあい、見る影もなかったが、主軸線上に設置された埋葬施設の石棺の痕跡を確認できた。当古墳群が箱式石棺を伴うことは、ルート外の民家の宅地にも確認できるが、霞ヶ浦沿岸にいちじるしく発達した箱式石棺が湘南川流域にも存在することを確認した。又、新治郡千代田村大塚5号墳(JOT-5)(注2)にその形態が類似しており、石棺の方向が主軸に直交する以外まったく同じで、前方部くびれ部付近に位置することからして、墳輪が古墳に埋設された全盛期をすぎたいわゆる変則的な後期古墳と考えられる。又土壙は土壙墓群の性格が強く、古墳の副葬品と同じ管王の出土により、当地方の墓制の一形態を示すものとして注目される。調査中、和泉期の住居址が墳丘裾部附近より検出し、5世紀ごろからの当地方の繁栄がうかがわれる。

第5節 2号墳及び周辺遺構

1 2号墳(図8-1・図8-2)

墳丘 本墳は、1号墳の北約280mの地点に位置する古墳で、湘南川の微高地に築造されている。

近年、砂利採取が河川敷より微高地まで拡張され、本墳の裾部まで開発がのび、採取後他所から土砂を運搬し土地を改良して耕作化されていた。墳丘の最高点は18.38mで、ほぼ中心にある。等高線は17.4mまでの5本までが円形を呈するが、以下は流れる。盛土の状況は、東西トレントの北壁で観察するとローム土層の上に旧表土層が平均50cm堆積し、その上にロームブロックと砂利を含む褐色土層、つづいてしまり粘性がある褐色土層が盛られており、その上に明褐色土層が墳丘を構成している。墳頂部は、全体的にしまりがなく擾乱がみられる。発掘調査の結果、周溝は確認できなかったが、直径約24m、高さ約3mの円墳と推定される。

埋葬施設 王室部を検出するため各トレンチを設定し発掘したが検出することが出来なかった。墳頂部下は近世の信仰の対象物となっている「つちのえ」の石碑が建立されており、これは棺材を利用しており、第3層（旧表土）あたりに石棺が存在したのではないかと推定される。

遺物 本墳に関係する遺物は墳頂部より石棺材を利用した石碑が発見されたのみである。

2 1号住居址（図9）

遺構 本住居址は、2号墳の東西トレンチをさらに開溝確認のため延長し調査している時に確認されたものである。主軸方向はN-23°-Wで1辺約4.5m前後の不整形を呈している。壁高は約10cmで、削平されている。東・南壁は上塙により掘られており存在しない。焼上は東壁側の床面に小範囲に確認できるほどである。床は平坦であるが粘性があり、しまりがある。3個のピットは浅いが柱穴であろう。住居址内の覆土は、部分的に炭化物を含む褐色土の堆積がみられる。

遺物 住居址内から出土した遺物は壺形の弥生式土器である。他に土師器片が極少量出土した。（図10-4）

3 土壌（図9）

土壌は1号住居址の西壁を切り込んだ状態で確認された。南北約3.2m、東西約3.5mの不定形を呈する。壁面はほぼ垂直に切り込んでいる。床面はやや傾斜しており、上塙内は粘性のある黒褐色土の上に暗褐色土が自然堆積している。出土遺物は検出されず、時期、用途不明の遺構である。

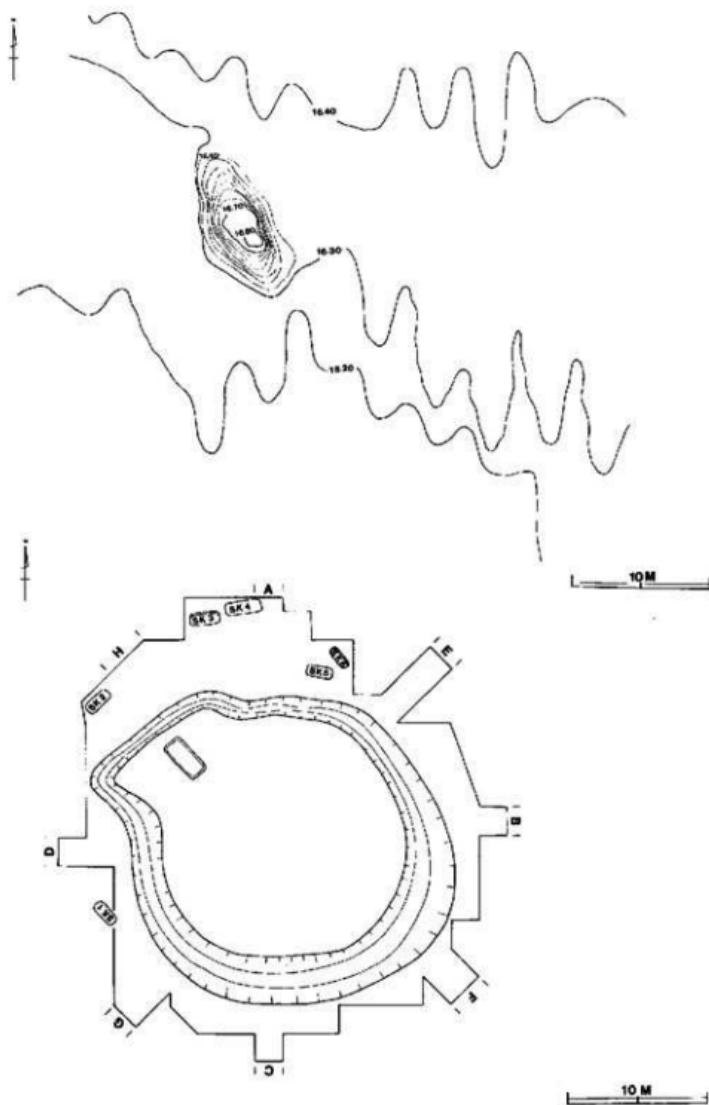
第6節 まとめ

今回の調査は常磐自動車道建設に伴い塚原古墳の一部（2基）が調査の対象になり、古墳とともに住居址、土壌を検出することができた。沼沢川流域においての調査は、わずかに左岸の内原町ドンドン塚古墳（注3）だけにすぎず、解明されない問題が多く、右岸の茨城町下上師・木部・飯沼と続く古墳群が、当塚原まで連続して古墳群を形成していることは、古墳時代後期、この流域の采えたことを物語るものであり、今回の調査では箱式石棺埋葬形態の状況を把握することができた。

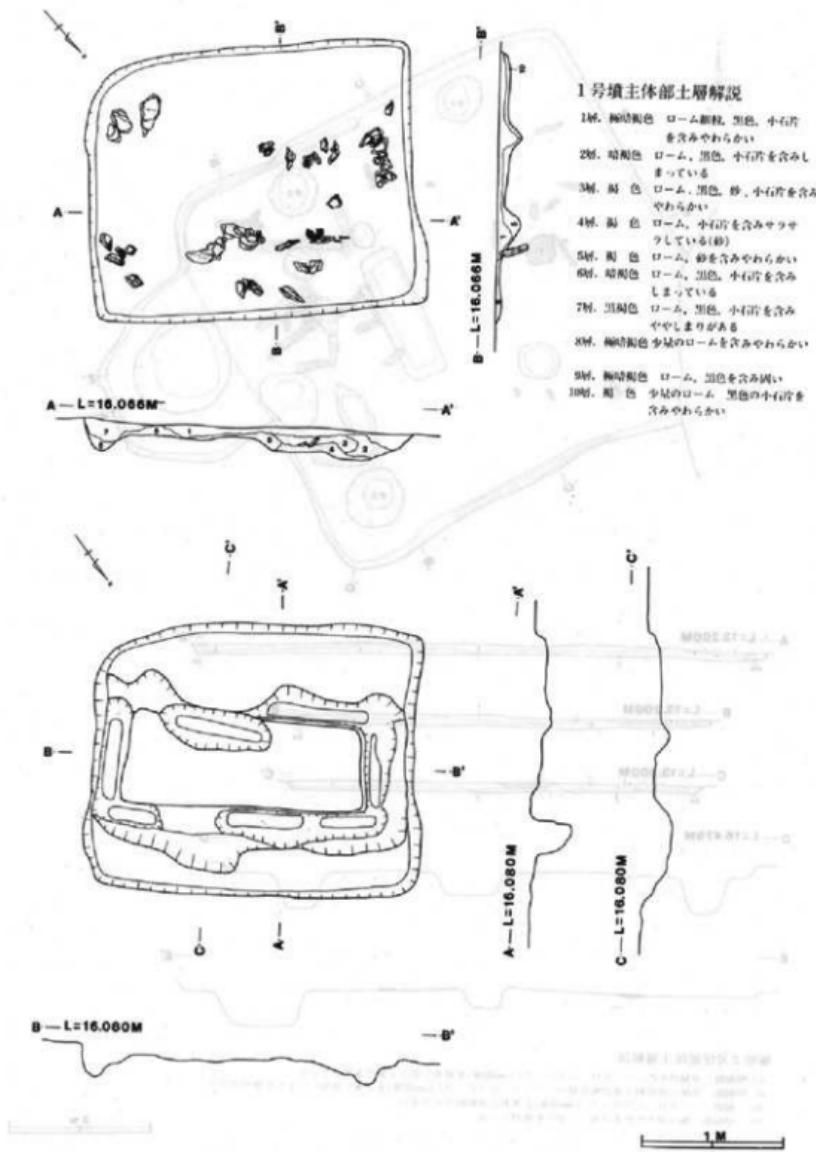
（注1）茨城県教育委員会「茨城県遺跡地図」昭和52年

（注2）茨城県教育財團「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書」昭和55年

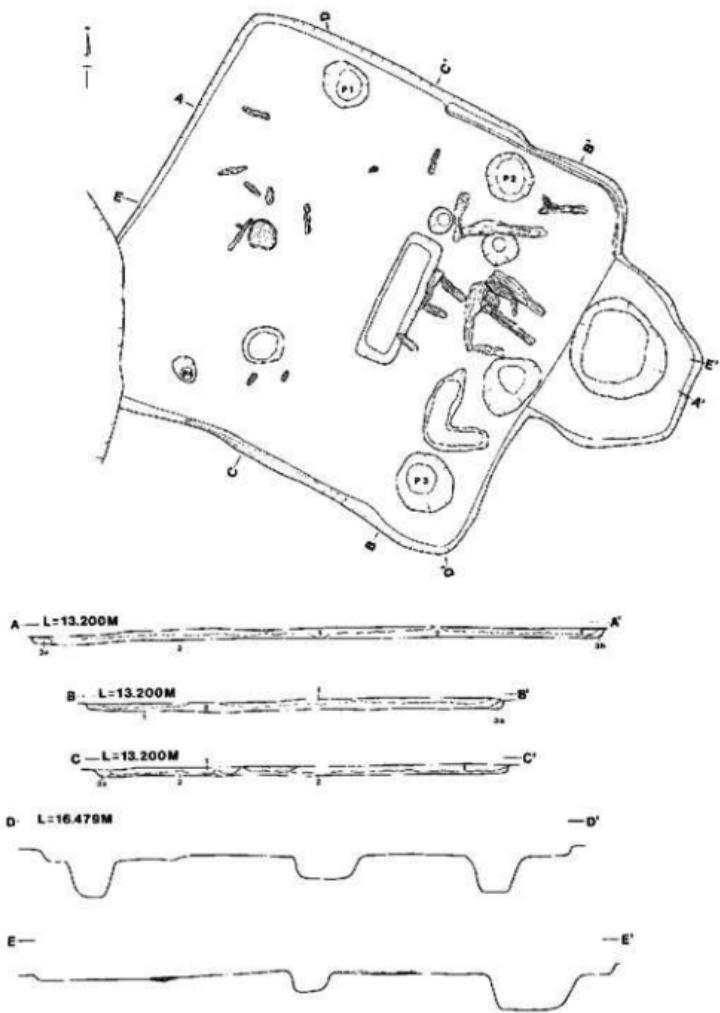
（注3）大森信英監修「茨城県東茨城郡茨城町ドンドン塚古墳発掘調査報告」『土代文化』37 昭和42年



第2図 堆原1号墳全体測量・トレンチ配置図



第3図 1号墳主体部

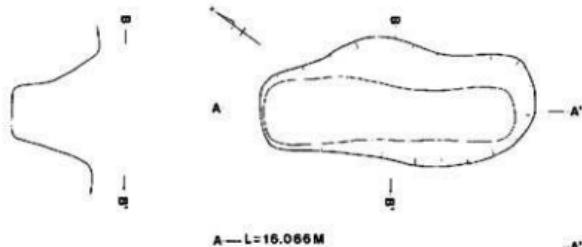


那原 2 号住居址上層解説

1. 石器内、少弱のYドリ、ハーフドリ、ノブリック(15~16mm)を含むし貝殻。より生着している。
2. 磨耗色、少弱の深火燒了或び粉骨質のハーフドリ、ノブリック(2~3mm)を含むし貝殻にしまりを帶びている。
3. 褐色、ハーフドリ、ノブリック(1~2mm)を含むし貝殻(やや少弱)。
4. 褐色、粉骨質のYドリを含むし貝殻にしまりを帶びている。

2 m

第4図 第2号住居址



1号土壤土層解説

1m. 黒 少量のYHを含むじわりを含む
土を含むじわる

2m. 黒 少量のリームブロック(5mm程度)を
含むじわるからかい

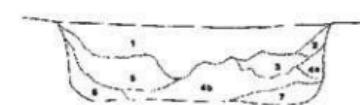
3m. 黒 少量のYHを含むじわるから
かい

4m. 黒色 リーム塊を含むじわる土層
ある

5m. 黒 少量のリームブロック(5mm程度)
を含むじわるからかい

6m. 黒色 少量のリームブロック(5mm程度)
を含むじわる土層である

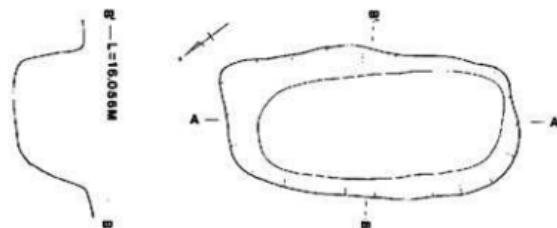
7m. 黒色 少量のリームブロック(5mm程度)
を含むじわる土層である



A — L=16.066M — A'

A — L=16.056M

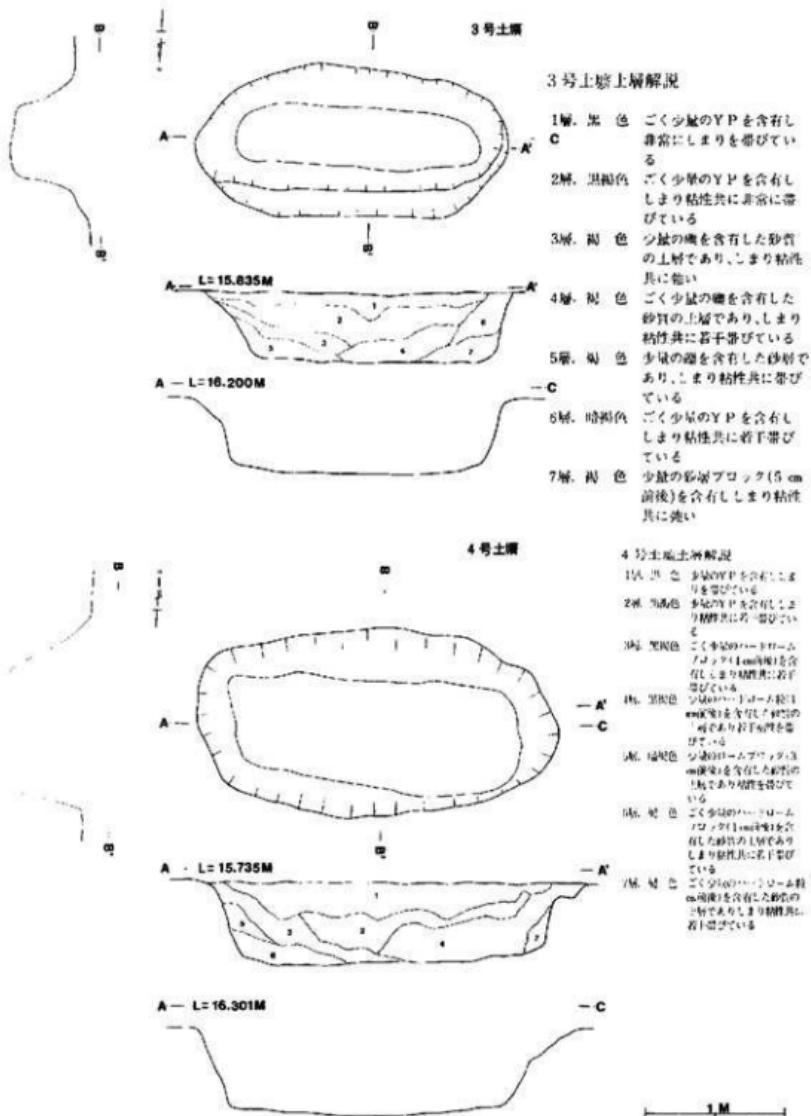
— A'



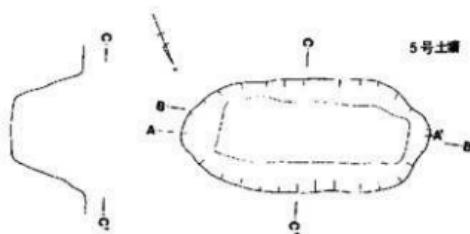
A — L=16.056M — A'



第5図第1号土壤・第2号土壤



第6図 第3号土壤・第4号土壤



5号土壌

5号土壌土層解説

- 1層、黒色 少量のロームブロックを含有し若干しまりを帯びている
- 2層、黒褐色 性共に帶びている
- 3層、黒褐色 ごく少量のハードロームブロック(1cm前後)を含有し、しまり粘性に帯びている
- 4層、黒褐色 少量のYドリルを含有し、しまり粘性に若干帯びている
- 5層、黒褐色 少量のハードローム粒(3cm前後)を含有し若干しまりを帯びている
- 6層、暗褐色 少量のハードロームブロック(2cm前後)を含有し若干しまりを帯びている
- 7層、褐色 比較的多量のハードロームブロック(2cm前後)を含有ししまり粘性共に非常に帯びている
- 8層、暗褐色 少量のハードロームブロック(1cm前後)を含有し、比較的やわらかい



6号土壌

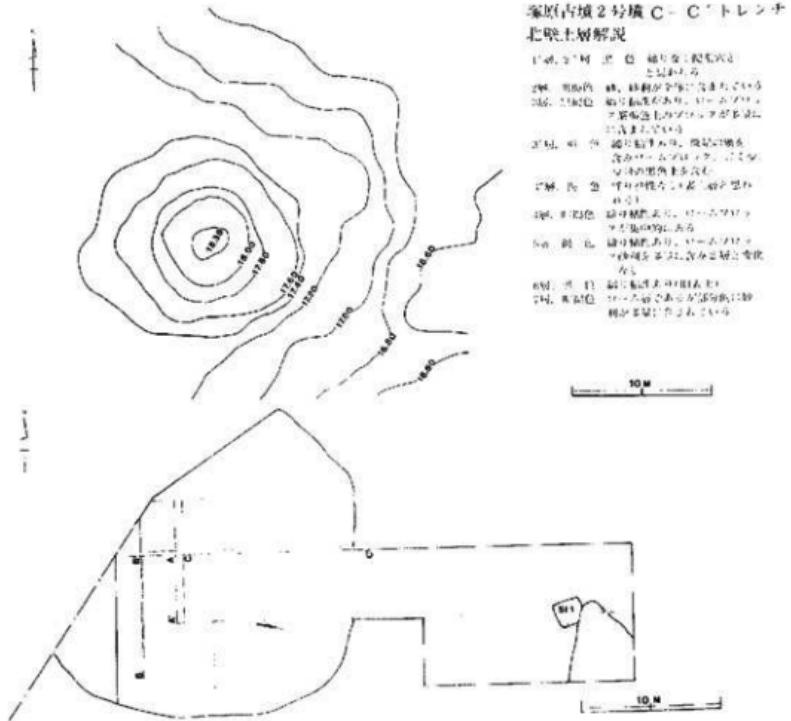
6号土壌土層解説

- 1層、黒色 少量のYドリルを含むし、しまりを帯びている
- 2層、黒褐色 少量のYドリル、ローム粒を含有ししまりを帯びている
- 3層、褐色 少量のローム粒を含有し、しまりを帯びている
- 4層、黒色 ごく少量のYドリルを含有し、しまり粘性を帯びている
- 5層、褐色褐色 少量のローム粒、Yドリルを含むし、しまり粘性を帯びている
- 6層、褐色 少量のYドリルを含むし、しまり粘性を帯びている



1 M

第7図 第5号壠・第6号壠



塚原2号墳A-A'トレンチ東壁土層解説

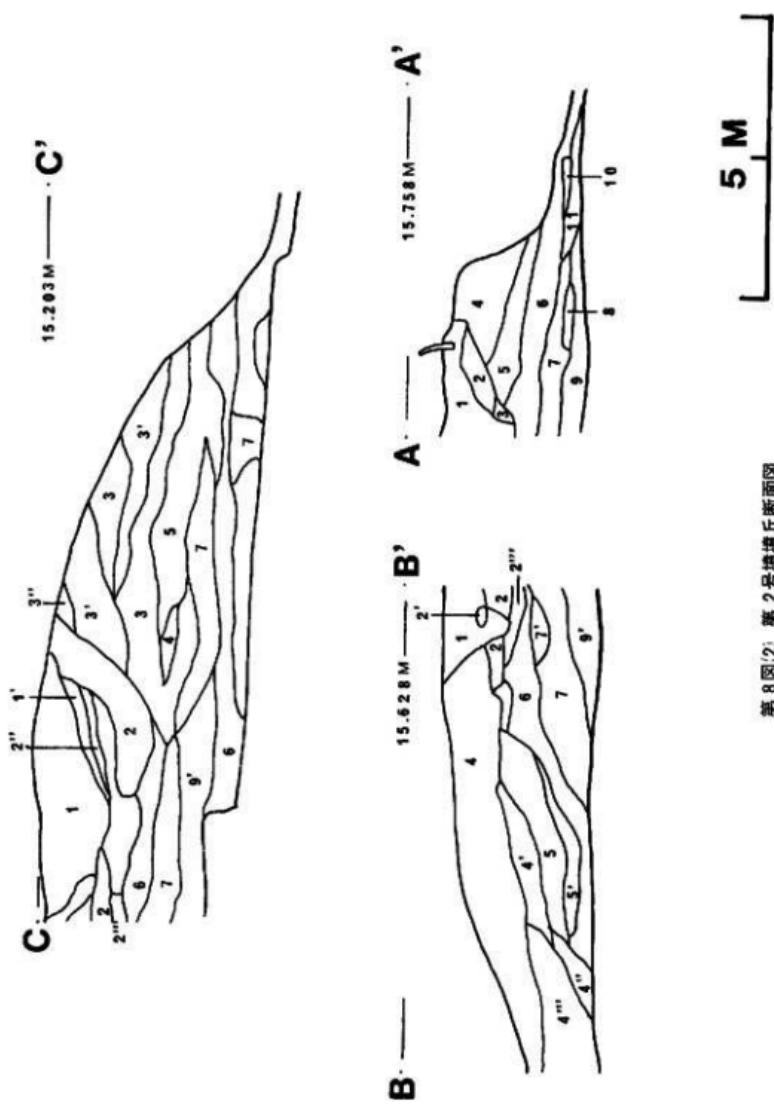
- 1層、暗褐色（縦り粘性あり）木炭無し土層あり
- 2層、明褐色、跡が全く含まれていない
- 3層、褐色 縦り粘性あり、部分的に小けいな砂
- 4層、褐色 縦り粘性あり、部分的に砂含む
- 5層、褐色 縦り粘性あり、全般的に小けいな砂
- 6層、暗褐色 黒色のブロック層
- 7層、暗褐色 縦り粘性あり。ロームブロック、黒色ブロックが多く含まれている
- 8層、褐色 縦り粘性あり。ロームブロック、ローム粒子混じる
- 9層、暗褐色 開拓上、20cm×20cm×20cm
- 10層、明褐色 2層と同様であらが砂利层
- 11層、褐色 ローム粒子、ロームブロック含む

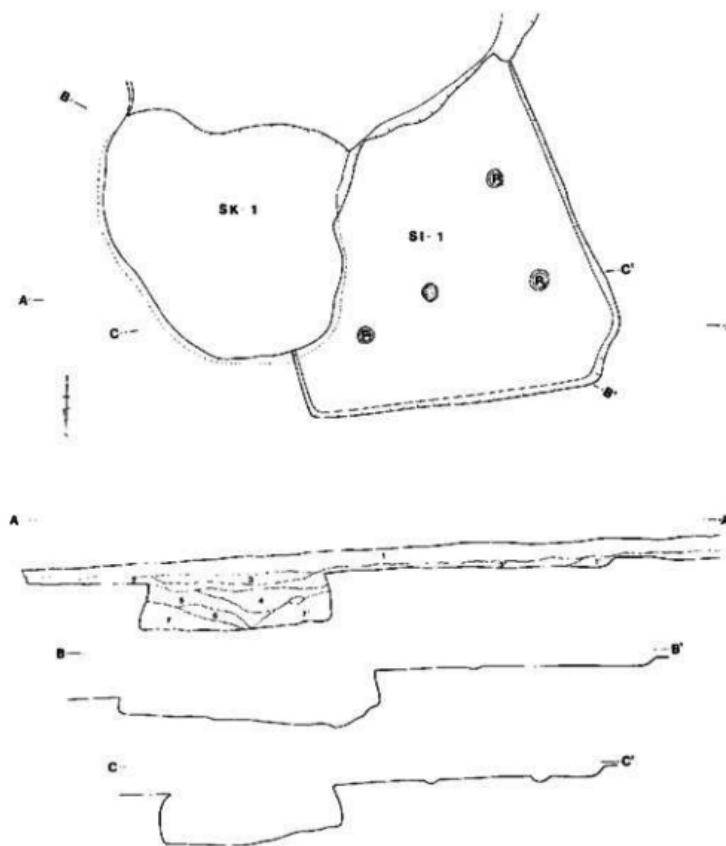
塚原2号墳B-B'トレンチ西壁土層解説

- 1層、茶褐色
- 2層、褐色 少量のロームブロック、砂利混り
- 3層、褐色 縦り粘性あり
- 4層、褐色 砂利混り
- 5層、褐色 縦り粘性あり、部分的に砂利含む
- 6層、細砂層
- 7層、褐色 4”と変化はないが砂利が少しい砂利層
- 8層、褐色 砂利、部分的に砂利混り、粘性層
- 9層、褐色 全体的に砂利が多く部分的にロームブロック混り
- 10層、褐色 縦り粘性あり、ロームブロック、砂利を多量に含み2層と変化なし
- 11層、褐色 砂利、小ロームブロック混り（部分的に2層）
- 12層、黒褐色 縦り粘性あり（約10cm）
- 13層、明褐色 ローム層であるが部分的には砂利が多量に含まれている
- 14層、暗褐色 小ロームブロック、黒色ブロック
- 15層、褐色 縦り粘性あり
- 16層、灰褐色 多量のロームブロック、黑色土層あり、縦り粘性あり

第8図(1) 塚原2号墳全体測量・トレンチ配置図

第8图(2) 第2号塘堆积断面图



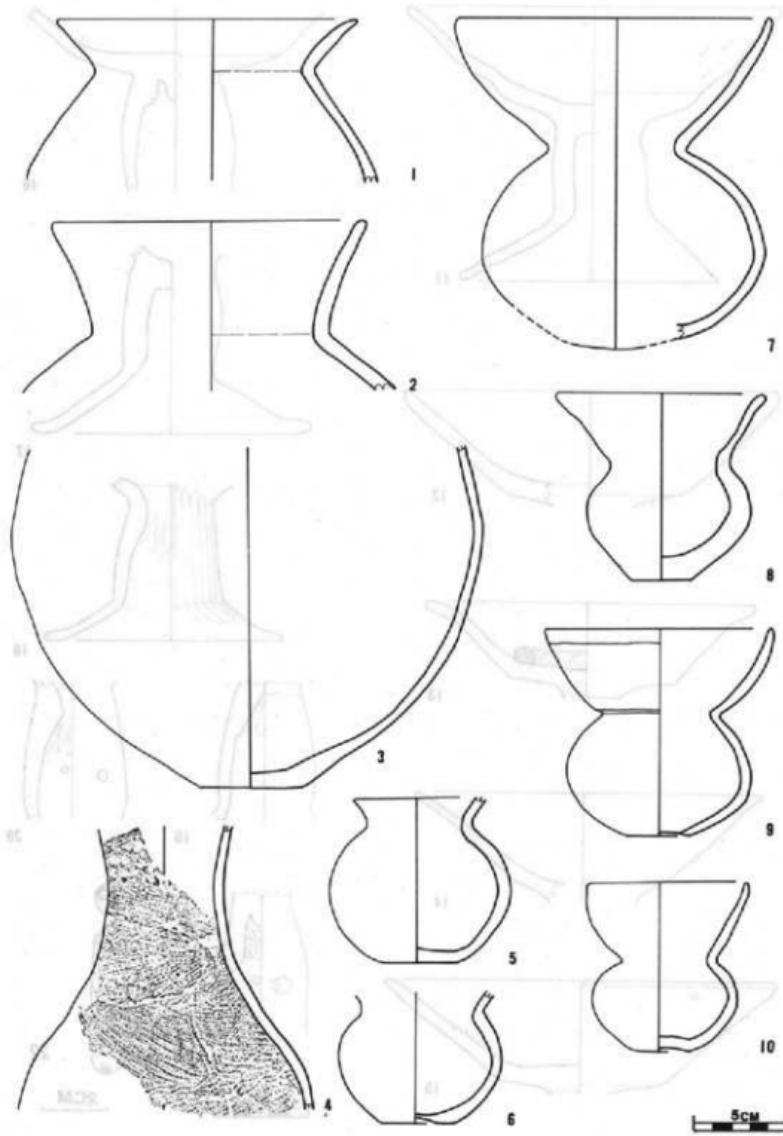


1号住居址・1号土壤上層解説

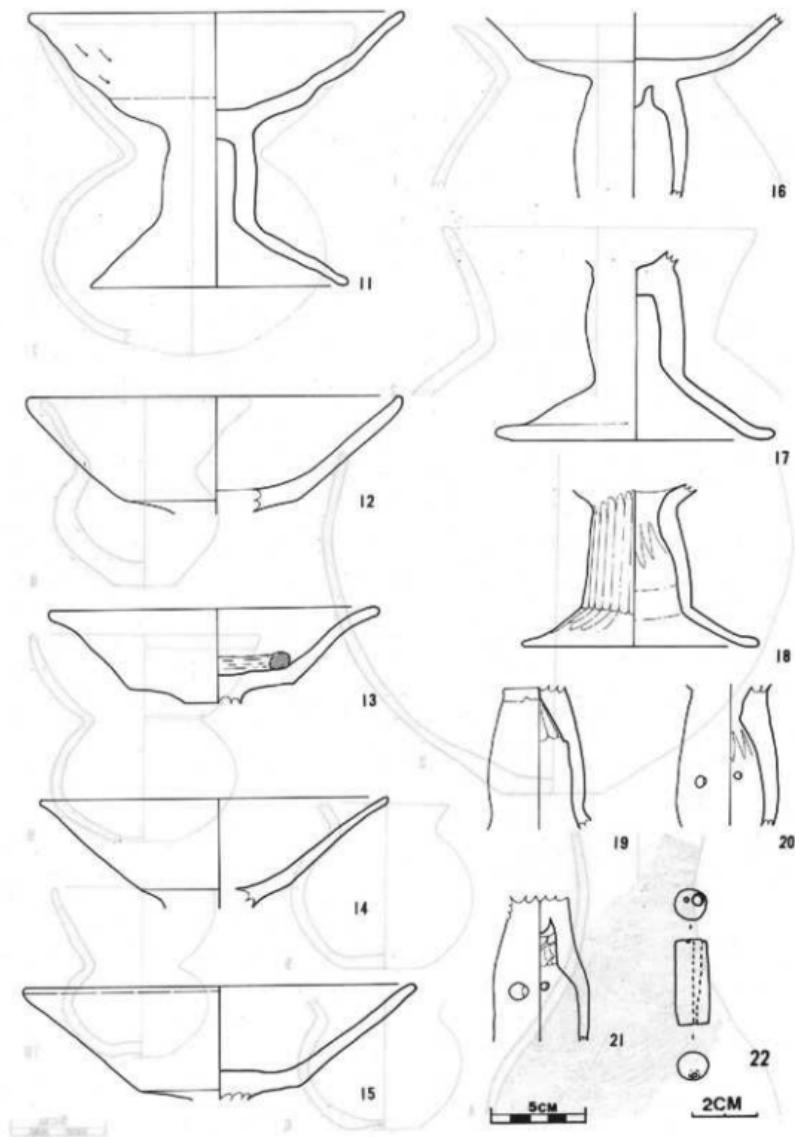
1. 棕褐色 粘性、しまりあり、表土層
2. 褐色 粘性、しまりあり、黒色ブロック混り
3. 砂利層 砂利、砂を含み褐色
4. 棕褐色 粘性、しまりあり、全体的にロームブロック含む
5. 暗褐色 粘性、しまりあり、部分的にローム粒子含む
6. 黄色 粘性、しまりあり、少量の砂利含みローム粒子も見られる
7. 褐色 粘性、しまりあり | ローム粒子含み、7は壁面にロームブロック混り
8. 黑褐色 粘性、しまりあり ブロック混り

2 m

第9図 第1号住居址・第1号土壤



第10図 住居址・土壤内出土遺物実測図



第11図 住居址・土壤内出土遺物実測図



1 塚原 1号墳全景



2 1号墳発掘風景



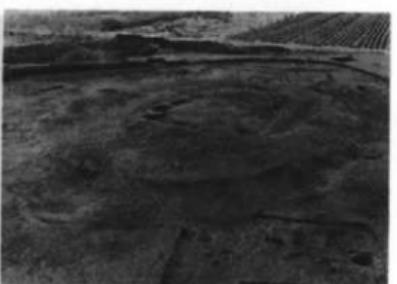
3 1号墳主体部



4 1号墳主体部



5 1号墳主体部墓壙



6 1号墳全景(調査後)

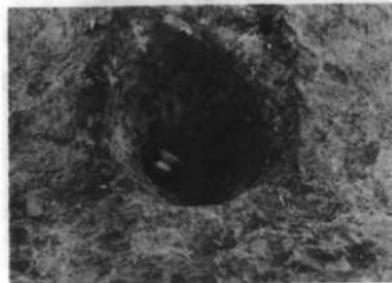
写1



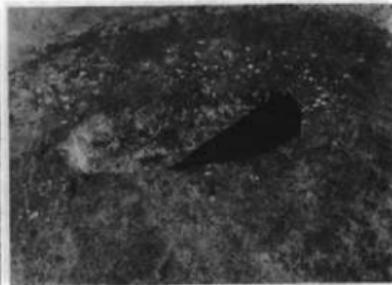
1 塚原 2 号住居址



2 塚原 1 号墳・2 号住居址関連状態



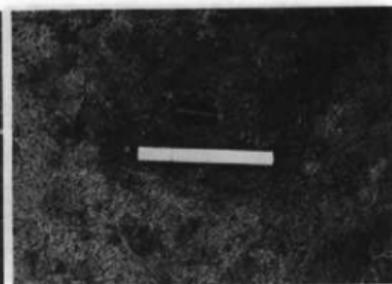
3 塚原 1 号土壇口



塚原 1 号土壇



5 塚原 1 号土壇



6 塚原 1 号土壇出土管玉

写 2



1 塚原 2号墳



2 塚原 2号墳墳頂部出土石碑



3 塚原 2号墳墳丘土層断面
(A-A')



4 塚原 2号墳墳丘土層断面
(C-C')



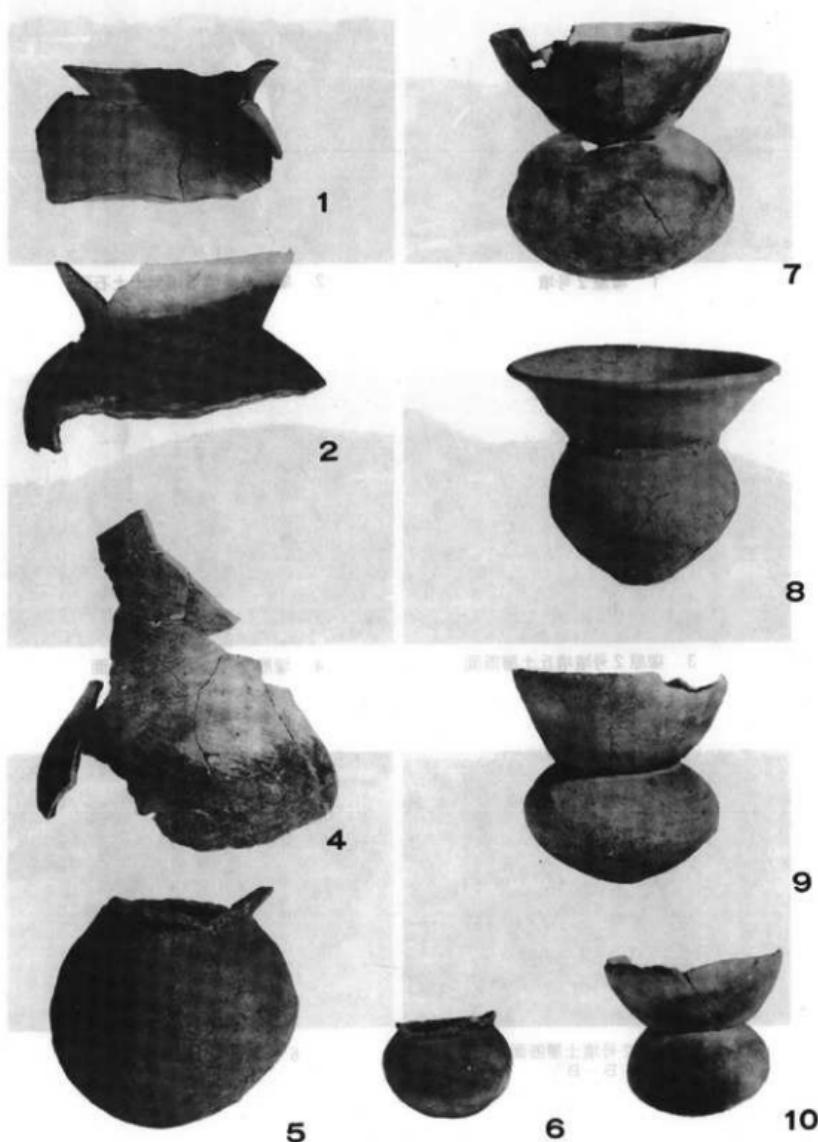
5 塚原 2号墳土層断面(部分)
(B-B')



6 塚原 1号住居址全景

写 3

新出土山発土 佐賀日野市立歴史



写 4

塙原 2号住居址・土塗出土遺物

粗面灰陶器



11



16



17



18



19



13

陶器查號前空器



20



21



15



22

第4章 湿気遺跡

第1節 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

湿気遺跡は、茨城県東茨城郡内原町大字鯉淵三ノ割2780番地ほかに所在し、調査対象面積は4,800m²である。内原町の大部分は東茨城台地と呼ばれる標高約31~35mの平坦な洪積台地で、涸沼川支流の浸食により、樹枝状に沖積低地が形成されている。北部には、筑足山塊からのびる丘陵がせまっている。遺跡は、湿気川と涸沼前川にはさまれた台地の湿気川よりの縁辺部があり、北東側に標高約28~33mのゆるやかな傾斜を示し、現況は畠地となっている。

2 歴史的環境

沖積低地に面する台地縁辺部には、古くから集落があり、本遺跡の周辺にも根古屋遺跡（縄文時代）、滝淵遺跡（弥生時代）、中台遺跡（古墳時代）、平五郎治古墳、寺池東古墳群、寺池西古墳群、宿上の台古墳群など多くの遺跡が存在している。

本遺跡の南側には、中世の城館跡である鯉淵城跡があり、その一角に国指定重要文化財中崎家住宅がある。経塚の東を南北に通る道路は、古くからの街道で、鯉淵城大手門に通じていたという。現在の旧鯉淵村には寺院がないが、本遺跡の西方に「万蔵寺」という字が残っていて、寺院のあったことがうかがえる。また、江戸時代にはケガ観音で知られる正法山持福院観音寺（図1-12）があった。

第2節 調査経過

昭和54年10月 15日に草刈り作業、器材の調達をする。22日に分布調査をする。縄文時代中期の上器片と須恵器の小片を表面採集した。経塚は最近バックホーを使った植木の抜根が行なわれ、経石が散乱していた。遺跡の全景写真を撮る。23日に、常磐自動車道センター杭(STA-230+80)を基準杭として真北を座標軸にし、40m四方の大調査区を設定。調査区の杭打ち作業を開始する。調査中訪れた見学者から「子宝に恵まれない婦人が文字の書かれた石を持っているとご利益がある」とか「経塚は、子宝に恵まれなかった大家の婦人が作った」、「耕作でじゃまになつた石を動かした」、「宝さがしのため穴を掘った」、「調査区域の東側の畑に陥没する所がある」などの情報を得た。26日から、経塚の石の出土状況の調査、桑の抜根作業を中心に行なう。30日に

調査区の杭打ち作業が終り、遺構の分布状況確認のため、調査区の25%の表土除去作業を開始した。約30cm掘り下げるが、出土遺物はごく少量であった。

11月 1日も引き続いで遺構分布状況確認作業をする。A 3区は耕作土が谷へ流れ込んだためか、ローム面までが深くなっている。A 3h8区で縄文時代後期の上器片が出土する。4日、作業員山田喜和氏急死。6日に、遺構の分布状況確認作業を終了する。この段階で、B 3区西側、C 3区東側に竪穴住居址1軒および土壤・溝を数基確認しただけで、出土遺物も少量であった。また、地表下50cmまでトレッシャーが走っている所があり、遺構は耕作によりかなり擾乱されていると思われた。本日で、経塚の調査を終了した。7日から、1号住居址、1号上壠（1号地下式壠）、2号土壤を中心に遺構の調査を行なう。1号土壤は80cm掘り下げても床がでず、井戸かと思われた。住居址はトレッシャーで擾乱され、木炭・土器の小片が多数散乱しており、遺物の出土状況図作成に時間がかかった。16日に、B 4+2区で竪穴住居の壁と思われる10cmの段差のあるローム面を検出したが、住居址とは確認できなかった。19日に、4号土壤（2号地下式壠）の覆土中より内耳土器片が出土した。20日から1号住居址、1号土壤、2号土壤の平面実測を中心調査する。28日の6号上壠（3号地下式壠）調査の段階で、1号土壤・4号土壤・6号上壠は、地下式壠の一種と気付き、これまでの遺構の分布状況確認作業を再検討することになった。29日から、B 3区全域の表土の除去作業を開始した。

12月 12日で、B 3区とその周辺の遺構の分布状況確認作業を終了したが、新たに土壤20基を確認しただけで、地下式壠は11号土壤（4号地下式壠）1基を確認しただけであった。13日から、遺構の底面・壁確認作業とあわせて実測を行なう。14日に、2号地下式壠の堅坑が検出され、掘り下げたが、1人がやっと入れるスペースしかなく堆土に苦労した。17日、2号地下式壠の狭道調査で、落盤防止のために狭道の南側部を上からすっぽり削り取った。18日に大型器材を大塚新地遺跡へ搬出する。20日をもって作業員による作業を終了する。21日からは調査員2人で、残った実測・写真撮影を行なう。26日、2号地下式壠の長さ3mあまりの狭道エレベーション実測は、中に水糸を張って行なわれた。作業長であった村上慈朗氏來訪、1日手伝ってもらう。27日に、2号地下式壠の底面平面実測のため、水糸で1辺50cmのメッシュを張った。底面がかなりかたく、くぎを打ち込むのに金ヅチを使う。本日をもって全作業を終了した。

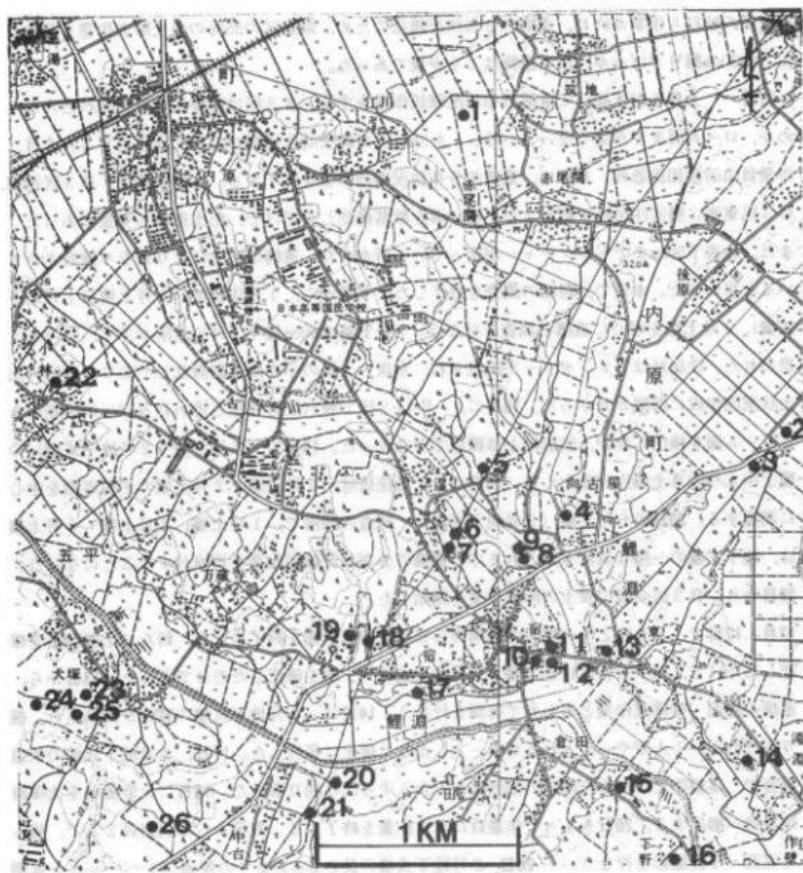
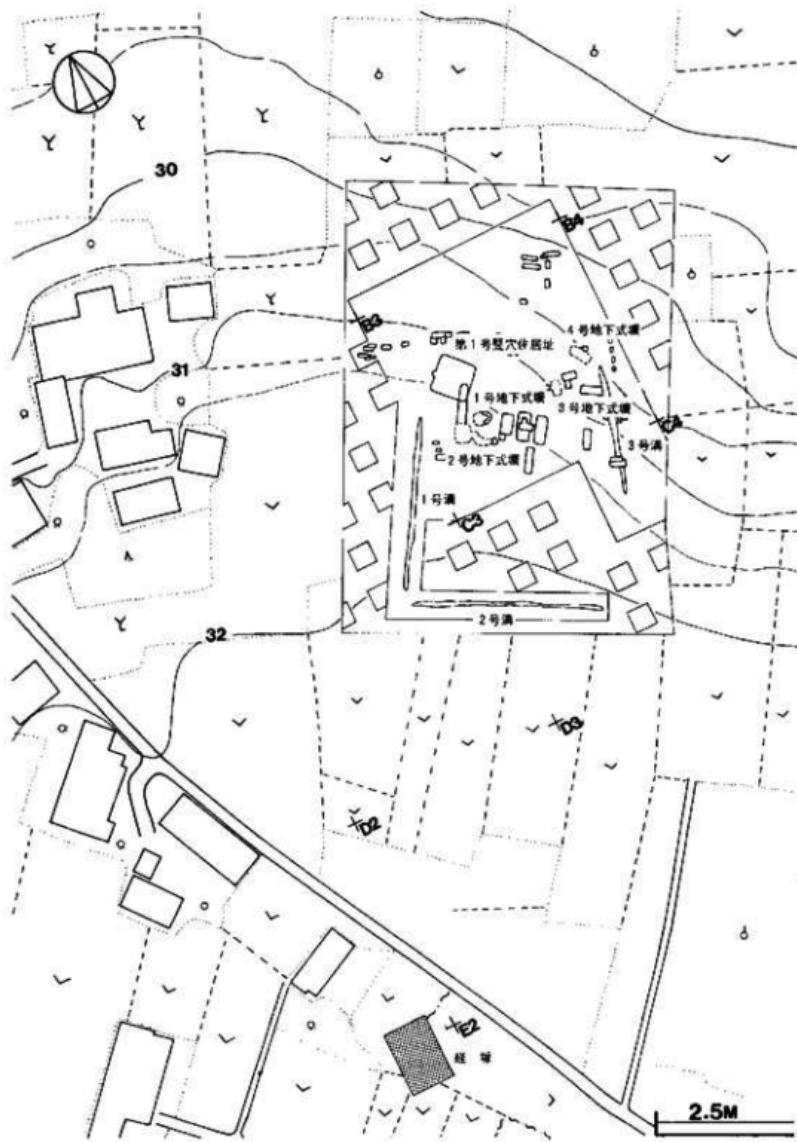


図15 湿気遺跡・周辺遺跡位置図および一覧表

番号	遺跡名	時期	備考	番号	遺跡名	時期	備考	番号	遺跡名	時期	備考
1	諏訪家古墳群	古墳時代	円墳 2	10	理瀬城跡	中世	城・郭・址	19	寺池西古墳群	古墳時代	
2	二の割遺跡	飛鳥時代	遺物包藏地	11	根古屋遺跡	飛鳥時代	遺物包藏地	20	くずれ橋遺跡	古墳~平安	遺物包藏地
3	東北部古墳群	古墳時代		12	高倉山古墳群	江戸時代	墓 寺	21	中台遺跡	古墳~平安	遺物包藏地
4	物見塚古墳	古墳時代		13	息栖台古墳群	古墳時代		22	大塚古墳群	古墳時代	
5	平五郎治古墳	古墳時代		14	滝酒遺跡	奈生時代	遺物包藏地	23	大塚A 滝中塚群	不 明	
6	温氣遺跡	本遺跡	15	倉田遺跡	飛鳥~古墳	遺物包藏地	24	大塚B 倉中塚群	不 明		
7	経塚	本遺跡	16	下野遺跡	飛鳥~古墳	遺物包藏地	25	犬塚古墳群	古墳時代		
8	中継家住宅	江戸時代	現存遺跡	17	上の台古墳群	古墳時代		26	権現古墳群	古墳時代	
9	轟の内難路	中世	城・郭・址	18	寺池東古墳群	古墳時代					

第1図 湿気遺跡・周辺遺跡位置図および一覧表



第2図 濡氣遺跡全体図

第3節 遺構・遺物

1 第1号竪穴住居址(図3・4、写2・7・9)

B3区中央部から西へ寄った傾斜地に位置し、主軸方向はN-46°-Wで、平面の形は一辺約6.6mの隅丸正方形をしている。ほとんどの壁は外傾し、高さは12~24cmほどである。床はロームで西から東へわずかに傾斜している。円形のピットが4個検出され、ほぼ同間隔に位置しており、主柱穴と思われる。カマドは北西壁の中央部に付設され、壁から外に少し張り出した構造である。後世の土壤が南西壁と、南コーナー部から南東壁をそれぞれ擾乱していた。更にトレンチャーのあとが同方向に床面を抜いて走っており、遺構の保在状態はよくない。住居址内覆土は自然堆積の状態を示している。床面から覆土中にかけ、大きいもので長さ60cmほどの炭化物が一面に散乱しており、火災を受けたものと思われる。

出土遺物は、土師器片約300点、須恵器片5点、陶器片1点、砥石1個、小石約65個、炭化物多量であるが、土器のほとんどは小片で、一番保存が良かったのは上半分復元できた土師器の變形土器(図4-3)1個である。土器の器形には、變形、环形、椭形のものがあり、図9-6の變だけは古墳時代五頭期のものであるが、他は鬼高期末のものと思われる。

カマド内出土の砥石は、最大長19.8cm、最大幅8.6cm、最大厚6.7cm、重量1,480gで、石質は安山岩である。4面ともに使用痕があり、2面には幅5~10mmの使用によるへこみができる。

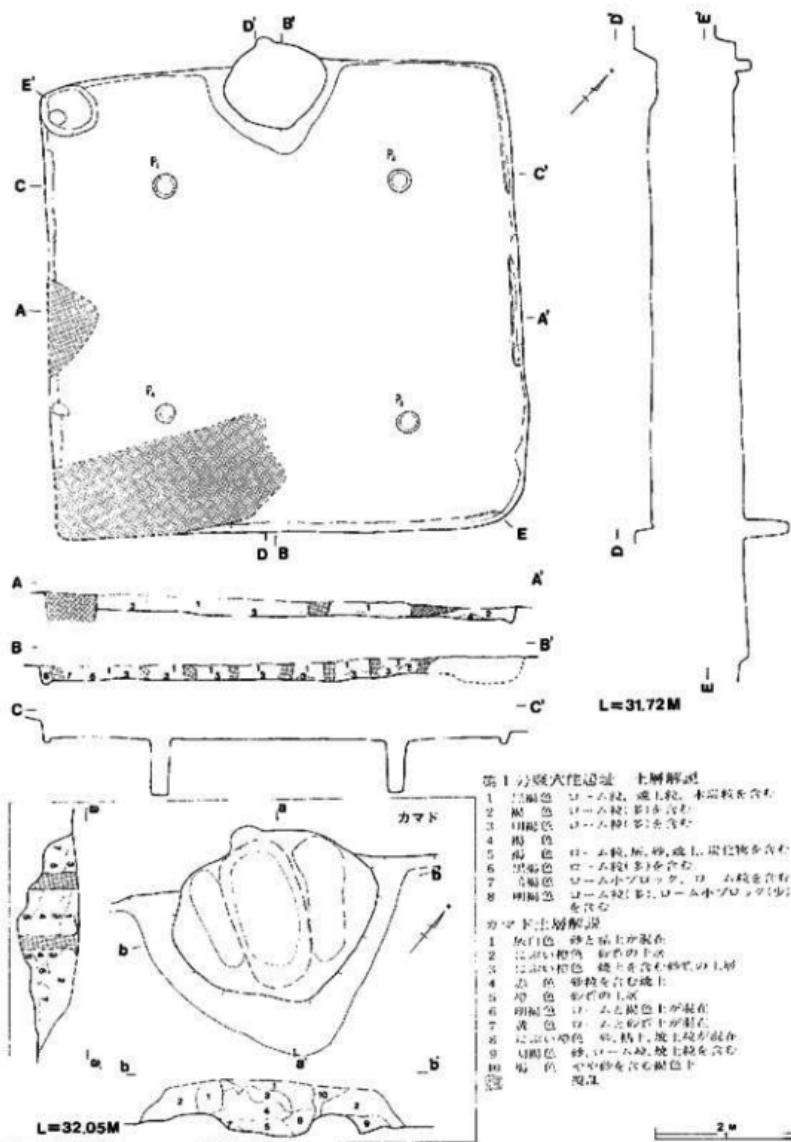
実測図に載せた土器については、次のような観点に立って一覧表で記述した。

- 番号は、実測図記載番号と共通である。
- 焼成については特に目立ったものを特徴の内面の欄で記述した。
- 口径は、口縁の外側を測り、実測図による復元値を()内に記した。
- 器高は、底部から最も高い部分までの値で、破損品の場合、現存高を()内に記した。
- 色調は、土器外面で付着物のない所をえらんで、標準土色帳を参考にして記した。
- 胎土は、土のほかの混入物を記した。石英とその他白色の石との区別がはっきりしないので白色の石はすべて石英とした。

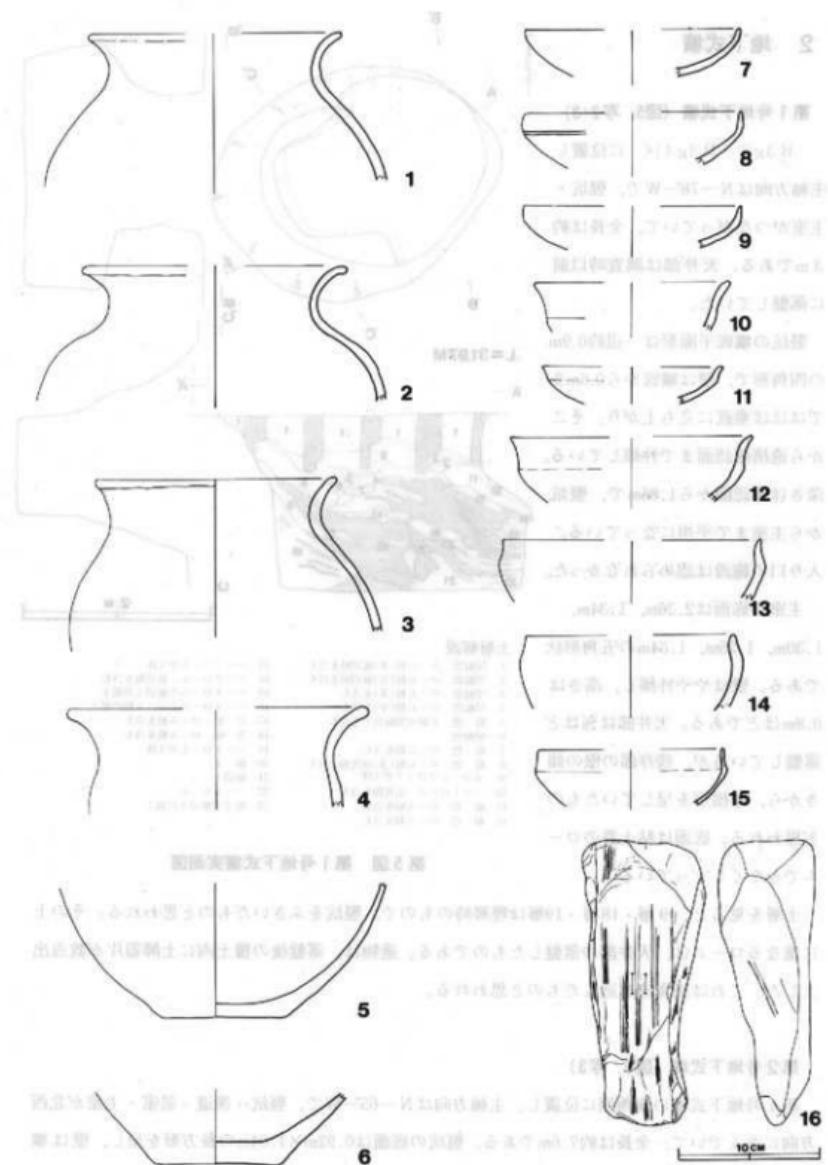
ピット番号	直径(cm)	深さ(cm)
P 1	34	73
P 2	34	76
P 3	30	66
P 4	28	80

第1号竪穴住居址出土土器一覧表(図4)

番 号	種 類 器 形	特 徴		口 径 (cm) 高	色 調 (外 面)	胎 七
		外 面	内 面			
1	土師器 變形	口縁部付近のみ現存。口縁部横ナデ。胴部へラ削り後ナデ。かなり摩滅している。	ナデ	(18.0)	に赤い (10.5) 黄 橙	石英(赤)
2	上師器 變形	口縁部付近のみ現存。口縁部横ナデ。胴部はかなり摩滅している。	ナデ	(18.6)	に赤い (9.5) 黄 橙	砂礫(赤)
3	上師器 變形	胴部下半欠損。口縁部横ナデ。胴部へラナデ。	口縁部横ナデ。胴部 ヘラナデ。焼成良	16.8 (12.0)	に赤い 黄 橙	砂礫 黒母母
4	上師器 變形	口縁部片。長張。口縁部横ナデ。かなり摩滅している。	ナデ	(21.4)	に赤い (8.2) 黄 橙	石英(赤) 黒母母
5	土師器 變形	底部のみ現存。底部へラナデ。二次焼成を受けかなり摩滅している。カマド内出土。	表面が剥離している	径8.8 (10.0)	明 極	石英(赤)
6	上師器 變形	底部のみ現存。胴部へラナデ。底部へラケズリ。朱塗痕がある。	かなり摩滅している	径8.9 (5.0)	赤 極	石英(赤)
7	土師器 坏形	口縁部片。ミガキ。摩滅している。	ミガキ。焼成良	(15.2) (3.4)	に赤い 橙	石英母 (赤)
8	上師器 坏形	口縁部片。口縁部と胴部の境に浅い次線が一条まわっている。黒く磨かれている。	黒く磨かれている 焼成良	(15.0) (3.9)	に赤い 橙	金母母 (赤)
9	七師器 坏形	口縁部片。黒く磨かれている。	黒く磨かれている 焼成良	(15.4) (3.0)	黒	云母礫
10	土師器 坏形	口縁部片。横ナデ。	黒く磨かれている	(13.8) (3.4)	黒褐色	云母礫
11	土師器 坏形	口縁部片。口縁部横ナデ。胴部へラナデ。かなり摩滅している。	ナデ	(11.8) (2.7)	に赤い 赤 極	云母 (赤)
12	土師器 坏形	口縁部片。ヘラナデ。	ミガキ	(17.0) (4.6)	浅黄橙	砂礫
13	土師器 楕形	口縁部片。口縁部横ナデ。かなり摩滅している。	口縁部横ナデ 胴部ナデ	(18.0) (4.0)	黒 極	砂礫(赤)
14	土師器 楕形	口縁部片。口縁部横ナデ。胴部ナデ。かなり摩滅している。	口縁部横ナデ 胴部ナデ	(15.0) (5.5)	に赤い 橙	石英(赤)
15	上師器 坏形	口縁部片。口縁部横ナデ。黒く磨かれている。胎土も黒色である。	口縁部横ナデ 焼成良	(13.2) (4.0)	黒 色	砂粒(赤)



第3図 第1号居住址実測図



第4図 第1号住居址 出土遺物実測図

2 地下式壙

第1号地下式壙 (図5、写2・3)

B3g3・B3g4に位置し、主軸方向はN-78°Wで、竪坑・主室がつながっていて、全長は約3mである。天井部は調査時以前に落盤していた。

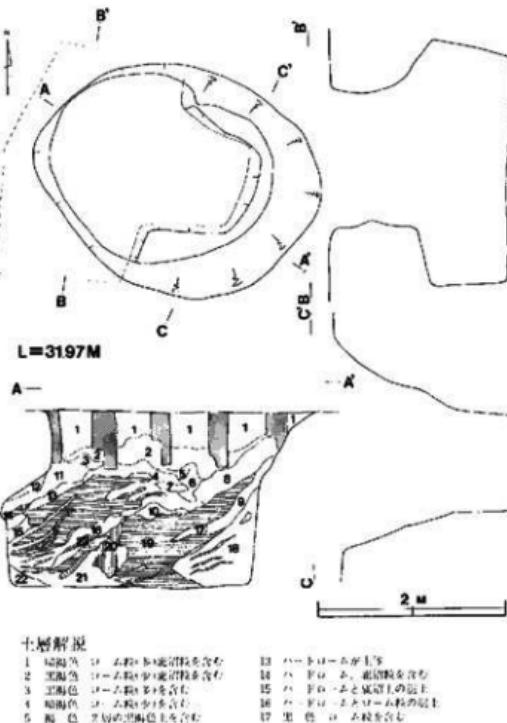
竪坑の壙底平面形は一辺約0.9mの四角形で、壁は壙底から0.6mまではほぼ垂直に立ち上がり、そこから遺構確認面まで外傾している。深さは確認面から1.86mで、竪坑から主室まで平坦になっている。入り口の施設は認められなかった。

主室の底面は2.36m、1.34m、1.30m、1.25m、1.34mの五角形状である。壁はやや外傾し、高さは0.8mほどである。天井部は殆ど落盤しているが、残存部の壁の傾きから、屋根形を呈していたものと思われる。底面は粘土質のロームでかたくしまっている。

土層を見ると、9層・18層・19層は埋葬時のもので、竪坑をふさいだものと思われる。その上に重なるロームは、天井部の落盤したものである。遺物は、落盤後の覆土内に土師器片が数点出土した。これは後世流れ込んだものと思われる。

第2号地下式壙 (図6、写3)

第1号地下式壙の南西側に位置し、主軸方向はN-65°Wで、竪坑・羨道・前室・主室が北西方向に並んでいて、全長は約7.6mである。竪坑の底面は0.92m×1.04mの長方形を呈し、壁は壙底から0.6mの所までやや内傾し、そこから遺構確認面まではほぼ垂直に立ち上がっている。高さは約1.64mである。ここに上層をみると、竪坑が埋葬時に埋めもどされたことを示している。



第5図 第1号地下式壙実測図

土層解説

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 1 硫酸カルシウム結晶を含む | 13 ハートロームが上 |
| 2 黒褐色 ローム層(少しこげ色を含む) | 14 ハードローム、地盤強度を含む |
| 3 ローム層(多く含む) | 15 ハードロームとヨコロームの層上 |
| 4 硫酸カルシウム結晶を含む | 16 ハードロームとヨコロームの層上 |
| 5 硫酸カルシウム結晶を含む | 17 黒色 ローム層を含む |
| 6 硫酸カルシウム結晶を含む | 18 黒色 ローム層を含む |
| 7 硫酸カルシウム結晶を含む | 19 ハートロームが上 |
| 8 硫酸カルシウム結晶を含む | 20 素土上 |
| 9 小ローム層(少しこげ色を含む) | 21 東面土 |
| 10 フリクトルム 塩化物を含む | 22 ハードローム |
| 11 黒色 ローム層を含む | 23 植生と砂質土の混在 |
| 12 黒色 ローム層を含む | |

狭道は長さ3.5m、幅0.82~1.34m、高さ約0.7mで、断面形は長方形を呈し、ややカーブして前室につながっている。狭道の天井部には鋭利な刃物による削り痕が残っている。狭道は、壇底から半分ほどロームブロックが積まっている。天井部の落盤がないことから、これは埋葬時のもので狭道をふさいだものと思われる。前室の底面は0.64m、0.84m、0.76m、0.54mの四角形を呈し、主室の底面は3.2m×2.7mの四角形である。底面の状況は、粘土質のかたくしまったロームで、平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、天井部は、コーナー部を除きほとんど落盤していたが、壇底から約0.8mの所に天井部の痕跡が認められる。

遺物は、落盤した天井部をうめる土層中に内耳の土器片・土師器片が出土したのみである。

第3号地下式壙（図7、写3・4）

B3g7区に位置し、主軸方向はN-114°Eで、豊坑・狭道・主室が南東方向に並んでいて、全長は約2.8mである。豊坑の底面は0.9m×0.6mのほぼ長方形を呈し、底面はほぼ平坦で粘土質のかたいロームである。土層をみると、豊坑は埋めもどされたと考えられる。壁は垂直に立ち上がり、高さは1.2mほどである。

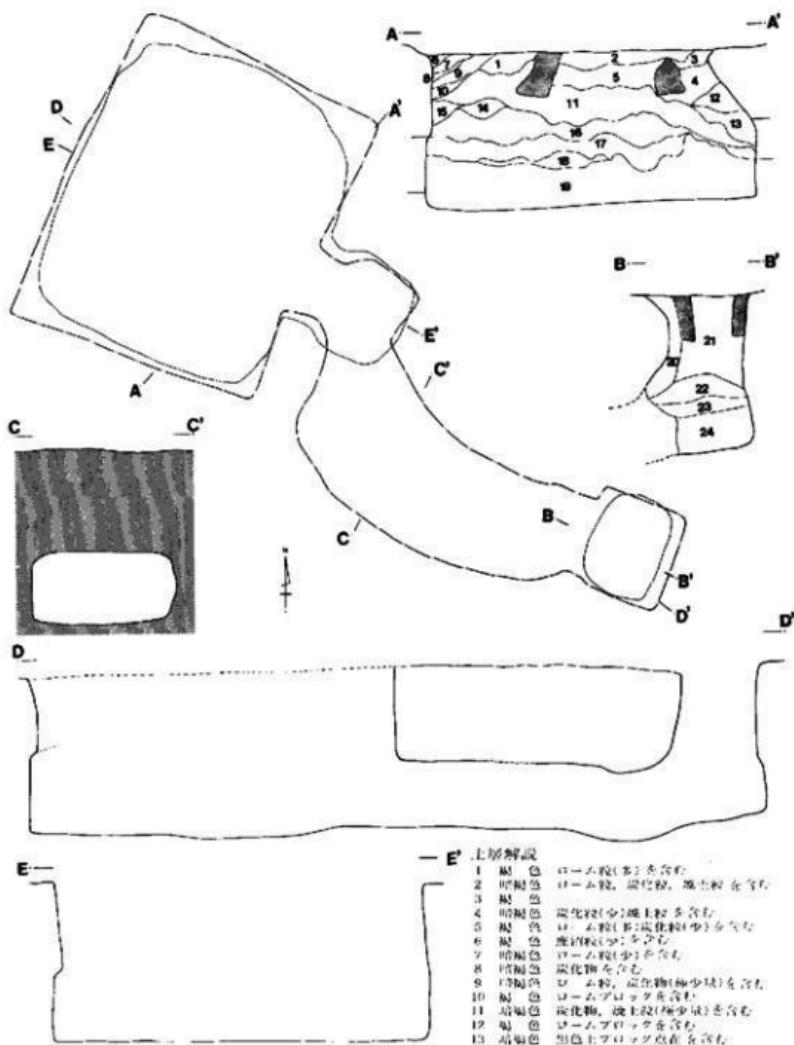
狭道は、豊坑IIの幅が0.68m、主室IIの幅が0.84mで、奥の方がやや広くなっている。高さは0.7mで、断面はカマボコ形をしている。天井部は完全に残っていて、鹿沼層とその下のローム層を掘り込んでいる。

主室の底面は長軸最大幅2.60m、短軸最大幅1.56mの扇形状をしている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面から0.8mの所に天井部の痕跡が認められる。鹿沼層とその下のローム層を掘り抜いている。天井部は、コーナー部を除き落盤していた。出土遺物はなかった。

第4号地下式壙（図7、写4）

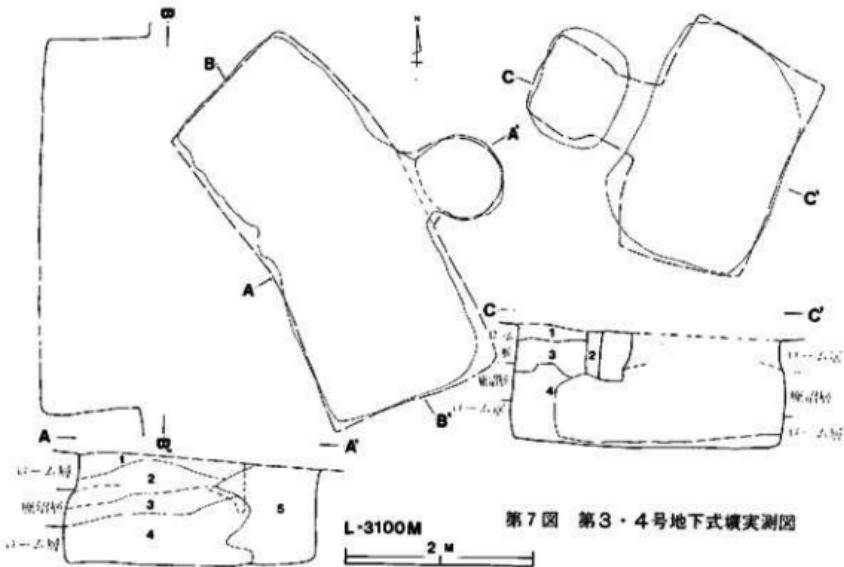
第3号地下式壙の北東側、B3f9区の傾斜地に位置し、主軸方向はN-119°Wで豊坑・狭道・主室が南北方向に並んでいて、全長は約2.7mである。豊坑の底面の形は、長径0.98m、短径0.8mの卵形をしている。底面はかたくしまっていて、主室の底面よりやや高くなっている。壁は垂直に立ち上がり、高さは1mほどである。土層を見ると、掘り出した土を再び埋めもどしたものと考えられる。狭道は長さ約0.18mで、天井部は落盤していた。

主室の底面は、最大長軸4.2m、最大幅2.0mの扇形状で、床面は粘土質のかたいロームで平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面から0.8mほどの所に天井部の痕跡が認められ、厚さ0.4mほどの鹿沼層とその下のローム層を掘り抜いている。天井部は落盤していたが、底面には薄く塗ったように黒色土がはさまっていた。出土遺物はなかった。



- E' 上部解説
- 1 紺色 ローム段(多)を含む
 - 2 黄褐色 ローム段、炭化段、風化段を含む
 - 3 紺色 炭化段(少)を含む
 - 4 黄褐色 ローム段(少)炭化段(少)を含む
 - 5 紺色 地面(少)を含む
 - 6 黄褐色 ローム段(少)を含む
 - 7 黄褐色 ローム段(少)を含む
 - 8 黄褐色 炭化段を含む
 - 9 紺色 ミネラル、炭化物(極少見)を含む
 - 10 紺色 ロームブロックを含む
 - 11 灰褐色 ロームブロックを含む
 - 12 灰褐色 灰色上フロッグを含む
 - 13 灰褐色 炭化段(少)を含む
 - 14 灰褐色 ロームを含む
 - 15 紺色 ローム上に黑色土層在
 - 16 ローム上に黑色土層在
 - 17 ローム上層
 - 18 黑褐色、粘土塊混在
 - 19 灰褐色 ロームブロック主体
 - 20 灰褐色 ロームブロック、塵泥上多含む
 - 21 ロームブロック主体に塵泥上混入
 - 22 ロームブロック、黑色土、塵泥上混入
 - 23 黑色土上にロームブロック、塵泥上混入
 - 24 ロームブロック、黑色土、塵泥上混入

第6図 第2号地下式礎実測図



第7図 第3・4号地下式墳実測図

3号地下式墳土層解説

1. 黒褐色 ローム(多)を含む、しまり弱い
2. 黑褐色 しまり弱い
3. 黑褐色 ローム(多)を含む
4. 黒色 ローム(少)を含む

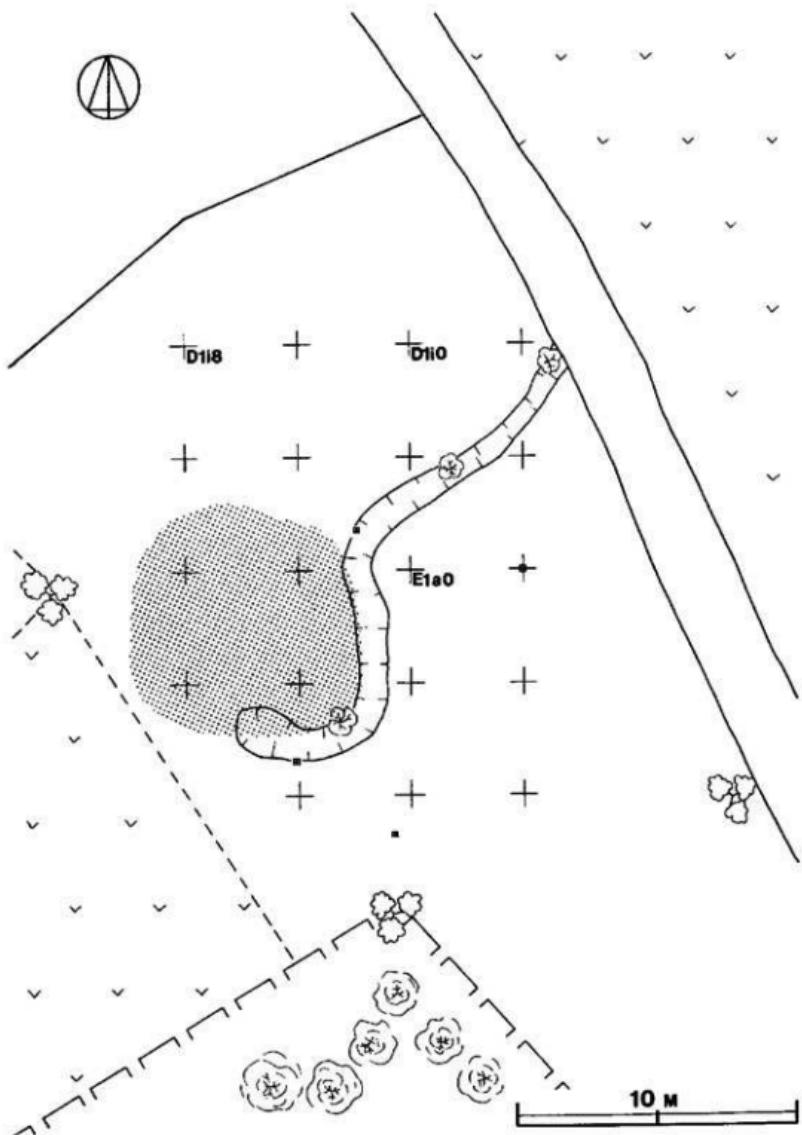
4号地下式墳土層解説

1. 黒褐色 しまり粘性弱い
2. 黑褐色 しまり粘性弱い
3. 黑褐色 ロームが主体
4. ロームブロック
5. ロームブロック、底辺上、褐色土がまごりあって左下へ流れ込んでいる

3 経 塚 (図8・9, 写4・5・8)

現況は畠地で、標高は32.8mを測る。経塚の北東13mほどの所を南東から北西へ通る幅2.5mの道路は、鰐淵城大手門へ通ずる昔からの道路であったという。調査前に、経塚のわきの土地境界にそって植えられていた茶の木が、機械で抜根され地表に経石が散乱していた。耕作土上の経石の分布を調査すると、E 1 a 8区を中心直径約8mの範囲に集中しており、このあたりに経塚があったことが推定できる。念のため地下施設の有無を調べるために、E 1 a 8区・E 1 b 8区をローム面まで掘り下げた。土壌が6基検出されたが、いずれも覆土はしまりが弱くさらさらしており、一部にビニール袋なども見られ、経塚とは関係のない最近のものと思われる。また耕作土の下の層からは、経石が出土しなかった。

多数の石が出上したが、の中には経石を持ち去ってご利益のあった婦人が、お札に河原石を返したという話もあるので、ふつうの河原石も含まれていると思われる。文字の書かれていたと思われる石は6,278個で、そのうち671個には文字の痕跡が見られた。経石の大きさは種々で、小



第8図 経塚現況図

さいもので長径2.4cm、大きいもので長径12cmのものがある。形や色も種々で、近くの川によく見られる河原石である。その河原石の比較的平らな面に一字墨書きしてある。少しくずした文字(図11)が多い。判読できたものは次の387字である。なお、同じ文字の石がある時は()内にその数を記した。

阿為(5) 因(2) 依 印 長 以(2) 引 優 汚 緑(3) 衣 宛 応 於(3) 音(3) 德 懸(2)
王(3) 間(2) 介 我(6) 詞 苍 獲 漢 塔 学 加 頤 界 亂 去 及(3) 義(2) 喜(2)
教(2) 幾 經(3) 近 記 行(2) 強 具(3) 求 苦 月(2) 慶(2) 華 花(4) 結 気 俱 嶺
教 合(2) 此(3) 高 兴(3) 丘 故(2) 根(2) 今 五(2) 御 後 言 舉(2) 谷 広 虚 金
印 薩(5) 山 許 故(2) 事 作(2) 三(2) 歲 罪 紹 在 主 而(2) 所(2) 受(4) 者 信
者 臣(2) 苦 尽 種(4) 灼 净(2) 胎 将 常 諸(4) 叉 舍(3) 捨 提 順 写 事 自(2)
裏 死 之 姿 文 授 小(2) 四(2) 生(2) 处 至 使 志 師 型 重 身 枝 立
淮 水 積 前 是(5) 善(2) 全 千(2) 先 施(2) 設 世(3) 遊 奏 卒 存 東 但 丹
大(4) 提 宅 連 智 知(3) 注(2) 中 丁 伝 特(3) 貪(2) 得(3) 堂 德 道(4) 同(4) 上
懇 毒 塔 東 読 諺 当(4) 内 南 女 如 任 若(2) 人(2) 二 認 念 然 納 能
坂 背 婆 梅 百 匹 仏(9) 福 平 不(5) 附 聞(3) 分 符 碩 粉 復 布(3) 便 別
訪 朋 本 故 苦(6) 梵(2) 法(3) 方 万 命(2) 术(2) 巳(2) 妙(2) 名(2) 乎~ 無 慢
木(2) 亦(3) 哉 也 有(5) 南 訟 来(5) 戻 佩 利(5) 流 蓼(2) 或

経石のほか標識等の経塚に関連する遺物は出土しなかった。

而 諦 善 間 五 行 亦 生 千 種 級
事 獅 喜 徒 言 作 四 未 至 具 大 又
束 不 木 背 令 人 臣 小 丙 因 我 被
也 諦 滂 聞 宏 有 爭 納 特 常
武 立 是 塔 法 者 坐 衣 等 去
王 宿 便 背 紗 記 未 注 布 衣
以 選 聖 緒 無 求 作 先 授

受 同 月 義 丙 土

10 CM

第9図 経石実測図

4 溝 (写5-4)

(写5-4) 溝第1号縄土器内

1号溝は、C2d7区からB3f1区へまっすぐ伸びている。長さ約31m、幅約1m、確認面からの深さ約0.25mで、断面はゆるやかな「U」字形である。溝の両端はなだらかに立ち上がっており。出土遺物はなかった。

2号溝は、1号溝と直交するような位置にあり、C2e7区からC3g4区へまっすぐのびている。長さ約34m、幅約1.5m、確認面からの深さ約0.28mで、断面はゆるやかな「U」字形である。溝の両端はなだらかに立ち上がっており。出土遺物はなかった。

3号溝は、C3c8区からB3g9区へまっすぐのびている。長さ約23m、幅0.5~1.3m、確認面からの深さ約0.15mで、断面はゆるやかな「U」字形である。溝の両端はなだらかに立ち上がっており。出土遺物はなかった。

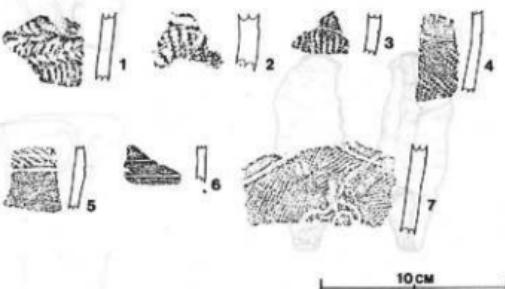
5 土壌 (写6)

土壤は54基検出された。平面の形は長方形を呈し、小さいもので0.6m×0.6m、大きいもので1.4m×4.6mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、浅いもので、確認面からの深さ0.2m、深いもので1.1mである。覆土はローム混りのしまりのない單一層であった。遺構と関連のある遺物は出土しなかった。土地境界線にそって掘られているものが多かった。

6 その他 (図10・11・12、写9・10)

遺構との関連は不明であるが、表土層から先土器時代のものと思われる縦長削片(図11、写9)が1点出土した。また、縄文時代前期浮島式(図10-1)、中期(図10-2)、後期(図10-3~7)の土器片が7点出土した。少量であるが古墳時代の土器片、須恵器片も出土した。中世のものでは、陶器片(図12-3、写10-1)、内耳土器片(図10-1・2)、内面に傘文様の墨絵のある土師質土器片(図12-5)、灯明皿(図12-4)などが出土した。縦長削片(B3g8区出土)は、最大長7.0cm、最大幅2.6cm、最大厚0.7cm、重量10gで、石質は流紋岩である。打点が2ヶ所残っている。

土器・陶器については次の一覧表に記述した。なお番号のない3点は写真(写10)で載せた。



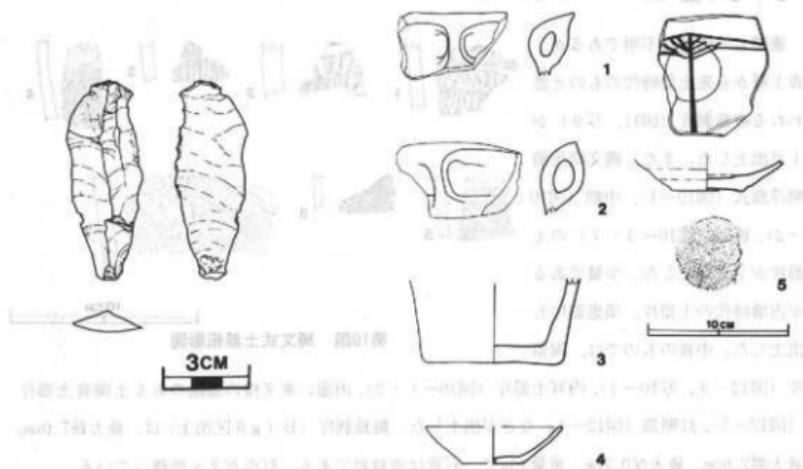
第10図 縄文式土器拓影図

内耳土器等一覧表 (図12)

(よーと器) 錦 ふ

番号	出土 遺構	種類	特徴		口径 (cm) 高	色調	胎土
			外 面	内 面			
1	2号地 下式壙	内耳土 器	口縁部片。耳の部分は外側にふくらんでいる。外面に煤付着。 ナデ (写10-4)	ナデ	器 (4.7)	外面一褐 内面一明 黄褐	砂粒
2	C 3e 2	内耳土 器	口縁部片。耳の部分は外側にふくらみをもつ。ナデ			外面一黑 内面一に ぶい黄橙	砂粒 黑雲母 (微)
3	B 3h 9	陶器	底部片。縁部に縁軸がかかっていて、底部にも玉状に付着している。 (写10-1)	輪積み後、ロクロ整形の痕跡がある。	底 径 (6.8)	にぶい黄	
4	C 3b 8	土師質 土器	縁のみ現存。灯明皿。全面に 煤が付着している。	全面に煤が付着 している。	底 径 (9.6) 2.5	灰黄褐	砂粒
5	B 3i 0	土師質 土器	皿。底部のみ現存。ロクロ整形 痕。底部に回転糸切り痕がある。 (写10-2)	傘の墨絵とわずかに帯状の朱塗 痕がある。	底 径 (2.0)	にぶい 黄橙	砂礫
	C 3j 9	陶器	高台部のみ現存。底部回転ヘラ 削り痕。 (写10-1)			にぶい 黄橙	石英(微)
	C 3j 9	陶器	底部片。縁軸が一部にかかっている。瘤状の高台がついている。 底部に回転糸切り痕。 (写10-1)	ロクロ整形痕が ある。		にぶい 黄橙	
	B 4e 3	外耳付 土器	外耳部のみ現存。朱塗痕がある。 (写10-3)	摩滅している。		にぶい 黄橙	石英(微)

(1)-8等 (1)-11-12等) 織の子



第11図 縱長制片実測図 (1)-11-12等) 織の子

第12図 内耳土器等実測図 (1)-8等 (1)-11-12等) 織の子

第4節　まとめ

本遺跡から、竪穴住居址1軒、地下式塙4基、経塙、溝3条、土壙54基を確認し、調査した。

竪穴住居址は、出土遺物の大部分は小片であるが、鬼高式土器がセットで出土しているので古墳時代末期のものと考えられる。

地下式塙は、近年、関東近県で多数発見され、本県でも鹿島町(注1)、竜ヶ崎市(注2)、谷和原村(注3)などでも発見、調査されてきた。しかし、多くの地下式塙に出土遺物がないこと、主室の天井部が落盤していること等から不明な点が多い。用途としては、墓塙説、地下倉庫説等があるが、人骨が出土する例があり、最近の研究では墓塙説の方が有力である。時期は、中世の内耳土器・陶器などが床面より出土していることがあり、また近くに中世の城館址があることが多いことから、中世のものとする考え方方が有力である。

本遺跡の4基の地下式塙はともに床面に遺物がなく、天井部も落盤していた。1号地下式塙を除き、竪坑と羨道・主室の3つの部分から構成されていた。主室は、厚さ0.4mほどの鹿沼層とその下のローム層を掘り抜いて作られ、底面は平坦で、壁は、高さが0.8mで垂直にたいらに削られていた。竪坑・羨道は、ともに掘り出した上で埋め戻されていた。時期決定遺物は出でていないが周囲からは中世の内耳土器片・陶器片(写10)が出土していること、また中世城跡鷹淵城跡が隣接していることから、中世の地下式塙と考えてよいであろう。

経塙は撫亂されていて、形態・構造は確認できなかったが、経石の分布や古道が前を通っていることから、E1a8区あたりにあったろうと推定できる。一字に一字墨書きされた河原石が多数出土し、文字をみると、経文に使われる文字が多くあり、経文を書いたものと考えられる。このことから、本遺構は一字・一字経塙とみてよいであろう。一字一字経塙には、経石とともに埋納作日や埋納者、目的などを書いた標識があることがあるが、本遺跡では出土せず、時期などはわからなかった。一字・一字経塙とは、経石を埋納する形の経塙をいい、礫石経塙ともいう。平安時代末から作られるようになり、江戸時代に盛んに作られた。形態は塙を築いたものや横穴墓を利用したものなど種々である。経石埋納の目的は、供養や逆修、現世利益等である。埋納経典は法華経が多い。経塙の造営者には廻國の聖や修驗者、僧侶等がいる。

溝は検出された段階で地下式塙群を区画するものかと考えられたが、底面の形状等にはっきりしないことが多く、不明である。土壙は、多くが土地境界線にそってあることなどから芋穴的な性格のものと考えてよいであろう。

(注1) 神野遺跡調査会「神野遺跡調査報告書」

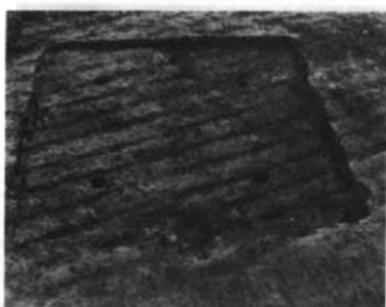
(注2) 茨城県教育財團「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書2—外八代遺跡」

(注3) 潤坂知遺跡発掘調査会「潤坂知遺跡発掘調査報告書」



写1

湿氣遺跡全景



第1号竖穴住居址

1



竖穴住居址遗物出土状况

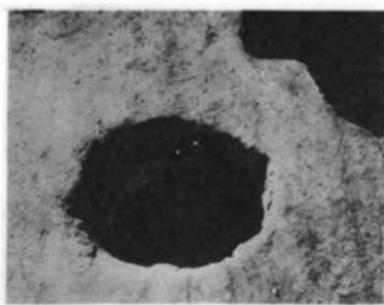


竖穴住居址遗物出土状况

3



竖穴住居址遗物出土状况



第1号地下式壕

5



第1号地下式壕主室

写2

温气遗跡 第1号住居址·第1号地下式壕

湖北省博物馆藏



第1号地下式模主室



第2号地下式模



第2号地下式模主室



第2号地下式模隧道



第3号地下式模主室



第3号地下式模



第2号地下式模竖坑

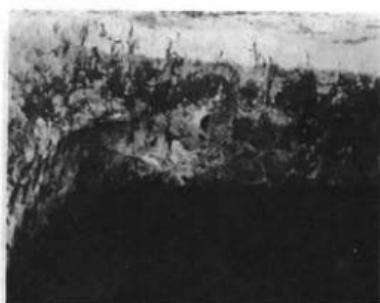
写3

湿氯遗迹 第1号·2号·3号地下式模



第3号地下式壙主室

1



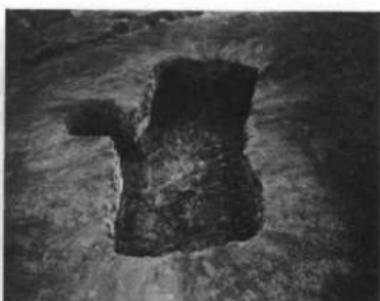
第3号地下式壙主室

2



第4号地下式壙

3



第4号地下式壙

4



第4号地下式壙主室

5



調査前の経塚

6

写4

温氣遺跡 第3号・4号地下式壙・経塚



経塚全景

1



経塚遺物出土状況

2



経塚遺物出土状況

3



第2号溝

4



調査風景

5

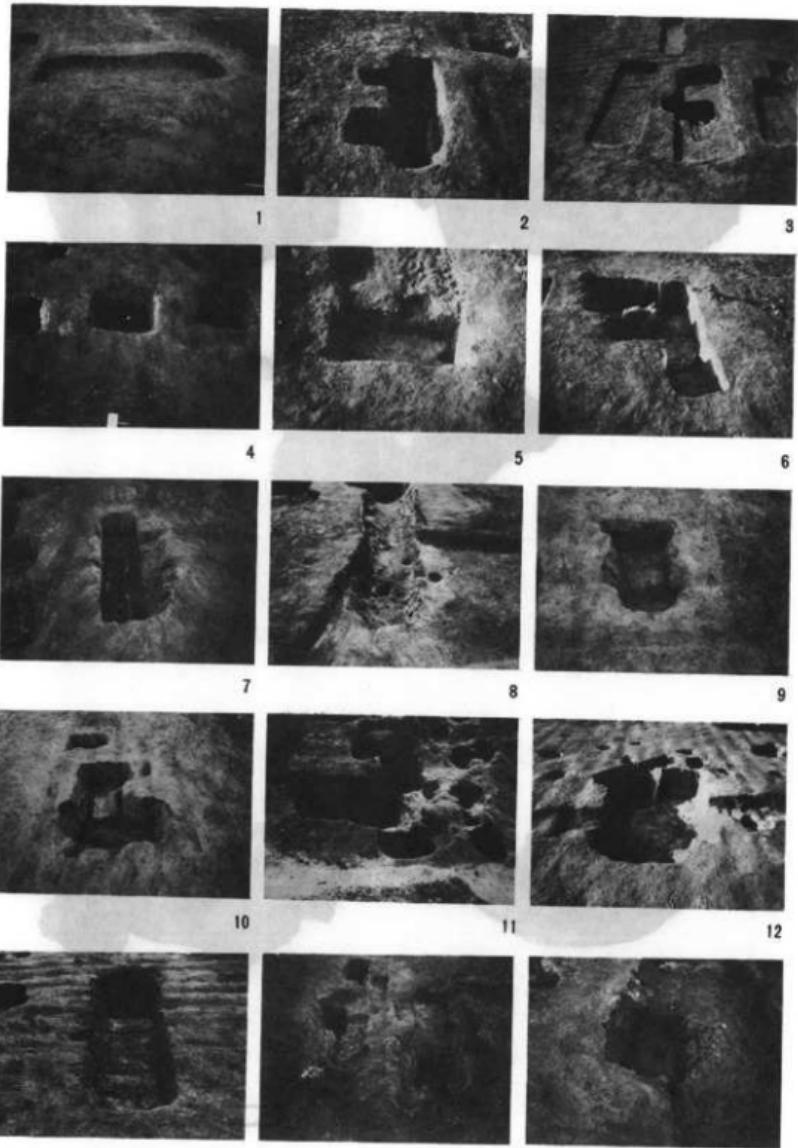


調査風景

6

写5

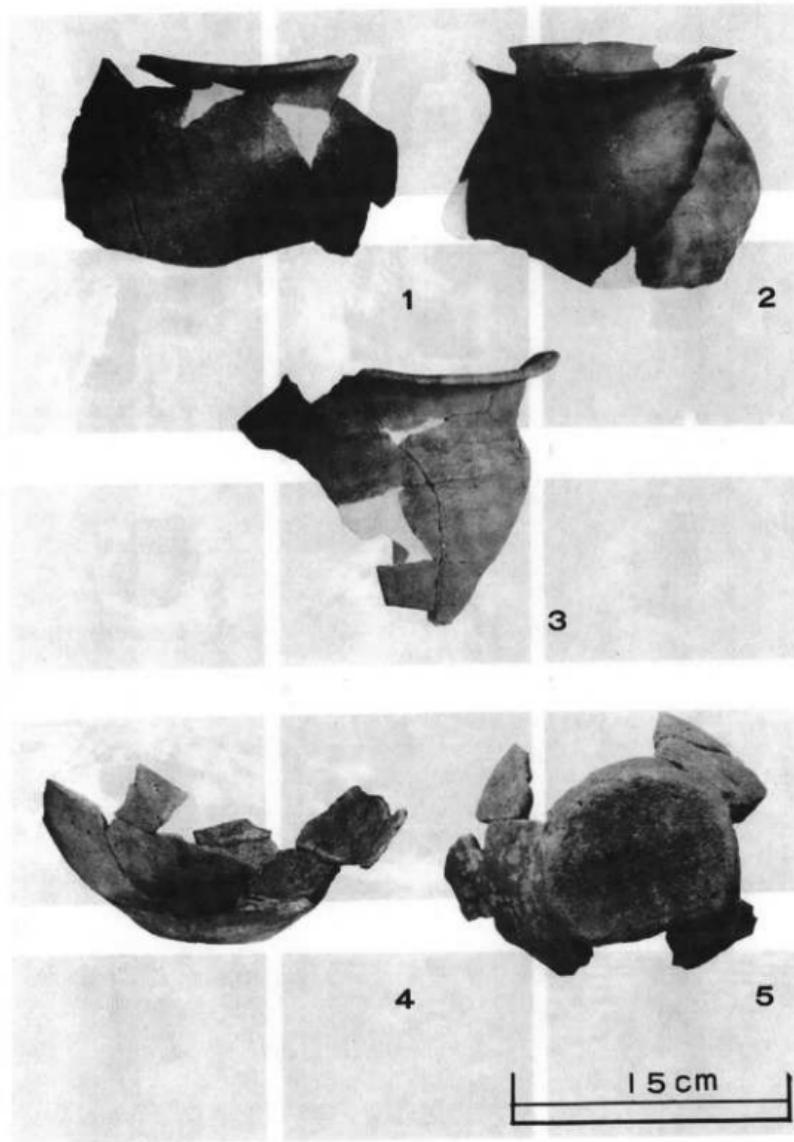
湿氣遺跡・経塚・溝・調査風景



写 6

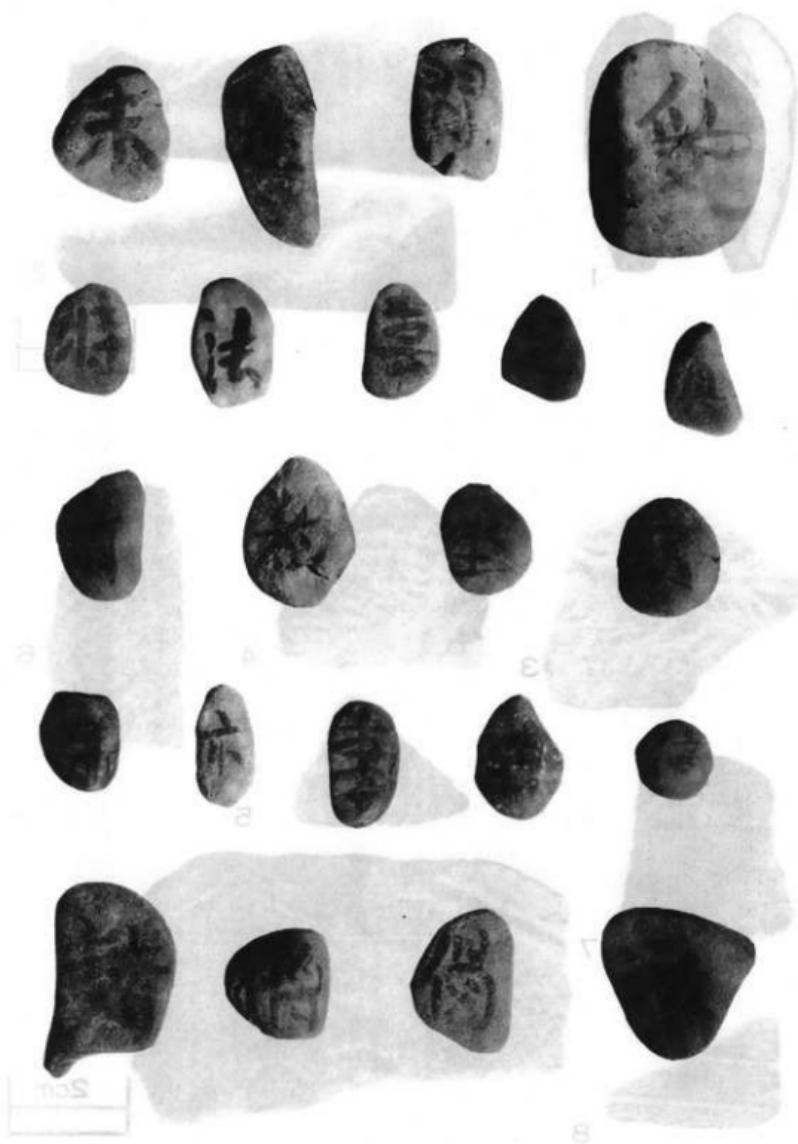
湿 気 遺 跡 土 壤

土壤



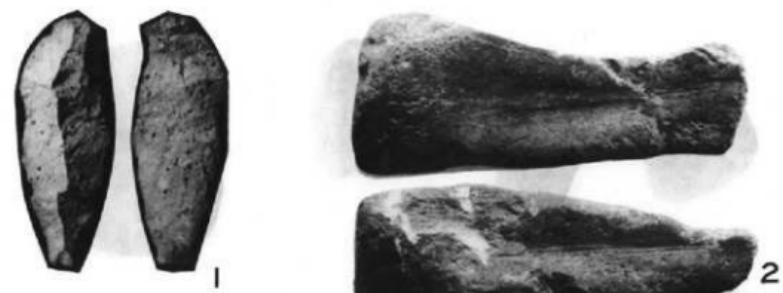
写7

温氣遺跡 第1号住居址出土土師器

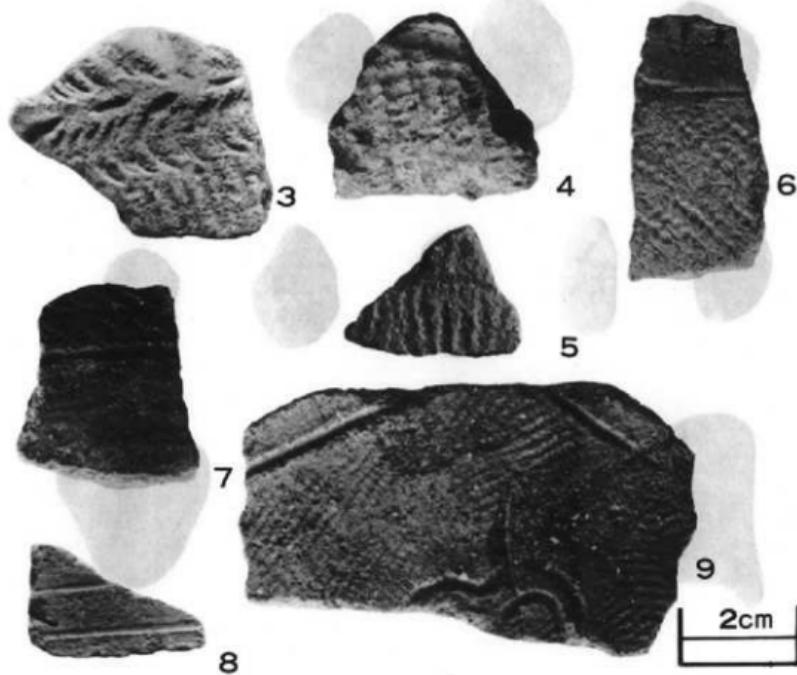


写 8

西北先文釋 濕氣遺跡 経具封 石



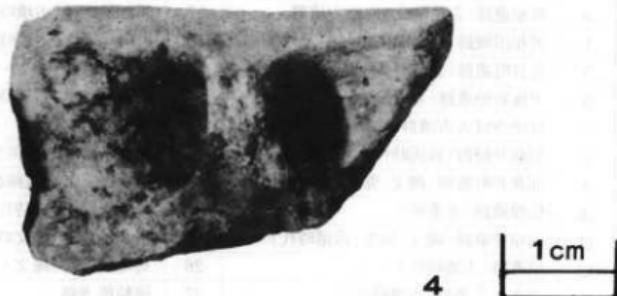
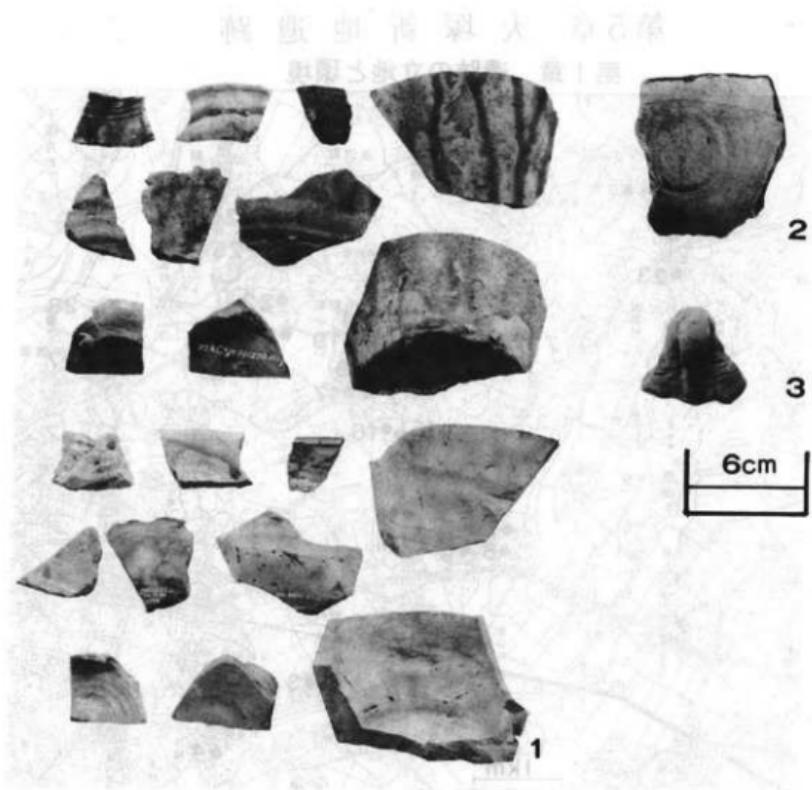
1 cm



写 9

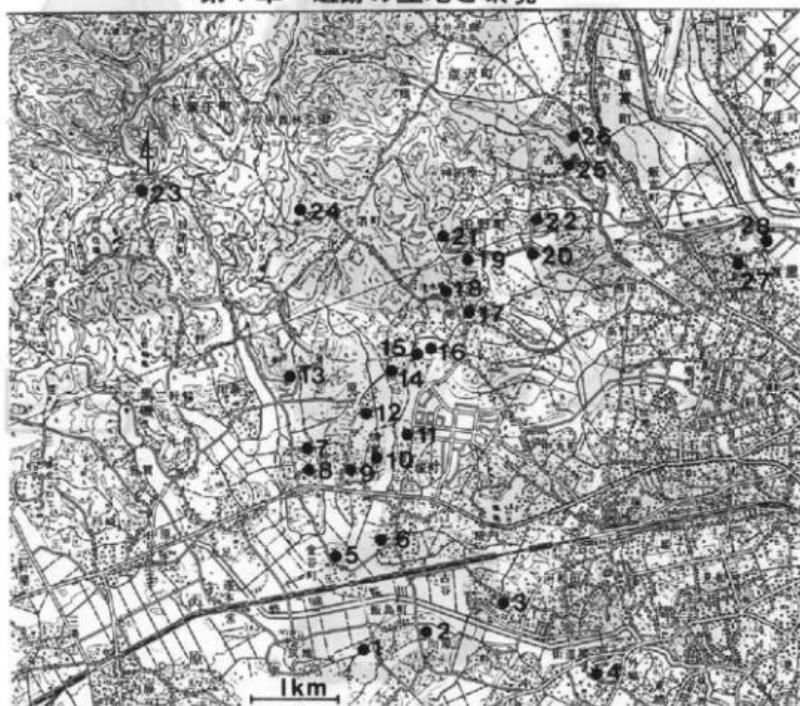
湿氣遺跡・縫長剝片・砥石・縄文式土器

三



第5章 大塚新地遺跡

第1章 遺跡の立地と環境



番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	飯島町遺跡(弥生・古墳時代)	15	峯山古墳(古墳時代)
2	仙光台遺跡(弥生時代)	16	寺山遺跡(縄文・古墳時代)
3	前原遺跡(弥生時代)前原古墳群	17	開江宿遺跡(古墳時代)
4	河和田城跡(中世)	18	大久保遺跡(古墳時代)
5	金谷町遺跡(古墳時代)	19	前山田遺跡(縄文・古墳時代)
⑥	大塚新地遺跡(本遺跡)	⑩	南原古墳群(古墳時代々)
7	妙徳寺付近古墳群(古墳時代)	21	後山田遺跡(縄文・古墳時代)
8	加倉井館跡(戦国時代)	22	仲根遺跡(縄文・弥生・古墳時代)
9	加倉井町遺跡(縄文・弥生・古墳時代)	23	木葉下三ヶ野塚跡群(古墳時代)
⑩	松原遺跡(本遺跡)	24	小坂遺跡(縄文時代)
11	向原井遺跡(縄文・弥生・古墳時代)	25	古土巻遺跡(縄文時代)
12	原遺跡(古墳時代)	26	馬場尻遺跡(縄文・古墳時代)
13	加倉井古墳群(古墳時代)	27	徳輪廬寺跡
14	毛勝谷原遺跡(古墳時代)	28	長者山政府跡

第1図 遺跡位置図及び一覧表

01等

1 地理的環境

大塚新地遺跡は、水戸市大塚町字高根532番地ほかに所在する。本遺跡の所在する水戸市は、県庁所在地でもあり、県の政治・経済・文化の中心である。関東平野の北東部に位置し、地形的に丘陵地区、台地地区、沖積低地部と三つの地域に分けることができる。それらは、水戸市の北から東に流れる那珂川とその支流の桜川の支谷によって構成された沖積低地と、東茨城台地の北東部をなす水戸台地と呼ばれる洪積台地、それに市の北西部の鶴足山地塊の外縁部をなす第三紀の丘陵地とからなっている。水戸台地の北部の那珂川と桜川に開まれた上市台地は、標高40m内外の洪積世末期に旧那珂川によって形成された河岸段丘上に、関東ローム層が堆積した台地である。台地を形成している最も古い地層は、新世代第三紀の地層であり、基盤岩は泥岩で水戸層と呼ばれている。その上に貝化石を含む粘土・砂からなる見和層が重なり、礫層からなる上市層がその上にのり、さらに常総粘土層、そして應治輕石層をはさんで関東ローム層が重なっている。この台地は、上市を中心とした西・南部は市街地となっている。那珂川の氾濫原標高10m以下の下市低地は、新世代第四紀洪積世の最末期に、那珂川や桜川の下方浸蝕によってできた谷底（沖積谷底）に、沖積世の時代になってから氾濫による堆積物が堆積して形成された沖積低地である。この沖積低地は、下市の市街地を除いて耕作地に利用され、北西部の標高60m～200mの丘陵地は山林に利用されている。

本遺跡の調査対象区域は、10,000m²の面積を有し、上市台地の南西部に位置している。標高約34～37mのなだらかな傾斜地となっており、桜川により浸蝕された小支谷が樹枝状に入り込み、この支谷に谷津山が開かれている。本遺跡は、桜川の南から北へ入り込んだ支谷に東面する台地の縁辺部にあり、台地は畠地や桑畠として利用され、耕作による擾乱が著しく、水田面との比高差は約3mである。

[注1]水戸市付近の台地は、一括して東茨城台地と呼ばれる。これを細分化すると上市台地、千波・隣間台地となっている。

2 歴史的環境

「常陸國風土記」に「それ常陸の国は、嶺は序大く、地も綿邈なり、土壤沃墳い、原野肥沃たり……況わんや復塙と魚との味を求わば、左は山にして右は海なり。桑を植え麻を植えんには、後は野にして前は原なり。いわゆる水陸の府藏、物産の齊饒なり。古の人の常世の国というの、蓋し疑うらくは此の地ならんか。」とあり、常陸国は物産豊かに栄えた地とができる。古代の常陸国の中は、國府のあった府中（石岡市）であるが、水戸市の地域が那珂郡の中心であり、那珂郡衙の所在地が波里地区に推定できる。その後も地域の中心として鎌倉時代には大掾

氏の一族、さらに室町時代には江戸氏がここを本拠とした。そして、佐竹氏が常陸を統一して太田から水戸城に移るにおよんで常陸における中心的位置が定まった。江戸時代には御三家の徳川氏の城下がおかれて、明治維新以後も水戸の機能は県庁所在地として政治・経済・文化の中心地となつた。

水戸市における文化の機能は、那珂川の氾濫原を見下ろす水戸台地に先土器時代の人々が住みつき狩獵や採集の生活を始めたことに始まる。主な遺跡としては、市内赤塚西岡地内遺跡、十万原遺跡、二ノ沢遺跡、開江遺跡、笠原遺跡、文化センター構内遺跡、見和桜山遺跡などがある。

縄文時代に属する主な遺跡は、市内八幡宮の境内から早期の撫糸文土器片が、元吉田町・藤井町・田谷町などから沈線文を有する土器群が発見されている。常盤高速道路敷地内の松原遺跡の表土から山形下層式土器が検出されている。市内柳原貝塚、吉田貝塚からは縄文前期の上器が出土し、これらの遺跡から東に6kmほどのところには常陸風土記に記されている大串貝塚が所在している。吉田貝塚からは縄文中期の阿玉台式土器、大木式、加曾利式土器が出土し、後期から晩期の遺跡としては、谷田遺跡や成沢遺跡、金隈町金洗沢遺跡、渡里町アラヤ遺跡等が確認されている。

弥生時代に属する遺跡も多く、とくにお下原遺跡、柳河町柳川小学校・東照宮境内・愛宕山古墳付近・桜山・見和町・千波町・本郷・元吉田町・飯富町安土星・土野町・藤井町十万原・河和田町前原遺跡などからは後期に編年される土器が多く出土している。

古墳時代に属する遺跡は、頭在化して形状より判断がつきやすいためか、市内に約110の遺跡が確認され、古墳群だけでも約40ヶ所を上げることができる。古墳時代には主な遺跡を上げると木葉下三ヶ野塚群・吉田古墳群・前原古墳群・加倉井古墳群、とくに愛宕山古墳（国指定史跡）は那珂國造の墓といわれ、那珂川右岸に立地している。

奈良時代には、那珂郡の中心であり長者山政府跡・徳輪廻寺（台渡廻寺）跡等が所在する。

以上、各時代について概観してきたが、水戸台地は各時代にわたっての遺跡が多数確認されている事は、古くから最適の生活環境が保証されていた地域であることをうかがい知ることができる。

第2節 調査の経過

大塚新地遺跡の発掘調査は、昭和54年10月1日から翌年の3月31日までの予定で現場作業を開始した。調査対象面積は10,000m²で畑地や桑畠として利用されていた。先ず遺跡の概要を把握するため約30のグリッドを発掘し、10月末日までその調査を終了した。第1段階の調査によりほとんどの小調査区において何らかの遺構が、また、その一部が検出された。多数の遺構の存在が

確認されたが、畠地は山芋、ゴボウ等の栽培によるトレンチャの使用によって遺構の擾乱が相当ひどく行なわれていた。東部の桑畠地区は、遺構・遺物の保存状態が良好だったので調査期間等も考え方を合わせて昭和54年度は、桑畠を中心に発掘調査をすることに決定し実施した。調査が進むにしたがって本遺跡の規模は、当初の予想をはるかに越え遺構が濃密で規模も大きく、遺物も大量に出土した。3月31日までに調査完了した遺構は、堅穴住居址55基、土壙40基、方形周溝遺構1基、獨立柱建築址1基である。住居址は、本遺跡の緩やかな斜面全域に確認され、弥生式土器、土師器須恵器を伴い複合して出土した。

昭和55年度は、継続して調査を実施することになり、前年度の調査区域の東部と南部に調査区域を5,600m²拡張し、昭和55年4月8日から7月31日までの予定で発掘調査を行った。4月から5月中旬まで調査区の東部C4、D3、D4地区のグリット発掘と拡張作業を実施した。そして遺構の検出を行なった。その結果堅穴住居址を30から40基確認し特にC4地区に堅穴住居址の複合がはなはだしいことが判明した。5月中旬より遺構の精査を開始し、8月31日までに補足調査を含め堅穴住居址42基、土壙14基、井戸状遺構1基を調査した。その結果、前年度と同様、弥生式土器、土師器、須恵器を伴う堅穴住居址が複合して複雑に検出された。

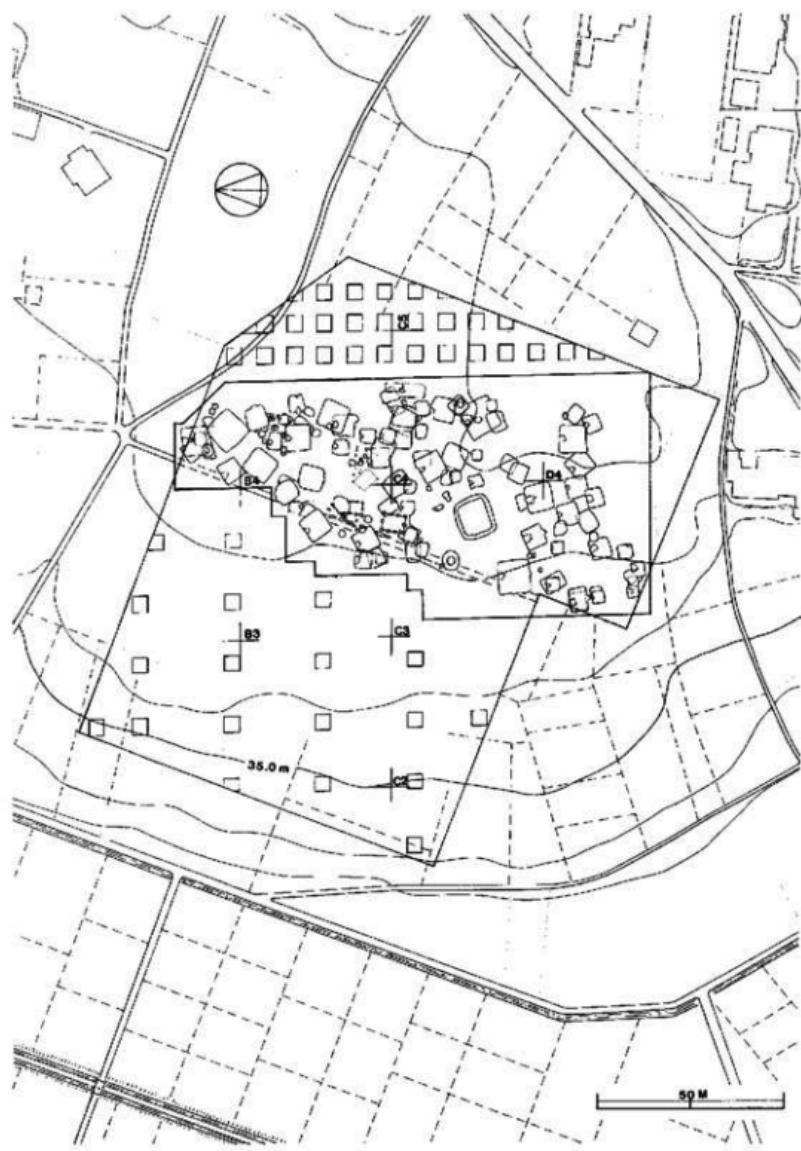
以下、各調査員の日誌によって調査の過程を記していく。

54年10月、大塚新地遺跡の現場における調査を17日から始める。桜村下庄岡遺跡からの諸機材の搬入と調査備品の点検と整理を行なう。調査区域内の遺構、遺物の分布状態を把握するため約30のグリットの発掘を行なった。その結果、ほとんどの小調査区より遺構が検出された。

54年11月、西部地区は山芋、ゴボウ等の栽培によるトレンチャの使用によって擾乱がひどく、東部地区的桑畠を中心に調査することにし、A4区からB4区の表土除去を開始する。堅穴住居址20基、土壙19基を確認する。B4区からB3区、C3区の表土除去を行なう。それと平行して第1号住居址から第18号住居址の堅穴住居址、第1号土壙から第8号土壙までの土壙の調査を実施する。第1号住居址から第7号住居址までの遺物の計測と写真撮影を行ない、遺物の取り上げを完了する。

54年12月、第1号住居址から第7号住居址、第1号土壙から第8号土壙の平面図、断面図を作成する。A4区、B4区の堅穴住居址21基、土壙5基の調査を行なう。当初排土置場としていたA4区、B4区の東側に新しく調査区を設定するため、今までの排土をA3区、B3区、C3区の西側に人力で移動し、草刈りを行ない、清掃をする。27日、年末年始に入るため発掘機材の整備を行ない、現地作業を中断する。

55年1月9日、発掘機材の点検整備を行ない、翌日から現場作業を実施する。昭和55年度調査の新調査区の杭打ち作業を行ない小調査を設定する。A4区、B4区の調査からC3区の調査に入る。第5号住居址から第41号住居址までの堅穴住居址と第14号土壙、第16号土壙の精査を行な



第2図 大塚新地遺跡全体図

う。

55年2月、C3区からC4区、D3区の遺構の再確認作業を実施する。その結果C3区のほぼ中央部に方形周溝遺構1基、竪穴住居址5基、土壤3基、掘立柱建築址1基を確認する。第1号掘立柱、第2号掘立柱、第1号井戸、第2号井戸の調査と、第47号住居址から第51号住居址まで竪穴住居址の精査をする。今月から残っていたカマドの精査を一斉に実施する。遺跡全体図の実測も合せて行なう。

55年3月、54年度発掘調査予定を完了するため、カマドの精査を中心に、第46号住居址から第55号住居址の調査と、第2号掘立柱の精査を急ぎ行なう。第2次調査にそなえて発掘備品の整理を行ない54年度の調査を終了する。

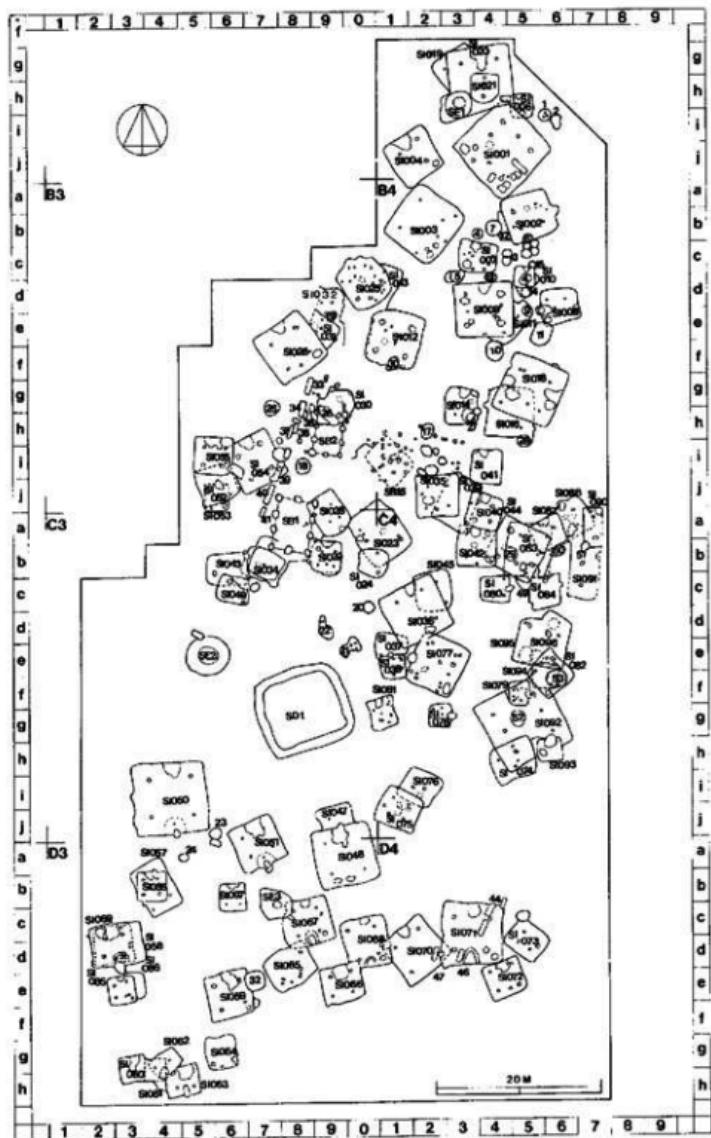
55年4月、前年度に引き続き8日から第2次調査に入る。事務所内の理整整頓と昭和55年度の発掘調査諸準備を行なう。10日からB4区、C4区、D3区、D4区のグリット発掘を行ない、遺構確認をする。

55年5月、D3区からD4区の遺構の調査を実施する。第56号住居址から第70号住居址、第32号土壤の精査を行う。

55年6月、D4区からC4区へ調査を進める。第66号住居址から第86号住居址、第42号住居址から第47号土壤、第3号井戸状遺構の精査を実施する。

55年7月、第60号住居址、第63号住居址、第77号住居址、第78号住居址、第81号住居址の平面実測図作成、第56号住居址、第59号住居址、第63号住居址、第83号住居址、第84号住居址、第87号住居址から第91号住居址までのセクション実測、第77号住居址、第78号住居址、第81号住居址、第85号住居址、第86号住居址のエレベーション図作成を行なう。21日から8月2日まで渡辺調査員が、千代山村殿内遺跡の調査を行なうことになり、その結果、大塚新地遺跡は8月31日まで調査を延長して行なうことになった。

55年8月、第92号から第94号までの竪穴住居址の遺物配置図の作成と遺物の取り上げを完了する。第61号住居址、第64号住居址、第66号住居址から第68号住居址、第70号住居址から第72号住居址、第78号住居址、第79号住居址、第81号住居址、第83号住居址、第85号住居址、第87号住居址、第89号住居址、第92号住居址、第93号住居址、第97号住居址内のカマドの精査を行なう。大塚事務所の物品及び発掘機材を糸川遺跡へ移動し、8月31日をもって、大塚新地遺跡の発掘調査を終了する。



第3図 大塚新地遺跡・遺構配置図

第3節 遺構・遺物

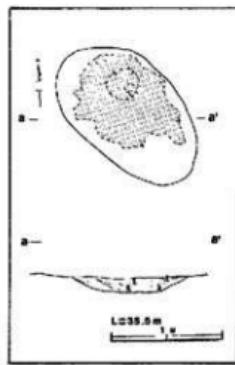
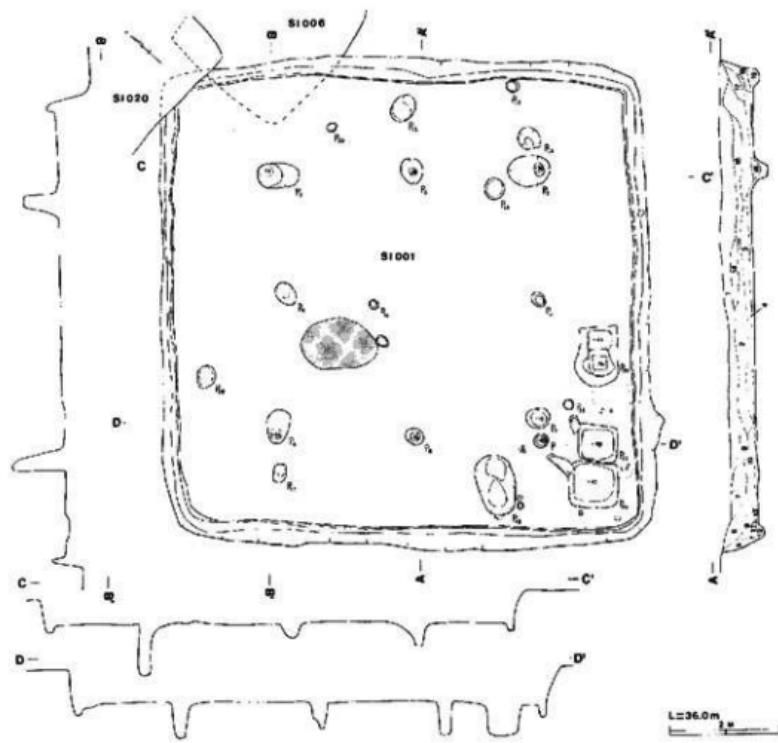
1 住居址

第1号住居址（図4・5）

本住居址は、調査区の北東部A4区h4, h5, i3, i4, i5, i6, B4区a4, a5に確認され、北コーナーには第6号住居址、第20号住居址が複合している。本址は第6号住居址、第20号住居址より古い遺構である。南コーナーに接して第2号住居址が検出されている。本址は隅丸正方形を呈し、主軸方向は、N-47°Eで規模は長軸8.85m、短軸は8.83mで面積は63.8m²を測る。壁高は53cm～72cmほどで、壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁面の遺存状態は良好である。壁下には幅15cm、深さ20cm内外の壁溝が全周している。床面は、ほぼ平坦で炉址附近は硬く壁にそって約1m内外は軟らかく貼り床となっている。炉址は本址の中央からやや西よりに位置し、規模は長径152cm、短径89cmで焼成部は、皿状に深さ約25cmほど埋り窪めており焼上が充満している。南東部床面から炭化物を出土し、壁にそって多量の焼土を出土しているので本址は火災に遭遇していると思われる。ピットは22個所確認されP1～P8は主柱穴と考えられ、P9～P10は補助穴と思われる。南コーナのP19, P20, P21, P22は貯蔵穴と思われ、P20の規模は長辺90cm、短辺82cm、深さ52cm、P21の規模は長辺72cm、短辺65cmを測り正方形を呈し、P22の規模は長辺107cm、短辺82cm、深さ43～86cmを測り不規方形を呈している。覆土は19層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で極少量のローム粒子を含み、中層は褐色土・暗褐色土で多量のローム粒子と極少量の焼上粒子を含み、下層は、暗褐色土で多量のローム粒子と極少量の焼土粒子、黒色土を含んでいる。出土遺物は、土器が中心で完存率の良好な物をあげると、南コーナーのP19付近床面・床面直上から小型壺片、手握土器(図5-3)、壺底部(図5-1)、北コーナー床面から壺、北東壁中央床面から壺片と、北西壁際中央部溝から壺(図5-2)を、南東部床面直上より壺底部、南西部床面直上より壺破片を出土し、他に台付壺片、壺、器台、高壺などの細片を多数出土している。その他の出土遺物は、北東壁際中ほどの、床面直上から未完成の勾玉(図5-5)、他に砥石(図5-6)、輕石(図5-7)、弥生式土器片を多数出土している。本址は出土遺物等から古墳時代の五鏡期に比定される遺構と思われる。

第2号住居址（図6～8）

本住居址は、調査区遺跡の北東部B4区a4, a5, a6, b4, b5, b6に確認され、北側には、北西コーナーに接して第4号住居址が確認され、西側0.5mには、第7号土壙、第12号土壙が検出されている。南壁中央部に第6号土壙が切り込んでおり、本址は第6号土壙より古い遺構である。本址の主軸方向はN-70°Wで規模は長軸5.56m、短軸5.32m、面積23.7m²を測る隅丸長方形を呈している。東壁中央部に半円形の張り出しを有しており、壁高は50cm～61cmほどで、壁は



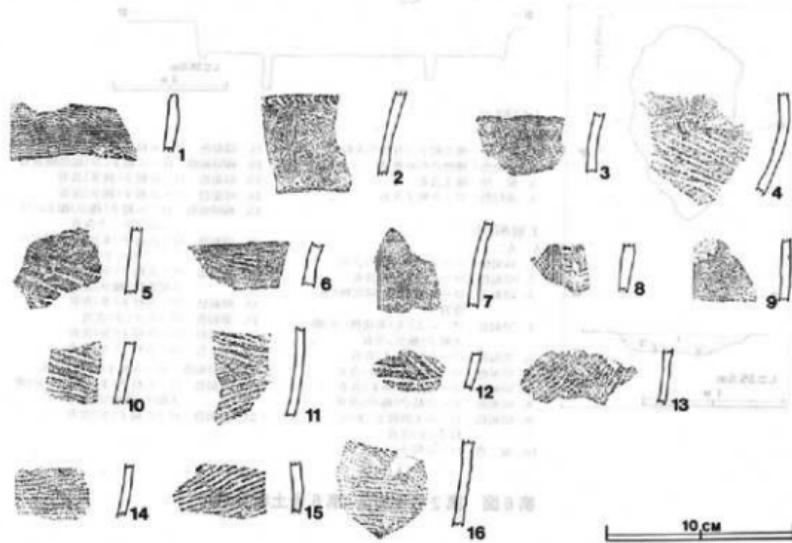
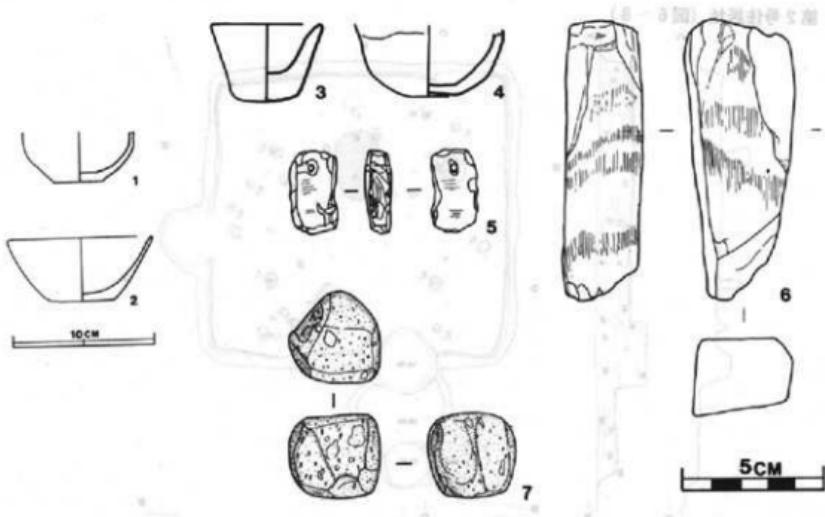
土層解説

- A-A'
- 1. 暗褐色
- 2. 黒褐色(黄褐色) ローム粒子(多)含有
- 3. 暗褐色
- 4. 黑褐色
- 5. 黑褐色
- 6. 暗褐色
- 7. 黑褐色
- 8. 黑褐色
- 9. 黑褐色
- 10. 暗褐色
- 11. 黑褐色
- 12. 黑褐色
- 13. 黑褐色口 ム上、炭化粒子(極少)含有
- 14. 暗褐色
- 15. 暗褐色
- 16. 暗褐色
- 17. 暗褐色
- 18. 暗褐色
- 19. 暗褐色

土層解説

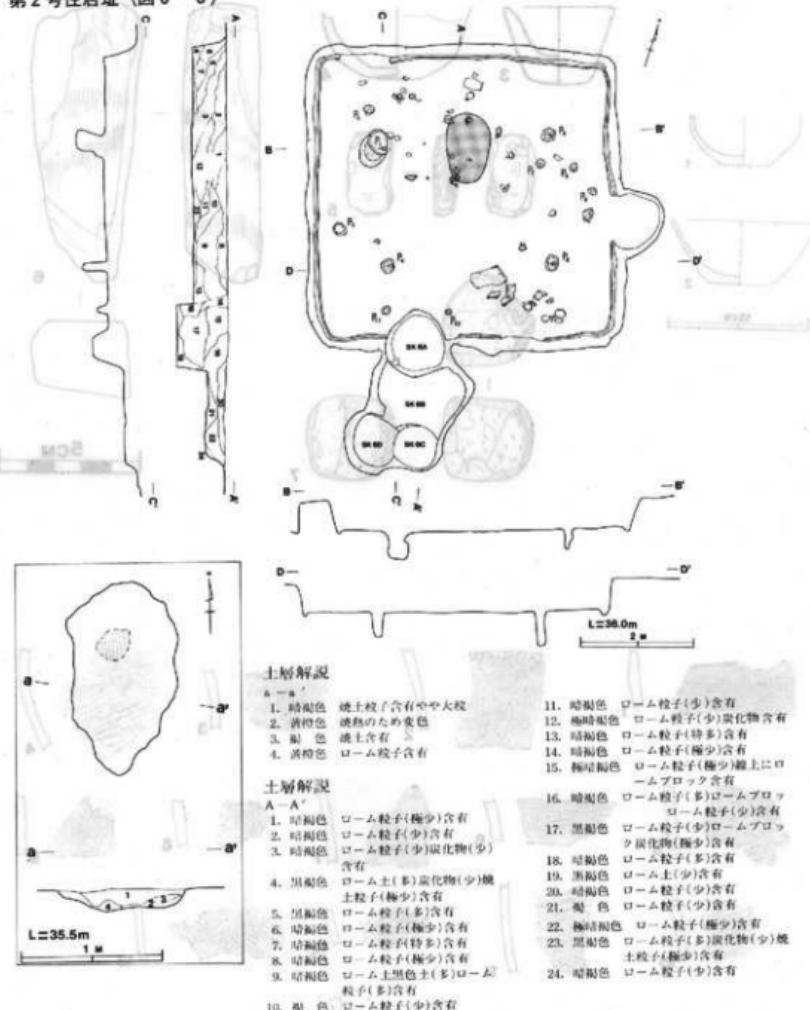
- *-A'
- 1. 暗褐色 硫化粒子含有
- 2. 黑褐色 硫化粒子含有
- 3. 黄褐色 ローム粒子含有
- 4. 黑褐色
- 5. 黑褐色
- 6. 黑褐色
- 7. 黑褐色
- 8. 黑褐色
- 9. 黑褐色
- 10. 暗褐色
- 11. 黑褐色
- 12. 黑褐色
- 13. 黑褐色口 ム上、炭化粒子(極少)含有
- 14. 暗褐色
- 15. 暗褐色
- 16. 暗褐色
- 17. 暗褐色
- 18. 暗褐色
- 19. 黑褐色

第4図 第1号住居址実測図



第5図 第1号住居址出土遺物実測・拓影図

第2号住居址(図6~8)



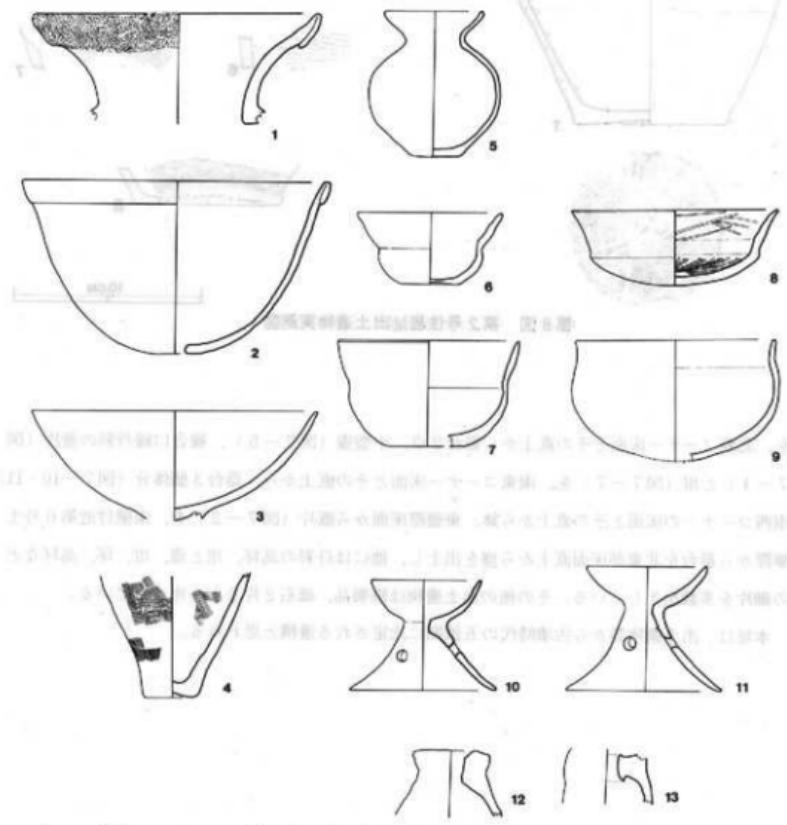
第6図 第2号住居址・第6号土壤実測図

関根洋・西宮伸志著「出益雅野ノ原」圖27

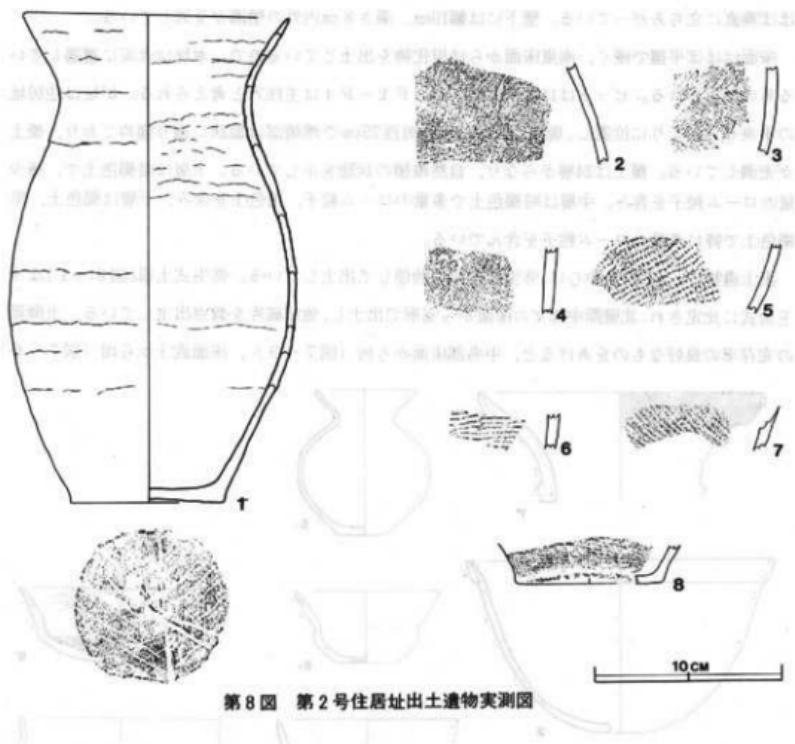
ほぼ垂直に立ちあがっている。壁下には幅10cm、深さ8cm内外の壁溝が全周している。

床面はほぼ平坦で硬く、南東床面からは炭化物を出土しているので、本址は火災に遭遇しているものと思われる。ピットは11個所確認され、P1～P4は主柱穴と考えられる。炉址は住居址の中央から北よりに位置し、規模は長径135cm、短径75cmで燃焼部は皿状に掘り窪めており、焼土が充満している。覆土は24層からなり、自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で、極少量のローム粒子を含み、中層は暗褐色土で多量のローム粒子、黒色土を含み、下層は褐色土、黒褐色土で特に多量のローム粒子を含んでいる。

出土遺物は、土師器を中心に、弥生式土器を共伴して出土している。弥生式土器(図8-1)は十王台式に比定され、北壁際中ほどの床面から完形で出土し、他は破片を数点出土している。土師器の完存率の良好なものをあげると、中央部床面から碗(図7-9)、床面直上から壺(図7-6)



第7図 第2号住居址出土遺物実測図



第8図 第2号住居址出土遺物実測図

を、北西コーナー床面とその直上から器台2点、小型壺（図7-5）、複合口縁丹彩の壺片（図7-1）と壙（図7-7）を、南東コーナー床面とその直上から、器台3個体分（図7-10・11）南西コーナーの床面とその直上から鉢、東壁際床面から瓶片（図7-2）を、南壁付近第6号土塹際から器台を北東部床面直上から壺を出土し、他には丹彩の高壺、壙と壺、壙、高壺などの細片を多数出土している。その他の出土遺物は鉄製品、砥石2片などを出土している。

本址は、出土遺物等から古墳時代の五領期に比定される遺構と思われる。

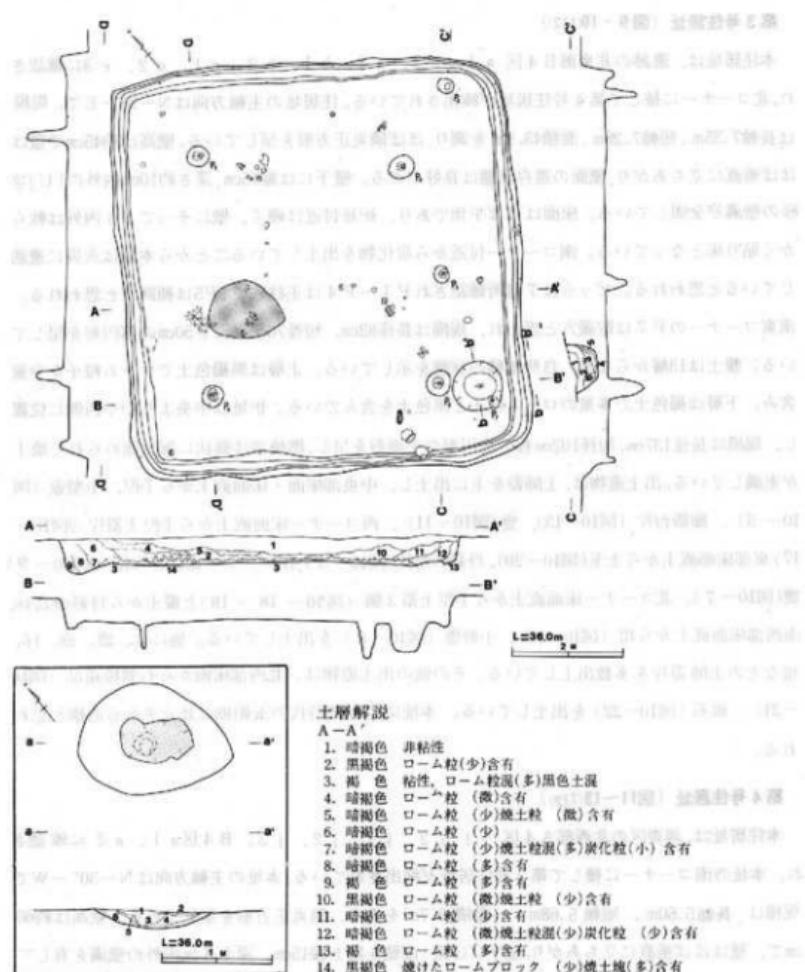
第3号住居址（図9・10(1)(2)）

本住居址は、遺跡の北東部B4区 a1, a2, a3, b1, b2, c1, c2, e3に確認され、北コーナーに接して第4号住居址が検出されている。住居址の主軸方向はN-38°Eで、規模は長軸7.35m、短軸7.28m、面積43.9m²を測り、ほぼ隅丸正方形を呈している。壁高は約45cmで壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁面の遺存状態は良好である。壁下には幅15cm、深さ約10cm内外の「U」字形の壁溝が全周している。床面はほぼ平坦であり、炉址付近は硬く、壁にそって1m内外は軟らかく貼り床となっている。南コーナー付近から炭化物を出土していることから本址は火災に遭遇していると思われる。ピットは7個所確認されP1～P4は主柱穴で、P5は補助穴と思われる。南東コーナーのP7は貯蔵穴と思われ、規模は長径82cm、短径76cm、深さ50cmの楕円形を呈している。覆土は13層からなり、自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土でローム粒子を少額含み、下層は褐色土で多量のローム粒子と黒色土を含んでいる。炉址は中央よりやや西側に位置し、規模は長径137cm、短径102cm程で楕円形の平面形を呈し、燃焼部は皿状に盛り詰められて焼土が充満している。出土遺物は、土師器を主に出土し、中央部床面・床面直上から手門、小型鏡（図10-5）、陶器台片（図10-13）、甕（図10-11）、西コーナー床面直上から手捏土器片（図10-17）、東部床面直上から土玉（図10-20）、丹彩の串片（図10-3）、南コーナー床面から侃（図10-9）甕（図10-7）、北コーナー床面直上から手捏土器3個（図10-18・19）と覆土から丹彩の高环、南西部床面直上から甕（図10-10）、小形甕（図10-8）を出土している。他には、甕、壺、环、井などの土師器片を多数出土している。その他の出土遺物は、北西部床面から石製模造品（図10-21）、砥石（図10-22）を出土している。本址は、古墳時代の五頭期に比定される遺構と思われる。

第4号住居址（図11～13(1)(2)）

本住居址は、調査区の北西部A4区 i1, i2, j1, j2, j3, B4区a1, a2に確認され、本址の南コーナーに接して第3号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN-30°Wで規模は、長軸5.60m、短軸5.68m、面積26.7m²を測り、隅丸正方形を呈している。壁高は約60cmで、壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁下には東・南壁を除き幅15cm、深さ8cm内外の壁溝を有している。

床面は暗褐色を呈し踏み固められて硬く、床面全域から焼土と、北東部の床面から多量の炭化



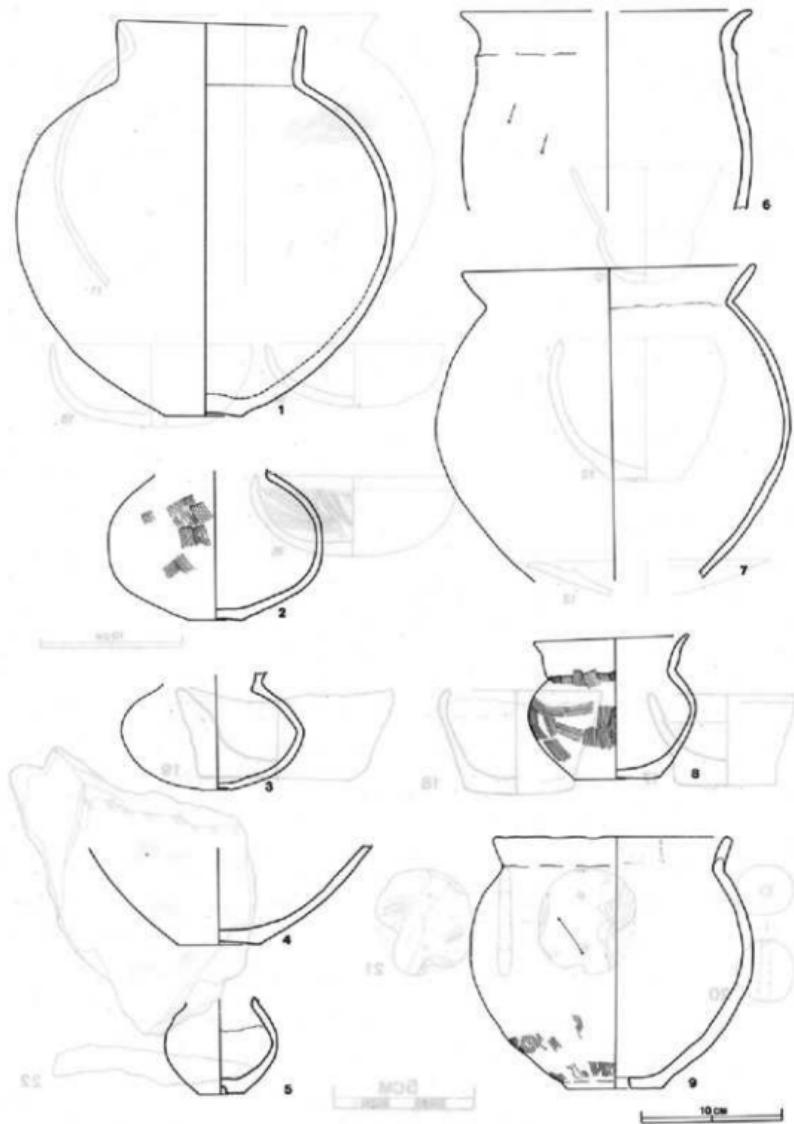
土層解説

- A-A'
- 暗褐色 非粘性
 - 黒褐色 ローム粒(少)含有
 - 褐色 粘性、ローム粒混(多)黒色土混
 - 暗褐色 ローム粒(微)含有
 - 暗褐色 ローム粒(少)焼土粒(微)含有
 - 暗褐色 ローム粒(少)含有
 - 暗褐色 ローム粒(少)焼土粒混(多)炭化粒(小)含有
 - 暗褐色 ローム粒(微)含有
 - 褐色 ローム粒(多)含有
 - 黒褐色 ローム粒(微)焼土粒(少)含有
 - 暗褐色 ローム粒(少)含有
 - 暗褐色 ローム粒(微)晚上粒混(少)炭化粒(少)含有
 - 褐色 ローム粒(多)含有
 - 黒褐色 焼けたロームブロック(少)焼土塊(多)含有

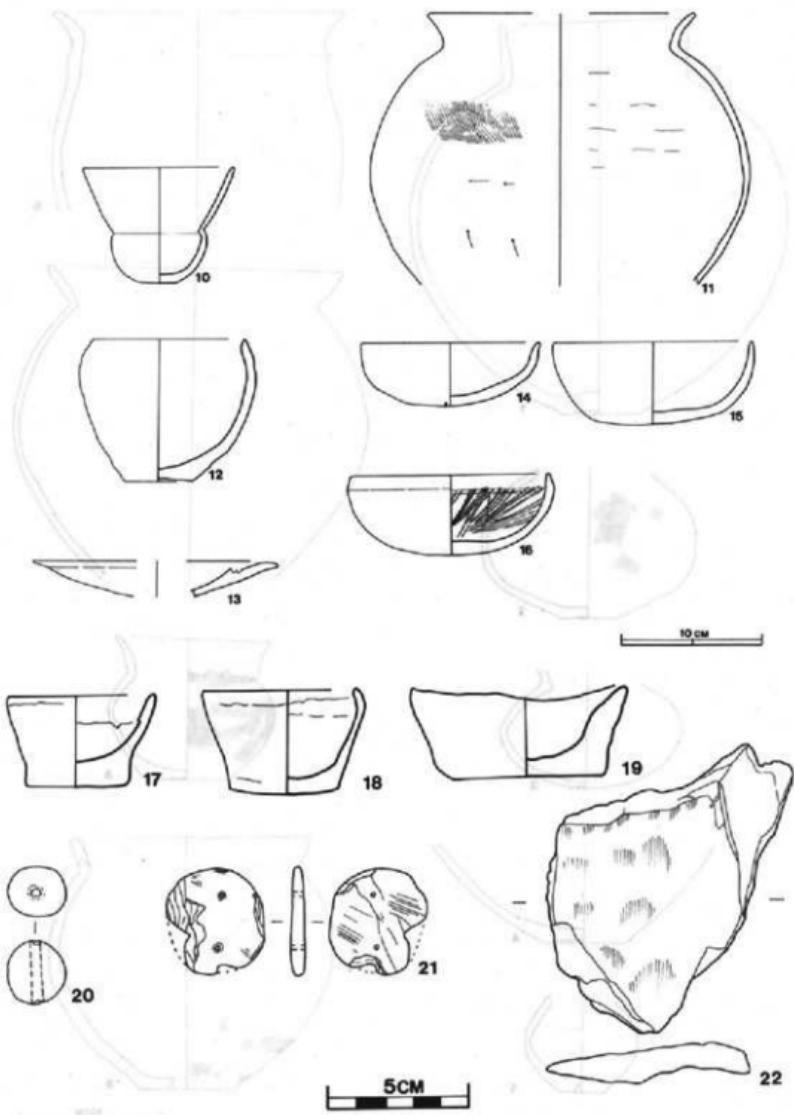
土層解説

- b-b'
- 褐色 ローム粒子(少)炭化物(極少)含有
 - 暗褐色 ローム粒子(多)炭化物(多)燒土粒子(少)含有
 - 褐色 ローム粒子(特多)含有
 - 暗褐色 ローム粒子(特多)含有
 - 褐色 ローム粒子含有
 - 暗褐色 ローム粒子(多)含有

第9図 第3号住居址実測図

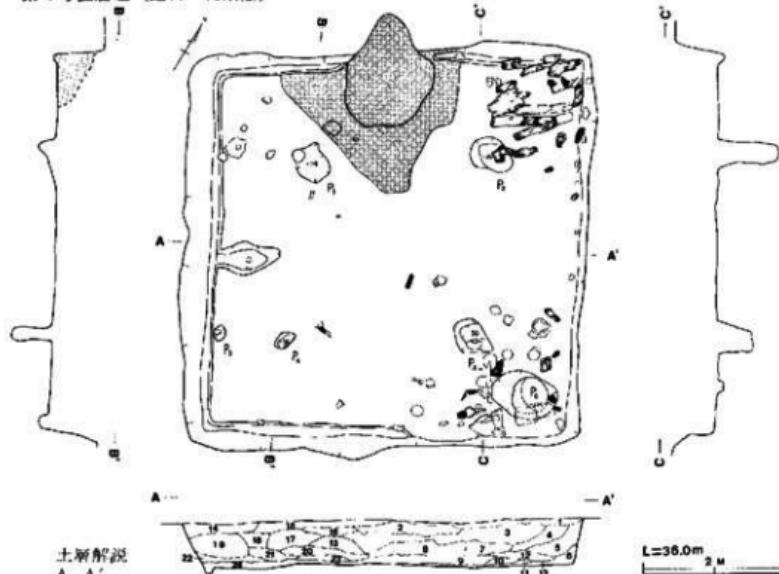


第10図(1) 第3号住居址出土遺物実測図



第10図(2) 第3号住居址出土遺物実測図

第4号住居址 (図11~13:1)(2)

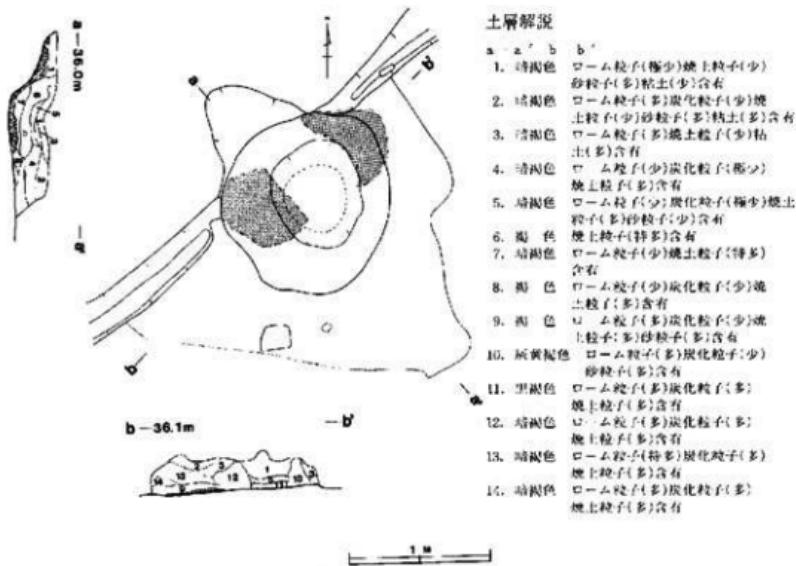


土解説

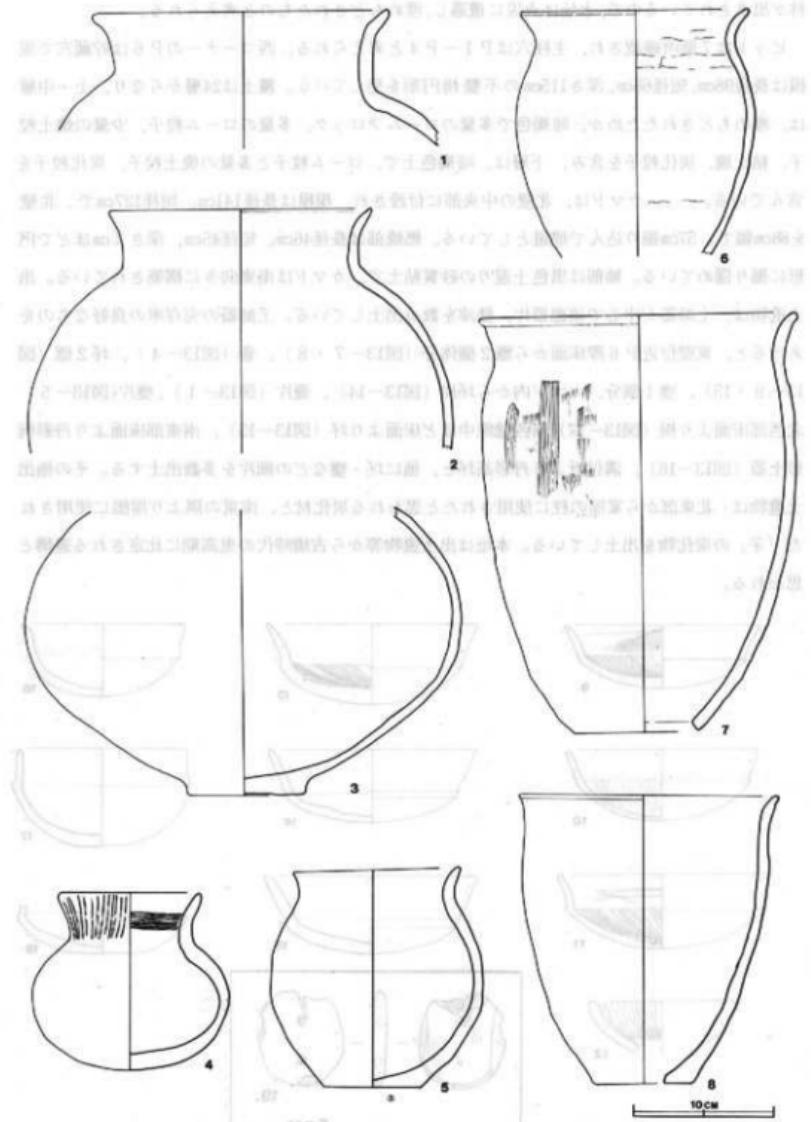
A A'

- | | | | |
|---------|--|---------|--|
| 1. 暗褐色 | ローム粒子(多)炭化粒子(中)含有 | 13. 暗褐色 | ローム粒子(中)炭化粒子(多)燒土粒
子(中)含有 |
| 2. 晴褐色 | ローム粒子(多)粘土ブロック(多)炭
化粒子(多)含有 | 14. 暗褐色 | ローム粒子(中)炭化粒子(中)燒土粒
子(中)含有 |
| 3. 暗褐色 | ロームブロック(中)粘土(少)炭化
粒子(少)灰土粒子(極少)含有 | 15. 暗褐色 | ローム粒子(多)燒土粒子(少)炭化
粒子(中)含有 |
| 4. 晴褐色 | ローム(多)炭化物(中)燒土粒
子(少)含有 | 16. 暗褐色 | ロームブロック(少)ローム粒子(多)
炭化粒子(多)含有 |
| 5. 暗褐色 | ロームブロック(少)ローム粒子(多)
炭化粒子(多)含有 | 17. 暗褐色 | ロームブロック(多)ローム粒子(特
多)燒土粒子(中)炭化粒子(中)含有 |
| 6. 暗褐色 | ローム粒(多)炭化粒子(多)燒土
(多)含有 | 18. 暗褐色 | ローム粒子(特多)炭化粒子(中)燒土
粒子(中)燒土粒子(少)含有 |
| 7. 暗褐色 | ロームブロック、粘土粒子(中)炭化
粒子(少)含有 | 19. 暗褐色 | ローム粒子(特多)粘土ブロック(特
多)燒土粒子(少)炭化粒子(中)含有 |
| 8. 暗褐色 | ローム粒(多)ロームブロック(少)
粘土ブロック(極少)炭化物(中)
燒土粒子(極少)含有 | 20. 暗褐色 | ロームブロック(中)ローム粒子(多)
燒土粒子(中)炭化粒子(中)燒土粒
(中)含有 |
| 9. 暗褐色 | ロームブロック(少)ローム粒子(多)
燒土粒子(少)粘土(少)炭化粒子(中)
含有 | 21. 暗褐色 | ローム粒子(多)燒土ブロック(多)炭
化物(多)燒土、木炭(多)含有 |
| 10. 暗褐色 | ロームブロック(少)ローム粒子(多)
燒土粒子(特多)炭化粒子(多)燒土ブ
ロック(多)含有 | 22. 晴褐色 | ローム粒子(多)炭化粒子(多)燒土粒
子(少)含有 |
| 11. 晴褐色 | ローム粒子(多)炭化粒子(多)燒土粒
子(中)含有 | 23. 晴褐色 | ローム粒子(多)炭化物(中)燒土ブ
ロック(中)燒土粒子(中)含有 |
| 12. 晴褐色 | ロームブロック(少)ローム粒子(極
多)炭化粒子(多)燒土粒子(中)含有 | 24. 暗褐色 | ロームブロック(多)燒土粒子(少)含
有 |

第11図 第4号住居址実測図



第12図 第4号住居址カマド実測図

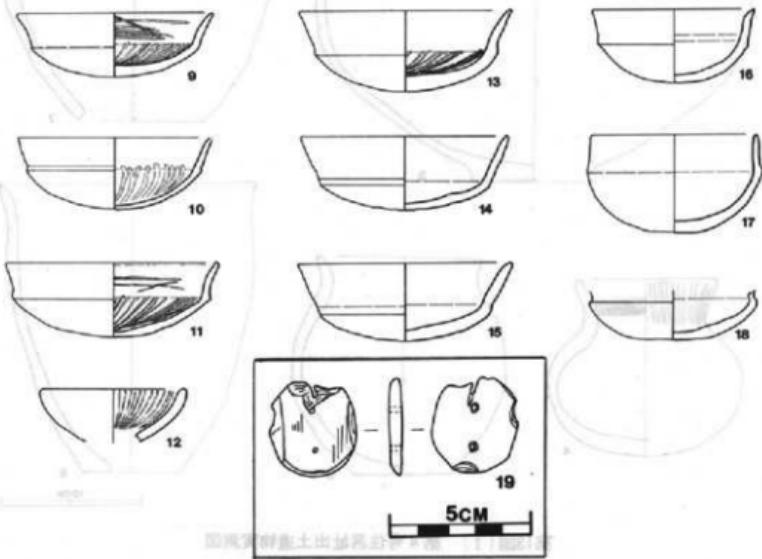


第13図(1) 第4号住居址出土遺物実測図

那須西春土出土遺物図録 (1) 図61

材が出土されているので、本址は火災に遭遇し、埋めもどされたものと考えられる。

ピットは7個所確認され、主柱穴はP1～P4と考えられる。西コーナーのP6は貯蔵穴で規模は長径98cm、短径65cm、深さ115cmの不整梢円形を呈している。覆土は24層からなり、上・中層は、埋めもどされたためか、暗褐色で多量のロームブロック、多量のローム粒子、少量の焼土粒子、粘土塊、炭化粒子を含み、下層は、暗褐色土で、ローム粒子と多量の焼土粒子、炭化粒子を含んでいる。カマドは、北壁の中央部に付設され、規模は長径141cm、短径127cmで、北壁を88cm幅で、57cm掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径46cm、短径45cm、深さ2cmほどで円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で、カマドは南東向きに構築されている。出土遺物は、土師器が中心で須恵器片、鉄滓を数点出土している。土師器の完存率の良好なものをおあげると、東壁付近P6際床面から甌2個体分(図13-7・8)、壺(図13-4)、坏2個(図13-9・15)、甌1個分、カマド内から坏片(図13-14)、壺片(図13-1)、甌片(図13-5)、北西部床面より椀(図13-17)、南西壁際中ほど床面より坏(図13-13)、南東部床面より丹彩椀形土器(図13-16)、溝付近より丹彩高坏と、他に坏・甌などの細片を多数出土する。その他出土遺物は、北東部から家屋の柱に使用されたと思われる炭化材と、南東の隅より屋根に使用された「茅」の炭化物を出土している。本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高期に比定される造構と思われる。



第13図(2) 第4号住居址出土遺物実測図

第6号住居址（図14～16）

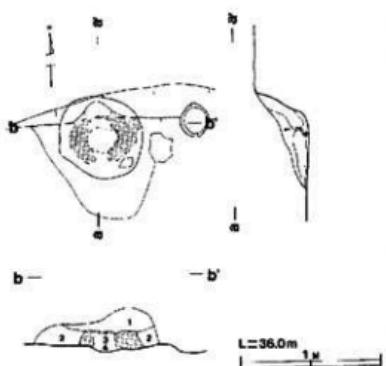
本住居址は、調査区の北部A 4区 h 5, i 5に確認され、本址の西・南部は第1号・第20号住居址の上部に貼り床をして構築している。第1号・第20号住居址の床面との差は35cmほどである。

本地の主軸方向はN—9°—Eで、規模は長軸2.83m、短軸2.74m、面積5.9m²を測り隅丸正方形を呈している。壁高は約25cmほどで壁は緩やかに外傾して立ちあがっている。西コーナーと南壁は確認することができなかったが、駁下には、カマドの部分を除いて幅10cm、深さ5cm内外の壁溝を有している。床面は暗褐色で硬く踏み固められた状態を示している。ピットは6個所確認され、P 1～P 4は主柱穴と考えられる。南側中ほどのP 6は貯蔵穴で、規模は長径61cm、短径47cm、深さ20cmの楕円形を呈している。覆土は11層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で少量のローム粒子、炭化粒子と極少量の焼土粒子を含み、下層は極暗褐色土で少量のローム粒子を含んでいる。

カマドは北壁の中央部に付設され、規模は長径55cm、短径47cmであり、北壁を40cm軒で、12cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径23cm、短径17cmで不整楕円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で、カマドは南向きに構築されている。カマド東側に土止めとして大きな須恵器片を利用している。出土遺物は須恵器を中心に土師器が共伴して出土している。須



第14図 第6号住居址実測図



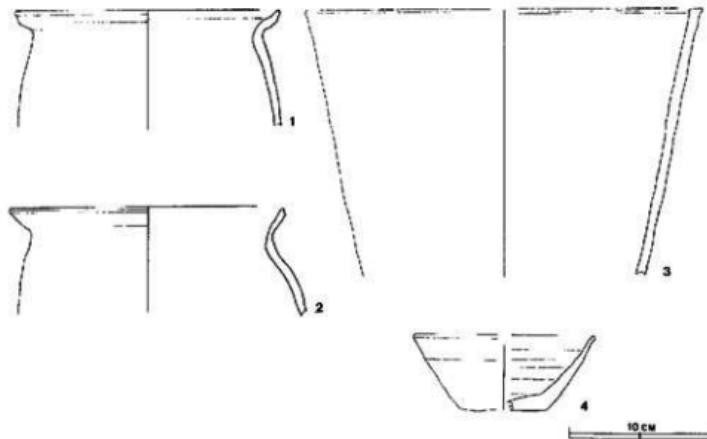
恵器は床面からほぼ完形の壺（図16-4）が出土し、他は壺などの細片を数点出土している。土師器はカマド付近床面から壺片（図16-2）、南東部床面から壺片（図16-1）が、南西部から須恵器の壺片（図16-3）を出土している。他に覆土から小型壺、壺口縁部、など細片を多数出土している。

本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

上層解説

- a-a' b-b'
 1. 暗褐色 ローム粒子(多)燒上(少)炭化物(極少)砂粒(多)含有
 2. 砂質粘土
 3. 剛一色 ローム粒子(少)砂粒(特多)含有火を受けて床面のロームは焼上化
 1. 暗褐色 ローム粒子(少)砂粒(特多)含有焼上化

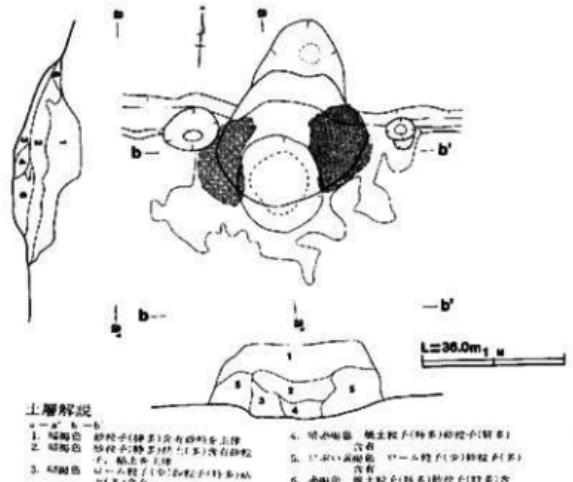
第15図 第6号住居址カマド実測図



第16図 第6号住居址出土遺物実測図

第9号住居址（図17～19）

本住居址は、調査区の北部中ほどB4区 d3, a4, a5, e3, e4に確認され、南東コーナーは第11号住居址の約70%を削除し構築されている。本址は第11号住居址より新しい造構である。北側には第5号土壇、第8号土壇が接しており、北側約2mには第7号住居址、北東0.5mには10号住居址が、南西4.0mには第12号住居址が検出されている。本址は、隅丸長方形の平面形を呈しており、主軸方向はN-1-Eで、規模は長軸6.90m、短軸6.35m、面積39.0m²を測り、壁高は40cm～

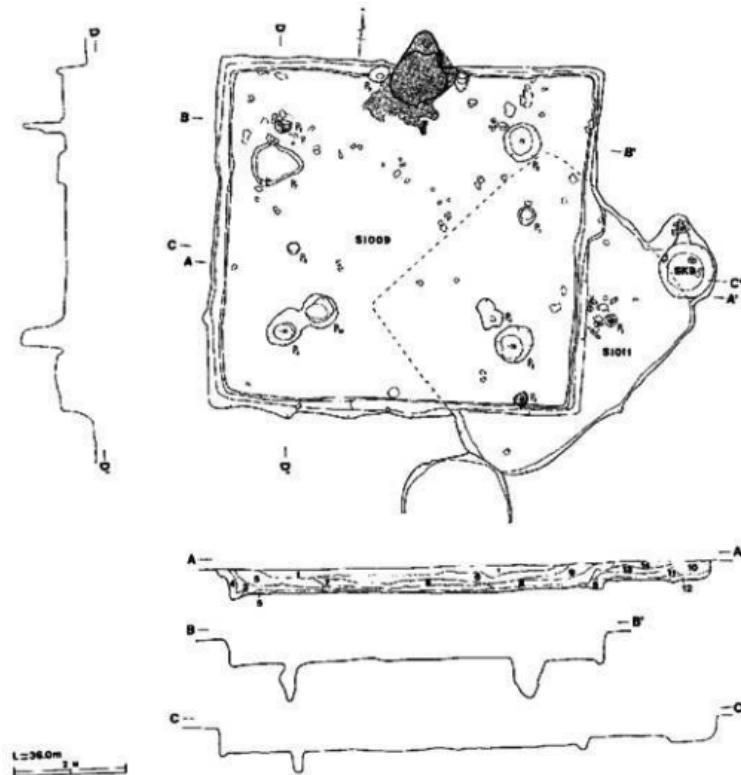


50cmほどで、壁は垂直に立ち上がり、壁下には幅15cm、深さ8cm内外の「U」字形をした壁溝がカマド部を除いて廻っている。床面は暗褐色を呈し硬く踏み固められた状態を呈している。北東床面から炭化物を出土していることから、本址は火災に遭遇していると思われる。ピットは11個所確認され、P1～P4は主柱穴と考えられる。

第18図 第9号住居址カマド実測図

た。覆土は14層からなり自然堆積を示している。上層は暗褐色土で極少量のローム粒子を含有し、中層は暗褐色土で多量のローム粒子、少量のローム粒子を含み、下層は暗褐色土、極暗褐色土で多量のローム粒子、ロームブロックを含んでいる。カマドは北壁の中央から東よりに付設され、規模は長径150cm、短径122cmで、北壁を78cm幅で、65cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径45cm、短径40cmほどで円形に掘り廻められている。袖部は黒色土混りの沙質土上に構築されている。出土遺物は土師器を中心で、須恵器は壺などの破片が数点出土している。土師器の完存率の良好な物をあげると、カマド内とその付近から壺2個（図19-5・6）、支脚2個体分、土瓦、床面から壺（図19-7）、覆土から壺2個（図19-4・8）と他に甕（図19-2・3）、壺、器台などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は紙石（図19-9）、輕石、粘土と弥生式土器の十王台式に比定される破片を数点出土している。

本址は出土遺物等から鬼高窯に比定される遺構と思われる。



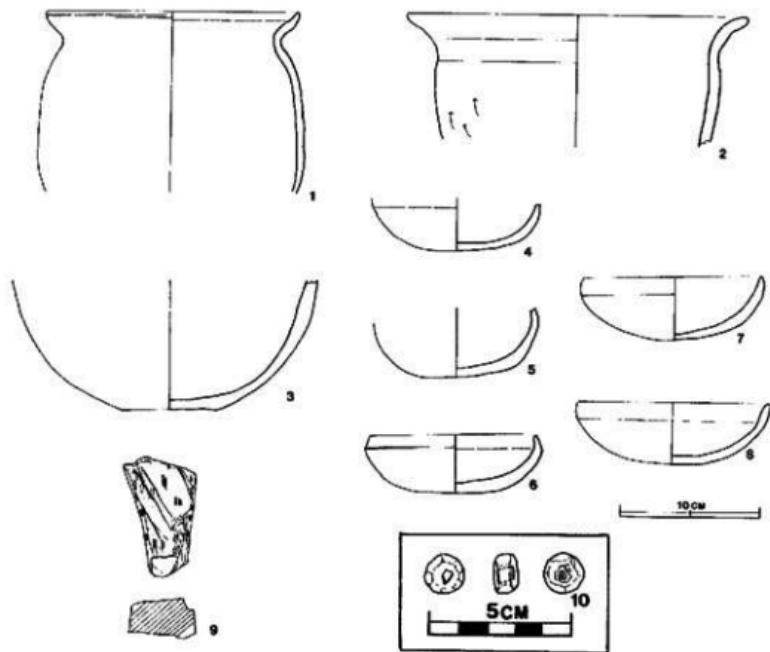
上層解説

A-A'

1. 黄褐色 ローム粒子(極少)含有
2. 黄褐色 ローム粒子(少)炭化物(極少)含有
3. 暗褐色 ローム粒子(極少)炭化物(極少)燒土粒(極少)含有
4. 黄褐色 ローム粒子(多)ローム上(少)含有
5. 暗褐色 ローム上(多)含有
6. 暗褐色 ローム粒子(多)ロームブロック(少)含有

7. 暗褐色 ローム粒子(少)含有
8. 暗褐色 ローム粒子(多)含有
9. 暗褐色 ローム粒子(少)燒土粒子(極少)含有
10. 暗褐色 ローム粒子(少)含有
11. 暗褐色 ローム粒子(少)含有
12. 黄褐色 ローム粒子(多)ローム土(多)含有
13. 暗褐色 ローム粒子(少)含有
14. 暗褐色 燃土(多)粘土壤、粘土粒子含有

第17図 第9・11号住居址実測図

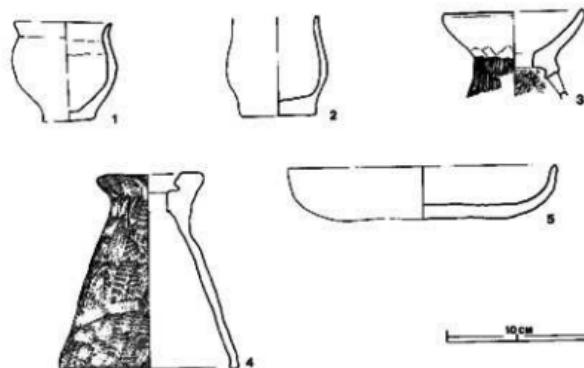


第19図 第9号住居址出土遺物実測図

第11号住居址（図17・20）

本住居址は、調査区の北部中ほどB 4区 d 4, d 5, e 3, e 4, e 5, f 4に確認され、第9号住居址が本址の65%を削除している。西コーナーには第9号土壤が複合して、本址は第9号住居址、第9号土壤より古い遺構である。東側0.5mには第8号住居址が、南東1.0mには第11号土壤が検出されており、南コーナーには第10号土壤が接している。南東壁と南西、北東の一部を残して他は確認することができなかった。本址は堆定で隅丸長方形を呈し、主軸方向はN—45°—Eで 規模は長軸4.80m、短軸は4.40mで、壁高は約30cm内外である。壁は垂直に立ちあがっており、壁溝は有しておらず、床面は平坦で硬い褐色土である。炉址は確認できなかった。P 1・P 2は主柱穴と思われるが、他の柱穴は検出することができなかった。覆土は4層からなり、第9号住居址と第9号土壤に削除されている以外は自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で少量の

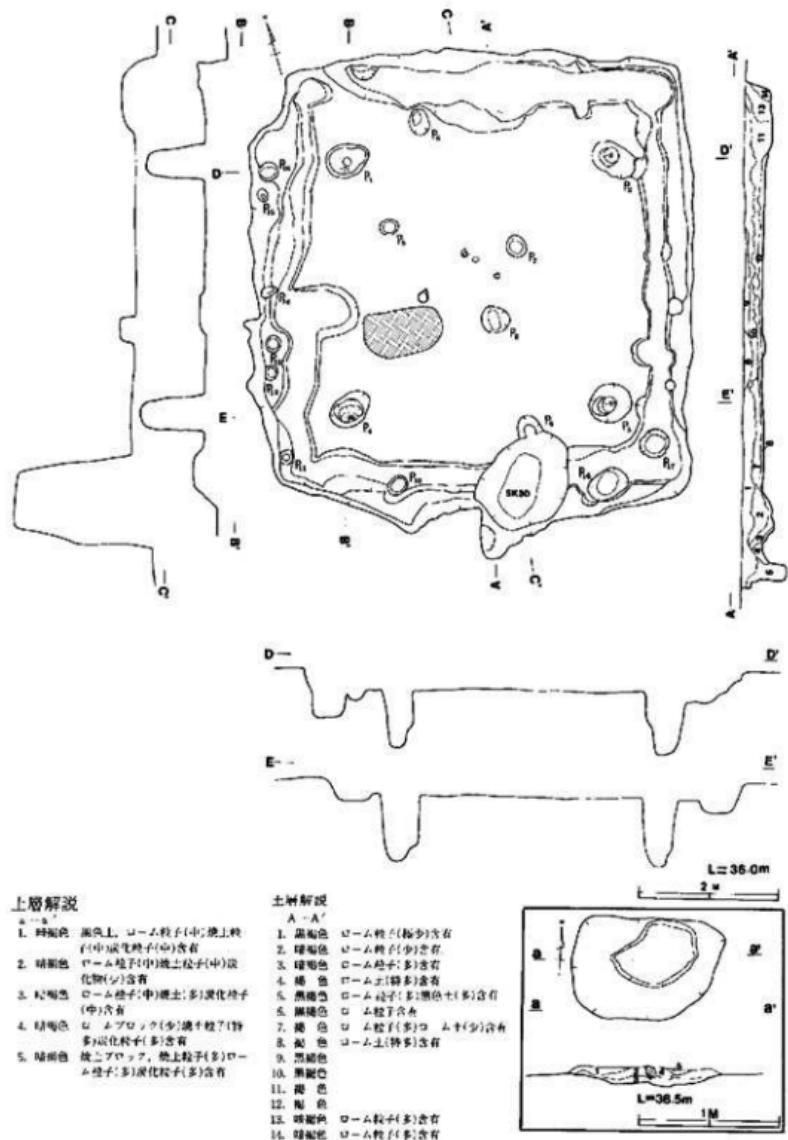
ローム粒子と焼土粒子、焼土塊を含み、下層は褐色土で多量のローム粒子、ローム土を含んでいる。出土遺物は土師器が中心であり、完存率の良好なものを上げると、南東部床面直上から小型壺（図20-1）、北東部P1付近床面とその直上から支脚（図20-4）、小型壺（図20-2）、器台（図20-3）を出土し、他は器台、環、高杯、壺などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は、北部床面から砥石を出土している。本址は出土遺物等から古墳時代の五傾期に比定される遺構と思われる。



第20図 第11号住居址出土遺物実測図

第12号住居址（図21・22）

本住居址は、調査区の北部中ほどB3区e0, f0, B4区e1, e2, f1, f2に確認され、北西1.2mには第25号住居址が、西側4.0mには第9号住居址が、西側4.5mには第26号住居址と第31号住居址が検出されている。本址は隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向N-16°-Eで、規模は長軸6.52m、短軸6.32m、面積22.4m²を測り、壁高は18cm~36cmほどである。壁は垂直に立ち上っており、壁下には幅30cm、深さ約15cmの壁溝が廻っている。床面の中央部は硬く踏み固められた状態を示しているが、壁にそって50cm~100cmほどは軟らかい。炉址は中央から西よりに位置し、規模は長径108cm、短径72cmを測り、不整梢円形の焼土の広がりを確認し、深さ25cmほど皿状に掘り窪めた内部には焼上がりが充満していた。ピットは18個所確認されP1~P8は主柱穴と思われる。南壁際東よりに複合している第30号土壤の規模は、長径150cm、短径115cm、深さ163cmを測り不整梢円形を呈している。第27号土壤、第28号土壤、第31号土壤と同じ性格の土壤



第21図 第12号住居址・第30号土壌実測図

と考えられ、等間隔に検出されている。底部に水が湧いており、本址より古い遺構と思われる。覆土は10層からなり自然堆積の状態を示している。上層は極暗褐色土で極少量のローム粒子を含み、下層は暗褐色土・褐色土で、特に多量のローム土を含んでいる。出土遺物は、土師器が主で中央部床面から鉢（図22-2）南東部床面上直から壺口縁部（図22-1）を出土し、他は高壙などの破片を數点出土している。その他の出土遺物は軽石、鐵滓と弥生式土器の十王台式より古式の破片（図22-1-5）。他は十王台式に比定されるものと思われる破片を出土している。

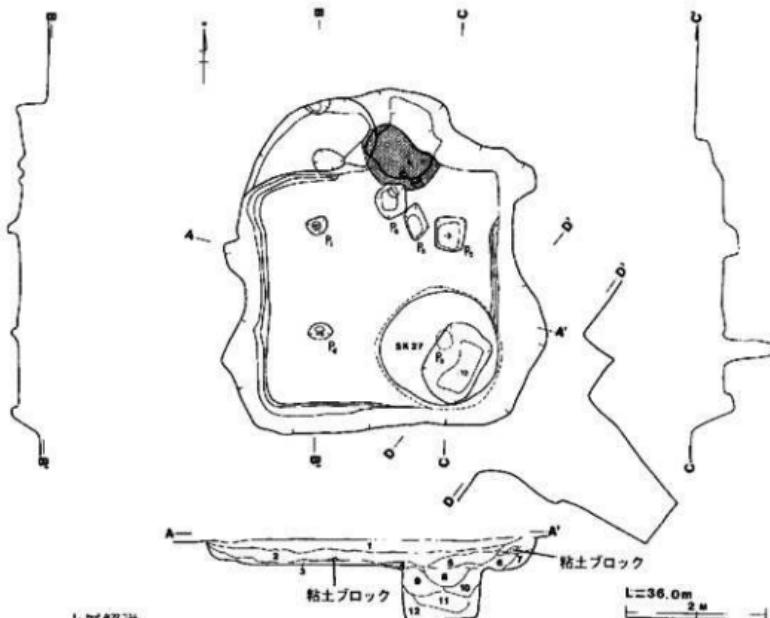
本址は出土遺物等から古墳時代五領期に比定される遺構と思われる。



第22図 第12号住居址出土遺物実測・拓影図

第14号住居址(図23~25)

本住居址は、調査区の北東部B4区g3, g4, h3, h4に確認され、東側1.5mには第16号住居址が検出されている。本址は隅丸正方形の平面形を呈し、主軸方向はN-1.5°-Wで規模は長軸3.90m、短軸3.70m、面積17.0m²を測り、北壁の西側の張りだしは、壁面が軟らかいための避けすぎである。壁はゆるやかに外傾して立ち上がっている。壁下には、東・北壁の東側をのぞき幅18cm、深さ10cm前後の壁溝を有している。床面は暗褐色を呈し硬く踏み固められた状態を示している。ピットは6個所確認されP1~P4は正柱穴と考えられる。南東コーナーの第27号土壤B



土層解説

A-A'

- | | | | |
|--------|---------------------------------|---------|-----------------------------|
| 1. 暗褐色 | ローム粒子(多)焼土粒子(少)
炭化物(微)含む | 7. 暗褐色 | ローム粒・小ブロック(多)炭化
粒含有。粘性なし |
| 2. 暗褐色 | ローム粒子(多)焼土粒子(少)炭
化物(微)含有 | 8. 極暗褐色 | ロームブロック、ローム粒子
(少)含有 |
| 3. 褐色 | ローム粒(多)焼土粒子(少)炭化
物(少)含有。粘性なし | 9. 暗褐色 | ローム粒子(多)含有 |
| 4. 暗褐色 | ロームブロック、ローム粒、
焼土粒(少)炭化粒含有 | 10. 暗褐色 | ロームブロック、ローム粒子(多)
含有 |
| 5. 暗褐色 | ローム粒(多)焼土粒(少)炭化粒
(多)含有。粘性なし | 11. 黒褐色 | ローム粒子・小ブロック含有 |
| 6. 暗褐色 | ローム粒・小ブロック(多)燒土
粒(微)含有 | 12. 暗褐色 | ローム粒子(多)ロームブロック
(少)含有 |

第23図 第14号住居址 第27号土壤実測図



第24図 第14号住居址カマド実測図

は第31号土壇、第30号土壇、第28号土壇と同じ性格のものと思われ、規模は長径17.5cm、短径16.5cm、深さ25cmで橢円形の平面形を呈し、底部からは水が湧いている。

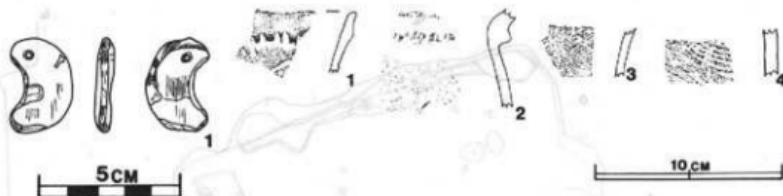
本土壇の上部に長径167cm、短径160cm、深さ58cmの円形形状を呈する土壇第27号土壇Aが複合している。第27号土壇Aの内部から本址の南東部の柱穴を確認しているので、本址は土壇より新しい造構と思われる。方形の第27号土壇Bは、円形の第27号土壇Aより古い造構と思われる。本址の覆土は9層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色上で多量のローム粒子と極少量の焼土粒子、炭化粒子を含み、下層は褐色土で多量のローム粒子、少量の焼土粒子、少額の炭化粒子を含んでいる。

カマドは、北壁の中央部に付設され、規模は長径99cm、短径94cmで、北壁を72cm幅で、55cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径57cm、短径49cmで橢円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で、カマドは南向きに構築され、袖部から坯片を出土しているが支脚として使用されたものと思われる。他に焚口部と燃焼部から土師器片を数点出土している。

出土遺物は少量で、南壁際の焼土混りの床面より、内黒の坏を出土し、他に土師器の破片数点と須恵器の細片を多数出土している。その他の出土遺物は、弥生式土器片で十手台式より古い型式の破片数点と、壁際から鉄鏃と思われるものを出土し、石製の勾玉（図25-1）を覆土から出土している。本址は、出土遺物等から古墳時代の真間期に比定される造構と思われる。

土層解説

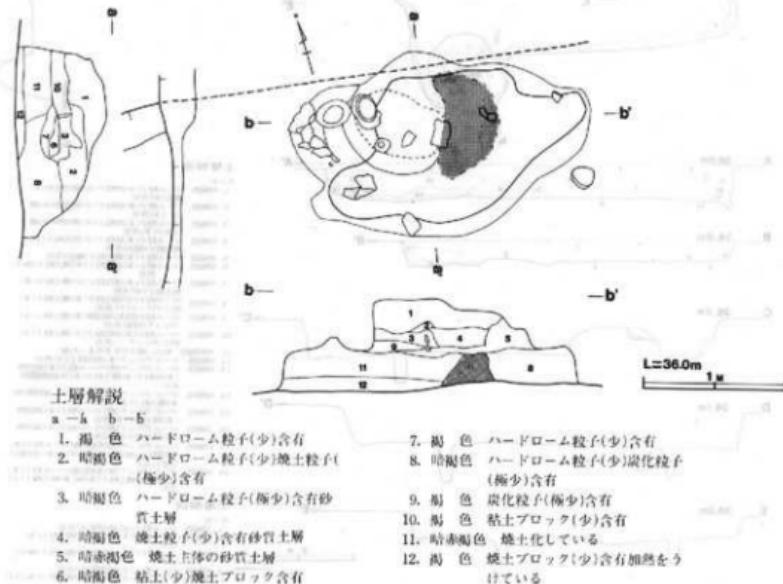
1. 黒褐色 ローム粒子(極少)燒土粒子(少) 砂粒(多)灰(少)含有
2. にほい黄褐色、ローム粒(極少)炭化粒(少)燒土粒子(特多)食草筋土(特多)灰(多)含有
3. 暗褐色 土粒子(特多)燒土(特多)含有
4. 暗褐色 ローム粒子(多)炭化粒(少)含有
5. 褐色 燃土粒子(少)燒土(少)含有
6. 黑褐色 燃土粒子(特多)含有燒土化している
7. 黑褐色 燃土粒子(少)燒土(少)含有燒土(多)含有灰(多)含有が多量に含まれブロック状になっているものもある。
8. 黑褐色 炭化粒(少)燒土粒子(特多) 灰(少)含有燒土(多)含有燒土が焼け、ブロックになっている物もある
9. 黑褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(少)燒土粒子(多)燒土粒子(多)灰(多)含有
10. 黑褐色 灰(少)燒土粒子(特多)燒土粒子(少)灰(多)含有
11. 暗褐色 ローム粒子(少)燒土(少)含有灰(少)含有
12. 黑褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(極少) 灰(少)含有



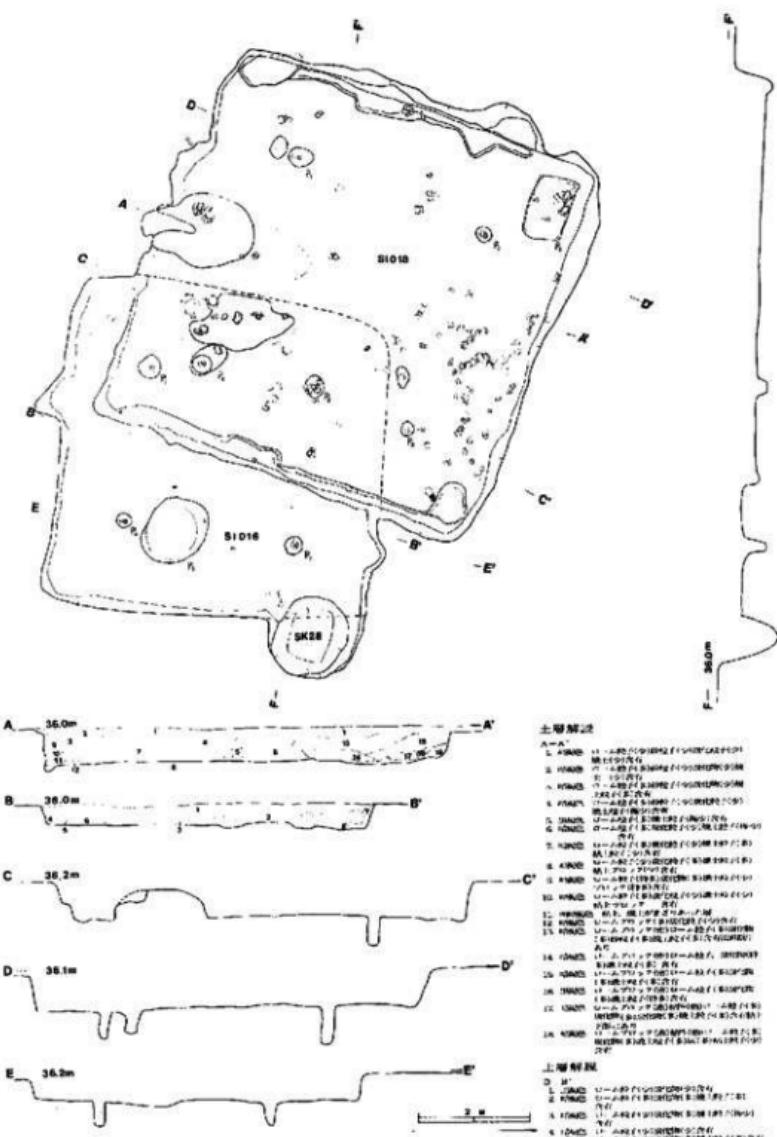
第25図 第14号住居址出土遺物実測・拓影図

第16号住居址（図26～28(1)(2)）

本住居址は調査区の北東部東側 B4区 g4, g5, h4, h5に確認され、北東コーナーを中心に約50%ほど第18号住居址に切り込んでいる。その部分は第18号住居址の床面より約25cm、上部に貼り床をして構築している。本址は第18号住居址より新しい遺構で、カマドが第18号住居址の南西部に検出されている。南東コーナーには、第28号土壌が複合しており、規模は長径150cm、短径120cm、深さ215cmを測り、底部から水が湧いている。本址より古い遺構で第27号土壌、第30号土壌、第31号土壌と同じ性格の土壌である。西側1.5mには第14号住居址が、南側1.8mには第

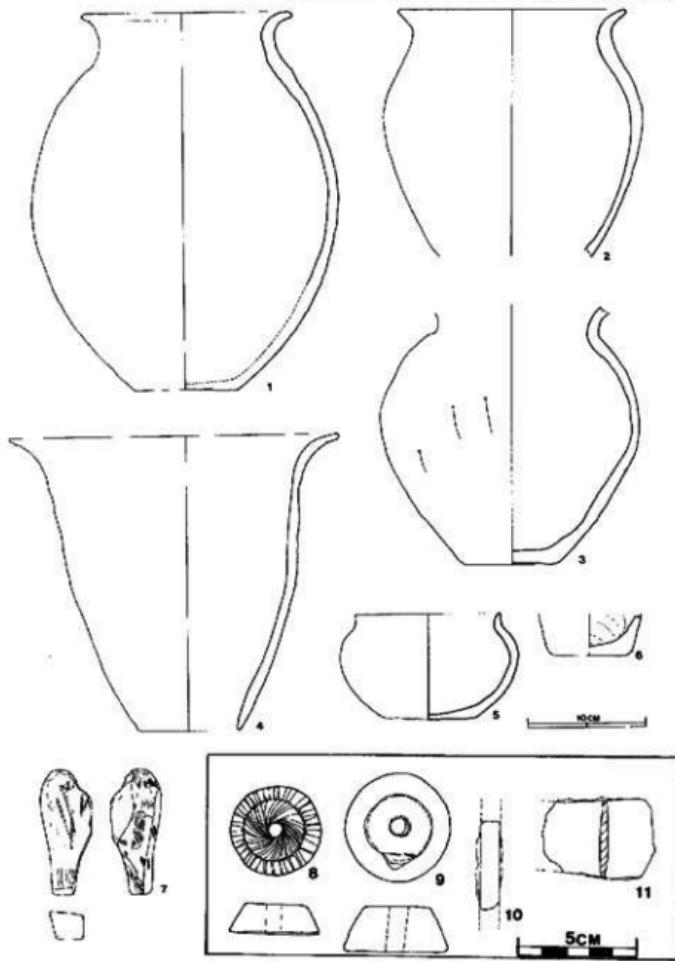


第27図 第16号住居址カマド実測図

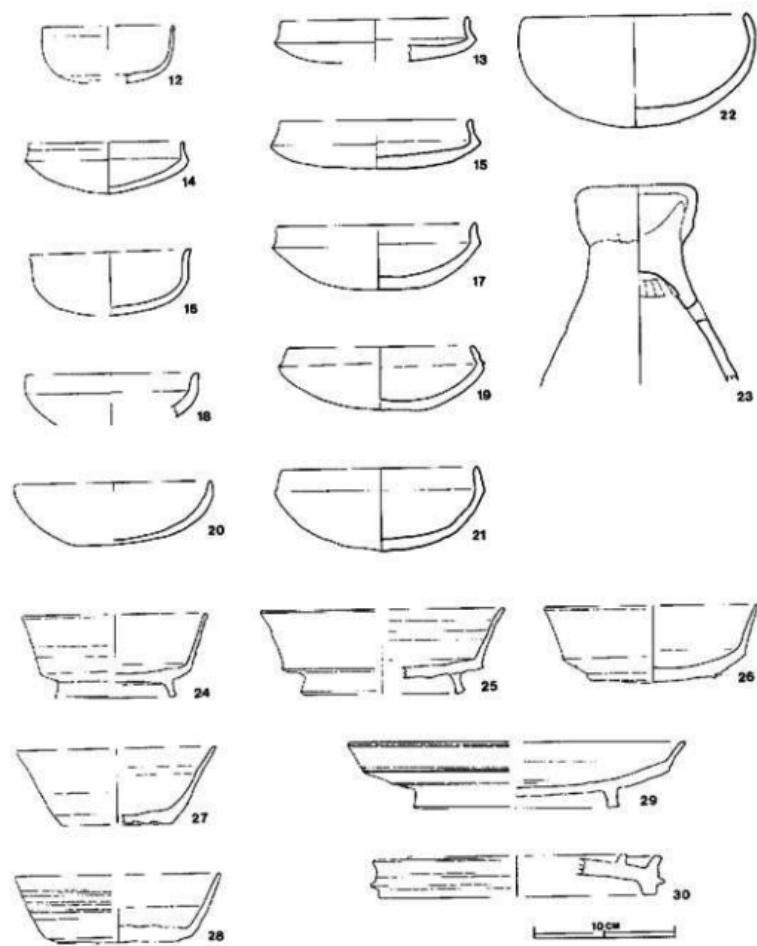


第26圖 第16・18号住居址・第28号土壤実測図

41号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN—S—Fで、規模は長軸5.88m、短軸5.84m、面積31.0m²を測り、正方形の平面形を呈している。北壁と東壁の一部は確認する事ができないが、西・南壁と東壁の一部の壁高は約32cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。駆溝はなく床面は平坦で硬く、南東部より炭化材を出土しており、本址は火災に遭遇していると思われる。ピットは5箇所確認されP1～P4は主柱穴と考えられる。覆土は8層からなり自然堆積の状態を示しており、上層は暗褐色土で少量のローム粒子、極少量の炭化粒子を含み、下層は暗褐色土で少量の



第28図(1) 第16号住居址出土遺物実測図



第28図(2) 第16号住居址出土遺物実測図

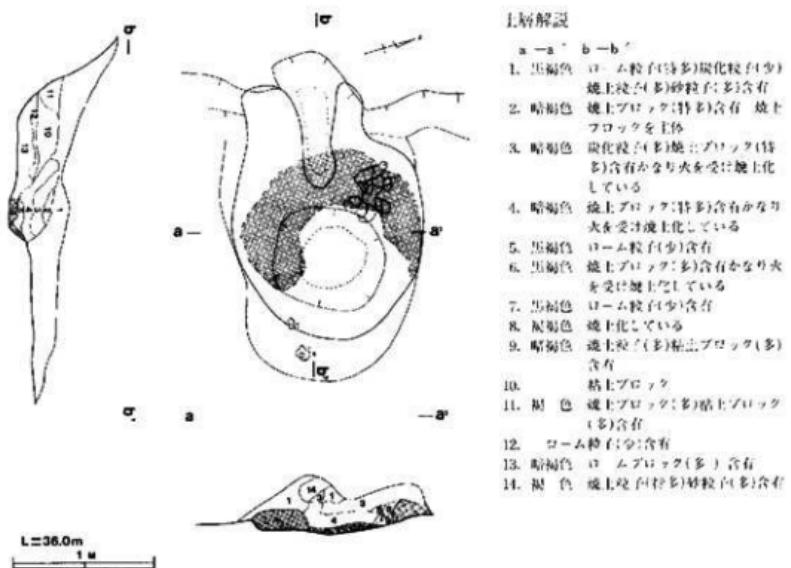
ローム粒子、極少量の焼土粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央に付設され、規模は長径145cm、短径113cmで燃焼部は長径62cm、短径46cmを測り、椭円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で、カマドは南南西向きに構築されている。燃焼部から土師器の甕（図28-1）、陶片（図28-4）、环1個（図28-19）を出土している。

出土遺物は土師器が中心で須恵器を数点共伴している。土師器はカマド付近から环片、甕2個体分（図28-2・3）、中央部覆土から环3個体分（図28-13・14）を出土し、他に环2個体分（図28-16・18）、碗（図28-5）、手握土器（図28-6）と支脚（図28-23）を出土し、甕、环、支脚、器台、高片などの細片を多数出土している。須恵器は東壁付近床面より环（図28-12）、南東コーナー床面上より环片（図28-26）、他に盤（図28-29）、円硯片（図28-30）、环3個体分（図28-25・27・28）と細片等を多数出土している。その他の出土遺物等は、覆土から十王台式に比定される弥生式土器片を数点と砥石（図28-7）、刀子などの鉄製品2点（図28-10・11）、紡錘車（図28-8・9）を出土している。本址は出土遺物等から古墳時代鬼高期に比定される遺構と思われる。

第18号住居址（図26・29・30(112)）

本住居址は、調査区の北西部東側B4区 f4, f5, f6, g4, g5, g6, h4, h5, h6に確認され、西コーナーに第16号住居址が複合しており、本址は第16号住居址より古い遺構である。西側1.9mには第14号土塙が、北コーナーから1.8mには第10号土塙が、2.0mには第11号土塙が検出されている。本址の主軸方向はN-63°-Wで、規模は長軸7.30m、短軸7.05m、面積46.6m²を測り、隅丸長方形の平面形を呈している。壁は垂直に立ちあがり、壁高は30cm~65cmほどで、南壁と北壁には幅13cm、深さ6cm内外の壁溝を有している。床面は暗褐色で硬く平坦である。北・南コーナーに炭化材が出土しているので、本址は火災に遭遇していると思われる。ピットは、8個所確認され、P1~P4は上柱穴と考えられる。東コーナーのP5は貯蔵穴で規模は長径115cm、短径73cm、深さ25cmを測り長方形を呈している。

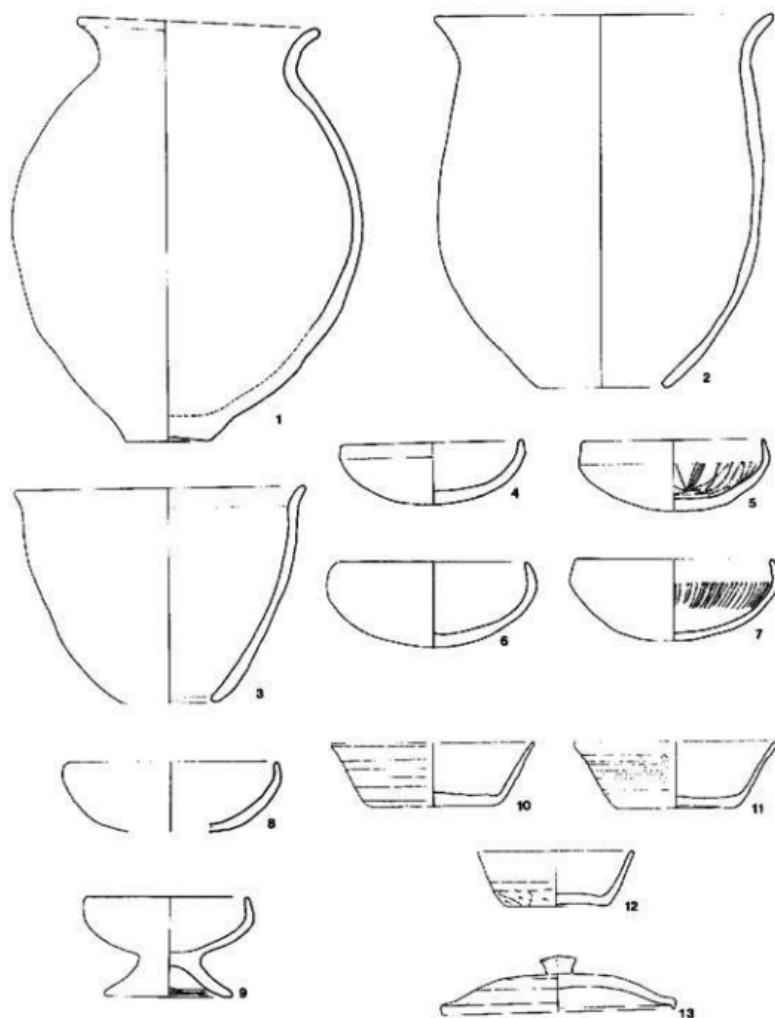
覆土は、18層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で少量のローム粒子、砂粒、炭化



第29図 第18号住居址カマド実測図

粒子、焼土粒子を含有し、中層は暗褐色土で多量のローム粒子、焼土粒子と少量の炭化粒子を含み、下層は暗褐色土で少量のローム粒子、粘土ブロック、多量の炭化粒子、焼土粒子を含んでいる。カマドは西壁のはば中央に付設され、規模は長径180cm、短径130cm程度、西壁を47cm幅で、25cmほど堀り込んで煙道としている。燃焼部は長径52cm、短径38cmで深さ10cmほど不整格円形に掘り溝めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土でカマドは南東向きに構築されている。燃焼部から土師片を数点出土している。東壁中央に焼土と白色粘土の広がりを確認し、その付近から鉄滓を多量に出土したので、カマドもしくは小鍛冶に関する遺構と考え精査をしたが破壊が進んでおり、そのプランを把握することは出来なかった。出土遺物は、土師器を中心に須恵器を共存している。土師器の完存率の良好な物をあげると、北東壁付近床面から甕2個体分(図30-2)、北西壁付近床面から 瓢片(図30-1)、甕(図30-8)を、他に覆土から高坏(図30-10)、手捏 土器2個と甕、甕(図30-5)、器台などの破片を多数出土している。須恵器は覆土中から甕、4個体分(図30-12) 盖(図30-13)などと、他に、蓋、坏などの細片を多数出土している。その他の出土遺物は、石製模造品、鐵製斧、覆土から鐵鏃と刀子片、羽口3個と鉄滓を多数出土している。

本址は出土遺物等から、古墳時代鬼高郡に比定される遺構と思われる。



10 CM

第30圖(1) 第18號住居址出土遺物實測圖



第30図 (2) 第18号住居址出土遺物実測図

第19号住居址 (図31・33 (1)~(4))

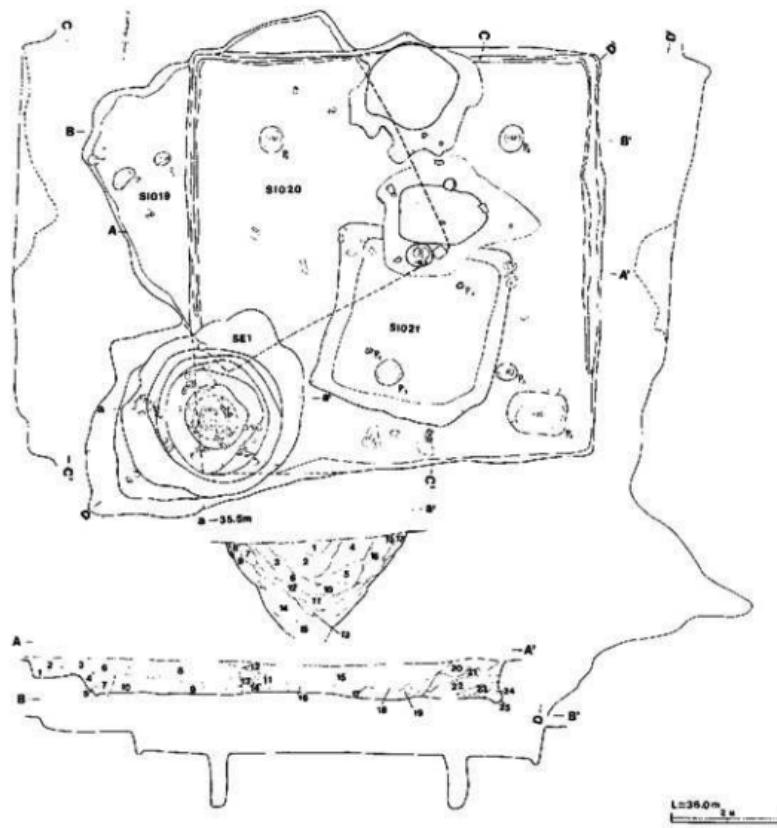
本住居址は、調査区の北端 A 4 区 g 2, g 3, g 4, h 2, h 3, h 4 に確認され、本址は第20号住居址の北西コーナーに大きく切り込んでおり、北西壁と南西壁・北東壁の一部しか残存していない。

南コーナーには第1号井戸状造構が、東コーナーには第21号住居址が複合している。本址は第20号住居址、第21号住居址、第1号井戸状造構より古い造構である。本址は、推定で方形の平面形を呈しており、主軸方向は N-34°-W で規模は長辺 5.13m、短辺 4.80m、面積 22.7m² を測り、壁高は約 30cm ほどである。壁は緩やかに外傾して立ちあがっている。壁溝は有していない。床面は暗褐色土で軟らかく炉址は不明である。ピットは 3 個確認され、P 1 は主柱穴と思われる。覆土は 4 層からなり自然堆積の状態を示している。全体的に褐色土・暗褐色土で、ローム粒子、炭化粒子を含有している。

出土遺物は床面から土師器の壙 (図33-36)などの破片 2 点のみで、本址の時期を決定しうるにたりる遺物は出土していないけれど、ほぼ古墳時代の五領期に比定される造構と思われる。

第20号住居址 (31~33 (1)~(4))

本住居址は、調査区の北端 A 4 区 g 3, g 4, g 5, h 3, h 4, h 5, i 3 に確認され、北西コーナーには第19号住居址が、南西コーナーには第2号井戸状造構が、南東コーナーには第1号住



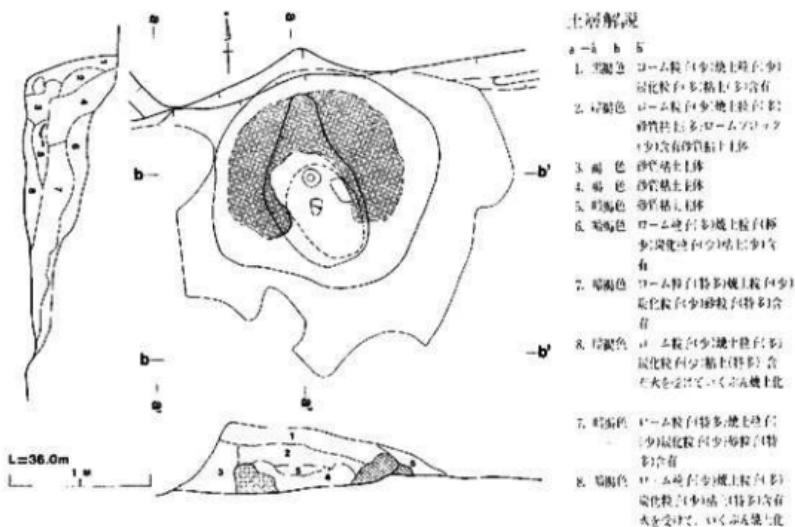
上層解説

1. 間口 12.5m (12間)合計
2. 間口 8.5m (8間)合計
3. 横幅合計 12.5m (12間)合計壁面積(外壁面積)
4. 延床面積 12.5m (12間)合計延床面積(外壁面積)
5. 天井高さ 12.5m (12間)合計天井高さ
6. 間口 12.5m (12間)合計
7. 間口 8.5m (8間)合計
8. 横幅合計 8.5m (8間)合計
9. 延床面積 8.5m (8間)合計延床面積(外壁面積)
10. 天井高さ 8.5m (8間)合計天井高さ
11. 横幅合計 8.5m (8間)合計壁面積(外壁面積)
12. 延床面積 8.5m (8間)合計延床面積(外壁面積)
13. 天井高さ 8.5m (8間)合計天井高さ
14. 間口 8.5m (8間)合計
15. 横幅合計 8.5m (8間)合計
16. 延床面積 8.5m (8間)合計延床面積(外壁面積)
17. 天井高さ 8.5m (8間)合計天井高さ
18. 横幅合計 8.5m (8間)合計壁面積(外壁面積)
19. 延床面積 8.5m (8間)合計延床面積(外壁面積)
20. 天井高さ 8.5m (8間)合計天井高さ
21. 間口 8.5m (8間)合計延床面積(外壁面積)
22. 間口 8.5m (8間)合計延床面積(外壁面積)
23. 横幅合計 8.5m (8間)合計延床面積(外壁面積)
24. 延床面積 8.5m (8間)合計延床面積(外壁面積)
25. 天井高さ 8.5m (8間)合計天井高さ
26. 間口 8.5m (8間)合計
27. 横幅合計 8.5m (8間)合計
28. 延床面積 8.5m (8間)合計延床面積(外壁面積)
29. 天井高さ 8.5m (8間)合計天井高さ
30. 間口 8.5m (8間)合計
31. 横幅合計 8.5m (8間)合計
32. 延床面積 8.5m (8間)合計延床面積(外壁面積)
33. 天井高さ 8.5m (8間)合計天井高さ

上層解説

1. 間口 12.5m (12間)合計
2. 間口 8.5m (8間)合計
3. 横幅合計 12.5m (12間)合計壁面積(外壁面積)
4. 延床面積 12.5m (12間)合計延床面積(外壁面積)
5. 天井高さ 12.5m (12間)合計天井高さ
6. 横幅合計 8.5m (8間)合計壁面積(外壁面積)
7. 延床面積 8.5m (8間)合計延床面積(外壁面積)
8. 天井高さ 8.5m (8間)合計天井高さ
9. 横幅合計 8.5m (8間)合計壁面積(外壁面積)
10. 延床面積 8.5m (8間)合計延床面積(外壁面積)
11. 天井高さ 8.5m (8間)合計天井高さ
12. 横幅合計 8.5m (8間)合計壁面積(外壁面積)
13. 延床面積 8.5m (8間)合計延床面積(外壁面積)
14. 天井高さ 8.5m (8間)合計天井高さ
15. 横幅合計 8.5m (8間)合計壁面積(外壁面積)
16. 延床面積 8.5m (8間)合計延床面積(外壁面積)
17. 天井高さ 8.5m (8間)合計天井高さ

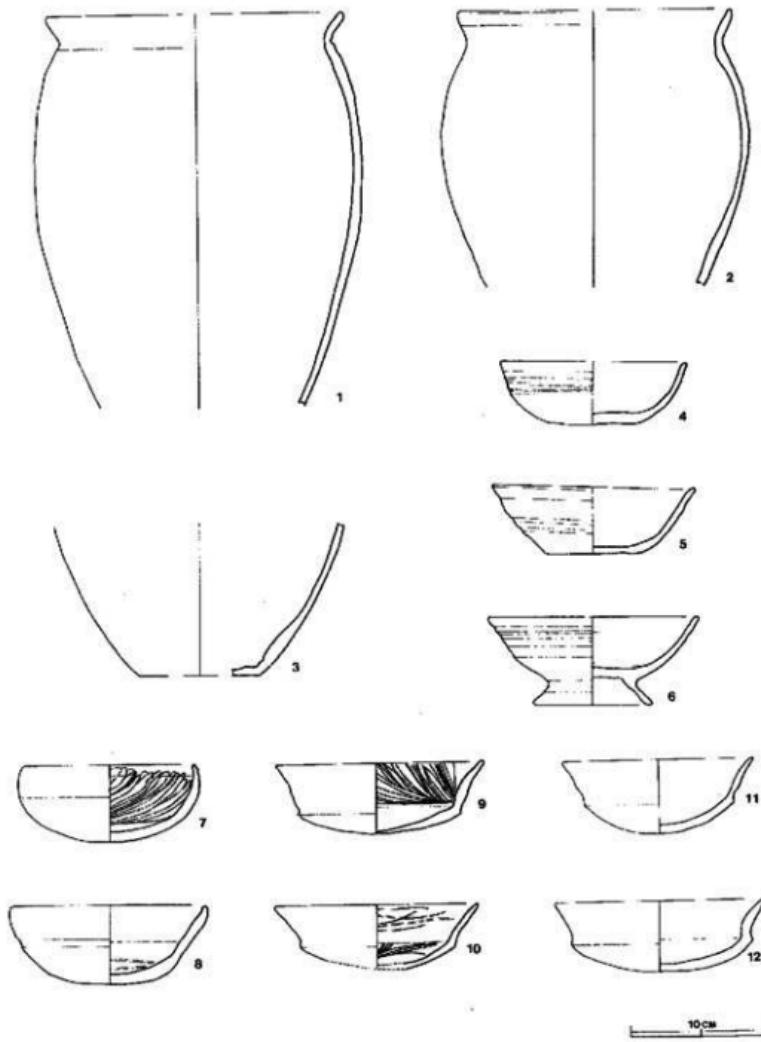
第31図 第19-20-21号住居址・第1号井戸状造構実測図



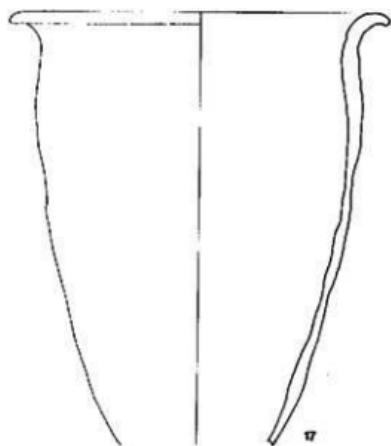
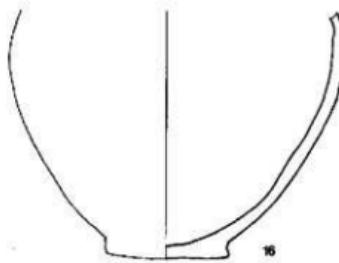
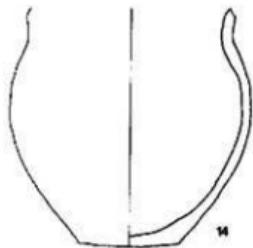
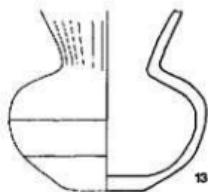
第32図 第20号住居址カマド実測図

居址、第6号住居址が複合し、南部中ほどには第21号住居址が複合している。本址は第1号住居址より古く、第6号住居址、第19号住居址、第21号住居址より新しい遺構である。本址の主軸方向はN-7.5-Wで、規模は長軸7.96m、短軸7.90m、面積48.3m²ほどで隅丸正方形の平面形を呈している。壁高は48cm~70cm内外で垂直に立ちあがっている。床面は褐色で硬く、南壁中央付近・中央部床面から炭化物を出土しているので、本址は火災に遭遇していると思われる。ピットは4個所確認され、P1~P3は上柱穴と考えられるが、南西部のピットは第1号井戸状遺構に切られ不明である。南東コーナーのP4は貯蔵穴と思われ、長径105cm、短径75cm、深さ35cmの不整梅円形を呈している。

覆土は、14層からなり中央部に第21号住居址が南西部に第1号井戸状遺構が切り込んでいるが、他は自然堆積の状態を呈している。上層は黒褐色土で、少量のローム粒子を含み、中層は褐色土で多量のローム粒子、少量のロームブロック、炭化粒子を含み、下層は褐色土で、多量のローム粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央に付設され、規模は長径151cm、短径122cmほどで、北壁を120cm幅で、27cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径70cm、短径40cm、深さ約5cmほど楕円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土層で、カマドは南向きに構築されている。

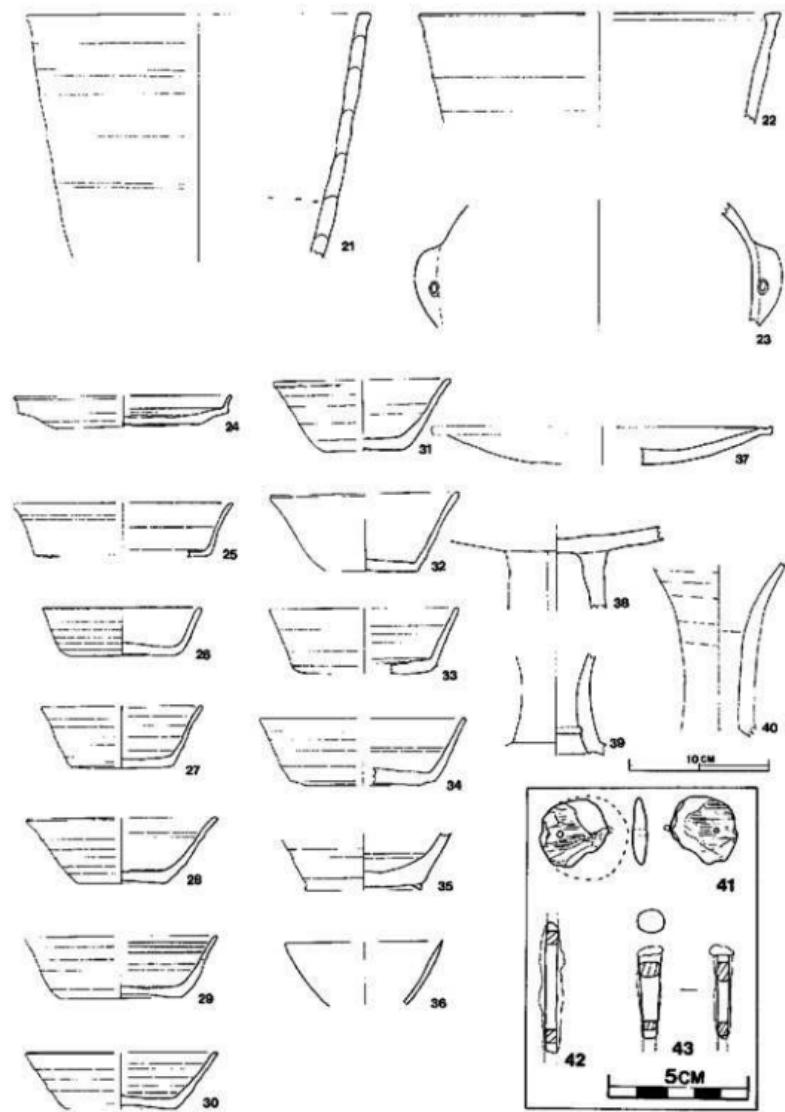


第33図(1) 第19・20・21号住居址・第1号井戸状遺構出土遺物実測図



10 CM

第33図(2) 第19・20・21号住居址・第1号井戸状遺構出土遺物実測図



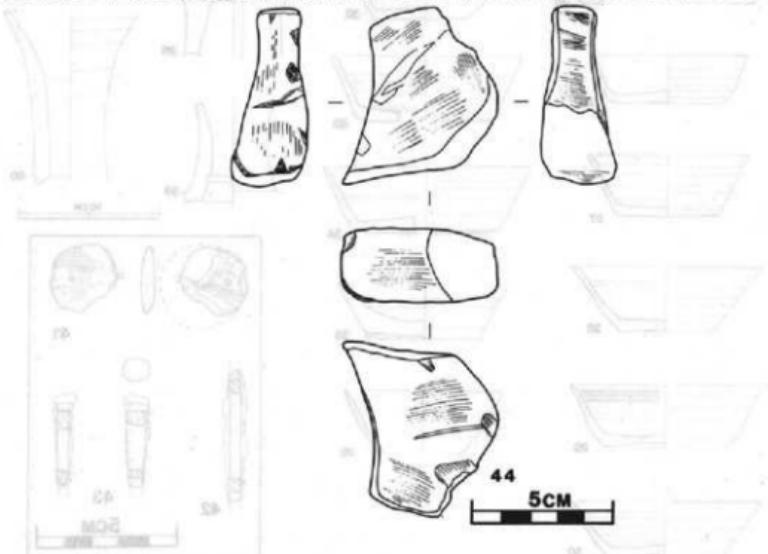
第33図(3) 第19・20・21号住居址・第1号井戸状遺構出土遺物実測図

燃焼部北側、煙道に近いところから土師器の堆、甕口縁部を出土している。出土遺物は、土師器を中心須恵器片を出土している。南西部から甕2個体分(図33-15・16)と坯片(図33-18)を、南壁付近床面から坯4個(図33-7・10・11)他に床面から坯、甕などの細片を数点出土している。須恵器は、覆土から蓋片を出土し、他に細片を数点出土している。

本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

第21号住居址(図31・33(1)(2)(3)(4))

本住居址は、調査区の北端A4区g3,g4,h3,h4に確認され、第20号住居址の中央部よりに構築され、南西0.3mには第1号井戸状遺構が、南1.0mには第1号住居址が、南東1.2mには第6号住居址が検出されている。本址は第19号住居址、第20号住居址より新しい遺構である。本址の主軸方向はN-10°Eで、規模は長軸3.28m、短軸3.03m、面積6.2m²を測り、ほぼ長方形の平面形を呈している。壁は第20号住居址の床面を約1.5cmほど掘り込んで築かれ緩やかに外傾して立ちあがっている。床面は貼り床で硬く踏み固められていた。ピットは4個所確認され、主柱穴と思われるピットは検出できなかった。南壁中央部付近のP3は貯蔵穴と思われ、長径50cm、短径47cm、深さ195cmの不整椎円形を呈している。覆土は9層からなり自然堆積の状態を示している。上層



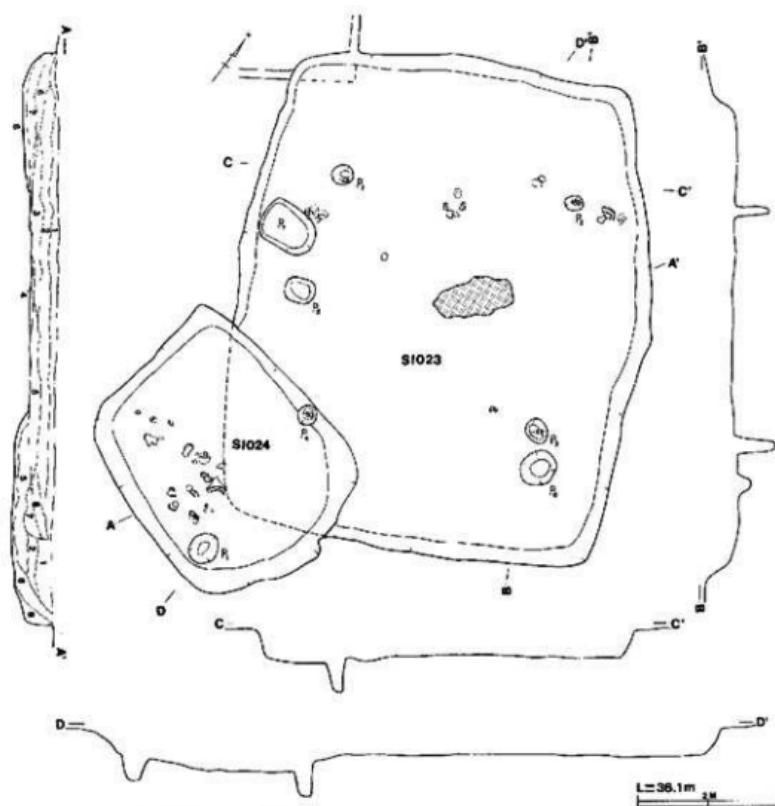
第33図(4) 第19・20・21号住居址・第1号井戸状遺構出土遺物実測図

西原城跡出土物研究会作成：昭和15・16・17年(7)編

は、極暗褐色土で少量のローム粒子、炭化粒子を含み、中層は暗褐色土で多量のローム粒子、白色粘土、極少量の焼土粒子と少量の炭化粒子を含み、下層は極暗褐色土で少量のローム粒子、焼土粒子、白色粘土と炭化物を含んでいる。カマドは北壁の中央に付設され、規模は長径170cm、短径120cmで、燃焼部は長径48cm、短径43cm、深さ5cmほどに円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で、カマドは南向きに構築されているが破壊が進んでいた。出土遺物は、カマドから須恵器の杯（図33-5）、土師器の甌（図33-17）、甕（図33-1）と中央部床面から土師器の甕2個体分（図33-2・3）、他に破片を数点出土している。その他の出土遺物は、カマド際から鉄製品（図33-43）を出土している。本址は出土遺物が少ないのでほぼ国分期に比定される遺構と思われる。

第23号住居址（図34・35）

本住居址は、調査区の中央部B3区j0・B4区j1、C3区a0・b0、C4区a1・a2・b1・b2に確認され、南コーナーは第24号住居址と、西コーナーは第28号住居址と複合している。本址は、第24号住居址、第28号住居址より新しい遺構である。北東2.2mには、第35号住居址が検出されている。本址の上軸方向はN-34°-Wで、規模は長軸7.08m、短軸5.86m、面積34.7m²を測り、隅丸長方形の平面形を呈している。壁高は26cm～42cmを測り、壁は緩やかに外反して立ち上っている。壁溝は有しておらず、床面は平坦で硬く踏み固められている。ピットは7箇所確認され、P1～P4は主柱穴と考えられる。覆土は12層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で多量のローム粒子と砂粒を含み、中層は暗褐色土で、特に多量のローム粒子と、多量の砂粒、少量の炭化粒子を含み、下層は暗褐色土で多量のローム粒子と、少量の焼土粒子を含んでいる。炉址は、本址の中央から東よりに位置し、規模は長径57cm、短径27cm程で橢円形を呈している。燃焼部は皿状に6cmほど掘り窪められており、焼土が充満していた。出土遺物は土師器を中心で、弥生式土器のほぼ十土台式に比定される破片を覆土中より出土している。土師器は、北西部床面より、台付甕片（図35-1）、北壁付近床面より装飾器台片（図35-4）、南西コーナー床面より高环片（図35-3）と、覆土中より、台付甕台部（図35-2）だけを出土している。本址は古墳時代の五傾期に比定される遺構と思われる。



土層解説

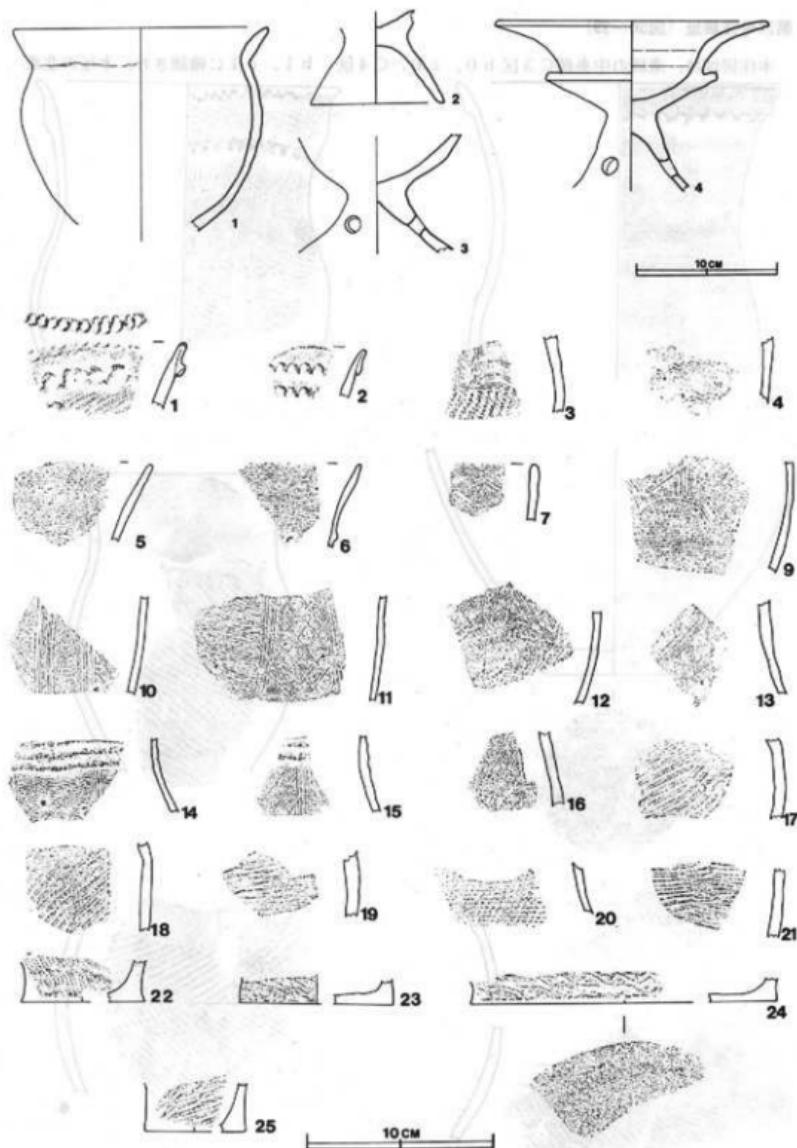
- A-A'
1. 黒褐色 コーム粒子(多)炭化粒子(極少)含有
 2. 暗褐色 コーム粒子(多)炭化粒子(極少)含有
 3. 暗褐色 ローム粒子(少)ローム小ブロック(極少)炭化粒子(少) 滲土粒子(極少)含有
 4. 黑褐色 ローム粒子(少)砂粒子(少)炭化粒子(少)含有
 5. 暗褐色 ローム粒子(極少)砂粒子(極少)燒土粒子(極少)含有
 6. 暗褐色 ローム粒子(少)砂粒子(少)含有
 7. 暗褐色 ロームブロック(少)コーム粒子(中)燒土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
 8. 黑褐色 ローム粒子(極少)砂粒子(極少)含有
 9. 暗褐色 ローム粒子(少)砂粒子(極少)燒土粒子(極少)含有

L=36.0m 1M

土層解説

- B-B'
1. 棕褐色 (1) ム程子(極少)炭化粒子(多) 滲土粒子(特多)砂粒子(少)含有
 2. 赤褐色 ロームが焼土化。かたくだらざらしている

第34図 第23・24号住居址実測図

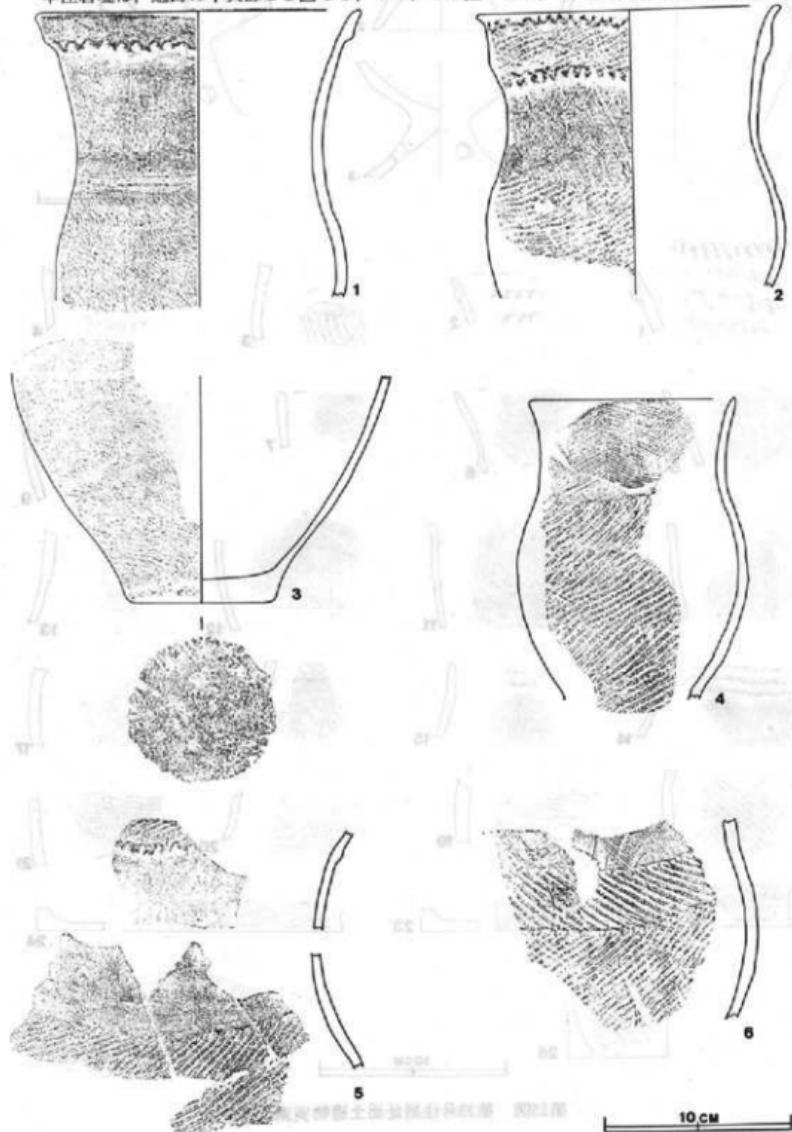


第35図 第23号住居址出土遺物実測・拓影図

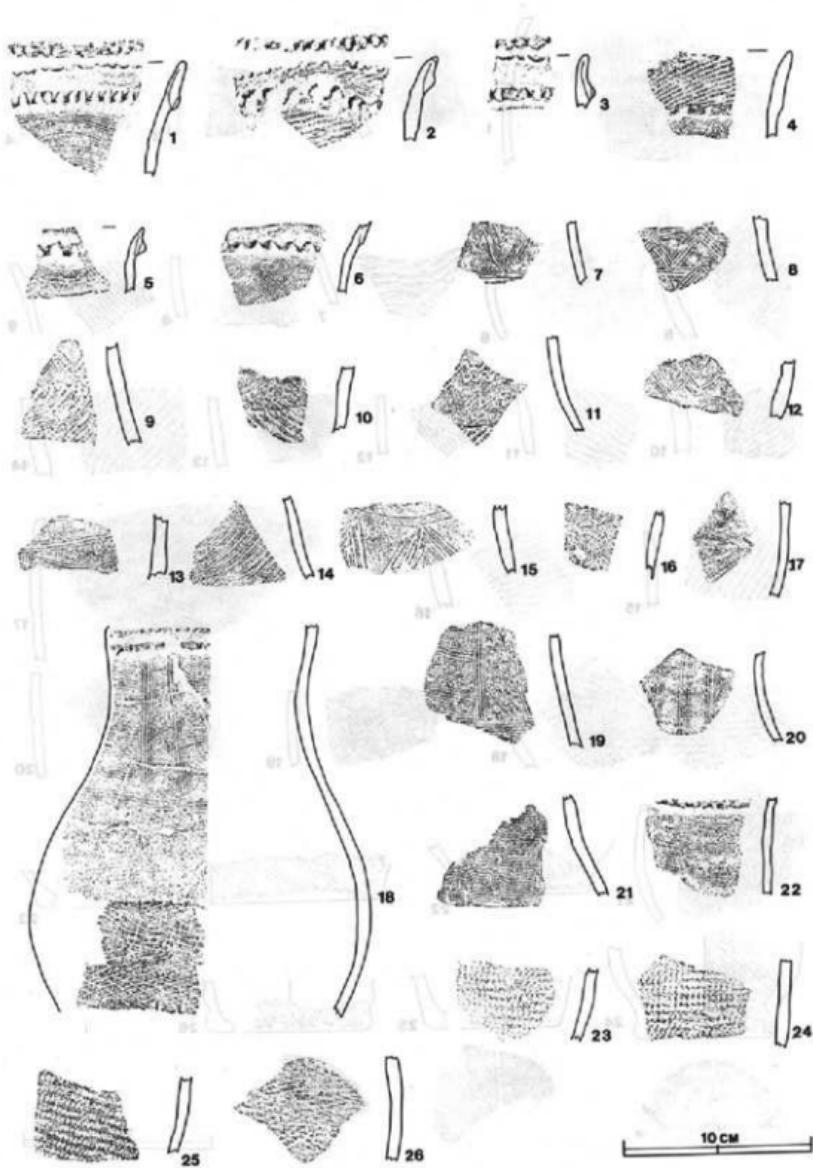
器皿類・陶質骨瓢土出目器・骨器類・貝器類

第24号住居址（図36～39）

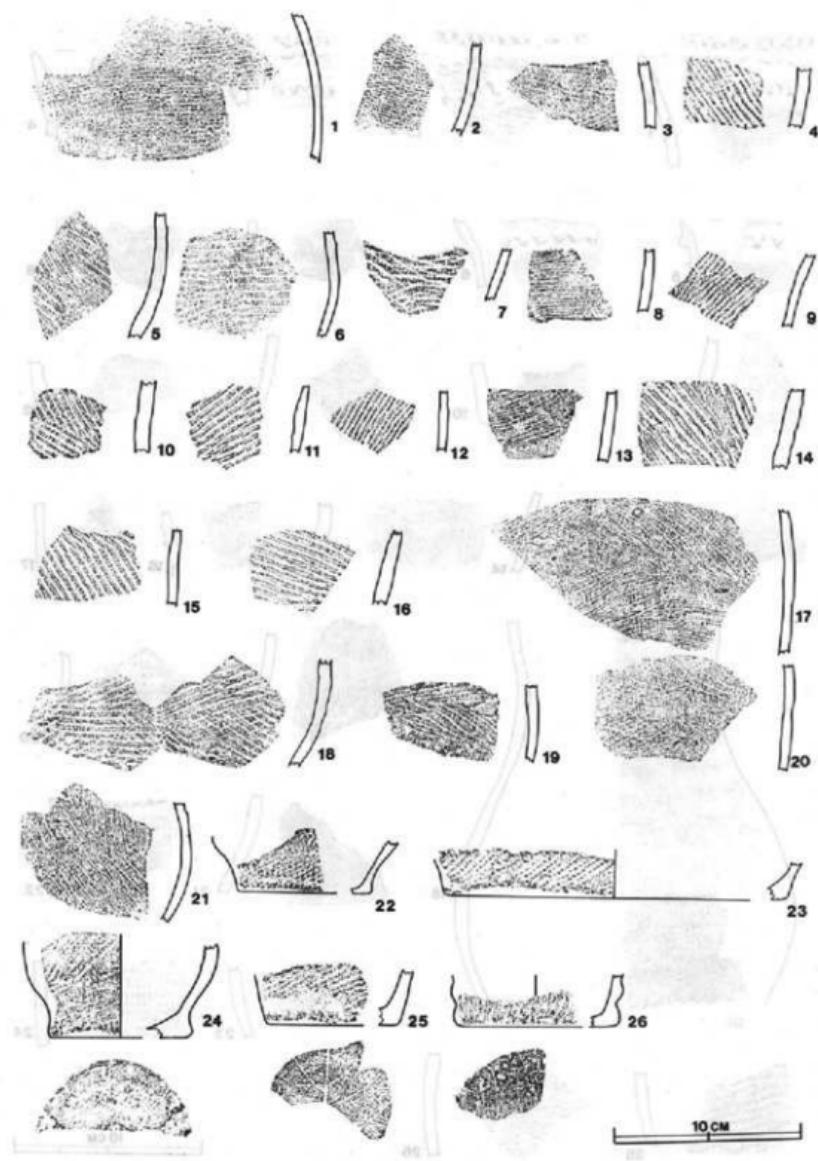
本住居址は、遺跡の中央部C3区b0, c0, C4区 b1, c1に確認され、本址の北東



第36図 第24号住居址出土遺物実測・拓影図

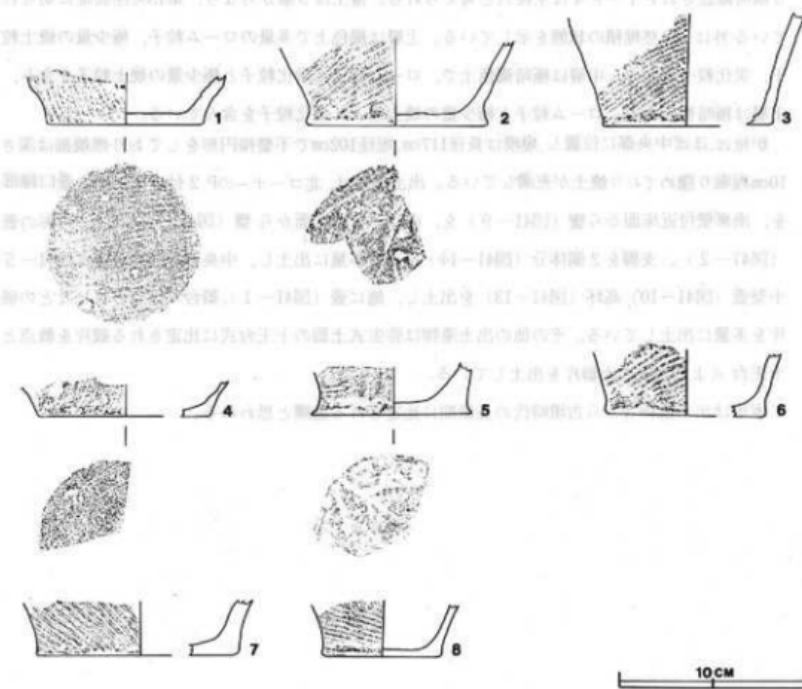


第37图 第24号住居址出土遗物实测·拓影图



第38图 第24号住居址出土遗物拓影图

コーナーに、第23号住居址の南コーナーが切り込んでおり、第23号住居址より古い遺構である。本址は隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-2°-Eで、規模は長軸3.60m、短軸2.93m、面積5.3m²を測り、壁高は40cm～50cm程度である。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、壁溝はない。床面は黒褐色土で擂鉢状を呈し硬く踏み固められた状態を示している。炉址は確認出来なかった。ピットは1個所確認され、P1は主柱穴と思われる。覆土は7層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土・暗褐色土で多量のローム粒子と極少量の炭化粒子を含み、下層は黒褐色土で少量のローム粒子、炭化粒子と極少量のロームブロック、焼土粒子を含んでいる。出土遺物は、弥生式土器を中心に出土し、中央部床面直上より甕2個体分と、他に甕の口縁部と底部等を多数出土している。図36・図37-1～17・図38・図39は弥生式土器の長岡系に比定されるものと思われ、図37-18～24は十王台式に比定され、図37-25・26は十王台式より古式の土器片等が見出された。



第39図 第24号住居址出土遺物実測・拓影図

であると思われる。

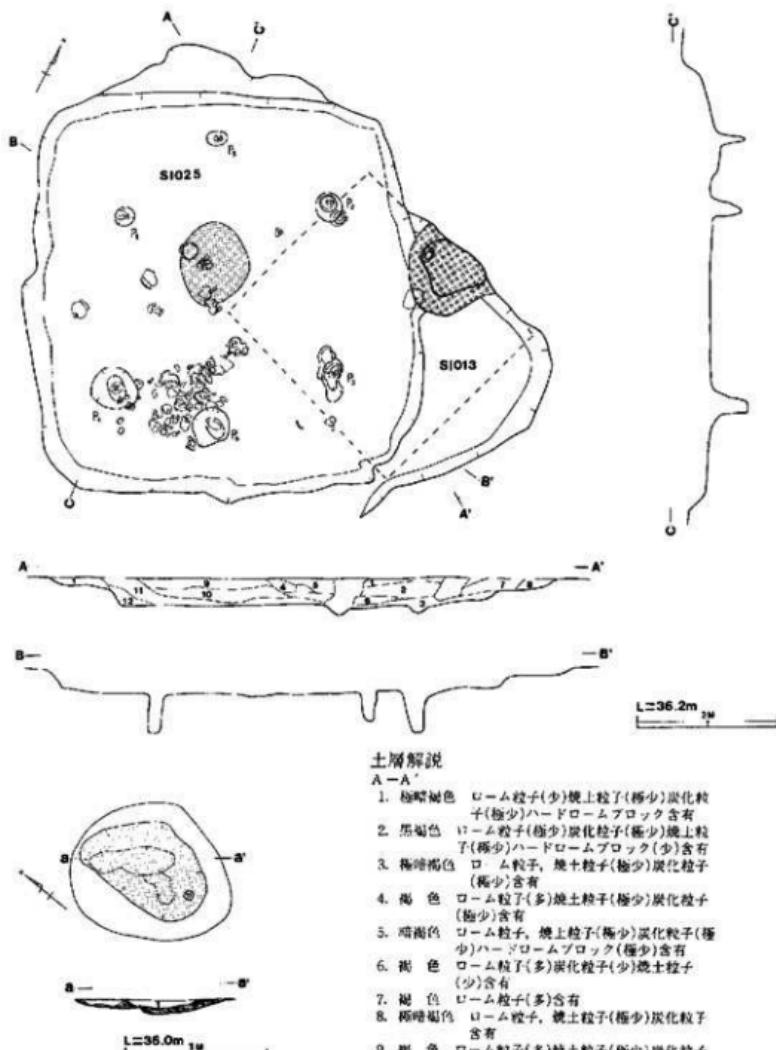
本住居址は、出土遺物等から弥生式時代後期の遺構と思われる。

第25号住居址（図40・41(1)2・42）

本住居址は、調査区の北部西端B3区 c9, c0, d9, d0, B4区 c1, d1と確認され、東コーナーは第13号住居址と複合している。第13号住居址床面との比高は約15cmであるが、本址は第13号住居址より古い遺構である。南東約1mに第12号住居址が検出されている。本址は隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-36°Wで、規模は長軸5.85m、短軸5.53m、面積29.5m²を測り、壁高は15cm～30cm程度である。壁は緩やかに外反して立ち上っている。床面は炉址付近で硬く踏み固められた状態を示しているが、壁際からは100cm～150cm内外は軟らかい。ピットは6個所確認されP1～P4は主柱穴と考えられる。覆土は5層からなり、第13号住居址に切られている外は、自然堆積の状態を示している。上層は褐色土で多量のローム粒子、極少量の焼土粒子、炭化粒子を含み、中層は極暗褐色土で、ローム粒子、炭化粒子と極少量の焼土粒子を含み、下層は棕暗褐色土で、ローム粒子と極少量の焼土粒子、炭化粒子を含んでいる。

炉址は、ほぼ中央部に位置し、規模は長径117cm、短径102cmで不整橢円形をしており、燃焼部は深さ10cm程掘り窪めており、焼土が充満している。出土遺物は、北コーナーのP2付近床面から壺口縁部を、南東壁付近床面から甕（図41-9）を、南コーナー床面から甕（図41-4・8）、丹彩の壺（図41-2）、支脚を2個体分（図41-14・15）と多量に出土し、中央部床面から甕（図41-5）、小型壺（図41-10）、高杯（図41-13）を出土し、他に甕（図41-1）、器台（図41-11）などの破片を多量に出土している。その他の出土遺物は弥生式土器の十王台式に比定される破片を教点と十王台式より古式の土器片を出土している。

本址は出土遺物等から古墳時代の五頭期に比定される遺構と思われる。

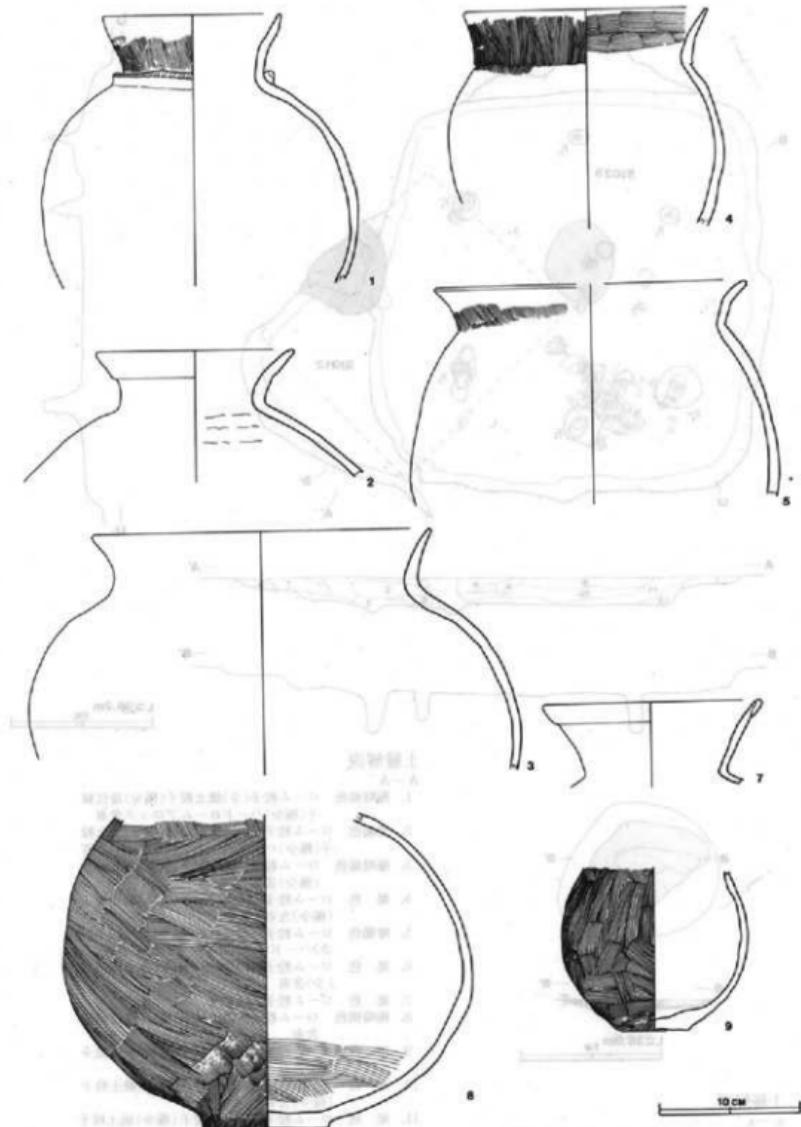


土層解説

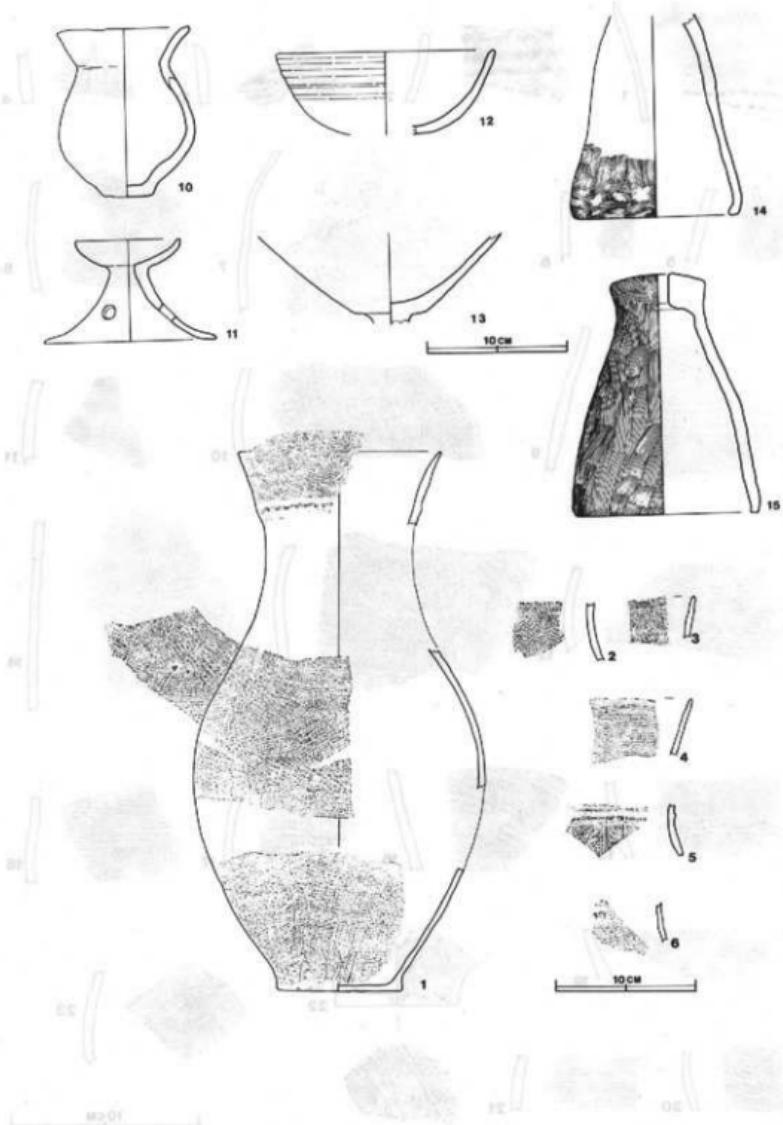
a-a'

1. 黒褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(少)焼土粒子(多)含有

第40図 第13・25号住居址実測図

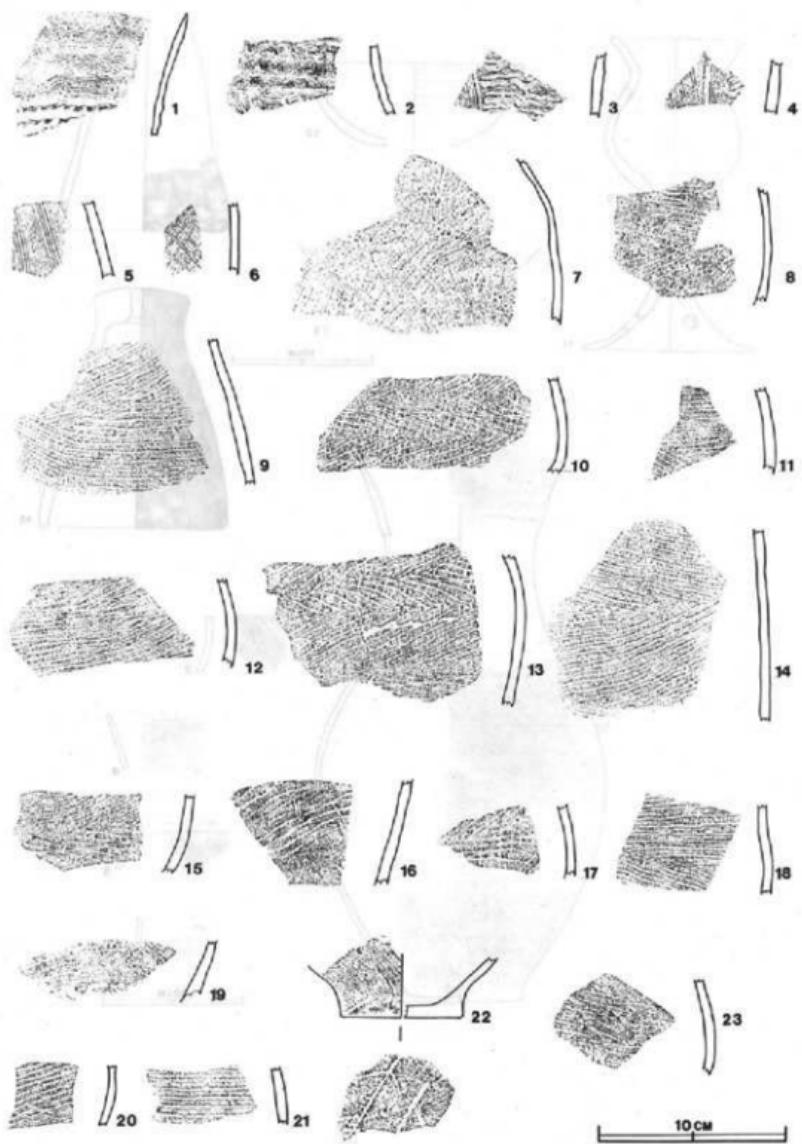


第41図(1) 第13・25号住居址出土遺物実測図



第41図(2) 第13・25号住居址出土遺物実測図

高坂洋蔵著「土器とその歴史」(1968年) 図版用



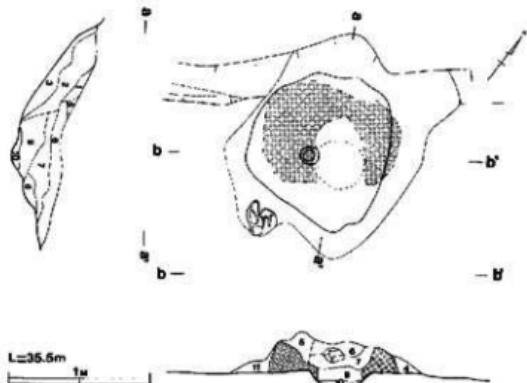
第42図 第13・25号住居址出土遺物拓影図

第26号住居址（図43～45（IX）23）

本住居址は、調査区の中央部西側B3区d8, e7, e8, e9, f7, f8に確認され、第31号住居址の南西部床面を約64cm程掘り込んで構築されている。第31号住居址の西部は、トレンチャーによる搅乱がひどく、出土遺物は砾石片と弥生式土器と土師器の細片のみである。

本址は第31号住居址より新しい造構で、南東4.0mには第30号住居址が、東側4.6mには第12号住居址が検出されている。本址は隅丸正方形の平面形を呈し、主軸方向はN-38°Wで、規模は長軸6.82m、短軸6.81m、面積38.4m²を測り壁高は75～100cm程で非常に深く堀り込んで構築されている。壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁下には壁溝を有していない。床面は平坦で硬く踏み固められた状態を示している。南コーナー付近、南北壁際に炭化物を出土しているので、本址は火災に遭遇していると思われる。

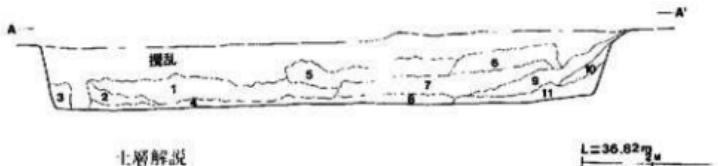
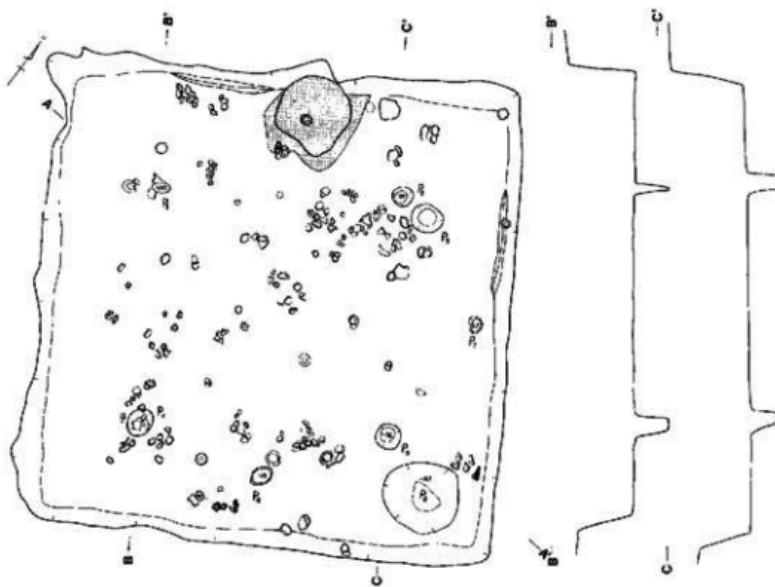
ピットは9個所確認され、P1～P4は柱穴と考えられる。東コーナーのP9は貯蔵穴と思われ、長径108cm、短径100cm、深さ62cmの不整梢円形を呈している。覆土は確認面から約50cmほどトレンチャーによる搅乱が見られ、西部は床面まで達している。中層は極暗褐色土で、少量のローム粒子、極少量の炭化粒子、焼土粒子を含み、下層は暗褐色土で多量のローム粒子と炭化粒子



土層解説

- | | | | | | | | |
|------------------------------------|--|-------------|----------------------------------|-------------------------------|--|---------------------|------------------------------|
| a - a' | b - b' | c - c' | d - d' | e - e' | f - f' | g - g' | h - h' |
| 1. 黒褐色 分枝状(多)粘土粒子(多)ローム
粒子(少)含有 | 2. 暗褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(多)燒
土粒子(多)粘土ブロック(多)含
有 | 3. 黑褐色 粘土土体 | 4. にじい赤褐色 ほとんど焼土で、少量の
炭化粒子を含む | 5. 褐色 ローム粒子(少)ローム
粘土ブロック含有 | 6. にじい赤褐色 粘土ブロック(少)ローム
粒子(多)竹節(少)含有 | 7. 暗赤褐色 焼土ブロック(多)含有 | 8. 淡赤褐色 硫成により固まったロームブ
ロック |
| | | | | | 9. 赤褐色 烧土粒子を含むした灰質の上層 | | 10. 暗赤褐色 烧土を主体とした上層 |
| | | | | | 11. 淡灰色 しまりあり、焼土粒(多)白色粘
土ブロック 含有 | | |

第43図 第26号住居址カマド実測図



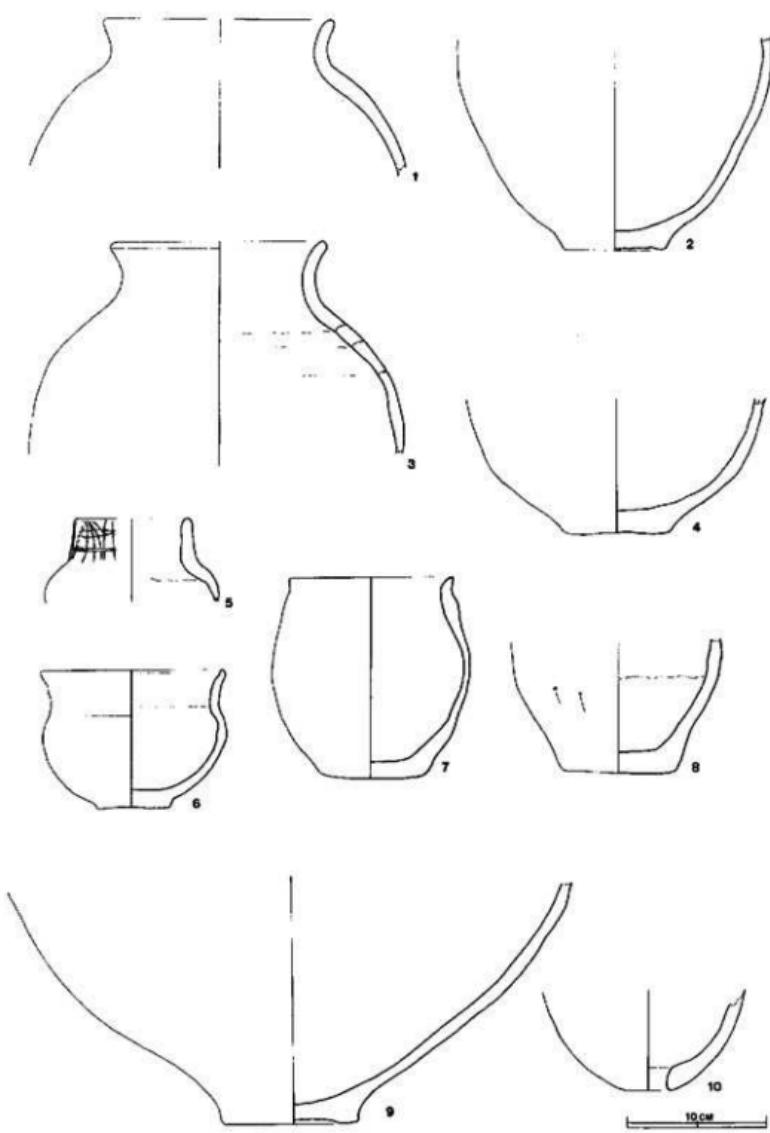
土層解説

A-A'

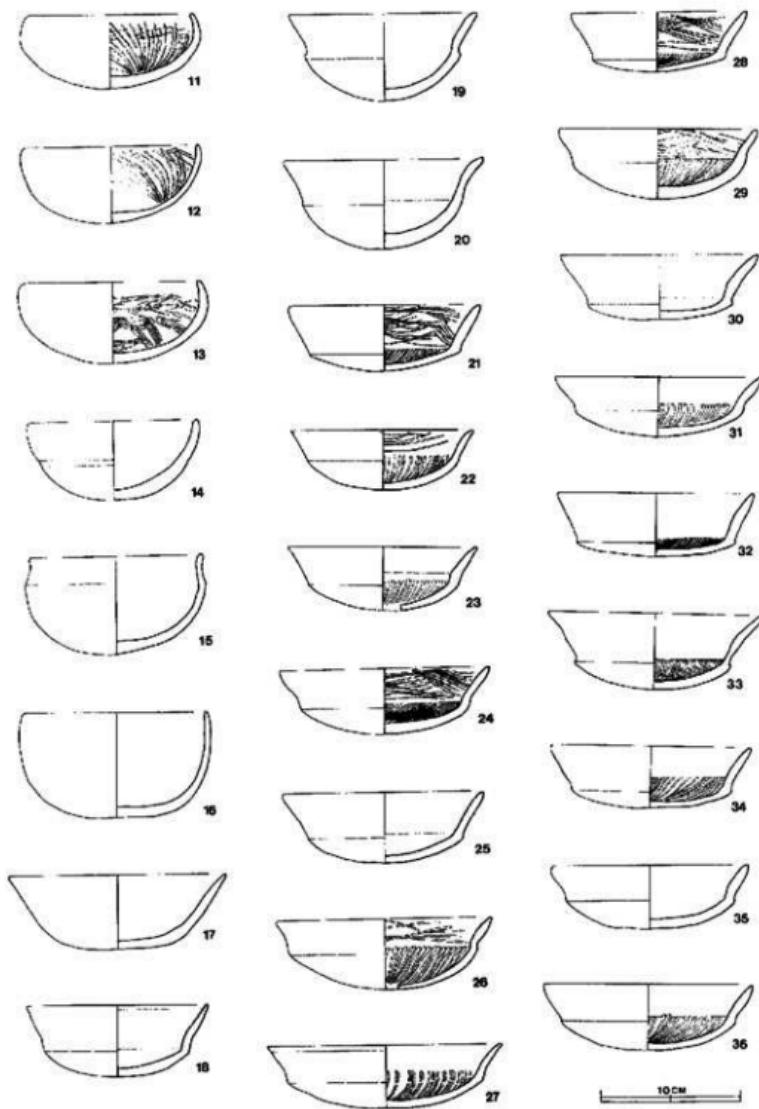
1. 黒褐色 ローム粒子(少)炭化物(極少)焼土粒子(極少)含有
2. 噴褐色 ロームブロック(少)ローム粒子(少)炭化粒子(少)含有
3. 黒褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(極少)含有
4. 暗褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(中)含有
5. 暗褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(極少)砂粒子(少)含有
6. 暗褐色 ローム粒子(中)炭化粒子(極少)砂粒子(小)含有
7. 黒褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(中)焼土粒子(極少)含有
8. 暗褐色 ロームブロック(少)ローム粒子(少)炭化粒子(多)含有
9. 褐色 ローム粒子(神多)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)ローム小ブロック(少)含有
10. 黑褐色 ローム粒子(多)燒土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
11. 褐色 ローム粒子(多)ロームブロック(中)炭化粒子(中)含有

L=36.82m

第44図 第26号住居址実測図



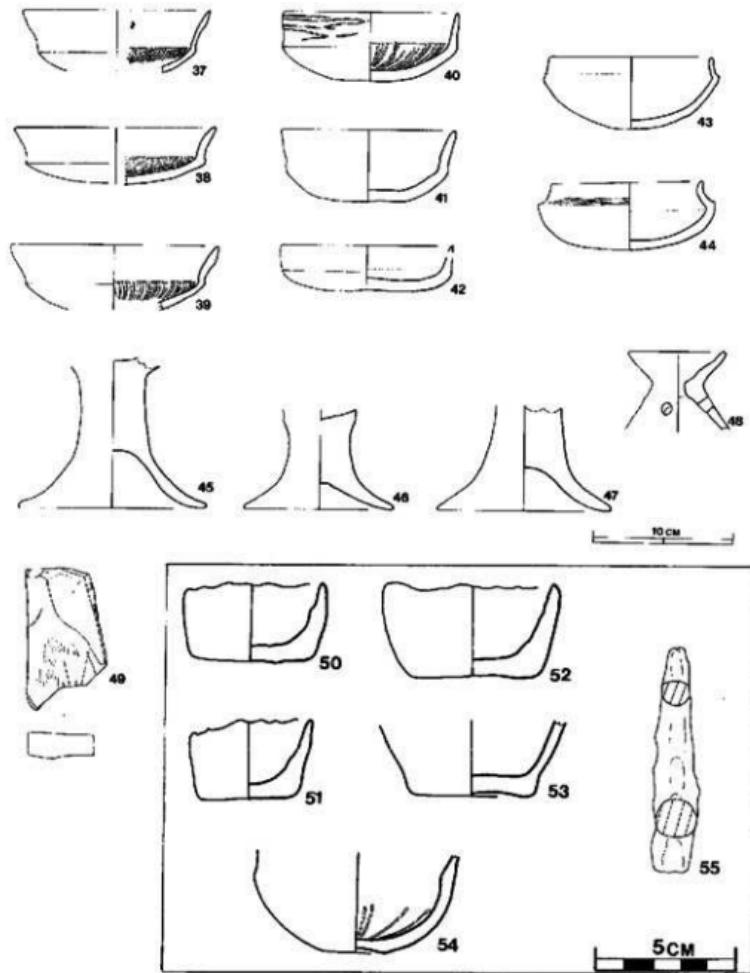
第45圖(1) 第26號住居址出土遺物實測圖



第45図(2) 第26号住居址出土遺物実測図

を含んでいる。

カマドは北東壁の中央より北に付設され、規模は長径33cm、短径92cmで、北西壁を70cm幅で、40cm程掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径37cm、短径33cmで深さ10cm程円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で、カマドは南東向きに構築されている。トレンチャーによる擾乱を受けているが燃焼部より、土師器の楕形土器片と高环を支脚として利用した物を出土している。



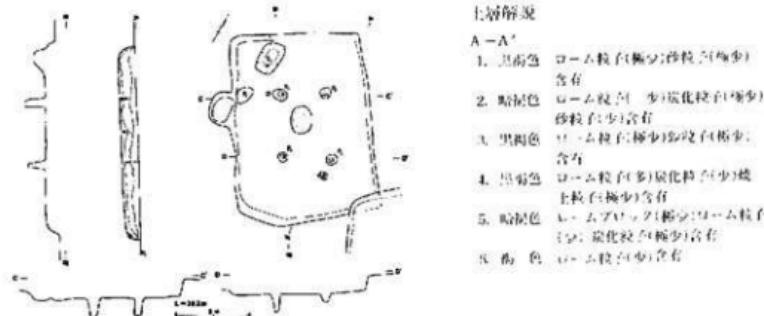
第45図(3) 第26号住居址出土遺物実測図

遺物は、土師器を中心に多数出土しており、完存率良好なものを上げると、ガマド内より甕(図45-8)、高环片と北コーナー中央部付近床面から环(図45-13・14・22・23・26)、底底部(図45-10)、甕底部(図45-9)、手捏上器(図45-50・51)、北東壁付近床面直上から环3個(図45-28・32)、東コーナー床面から环3個(図45-27・31・35)、甕口縁部(図45-1)、南東壁付近床面から环、壺、椀(図45-16)、甕口縁部(図45-3)、南コーナー床面より环4個(図45-11・17・18・20)、椀(図45-15)、小型甕(図45-6)、甕底部(図45-2)、南西壁付近床面より环(図45-36)、西コーナー床面より环、北西壁付近床面より环(図45-19)、中央部床面より环(図45-24・34)、他に床面より环3個(図45-21・29)、甕(図45-7)、甕土から手捏土器、高环、壺、甕、器台等と土師器の細片を多数出土している。その他の出土遺物は、弥生式土器のほぼト玉台式に比定される破片を数点と、鉄製品・鉄滓を数点出土している。本址は、出土遺物等から古墳時代の鬼高間に比定される遺構と思われる。

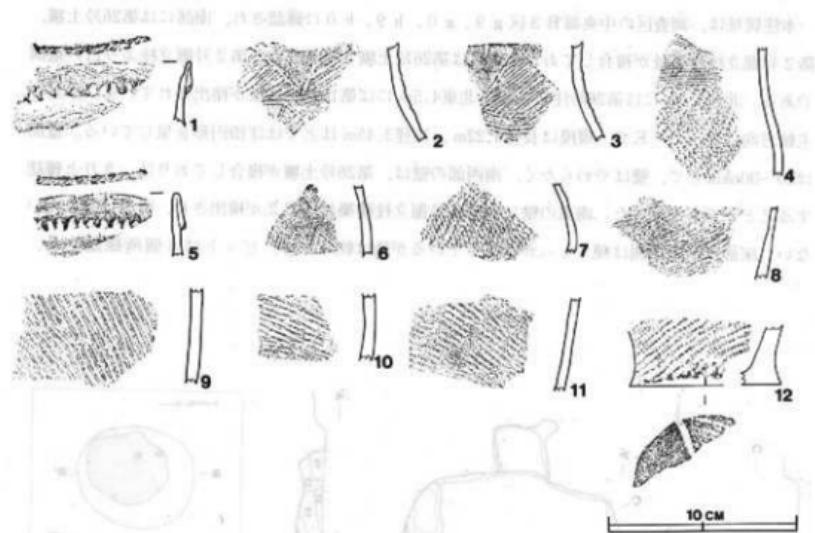
第28号住居址(図46・47)

本住居址は、調査区の中央部B3区j8, j9, j0, C3区a8, a9, a0に確認され、東コーナーにおいて第23号住居址と、西コーナーにおいて第1号獨立柱建築址と、南コーナーにおいては第29号住居址が複合している。本址は第23号住居址、第29号住居址、第1号獨立柱建築址よりも古い遺構である。

本址の主軸方向はN-34°-Wで、規模は長軸5.03m、短軸3.70m、面積15.0m²を測り、ほぼ隅丸長方形の平面形を呈している。壁高は15cm~40cmほどで、北東壁はほぼ垂直に立ちあがっているが、南西壁・南東壁は緩やかな傾斜をして立ち上っている。床面は平坦で硬く踏み固められていた。



第46図 第28号住居址出土遺物実測図



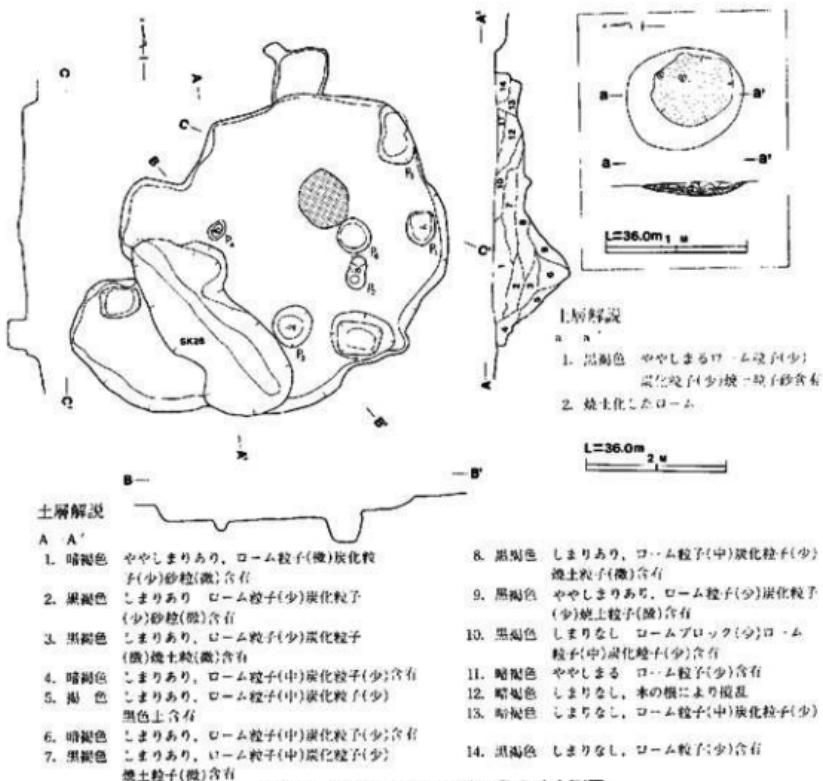
第47図 第28号住居址拓影図

炉址は本址の中央部にあり、規模は長径76cm、短径57cmで楕円形に焼土の広がりを確認した。ピットは6個所確認され、P1～P4は主柱穴と考えられる。西コーナーのP5は貯蔵穴と思われ長径90cm、短径60cm、深さ30cmの不整楕円形を呈している。覆土は6層からなり自然堆積の状態を呈している。上層は黒褐色土で極少量のローム粒子、砂粒を含み、中層は暗褐色土で、少量のローム粒子、砂粒と極少量の炭化粒子を含み、下層は暗褐色土で少量のローム粒子、焼土粒子を含んでいる。出土遺物は弥生式土器で、十王台式より古い型式の口縁部と底部の破片を数点出土している。底部には木葉痕がある。その他の出土遺物は石器が3個出土している。

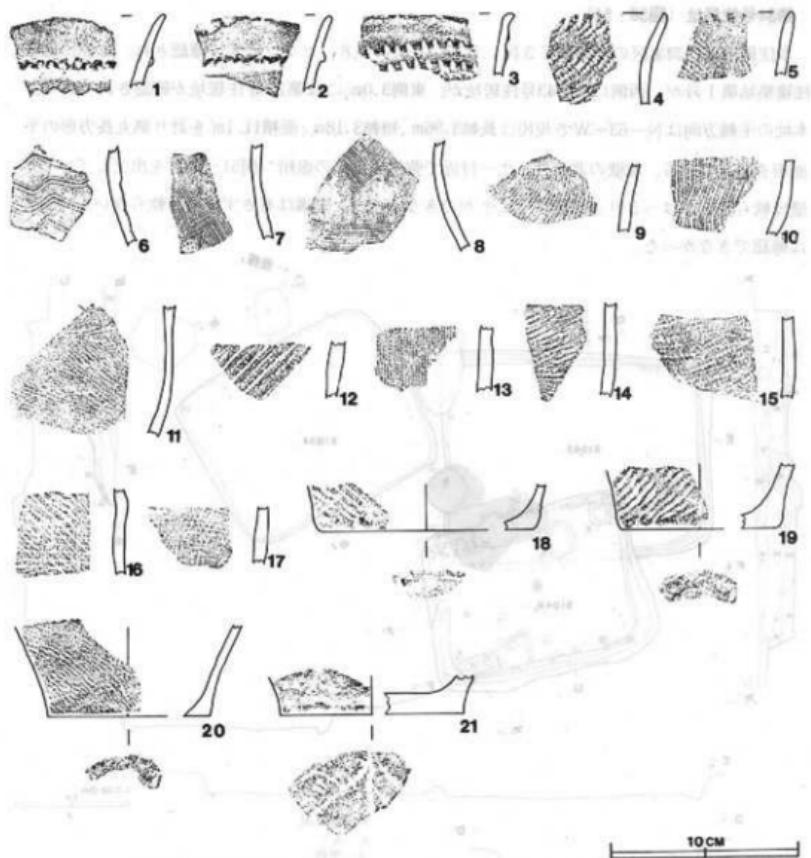
本址は弥生式時代後期に比定される遺構と思われる。

第30号住居址 (図48・49)

本住居址は、調査区の中央部B3区g9, g0, h9, h0に確認され、南部には第26号土壌、第2号掘立柱建築址が複合しており、本址は第26号土壌より新しく、第2号掘立柱より古い遺構である。北西3.6mには第26号住居址が、北東4.5mには第12号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN-1°Eで、規模は長径4.22m、短径3.45mほどでほぼ楕円形を呈している。壁高は20~30cmほどで、壁はやわらかく、南西部の壁は、第26号土壌が複合しておりはっきりと確認することができなかった。南東の壁には第2号掘立柱建築址のP2が検出され、壁溝は有していない。床面は炉の周囲は硬くしっかりとをしているが他は軟らかい。ピットは6個所確認され、



第48図 第30号住居址・第26号土壌実測図

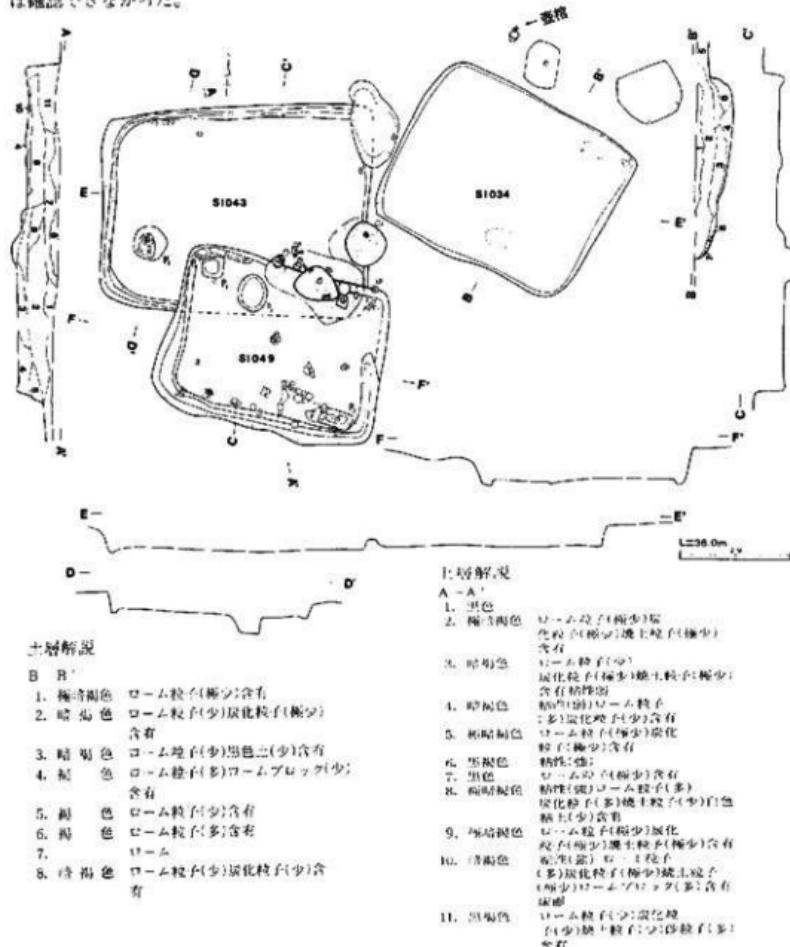


第49図 第30号住居址出土遺物拓影図

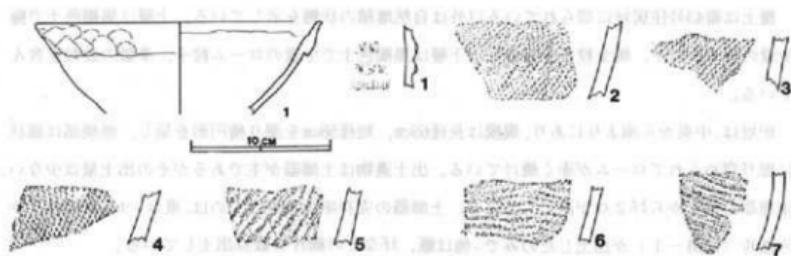
P 1～P 4は主柱穴と考えられる。南部に複合している第26号土壙は溝状土構と考えられ、規模は長径3.10m、短径1.05m、深さ1.80mを測り長楕円形状を呈している。覆土は12層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で少量のローム粒子を含有し、下層は暗褐色土で大量のローム粒子と少量のロームブロックと焼土粒子を含有している。炉址は中央より北に付設され、規模は長径82cm、短径72cmを測り円形を呈し、燃焼部は20cmほど掘り窪められ焼土が充満していた。出土遺物は、弥生式土器片で口縁部4点、頸部3点、胴部8点、底部4点出土し、底部には木葉痕がある。これらの土器片は、十王台式土器より古式と思われ、図49-6～8は長岡系の弥生式土器片と思われる。本址は、弥生時代後期に比定される遺構と思われる。

第34号住居址 (図50・51)

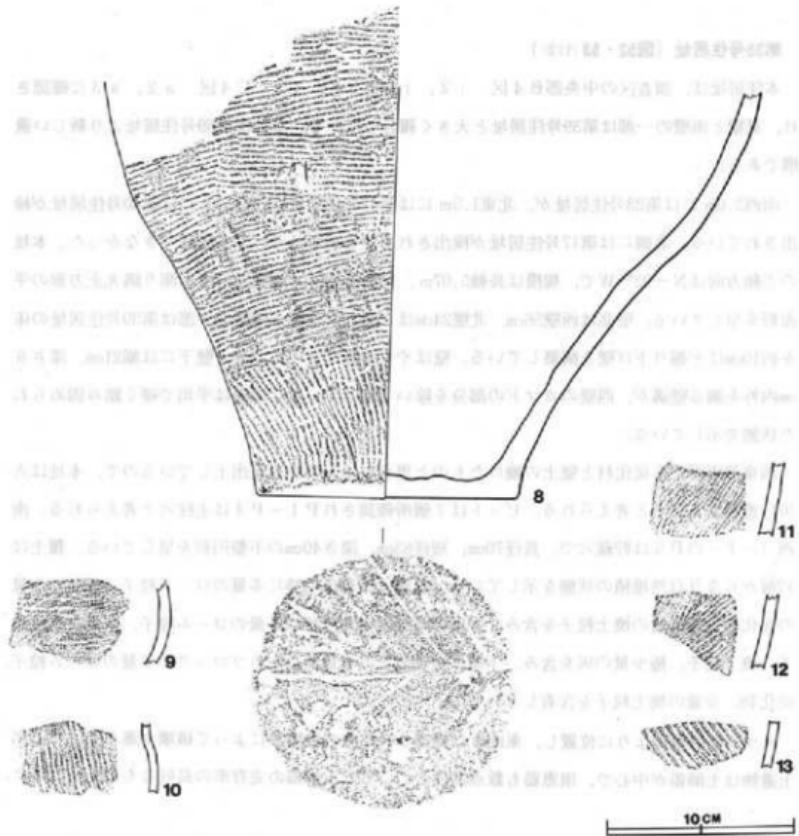
本住居址は、調査区の中央部C3区 b6, b7, b8, c7, c8に確認され、北側に獨立柱建築址第1号が、西側には第43号住居址が、東側3.0mには第29号住居址が確認されている。本址の主軸方向はN 63° Wで規模は長軸3.96m、短軸3.18m、面積11.1m²を計り隅丸長方形の平面形を呈している。北壁の北東コーナー付近で弥生式土器の破片(図51-8)を出土している。壁は軟らかく、はっきりと確認することができなかった。壁溝は有さず床面は軟らかい。ピットは確認できなかった。



第50図 第34・43・49号住居址実測図



第51図 第34号住居址出土遺物実測・拓影図



第51図 第34号住居址出土遺物実測・拓影図

覆土は第43号住居址に切られている以外は自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土で極少量のローム粒子、焼土粒子を含有し、下層は黒褐色土で少量のローム粒子、多量の砂粒を含んでいる。

炉址は、中央から南よりにあり、規模は長径69cm、短径58cmを測り椭円形を呈し、燃焼部は皿状に盛り立てられてロームが赤く焼けている。出土遺物は土師器が主であるがその出土量は少ない。須恵器も覆土から壺2点が出土している。土師器の完存率の良好なものは、東コーナー床面直上から鱗片（図51-1）が出土したのみで、他は鱗、壺などの細片を数点出土している。

本址は出土遺物等から古墳時代五領期に比定される遺構と思われる。

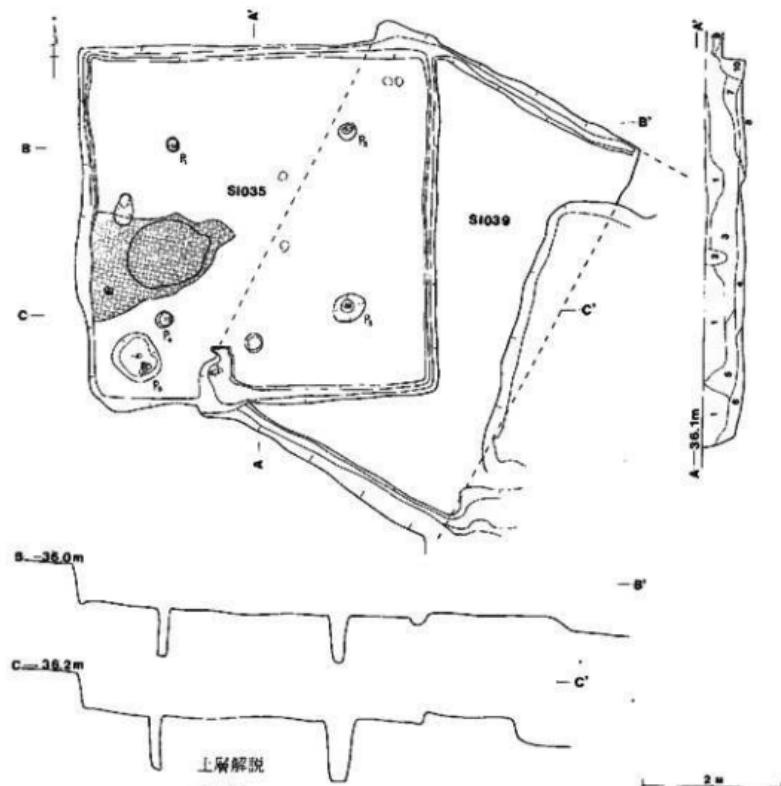
第35号住居址（図52・53：II2）

本住居址は、調査区の中央部B4区 i2, i3, j2, j3, C4区 a2, a3に確認され、東壁と南壁の一部は第39号住居址と大きく複合している。本址は第39号住居址より新しい遺構である。

南西2.0mには第23号住居址が、北東1.5mには第41号住居址が、東1.0mには第40号住居址が検出されている。北側には第17号住居址が検出されているが炉址だけしか確認できなかった。本址の主軸方向はN-92°-Wで、規模は長軸5.07m、短軸5.05m、面積21.1m²を測り隅丸正方形の平面形を呈している。壁高は西壁56cm、北壁24cmほど測り、東壁と南壁の一部は第39号住居址の床を約10cmほど掘り下げ壁を構築している。壁はやや垂直に立ちあがり、壁下には幅21cm、深さ6cm内外を測る壁溝が、西壁のカマドの部分を除いて廻っている。床面は平坦で硬く踏み固められた状態を示している。

南東部床面から炭化材と壁上の焼けたものと思われるものを少量出土しているので、本址は火災に遭遇していると考えられる。ピットは7個所確認されP1～P4は主柱穴と考えられる。南西コーナーのP5は貯蔵穴で、長径70cm、短径63cm、深さ40cmの不整円形を呈している。覆土は12層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色で特に多量のローム粒子、砂粒、少量の炭化粒、極少量の焼土粒子を含み、中層は暗褐色土で、特に多量のローム粒子、少量の炭化粒、焼土粒子、極少量の灰を含み、下層は暗褐色土で少量のロームブロック、多量のローム粒子、炭化物、少量の焼土粒子を含有している。

カマドは西壁南よりに位置し、東向きに構築され、桑の栽培等によって破壊が進んでいた。出土遺物は土師器が中心で、須恵器も数点共伴している。土師器の完存率の良好なものをあげると、

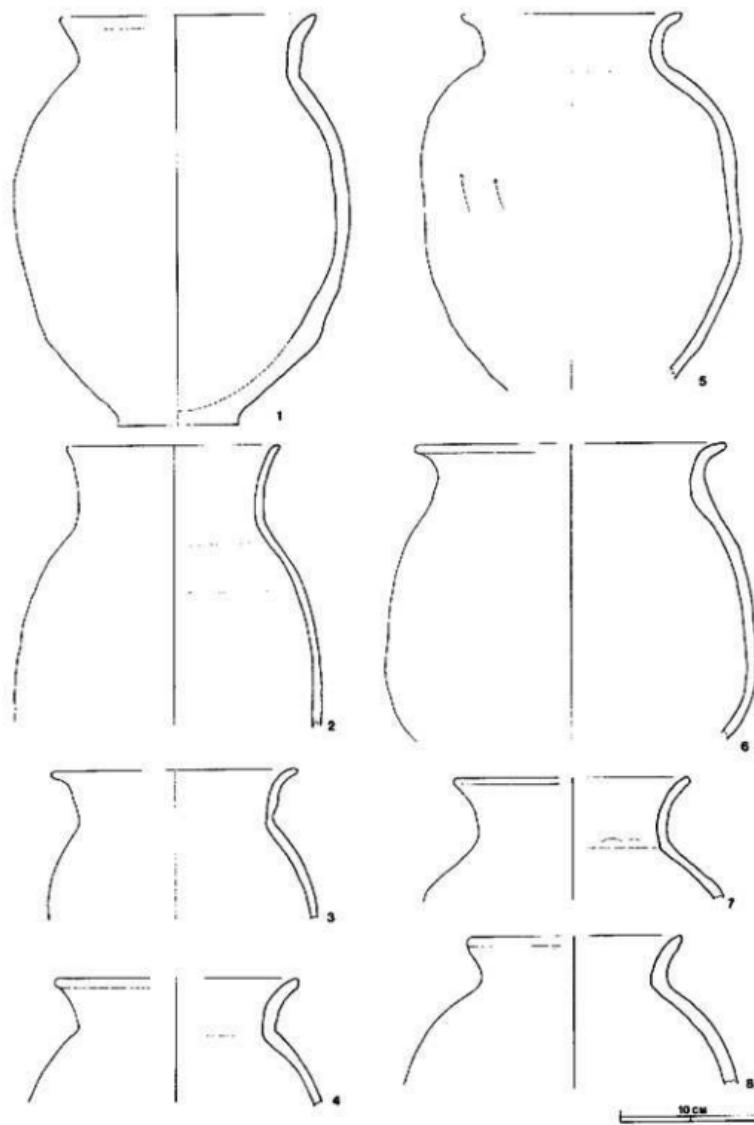


上層解説

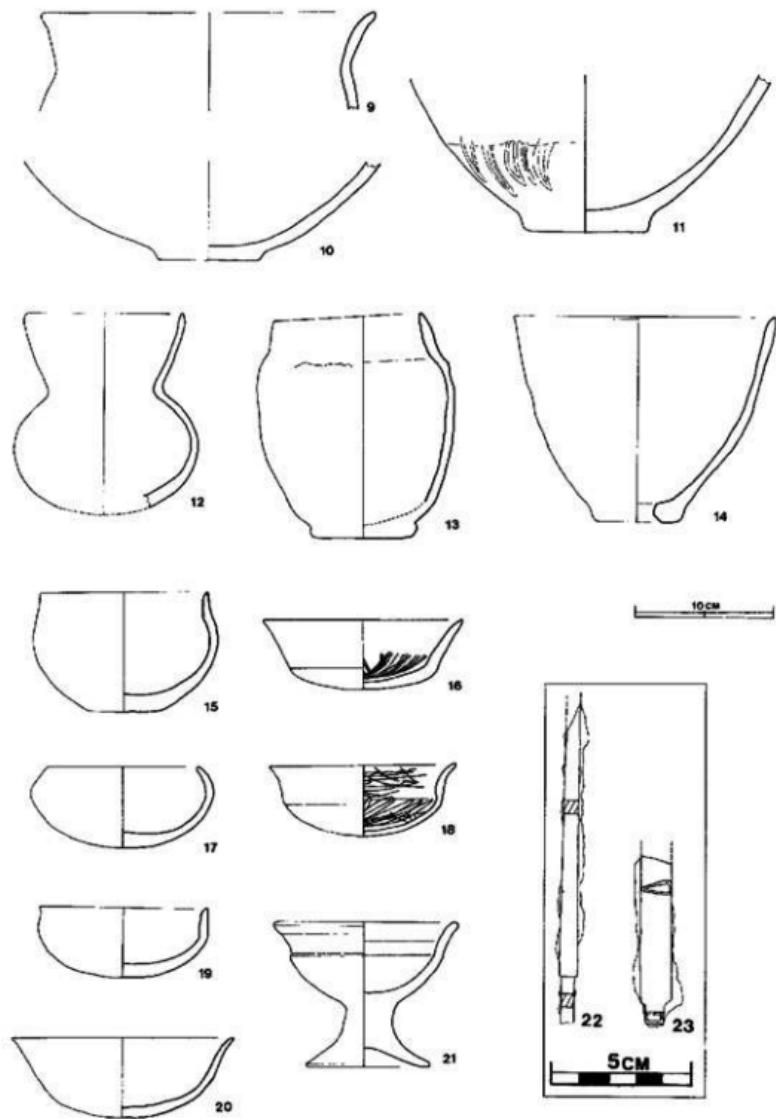
A-A'

1. 黒褐色 ローム粒子(特多)砂粒子(多)炭化粒子(少)
燒土粒子(極少)含有
2. 暗褐色 ローム粒子(多)燒土粒子(極少)含有
3. 暗褐色 ローム粒子(特多)炭化粒子(少)燒土粒子
(少)灰粒子(極少)含有
4. 暗褐色 ロームブロック(少)ローム粒子(多)炭化物
(多)燒土粒子(少)含有
5. 暗褐色 ロームブロック(少)ローム粒子(特多)炭
化物(少)燒土粒子 含有
6. 暗褐色 ロームブロック(極少)ローム粒子(多)炭
化物(少)含有
7. 暗褐色 ロームブロック(極少)ローム粒子(特多)
炭化物(少)砂粒子(極少)燒土粒子(極少)含有
8. 暗褐色 ロームブロック(極少)ローム粒子(多)炭化物
(少)燒土粒子(極少)含有
9. 暗褐色 ローム粒子(少)砂粒子(少)含有
10. 暗褐色 ローム粒子(少)燒土粒子(極少)含有

第52図 第35・39号住居址実測図



第53図(1) 第35号住居址出土遺物実測図



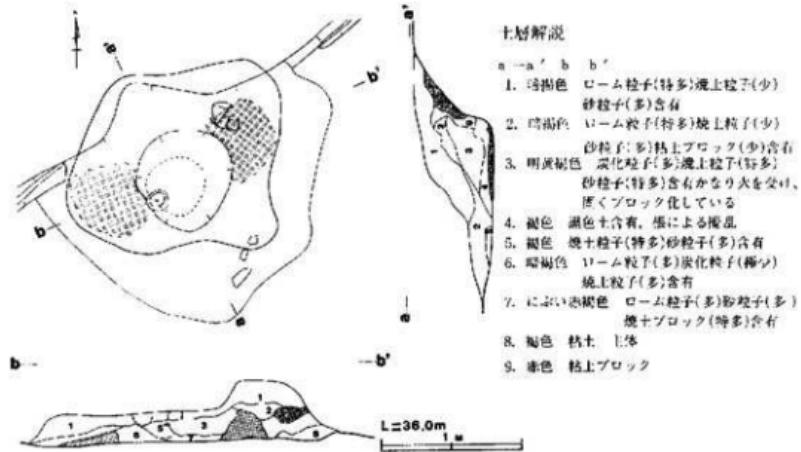
第53図(2) 第35号住居址出土遺物実測図

北壁中ほど床面直上から甕口縁部(図53-8), 北東コーナー床面から环(図53-20), 甕(図53-5), 中央部床面から高环(図53-21), 楠, 他に甕片9個体分(図53-1~4・6・7・9・10・11), 小型甕(図53-13), 瓶(図53-14), 楠(図53-15), 环(図53-16), 碗2個, 増を出土し, 覆土から甕底部, 瓶底部, 酒台, 高环等の破片を多数出土している。須恵器は床面直上から环2個体分を出土し, 他に細片を数点出土している。その他の出土遺物は, 北東部から鉄鎌(図53-22)と刀子片(図53-23)を出土している。

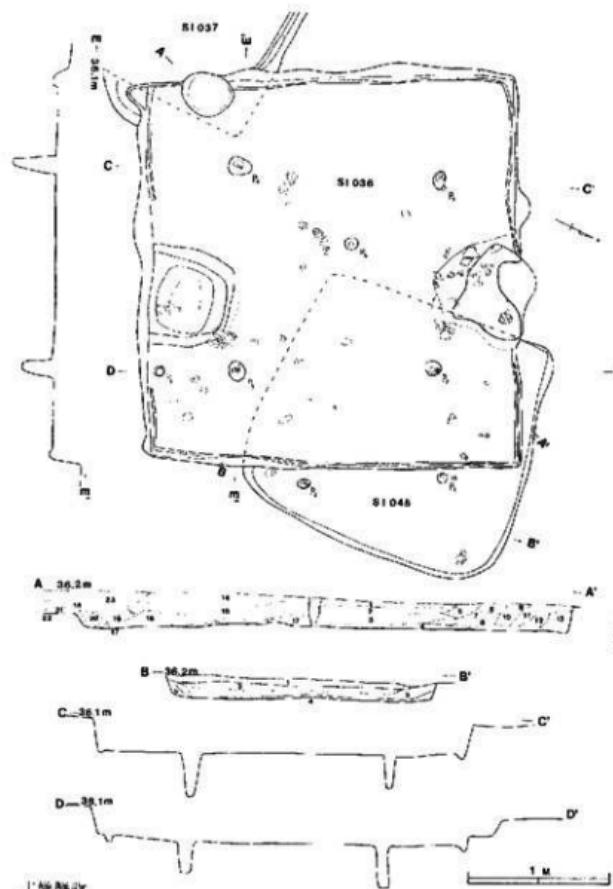
本址は古墳時代鬼高二期に比定される遺構と思われる。

第36号住居址(図54~56(1)(2))

本住居址は測定区の中央部C4区b2, C4区c1, c2, c3, d1, d2, d3, e1, e2に確認され北東コーナーは第45号住居址床面を53cmほど掘り込み本址を構築している。南西コーナーには第37号住居址, 南壁の中ほどには第77号住居址が複合している。本址は第45号住居址と第77号住居址より新しく, 第37号住居址より古い遺構である。本住居址の主軸方向はN-25-Wで, 規模は長軸7.08m, 短軸6.92m, 面積43.5m²を測り, ほぼ正方形の平面形を呈している。壁高は53cm~60cmを測り, 壁は垂直に立ちあがり, 壁下には幅15cm, 深さ8cm内外の「U」字形の壁溝がカマドを除いて廻っている。



第54図 第36号住居址カマド実測図

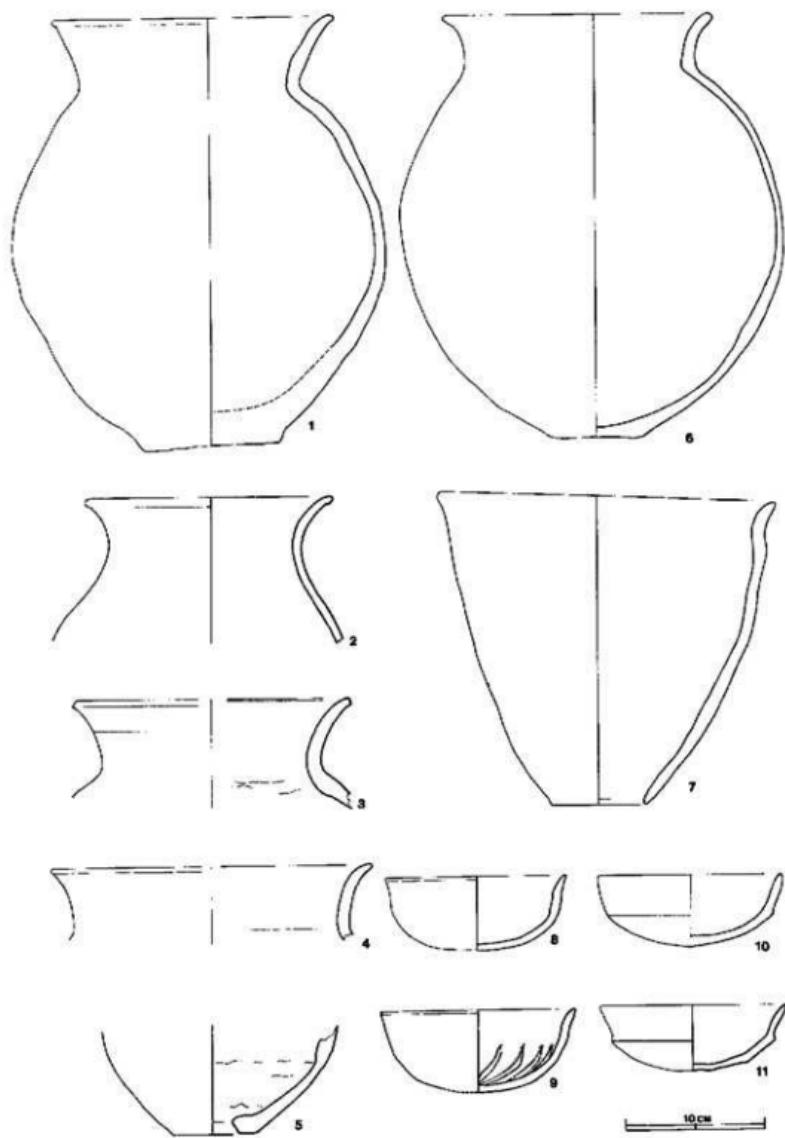


上層解説

1. 黒褐色 ローム粒子(多)燒土粒子(極少)炭化粒子(少)含冇
2. 黑褐色 ロームブロック(少)ローム粒子(特多)燒土粒子(少)炭化粒子(少)含冇
3. 黑褐色 ローム小ブロック(少)ローム粒子(特多)燒土粒子(少)炭化粒子(少)含冇
4. 黑褐色 ロームブロック(少)コーム粒子(少)燒土粒子(少)含冇
5. 黑褐色 ロームブロック(少)ローム粒子(特多)燒土粒子(少)炭化粒子(少)含冇
6. 黑褐色 ロームブロック(少)燒土粒子(少)炭化粒子(少)含冇
7. 黑褐色 ローム粒子(中)燒土粒子(極少)炭化粒子(極少)含冇
8. 黑褐色 ローム粒子(特多)燒土粒子(少)炭化粒子(少)含冇
9. 黑褐色 ローム小ブロック(少)ローム粒子(少)含冇
10. 黑褐色 ロームブロック(少)ローム粒子(特多)燒土粒子(極少)炭化粒子(少)含冇

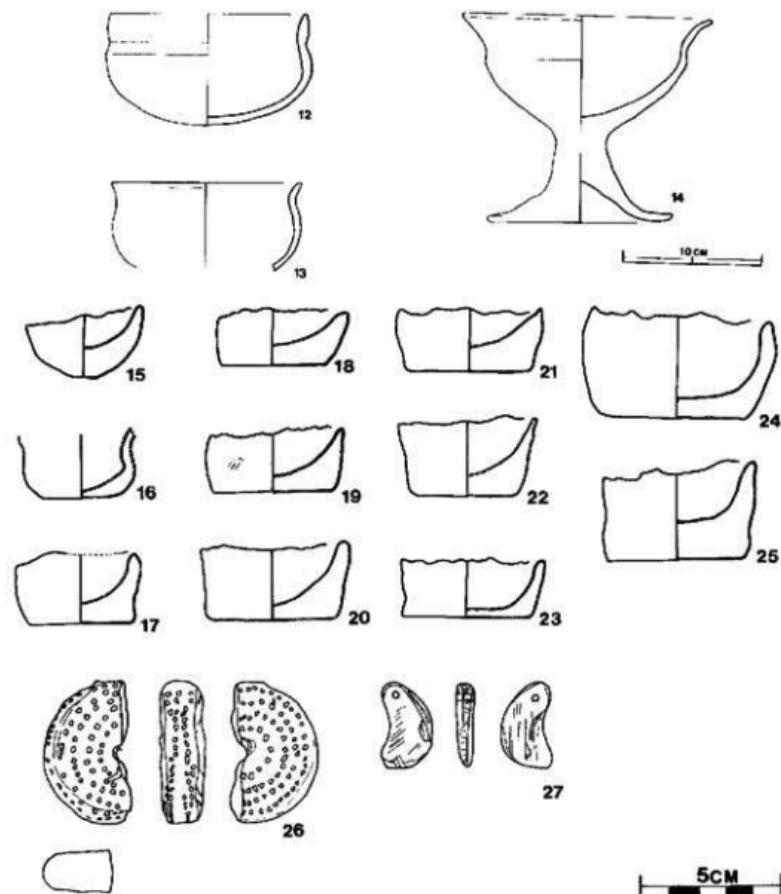
11. 黑褐色 ロームブロック(極少)ローム粒子(特多)燒土粒子(少)炭化粒子(多)含冇
12. 墓褐色 ローム粒子(極少)炭化粒子(少)含冇
13. 黑褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(少)燒土粒子(極少)含冇
14. 黑褐色 ローム粒子(中)炭化粒子(少)燒土粒子(極少)含冇
15. 墓褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(少)燒土粒子(極少)含冇
16. 墓褐色 ロームブロック(中)ローム粒子(特多)燒土粒子(少)炭化粒子(少)含冇
17. 墓褐色 ローム粒子(少)燒土粒子(少)含冇
18. 墓褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(少)含冇
19. 墓褐色 ローム粒子(中)燒土粒子(極少)炭化粒子(少)含冇
20. 墓褐色 ローム小ブロック(少)ローム粒子(中)炭化粒子(中)含冇
21. 黑褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(少)含冇
22. 墓褐色 ロームブロック(少)ローム粒子(少)炭化粒子(少)含冇
23. 墓褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(多)含冇

第55図 第36・45号住居址実測図



第56图(1) 第36号住居址出土遗物实测图

床面は平坦で踏み固められた状態で硬くぱりぱりとしている。東壁付近に炭化物を出土しているので、本址は火災に遭遇しているとおもわれる。ピットは6個所確認され、P1～P4は主柱穴と考えられる。貯蔵穴は有していない。南壁中央部に一段高いベルトが半周しており、その中に土壙が付設され、規模は長辺115cm、短辺100cm、深さ65cmを測り、ほぼ長方形を呈している。壁上は35



第56図(2) 第36号住居址出土遺物実測図

層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土で多量のローム粒子、少量の炭化粒子極少量の焼土粒子を含み、中層は暗褐色土で、特に多量のローム粒子、少量のロームブロックと炭化粒子、極少量の焼土粒子を含み、下層は暗褐色土で、少量のローム粒子、極少量のロームブロック、焼土粒子を含んでいる。

カマドは北壁の中央より東に付設され、規模は長径148cm、短径128cmを測り、北壁を80cm幅で、28cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は、長径42cm、短径40cm、深さ2cmほど、円形形状に掘り窪めている。抽部は黒色土混りの砂質粘土で、カマドは南東向きに構築されている。

出土遺物は、上師器が上で、須恵器は覆土中から壺などの破片を数点出土したのみである。カマド内から、斐口縁部(図56-4)、高壺(図56-14)を、カマド付近の床面直上から瓶(図56-7)、斐口縁部(図56-3)、手捏土器(図56-19)、壺(図56-9・10)を、北東部床面から手捏土器(図56-22・25)、楕(図56-13)、北西部床面から瓶片(図56-5)、南コーナー床面から斐2個体分(図56-1・6)を、中央部P5付近床面から甕(図56-2)を出土し、他には手捏土器4個(図56-15・18・21・24)、楕(図56-12)、杯2個(図56-8・11)と、斐、壺、杯などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は紡錘車(図56-26)とカマド付近床面直上から石製模造品の勾玉(図56-27)を出土している。

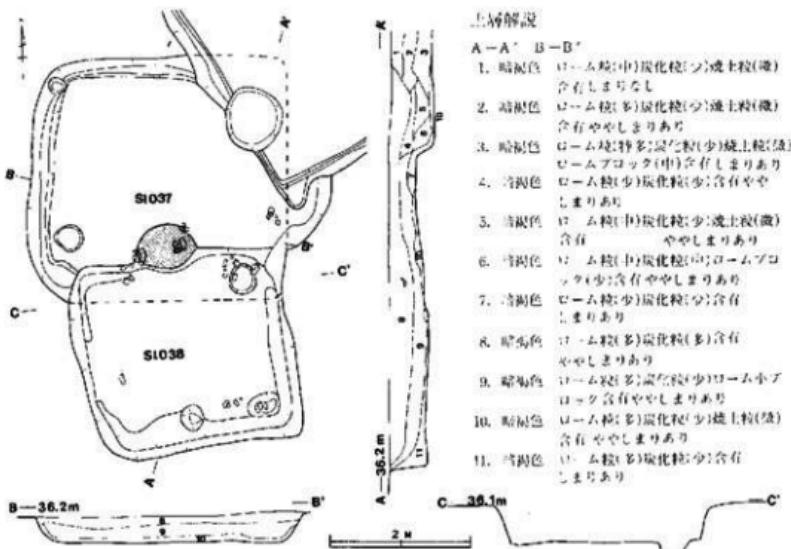
本址は出土遺物等から古墳時代の県高階に比定される遺構と思われる。

第37号住居址(図57・58)

本住居址は、調査区の中央部C3区d0、e0、C4区d1、e1に確認され、北東コーナーには、第36号住居址が複合し、南壁は第38号住居址の北部を削平して構築している。東側約1.0mには第77号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN-88°Wで、規模は長軸4.30m、短軸3.37m、面積8.55m²を測り西丸長方形を呈している。壁高は約39cmを測り、壁は緩やかに外傾して立ちあがっており、西壁際に幅28cm、深さ6cmの壁溝を有する。貯蔵穴は有していない。

床面は暗褐色土を呈し硬くしっかりとしているが、柱穴と思われるものは確認することができなかった。カマドは検出されなかつた。覆土は3層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土でローム粒子と少量の炭化粒子、極少量の焼土粒子を含み、中層は暗褐色土で、少量のローム粒子、炭化粒子を含み、下層は暗褐色土で、少量のロームブロック、ローム粒子、炭化粒子を含んでいる。

出土遺物は上師器と須恵器を共伴しているが数は少ない。完存率の良好なものをあげると、土師器は南壁付近床面直上より壺(図58-4)、高台付壺(図58-7)と、須恵器の杯(図58-5)を出土している。北東コーナー床面から斐口縁部(図58-3)、西壁付近北より床面から、甕底部(図58-2)、南東部壁上内から須恵器の壺を、南西部覆土から墨書き土器を出土し、その他、



第57図 第37・38号住居址実測図

土師器の壺、甕(図58-1)、坪、瓶、などの細片を数点と、須恵器片を数点出土している。

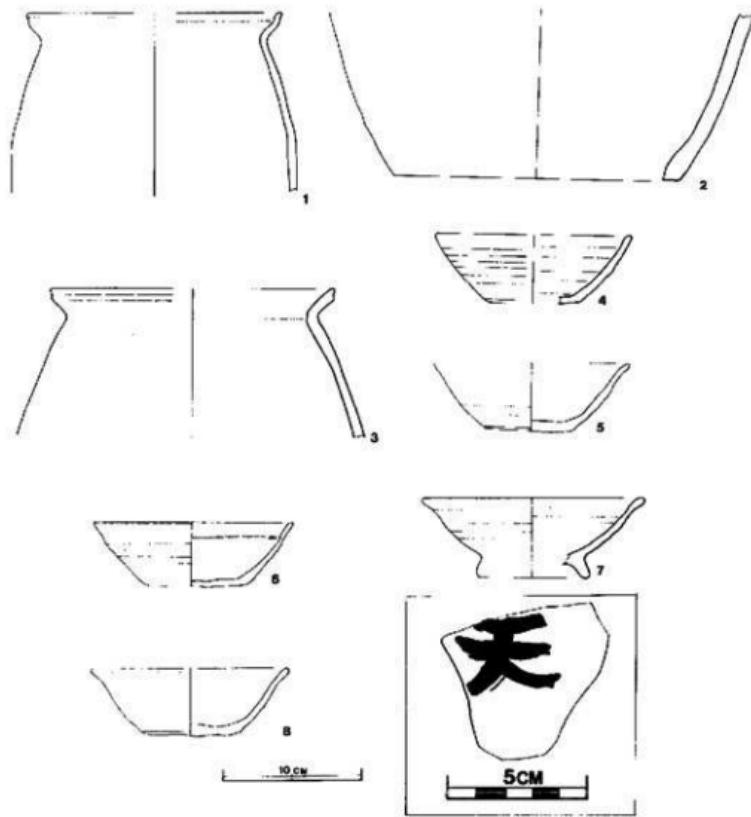
本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第38号住居址(図57・58)

本住居址は、調査区の中央部C4区e1、F1に確認され、第37号住居址の床面から約7cm掘り込んで構築されており、本址は第37号住居址より古い遺構である。

南東コーナーは第77号住居址と接している。本址の主軸方向はN-5°-Wで、規模は長軸3.04m、短軸2.81m、面積6.0m²を測りほぼ隅丸長方形を呈している。北壁は第37号住居址に削平され不明である。東・西・南壁の壁高は約60cmでやや垂直に立ち上がっている。壁下には幅20cm、深さ4cm内外の浅い壁溝がほぼ全周している。床面は硬く踏み固められた状態を示しており、柱穴と思われるものは確認されなかった。カマドは北壁の中ほどに付設されているが、第37号住居址に削平され燃焼部のみしか残存していなかった。推定で規模は長径70cm、短径70cmで、北壁を37cmの幅で、10cmほど掘り込み煙道部としている。燃焼部は長径35cm、短径30cm、深さ4cmほど円形に掘り進めている。

出土遺物は須恵器が上で、土師器の壺、坪などの破片を数点出土している。



第58図 第37・38号住居址出土遺物実測図

須恵器の完存率の良好なものをあげると、カマド附近の床面から环(図58-8)と瓶の破片を出土している。

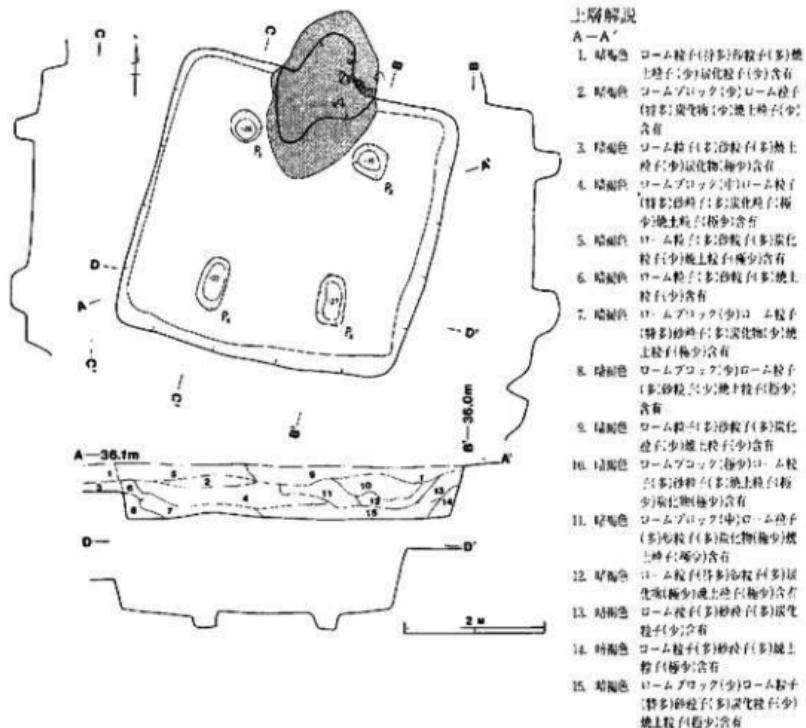
本址は、出土遺物等から固分期に比定される遺構と思われる。

第40号住居址(図59~61)

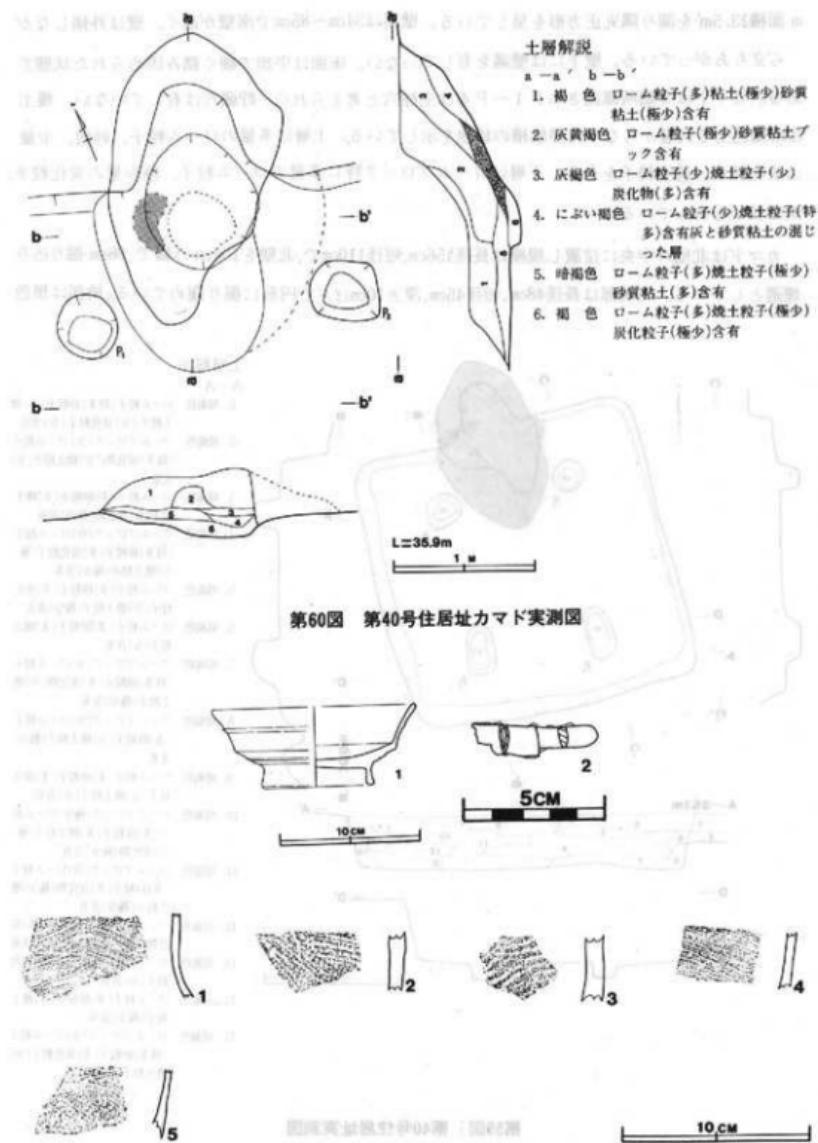
本住居址は、調査区の中央B4区j3, j4, C4区a3, a4に確認され、南壁は第42号住居址の北部を切り、西壁は第39号住居址の東部を切って構築されている。南東コーナーには第44号住居址の西壁が接している。北側1.0mには第41号住居址が検出している。本址は第39号住居址、第42号住居址より新しい遺構で、本址の主軸方向はN-18.5°Eで、規模は長軸4.15m, 短軸4.00

m 面積13.5m²を測り隅丸正方形を呈している。壁高は34cm~85cmで南壁が高く、壁は外傾しながら立ちあがっている。壁下には職溝を有していない。床面は平坦で硬く踏み固められた状態である。ピットは5個所確認されP 1~P 4は主柱穴と考えられる。貯蔵穴は有していない。覆土は暗褐色土で14層からなり自然堆積の状態を示している。上層は多量のローム粒子、砂粒、少量の炭化粒子、焼土粒子を含み、下層はロームブロック特に多量のローム粒子、極少量の炭化粒子、焼土粒子を含んでいる。

カマドは北壁の中央に位置し規模は長径156cm、短径110cmで、北壁を104cmの幅で、98cm掘り込み煙道としている。燃焼部は長径48cm、短径45cm、深さ10cmほどで円形に掘り窪めている。袖部は黒色



第59図 第40号住居址実測図



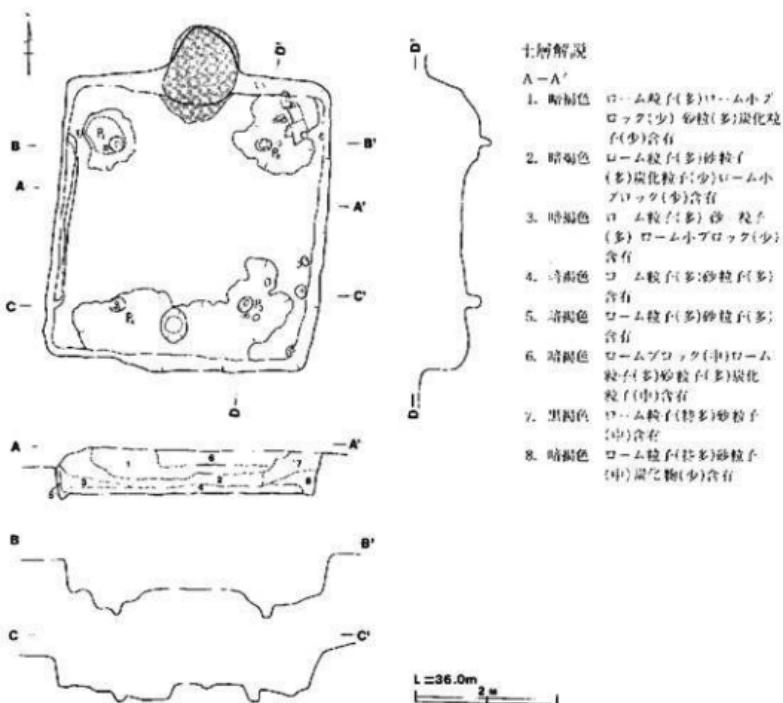
第61図 第40号住居址出土遺物実測・拓影図

土混りの砂質粒土で、カマドは南向きに構築されている。出土遺物は土師器と須恵器が共伴しており、カマド内から須恵器の高台付壺（図61-1）を出土し、他には覆土から瓦等の細片を出土している。

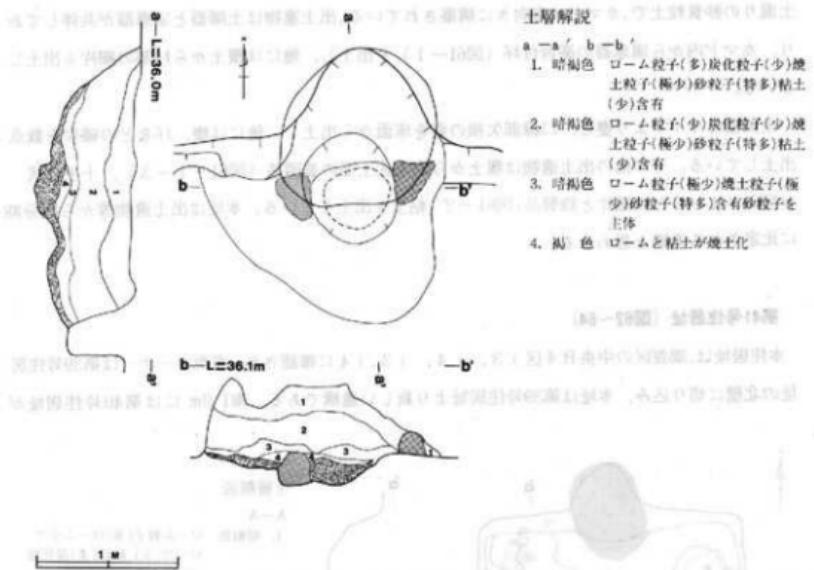
土師器はカマドより更と、口縁部欠損の壺を床面から出土し、他には甕、壺などの破片を数点出土している。その他の出土遺物は覆土から弥生式土器の長岡系（図61-1～3）、十王台式（図61-4・5）の破片と鉄製品（図61-2）、粘土を出土している。本址は出土遺物等から国分期に比定される造構と思われる。

第41号住居址（図62～64）

本住居址は、調査区の中央B41×13, 14, 13, 14に確認され、南西コーナーは第39号住居址の北壁に切り込み、本址は第39号住居址より新しい造構である。南1.0mには第40号住居址が



第62図 第41号住居址実測図

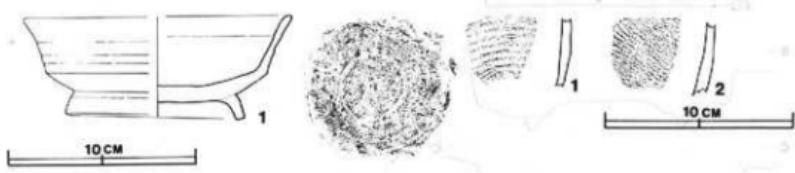


第63図 第41号住居址カマド実測図

北側1.4mには第16号住居址が確認されている。

本址の主軸方向はN-6°-Eで、規模は長軸4.20m、短軸3.85m、面積11.0m²を測り隅丸長方形を呈している。壁高は27cm-65cmで壁はほぼ垂直に立ち上っている。西壁の壁下には幅27cm、深さ6cm内外の壁溝を有している。床面は凸凹で中央部は硬く踏み固められた状態であるが、北東コーナーと南壁際幅約70cmは貼り床となっている。

ピットは7個所確認されP1-P4は主柱穴と考えられ、貯蔵穴は有していない。覆土は暗褐色土で8層からなり自然堆積の状態を示している。上層はロームブロック、多量のローム粒子、少



第64図 第41号住居址出土遺物実測・拓影図

量の炭化粒子を含み、下層は多量のローム粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央に位置し、長径127cm、短径105cm、北壁を115cm幅で、60cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径45cm、短径41cm、深さ9cmほどで橢円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で、カマドは南向きに構築されている。

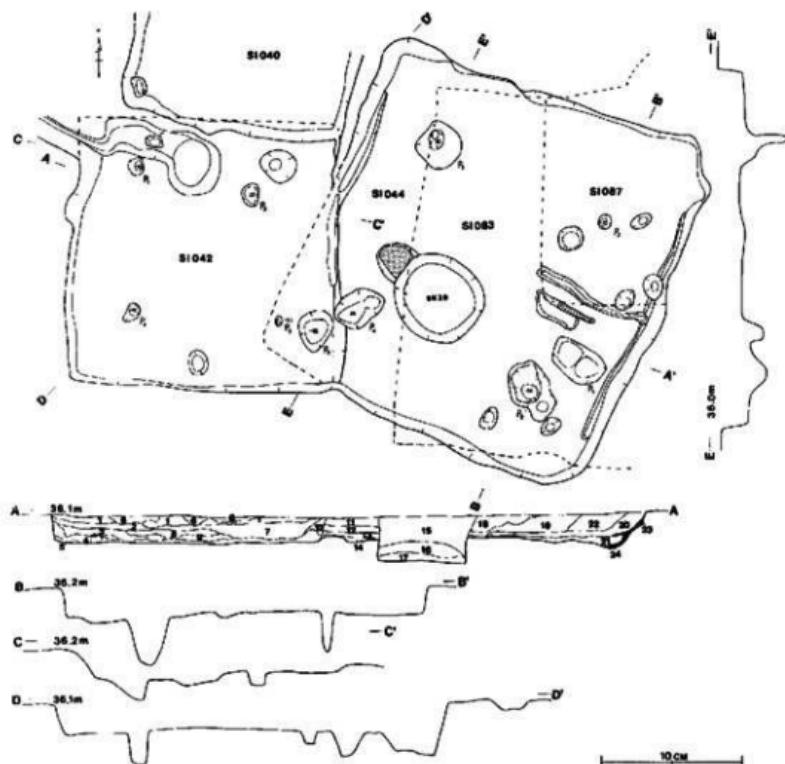
出土遺物は須恵器と土師器が共存しているが数は少ない。須恵器の完存率の良好なものは、カマドから高台付壺(図64-1)、南東コーナー床直上から壺、覆土から壺2個と細片を数点出土している。土師器は高台付壺を覆土から出土し、他は甕、内甕の壺、台付甕などの細片を数点出土している。本址は出土遺物等から国分期の遺構と思われる。

第42号住居址(図55・66)

本住居址は、調査区の中央部C4区a3、a4、b3、b4に確認され北壁は、第40号住居址に切られ、東壁は第44号住居址に切り込み、北西コーナーは第39号住居址に切り込んでいる。本址は第40号住居址よりは古く、第39号住居址・第44号住居址より新しい遺構である。南側約1.1mには第80号住居址が、南西1.5mには第45号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN-4°Eで、規模は、長軸4.79m、短軸4.82m、面積20.0m²を測り、正方形の平面形を呈している。壁は西壁と南壁は確認することができ壁高は45cm～55cm程で、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁溝は有していない。

床面は平坦で硬く、ピットは7箇所確認されP1～P4は主柱穴と考えられる。南東コーナーのP5は貯蔵穴と想われ、長径76cm、短径61cm、深さ85cmで不整円形を呈している。覆土は10層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で極少量のローム粒子を含み、中層は黒褐色土で少量のロームを含み、下層は褐色土・極暗褐色土で少量のローム粒子、極少量の炭化粒子、焼土粒子を含んでいる。カマドは削消され確認することができないが、燃焼部と思われる長径150cm、短径97cmを測る。円形の落ち込みを確認した。

出土遺物は須恵器を中心に土師器を共存している。須恵器の完存率の良好なものをあげると、南壁中央付近床直上から蓋(図66-6)、西壁中央付近床直上から壺(図66-3)、北西コーナー床直上から壺(図66-2)、北東部床直上から壺(図66-4)を出土し、他に、覆土から壺、蓋(図66-5)と破片を多数出土している。土師器は南西コーナー床直上から甕底部(図66-1)と、甕、器台、高壺、壺などの細片を多数出土している。その他の出土遺物は弥生式土器片数点と鐵滓を少量出土している。本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。



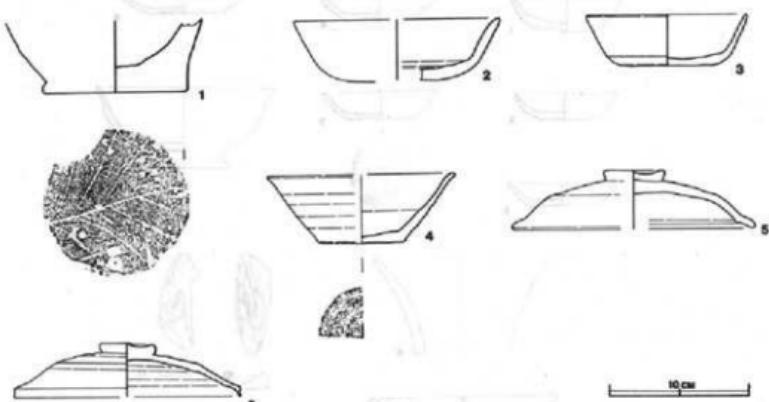
土壤解説

A - A'

1. 暗褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(極少)含有
2. 暗褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(極少)黒色土ローム含有
3. 暗褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(含有)
4. 淡褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(極少)含有
5. 明褐色 ローム粒子(特多)炭化粒子(極少)含有
6. 黄褐色 ローム粒子(極少)含有
7. 暗褐色 炭化粒子(菌)ロームブロック(少)含有
8. 暗褐色 ローム粒子(多)燒土粒子(極少)含有
9. 暗褐色 ローム粒子(多)ロームブロック(多)含有
10. 黑褐色 ローム粒子(少)含有
11. 暗褐色 ローム粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
12. 暗褐色 ローム粒子(極少)炭化粒子(極少)含有

13. 褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(極少)燒土粒子(極少)ロームブロック(少)含有
14. 褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(極少)燒土粒子(少)ロームブロック(少)含有
15. 暗褐色 ローム粒子(極少)燒土粒子(極少)含有
16. 暗褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(極少)燒土粒子(極少)白色粘土(極少)含有
17. 黑褐色 ローム粒子(極少)ロームブロック(極少)含有
18. 暗褐色 ローム粒子(極少)炭化粒子(極少)燒土粒子(極少)含有
19. 暗褐色 ローム粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
20. 暗褐色 ローム粒子(少)含有
21. 褐色 ローム粒子(特多)ロームブロック(少)含有
22. 暗褐色 ローム粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
23. 地山(ローム) 地山(ローム)
24. 地山(ローム)

第65図 第42・44号住居址・第29号土壤実測図



第46図 第42号住居址出土遺物実測図

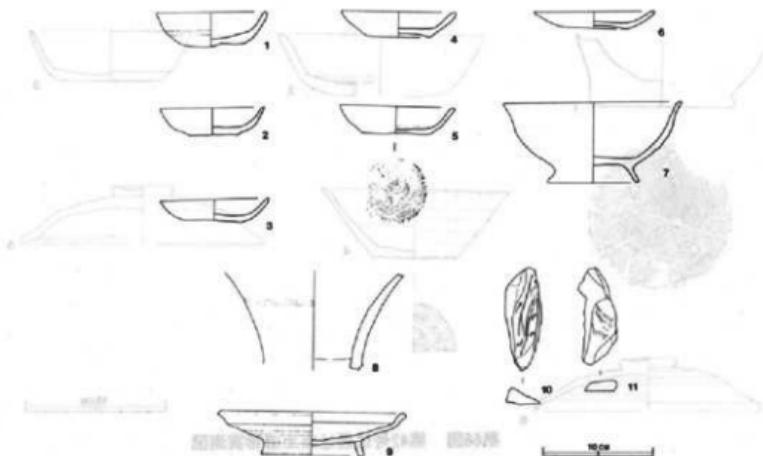
第四章 第42号住居址出土遺物実測図

出のものと、さへ「土器や瓦等の古物」（P. 101-102）ある。これらは、本調査区に於ける

第43号住居址（図50・67） 出土遺物実測図

本住居址は、調査区の中央部C3区b5, b6, b7, c5, c6, c7に確認され、東側には第34号住居址が、南側には第49号住居址が25%ほど切り込んでいる。これらの複合関係から本址は第34号住居址より新しく、第49号住居址とはほぼ同時期と思われるが、さらに第49号住居址より新しいものと思われる。本住居址の主軸方向はN-85°-Eで、規模は長軸4.79m、短軸4.82m、面積12.3m²を測り、隅丸長方形の平面形を呈している。壁高は40cm~45cmで、北壁と西壁ははっきりとしており、垂直に立ちあがっている。壁下には幅14cm、深さ8cm内外の壁溝を有している。床面は平坦で硬く踏み固められた状態を示しており、南西コーナー付近のP1は貯蔵穴と思われ、長径60cm、短径58cm、深さ30cmの不整円形を呈している。

覆土は6層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土、黒褐色土で多量のローム粒子、少量の炭化粒子・焼土粒子を含み下層は、極暗褐色土で多量のローム粒子、焼土粒子、少量の炭化粒子を含んでいる。カマドは東壁の南よりに位置し、西向きに構築されたが桑の栽培等によって擾乱されていた。出土遺物は土師器と須恵器が共存している。土師器の完存率の良好なもののがあげると東壁際床面から高台付壺（図67-7）、皿（図67-1・3・6）、北壁際床面から皿2枚（図67-2・5）、北西壁際北より床から皿（図67-4）を出土し、他は皿、壺、甕、壺、壺などの細片を出土している。



第67図 第43号住居址出土遺物実測図

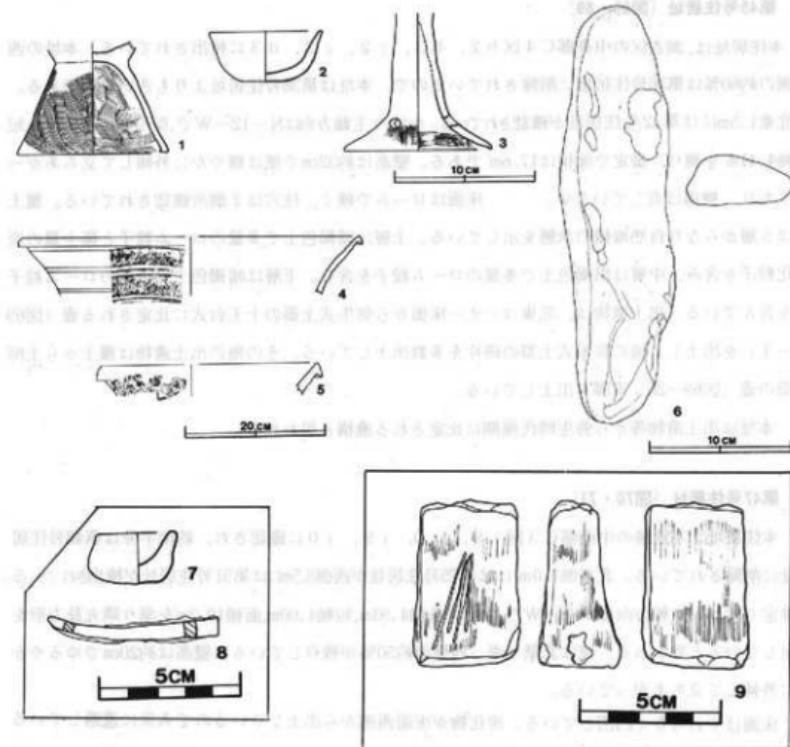
須恵器は西壁北よりの床から盤（図67-9）と壺、杯などの細片を出土している。その他の出土遺物は東壁際床面から砥石2片（図67-10・11）と鉄滓を少量出土している。

本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第44号住居址（図65・68）

本住居址は、調査区のC4区a4, a5, a6, b4, b5, b6, c5に確認され、東部の65%ほどは第83号住居址に削除されており、東コーナーには第87号住居址が、南側0.6mには第80号住居址が検出されている。中央部には炉址を半分ほど切って第29号土壤が切り込んでいる。西コーナーは第42号住居址に切られ、北西壁の中ほどで第40号住居址が接している。南コーナーには第84号住居址と第49号土壤が切り込んでいる。本址は第42号住居址、第83号住居址、第84号住居址、第87号住居址、第29号土壤、第49号土壤より古い遺構である。本址の主軸方向はN-71°Wで、規模は長軸6.55m、短軸6.45m、面積37.3m²を測り隅丸正方形の平面形を呈しているが、4基の住居址と2基の土壤が複合している。壁は北コーナーと南壁の一部が残存し、他は削消されている。

壁高45cm～60cmで壁はほぼ垂直に立ちあがっており、壁下に壁溝は有しない。床面は褐色を呈し、複合状態がはげしいので一部しか残存していない。ピットは13個所確認されP1～P4は主柱穴と考えられるが、貯蔵穴は確認することができなかった。本址の残存土層は11層からなり、上層は暗褐色土で極少量のローム粒子、炭化粒子を含み、下層は褐色土で少量のローム粒子、焼土粒子、ロームブロック、極少量の炭化粒子を含んでいる。炉址は中央より西に位置し、形状は楕円形



第68図 第44号住居址出土遺物実測図

を呈しているものと思われるが、炉址の約50%ほどは第29号土壌に切られている。燃焼部は皿状を呈し、ロームが赤く焼け、焼土が含まれていた。

出土遺物は土師器を中心に須恵器の破片を数点出土している。土師器の完存率の良好なものをおあげると、西壁中央付近床面直上から台付壺片（図68-1），他に覆土から小形环（68-2），手握土器（図68-7），台付壺片，高环片を数点出土している。その他の出土遺物は、北コーナー付近床面直上から砥石，北東部から砥石を，覆土から鉄釘を出土している。

本址は出土遺物等から古墳時代五領期に比定される遺構と思われる。

第45号住居址（図55・69）

本住居址は、調査区の中央部C 4 区 b 2, b 3, c 2, c 3, d 3 に検出されている。本址の西側の約60%は第36号住居址に削除されているので、本址は第36号住居址よりも古い造構である。北東1.5mには第42号住居址が確認されている。本址の主軸方向はN-12°-Wで、規模は長軸4.99m、短軸4.41mを測り、推定面積は17.6m²である。壁高は約32cmで壁は緩やかに外傾して立ちあがっており、壁溝は有していない。床面はロームで硬く、柱穴は2箇所確認されている。覆土は5層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で多量のローム粒子と極少量の炭化粒子を含み、中層は黒褐色土で多量のローム粒子を含む。下層は暗褐色土で少量のローム粒子を含んでいる。出土遺物は、北東コーナー床面から弥生式土器の十手式に比定される壺（図69-1）を出土し、他に弥生式土器の破片を多数出土している。その他の出土遺物は覆土から上部器の壺（図69-26）、支脚を出土している。

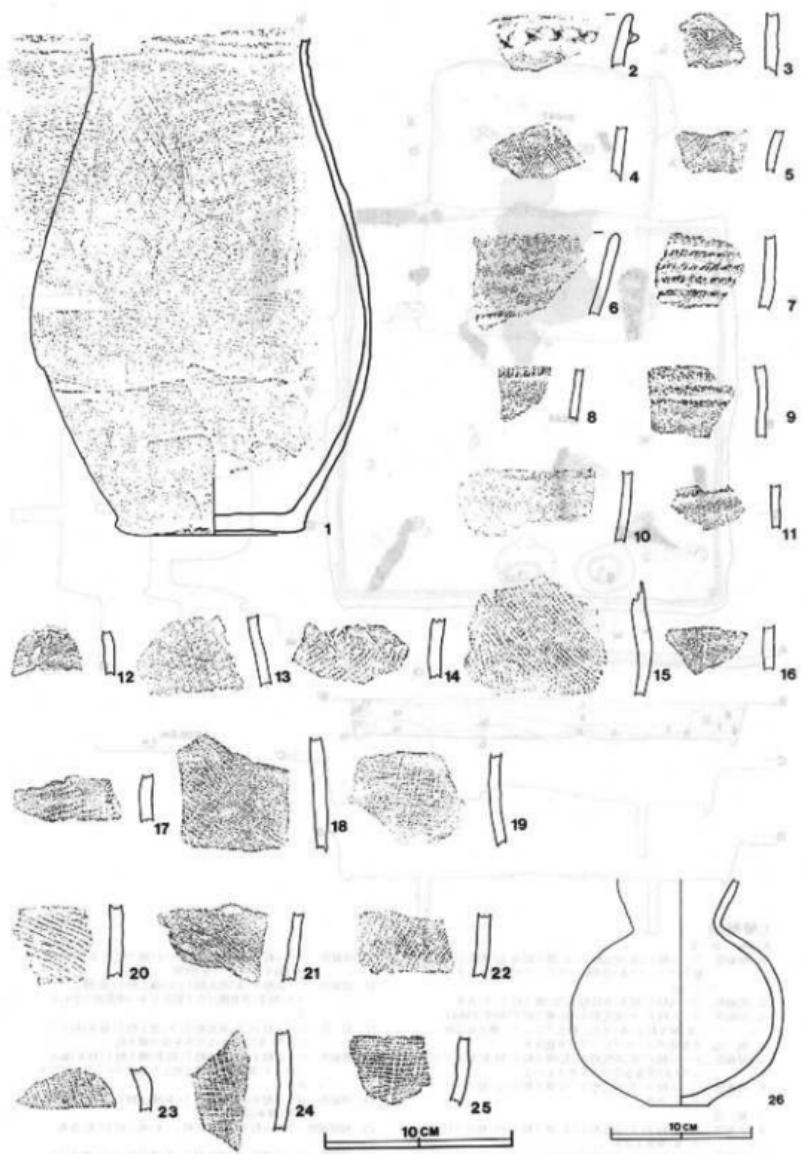
本址は出土遺物等から弥生時代後期に比定される遺構と思われる。

第47号住居址（図70・71）

本住居址は本遺跡の中南部C 3 区 i 9, i 0, j 9, j 0 に確認され、約南半分は第48号住居址に削除されている。北東側1.0mには第75号住居址が西側5.5mには第51号住居址が検出されている。推定で本址の主軸方向はN-8°-Wで、規模は長軸4.93m、短軸4.00m、面積19.2m²を測り隅丸長方形を呈していると思われる。壁は北壁と東、西壁の約50%が残存している。壁高は約20cmでゆるやかに外傾して立ちあがっている。

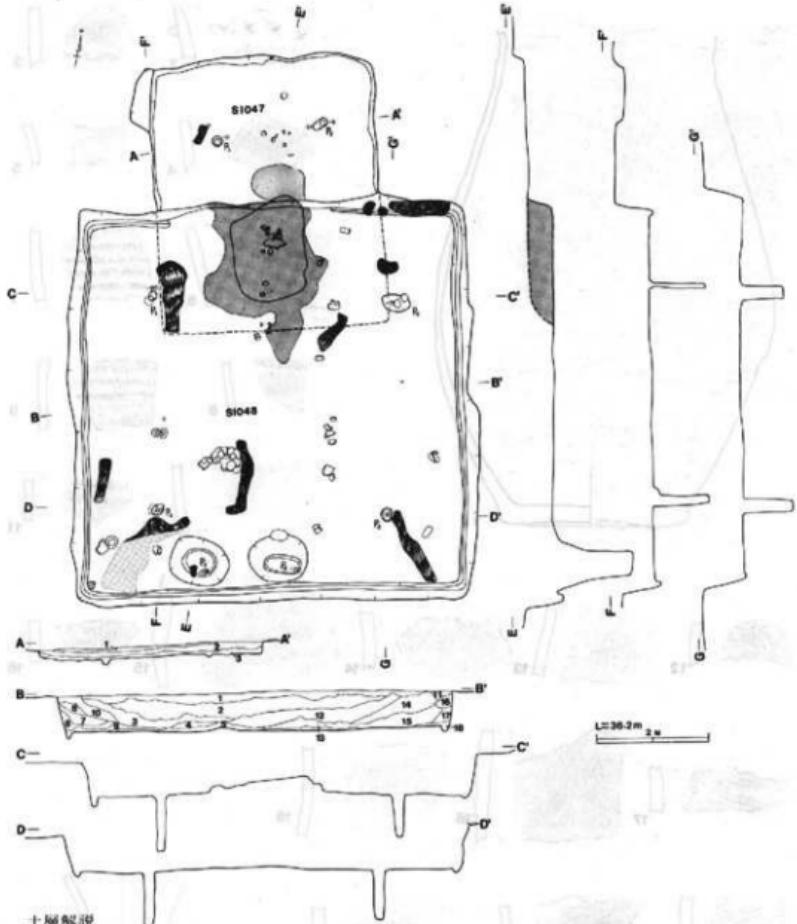
床面はやわらかく凸凹している。炭化物が床面西側から出土しているので火災に遭遇していると思われる。ピットは2箇所確認されP 1・P 2は上柱穴と考えられる。覆土は暗褐色土で3層からなり自然堆積の状態を示している。上層は多量のローム粒子、少量の炭化粒子、焼土粒子を含有し、下層は少量のローム粒子、炭化粒子、焼土粒子を含有している。炉址は住居址の中心部にあり、第48号住居址の北壁によって炉址の約南半分は切りとられている。規模は径93cm内外で中心部は赤く焼けている。出土遺物は床面から弥生式土器の破片を数点出土し、底部片には木葉痕・布目圧痕を確認することができる。

本址は出土遺物等から弥生式時代後期に比定される遺構と思われる。



第69圖 第45號住居址出土遺物實測·拓影圖

圖攝於甘肅省蘭州大學 · TA圖 · 2001年

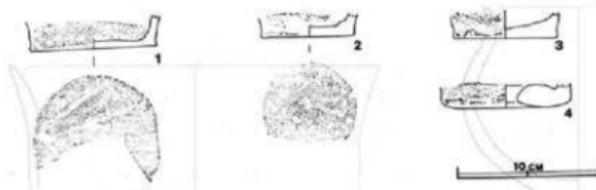


土層解説

- A-A' B-B'
- 暗褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(少)粘土粒子(少)砂粒子(多)
粘土ブロック(多)含有粘土ブロックが多量に含まれている
 - 暗褐色 ローム粒子(特多)炭化粒子(少)粘土粒子(少)含有
 - 暗褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(少)粘土粒子(特多)砂粒子
(少)粘土粒子(少)含有、粘土ブロック、粘土を主体
が受けロームブロックが多量含有
 - 褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(多)粘土粒子(特多)粘土ブロ
ック(多)含有かなり火を受けている
 - 暗褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(少)粘土粒子(少)粘土ブロ
ック(少)含有
 - 褐色
 - 灰褐色
 - 灰褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(多)粘土粒子(少)粘土ブロ
ック(多)泥色上含有
 - 灰褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(少)ロームブロック(多)含有

- 暗褐色 ローム粒子(特多)炭化粒子(少)粘土粒子(多)砂粒子
(少)粘土ブロック(少)含有
- 暗褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(少)粘土粒子(多)粘土ブロ
ック(特多)含有焼けた土礫片が多い埋没部と思われ
る
- 褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(少)粘土粒子(特多)粘土ブ
ロック(多)含有かなり火を受け地上化
- 灰褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(特多)粘土粒子(特多)粘土
ブロック(特多)含有焼土化した粘土ブロック(少)にあ
り
- 灰褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(多)粘土粒子(多)粘土ブロ
ック(多)含有
- 褐色暗色 ローム粒子(多)炭化粒子(多)粘土粒子(多)含有
- 暗褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(多)粘土粒子(少)粘土ブ
ロック(少)含有
- 黑色 ローム粒子(多)炭化粒子(多)粘土粒子(少)含有
- 黑色 ローム粒子(少)炭化粒子(少)ロームブロック(少)含有

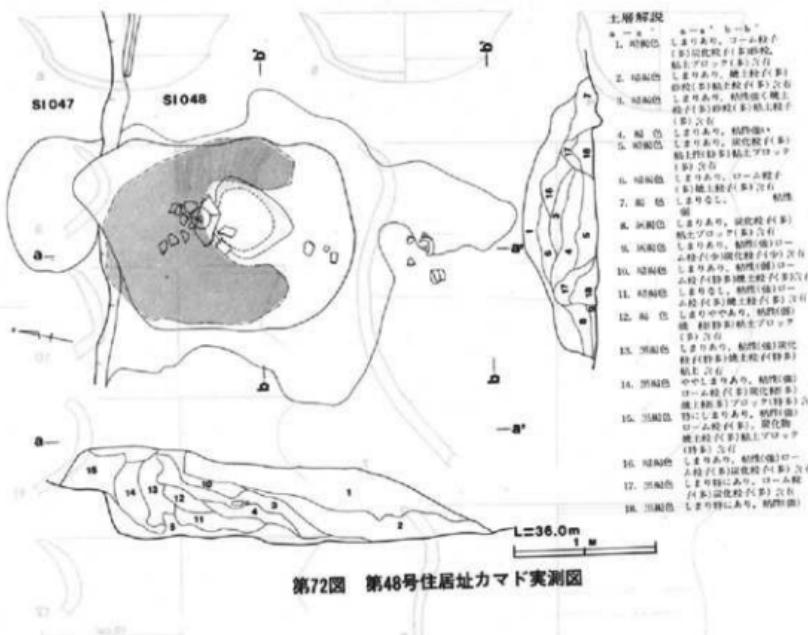
第70図 第47・48号住居址実測図



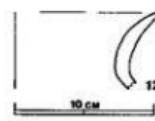
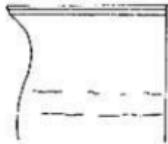
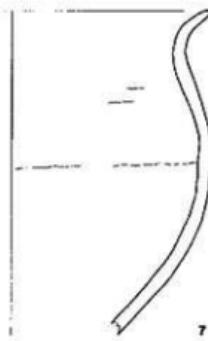
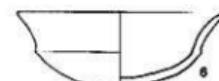
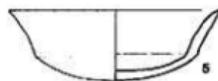
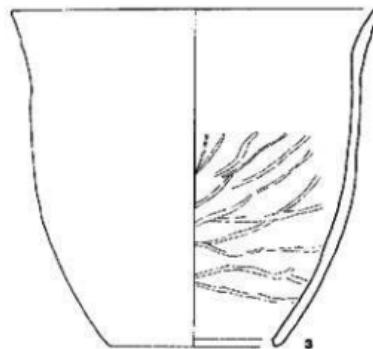
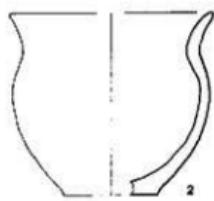
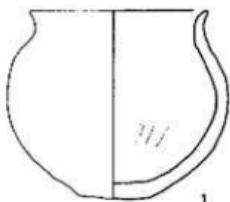
第71図 第47号住居址出土遺物拓影図

第48号住居址 (図70・72・73(1)2)

本住居址は、調査区の南部中ほどC 3区 j 8, j 9, j 0, D 3区 a 8, a 9, a 0, b 9, b 0に確認され、北壁は第47号住居址の約南半分を削除しており、本址は第47号住居址より新しい遺跡に確認され、北壁は第47号住居址の約南半分を削除しており、本址は第47号住居址より新しい遺



第72図 第48号住居址カマド実測図

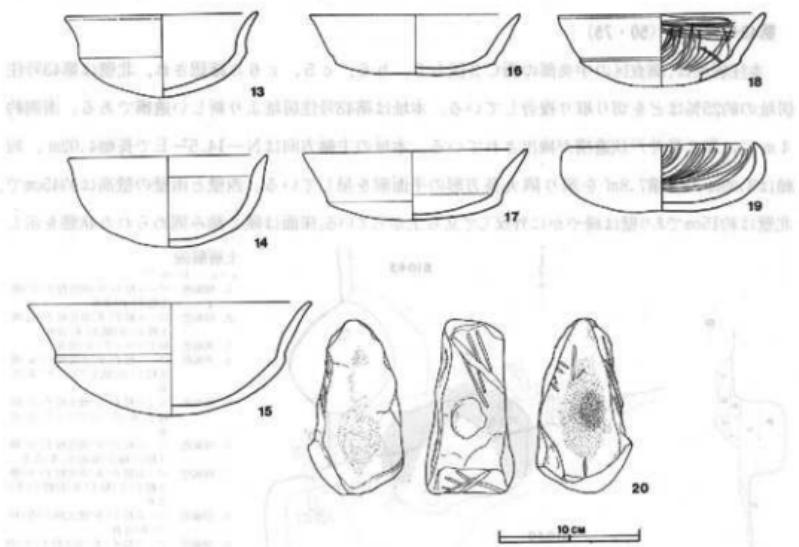


10 CM

第73圖(1) 第47·48號住居址出土遺物實測圖

構である。北東0.7mには第75号住居址が、西側3.2mには第51号住居址が、南西0.6mには第67号住居址が、南側4.2mには第68号住居址が検出されている。本住居址の主軸方向はN-10°-Wで、規模は長軸7.21m、短軸7.02m、面積43.6m²を測り隅丸長方形を呈している。壁高は約60cmで壁はほぼ垂直に立ちあがり壁下には、幅15cm、深さ11cm内外の「U」字形をした壁溝が廻っている。床面は平坦で踏み硬められた状態で硬くぱりぱりとしている。炭化材、焼土が床面全体から出土しているので火災に遭遇していると思われる。

ピットは6個所確認されP 1～P 4は主柱穴と考えられ、南壁際西よりにあるP 5は貯蔵穴と考えられる。規模は長径106cm、短径85cm、深さ136cmの不整椭円形を呈している。P 6も貯蔵穴でP 5に隣接し検出され、規模は長径104cm、短径84cm、深さ133cmを測り、不整椭円形を呈している。覆土は18層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で、多量のローム粒子、少量の焼土粒子、炭化粒子と粘土ブロックを含み、中層は暗褐色土・黒褐色土で少量のローム粒子、



第73図(2) 第47・48号住居址出土遺物実測図



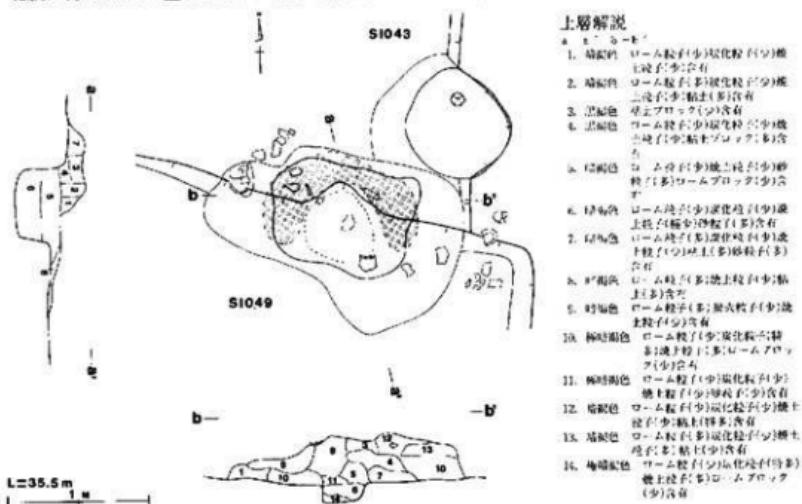
多量の炭化粒子、特に多量の焼土粒子、粘土ブロックを含み、下層は暗褐色・黒褐色土で多量のローム粒子、多量の炭化粒子、焼土粒子、粘土ブロックを含んでいる。カマドは北壁の中央に位置し、規模は長径156cm、短径130cmで北壁を80cm幅で、30cmほど掘り込んで煙道としている。

袖部は黒色土混りの砂質粘土で、カマドは南東向きに構築されている。燃焼部は長径60cm、短径52cmで不整円形を呈し平坦であり、土師器片を数点出土している。出土遺物は土師器を主に須恵器は細片のみである。土師器の完存率の良好なものをあげると、カマドから壺2個(図73-5・6)、楕(図73-4)、甕2個(図73-1・2)、瓶(図73-3)を、北東コーナー床直上より壺(図73-13)、南西コーナー床直上から甕(図73-14・17)、南壁際P6付近床直上から壺を出土し、他には甕(図73-15・18)と甕、器台などの破片を出土している。その他の出土遺物は、南西コーナーP4付近床直上より砥石2片(図73-20)を出土している。

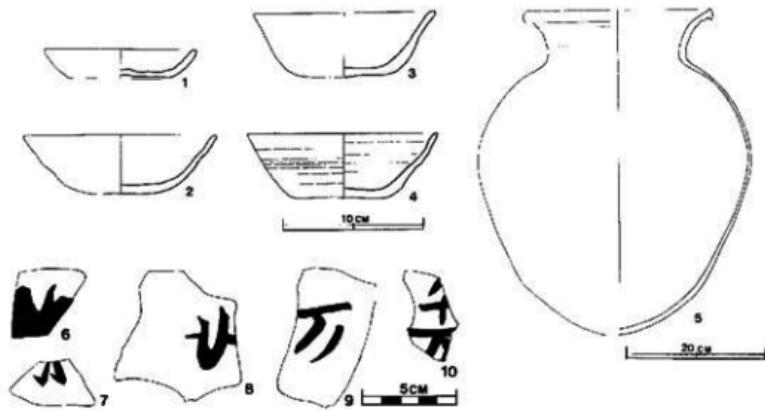
本址は古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

第49号住居址(50・75)

本住居址は、調査区の中央部の西C3区b5、b6、c5、c6に確認され、北壁は第43号住居址の約25%ほどを切り取り複合している。本址は第43号住居址より新しい遺構である。南側約4mには第2号戸戸状遺構が検出されている。本址の主軸方向はN-14.5°Eで長軸4.02m、短軸は3.09m、面積7.8m²を測り隅丸長方形の平面形を呈している。西壁と南壁の壁高は約45cmで、北壁は約15cmであり壁は緩やかに外反して立ち上がっている。床面は硬く踏み固められた状態を示し



第74図 第49号住居址カマド実測図



第75図 第49号住居址出土遺物実測図

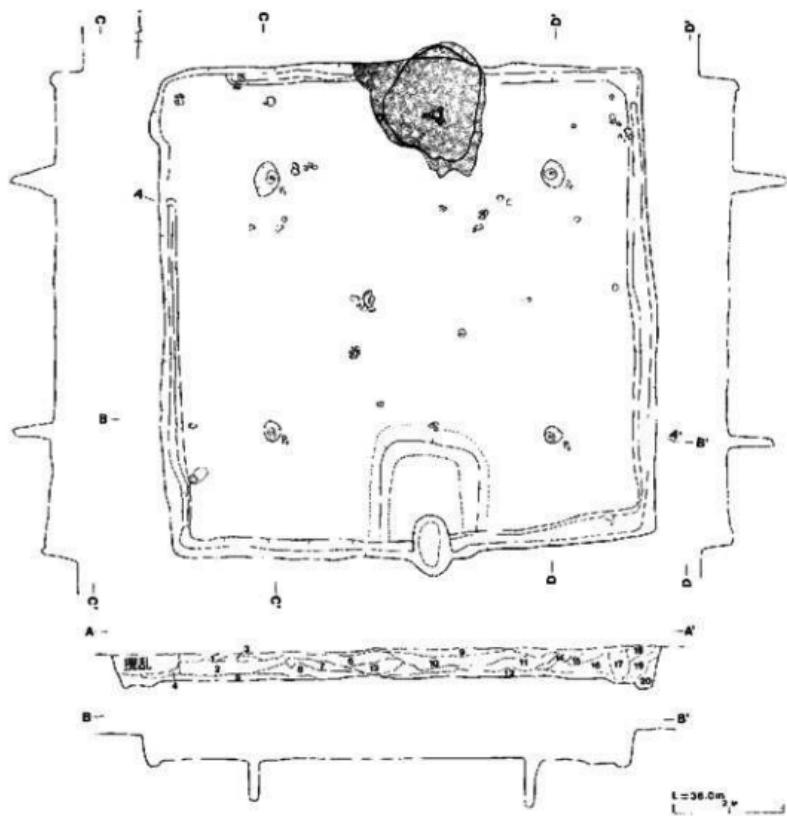
ている。ピットは4個所確認され、主柱穴は検出できなかった。南東コーナーのP3は貯蔵穴と思われ、規模は長径60cm、短径32cm、深さ25cmの長方形を呈している。

本址の覆土は11層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒色土・極暗褐色土、下層は暗褐色土で、ローム粒子、炭化粒子、焼土粒子を含有している。カマドは北壁の中央部東よりに位置し南向に構築されている。規模は長径220cm、短径160cmで、北壁を115cm幅で40cmほど掘り込んで粘土で補強して煙道を構築している。燃焼部は長径102cm、短径97cmで、26cmほど不整円形に掘りこめている。袖部は黒色土混りの砂質粘土である。

出土遺物は土師器と須恵器を共伴している。土師器の完存率の良好なものをあげると、カマドから内黒の壺(図75-3)、皿(図75-1)、墨書き器5点(図75-6~10)を出土し、他は壺(図75-2)などの破片を出土している。須恵器は南東壁北よりの床面から壺(図75-4)南壁付近床面から蓋、片など細片出土している。本址は出土遺物等から岡分期に比定される造構と思われる。

第50号住居址(図76~78(1)(2))

本住居址は、本遺跡の南西部C3区h3, h4, h5, i3, i4, i5, j3, j4, j5に確認され、北東約8.0mには方形周溝遺構が、南側2.0mには第57号住居址、第56号住居址、南東0.4mは第23号土塙が、2.4mは第51号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN-3°-Wで



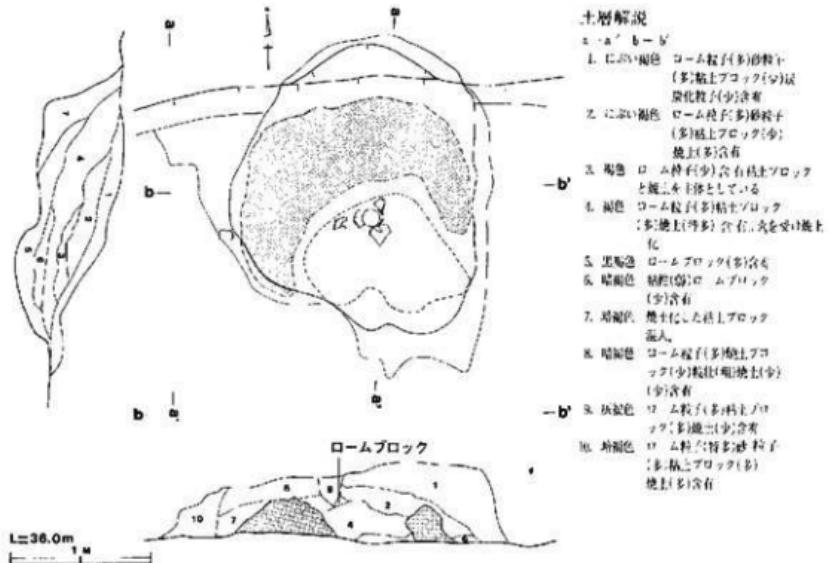
土層解説

A-A'

1. 褐色 非粘性
2. 褐色 ローム粒子(多)含有
3. 暗褐色 ローム粒子(少)含有
4. 極暗褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(極少)含有
5. 褐色 ローム粒子 粘性、塊状粒子、炭化粒子(極少)含有
6. 暗褐色 ローム粒子(多)含有
7. 黑褐色 ローム粒子(少)含有
8. 黑褐色 ローム粒子(少)黑色土含有
9. 極暗褐色 ローム粒子(少)含有
10. 暗褐色 ローム粒子(少)塊状粒子(極少)含有

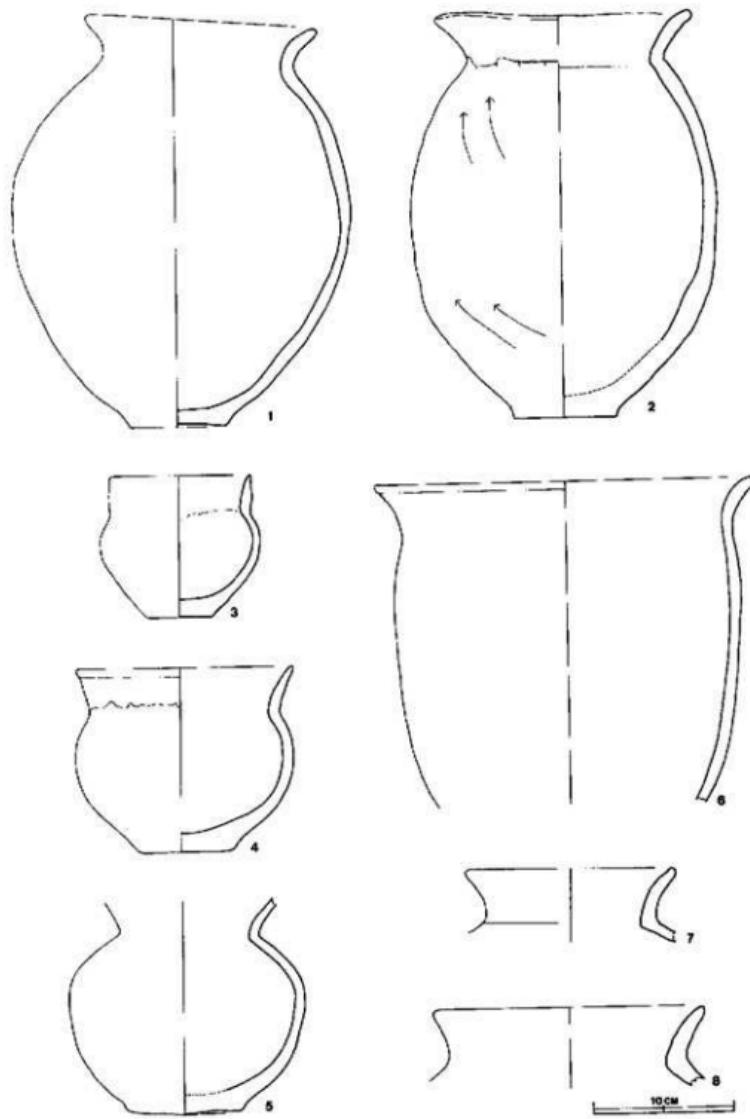
11. 褐色 砂土粒子(多)含有
12. 褐色 ローム粒子(多)含有
13. 暗褐色 ローム粒子(多)含有
14. 黑褐色 ローム粒子(少)含有
15. 極暗褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(極少)含有
16. 暗褐色 ローム粒子(多)ローム土、黑色土含有
17. 暗褐色 ローム粒子(多)含有
18. 暗褐色 ローム粒子(多)炭土粒子(極少)含有
19. 暗褐色 ローム土、黑色土(中)含有
20. 暗褐色 ローム粒子、ローム土、黑色土(中)含有

第76図 第50号住居址実測図

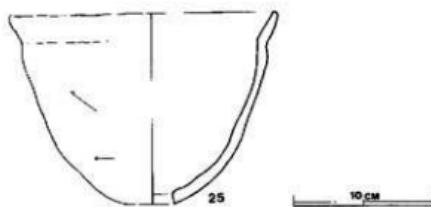
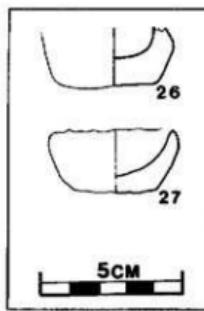
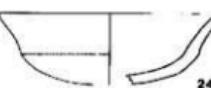
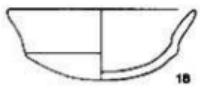
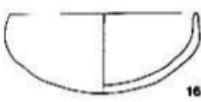
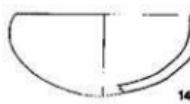
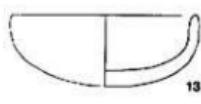
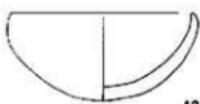
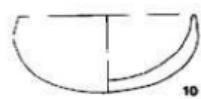


第77図 第50号住居址カマド実測図

規模は長軸9.01m、短軸9.00m、面積65.8m²を測り、隅丸正方形の平面形を示している。壁高は約50cmで壁はほぼ垂直に立ちあがっている。壁下には幅20cm、深さ10cm内外の壁溝がカマドを除いて廻っている。床面は踏み固められた状態を示し、硬く平坦である。南壁中央部に出入口の施設と思われる一段高いベルトが半周し、その中心に長径110cm、短径66cm、深さ60cmほどの楕円形の土壙が半分ほど外にはり出して設けられている。ピットは5個所確認されP1～P4は主柱穴と考えられる。覆土は20層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土・極暗褐色土で多量のローム粒子と極少量の焼土粒子を含み、中層は黒褐色土、暗褐色土で多量のローム粒子を含み、下層は褐色土で多量のローム粒子と焼土粒子、極少量の炭化粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央に位置し、規模は長径185cm、短径160cmで北壁を130cmの幅で約30cmほど掘り込んで煙道としている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で、ほぼカマドは南向きに構築されている。燃焼部は長径118cm、短径70cm、深さ30cmを測り、不整楕円形に掘り窪められており、土師器片を数点出土している。



第78図(1) 第50号住居址出土遺物実測図

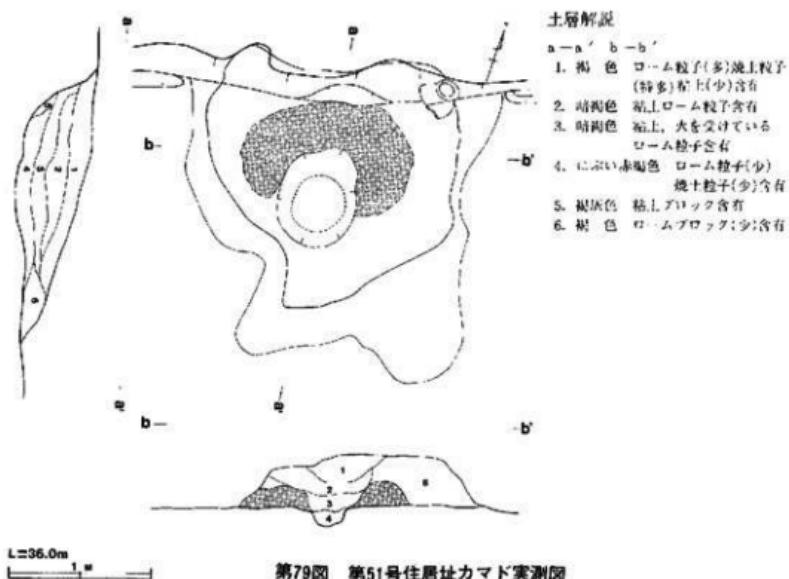


第78図(2) 第50号住居址出土遺物実測図

出土遺物は、土師器の环を多数出土し、須恵器は覆土から环等の細片を数点出土している。土師器の完存率の良好なものをあげるとカマド内やその付近から甕(図78-1), 环9個(図78-10~13・16・17・19・21・23), 北東コーナーの床面から环2個(図78-9・15), 南東部覆土から环(図78-22), 南西コーナーの床面から甕(図78-2), 床面直上から环(図78-18), 北西コーナーの床面から小型甕(図78-3), 床面直上から环(図78-21), 中央部床面直上から甕, 甕(図78-4)を出土し, 他には床面直上から手挽土器(図78-26・27)や甕, 瓶, 环(図78-14・20)器台, 高环などの破片を多数出土している。本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高窯に比定される遺構と思われる。

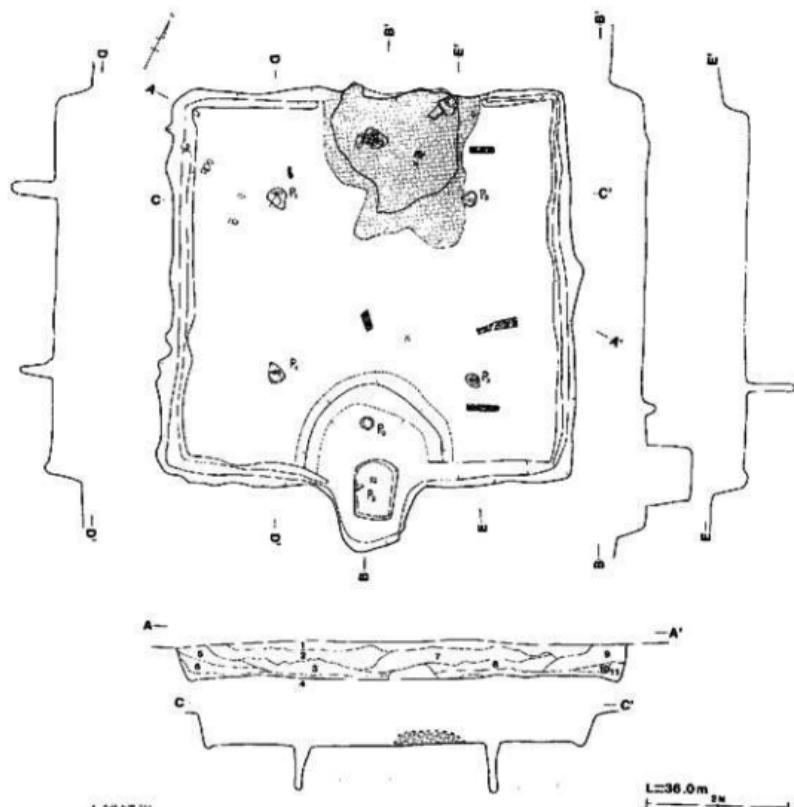
第51号住居址(図79~81)

本住居址は、調査区の南部中ほどC3区j6, j7, j8, D3区a6, a7, a8に確認され、北西2.5mには第50号住居址が、0.8mには第22号土塙が南西1.0mには第97号住居址が、南側2.4mには第3号井戸状遺構が、西側3.2mには第48号住居址が検出されている。本住居址の主軸方向はN-27°Wで、規模は長軸5.70m、短軸5.60m、面積25.9m²を測り、隅丸正方形を呈する。壁高は35cm~45cm内外で壁は緩やかな傾斜をして立ちあがっている。壁下には幅15cm~20cm、深さ5cm内外の壁溝がカ



第79図 第51号住居址カマド実測図

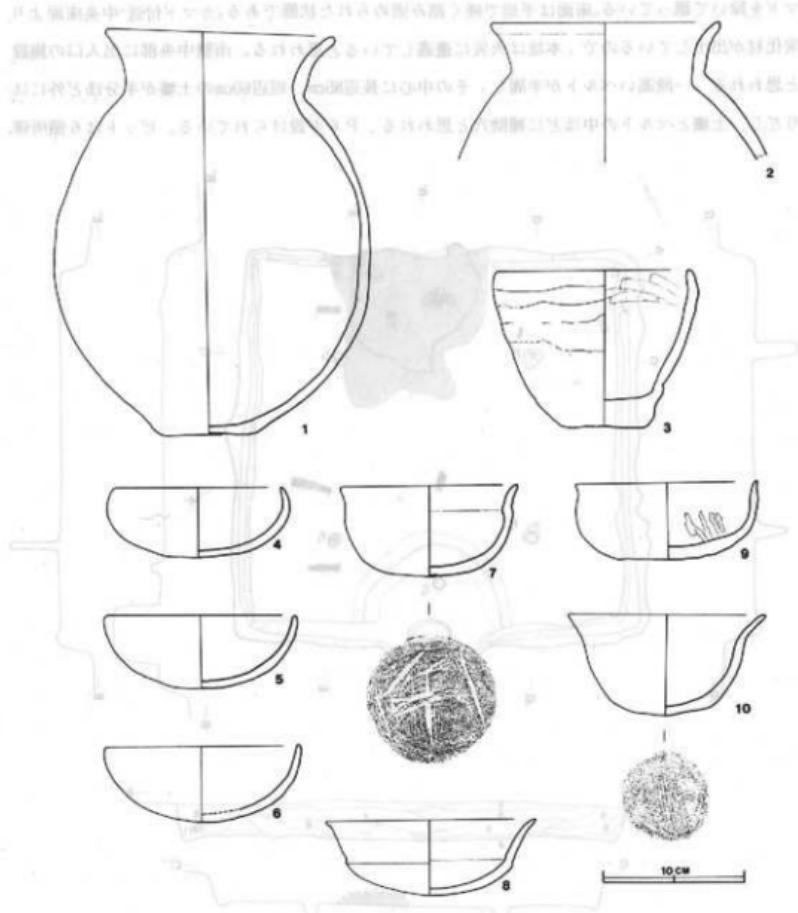
マドを除いて残っている。床面は平坦で硬く踏み固められた状態である。カマド付近・中央床面より炭化材が出土しているので、本址は火災に遭遇していると思われる。南壁中央部に出入口の施設と思われる。一段高いベルトが半周し、その中心に長辺85cm、短辺60cmの土壌が半分ほど外にはりだし、土壤とベルトの中ほどに補助穴と思われる、P 6が設けられている。ピットは6個所確



土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------|---------|-------------------------|
| 1. 暗褐色 | ローム粒子(少)含有 | 7. 暗褐色 | ローム粒子(少)炭化粒子(極少)含有 |
| 2. 暗褐色 | ローム粒子(中)含有 | 8. 黒褐色 | ローム粒子(多)炭化粒子(極少)粘土(多)含有 |
| 3. 暗褐色 | ローム粒子(少)粘土(少)含有 | 9. 暗褐色 | ローム粒子(多)含有 |
| 4. 暗褐色 | ローム粒子(少)炭化粒子(極少)粘土(少)含有 | 10. 暗褐色 | ローム粒子(中)含有 |
| 5. 細色 | ローム粒子(少)含有 | 11. 暗褐色 | ローム粒子(少)粘土(特多)含有 |
| 6. 暗褐色 | ローム粒子(少)ロームブロック(少)含有 | | |

第80図 第51号住居址実測図



第81図 第51号住居址出土遺物実測図

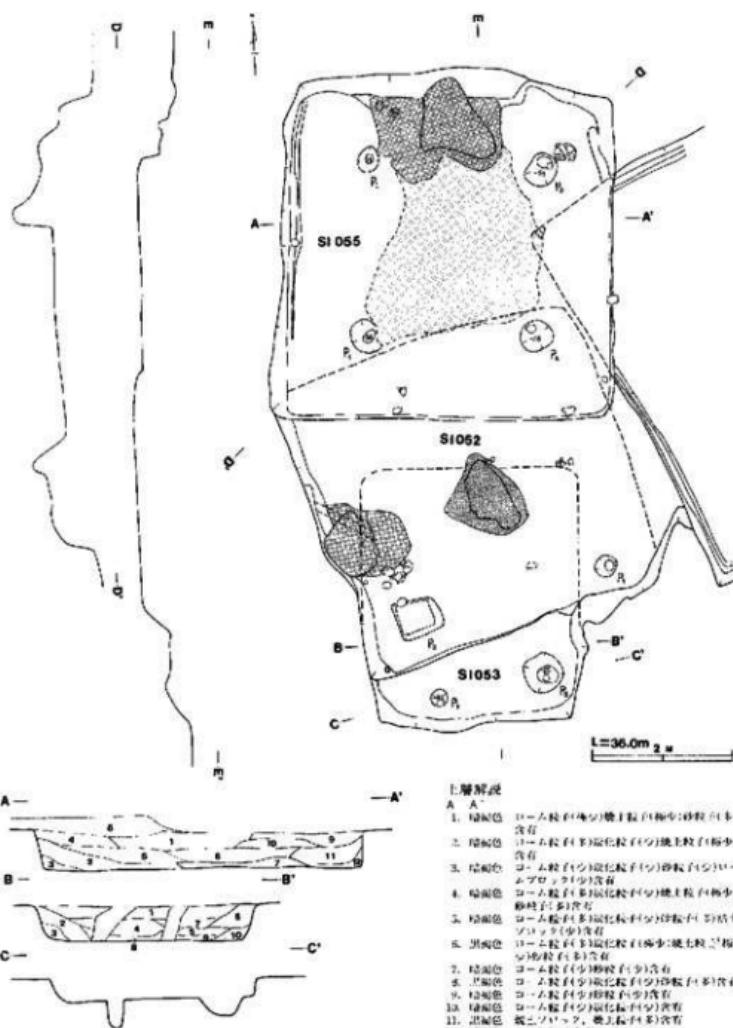
認められP 1～P 4は主柱穴と考えられる。覆土は20層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土・褐色土で多量のローム粒子を含み、中層は暗褐色土・極暗褐色土で少量のローム粒子、極少量の炭化粒子を含み、下層は極暗褐色土・暗褐色土で少量のローム粒子、極少量の焼土粒子を含んでいる。

カマドは北壁の中央に位置し長径122cm、短径116cmで北壁を70cmの幅で14cmほど掘り込んで煙道部を構築している。燃焼部は長径30cm、短径28cm、深さ5cmほどの円形に掘り空めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土でカマドは南東向きに構築されている。出土遺物は土師器を中心に須恵器の破片を数点出土する。土師器の完存率の良好なものをあげると、カマドから鉢（図81-3）、163個（図81-5・6・9）、椀（図81-7）、北西部床面直上から甕（図81-2）と南壁中央部にある出入口の施設と思われる土壙内より杯（図81-8）を出土し、他に甕（図81-1）、支脚、杯（図81-4）、壺などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は、カマド付近から砥石2片と弥生式土器の破片を数点出土している。本址は出土遺物等から古墳時代鬼高期に比定される遺構と思われる。

第53号住居址（図82・85(1)(2)）

本住居址は、調査区の中央部西端B3区15、16に確認され、第52号住居址の上に貼り床をし構築している。本址は第52号より新しい遺構であり、北東1.0mには第55号住居址が北東1.0mには第54号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN-2°-Wで南壁と東壁の一部を残し、規模は長軸3.70m、短軸3.10mで面積10.1m²を測り隅丸長方形を呈している。床面は南壁際に残存しているだけで、ピットは2個所検出されP1は主柱穴と思われ、他は検出できなかった。南東コーナーのP2は貯蔵穴と思われ、規模は長径25cm、短径25cm、深さ40cmの円形を呈している。覆土は9層からなりトレンチャーによる搅乱を受けている。上層は暗褐色土で少量のローム粒子、極少量の焼上粒子、少量の炭化粒子を含み、下層は暗褐色土で多量のローム粒子、少量のロームブロックを含んでいる。カマドは、第52号住居址の床面中央部に検出され、第53号住居址の北壁中央部に付設されていた。トレンチャーによる破壊を受けているので断面の上層を調査したにすぎない。断面を見るとはば中間に厚さ約5cmほどの焼上のベルトがあり、その下部に白色粘土帯を有していた。

本址の出土遺物は少なく、須恵器を中心に出土している。須恵器の台付長頭壺片（図85(2)-13）を床面直上から、南壁付近床面直上より内黒の高台付杯を北東部床面直上より杯、他には杯、蓋などの細片を数点出土している。その他の出土遺物はカマドより鉄製品を2点（図85(2)-19）砥石（図85(2)-17）を出土している。本址の時期を決定するにたる出土遺物は少ないがほぼ国分期に比定される遺構ではないかと思われる。



土層解説

B-B'

1. 暗褐色 ローム粘土(少)燒土粒子(少)砂粒子(少)含有
2. 暗褐色 ローム粘土(多)炭化粘土(少)燒土粒子(少)含有
3. 暗褐色 ローム粘土(少)炭化粘土(少)砂粒子(少)ロームブロック(少)含有
4. 暗褐色 ローム粘土(少)炭化粘土(少)燒土粒子(少)含有

5. 暗褐色 ローム粘土(少)炭化粘土(多)燒土粒子(多)含有

6. 暗褐色 ローム粘土(多)炭化粘土(少)燒土粒子(少)含有

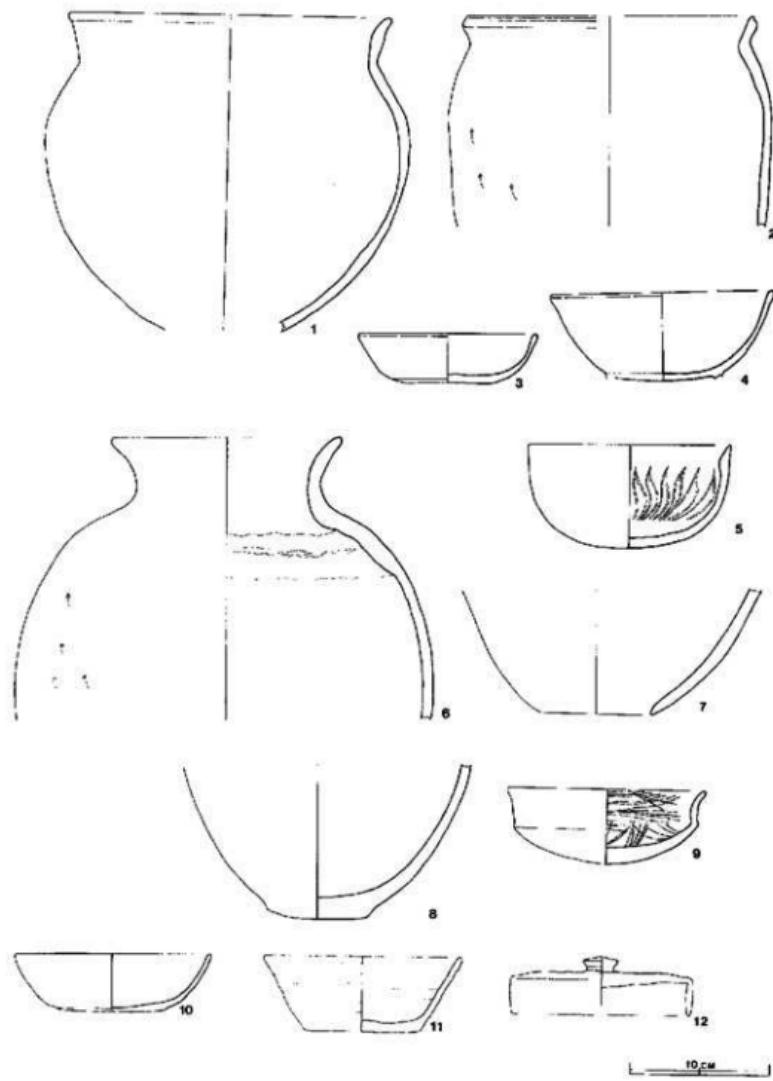
7. 暗褐色 ローム粘土(多)炭化粘土(少)砂粒子(多)含有

8. 暗褐色 ローム粘土(多)炭化粘土(少)砂粒子(少)含有

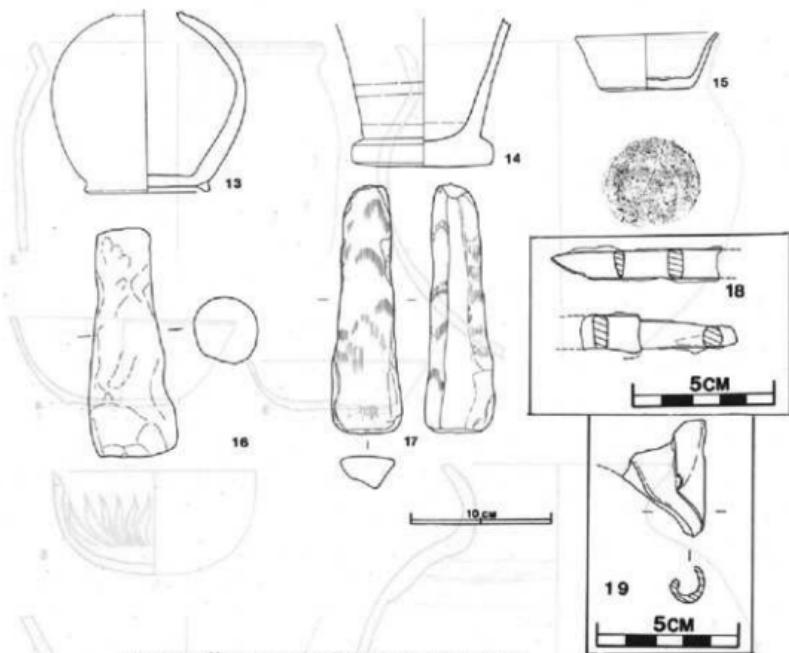
9. 暗褐色 白色砂土(少)含有

10. 暗褐色 烧土粒子含有

第82回 第52・53・55号住居址実測図



第85図(1) 第52・53・54・55号住居址出土遺物実測図

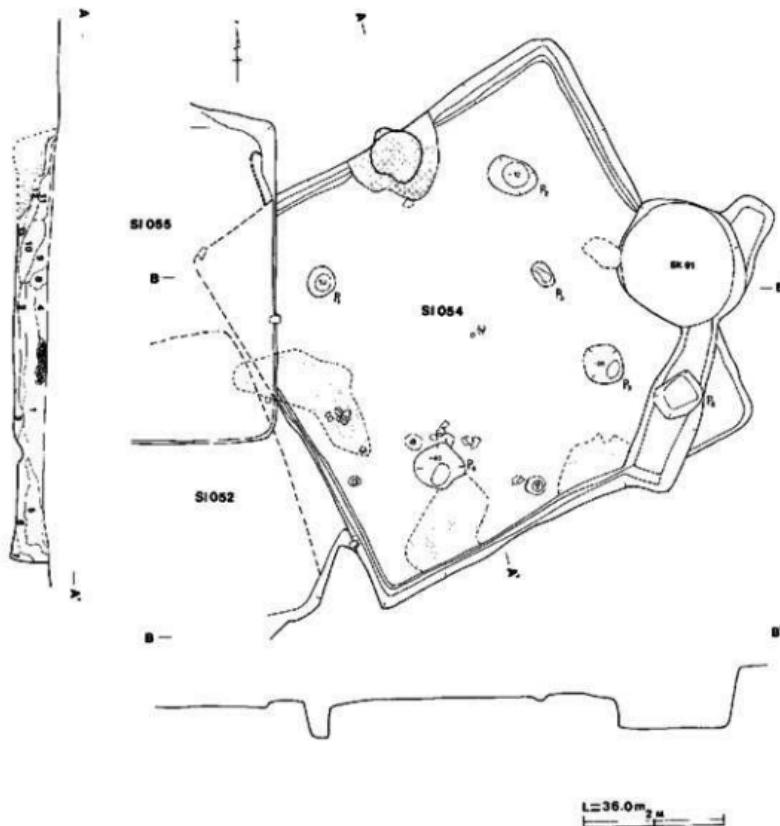


第85図(2) 第52・53・54・55号住居址出土遺物実測図

第54号住居址 (図84・85(1)(2))

本住居址は、調査区の中央部西端、B3区h6, h7, i6, i7, i8, j6, j7に確認され、西コーナーは第55号住居址に切られ、南西壁は第52号住居址と接している。東コーナーは第19号土壙、第39号土壙が切り込んでいる。北側約1.8mには第25号土壙が、南東約1.6mには第1号掘立柱建築址が検出されている。

本址の主軸方向はN-31°Wで規模は長軸5.96m、短軸5.94m、面積33.0m²で隅丸正方形の平面形を呈している。壁高は50cm内外で壁はほぼ垂直に立ちあがっている。壁下には幅15cm、深さ5cm内外の壁溝が東・西コーナーを除いて廻っている。床面は硬く踏み固められた状態を示しているが凸凹している。焼土が北東壁・南西壁付近と南コーナーに出土しているので、本址は火災に遭遇していると思われる。ピットは6個所確認されP1～P4は主柱穴と考えられるがP5は補助穴と思われる。東コーナーのP6は貯蔵穴と思われ規模は長辺70cm、短辺55cm、深さ40cmほどのはぼ長方形を呈している。覆土は17層からなり上層は本址が火災に遭い廃棄された後ロームで埋めもどされたものと思われ、ローム粒子、ハードロームブロックを多量に含んでいる。下層は暗褐色土で少量のローム粒子、炭化粒子、焼土粒子、ロームブロックを含んでいる。



土層解説 A-A'

1. 埋藏地 ローム地盤と重り合った「層」
2. 埋藏地 ローム地盤と重り合った「層」
3. 埋藏地 ローム地盤と重り合った「層」
4. 埋藏地 ローム地盤と重り合った「層」
5. 埋藏地 ローム地盤と重り合った「層」

6. 埋藏地 ローム地盤(未熟化粘土)と重り合った「層」
7. 埋藏地 ローム地盤(未熟化粘土)と重り合った「層」
8. 埋藏地 ローム地盤(未熟化粘土)と重り合った「層」
9. 埋藏地 ローム地盤(未熟化粘土)と重り合った「層」
10. 埋藏地 ローム地盤(未熟化粘土)と重り合った「層」

11. 埋藏地 ローム地盤(少少熟化粘土)と重り合った「層」
12. 埋藏地 ローム地盤(少少熟化粘土)と重り合った「層」
13. 埋藏地 ローム地盤(少少熟化粘土)と重り合った「層」
14. 埋藏地 ローム地盤(少少熟化粘土)と重り合った「層」
15. 埋藏地 ローム地盤(少少熟化粘土)と重り合った「層」

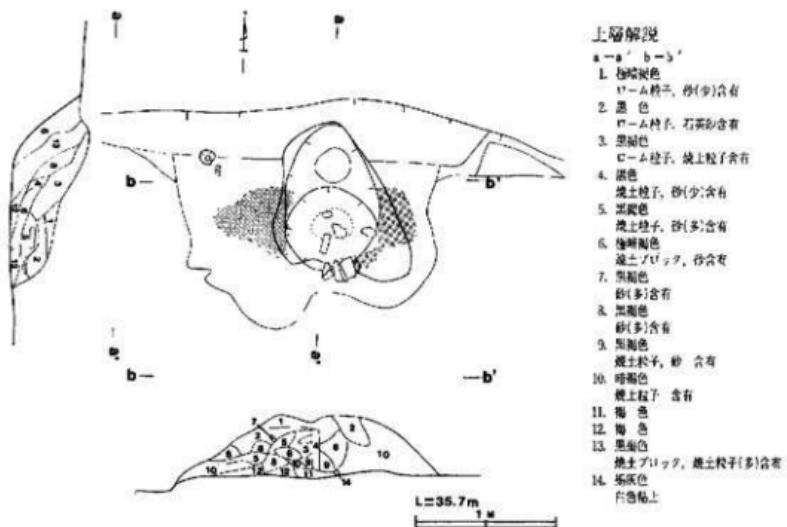
第84図 第54号住居址・第19号土壤実測図

カマドは北西壁の中央から東よりに付設され規模は長径88cm、短径85cm、北西壁を33cm幅で、15cmほど掘り込んで煙道部としている。燃焼部は長径28cm、短径21cmほどで円形に掘り深めている。袖部は黒色土混りの粘土でカマドは南東向きに構築されている。出土遺物は土師器が中心で、須恵器は北東部床面から壺(図85-9)と覆土からの壺片(図85-11)を出土し、他に細片を数点出土しているのみである。土師器の完存率な良好なものをあげると中央部床面より甕(図85-5)、南コーナー床面より甕(図85-1)、南東壁付近床面直上より甕底部(図85-7)、蓋片を出土し他は甕、瓶などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は、カマドより鉄製品2片(図85-18)を出土している。

本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

第55号住居址(図82・83・85(1):2)

本住居址は、遺跡の中央部西端 B3区h5, h6, i5, i6に確認され、東壁は第54号住居址の西コーナーに切り込み、南壁は第52号住居址の北壁に切り込んでいる。本址は第52号

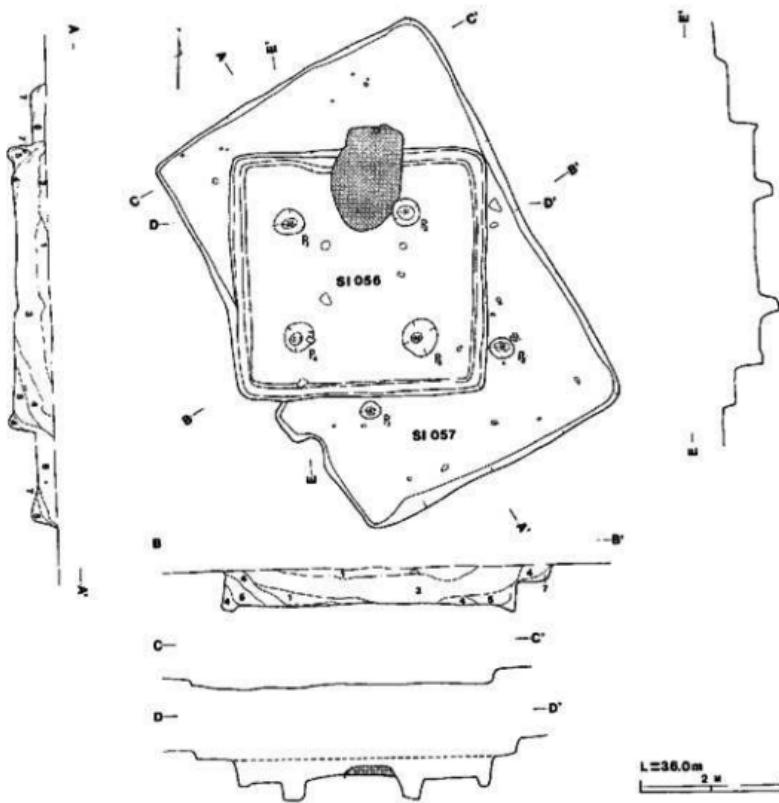


第83図 第55号住居址カマド実測図

住居址、第54号住居址より新しい遺構である。本址の主軸方向はN-70°で、規模は長軸4.83m、短軸は4.70m、面積18.5m²ほどで、隅丸正方形を呈している。壁高は約72cmで壁は垂直に立ちあがり、南壁と東壁は確認できない。床面は褐色を呈し、硬く平坦である。ピットは4個所確認されP1～P4は土柱穴と考えられるが貯蔵穴は有していない。覆土は12層からなり暗褐色土で東部の第54号住居址、南部の第53号住居址の上層を切り自然堆積の状態を示している。上層は多量のローム粒子、炭化粒子、焼土粒子を含む。中層は多量のローム粒子と炭化粒子を含み、下層はローム粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央から東よりに位置し、規模は長径88cm、短径85cmで北壁を33cmの幅で、15cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径28cm、短径21cm、深さ16cmで円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土でカマドは南向きに構築されている。出土遺物は土師器と須恵器が共存している。土師器の完存率の良好なものをあげると、カマド内より甕口縁部(図85-2)支脚(図85-16)、内黒の高台付壺(図85-4)と壺、南壁付近床面より甕底部を出土し、他には甕、高杯などの破片を多数出土している。須恵器はカマドより蓋(図85-12)をカマド付近より壺(図85-3)、北東コーナー床面より壺(図85-10)と、西壁付近床面より壺を、他は細片を少数出土している。その他の出土遺物はカマド内より砾石を出土している。本址は出土遺物等からⅣ期に分類される遺構と思われる。

第56号住居址(図86)

本住居址は、調査区の南西部D3区a3、a4、b3、b4に確認され、南西コーナーだけを残して第57号住居址にすっぽりと切り込んでおり、本址は第57号住居址より新しい遺構である。北側4.3mには第50号住居址が、南西1.6mには第58号住居址が、東側4.8mには第97号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN-3°-Wで規模は長軸3.55m、短軸3.50m、面積9.9m²を測り隅丸正方形を呈している。壁面は褐色のロームで、壁はやや垂直ぎみに約35cmほど立ちあがっている。壁下には幅約18cm、深さ約6cmの壁溝がカマドの部分を除いて廻っている。床面は暗褐色土で中央部がやや硬い状態を示しているが壁面に近づくにつれて軟らくなっている。ピットは4個所確認されP1～P4は土柱穴と考られるが、貯蔵穴は有していない。



土層解説

A-A' B-B'

1. 黒褐色 ローム粒子(少)含有
2. 黒 色 ローム粒子(少)含有
3. 黒褐色 ローム粒子(少)ロームブロック(少)含有
4. 黒褐色 ム・粒子(少)含有
5. 黒 色 ローム粒子(微)含有
6. 黒褐色 ローム粒子(微)含有
7. 黒褐色 ロームブロック(多)含有

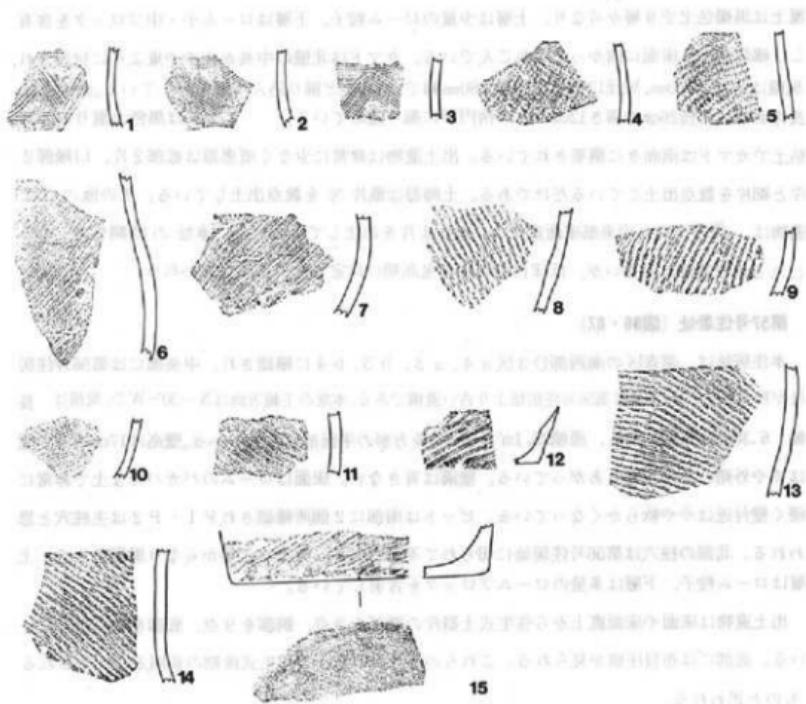
第86図 第56・57号住居址実測図

覆土は黒褐色土で3層からなり、上層は少量のローム粒子、下層はローム小・中ブロックを含有し、確認面から床面に向かって流れこんでいる。カマドは北壁の中央からやや東よりに付設され、規模は、長径130cm、短径125cmで、北壁を80cm幅で、30cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径49cm、短径26cmで深さ12cmほどの楕円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土でカマドは南向きに構築されている。出土遺物は非常に少なく須恵器は底部2片、口縁部2片と細片を数点出土しているだけである。土師器は瓶片等を数点出土している。その他の出土遺物は、鉄洋1点と中央部床面直上より延石1片を出土している。本址の時期を決しうるにたる出土遺物は少ないが、ほぼ古墳時代の鬼高型に比定される遺構と思われる。

第57号住居址（図86・87）

本住居址は、調査区の西南部D 3 [X a 4, a 3, b 3, b 4]に確認され、中央部には第56号住居址が複合している。本址は第56号住居址より古い造構である。本址の主軸方向はN-30°-Wで、規模は長軸6.30m、短軸4.20m、面積25.1m²を測り、長方形の平面形を呈している。壁高は17cm内外で壁はやや外傾しながら立ちあがっている。壁溝は有さない。床面はロームのバカバカな土で非常に硬く壁付近はやや軟らかくなっている。ピットは南部に2個所確認されP 1・P 2は主柱穴と思われる。北部の柱穴は第56号住居址に切られて不明である。覆土は3層からなり黒褐色土で、上層はローム粒子、下層は多量のロームブロックを含有している。

出土遺物は床面や床面直上から弥生式土器片の頸部を3点、胴部を9点、底部を2点出土している。底部には布目压痕が見られる。これらの土器片はすべて弥生式後期の長岡系に比定されるものと思われる。



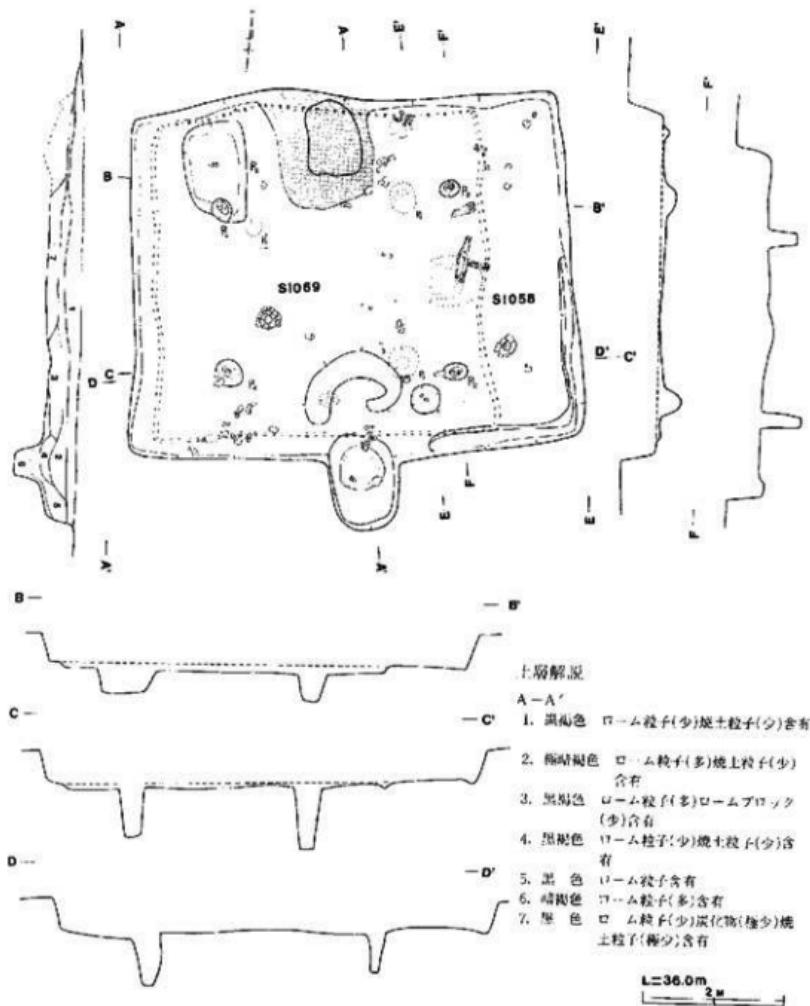
第87図 第57号住居址出土遺物拓影図

第58号住居址（図88～90）

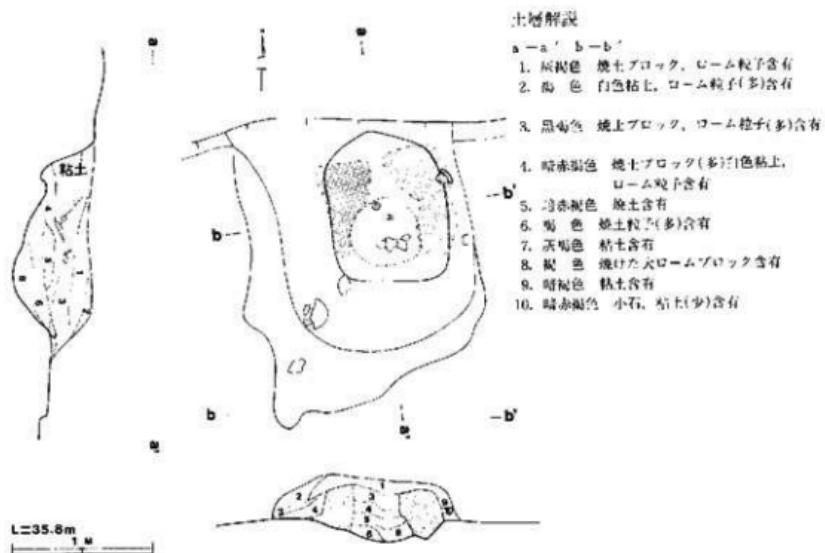
本住居址は、調査区の南西部B 3区c 2, c 3, d 2, d 3に確認され、第69号住居址を削平して構築された住居址であり、カマドより南側の床面は貼床で褐色の硬いバカバカの土で固められている。東壁付近の床面から炭化材を出土しているので本址は火災に遭遇していると思われる。南壁中央には出入口の施設と思われる一段高いベルトが半周し、竪穴住居址外に長辺135cm、短辺10.2cmのほぼ長方形を呈する張り出しを有し、その上部構造のやや北により、長辺65cm、短辺60cm、深さ35cmの円形を呈する土壙を有している。本住居址の主軸方向はN-82°-Eで、規模は長軸6.25m、短軸5.10m、面積26.0m²を測り隅丸長方形を呈し、カマドの南側に不整長方形の貯藏穴を有している。

壁高は40cm～50cmで壁はほぼ垂直に立ちあがっている。壁下には幅約14cm、深さ8cm内外の壁溝

がカマドと西壁とのぞいて有している。ピットは6個所確認されP1～P4は主柱穴と考えられる。北西コーナーのP5は貯蔵穴で規模は長径142cm、短径90cm、深さ38cmの不整長方形を呈している。カマドは北壁の中央部に付設され、規模は長径130cm、短径90cmで北壁を66cm幅で15cm掘り込



第88図 第58・69号住居址実測図

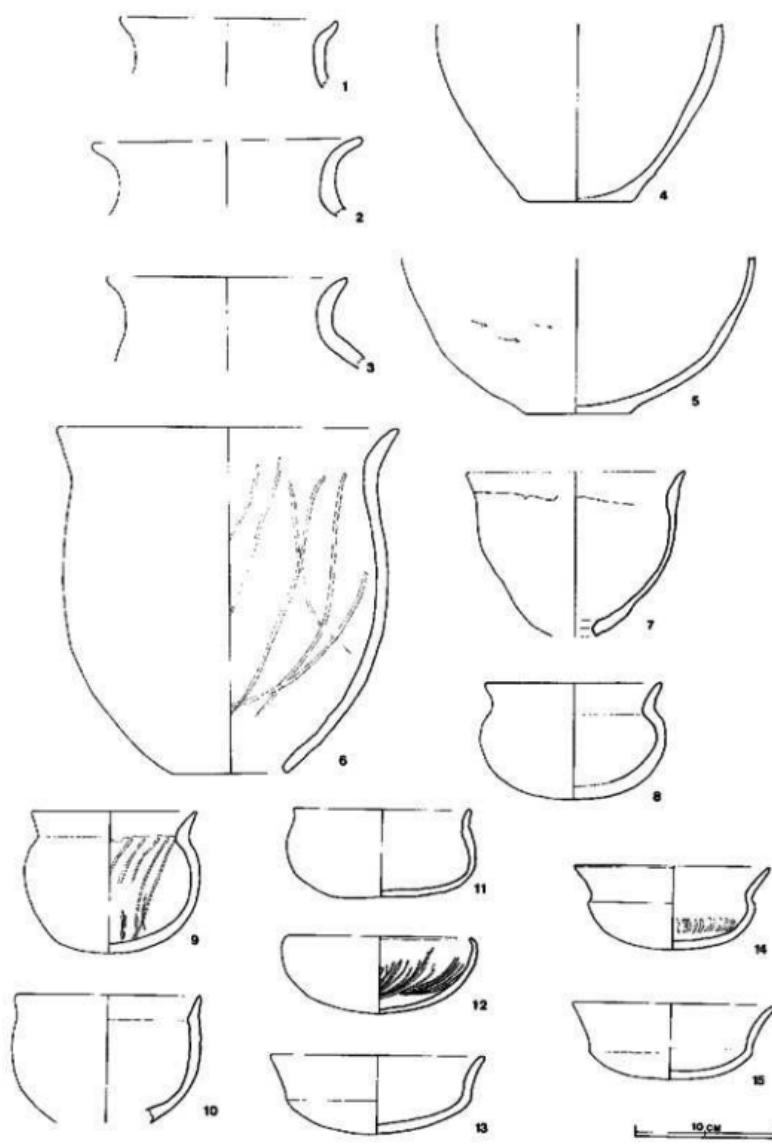


第89図 第58号住居址カマド実測図

み煙道としている。燃焼部は長径50cm、短径48cm、深さ16cmを測り円形に掘り進めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土でカマドはやや南東向きに構築されている。燃焼部より完形の椭形土器(図90-8)を出土し、その他破片を数点出土している。

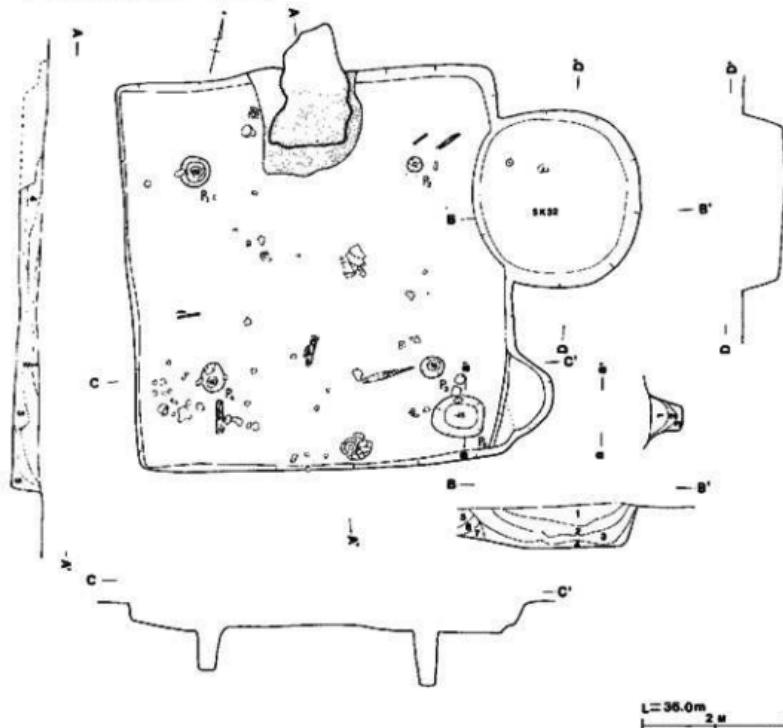
出土遺物は土師器を中心に出土し、須恵器は細片のみである。土師器の完存率の良好なものをおげると、カマドより甕2個体分(図90-1・9)、楕(図90-8)、环(図90-15)と北壁付近床面より楕(図90-14)と床面直上により甕口縁部(図90-3)と环(図90-12)南西コーナーP4付近から甕(図90-10)と甕口縁部(図90-2)中央部床面直上より微片2個体分(図90-6・7)を出土している。他には丹彩の楕(図90-11)、环(図90-13)、甕(図90-4)などの破片を数点と、東部より粘土少量を出土している。

本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高二期に比定される造構と思われる。



第90图 第58号住居址出土遗物实测图

第59号住居址 (図91~93(1)(2))



SK 32 上層解説

B-B'

1. 黒色 硫土粒子炭化材: ローム粒子含有
2. 黒褐色 ローム粒子, 炭化粒子(少)含有
3. 黒褐色 ローム粒子, 硫土粒子(微)含有
4. 暗褐色 ロームブロック, ローム粒子含有
5. 暗褐色 ローム粒子(多)含有
6. 黑褐色 ローム粒子, 小ロームブロック
7. 暗褐色 ロームブロック(多)含有

上層解説

a-a'

1. 黒褐色 炭化材, 烧土粒子(極少)ローム
粒子(多)含有
2. 黒褐色 炭化材, ローム粒子含有
3. 暗褐色 ローム粒子(極少)含有

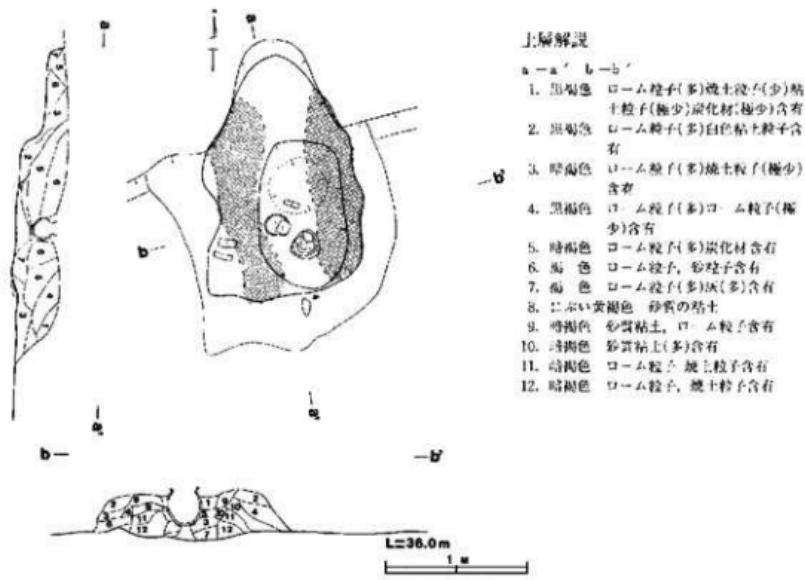
下層解説

A-A' B-B'

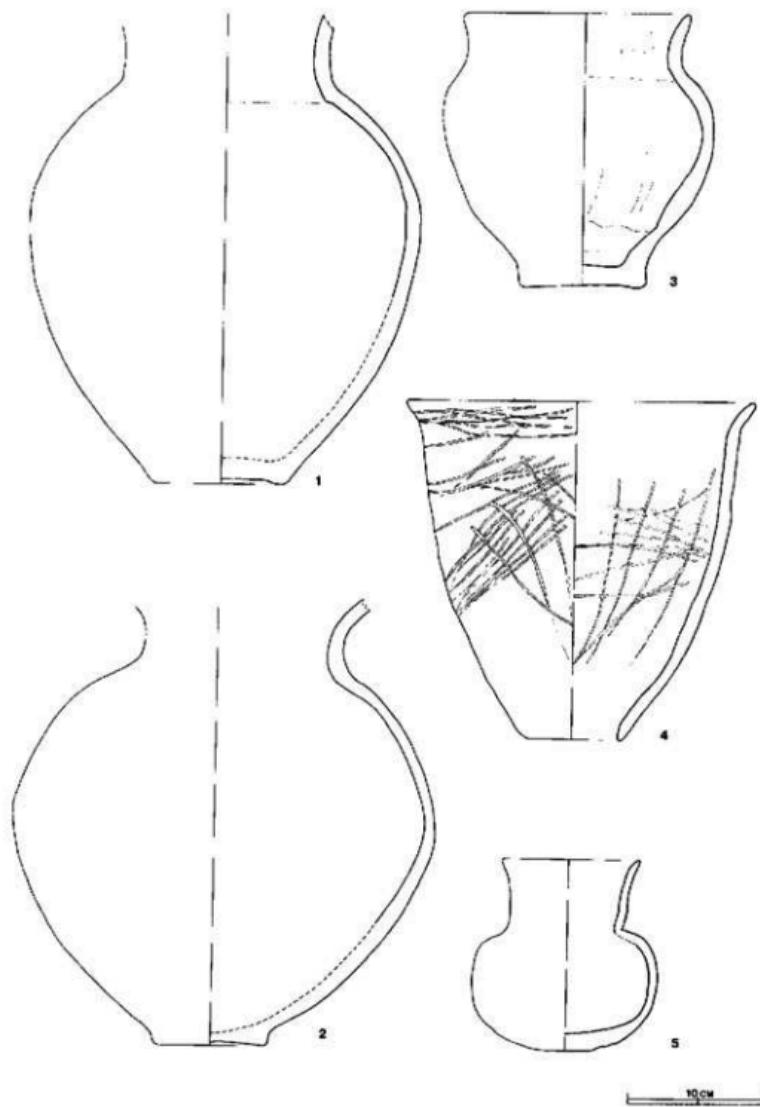
1. 黑褐色 ローム粒子(多)含有
2. 黑褐色 ローム粒子, 烧土粒子含有
3. 暗褐色 ローム粒子(少)炭化材含有
4. 暗褐色 ローム粒子(多)炭化材含有
5. 黑褐色 ロームブロック(多)炭化材含有

第91図 第59号住居址・第32号土壤実測図

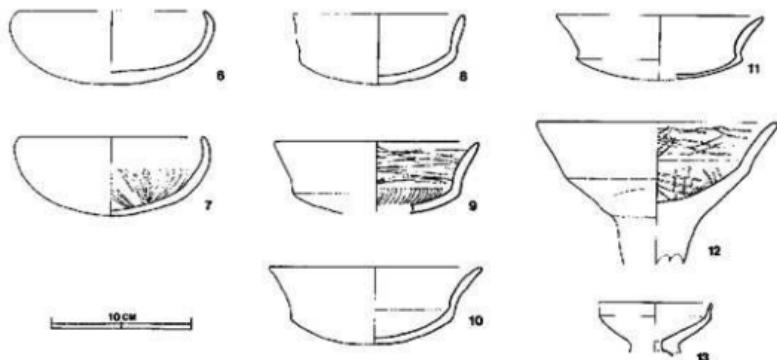
本住居址は調査区の南西部中ほどD 3 区 e 6, e 7, f 6, f 7, g 6 に確認され、北東部に第32号土壤が切り込んでいる。本址は第32号土壤より新しい造構である。南側1.7mには第64号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN-18°-Wで規模は長軸5.42m, 短軸5.25m, 面積26.5m²を測り、長方形を呈している。壁高は22cm~56cmほどで壁はやや外傾しながら立ちあがり、壁溝は有していない。床面は暗褐色の貼り床で炭化材をカマド付近や北東部、南部床面一体に出土しているので、本址は火災に遭遇していると思われる。ピットは5個所確認され、P 1~P 4 は主柱穴と考えられる。南東コーナーのP 5 は貯蔵穴で、長径72cm, 短径58cm, 深さ45cmの不整橢円形を呈している。覆土は5層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土で多量のローム粒子と炭化粒子、焼土粒子を含み、下層は暗褐色土でローム粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央に付設され、規模は長径180cm, 短径110cmで北壁を98cmの幅で、70cmほど掘り込み煙道部としている。燃焼部は長径42cm, 短径40cm, 深さ6cmほど円形に掘り窪めている。袖部はほぼ完全な



第92図 第59号住居址カマド実測図



第93圖(1) 第59號住居址出土遺物實測圖



第93図(2) 第59号住居址出土遺物実測図

形で検出され、黒色土混りの砂質粘土でカマドは南東向きに構築されている。燃焼部から多量の灰と大型の壺形土器（図93-1）と甕破片を出土している。器台（図93-13）のこわれたものを支脚として利用し、甕の中へスッパリと甕が入っているものを見せて出土している。外側の甕は接合不可能と思われるほど壊れていた。

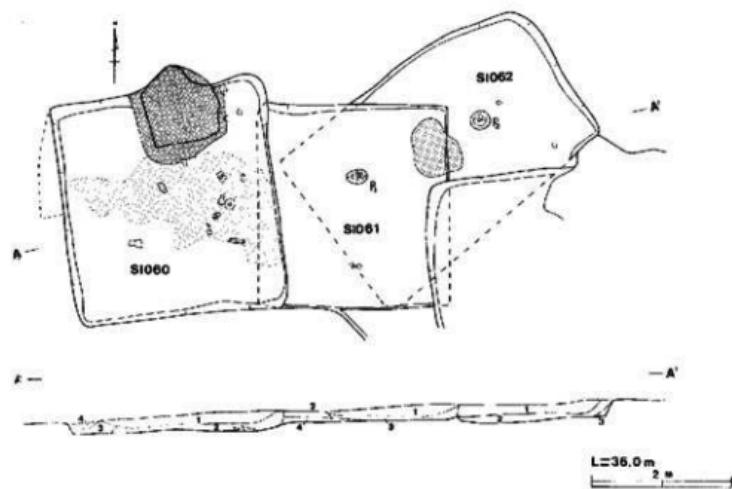
出土遺物は土師器を中心で須恵器はカマド内より甕が出土したものの他は、甕、壺などの破片を数点出土ただけである。土師器の完存率の良好なものをあげると、カマド際から甕2個体分（図93-2・3）、壺（図93-5）、高JF（図93-12）、JFを北壁付近床面直上から甕（図93-7）と、南壁中央部床面より甕（図93-9）、南東コ--ナーP5付近床面や床面直上から甕3個（図93-6・8・11）、西壁北より床面から甕、中央部床から甕片（図93-4）、床面直上から甕（図93-10）を出土し、他に甕、高JF、甕JFなどの破片を多数出土している。その他の出土遺物は砥石、鉄滓等を出土している。本址は古墳時代鬼高期に比定される遺構と思われる。

第60号住居址（図94～96）

本住居址は、調査区の南西端B3区g3, h3に確認され東部は第61号住居址と複合している。本址は第61号住居址より新しい遺構である。本址の主軸方向はN-8°-Wで規模は長軸3.15m、短軸2.72mで面積8.5m²を測り、長方形を呈している。

第61号住居址の床面を約

5cmほど掘り込んで構築している。壁高は10～15cmほどで壁はやや直立ぎみに立ちあがって壁溝は有さない。床面は褐色を呈し中央部からカマド付近は硬く、その他は全体的に軟らかい。床面からは柱穴と思われるものは検出されなかった。焼土が床面中央部から東壁にかけて分布しており、東壁際からは炭化材を出土しているので本址は火災に遭遇していると思われる。

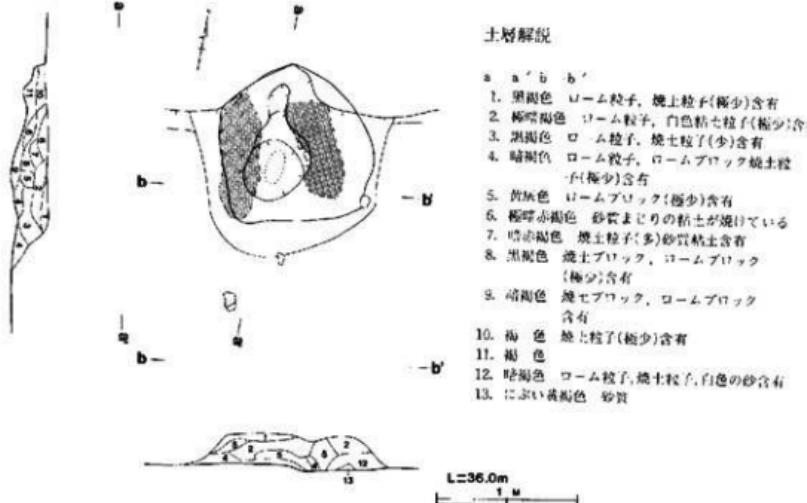


土層解説

A-A'

1. 黒褐色 極土粒子、ローム粒子含有
2. 黒褐色 極土粒子、炭化材、白色砂質含有
3. 黒褐色 ローム粒子(少)含有
4. 暗褐色 ローム粒子(多)含有

第94図 第60・61・62号住居址実測図



第95図 第60号住居址カマド実測図

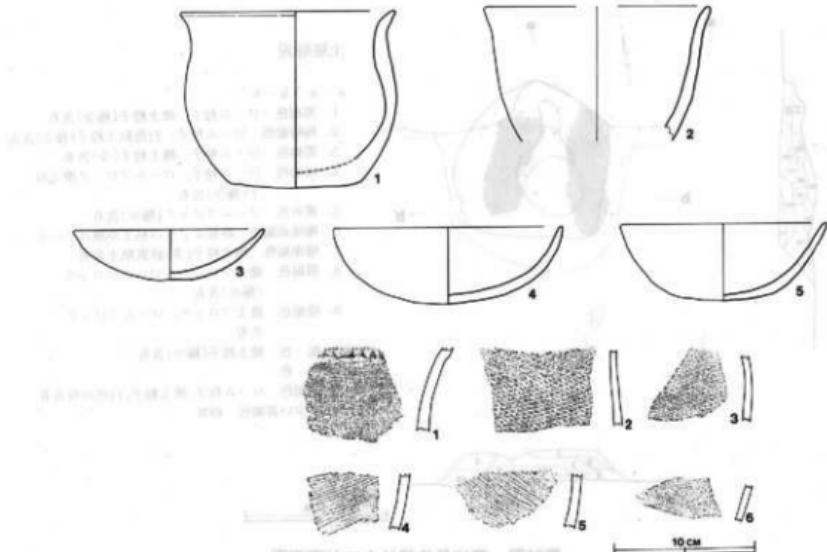
模型は、4層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土で焼上粒子を含み、下層は黒褐色土で焼土粒子、炭化粒子、白色粘土を含んでいる。カマドは、北壁の中央から東方に付設され、規模は長径95cm、短径85cmで北壁を79cm幅で32cmほど掘り込み煙道としている。燃焼部は長径42cm、短径40cm、深さ6cmで円形に掘り窪めている。袖部は黑色土混りの砂質粘土でカマドはほぼ南北向きに構築されている。燃焼部と思われるところから5cm～7cmの厚さの焼土を検出し、その上部から鉢や壺などの破片を数点出土している。

出土遺物は土師器が主で須恵器は破片を数点出土しているのみである。土師器の完存率の良いものをあげると、カマド際より壺2個（図95-3・4）、東壁付近床面より内黒壺（図95-5）、中央部床面上より鉢（図95-1）、南西部より鉢（図95-2）を出土し、他は瓶、壺などの破片を数点出土している。

本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高周に比定される遺構と思われる。

第62号住居址（図94・96）

本住居址は、調査区の南西部D3区g4,h4に確認され、南西部の約45%は第61号住居址に削除され、南東部は第63号住居址の北西コーナーに削除されている。本址は第61号住居址、第63号住居址より古い遺構である。本址の主軸方向はN-49°Eで、規模は長軸3.97m、短軸2.70mを測り長方形の平面形を呈している。北西壁と北東壁は残存し、壁高は20～25cm内外で壁はやや外傾して立

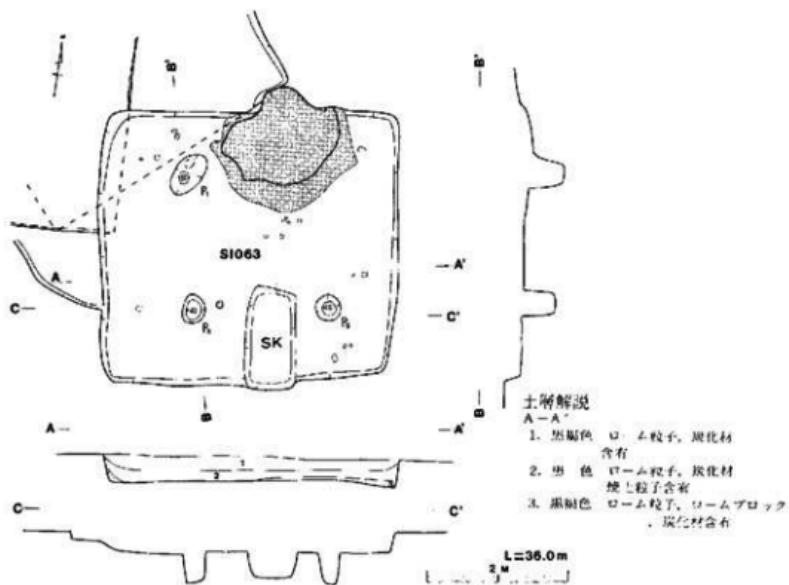


第96図 第60・62号住居址出土遺物実測・拓影図

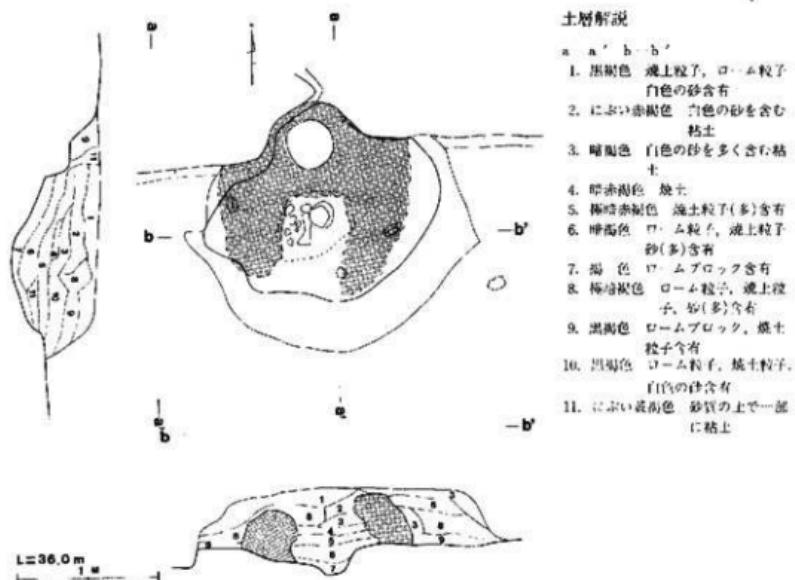
本図は、60号住居址の床面下に半分ほどかかって削平された、規格は長径82cm、短径68cmほどの焼土と黒色土の広がりを示す。出土遺物は、主に土器片で、主に縦縫目付の土器片が複数出土している。

第63号住居址（図97～99）

本住居址は調査区の南西の端D 3区g 4, g 5, h 4, h 5に確認され、北西コーナーは第62号住居址が南部中ほどに長辺145cm, 短辺72cm, 深さ35cmの土壌が切り込んでおり。本址は第62号住居址より新しい造構である。北西1.4mには第64号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN-10°Wで規模は長軸4.18m, 短軸3.70m, 面積14.4m²の隅丸長方形を呈している。壁高は23～31cmほどであり、壁は直立ぎみに立ちあがっている。壁溝は有さない。床面は全体的に貼床であり、南側はやや高くなり、暗褐色で非常に硬いビットは4箇所検出され、P 1～P 3は支柱穴と考えられる。



第97図 第63号住居址実測図



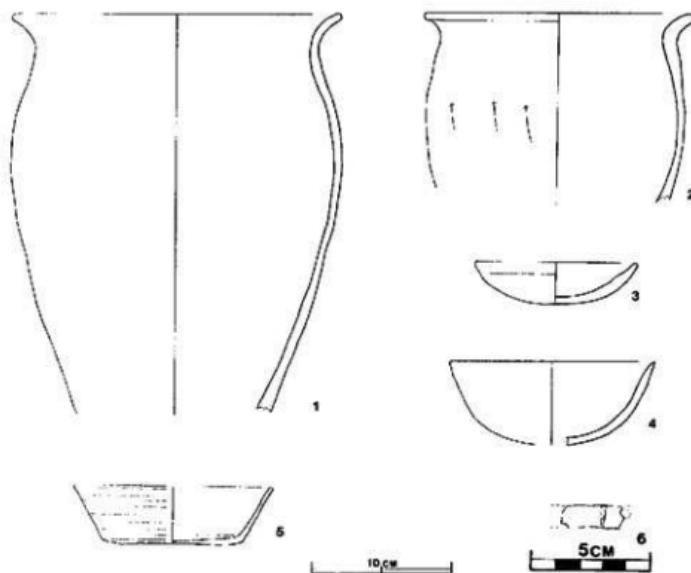
第98図 第63号住居址カマド実測図

覆土は自然堆積の状態を示し、上層は黒褐色土でローム粒子、炭化粒子を含み、下層は黑色土・黒褐色土でローム粒子、炭化粒子、焼土粒子、ロームブロックを含んでいる。カマドは北壁中央よりやや東側に付設され、規模は長径115cm、短径90cmほどで北壁を105cm幅で43cmほど掘り込んで煙道としている。煙道部は長径55cm、短径45cm、深さ18cmで不整円形に掘り窪めている。煙道部から土師器片を数点出土している。袖部は黑色土混り砂質粘土で、カマドはやや南東向きに構築されている。

出土遺物は土師器を中心に須恵器を共伴して出土している。土師器の完存率の良好なものをあげるとカマドから环(図99-3・5)、斐片(図99-2)を、南コーナーのP3付近床面直上から环(図99-4)、中央部床面直上から斐片(図99-1)を出土し、他に斐、环などの破片を数点出土している。須恵器はカマドから境などの破片を数点出土している。その他、鉄製品1片を出土した。本址は出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。

第64号住居址(図100~102)

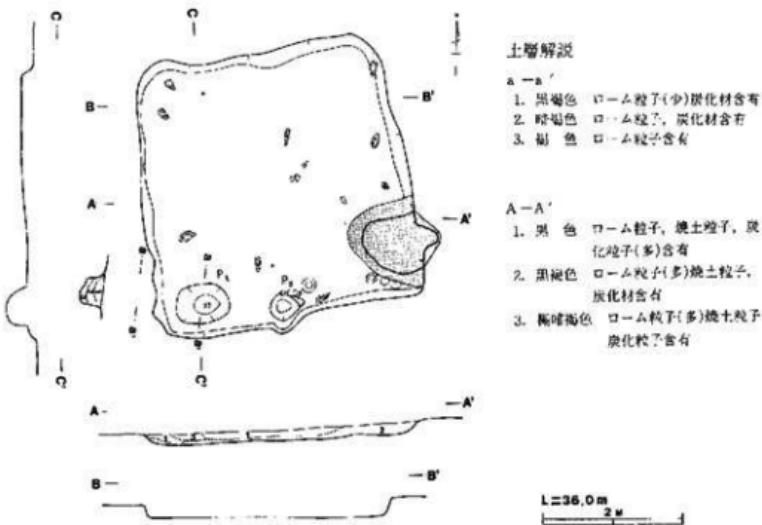
本住居址は調査区の南西部D3区「6, g 5, g 6」に確認され、北側1.9mには第59号住居址が南西部1.4mには第63号住居址が検出されている。本住居址の主軸方向はN-101°-Wで規模は



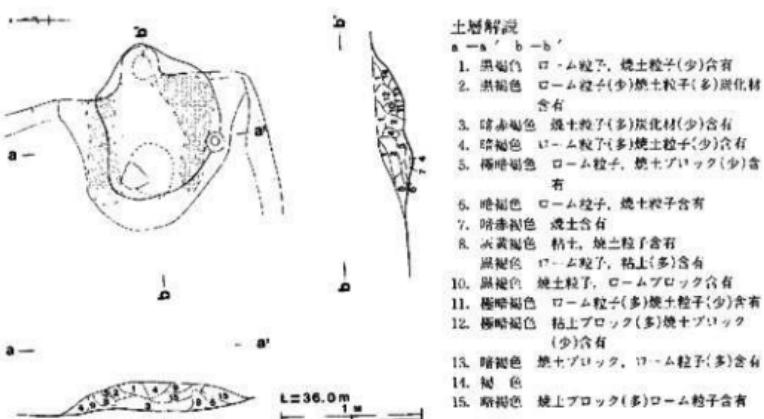
第99図 第63号住居址出土遺物実測図

長軸3.88m、短軸3.80m、面積12.8m²ほどで隅丸正方形を呈している。壁高は南西側で12cm～22cm、北東側で20cm～23cmほどでやや外傾しながら立ちがっている。床面全体から炭化材を出土しているので、本址は火災に遭遇しているものと思われる。床面は焼けて硬くボロボロしている。南西コーナーのP1は貯蔵穴と思われ規格は長径75cm、短径57cm、深さ33cmほどで楕円形を呈している。覆土は浅いが3層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒色土でローム粒子と多土粒子と多量の炭化粒子を含み、下層は黒褐色土で多量のローム粒子と燒土粒子、炭化粒子を含んでいる。カマドは南東コーナー付近に付設され、規模は長径115cm、短径90cm、東壁を37cm幅で26cmほど掘り込み煙道としている。燃焼部は長径32cm、短径25cm、深さ4cmで円形に掘り窪められ焼土が約10cmほど堆積していた。袖部は黒色土混りの砂質粘土でカマドは西向きに構築されている。燃焼部より壺形土器の口縁部を出土し、袖部付近よりJ形土器完形品（図102-1）を出土している。

出土遺物は土師器を中心に出土し、完存率の良好なものをおげると、南東壁際よりの床面から壺（図102-3）、中央部床面直上から壺（図102-2）、南壁床面直上から壺（図102-4）を

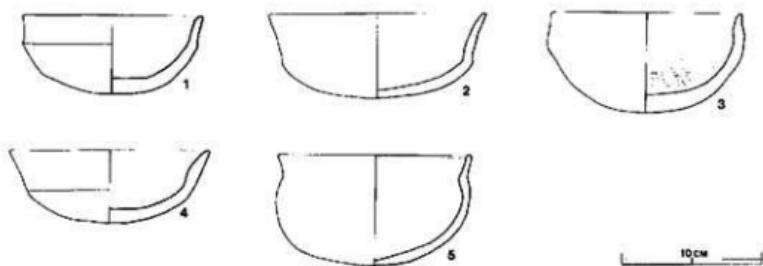


第100図 第64号住居址実測図

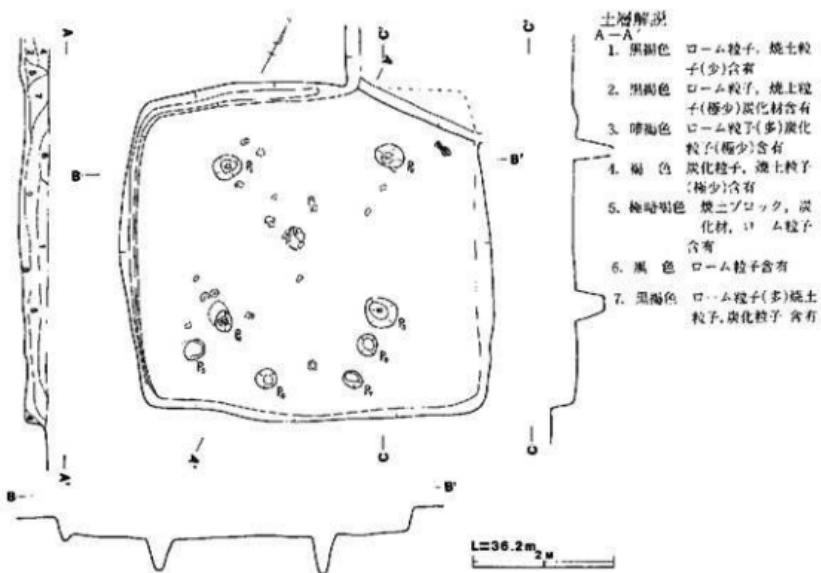


第101図 第64号住居址カマド実測図

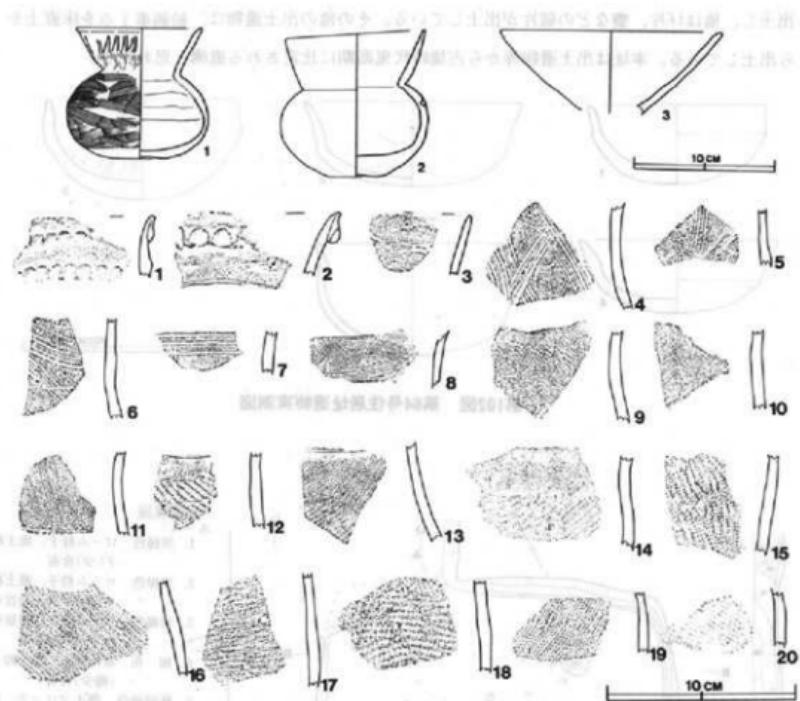
出土し、他はJ杯片、甕などの破片が出土している。その他の出土遺物は、紡錘車1点を床壇上から出土している。本址は出土遺物等から古墳時代鬼高期に比定される遺構と思われる。



第102図 第64号住居址遺物実測図



第103図 第65号住居址実測図



第104図 第65号住居址出土遺物実測・拓影図

第65号住居址（図103・104）

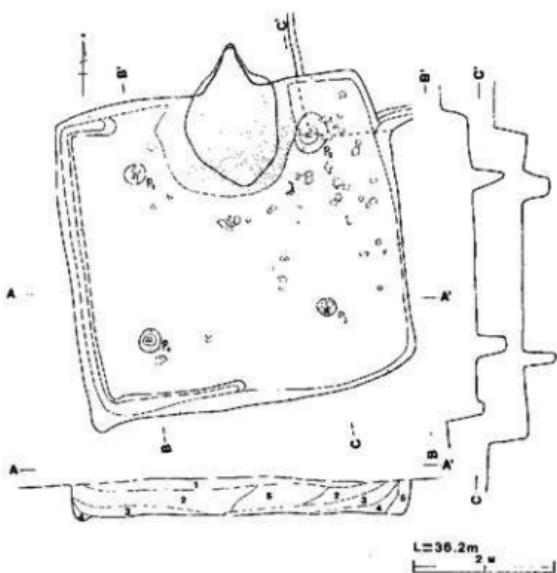
本住居址は、調査区の南中央部D3区d8, d9, e8, e9に確認され、北東コーナーは第67号住居址の南西コーナーによって切られているので本址は第67号住居址より古い造構である。南東0.3mには第66号住居址が、南西0.4mには第32号住居址が検出されている。本址は隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-31.5°-Wで規模は長軸5.22m、短軸4.84m、面積21.2m²を測る。壁高は16cm～35cmを測り、壁は外傾して立ちあがっている。壁下には西壁と北壁に幅12cm、深さ7cm内外の壁溝を有している。床面は褐色で平坦であり硬い。北東コーナー付近床面より炭化物を検出しているので本址は火災に遭遇していると思われる。ピットは8箇所確認されP1～P4は主柱穴と考えられる。貯蔵穴と炉址は検出されなかった。覆土は5層からなり、自然堆積の状態を示し確認面から中央床面向って流れこんでいる。上層は黒褐色土で多量のローム粒子を含み、中層は極暗褐色土で多量のローム粒子と炭化粒子と壁際にはロームブロックを含み、下層は、暗褐色土で多量のローム粒子を含んでいる。出土遺物は土師器を中心に北壁中ほど床面上より増（図104-1）北西コーナーの床面上から高环片（図104-3）、南西コーナーP4付近床面上から

堆（図104-2）を出土している。他は甕、壺、丹彩の片などの細片を少数出土している。その他の出土遺物は覆土から弥生式土器の長岡系に比定される口縁部などの破片を数点出土している。

本址は出土遺物等から和泉期に比定される遺構と思われる。

第66号住居址（図105～107）

本住居址は、調査区の南部中ほどD 3区d 9, d 0, e 9, e 0に確認され、本址の北東コーナーが第68号住居址の南西コーナー部に切り込んでいるので、本址は第68号住居址より新しい遺構

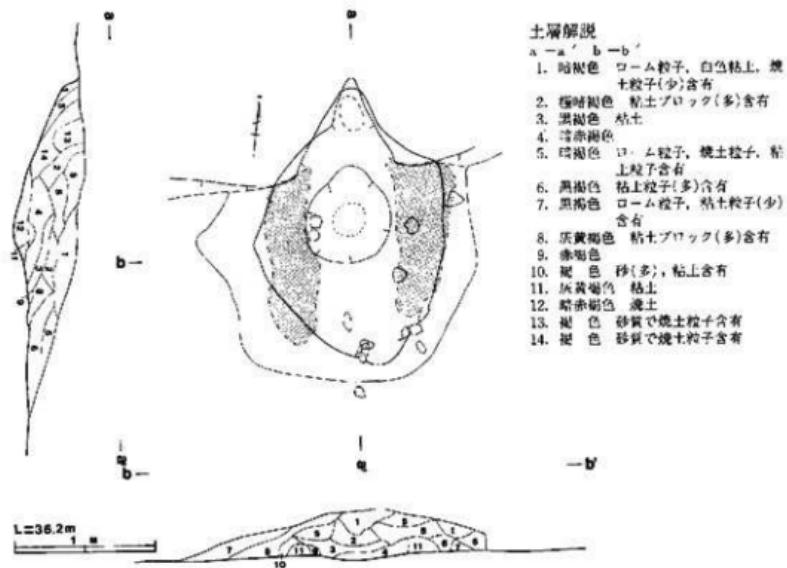


土層解説

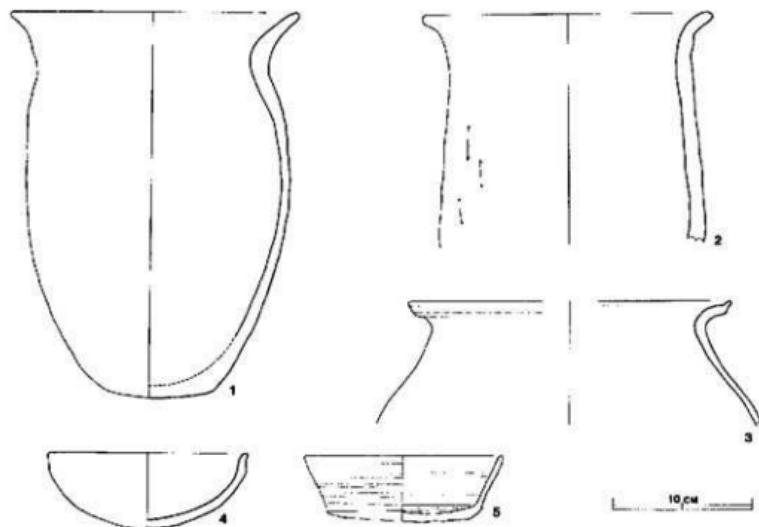
A-A'

- | | |
|--|---------------------------------|
| 1. 棕褐色
ローム粒子、焼土
粒子(極少)含有 | 3. 棕褐色
ローム粒子(多)焼上
粒子(少)含有 |
| 2. 黒褐色
ローム粒子(多)焼上
粒子、炭化粒子(少)
含有 | 4. 棕褐色
ローム粒子(多)焼上
粒子(少)含有 |
| | 5. 黑褐色
炭化材(多)含有 |
| | 6. 黑褐色
ローム粒子(少)含有 |

第105図 第66号住居址実測図



第106図 第66号住居址カマド実測図



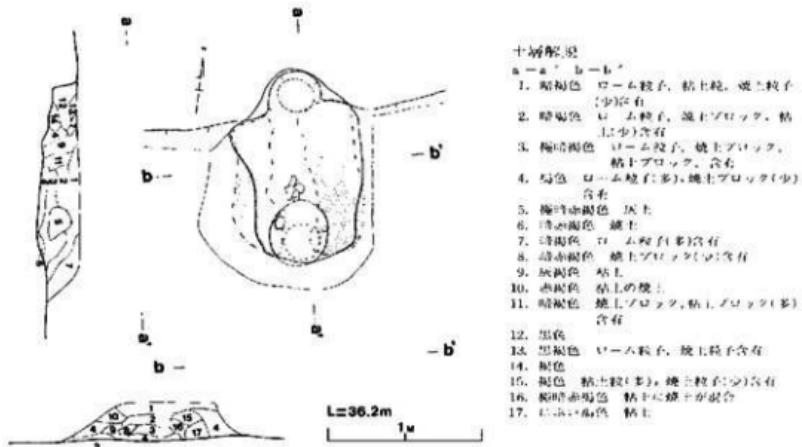
第107図 第66号住居址出土遺物実測図

である。本址は隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-E-Wで、規模は長軸4.74m、短軸4.45m、面積18.5m²を測る。壁高は約45cmであり、壁はやや外傾しながら立ちあがっている。壁下には幅8cm、深さ10cm内外の壁溝がほぼ全体に廻っている。床面は暗褐色土でやや硬く、特にカマド前面が硬い。床面から炭化材を出土しているので火災に遭遇していると思われる。ピットは4個所確認されP1-P4は主柱穴と考えられる。覆土は8層からなり、全体的に黒褐色土で、上層は多量のローム粒子と焼土粒子、ロームブロックを含み、下層は多量のローム粒子、極少量の焼土粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央から東よりに位置し、規模は長径180cm、短径132cmで、北壁を73cm幅で、60cm程掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径62cm、短径58cm、深さ5cmで円形に掘り進めている。燃焼部より上部断片を数点出土している。袖部は黒色土混りの炒質粘土でカマドはやや南東向きに構築されている。出土遺物は土師器の壺片を多数出土し、その完存率の良好なものがあげると、東壁付近床面から甕(図107-1)、カマド付近床面直上より壺(図107-4)を出土し、他には、甕(図107-2・3)と壺などの破片を多数出土している。須恵器も共伴しており数は少ない。床面より壺(図107-5)を出土し、他は壺、蓋などの細片を数点出土している。

本址は出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。

第67号住居址(図108~110)

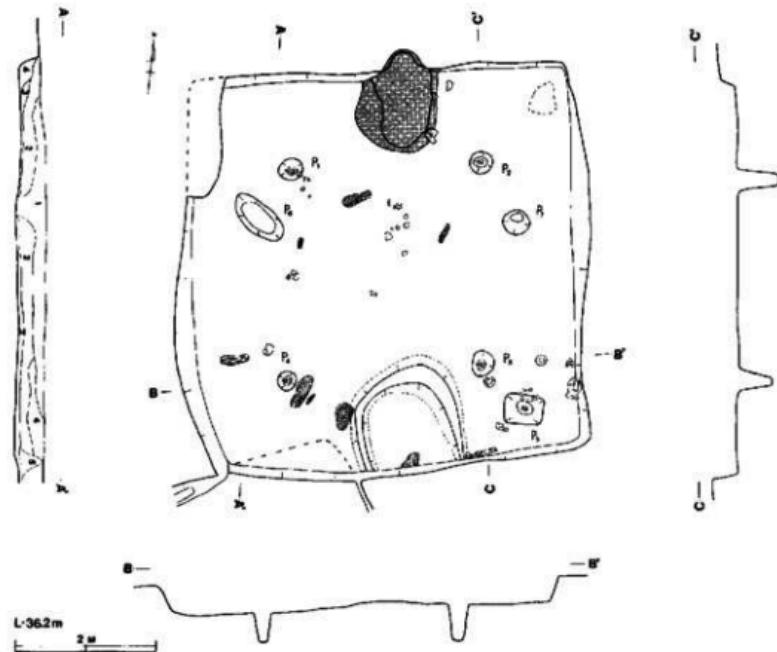
本住居址は、調査区の南中央部D3区b9, b0, C8, c9, d8, d9に確認され、北西コーナーには第3号井戸状造構が、南西コーナーには第65号住居址が切り込んでいる。本址は第65



第108図 第67号住居址カマド実測図

号住居址と第3号井戸状遺構より古い遺構である。

北東0.7mには第48号住居址が、南東0.8mには第68号住居址が検出されている。本住居址は隅丸長方形の平面形を呈しており、主軸方向はN-16°-Wで、規模は長軸5.82m、短軸5.63m、面積29.3m²を測り、壁高は23~39cm程であり、壁は外傾して立ちあがっている。床面は、中央部付

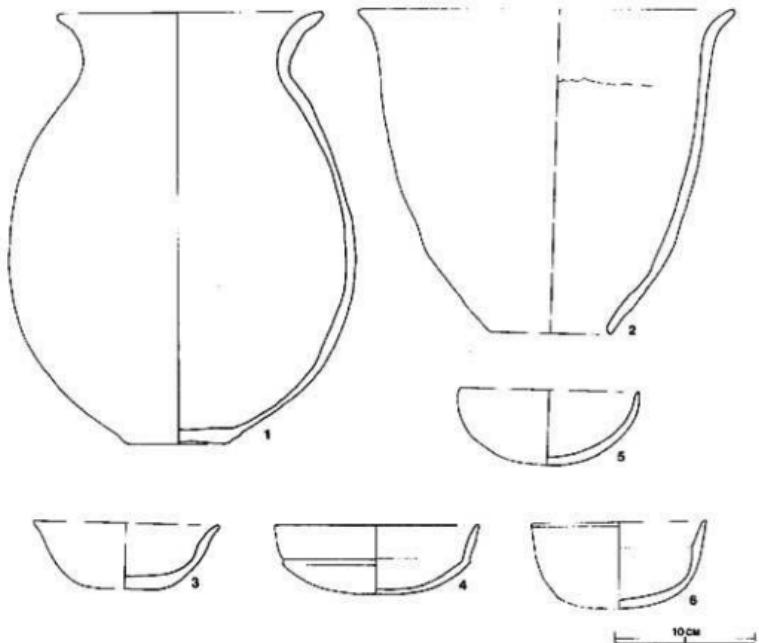


土層解説

A-A'

1. 黒褐色 ローム粒子、焼上粒子(微)含有
2. 黒褐色 ローム粒子、焼土粒子(微)、炭化材含有
3. 黑褐色 ローム粒子(多)、炭化粒子(微)含有
4. 黑色 炭化粒子、焼上粒子(微)含有
5. 棕褐色 烧上ブロック、炭化粒子、ローム粒子含有

第109図 第67号住居址実測図



第110図 第67号住居址出土遺物実測図

近は硬い床面であるが壁にそって軟くなっている。床面中央部と南西コーナー付近・南壁中央部にかけて炭化材が出土しているので本址は火災に遭遇していると思われる。南壁中央部には入口の施設と思われる1段高い半円形のベルトを有している。ピットは7個所確認されP1～P4は主柱穴と考えられる南東コーナーのP5は貯蔵穴で規模は長径55cm、短径44cm、深さ49cmの平面形を呈している。覆土は黒褐色土で8層からなっており第65号住居址の上層を南西コーナーで切り、自然堆積の状態を示している。上層は極少量の焼土粒子を含み、下層は多量のローム粒子と極少量の炭化粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央より東に位置し、規模は長径130cm、短径78cm、北壁を40cm幅で30cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は壁面より70～80cmほど離れており、長径24cm、短径22cm、深さ3cm程円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土でやや南東向きに細長く構築されている。燃焼部より壺形土器片、鉢形土器片を数点出土し、その下部より支脚が立ったまま出土している。

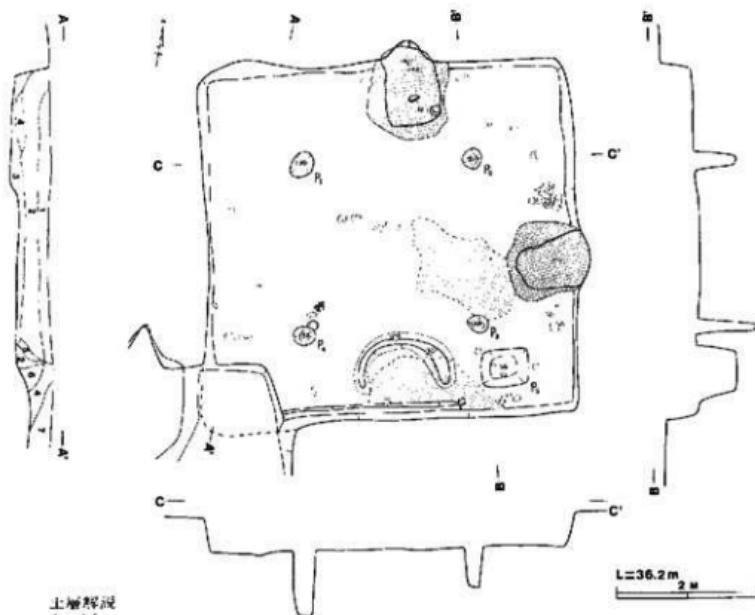
出土遺物は土師器を中心

に弥生式土器の壺底部を覆土から出土し、他には須恵器の破片を数点出土している。土師器の

完存率の良好なものをあげると、カマド内焼部からP片（図110-3）を、東壁付近南より床面から甕（図110-1）、P（図110-5）を、南東コーナーのP3付近床面よりP（図110-4）を、南壁際床面より甕（図110-6）を、北東コーナーP1付近床面より甕片（図110-2）を出土している。本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高期比定される遺構と思われる。

第68号住居址（図111～113）

本住居址は、調査区の南中央部D3区c0, d0, D4区c1, d1に確認され、南西コーナーには第66号住居址が切り込んでおり、南東コーナーは第70号住居址の西コーナーに切り込んでいる。本址は第66号住居址より古い造構で、第70号住居址より新しい造構である。北西0.8mには第67号住居址が、北側4.2mには第48号住居址が検出されている。本址はほぼ正方形の平面形を呈しており、主軸方向はN-11°-Wで、規模は長軸5.26m、短軸5.11m、面積23.8m²を測る。壁高は44cm～50cmであり、壁はやや直立ぎみに立ちあがっている。壁溝は幅10cm、深さ5cm内外で南壁際西よりに

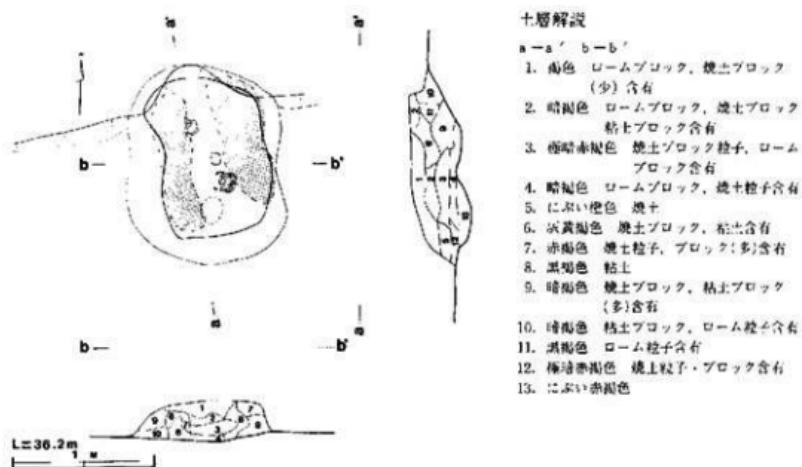


上層解説
A-A'

1. 暗褐色 ローム粒子、燒土粒子(多)含有
2. 黒褐色 (少) 燃土粒子(多)、灰化粒子(少)含有
3. 墓褐色 ローム粒子(多)、燒土粒子(少)含有

4. 暗褐色 ローム粒子(少)、燒土粒子(少)含有
5. 黒褐色 灰化材多量含有
6. 暗褐色 (少) 燃土粒子(少)、燒土粒子(少)含有
7. 黒色 ローム粒子(少)含有

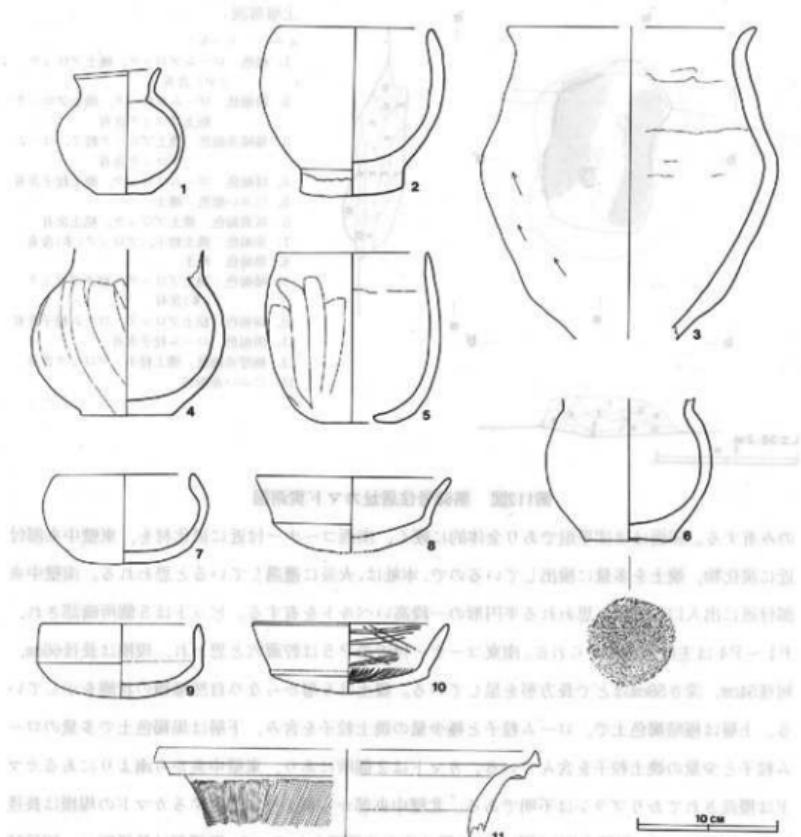
第111図 第68号住居址実測図



第112図 第68号住居址カマド実測図

のみ有する。床面はほぼ平坦であり全体的に硬く、南西コーナー付近に炭化材を、東壁中央部附近に炭化物、焼土を多量に検出しているので、本址は、火災に遭遇していると思われる。南壁中央部附近に出入入口の施設と思われる半円形の一段高いベルトを有する。ピットは5個所確認され、P1～P4は主柱穴と考えられる。南東コーナー付近のP5は貯蔵穴と思われ、規模は長径66cm、短径54cm、深さ59cmほどで長方形を呈している。覆土は6層からなり自然堆積の状態を示している。上層は極暗褐色土で、ローム粒子と極少量の焼土粒子を含み、下層は黒褐色土で多量のローム粒子と少量の焼土粒子を含んでいる。カマドは2箇所にあり、東壁中央から南よりにあるカマドは擾乱されておりプランは不明である。北壁中央部から東よりに位置するカマドの規模は長径117cm、短径90cmで、北壁を74cm幅で、32cm掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径20cm、短径15cm、深さ10cmで円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で、カマドはやや南東向きに構築されている。燃焼部付近より、楕円土器完形品(図113-7)、楕1個体分(図113-5)を出土し、他に上部器の破片数点を出土している。カマド付近床面から壺(図113-10)を東壁のカマド付近床面直上から壺片(図113-3)、南西コーナーP5際床面より壺片(図113-1)と片(図113-9)、南壁付近床面直上より鉢片(図113-2)、壺(図113-11)と、中央部床面直上から壺(図113-6)を出土している。他に壺(図113-4)片(図113-8)、壺などの細片を数点出土している。

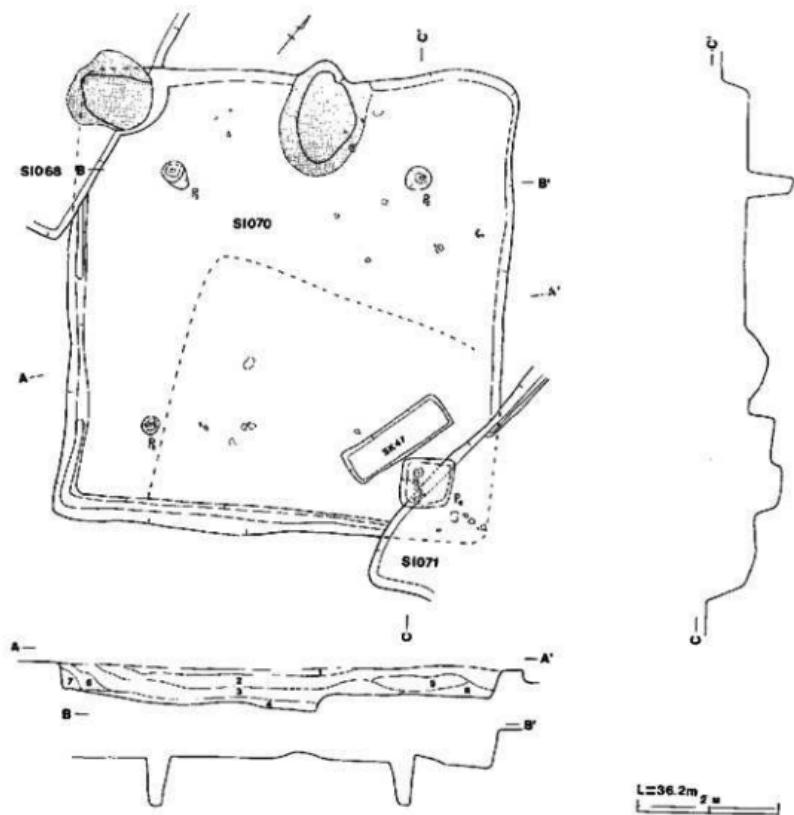
本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。



第113図 第68号住居址出土遺物実測図

本住居址は、調査区の南東部D4区c1, c2, d1, d2, d3, e1, e2に確認され、西

コーナーには第68号住居址が、東コーナーは第71号住居址が切り込んでいる。本址は第68号住居址、第71号住居址よりも古い造構である。本址の主軸方向はN-38°-Wで、規模は長軸6.50m、短軸6.21m、面積36.0m²を測り、ほぼ正方形の平面形を呈している。壁高は26cm～55cm程度で壁はやや直立して立ちあがっている。壁下には、北西・北東壁を除いて壁溝を有している。床面は東コーナーを中心に貼り床でバカバカしている。東コーナーは第47号土壇が複合している。壁際から炭化材が

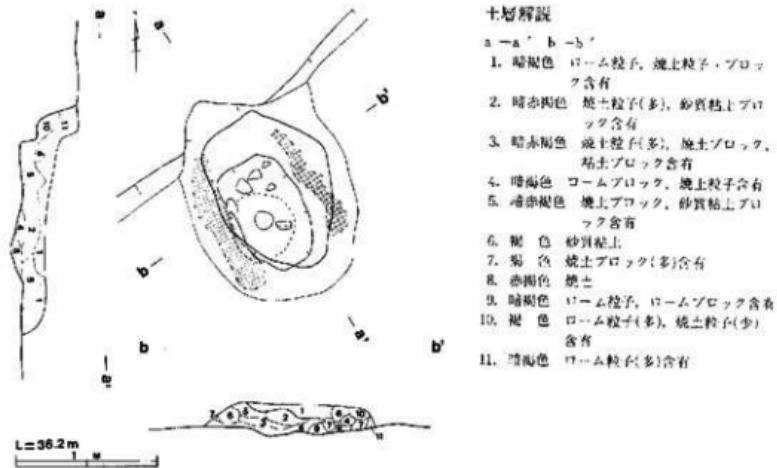


上層解説

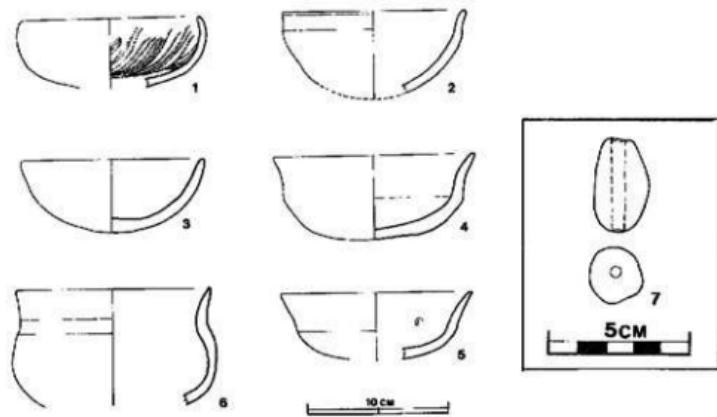
A-A'

- | | | | |
|--------|-------------------|--------|-----------------------------|
| 1. 黒色 | ローム粒子、焼土粒子(少)含有 | 5. 噴色 | ロームブロック、ローム粒子、焼土粒子
(少)含有 |
| 2. 黒褐色 | ローム粒子、焼土粒子含有 | 6. 暗褐色 | ローム粒子(多)含有。ざらざらしている |
| 3. 黒色 | ローム粒子(多)、焼土ブロック含有 | 7. 暗褐色 | ローム粒子、焼土粒子、炭化材含有 |
| 4. 暗褐色 | ロームブロック、炭化材含有 | | |

第114図 第70号住居址・第47号土壤実測図



第115図 第70号住居址カマド実測図

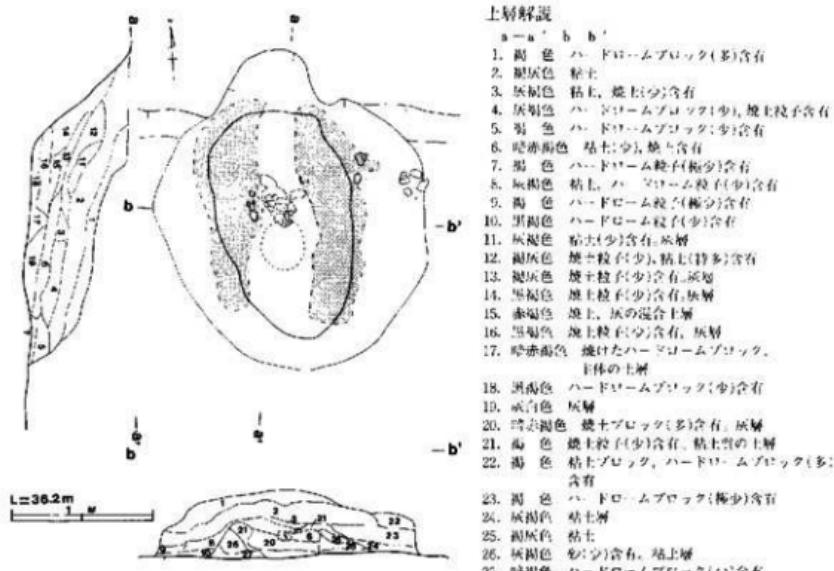


第116図 第70号住居址出土遺物実測図

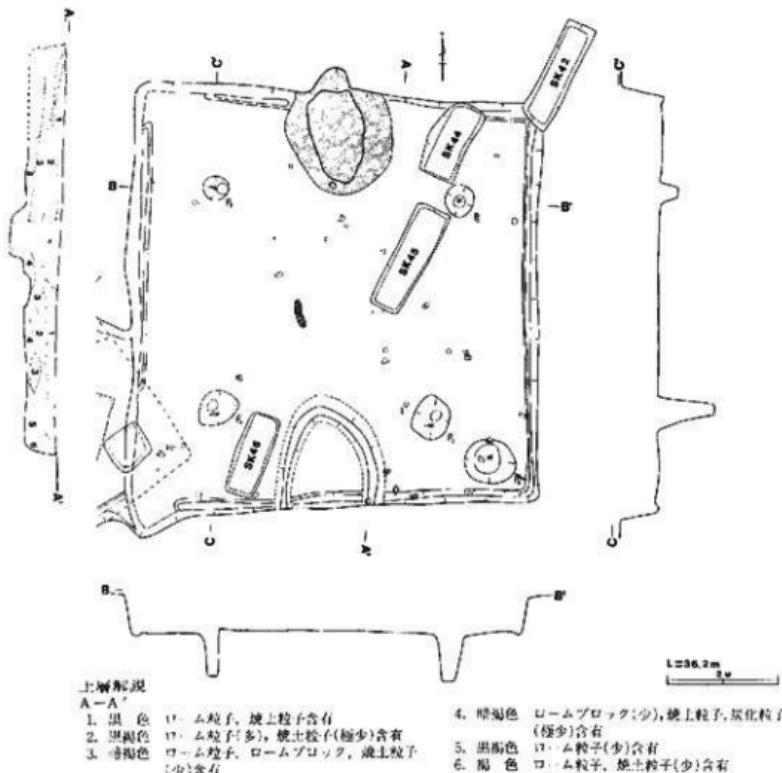
検出されているので、本址は火災に遭遇していると思われる。ピットは3個所確認され、いずれも柱穴である。東コーナーの柱穴は第47号土壙に切られ確認することができないが、同コーナーのP.4は貯蔵穴と思われ、規模は長径73cm、短径71cm、深さ35cmの正方形を呈している。覆土は8層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒色土でローム粒子と少量の焼土粒子を含み、中層は褐色・極暗褐色で、多量のローム粒子と焼土粒子・焼土ブロックを含み、下層は暗褐色土でロームブロックと炭化物を含んでいる。カマドは、北壁の中央から東よりに位置し、規模は長径140cm、短径85cmで、北壁を75cm幅で、35cm掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径46cm、短径44cm、深さ8cmで円形状に掘り窪めている。抽部は黒色土混りの砂質粘土で、カマドは南東向きに構築されている。燃焼部から土師器の1枚片を3個体分（図116-3・5）出土している。出土遺物は、土師器を中心で、須恵器の片、蓋などの細片を数点出土している。北東壁付近床面直上から土師器の1枚片（図116-2）、南コーナー付近床面直上から内窓の1枚片（図116-1）、西コーナー壁面から土瓦（図116-7）を出土し、他に覆土から土師器の楕（図116-6）、南コーナー床面直上から砥石を出土している。本址は出土遺物等から古墳時代後期鬼高二期に比定される遺構と思われる。

第71号住居址（図117～119）

本住居址は、剥壳Xの南部D.4区b2, b3, c2, c3, c4, d2, d3, d4に確認され、

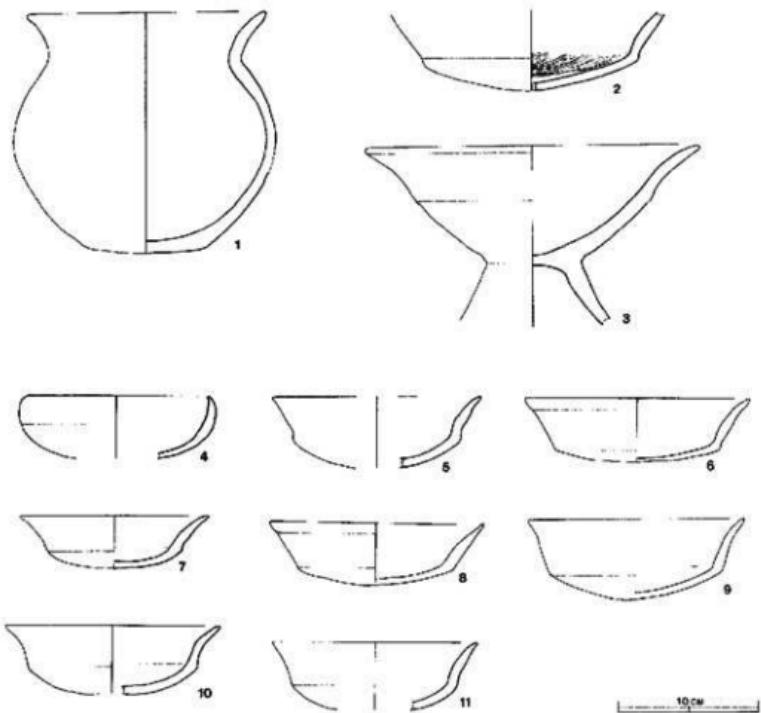


第117図 第71号住居址カマド実測図



第118図 第71号住居址・第42号・44号・45・46号土壤実測図

北東コーナーに第42号土壤、第44号土壤、第45号土壤が、西壁南下に第70号住居址、南壁中央付近には第46号土壤が切り込んでいる。東側0.2mには第73号住居址が、南東0.1mに第72号住居址が検出されている。本址は第70号住居址とほぼ同時期の遺構と思われるが、第70号住居址の東コーナーを切っているので、本址は第70号住居址より新しい遺構と思われる。本址は隅丸長方形の平面形を呈しており、主軸方向N-2°Eで、規模は長軸7.67m、短軸7.40m、面積47.6m²を測り、壁高は55cm~72cm程度で、壁は床面から垂直ぎみに立ちあがっている。壁下には幅18cm、深さ6cm内外の壁溝がカマドの部分を除いて廻っている。床面は褐色の全体的に硬い貼り床と思われる。南



第119図 第71号住居址出土遺物実測図

壁中央には鹿沼バミスを含んだ入口の施設と思われるベルトが一段高く半周している。本址には入口の施設に伴うと思われる土壙とピットが確認できない。床面中央部から壁土の焼けたものと思われる焼土塊と炭化物を中央部から出土しているので、火災に遭遇していると思われる。ピットは5個所確認されP1～P4は主柱穴と考えられる。南東コーナーのP5は貯蔵穴と思われ、長径91cm、短径80cm、深さ93cmの不整円形を呈している。覆土は中央部が擾乱されているが、他は自然堆積の状態を示している。上層は黒色土で、ローム粒子、焼土粒子を含み、中層は暗褐色土で多量のローム粒子とロームブロック、焼土粒子を含み、下層は暗褐色土で少量のロームブロックと極少量の炭化粒子と焼土粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央部に位置し、規模は長径190cm、短径115cmで、北壁を82cm幅で、44cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径35cm、短径30cm、深さ3cmほど円形に掘り窪めている。袖部は幅が広く、黒色土混りの砂質粘土で、カマドは南向きに構築されている。

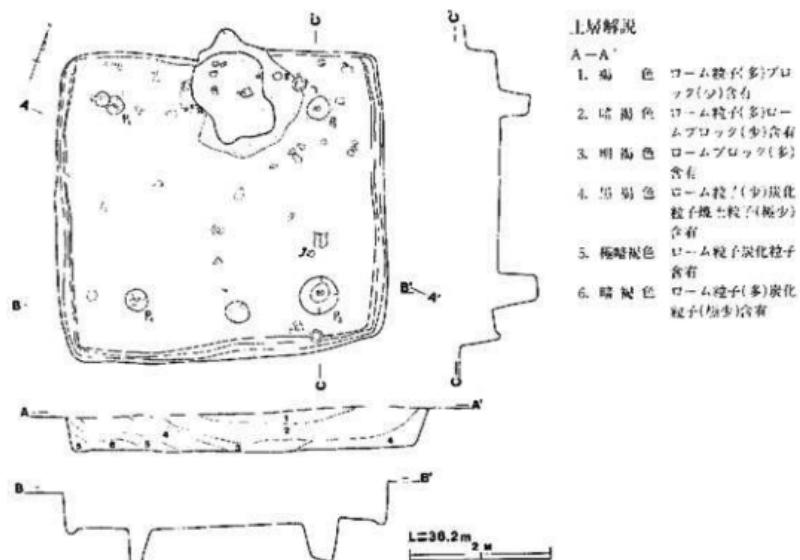
燃焼部には灰色の粘土が全体にひらがり、土師器のJ石

(図119-7), 高环(図119-3)などが出土している。出土通物は土師器を中心に、須恵器の甕、环などの細片を覆土から数点数点出土している。土師器の完存率の良好なものをあげると、北東コーナー床面直上より环片(図119-11), 南東コーナーのP5際床面から环片(図119-4), 南壁付近床面から环2個と、出入口の施設と思われる中から环片を、中央部床面直上から甕片を出土している。

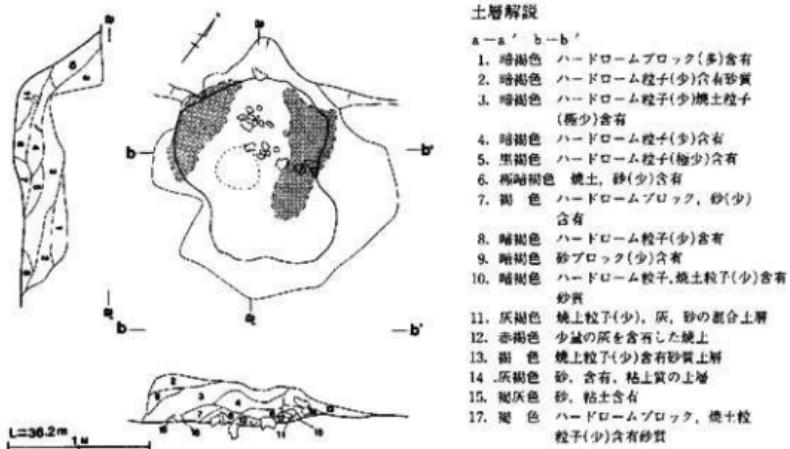
本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高廟に比定される遺構と思われる。

第72号住居址(図120~122)

本住居址は、調査区の南東部の端D4区d4, d5, e4, e5に確認され、北西0.1mには第71号住居址が、北東0.3mには第73号住居址が検出されている。本址は隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN=20°-Wで、規模は長軸4.65m, 短軸4.39m, 面積16.6m²を測る。壁高は約50cmであり、壁はやや直立ぎみに立ちあがり、壁下には幅17cm、深さ5cm内外の壁溝が全周している。床は平坦で硬い貼り床である。南東コーナーには粘土が薄くはられていた。ピットは5箇所確認され、P1~P4は主柱穴と考えられ、貯蔵穴は有していない。覆土は11層からなり自然堆積の状態を示している。



第120図 第72号住居址実測図



第121図 第72号住居址カマド実測図

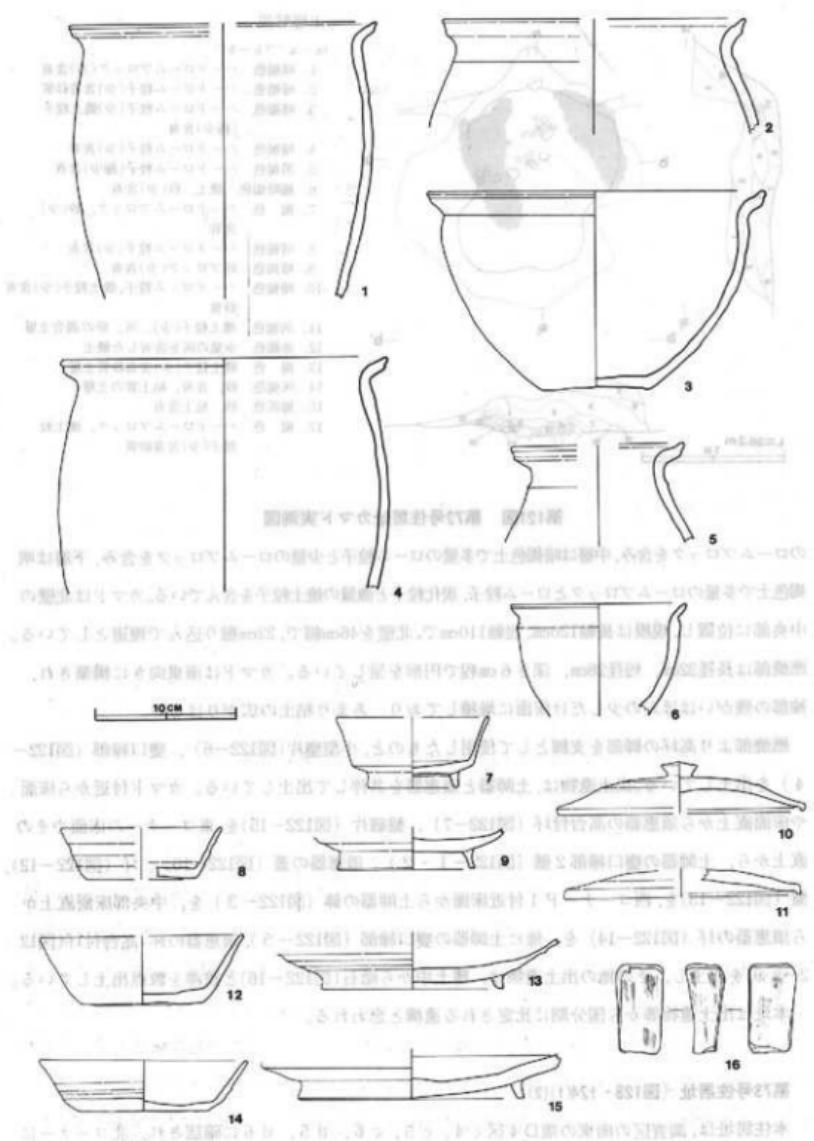
のロームブロックを含み、中層は暗褐色土で多量のローム粒子と少量のロームブロックを含み、下層は明褐色土で多量のロームブロックとローム粒子、炭化粒子と微量の焼土粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央部に位置し、規模は長軸120cm、短軸110cmで、北壁を46cm幅で、22cm掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径32cm、短径28cm、深さ6cm程で円形を呈している。カマドは南東向きに構築され、袖部の残がいはほんの少しだけ床面に堆積しており、あまり粘土の広がりはない。

燃焼部より高环の脚部を支脚として使用したものと、小型麦片(図122-6)、甕口縁部(図122-4)を出土している。出土遺物は、土師器と須恵器を共伴して出土している。カマド付近から床面や床面直上から須恵器の高台付环(図122-7)、整破片(図122-15)を、東コーナーの床面やその直上から、土師器の甕口縁部2個(図122-1・2)、須恵器の蓋(図122-10)、坏(図122-12)、盤(図122-13)を、西コーナーP1付近床面から土師器の鉢(図122-3)を、中央部床面直上から須恵器の坏(図122-14)を、他に土師器の甕口縁部(図122-5)、須恵器の坏・高台付环(図122-8・9)を出土し、その他の出土遺物は、覆土中から砾石(図122-16)と鉄滓を数点出土している。

本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第73号住居址(図123・124(1)(2))

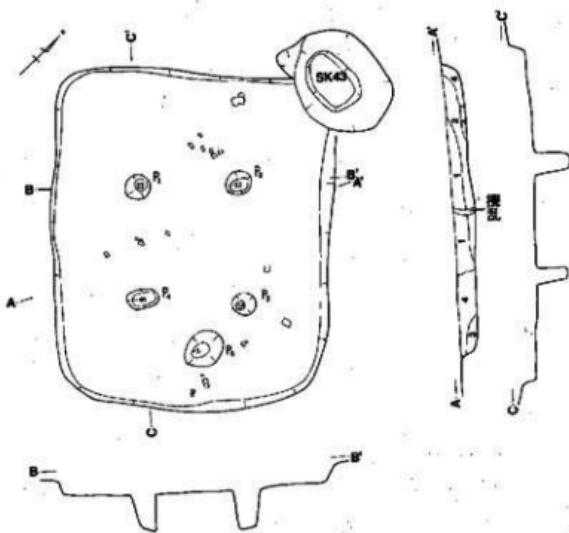
本住居址は、調査区の南東の端D4区c4, c5, c6, d5, d6に確認され、北コーナーには第43号土壤が複合している。本址は第43号土壤より古い遺構である。西側0.2mには第71号住居址が、南西0.3mには第72号住居址が検出されている。本址は、隅丸長方形の平面形を呈しており、主軸



第122図 第72号住居址出土遺物実測図

第一回 1. 長頸瓶 2. 長頸瓶 3. 壺 4. 長頸瓶 5. 長頸瓶 6. 長頸瓶 7. 瓢 8. 瓢 9. 瓢 10. 瓢 11. 瓢 12. 瓢 13. 瓢 14. 瓢 15. 瓢 16. 瓢

第二回 1. 長頸瓶 2. 長頸瓶 3. 壺 4. 長頸瓶 5. 長頸瓶 6. 長頸瓶 7. 瓢 8. 瓢 9. 瓢 10. 瓢 11. 瓢 12. 瓢 13. 瓢 14. 瓢 15. 瓢 16. 瓢



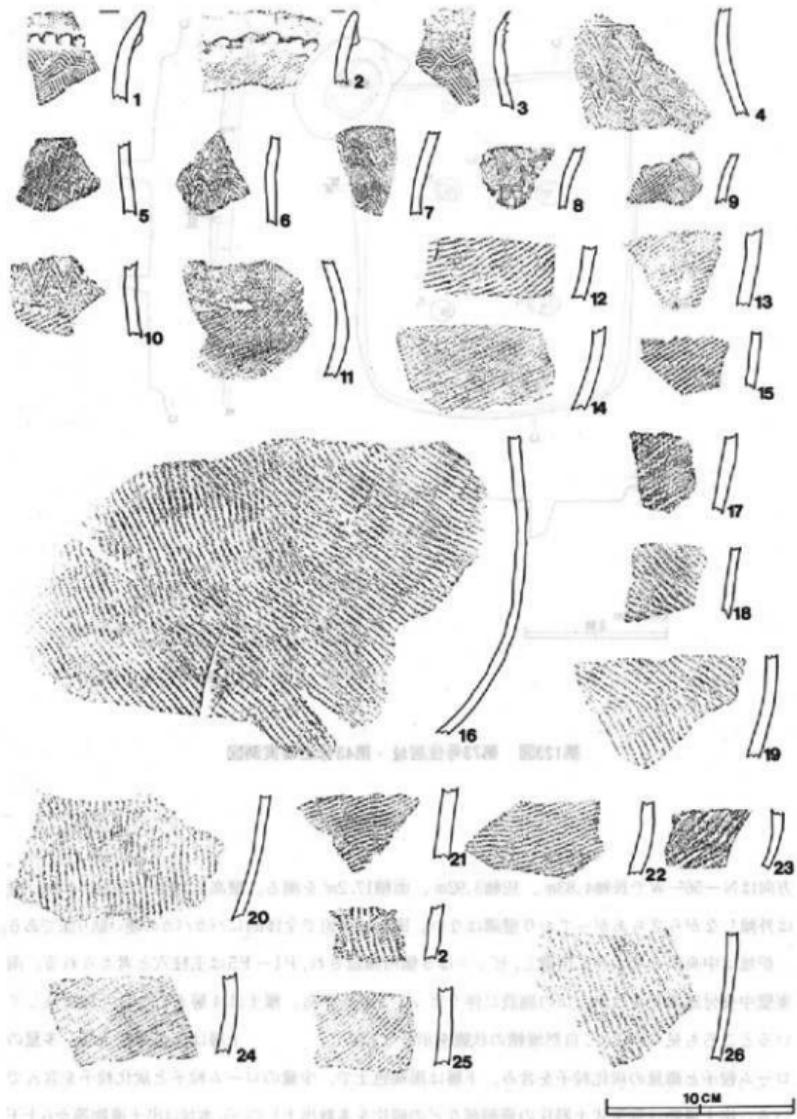
土層解説

- A-A'
1. 極暗褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(極少)含有
 2. 黒褐色 ローム粒子(少)炭化粒子含有
 3. 暗褐色 ローム粒子(極少)含有
 4. 塗褐色 ローム粒子、灰土粒子(極少)含有

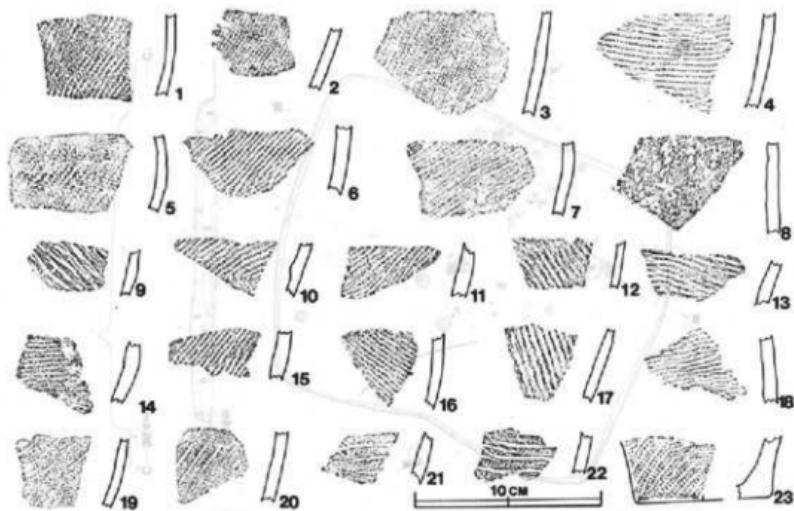
第123図 第73号住居址・第43号土壤実測図

方向はN-56-Wで長軸4.83m, 短軸3.92m, 面積17.2m²を測る。壁高は21cm~29cmであり、壁は外傾しながら立ちあがっており壁溝はない。床面は平坦で全体的にバカバカの硬い貼り床である。

炉址は中央から北よりに位置し、ピットは5個所確認され、P1~P5は主柱穴と考えられる。南東壁中央付近のP5は出入口の施設に伴うピットと思われる。覆土は4層からなり一部擾乱しているところも見られるが、自然堆積の状態を示している。上層は極暗褐色土で、少量のローム粒子と微量の炭化粒子を含み、下層は黒褐色土で、少量のローム粒子と炭化粒子を含んでいる。出土遺物は弥生式土器片の壺部などの破片を多数出土している。本址は出土遺物等から十石台式よりも古い時期に廃棄された造構と思われる。



第124図(1) 第73号住居址出土遺物拓影圖



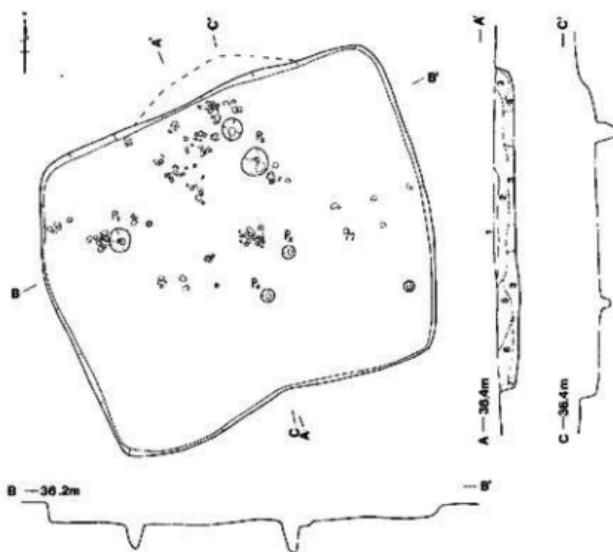
第124図(2) 第73号住居址出土遺物拓影図

第74号住居址（図125・126）

本住居址は、調査区の中央部東側C 4区g 5, h 4, h 5, i 4, i 5に確認され、第92号住居址を70%ほど切り込んでいる。東側0.2mには第93号住居址が、北側3.8mには第79号住居址が、第92号住居址に複合して検出されている。本址は第92号住居址より古い遺構である。本址の、主軸方向はN-68°Eで、規模は長軸5.55m、短軸4.50m、面積23.5m²を測り隅丸方形の平面形を呈しており、壁高は15cm~30cmほどであり、壁はやや直立ぎみに立ちあがっている。床面は褐色で、全体的に軟らかく平坦であり、炉址は確認できなかった。ピットは6個所確認され、P 1・P 2は主柱穴と思われるが、南部の柱穴は確認できなかった。覆土は9層からなり、自然堆積の状態を示している。

上層は黒褐色土で多量のローム粒子を含み、中層は黒褐色土で少量のローム粒子を含み、下層は暗褐色土で多量のローム粒子と少量の焼土粒子を含んでいる。出土遺物は、土師器を中心に中央部から北西部にかけて多量に出土している。北西部床面直上から小型甕片、甕口縁部（図126-2）を、北東部床面直上から瓶片を、中央部床面直上より手捏土器、器台片（図126-5）を出土し、他には甕（図126-1）、壺、鉢（図126-4）などの破片を数点出土している。その他の出土遺物は、覆土から弥生式土器の十王台式より古い型式の底部片などを数点出土している。

本址は出土遺物等から五領期に比定される遺構と思われる。



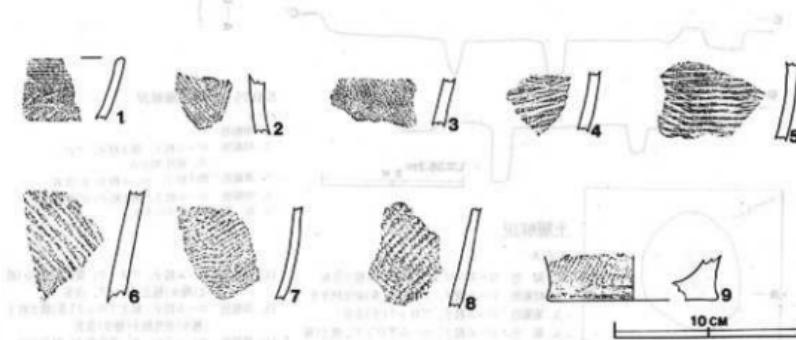
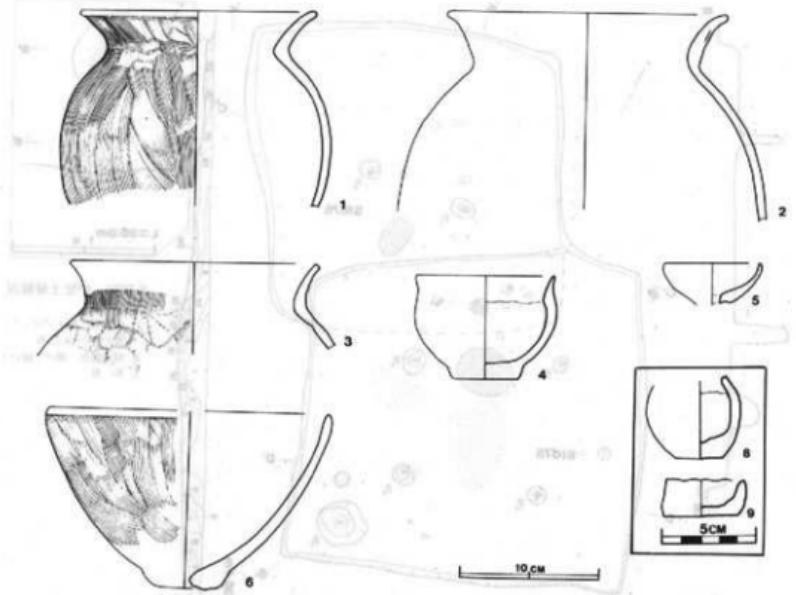
七層解説

A-A'

1. 黒色 口一ム粒子(多)含有
2. 黒褐色 口一ム粒子(少)含有
3. 黑褐色 口一ム粒子(多)鐵上粒子(少)含有
4. 黑色 口一ムブロック(多)

5. 黑褐色
6. 黑褐色 口一ム粒子(多)鐵土粒子(少)含有
7. 黑色

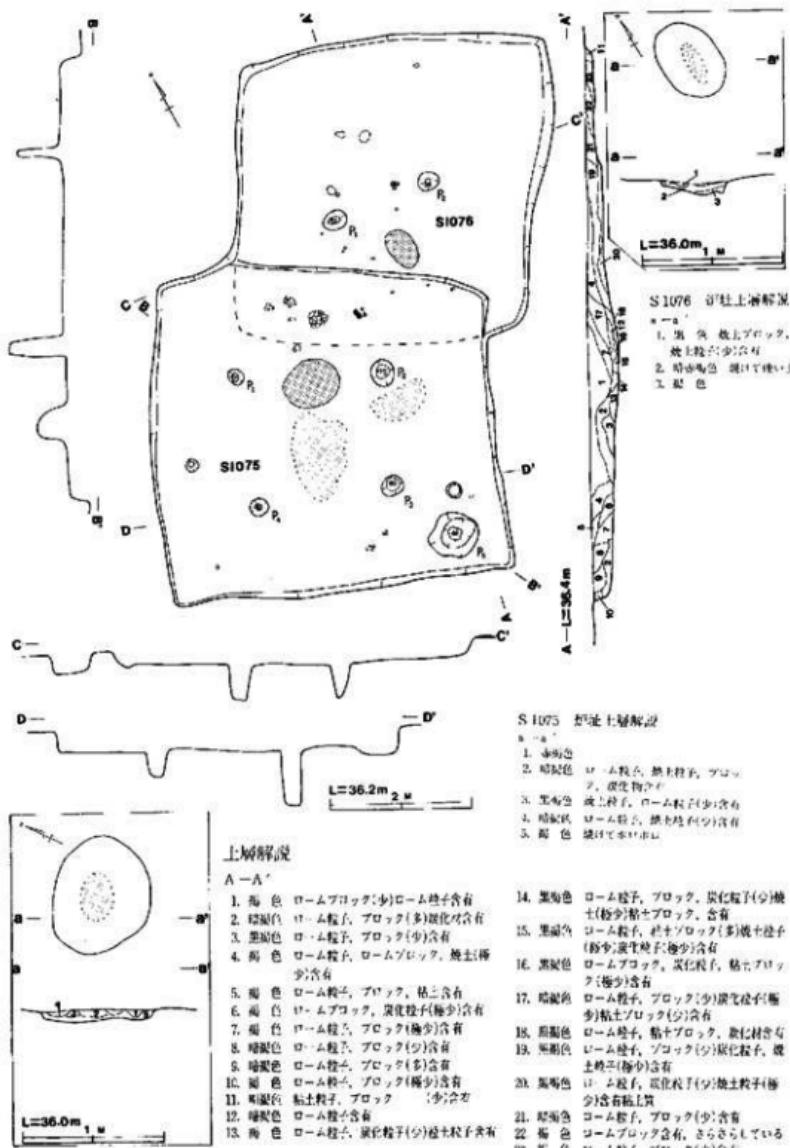
第125図 第74号住居址実測図



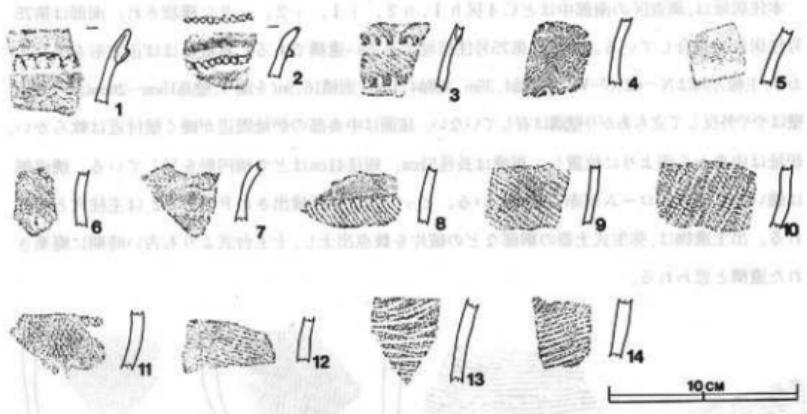
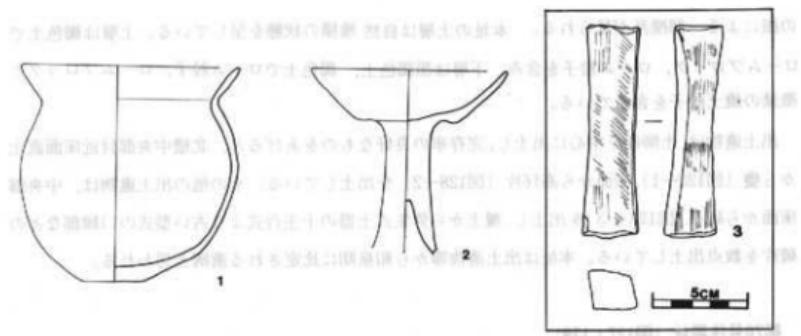
第126図 第74号住居址出土遺物実測・拓影図

第75号住居址 (図127・128)

本住居址は、調査区の南部中ほどC3区j0, C4区i1, i2, j1, j2に確認され、北壁は第76号住居址に複合している。本址は第76号住居址より新しい構造である。南西1.0mには第48号住居址が検出されている。本址はほぼ正方形の平面形を呈し、主軸方向はN-68°Wで長軸



第127図 第75・76号住居址実測図



第128図 第75号住居址出土遺物実測拓影図

4.92m、短軸4.60m、面積21.6m²を測り、壁高は16cm～31cm程である。壁はほぼ直立ぎみに立ちあがっている。床面は南側がやや高く、他は平坦で非常に硬い貼り床である。炉址は中央部からやや北よりに位置し、長径86cm、短径70cmと焼成部は強い火を受けて赤くやけている。住居址中央部付近に焼土の広がりが見られ、北壁中央部付近に炭化材を検出しているので本址は火災に遭遇していると思われる。

ピットは7個所確認されP1～P4は主柱穴と考えられる。南東コーナーのP5は貯蔵穴と考えられ、規模は長径73cm、短径66cm、深さ44cmの不整梢円形を呈している。覆土は18層からなり木

の根による一部擾乱が見られる。本址の土層は自然堆積の状態を呈している。上層は褐色土でロームブロック、ローム粒子を含み、下層は黒褐色土、褐色土でローム粒子、ロームブロックと微量の焼土粒子を含んでいる。

出土遺物は、土師器を中心に出土し、完存率の良好なものをあげると、北壁中央部付近床面直上から甕（図128-1）、床面から高J环片（図128-2）を出土している。その他の出土遺物は、中央部床面から砾石（図128-3）を出土し、覆土から弥生式土器の十王台式より古い型式の口縁部などの破片を数点出土している。本址は出土遺物等から和泉期に比定される遺構と思われる。

第76号住居址（図127・129）

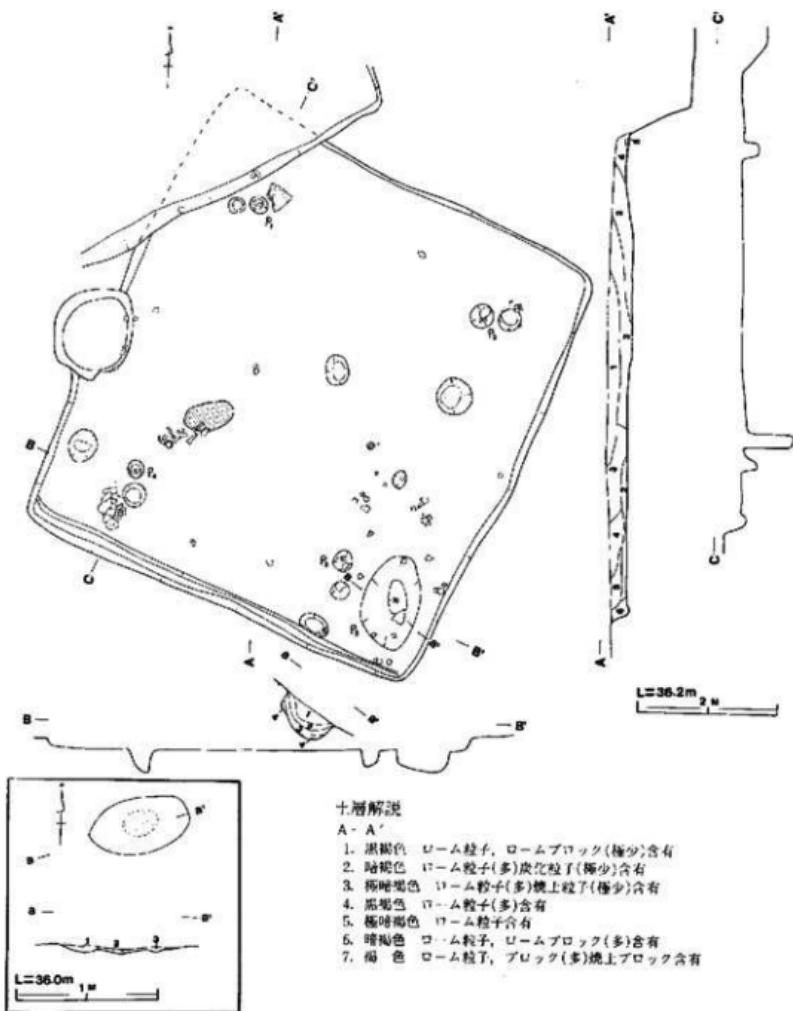
本住居址は、調査区の南部中ほどC 4 区 h 1, h 2, i 1, i 2, j 2 に確認され、南部は第75号住居址と複合している。本址は第75号住居址より古い遺構である。本址はほぼ正方形を呈しており、主軸方向はN-62.5°-Wで、長軸4.35m、短軸4.15m、面積16.9m²を測り、壁高15cm～26cmほどである。壁はやや外反して立ちあがり壁溝は有していない。床面は中央部の炉址周辺が硬く壁付近は軟らかい。炉址は中央から南よりに位置し、規模は長径51cm、短径41cmほどで椭円形を呈している。焼成部は強い火を受けてロームが赤く焼けている。ピットは2個所検出されP 1～P 2は主柱穴と思われる。出土遺物は、弥生式土器の胴部などの破片を数点出土し、十王台式よりも古い時期に廃棄された遺構と思われる。



第129図 第76号住居址出土遺物拓影図

第77号住居址（図130・131）

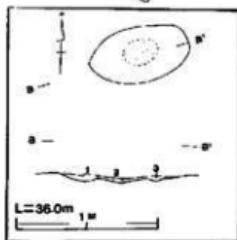
本住居址は、調査区の中央部東側C 4 区 d 2, d 3, e 1, e 2, e 3, f 1, f 2, f 3 に確



上層解説

A-A'

1. 黒褐色 ローム粒子、ロームブロック(極少)含有
2. 哈褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(極少)含有
3. 棕褐色 ローム粒子(多)焼上粒子(極少)含有
4. 黑褐色 ローム粒子(多)含有
5. 極暗褐色 ローム粒子含有
6. 喀褐色 ワーム粒子、ロームブロック(多)含有
7. 間 色 ローム粒子、ブロック(多)焼上ブロック含有



炉址上層解説

a-a'

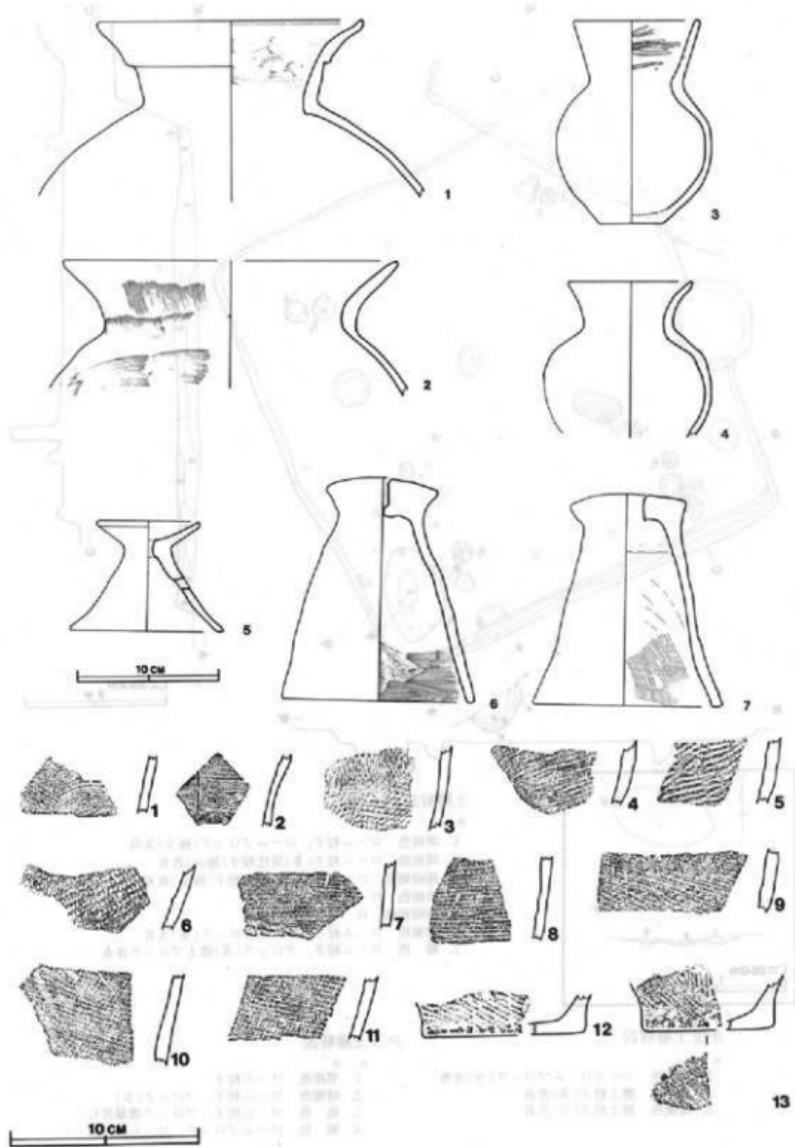
1. 哈褐色 ハームブロック(少)含有
2. 小褐色 焼上粒子(多)含有
3. 黑褐色 燃土粒子(少)含有

P 5上層解説

a-a'

1. 黒褐色 ローム粒子
2. 哈褐色 ローム粒子、ブロック(少)
3. 棕 色 ローム粒子、ブロック微量含有
4. 間 色 ロームブロック、ローム粒子含有

第130図 第77号住居址実測図



第131図 第77号住居址出土遺物実測・拓影図
（出典：東北大学考古学研究会編『東北考古』）

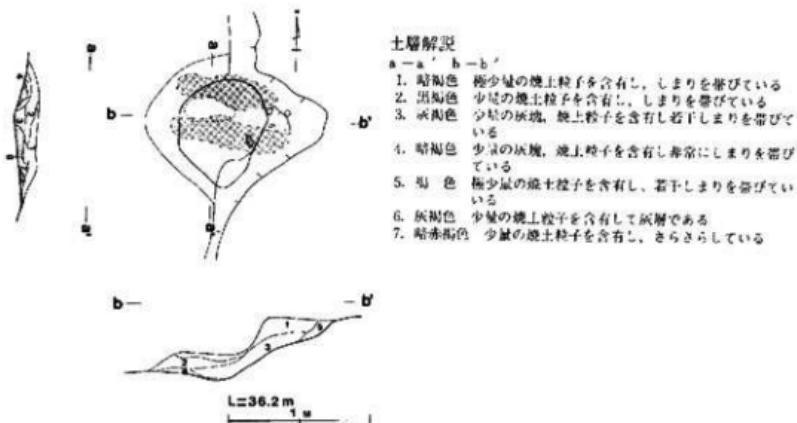
認され、北西コーナーには第36号住居址、西壁中央部には土壙が複合している。西側1.0mには、第37号住居址、第38号住居址、西側0.6mには第78号住居址が検出され、第38号住居址の南東コーナーと本址の南西コーナーは接している。本址は切り合い関係から第36号住居址、第38号住居址より古い造構である。

本址は、隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-27°Eで規模は、長軸6.53m、短軸6.25m、面積37.2m²を測り壁高は15cm~26cmほどである。壁はゆるやかに外傾して立ちあがっている。壁溝はなく床面は硬く平坦である。北西部から炭化物を出土しているところから本址は火災に遭遇していると思われる。炉址は床面中央より西に位置し規模は長径70cm、短径40cm、深さ8cmほど楕円形に掘り窪められており焼土が含まれている。ピットは14個所確認されP1~P4は上柱穴と考えられる。南東コーナーのP5は貯藏穴と思われ、長径129cm、短径80cm、深さ39cmの不整椭円形を呈している。覆土は6層からなり、東部地区は擾乱を受けているが他は自然堆積の状態を示している。

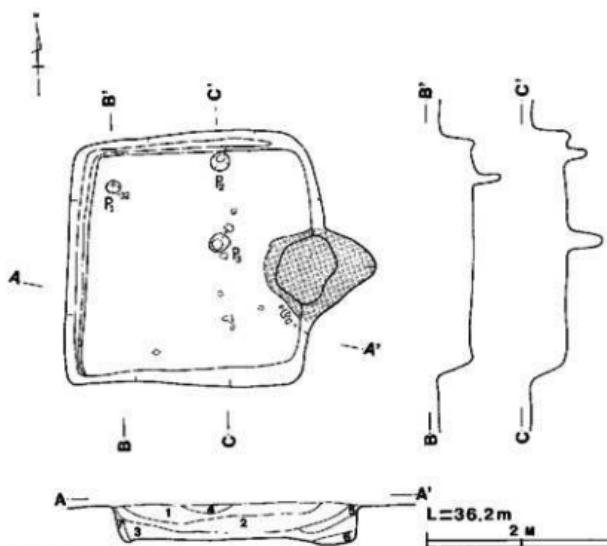
上層は黒褐色土で、ローム粒子と極少量のロームブロックを含有し、下層は黒褐色土で多量のローム粒子、ロームブロック、焼土ブロックと極少量の炭化粒子を含有している。出土遺物は、土師器を中心に弥生式土器の十手台式よりも古い型式の頸部、底部などの破片を覆土から数点出土している。土師器の完存率の良好なものをあげると、炉址付近床直上から甕口縁部(図131-2)と、南東コーナー床面直上から甕(図131-3)、床面から器台(図131-5)、壺(図131-4)、西コーナー床面より壺(図131-1)を出土し、他に支脚2個(図131-6・7)と壺、甕などの破片を数点出土している。本址は、出土遺物等から古墳時代五頭期に比定される遺構と思われる。

第78号住居址(図132・133)

本住居址は、調査区の中央部東側C4区f2, f3, g2, g3に確認され、北側0.7mには第77号住居址が、東側2.5mには第92号住居址が、西側3.7mには第81号住居址が検出されている。本址は隅丸正方形の平面形を呈し、主軸方向はN-91°Eで長軸2.70m、短軸2.65m、面積5.3m²を測る。壁高は35cm程度で、壁は垂直に立ちあがり、壁下には東・北壁を除いて幅11cm、深さ6cm内外の壁溝を有している。床面は中央部が硬くその周辺は軟らかい。ピットは3個所確認されP1は主柱穴と考えられるが、他は確認することができなかった。覆土は7層からなり自然堆積の状態を示し、確認面より床面中央に向って流れ込んでいる。上層は黒褐色土で少量のローム粒



第132図 第78号住居址カマド実測図



上層解説

A-A'

1. 黒褐色 ローム粒子(少)焼土粒子(極少)含有
2. 極暗褐色 ローム粒子、焼土粒子(少)含有
3. 黒色 ローム粒子、焼土粒子、炭化材含有

4. 暗褐色 ロームブロック含有
5. 黑褐色 ローム粒子(多)炭化材、焼土粒子(極少)含有
6. 暗褐色 ローム粒子(多)含有
7. 黄色 ローム粒子(多)含有

第133図 第78号住居址カマド実測図

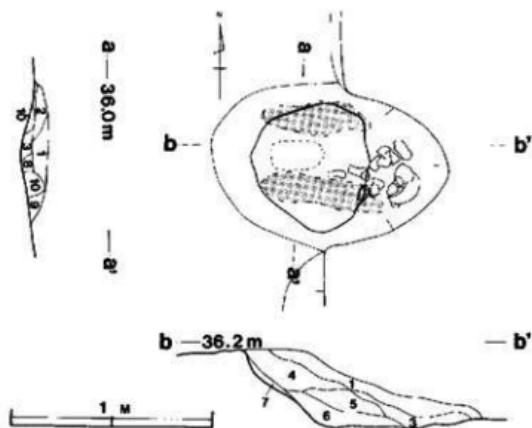
子と極少量の焼土粒子を含み、中層は極暗褐色土でローム粒子と少量の焼土粒子を含み、下層は黒色土でローム粒子、焼土粒子、炭化粒子を含んでいる。カマドは東壁の中央部西向きに構築し規模は長径110cm、短径50cm、東壁を76cm幅で、49cm程掘り込んで煙道としている。煙道部から土師器片を出土している。燃焼部は長径36cm、短径18cm、深さ4cm程の楕円形に掘り窪めている。

出土遺物は土師器の破片を中心に須恵器の环片を南東部床面直上から共伴している。土師器の高环片、环片、斐口縁部などの細片を床面直上から出土している。その他の出土遺物は弥生式土器片数点と布目瓦を覆土から出土している。

本址は、出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第79号住居址（図134～136）

本住居址は、調査区の中央部東側C4区f4,f5,g5に確認され、本址のほとんどは第92号住居址の北部に複合し、本址は第92号住居址より新しい遺構である。北東0.5mに第94号住居址

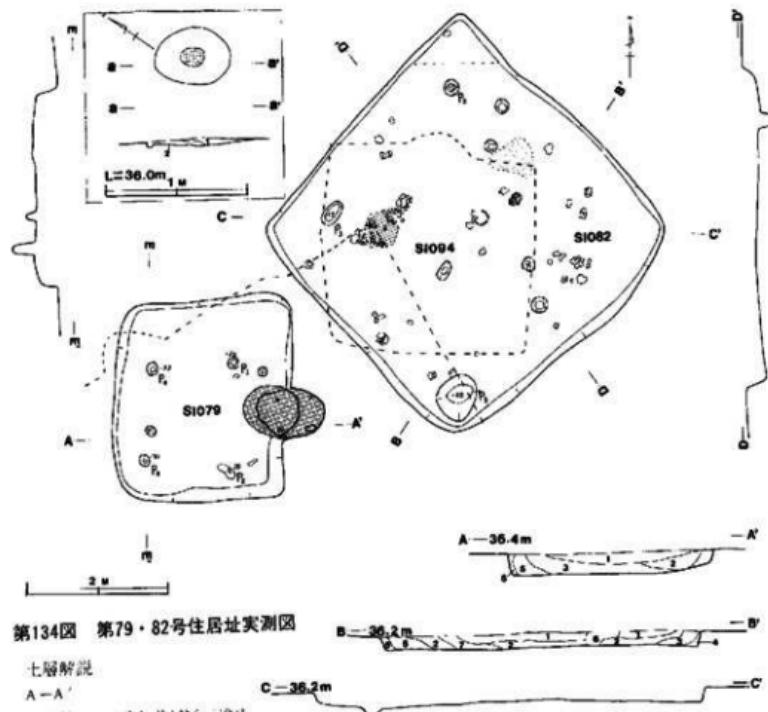


上層解説

- a-a' - b-b'
- 1. 黒 色 焼土粒子(極少)含有
- 2. に赤い加陶色 燃土、灰(少)含有
- 3. 暗褐色 ハードローム粒子、焼土粒子(少)含有
- 4. に赤い褐色 燃土粒子(多)含有砂質の上層

- 5. 明赤褐色 燃土ブロック(多)含有灰質の層
- 6. 暗褐色 燃土粒子(多)含有灰層
- 7. 褐 色 燃土粒子(極少)含有
- 8. 暗褐色 燃土粒子(多)含有灰質の砂質
- 9. 黑 色 燃土粒子、炭化粒子(少)含有砂質の土層
- 10. 黑褐色 粘土(少)含有砂質の上層

第135図 第79号住居址カマド実測図



第134図 第79・82号住居址実測図

土層解説

A-A'

1. 黄褐色 ローム粒子、地上粒子、炭化粒
(少)含有
2. 黒褐色 ローム粒子、地上粒子、炭化粒
砂、含む
3. 黑褐色 地下粒子、地上粒子、炭化
粒、砂、含む
4. 黑褐色 地下粒子、炭化粒を含む
ローム粒子(少)含有
5. 黑褐色 ローム粒子(少)含有
6. 黑褐色 ローム粒子(多)含有

炉址上層解説

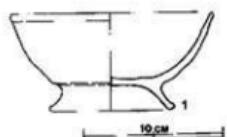
B-B'

1. 暗褐色 地上粒子(多)炭化粒子、砂質
(少)含有
2. 刻跡褐色 烧土ブロック含有

土層解説

B-B'

1. 暗褐色 ローム粒子(多)ロームブロック
(少)含有
2. 暗褐色 ローム粒子、炭化粒(少)含
(少)含有
3. 暗褐色 ローム粒子、炭化粒、焼土粒子
(少)含有
4. 黑褐色 ローム粒子、炭化粒(少)含有
5. 黑褐色 ローム粒子(少)含有さらさらし
ている
6. 黑褐色 ローム粒子、燒土粒子(少)含有
7. 黑褐色 ローム粒子、燒土粒子(少)含有



第135図 第79号住居址出土遺物実測図

・第82号住居址が、第92号住居址の北コーナーに複合し検出されている。南側3.6mには第74号住居址・第93号住居址が第92号住居址の南コーナーに複合して検出されている。本址は隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-89° Eで長軸2.81m、短軸2.50m、面積6.1m²を測る。壁高は28cm~37cm程であり、壁はほぼ垂直に立ちあがっている。床面は中央部がやや硬いものの壁付近は軟らかい。ピットは6個所確認されP 1~P 4は上柱穴と考えられる。貯蔵穴は有していない。

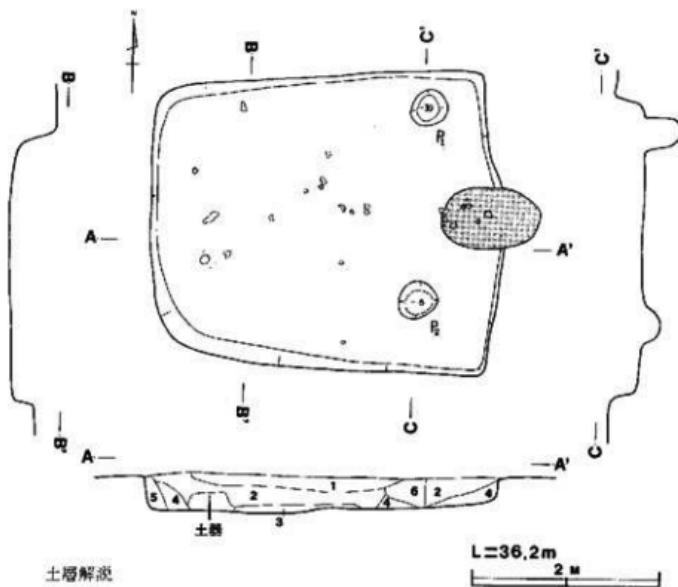
覆土は6層からなり、第92号住居址の覆土を切って本址は自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土でローム粒子と焼土粒子、炭化粒子を含み、下層は極暗褐色土でローム粒子、焼土粒子、炭化粒子を含んでいる。

カマドは東壁の中央から南よりに位置し、規模は長径93cm、短径53cmで、北壁を79cm幅で、50cmほど掘り込んで烟道としている。燃焼部は長径28cm、短径15cm、深さ4cmほど楕円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で、カマドは西向きに構築されている。燃焼部から甕破片と内黒の高台付口（図136-1）を出土している。出土遺物は非常に少なく床面直上などから土師器の細片を数点出土している。その他の出土遺物はカマドから布目瓦を出土し、他に弥生式土器片を数点出土している。本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第80号住居址（図137）

本住居址は、調査区の中央部東側C 4区c 4, c 5に確認され、北側1.2mには第42号住居址、第44号住居址が、北東0.1mには第83号住居址が、東側1.0mには第49号住居址が、西側3.5mには第45号住居址が検出されている。本址は隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-86° Eで、規模は長軸3.80m、短軸3.15m、面積11.1m²を測る。壁高は40cm内外であり、壁はほぼ垂直に立ちあがっている。床面は褐色で軟らかく平坦である。

ピットは2個所検出され、P 1~P 2は主柱穴と思われるが、他の柱穴は確認されなかった。覆土は6層からなり自然堆積の状態を示している。上層は極暗褐色土でローム粒子と少量の焼土粒子を含み、中層は暗褐色土で多量のローム粒子と極少量の焼土粒子を含み、下層は暗褐色土で多量のローム粒子とロームブロック、炭化粒子を含んでいる。カマドは東壁の中央部に位置し西向きに構築されているが、擾乱されてそのプランを確認することはできない。遺物は土師器を中心に須恵器の壺などの細片と弥生式土器の破片を覆土から数点出土している。土師器は、南東部瓦付近床面直上から壺等の破片を数点出土している。本址は、出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

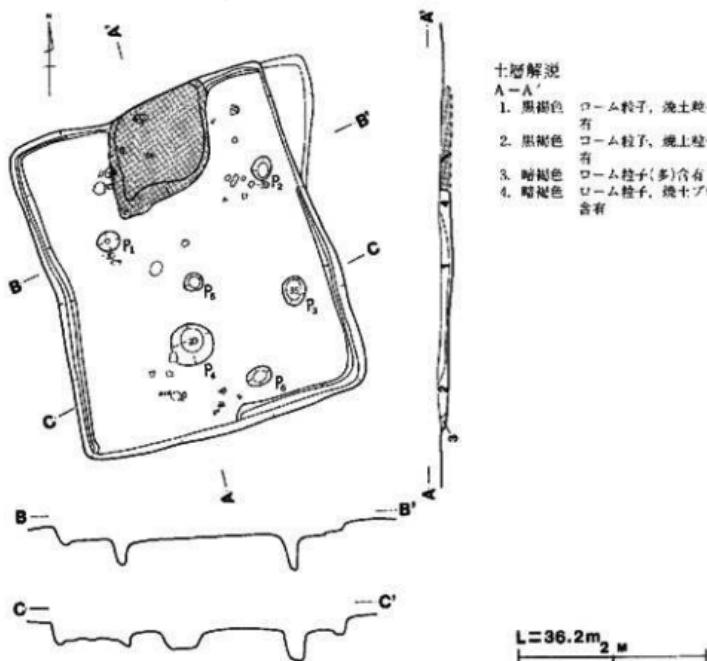


第137図 第80号住居址実測図

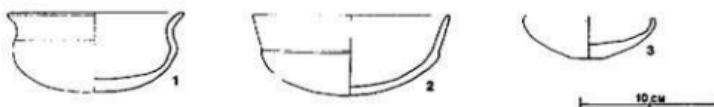
第81号住居址（図138・139）

本住居址は、調査区の中央部C 3区f 0, g 0, C 4区f 1, g 1に確認され、北東2.8mには第38号住居址が、3.8mには第77号住居址が、東側3.7mには第78号住居址が、西側2.0mには方形周溝造構が検出されている。本址は、隅丸長方形の平面形のを呈し、主軸方向はN-13°-Wで規模は長軸3.66m、短軸3.11m、面積9.8m²を測る。壁高は14cm～18cmであり、壁はゆるやかに外反して立ちあがり、壁下には幅10cm、深さ5cmの壁溝を有している。床面は中央部が非常に硬く、壁付近は軟らかい。

ピットは5個所確認されP 1～P 2は主柱穴と思われるが、貯蔵穴は有していない。覆土は4層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土でローム粒子と極少量の焼土粒子を含



第138図 第81号住居址実測図



第139図 第81号住居址出土遺物実測図

み、下層は黒褐色土で、ローム粒子、焼土粒子、焼土ブロックを含んでいる。カマドは北壁の中央部に付設されているが、削平されている。出土遺物は、土師器を中心に、須恵器の細片を覆上から数点出土している。土師器の完存半の良好なものをあげると床面直上から椀(図139-1)、坏片(図139

—2), 南壁付近床面直上から小型壺(図139-3)を出土している。その他の出土遺物は弥生式土器片で覆土から十王台式より古い型式の頸部片などの破片を数点出土している。

本址は、出土遺物等から古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

（著者注）参考

第82号住居址(図134・140(1)(2))

本住居址は、調査区の中央東端C4区e5, e6, f5, f6に確認され、中央部に第94号住居址が、東側に第53号土壙がすばりと複合している。北コーナーには第95号住居址が、南西部には第92号住居址が複合している。

本址は第92号住居址・第94号住居址より古く、第95号住居址・第53号土壙と同時期であるが、切り合い関係から第95号住居址・第53号土壙より新しい遺構である。本址は隅丸正方形の平面形を呈し、主軸方向はN-44°Wで規模は長軸4.62m、短軸4.50m、面積18.7m²を測る。壁高は20cm~30cm程であり、壁はややゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面は暗褐色土で平坦であり、炉址付近が特に硬い。ピットは6個所確認されP1~P2は主柱穴と考えられるが、他の主柱穴は検出できなかつた。

西コーナーのP3は貯蔵穴で、規模は長径70cm、短径58cm、深さ48cmほどで不整椭円形を呈して

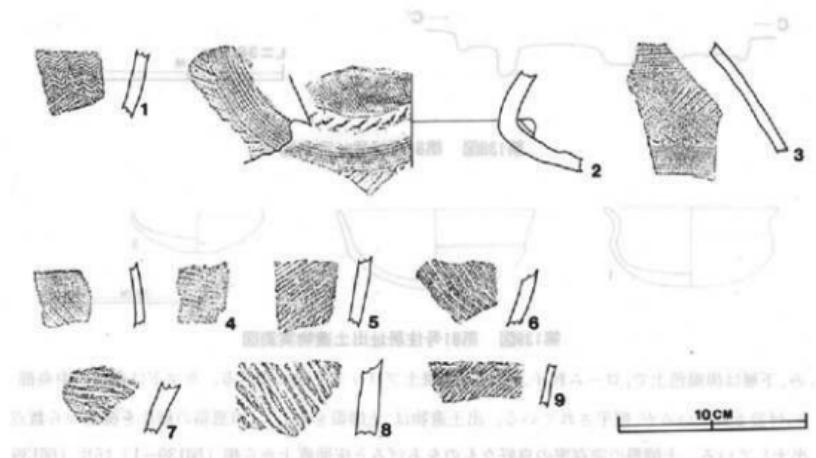
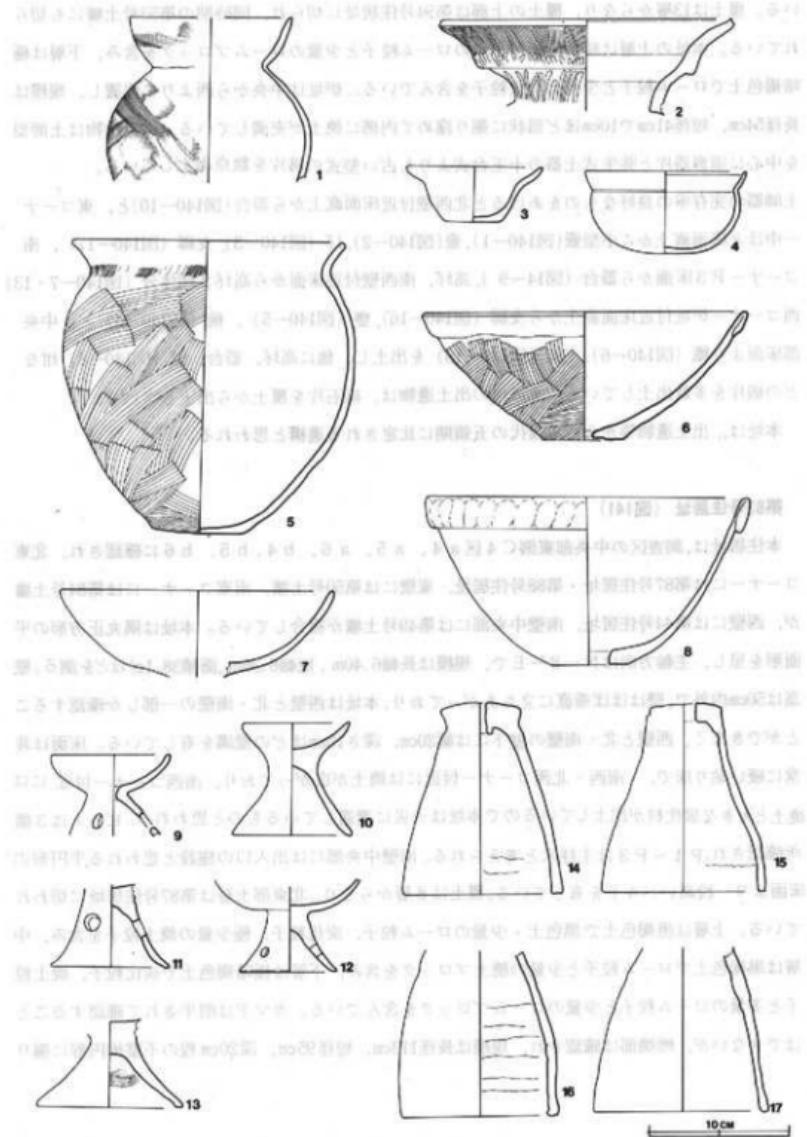


図140(1) 第82号住居址出土遺物拓影図



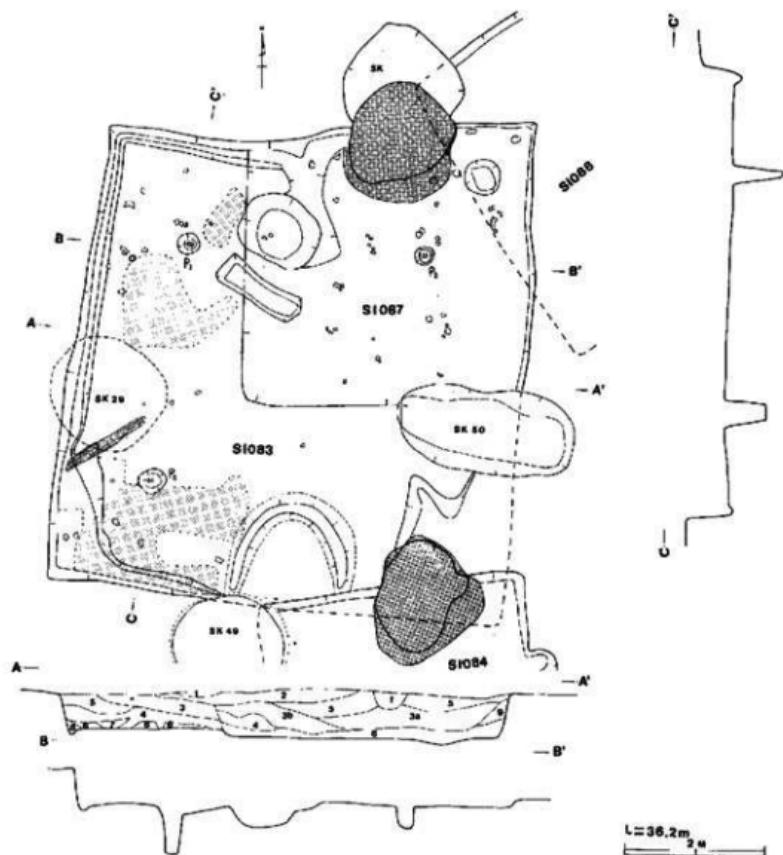
いる。覆土は13層からなり、覆土の上部は第94号住居址に切られ、同時期の第53号土壙にも切られている。本址の上層は暗褐色土で多量のローム粒子と少量のロームブロックを含み、下層は極暗褐色土でローム粒子と少量の炭化粒子を含んでいる。炉址は中央から西よりに位置し、規模は長径54cm、短径41cmで10cmほど皿状に掘り溢めて内部に焼土が充満している。出土遺物は土師器を中心に須恵器片と弥生式土器の十手台式よりも古い型式の破片を数点出土している。

土師器の完存率の良好なものをあげると北西壁付近床面直上から器台(図140-10)と、東コーナー中ほど床面直上から小型壺(図140-1)、壺(図140-2)、杯(図140-3)、支脚(図140-17)、南コーナーP3床面から器台(図140-9)、高杯、南西壁付近床面から高杯2個体分(図140-7・13)、西コーナー炉址付近床面直上から支脚(図140-16)、壺(図140-5)、碗(図140-4)と、中央部床面より壺(図140-6)、支脚(図140-15)を出土し、他に高杯、器台、壺(図140-8)、壺などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は、延石片を覆土から出土している。

本址は、出土遺物等から古墳後代の五輪期に比定される遺構と思われる。

第83号住居址(図141)

本住居址は、調査区の中央部東側C4区a4、a5、a6、b4、b5、b6に確認され、北東コーナーには第87号住居址・第88号住居址、東壁には第50号土壙、南東コーナーには第84号土壙が、西壁には第44号住居址、南壁中央部には第49号土壙が複合している。本址は隅丸正方形の平面形を呈し、主軸方向はN-8°Eで、規模は長軸6.40m、短軸6.35m、面積38.1m²などを測る。壁高は50cm内外で、壁はほぼ垂直に立ちあがっており、本址は西壁と北・南壁の一部しか確認することができなく、西壁と北・南壁の壁下には幅20cm、深さ10cmほどの壁溝を有している。床面は非常に硬い貼り床で、南西・北西コーナー付近には焼土が広がっており、南西コーナー付近には焼土と大きな炭化材が出土しているので本址は火災に遭遇しているものと思われる。ピットは3箇所確認され、P1～P3は主柱穴と考えられる。南壁中央部には出入口の施設と思われる半円形の床面より一段高いベルトを有している。覆土は8層からなり、北東部土層は第87号住居址に切られている。上層は黒褐色土で黑色土・少量のローム粒子、炭化粒子、極少量の焼土粒子を含み、中層は黒褐色土でローム粒子と少量の焼土ブロックを含み、下層は極暗褐色土で炭化粒子、焼土粒子と多量のローム粒子と少量のロームブロックを含んでいる。カマドは削平されて確認することはできないが、燃焼部は確認され、規模は長径113cm、短径95cm、深20cm程の不整橢円形に掘り



上層知識

$$A - A'$$

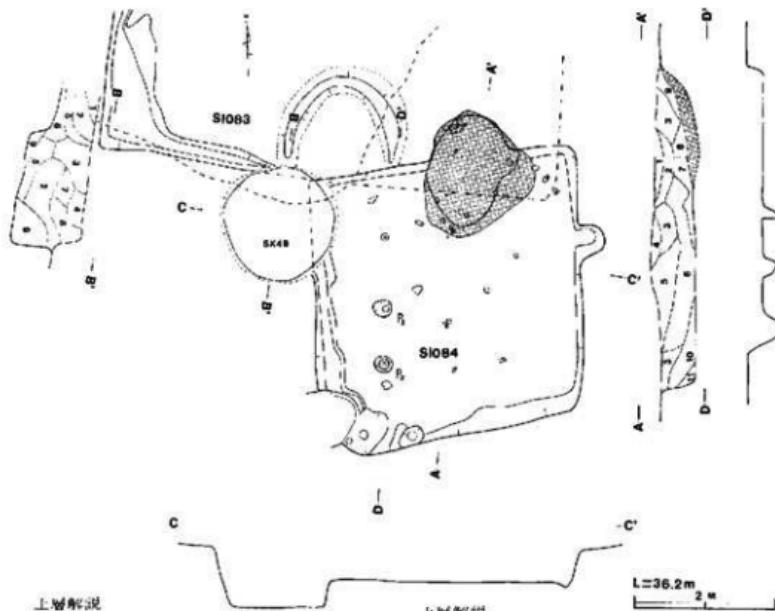
- | | |
|---------------------------------------|--|
| 1. 黒 色 ローム粒子含有 | 5. 暗褐色 ローム粒子、ローム小ブロック
(多)炭化粒(少)含有 |
| 2. 極暗褐色 ローム粒子、焼土粒子(両少)
炭化粒(少)含有 | 6. 暗褐色 ローム粒子、ブロック(多)炭化
粒、焼土粒子(両少)含有 |
| 3. 黒褐色 ローム粒子、焼土ブロック(少)
含有 | 7. 暗褐色 ロームブロック(少)炭化材(多)
含有 |
| 3a. 黒褐色 ローム粒子、焼土ブロック(極
少)含有 | 8. 暗褐色 ローム粒子(多)炭化材、焼土粒子。
含有 |
| 3b. 黒褐色 ローム粒子、焼土ブロッタ、
ハーフロームブロック含有 | 9. 褐 色 さらさらしている |
| 4. 極暗褐色 炭化材、ローム粒子(多)ブリ
ック(少)含有 | |

第141図 第83・87号住居址50号土壤実測図

確認されている。出土遺物は須恵器の高片、片、盤などの破片を出土し、土師器は、中央部から甕の破片などを数点出土している。その他の出土遺物は鉄製品や鐵滓、磁石を出土している。本址は出土遺物等から鬼高窯に比定される遺構と思われる。

第84号住居址(図142~144)

本住居址は、調査区の中央部東側C4区c5, c6, d5, d6に確認され、北壁は第83号住居址と北西コーナーは第49号上塙と複合している。南西コーナーは搅乱されている。本址は第83号住居址と同時期の遺構であるが、第83号住居址の南東コーナーを切って本址が構築されているの



上層解説

A-A'

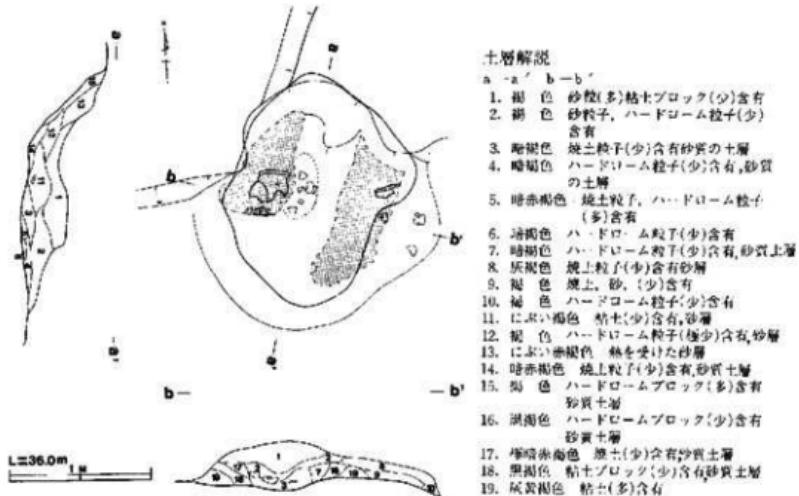
- 暗褐色 ローム粒子(多)小ブロック(少)含有
- 黒褐色 ローム粒子、小ブロック(多)焼土粒子(極少)含有
- 暗褐色 ローム粒子、ブロック(少)含有
- 赤色 ローム粒子(多)含有
- 暗褐色 ローム粒子(多)炭化材、焼土粒子(極少)含有
- 暗褐色 ローム粒子、焼土粒子、炭化材、ローム
ブロック含有
- 黒褐色 砂質粘土、炭化材、ロームブロック含有
- 暗褐色 ローム粒子、砂質粘土、炭化材、含有
- 灰褐色 ローム粒子、粘土粒子、砂、含有
- 黒色 ローム粒子含有
- 暗褐色 ローム粒子(多)炭化材含有

上層解説

B-B'

- 暗褐色 コーム粒子(多)炭化材(微)
- 暗褐色 ローム粒子(多)ブロック(少)炭化材(少)
含有
- 暗褐色 ローム粒子(少)ブロック(微)焼土粒子、炭
化材(微)含有
- 暗褐色 ローム粒子(多)焼土、ブロック(少)炭化材
含有(微)
- 暗褐色 ローム粒子(多)焼土粒子(微)ロームブロ
ック(少)含有
- 赤色 ローム粒子、ブロック(多)白色粘土(微)
含有
- 暗褐色 ローム粒子(少)「(色粘土(微)焼土粒子(微)含有
- 暗褐色 ローム粒子(多)ブロック(微)含有

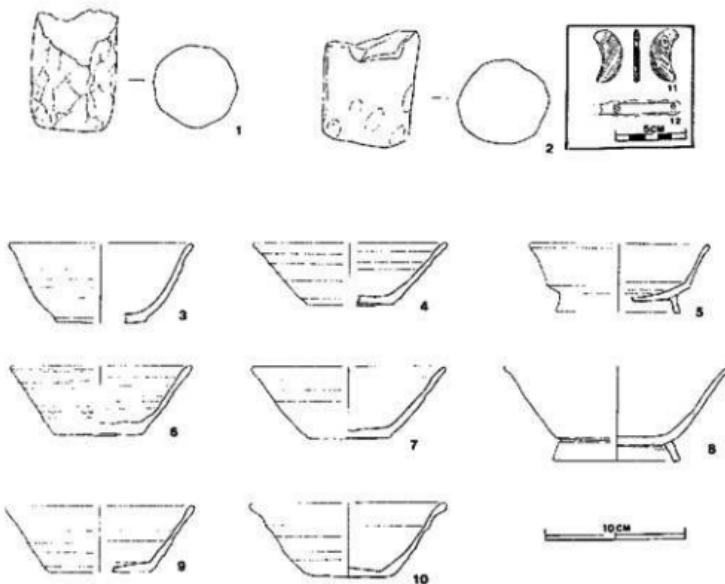
第142図 第84号住居址・第49号土壤実測図



第143図 第84号住居址カマド実測図

で、第83号住居址より新しい造構である。また第49号土壌は本址よりも新しい造構である。東側0.8mには第91号住居址が、西側2.4mには第80号住居址が、南側0.5mには第96号住居址が検出されている。本址は長方形の平面形を呈し、主軸方向はN=5°Wで、規模は長軸3.90m、短軸3.75m、面積12.1m²を測る。壁高は55cm~60cm程であり、壁はゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面は褐色で硬く踏み固められた状態を呈している。ピットは2個検出されP2は主柱穴と思われる。床面から炭化物を出土しているので火災に遭遇していると思われる。覆土は11層からなり自然堆積の状態を示している。上層は褐色土・暗褐色土で多量のローム粒子と炭化粒子、極少量の焼土粒子を含み、下層は極暗褐色土でローム粒子、ロームブロック、焼土粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央から東よりに位置し、規模は長径150cm、短径120cmで、北壁を100cm幅で53cm掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径46cm、短径25cm、深さ4cmほど円形に掘りくぼめている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で、カマドは南向きに構築されている。燃焼部内から土師器の甕口縁部などの破片を数点出土している。

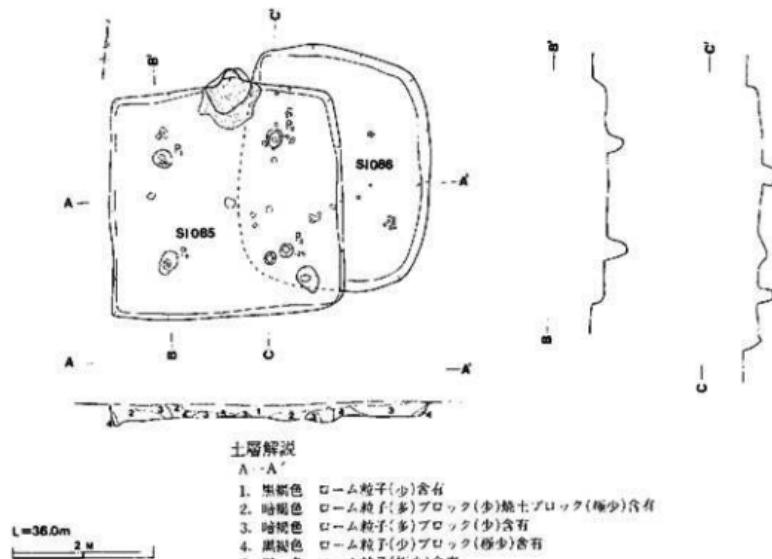
出土遺物は須恵器を中心、土師器は甕、支脚(図144-1・2)、壺などの破片を数点出土しただけである。須恵器の完存率の良好なものをあげると、北東コーナー付近床面直上から高台付近・壺片2点(図144-5・7)、中央部床面直上から壺片(図144-3)と、南西コーナーから壺(図144-4)を出土し、他に壺(図144-9)などの細片を多数出土している。その他の出土遺物は鉄製品、石製模造品の勾玉(図144-11)、砥石などを出土している。本址は出土遺物等から国分期の造構と思われる。



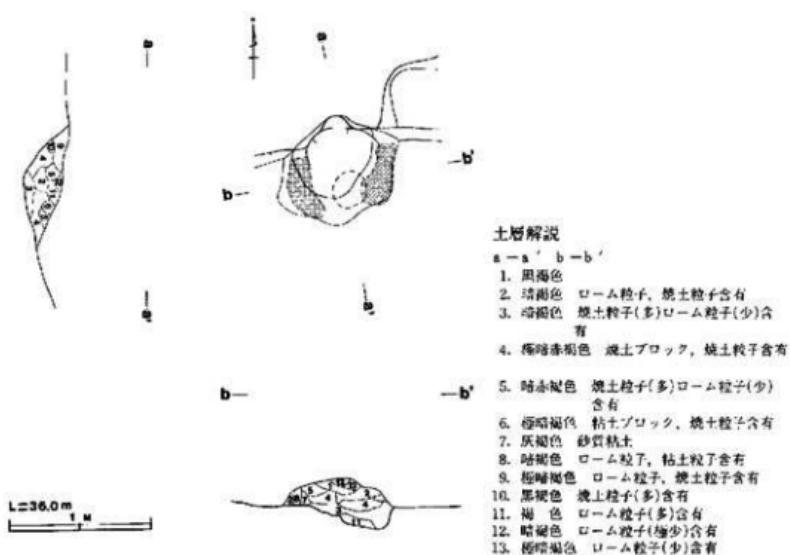
第144図 第84号住居址出土遺物実測図

第85号住居址（図145・146）

本住居址は、遺跡の南西部D3区e2,e3に確認され、本址の東側は、第86号住居址の床面を17cmほど掘り込み、約30%を削除しているので、第86号住居址よりも新しい造構である。北側1.3mには第58号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN-9°-Wで規模は長軸3.30m、短軸3.23m、面積9.5m²ほどでほぼ正方形の平面形を呈している。壁高は17cm~32cmほどで壁は緩やかに外傾して立ちあがっている。床面は平坦で硬く踏み固められた状態である。ピットは6個所確認されP1~P4は上柱穴と考えられる。覆土は11層からなり、桑の根による擾乱を受けている。上層は、黒褐色土で少量のローム粒子を含み、下層は、暗褐色土で、多量のローム粒子、少量の



第145図 第85・86号住居址実測図

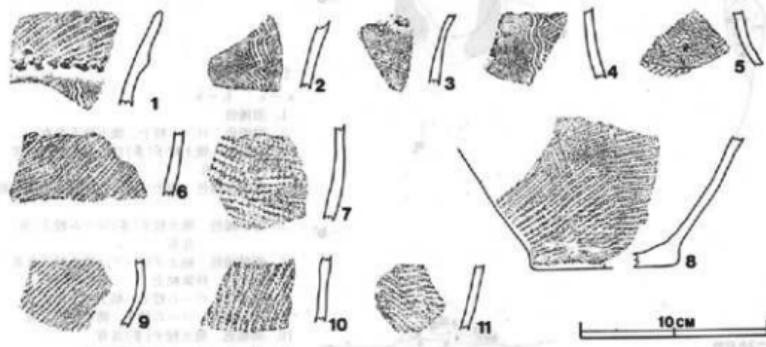


第146図 第85号住居址カマド実測図

ロームブロック、極少量の焼土ブロックを含んでいる。カマドは北壁の中央から東よりに付設され、規模は長径75cm、短径70cmで、北壁を25cm幅で10cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径25cm、短径22cmで、深さ6cmほど円形に掘り進められている。出土遺物は非常に少なく、土師器の高坏片を北西コーナー床面直上から出土し、他は甕、瓶、高坏などの細片を数点出土したのみである。その他、須恵器の細片を数点と弥生式土器片を数点出土している。本址の時期を決定するにたる遺物は少ないが、ほぼ古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

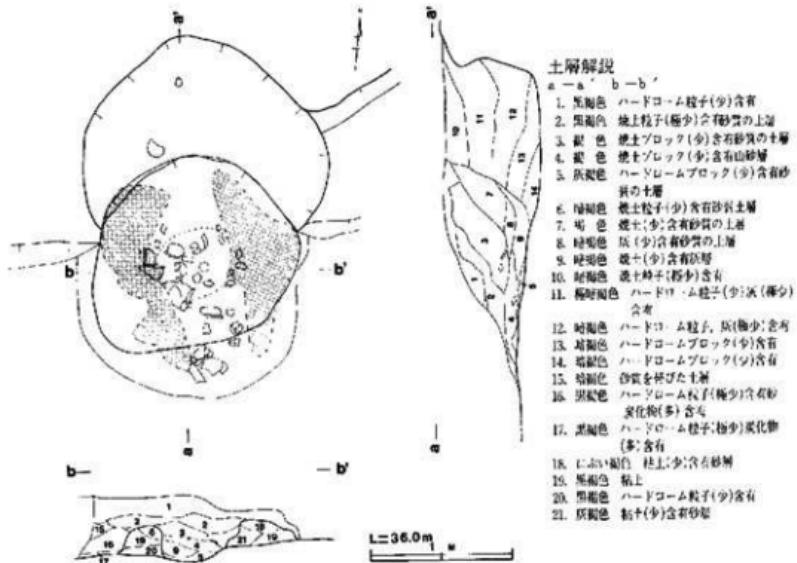
第86号住居址（図145・147）

本住居址は、調査区の南西部D3区d3、e3に確認され、本址の西側は第85号住居址に30%ほど削除されているので、本址は第85号住居址より古い遺構である。本址の主軸方向はN-3°Wで規模は長軸3.32m、短軸2.41m、面積6.7m²ほどではば隅角長方形の平面形を呈している。壁高は25cmほどで外傾して立ちあがっている。床面は褐色で踏み固められた状態を呈している。ピットは検出されない。覆土は4層からなり、第85号住居址に削除されなかった残存部は自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土で少量のローム粒子を含み、下層は暗褐色土で多量のローム粒子と少量のロームブロックを含んでいる。炉址は検出されなかった。出土遺物は、弥生式土器の口縁部、口辺部、胴部、底部などの破片を多数出土しており、これらは十王台式より古い型式の土器片と思われる。本址は弥生時代後期の遺構と思われる。



第147図 第86号住居址出土遺物拓影図

第87号住居址(図148・149)



第148図 第87号住居址カマド実測図

本住居址は、遺跡の中央部東側C 4区 a 5, a 6, b 5, b 6に確認され、北東コーナーは第88号住居址と西側は第83号住居址と南東コーナーには第50号土壙が複合している。

本址は、第83号住居址、第88号住居址、第50号土壙よりも新しい遺構で、それらの住居址の床面にロームを貼り構築されていた。本址は推定で正方形の平面形を呈し、主軸方向は、N-3.5°-Eで規模は長辺4.10m、短辺3.90m、面積14.4m²ほどを測る。壁は北壁のみ残存しており、壁高は45cmほどである。床面は硬く凹凸している。柱穴と思われるピットは確認されなかった。覆土は8層からなり自然堆積の状態を示している。上層は、暗褐色土で多量のローム粒子、ロームブロックと極少量の炭化粒子を含み、中層は黒褐色土で、少量のローム粒子と焼土粒子を含み、下層は暗褐色土で多量にローム粒子、ロームブロックと極少量の炭化粒子、焼土粒子を含んでいる。

カマドは、北壁の中央に付設され、規模は長辺142cm、短辺123cmで、北壁を140cm幅で、53cm掘り込んで煙道としている。煙道部は長辺58cm、短辺46cm、深さ3cm程橢円形に掘りくぼめている。

出土遺物は、土師器と須恵器を共伴して出土している。カマドの燃焼部から焚口部にかけて土師器の甕2個体分(図149-1・2)と細片を多数出土している。須恵器はカマド内燃焼部等から高台付甕・甕3個体分(図149-3・4・5)を出土し、甕底部(図149-4)には「由・郷長」



第149図 第87号住居址出土遺物実測図

の墨書を確認することができる。北東コ
ーナー床面直上より
壺と他に細片を多数
出土している。

その他の出土遺物
は、鐵滓を数点出土
している。本址は出
土遺物等から国分期
に比定される遺構と
思われる。

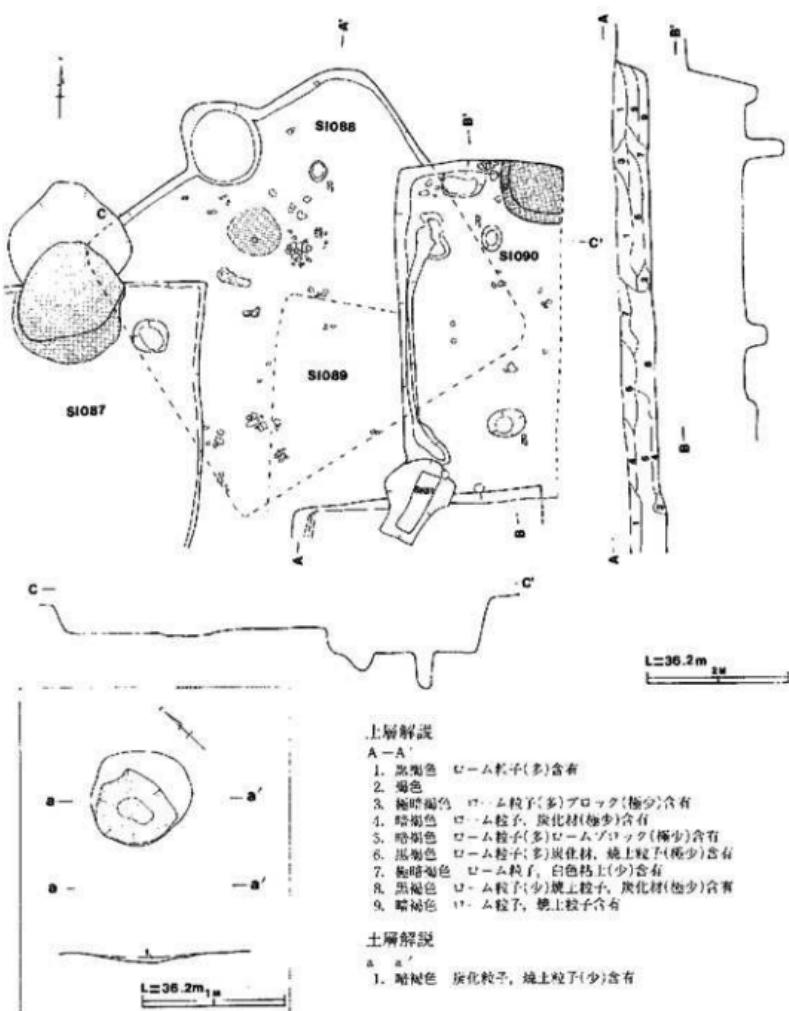
第88号住居址（図150・151）

本住居址は、調査区の中央部東側B4区j6, j7, C4区a6, a7に確認され、本址は北西付近と北コーナーを残すのみで、東コーナーには 第90号住居址が、西コーナーには 第87号住居址が、南コーナーには第89号住居址が複合している。本址は第87号住居址・第90号住居址より古い遺構である。(第89号住居址のプランは複雑に遺構が複合しているため、
はつきり把握することはできなかった。)推定で本址は、ほぼ正方形の平面形を呈し、主軸方向はN
-55°-Eで、規模は長軸1.90m、短軸4.75m、面積21.3m²ほどを測る。壁高は40cm内外であり、壁はゆるやかに外反して立ちあがっている。床面は硬く踏み固められた状態を示しており割合に凸凹している。

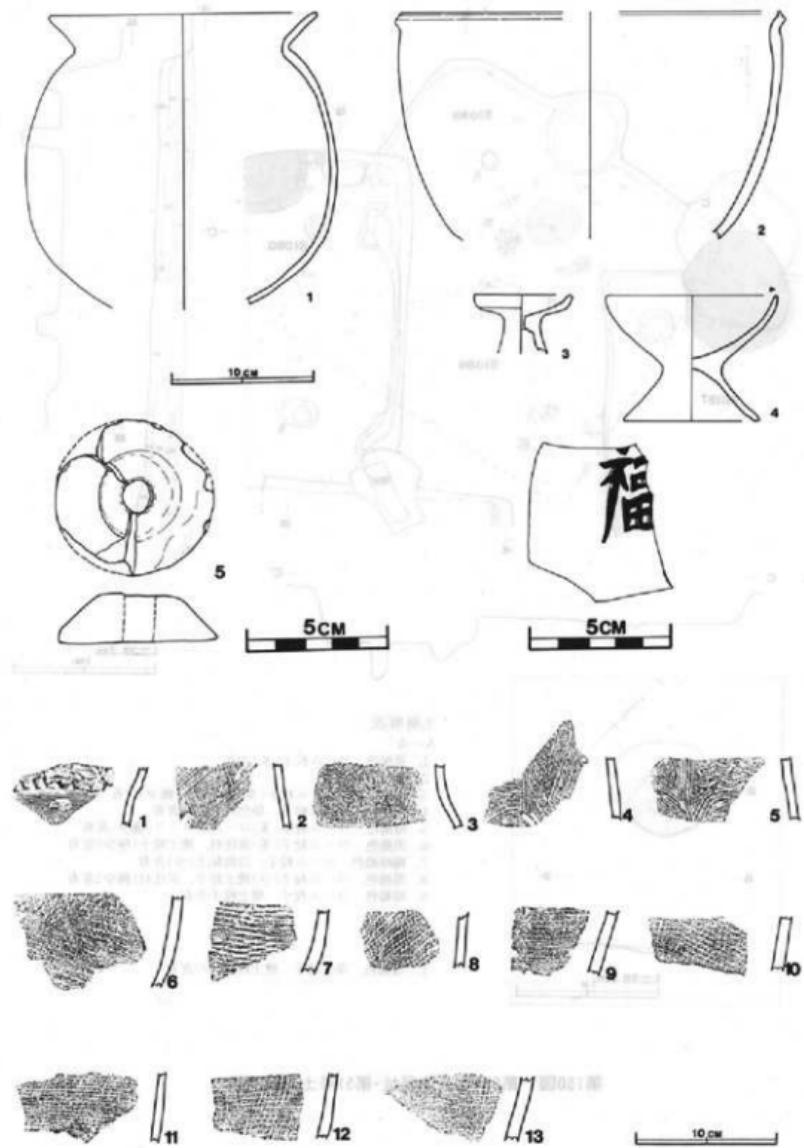
炉址は中央から北よりに位置し規模は長径70cm、短径65cmの楕円形を呈し、燃焼部は皿状に掘り窪められ焼土が充満していた。

主柱穴と思われるピットは1個所確認されている。覆土は9層からなり、複雑な遺構の複合状態を示している。上層は黒褐色土・暗褐色土で、多量のローム粒子と極少量のロームブロックを含み、下層は極暗褐色土でローム粒子と少量の白色粘土を含んでいる。

出土遺物は、土師器を中心に覆土から須恵器片、弥生式土器片を多数出土している。土師器の完存率の良好なものをあげると、が址付近床面より壺片（図151-1）、高壺片（図151-4）、南コーナー床面直上から器台片（図151-3）、北コーナー床面直上から支脚を出土し、他に覆土から壺（図151-2）などの破片を数点出土している。その他の出土遺物は、覆土から弥生式土器の破片を出土し図151-1・2は長岡式に比定され、他は十王台式に比定される破片である。他には磁石、土製紡錘車（図151-5）、墨書き器を出土している。本址は古墳時代五領期に比定される遺構と思われる。



第150図 第88-90号住居址・第51号土壤実測図

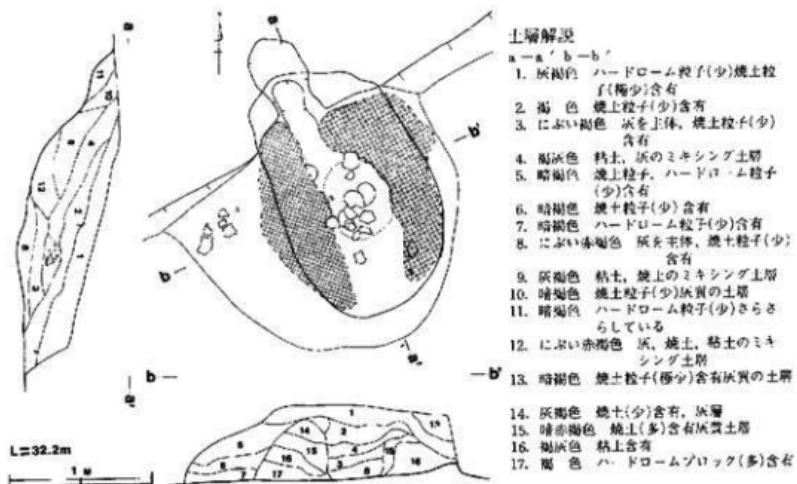


第151図 第88号住居址出土遺物実測・拓影図

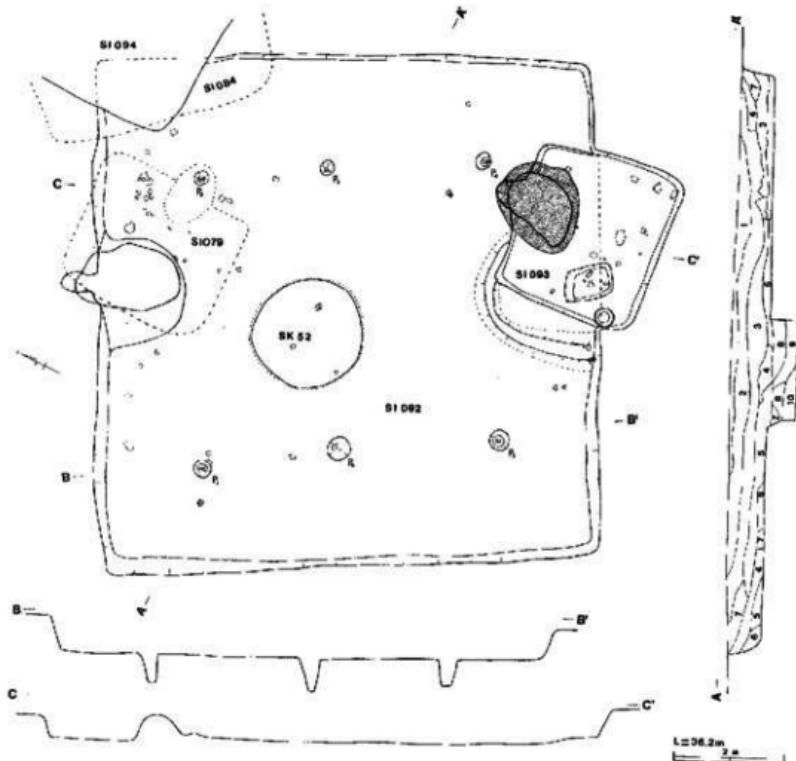
第92号住居址（図152～154）

本住居址は、遺跡の中央部東端C 4 区 f 4, f 5, f 6, g 3, g 4, g 5, g 6, h 4, h 5, h 6に確認され、北コーナーには本址より新しい時期の第79号住居址・第94号住居址が、古い時期の第82号住居址が検出されている。南東壁には本址より新しい時期の第93号住居址が、南コーナーには、本址より古い時期の第74号住居址が複合している。本址は、正方形の平面形を呈し、主軸方向はN-16°-Wで規模は長軸9.15m、短軸9.10m、面積77.4m²ほど測る。壁高は42cm～68cm程で壁はゆるやかに外反して立ちあがっている。床面は暗褐色であり、中央部は硬いが壁際は軟らかい。

南東壁中央部に出入り口の施設と思われるベルトが、床面より一段高く半円形に造っている。その中心部に土壇が付設され、規模は長辺87cm、短辺61cm、深さ80cmの長方形の平面形を呈している。ピットは6個所確認されP 1～P 6は主柱穴と思われる、貯蔵穴は確認できなかった。覆土は10層からなり自然堆積の状態を示している。セクションベルト内から土師器の杯片を出土している。上層は黒褐色土でローム粒子と、少暈の焼土粒子を含み、下



第152図 第92号住居址カマド実測図



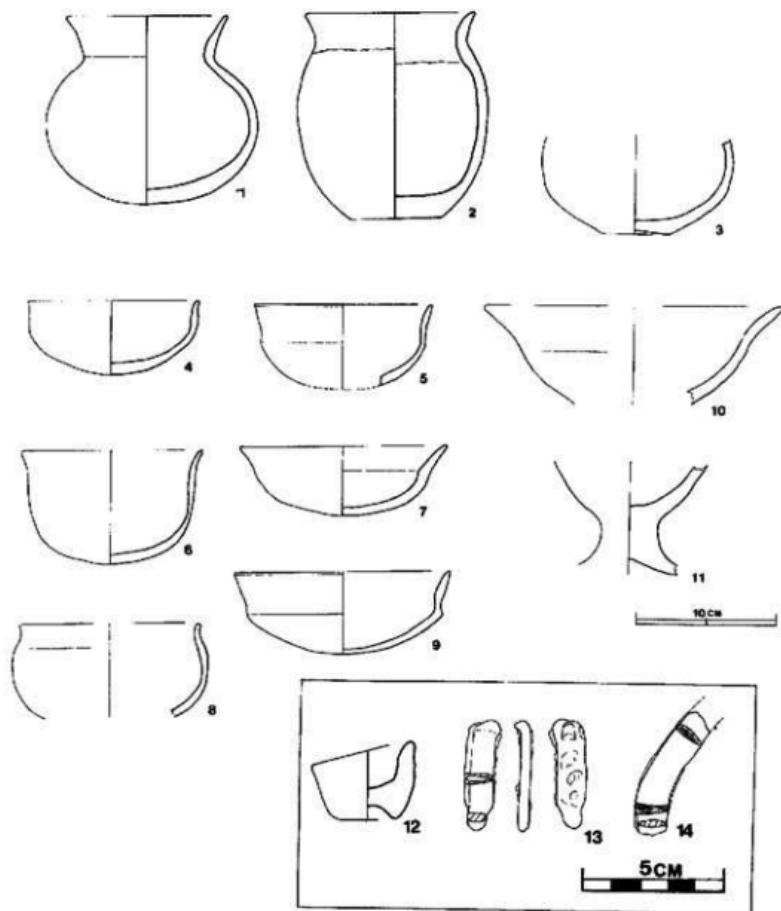
土層解説

A-A'

1. 黒褐色 ローム粒子、焼土粒子(少)含有
2. 黒色 ローム粒子(多)焼土粒子(少)含有
3. 暗褐色 ローム粒子(多)ロームブロック(少)含有
4. 暗褐色 ローム粒子、ロームブロック、粘土含有
5. 褐色 ローム粒子(多)ロームブロック(少)含有
6. 暗暗褐色 ロームブロック、ローム粒子(少)含有
7. 暗褐色 ローム粒子(多)含有
8. 暗褐色 ローム粒子、ブロック(特多)含有
9. 黑褐色 ローム粒子(少)ブロック含有
10. 暗褐色 ローム粒子(多)大ブロック(少)含有

第153図 第92・93号住居址実測図

層は褐色土で多量のローム粒子と少量のロームブロックを含んでいる。カマドは第79号住居址に一部削平されているが、北壁中央から東よりに付設され、規模は長径210cm、短径140cmで、北壁を35cm幅で64cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径55cm、短径45cmで、深さ5cmほど橢円形に掘り窪められている。袖部は黒色土と混りの砂質粘土で南東向きに構築されている。燃焼部から土師器片を多数出土している。出土遺物は、土師器を中心とし須恵器の壺などの細片を数点出土している。土師器の完存率の良好なものをあげると、カマドから碗を出土し、北部の床面直

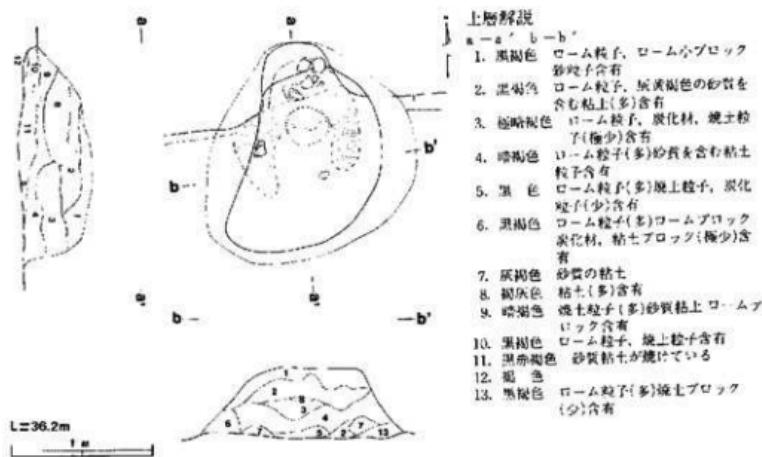


第154図 第92号住居址出土遺物実測図

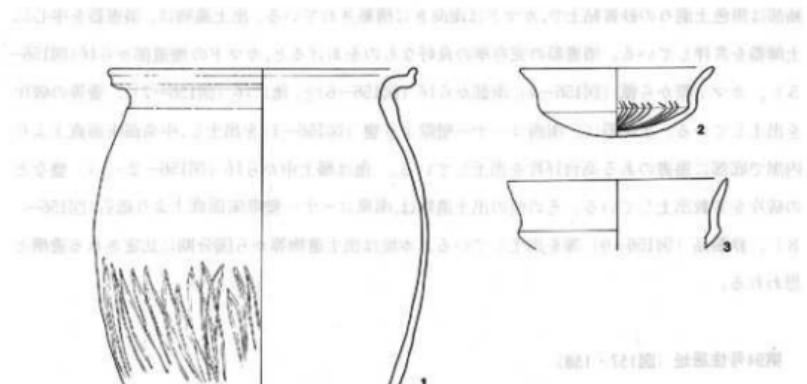
上から壺（図154-3）を、南部床面直上から壺（図154-6）と高杯（図154-11）を、中央部床面から口縁部に模様のある壺（図154-1）を出土し、他は、床面直上などから丹彩の壺（図154-4）と壺（図154-5・7・9）、高杯（図154-10）、手挽土器（図154-12）、小型壺（図154-2）などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は、鉄製品（図154-13・14）と畠土中から弥生式土器の破片を数点出土している。本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高窓に比定される遺構である。

第93号住居址（図153・155・156）

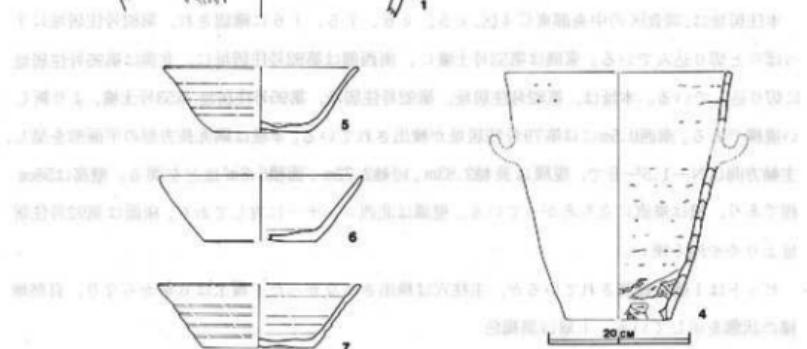
本住居址は、調査区の中央部東端C4区 g6, h5, h6に確認され、北部は第92号住居址と半分ほど複合している。西側0.2mには第74号住居址が検出されている。本址は第92号住居址より新しい遺構である。本址は隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-4-Eで、規模は長軸3.00m、短軸2.60m、面積7.0m²を測り、第92号住居址の床面を約10cmほど掘り込んで、本址を構築している。壁高は東・西・南壁は10cm程で、南壁は38cm程であり、壁はややゆるやかに外反して立ちあがっている。床面は非常に硬く、ピットは確認することができなかった。カマドは北壁の中央から東よりに位置し、規模は長径106cm、短径90cmで、北壁を55cm幅で40cmほど削り込んで煙道としている。燃焼部は長径31cm、短径26cm、深さ2cmほど梢円形に掘り窪められている。



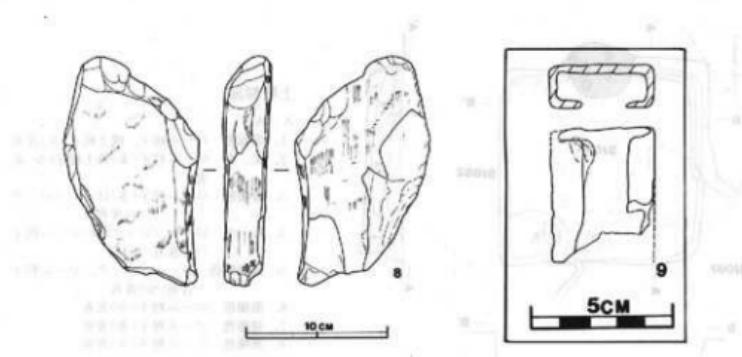
第155図 第93号住居址カマド実測図



(156·1~3) 93号居住址出土



(156·4~7) 93号居住址出土



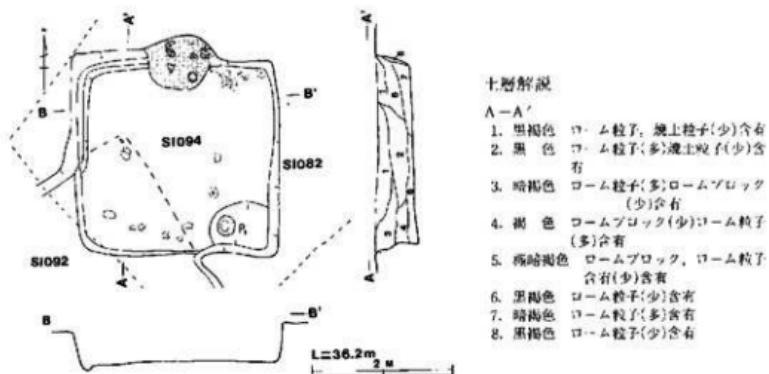
第156图 第93号居住址出土遗物实测图

袖部は黒色土混りの砂質粘土で、カマドは南向きに構築されている。出土遺物は、須恵器を中心とした土師器を共伴している。須恵器の完存率の良好なものをあげると、カマドの煙道部から壺(図156-5)、カマド際から瓶(図156-4)、南部から壺(図156-6)と、他に壺(図156-7)、壺等の破片を出土している。土師器は、南西コーナー壁際より甕(図156-1)を出土し、中央部床面直上より内黒で底部に墨書きのある高台片を出土している。他は覆土中から壺(図156-2・3)、甕などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は、南東コーナー壁際床面直上より砥石(図156-8)、鐵製品(図156-9)等を出土している。本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第94号住居址(図157・158)

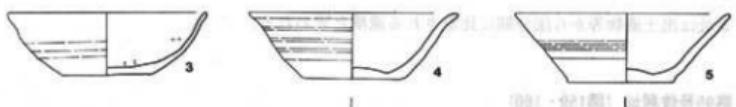
本住居址は、調査区の中央部東C4区、e5、e6、f5、f6に確認され、第82号住居址にすっぽりと切り込んでいる。東側は第53号土塙に、南西部は第92号住居址に、北側は第95号住居址に切り込んでいる。本址は、第82号住居址、第92号住居址、第95号住居址第53号土塙、より新しい遺構である。南北0.5mには第79号住居址が検出されている。本址は隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-1.5°-Eで、規模は長軸2.93m、短軸2.72m、面積6.8m²ほどを測る。壁高1.58cm程であり、壁は垂直に立ちあがっている。壁溝は北西コーナーに有しており、床面は第92号住居址よりやや浅く硬い。

ピットは1個所確認されているが、主柱穴は検出されなかった。覆土は6層からなり、自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色。



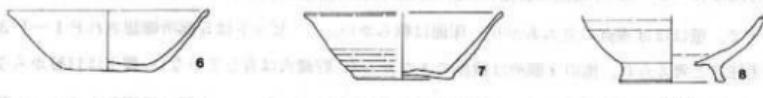
第157図 第94号住居址実測図

图158-1、2：第94号住居址出土陶器。图1为灰陶罐，高15.5厘米，口径10.5厘米，腹径23.5厘米，底径10.5厘米，腹壁稍鼓，口沿略外侈，腹下部有三个对称的支足孔，器形似“三足鼎”。图2为灰陶勺，长20.5厘米，宽1.5厘米，勺柄直而细，勺身呈浅弧形。



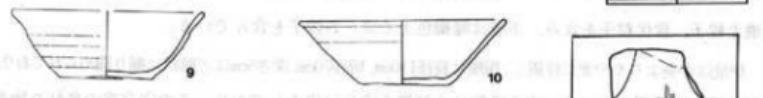
158-1、2：第94号住居址出土陶器 (图1-2)。1. 灰陶罐；2. 灰陶勺。

图158-3、4、5：第94号住居址出土陶器。图3为灰陶盆，口径16.5厘米，深6.5厘米，腹壁较直，底略内凹，无足。图4为灰陶盆，口径16.5厘米，深6.5厘米，腹壁较直，底略内凹，无足。图5为灰陶盆，口径16.5厘米，深6.5厘米，腹壁较直，底略内凹，无足。



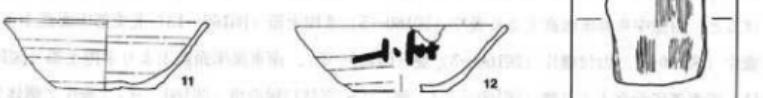
158-3、4、5：第94号住居址出土陶器 (图3-5)。3. 灰陶盆；4. 灰陶盆；5. 灰陶盆。

图158-6、7、8：第94号住居址出土陶器。图6为灰陶盆，口径16.5厘米，深6.5厘米，腹壁较直，底略内凹，无足。图7为灰陶盆，口径16.5厘米，深6.5厘米，腹壁较直，底略内凹，无足。图8为灰陶盆，口径16.5厘米，深6.5厘米，腹壁较直，底略内凹，无足。

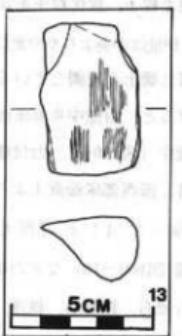


158-6、7、8：第94号住居址出土陶器 (图6-8)。6. 灰陶盆；7. 灰陶盆；8. 灰陶盆。

图158-9、10、11：第94号住居址出土陶器。图9为灰陶盆，口径16.5厘米，深6.5厘米，腹壁较直，底略内凹，无足。图10为灰陶盆，口径16.5厘米，深6.5厘米，腹壁较直，底略内凹，无足。图11为灰陶盆，口径16.5厘米，深6.5厘米，腹壁较直，底略内凹，无足。



158-9、10、11：第94号住居址出土陶器 (图9-11)。9. 灰陶盆；10. 灰陶盆；11. 灰陶盆。



158-12、13：第94号住居址出土陶器 (图12-13)。12. 灰陶盆；13. 灰陶片。

第158图 第94号住居址出土遗物实测图

土で、ローム粒子と少量の焼土粒子を含み、中層は黒褐色で少量のローム粒子を含み、下層は黒褐色土で少量のロームを含んでいる。

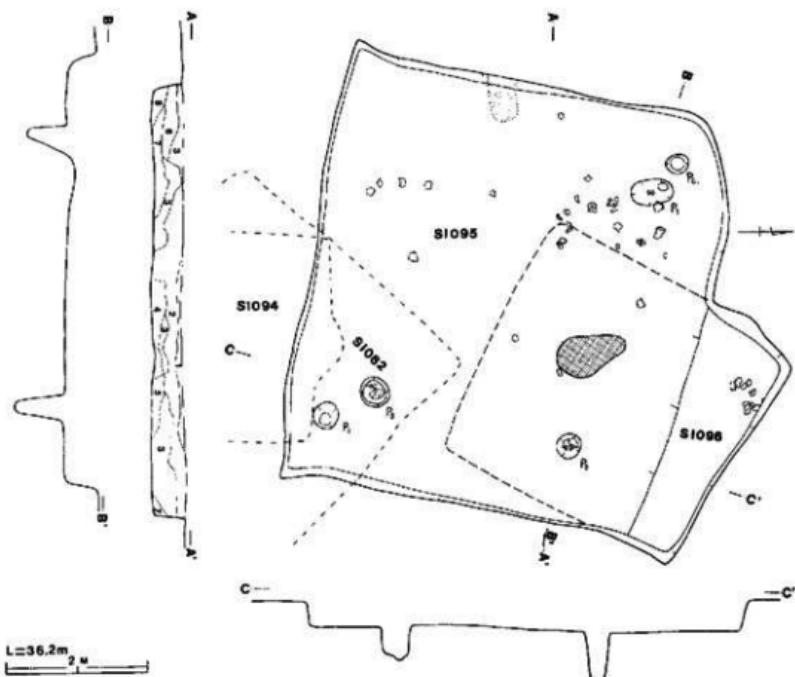
カマドは北壁の中央部に位置し、擾乱されてそのプランを把握する事ができなかった。出土遺物は、須恵器を中心に土師器と共に伴っている。須恵器の完存率の良好なものを上げると、カマド内から壺（図158-10）、南壁付近床面直上から壺（図158-6）、北東コーナー床面直上から高台付壺（図158-8）、を他に、壺の墨書き上器（図158-12）、壺3個体分（図158-5・7・9）、壺などの破片を多数出土している。土師器はカマドから甕（図158-1）、北東コーナー床面直上から壺（図158-11）、南西コーナーから甕（図158-2）、西壁中央部から壺（図158-3）と、他に甕、甕（図158-4）、碗などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は、覆土中から弥生式土器片と鉄滓数点、鉄製品、砥石（図158-13）などを出土している。

本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第95号住居址（図159・160）

本住居址は、調査区の中央部東端C4区、d5、d6、e5、e6と確認され、北壁には第96号住居址が南東コーナーには第82号住居址・第94号住居址が複合している。本址は第96号住居址より新しく、第82号住居址、第94号住居址より古い遺構である。本址は隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-9°Eで、規模は長軸6.20m、短軸5.80m、面積33.3m²ほどを測る。壁高は36cm～48cmほどで、壁はほぼ垂直に立ちあがり、床面は軟らかい。ピットは5個所確認されP1～P3は上柱穴と考えられ、他の1個所は検出できなかった。貯蔵穴は有していない。覆土は11層からなり、第96号住居址の上層を切って、自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土でローム粒子、焼土粒子、炭化粒子を含み、下層は暗褐色土でローム粒子を含んでいる。

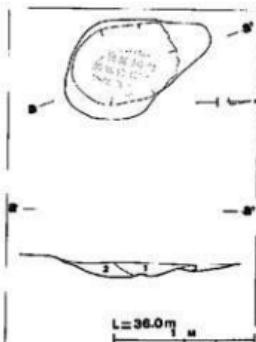
本址は中央よりやや北に位置し、規模は長径110cm、短径70cm、深さ5cmほど皿状に掘り窪められており、内部に焼土が充満している。出土遺物は土師器を中心に出土しており、その完存率の良好な物をあげると、西壁中央部床面直上より壺片（図160-5）、手握土器（図160-13）、北東部床面直上より壺片（図160-1）、台付壺片（図160-3）、甕（図160-6）、南東部床面直上より手握土器（図160-11）、南西部床面直上より甕（図160-7）、他に、S字状口縁の壺（図160-9）、壺片2個体分（図160-2・4）と、手握土器（図160-12）などの破片を多数出土している。須恵器は壺（図160-15）、蓋（図160-16）などの破片を数点出土している。その他の出土遺物は、羽口、南東部床面直上から砥石、鉄製品、鉄滓、粘土と弥生式土器の細片を数点出土している。本址は出土遺物等から古墳時代の五領期の遺構と思われる。



上層解説

A-A'

1. 黒褐色 IT-ム粒子、燒土粒子(少)含有
2. 暗褐色 IT-ム粒子、燒土粒子含有
3. 黑褐色 IT-ム粒子、燒土粒子、炭化粒子含有
4. 黑褐色 IT-ム粒子、燒土粒子、炭化粒子(少)含有
5. 黑褐色 ローム粒子(少)含有
6. 暗褐色 ローム粒子(多)燒土粒子(少)含有
7. 暗褐色 ローム粒子(多)含有
8. 黑色 ローム粒子(多)含有

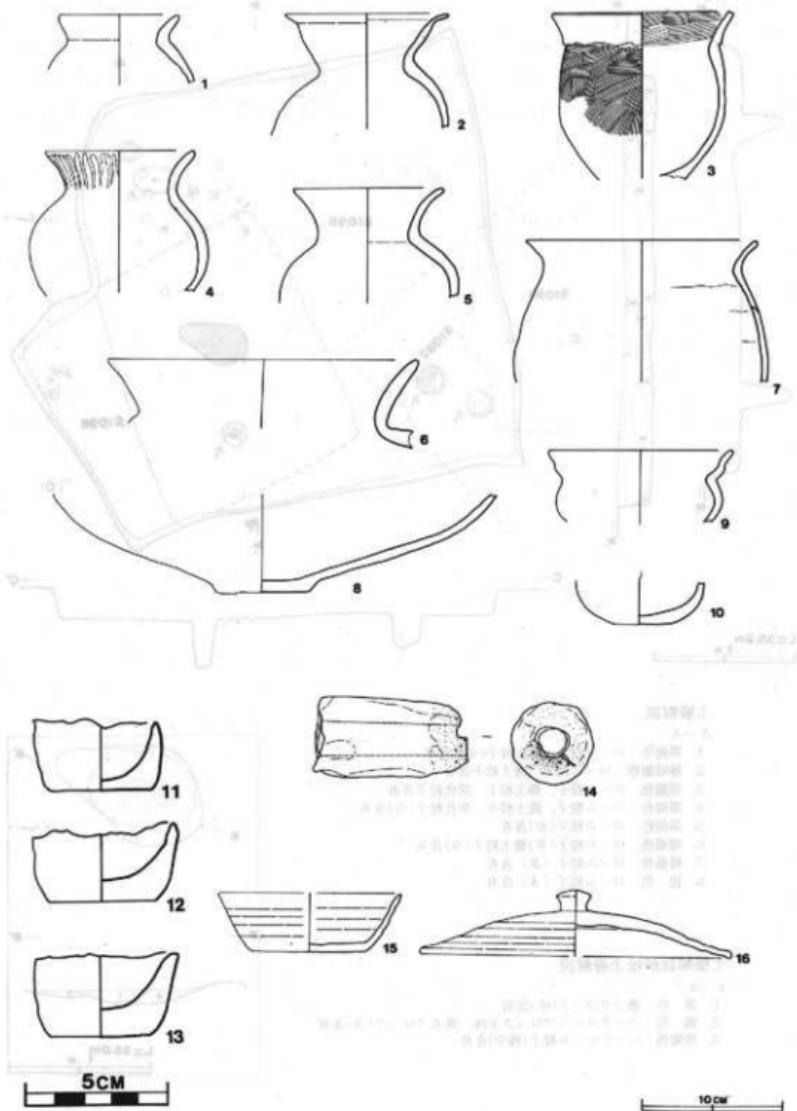


下層解説
上層解説

B-B'

1. 黒色 燃上ブロック(少)含有
2. 暗褐色 ハードロームブロック主体、燃上ブロック(少)含有
3. 黑褐色 ハードローム粒子(極少)含有

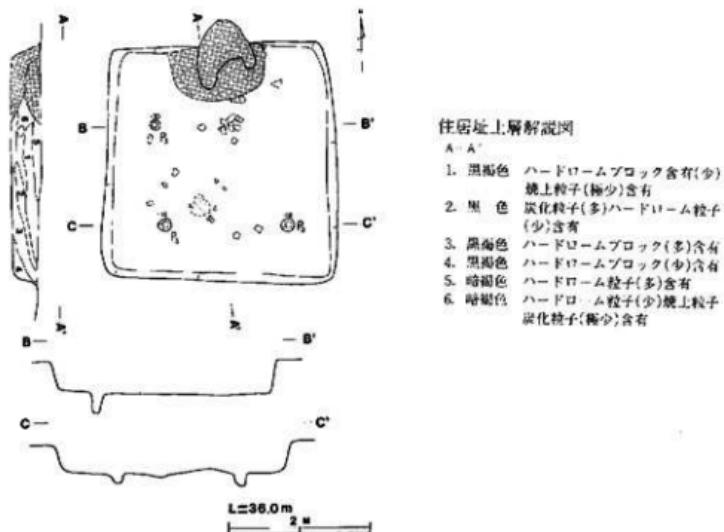
第159図 第95・96号住居址実測図



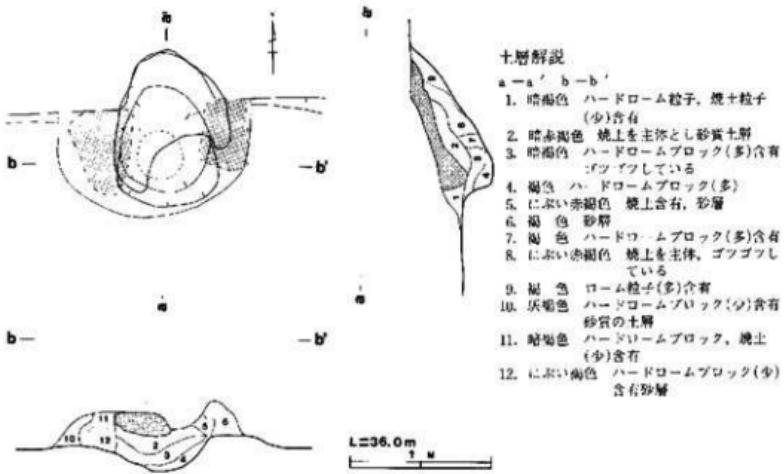
第160図 第95号住居址出土遺物実測図

第97号住居址（図161～163）

本住居址は、調査区の南西部中ほどD 3区 b 6, c 6には確認され、北東1.3mに第51号住居址が、東側1.9mには井戸状遺構第3号が、西側4.5mには第57号住居址が検出されている。本址はほぼ正方形の平面形を呈し、主軸方向はN-2°-Eで規模は長軸3.42m、短軸3.26m、面積9.8m²程度を測る。壁高は36cm～48cmであり、壁はほぼ垂直に立ちあがっている。床面は褐色土で硬い。ピットは3個所確認され、いずれも上柱穴と考えられる。北東部にあると思われる柱穴は検出できなかった。覆土は7層からなり、一部擾乱しているが他は自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土で少量のハードロームブロックと極少量の焼土粒子を含み、中層は黒色土で多量の炭化粒子と少量のハードロームブロック粒子を含み、下層は黒褐色土で少量のハードロームブロックを含んでいる。カマドは北壁の中央に有り規模は長径120cm、短径102cmで、北壁を75cm幅で、38cm程掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径33cm、短径31cm、深さ16cm程円形に掘りくぼめている。袖部は黑色土混りの砂質粘土で、カマドはほぼ南北向に構築されている。出土遺物は土師器と須恵器



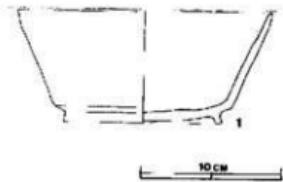
第161図 第97号住居址実測図



第162図 第97号住居址カマド実測図

器を共伴して出土しており、土師器の壺片を床面上から、須恵器の高台付椀(図163-1)を床面直上から出土している。他に、土師器の細片と須恵器の壺などの細片を数点出土している。

本址は、出土遺物が少なく時期を決定し難いが、ほぼ国分期に比定される遺構と思われる。



第163図 第97号住居址出土遺物実測図

2 土壙 (図164~167)

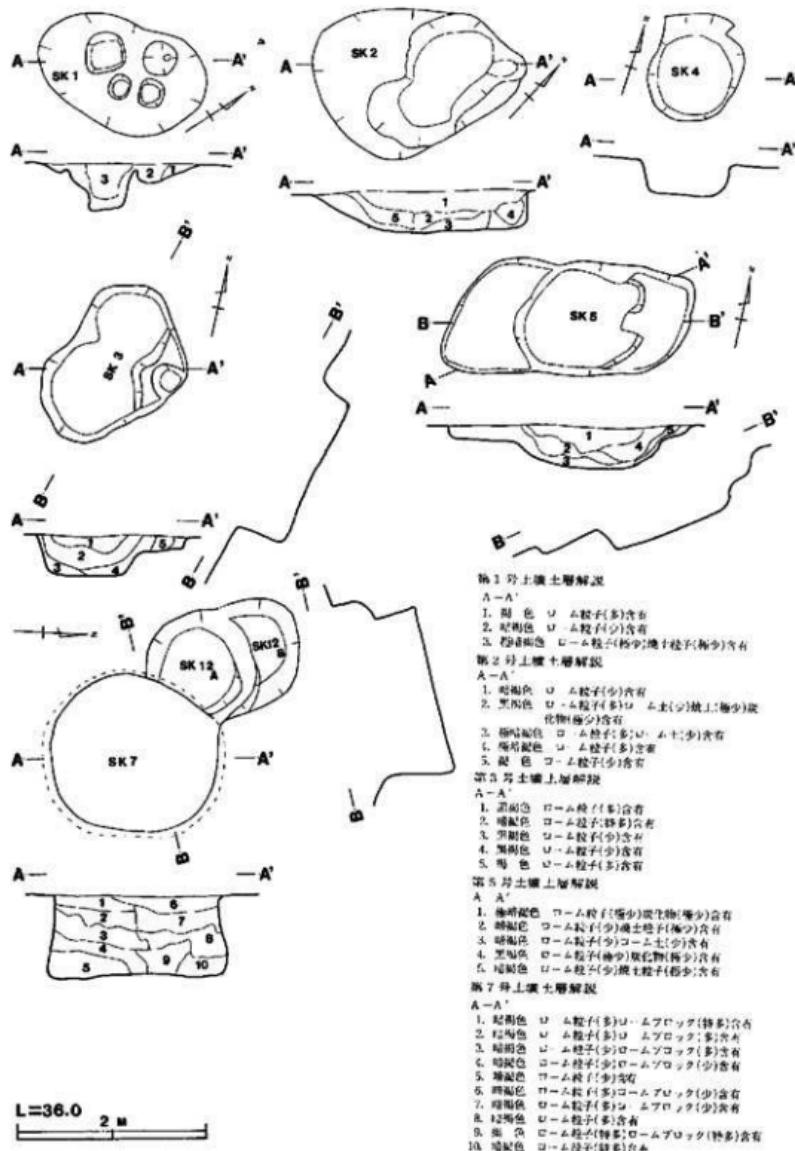
本遺跡で検出された土壙は、円形の土壙14基、不整円形の土壙3基、楕円形の土壙は5基、不整格円形の土壙7基、長方形の土壙15基、不整方形1基である。第9号土壙は第11号住居址の東コーナーに検出され、底面直上から土師器の壺(図167-2)、壺、壺(図167-1)などの破片を多数出土し、本址は出土遺物から五頭期に比定される遺構と思われ、第11号住居址に付属した遺構と考えられる。第10号土壙は壙底から土師器の壺(図167-5)、壙底直上から壺(図167-7)、壺(図167-3・4)と支脚、高坛、壺などの細片を多数出土している。須恵器も壺などの破片を

数点出土し本址は、鬼高窓に比定される遺構である。第11号土壙は覆土から鬼高窓に比定される土師器の破片（図167-8）と須恵器の細片を数点出土している。第42号土壙の覆土からは、小型甕片（図167-9）を出土している。第27号、第28号、第30号、第31号土壙は長径140~170cm、短径98~165cm、深さ195~250cmで住居址と複合して、北西から南東へ約10mほどの等間隔に検出されている。本遺跡では最も古い時期の遺構と思われる。

表1 大塚新地遺跡・土壤一覧表

No	位置	形状	規 模 (長径×短径)	長径方向	深さ cm	底	出 土 遺 物	時 期	備 考	
1	A4 ^{b-5} i-6	楕円形	183×115	N-51°-E	50	皿 状		不明	図166	
2	A4 ⁱ⁻⁶	楕円形	221×153	N-40°-E	45	凸 凹	弥生 須恵	不明	図166	
3	B4 ^{c-4} c-5	不 整 円 形	180×125	N-20°-E	44	平 坦	土師 石器 須恵 弥生	五 領	図166	
4	B4 ^{b-3} b-4	円 形	118×96	N-0°	56	平 坦	須恵 鉄津 石器	不明	図166	
5	B4 ^{c-3} d-3	不 整 円 形	255×122	N-77°-E	42	皿 状	土師(环) 弥生 須恵(环)	不明	図166	
6	B4 ^{b-5} c-5	不 整 楕円形	297×162	N-7°-E	A 90 B 32 C 35	平 坦	土師(高环) 須恵(环)	不明	図6	
7	B4 ^{b-4}	円 形	193×180	N-4°-W		80	フ ラ ス コ 状	土師 須恵	不明	図166
8	B4 ^{c-4} d-4	不 正 椭円形	152×100	N-18°-W		40	平 坦	土師 弥生 須恵	鬼高	図167
9	B4 ^{d-5} e-5	円 形	100×98	N-2°-W	10	平 坦		土師(堆・壺)	五 領	
10	B4 ^{e-4} f-4	円 形	229×197	N-2°-W	100	スリバ チ 状	土師(环・壺・甕 支脚・高环)	鬼高	図167	
11	B4 ^{a-5} f-6	長方形	295×218	N-32°-E	92	平 坦	土師(环・甕・壺 器台?)	鬼高	図167	
12	B4 ^{a-4} a-5	円 形	152×119		20				図166	
14	B4 ^{d-5}	円 形	A 105×95 B 92×178	N-27°-W	2	平 坦				
					16	平 坦				
15	B4 ^{c-5}	円 形	95×不明	N-34°-E	3	平 坦				
16	B4 ^{h-1}	不 整 椭円形	195×80	N-70°-W	38	凸 凹	須恵(环)	不明		
17	B4 ^{h-2}	不 整 椭円形	220×130	N-53°-E	40	平 坦	須恵(环)	不明		
18	B3 ⁱ⁻⁸	円 形	190×190	N-1°-W	72	フ ラ ス コ 状	土師(壺)	五 領	図167	
19	B3 ⁱ⁻⁷ i-8	円 形	190×171	N-0°	80	平 坦	土師(环・甕) 須恵	鬼高		
20	C3 ^{c-0} d-0	円 形	138×141	N-0°	88	平 坦	土師	五 領		
21	C3 ^{d-0} e-0	不 整 椭円形	240×128	N-52°-E	50	凸 凹		不明		
22	C3 ^{d-9}	不 整 椭円形	296×120	N-21°-W	50	凸 凹	須恵(墨書き土器)	不明		
23	C3 ^{j-5-6} D3 ^{a-5-6}	円 形	145×140	N-19°-E	62	平 坦	土師 弥生 須恵	五 領		
24	D3 ^{a-4} a-5	円 形			21	平 坦		不明		

No	位置	形 状	規 模 (長径×短径)	長径方向	深さ cm	底	出土 遺物	時期	備 考
25	B3 ^{a-7-8} _{b-7}	円 形	175×165	N-2.5-W	102	プラスコ状		不明	図168
26	B3 ^{b-2} _{c-2}	不 整 P1 形	310×105	N-43°-W	106	平 坦		不明	図48
27	B4 ^{a-3} _{b-3}	A 円形 B 方形	175×165 167×160	N-39°-W	250	平 坦		不明	図22
28	B4 ^{b-5} _{c-5}	楕円形	150×120	N-34°-E	215	平 坦		不明	図25
29	C4 ^{b-4-5}	円 形	168×157	N-71°-E				不明	図65
30	B4 ^{b-1}	楕円形	150×116	N-65°-E	195	平 坦		不明	図20
31	B3 ^{d-9} _{e-9}	楕円形	140×98	N-25-E	235	皿 状		不明	
32	B4 ^{f-1}	円 形	246×233	N-25-W	60	平 坦	环せん(土製) 瑠璃 弁生	不明	図90
33	B3 ^{f-8-9} _{g-8-9}	長 方 形	202×70	N-21°-E	35	平 坦		不明	
34	B3 ^{g-8} _{h-8}	長 方 形	200×70	N-17°-E	46	平 坦		不明	
35	B3 ^{g-8} _{h-8}	長 方 形	125×55	N-20°-E	35	平 坦		不明	
36	B3 ^{h-8}	長 方 形	166×70	N-11.5°-E	70	平 坦		不明	
37	B3 ^{h-8}	長 方 形	157×64	N-24.5°-E	53	平 坦		不明	
38	B3 ⁱ⁻⁸	長 方 形	126×53	N-24°-E	55	平 坦		不明	
39	B3 ⁱ⁻⁷⁻⁸ _{j-7-8}	長 方 形	225×72	N-24°-E	76	平 坦		不明	
40	B3 ^{j-7}	長 方 形	235×65	N-24°-E	50	平 坦		不明	図117
41	B3 ^{j-7} C3 _{a-7}	長 方 形	115×52	N-24°-E	26	平 坦		不明	
42	D4 ^{b-4} _{c-4}	長 方 形	195×55	N-27°-E	90	平 坦	上師(甕)	五領	図117
43	D4 ^{c-5}	楕円形	122×160	N-90°-E	181	平 坦		不明	図122
44	D4 ^{c-4}	長 方 形	142×73	N-29°-E	100	平 坦		不明	図117
45	D4 ^{c-4}	長 方 形	204×65	N-30°-E	32	平 坦		不明	図117
46	D4 ^{d-3}	長 方 形	150×52	N-26°-E	35	平 坦		不明	図117
47	D4 ^{d-2}	長 方 形	152×55	N-15°-E	43	平 坦		不明	図113
49	C4 ^{e-5}	不 整 楕円形	330×325	N-0°	95	平 坦		不明	図141
50	C4 ^{b-6}	不 整 楕円形	254×120	N-73°-W	175	プラスコ状		不明	図140 168
51	C4 ^{b-7}	不 整 方 形	120×85	N-30°-E	155	平 坦		不明	図152
52	C4 ^{c-5}	円 形	204×203	N-26°-W	121	平 坦	土師(环) 土玉	真間	
53	C4 ^{e-6} _{f-6}	円 形	243×231	N-8°-E	57	平 坦	土師(环)	真間	図168



第1号土壤土層解説

A-A'

1. 黄褐色 ローム粒子(少)含有
2. 黑褐色 ローム粒子(少)含有
3. 棕褐色 ローム粒子(極少)鐵子(極少)含有

第2号土壤土層解説

A-A'

1. 黄褐色 ローム粒子(少)含有
2. 黑褐色 ローム粒子(多)含有
3. 棕褐色 ローム粒子(多)含有
4. 黑褐色 ローム粒子(少)含有
5. 黑色 ローム粒子(少)含有

第3号土壤土層解説

A-A'

1. 黄褐色 ローム粒子(多)含有
2. 黑褐色 ローム粒子(少)含有
3. 黑褐色 ローム粒子(少)含有
4. 黑褐色 ローム粒子(少)含有
5. 黑色 ローム粒子(多)含有

第5号土壤土層解説

A-A'

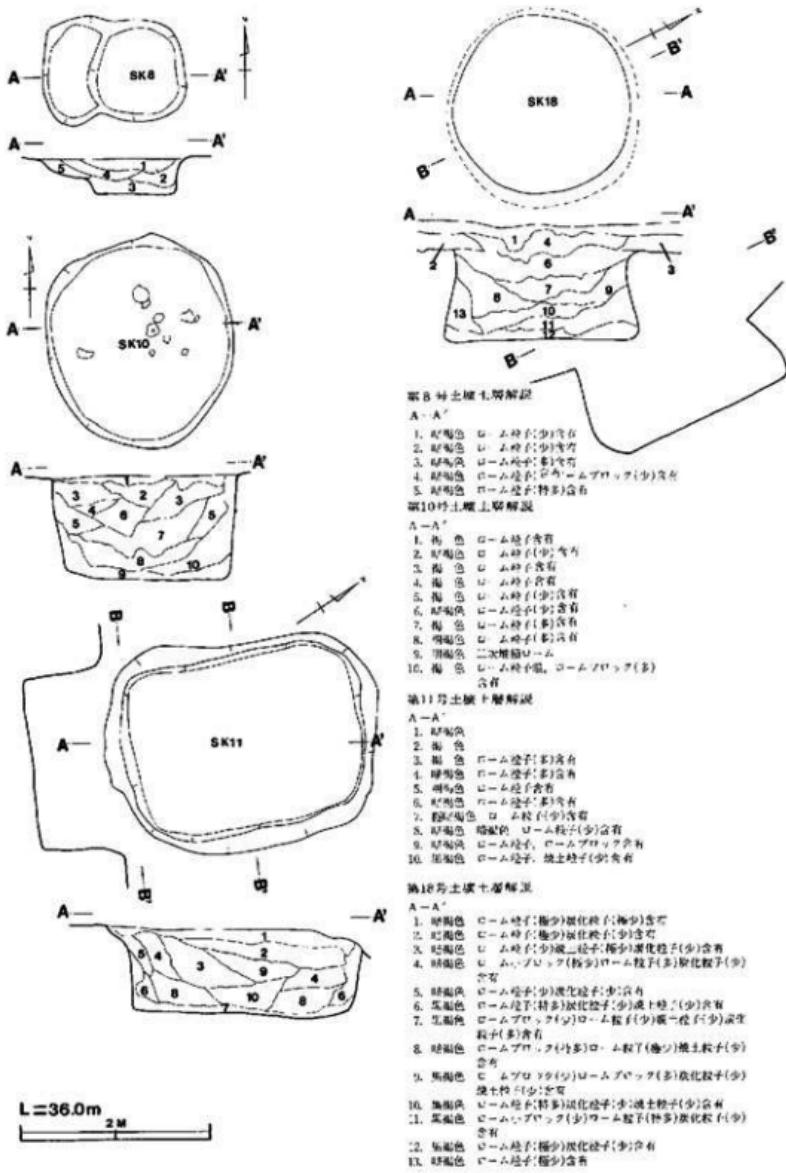
1. 黄褐色 ローム粒子(極少)微生物(極少)含有
2. 黑褐色 ローム粒子(少)微生物(極少)含有
3. 黑褐色 ローム粒子(少)コムギ(少)含有
4. 黑褐色 ローム粒子(少)微生物(極少)含有
5. 黑褐色 ローム粒子(少)微生物(極少)含有

第7号土壤土層解説

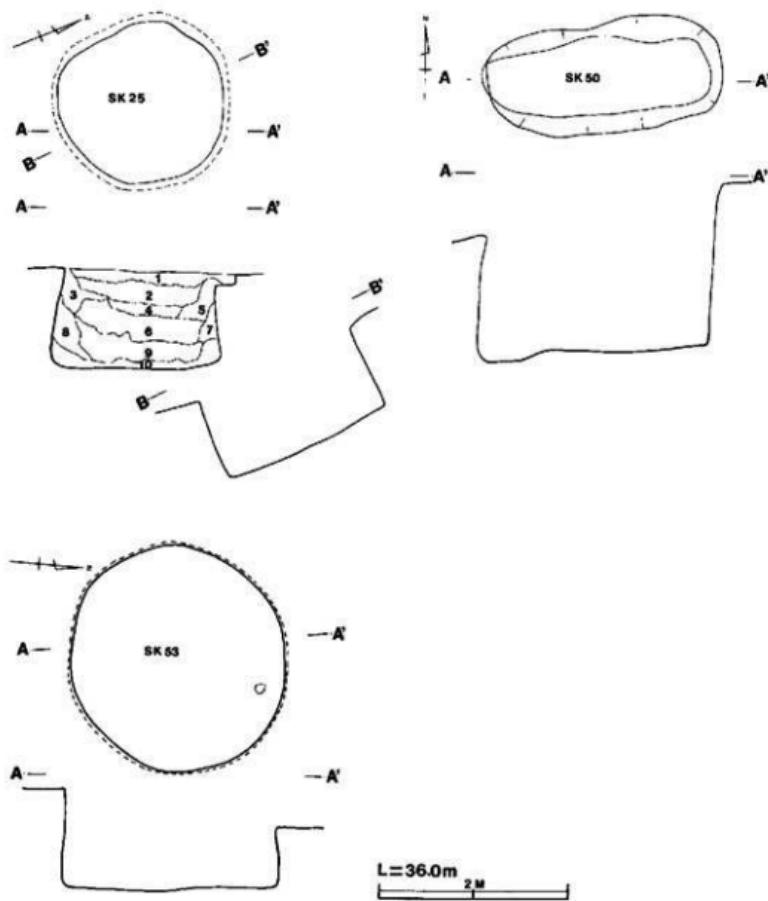
A-A'

1. 起褐色 ローム粒子(多)ロームブロック(特多)含有
2. 粉褐色 ローム粒子(少)ロームブロック(少)含有
3. 棕褐色 ローム粒子(少)ロームコマック(多)含有
4. 黑褐色 ローム粒子(少)ロームブロック(少)含有
5. 黑褐色 ローム粒子(少)含有
6. 黑褐色 ローム粒(多)コムギ(少)含有
7. 黑褐色 ローム粒子(少)ロームブロック(少)含有
8. 黑褐色 ローム粒子(多)含有
9. 黑色 ローム粒子(特多)ロームブロック(特多)含有
10. 黑褐色 ローム粒子(特多)含有

第164図 第1・2・3・4・5・7・12号土壤実測図



第165図 第8・10・11・12号土壌実測図



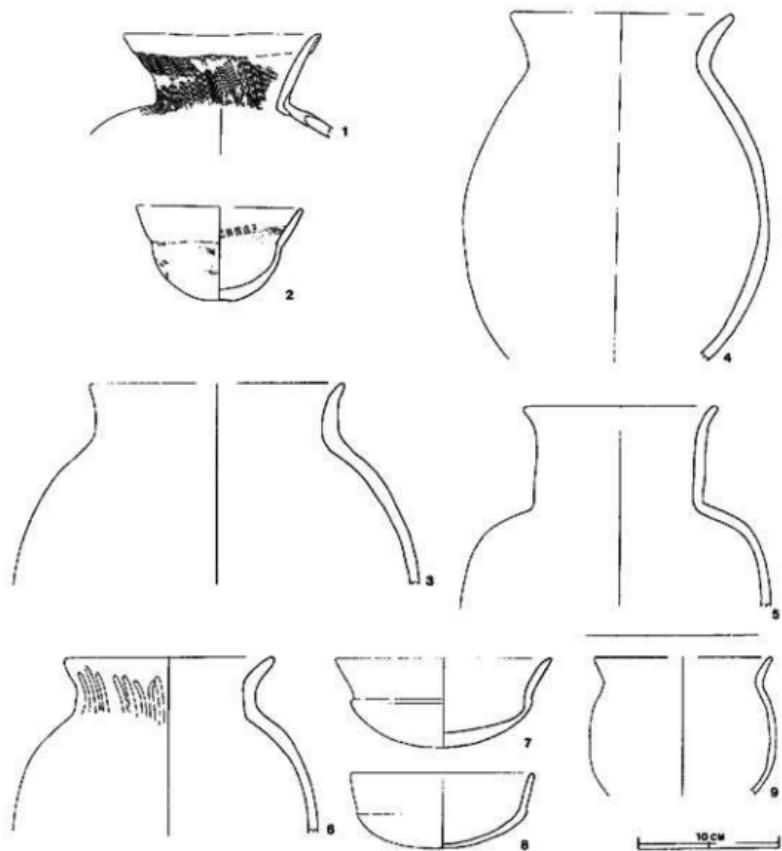
第25号土壤 土壌解説

A-A'

1. 黒褐色 ローム粒子(少)砂粒(多)含有
2. 黒褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(少)砂粒(多)含有
3. 暗褐色 ローム粒子(多)砂粒(多)含有
4. 暗褐色 ローム粒子(多)砂粒(多)ロームブロック(多)含有
5. 黑褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(少)砂粒(多)ロームブロック(少)含有

6. 黒褐色 ローム粒子(多)砂粒(多)粘土粘(極少)含有
7. 黒褐色 ローム粒子(少)砂粒(多)含有
8. 黒褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(少)砂粒(少)含有
9. 暗褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(少)砂粒(多)炭化粒子(少)含有
10. 黒褐色 ローム粒子(少)砂粒(多)ロームブロック(極少)含有

第166図 第25・50・53号土壤実測図



第167図 土壌出土遺物実測図

3 井戸状遺構

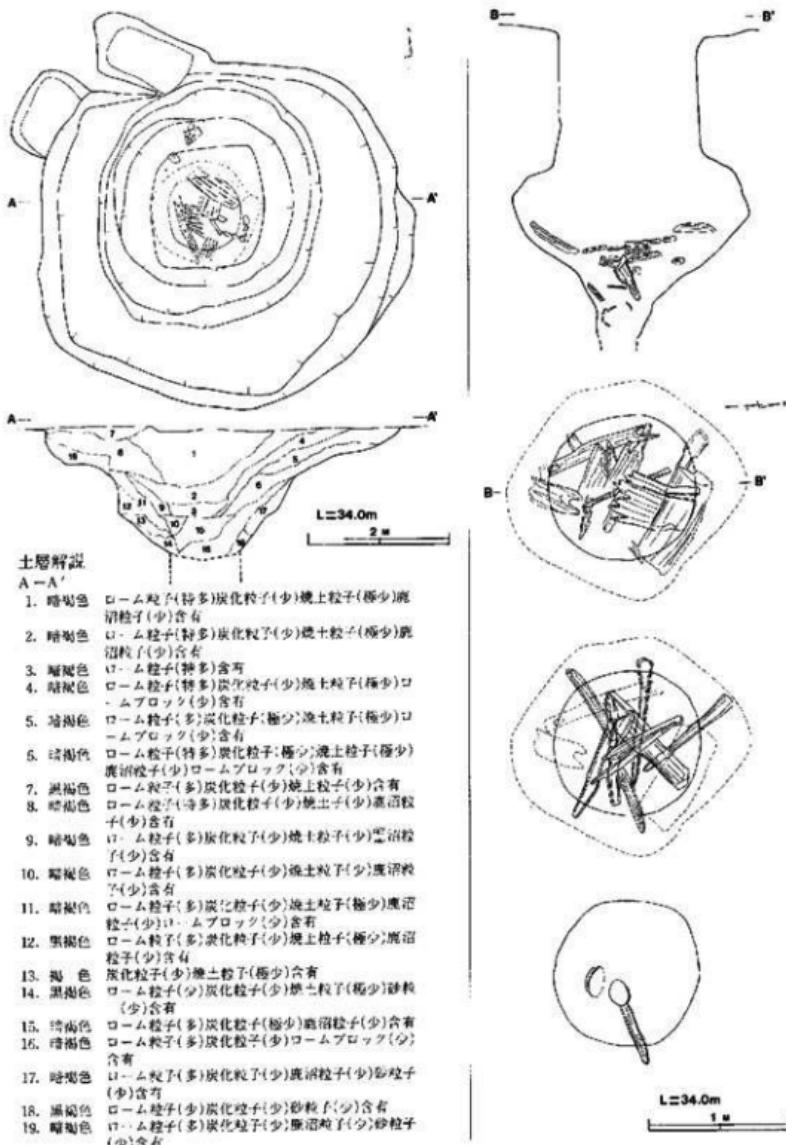
第1号井戸状遺構（図31・33(1)～(4)）

本井戸状遺構は、調査区の北部中ほどA4区 h3, i3に確認され、第20号住居址の南西コーナーに切り込んでいる。北東0.1mには第21号住居址が検出されている。本址はほぼ円形を呈し、掘り方は上部構造で、長径3.35m、短径3.25m、深さ2.7mほどで、直径0.55mの円形を呈する掘り込みまで達する。水を汲むための足場と思われるがくずれている。足場と思われるところから深さ1.6mほど垂直に掘り込まれ底部は楕円形を呈している。底部からは水が湧いている。覆土は7層からなり自然堆積の状態を示している。上層は、暗褐色土でローム粒子と少量のロームブロック、焼土粒子、炭化粒子を含み、中層は、黒褐色土・極暗褐色土で、多量のロームブロックとローム粒子、少量の炭化粒子、鹿沼粒子を含み、下層は黒褐色土・極暗褐色土で、少量のロームブロック、炭化粒子とローム粒子、鹿沼ブロックを含んでいる。出土遺物は、第20号住居址、第21号住居址の床面と同じレベルとその上部の覆土から須恵器片と土師器を共伴している。土師器片は壺、甕、杯、高杯、器台などの破片を出土し、須恵器は壺9個（図33-25～34）、長頸壺片（図33-39・40）、盤（図33-24）を出土して、他に須恵器の碎片を多数出土している。その他の出土遺物は、砥石2片、布目瓦、鉄製品（図33-42）、石製模造品（図33-41）の有孔円板を出土している。これらの遺物は本址が廃棄された後、投棄されたものと思われる。底部からは、須恵器と土師器の細片を数点出土しているだけで、本址の時期を決定するに十分な出土遺物ではなく時期不明である。

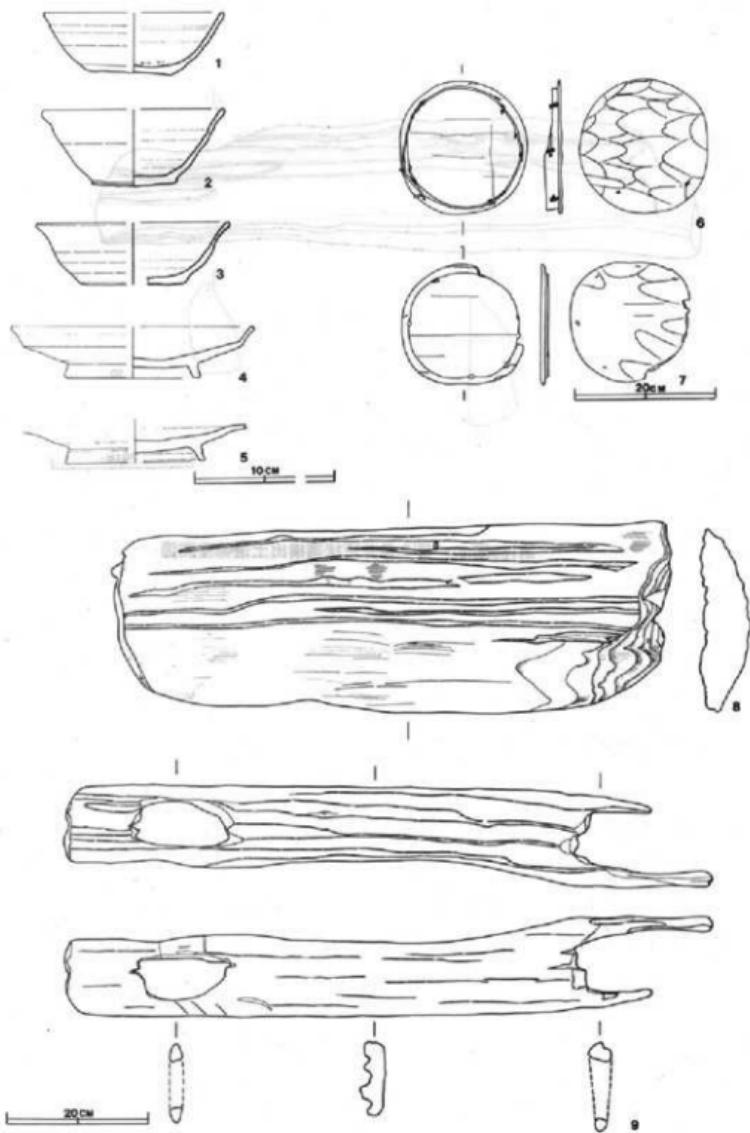
第2号井戸状遺構（図168・169(1)(2)）

本井戸状遺構は、調査区の中央部西端C3区 d5, d6, e5, e6に確認され、北東4.20mには第49号住居址が南東4.50mには方形周溝遺構が検出されている。本址は不整円形の平面形を呈し、掘り方は上縁で長径3.35m、短径3.25mで、主軸方向はN-80°-Wである。深さ1.8mほど掘り込み、水を汲むための平坦部は規模は長径1.7m、短径1.6mを測り、主軸方向はN-2°-Eである。その南東よりに長径1.02m、短径1.0mで深さ2.3mほどの円形の掘り込みが垂直に掘り下げられている。足場から0.95m下に水が湧いており、その周囲の土がくずれている。

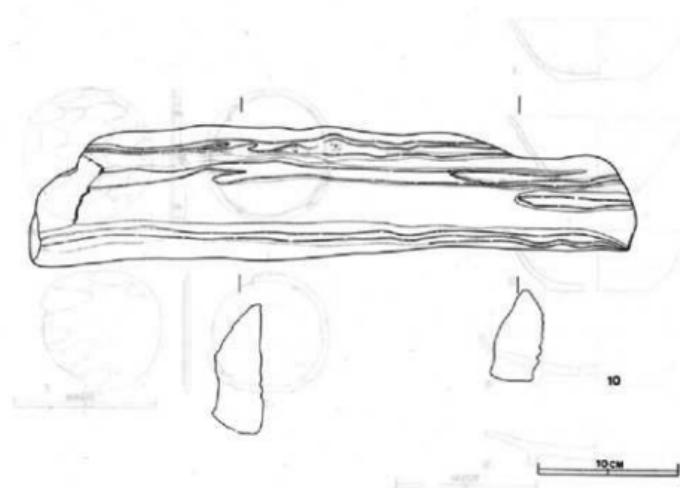
その下部から井戸の枠に使用されたと思われる堅牢な板材が17板ほど検出され、円形の曲物2点とくるみ、ひょうたんなどを出土し、底部は砂礫層となっている。覆土は19層からなり、上層は暗褐色土で特に多量のローム粒子、少量の炭化粒子、極少量の焼土粒子を含有し、中層は暗褐色土で特に多量のローム粒子、少量の炭化粒子と焼土粒子を含有している。下層は暗褐色土で多量の



第168図 第2号井戸状構実測図



第169図(1) 第2号井戸状遺構出土遺物実測図



第169図(2) 第2号井戸状埴輪出土遺物実測図



图169(2) 第2号井戸状埴輪出土遺物実測図

ローム粒子、少量のロームブロック、炭化粒子

極少量の焼土粒子を含有している。

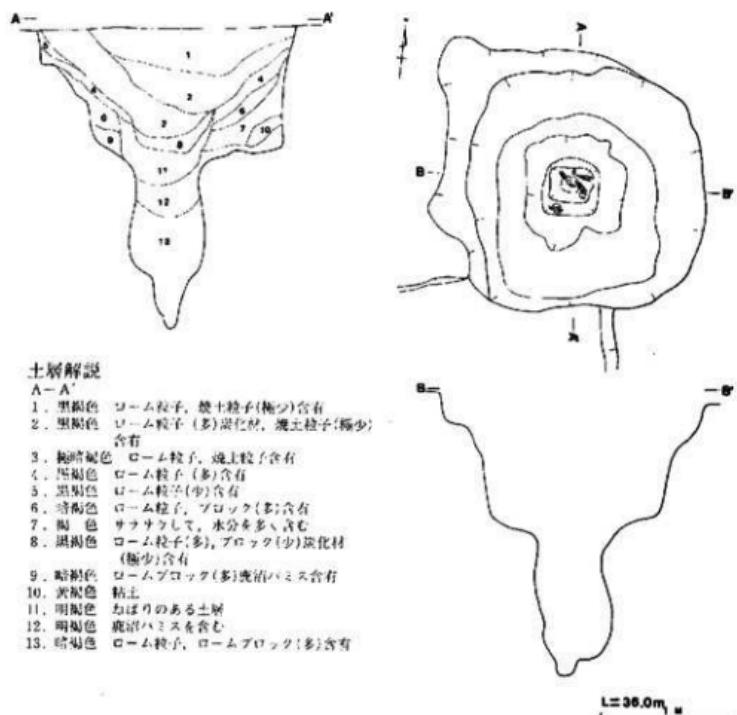
出土遺物は前記の板、曲物、(図169-6・7)、束実、ひょうたんと土師器は壺3個体分(図169-1・2・3)と須恵器の盤(図169-4)を出土している。

本址の時期を決定するに十分な出土遺物が少なく時期不明である。

第3号井戸状遺構(図170・171)

本井戸状遺構は、調査区の南部中ほどD3区、b7、b8、c7、c8に確認され、南東部は第67号住居址を掘り込んでいるので第67号住居址より新しい遺構と思われる。本址は隅丸正方形状の平面形を呈し、掘り方は上部構造長径3.80m、短径3.65mで、主軸方向はN-17°-Wである。

下部構造は確認面から1.60mほど下に水をくむための足場と思われる平坦部を有している。規模は長径2.57m、短径2.22mを測る。その平坦部の西よりに長径0.82m、短径0.8mほぼ正方形に2.25mほど掘り下げている。覆土は13層からなり自然

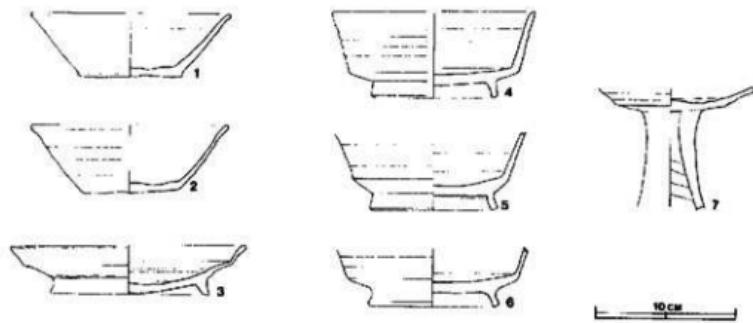


土層解説

A-A'

1. 黒褐色 ローム粒子、燒土粒子(極少)含有
2. 黑褐色 ローム粒子(多)炭化粒、燒土粒子(極少)含有
3. 暗褐色 ローム粒子、燒土粒子含有
4. 黑褐色 ローム粒子(多)含有
5. 黑褐色 ローム粒子(少)含有
6. 暗褐色 ローム粒子、ブロック(多)含有
7. 褐色 サラサクして、水分が多く含む
8. 黑褐色 ローム粒子(多)、ブロック(少)炭化材(極少)含有
9. 暗褐色 ロームブロック(多)焼泥ハミス含有
10. 黄褐色 粘土
11. 明褐色 かぶりのある土層
12. 明褐色 焼泥ハミスを含む
13. 暗褐色 ローム粒子、ロームブロック(多)含有

第170図 第3号井戸状遺構実測図



第171図 第3号井戸状造構出土遺物実測図

堆積の状態を示している。上層は、黒褐色土で多量なローム粒子、炭化粒子、焼上粒子を含有し、中層は黒褐色土・暗褐色土で多量にローム粒子、ロームブロックを含有し、下層は明褐色土・暗褐色土で多量のローム粒子、ロームブロック、鹿沼バミスを含有している。

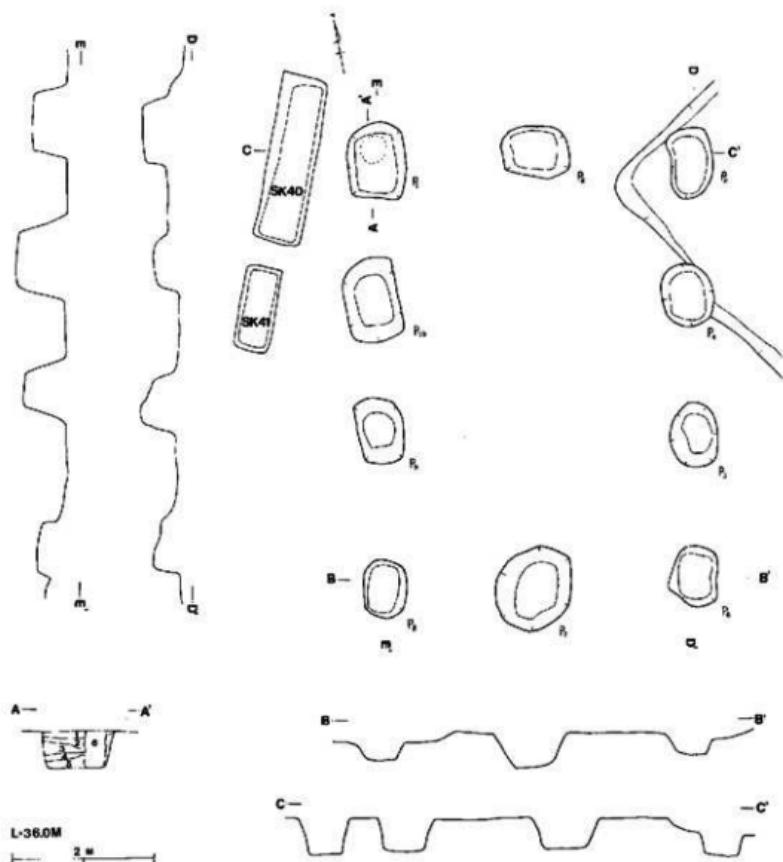
出土遺物は從上から須恵器の壺(図171-1・2)、高台付壺(図171-4・5・6)、盤片(図171-3)、高杯(図171-7)と破片を多数出土している。土師器は壺、一台付壺片等を出土し、他に破片を数点出土している。その他の出土遺物は砥石、ひょうたん、井戸底部より、木片数点を出土している。本址の時期を決定するにたる出土遺物は少なく時期不明である。

4 挖立柱建築址

第1号掘立柱建築址(図-172)

本達築址は、調査区の中央部B3区 j7, j8, j9, C3区 a7, a8, a9, b7, b8に確認され、北東部のP3は第28号住居址の床面を掘り込んでいる。南東部には第29号住居址が接し、南西部0.2mには第34号住居址が検出されている。規模は梁行2間(4.46m)、桁行3間(6.

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P 1	106	83	51	主柱穴	P 6	86	69	40	主柱穴
P 2	95	71	45	主柱穴	P 7	120	106	48	主柱穴
P 3	98	59	33	主柱穴	P 8	81	61	23	主柱穴
P 4	89	79	35	主柱穴	P 9	94	65	59	主柱穴
P 5	91	69	49	主柱穴	10	120	76	70	主柱穴



第172図 第1号堀立柱建築址実測図

03m), 面積27.0m²ほどで、主軸方向はN-9°-Eである。柱穴のピット番号は北西コーナーをP1とし、北西から北東回りで、「匁」状に番号をP1-P10まで仮称する。梁行2間の柱間寸法は、北側のP1-P2-P3間では2.25m+2.21m測り、桁行3間の西側寸法は、P8-P9-P10-P1間では2.11m+1.87m+2.05mほどの間隔である。柱穴の掘り方は、長辺が120cm~87cm、短辺が106cm~61cmほどの正方形ないし、長方形状を呈し、深さは68~20cmを測り、柱痕は掘り方の中央より北壁側に位置し、柱穴内にはロームブロックとローム粒子を含む褐色土、暗褐色土を充填し突き固めていると思われる。柱痕は明確に検出できた。柱穴内からの出土遺物はなく時期不明である。

第2号獨立柱建築址(図173)

本建築址は、調査区の中央部B3区g9, g0, h9, h0, i8, i9に確認され、P2は第3号住居址の床面を掘り込み、P1とP2の間の柱穴は第30号住居址に掘り込んでいると思われるが検出できなかった。本址は第30号住居址、第26号土壇より新しい遺構である。規模は梁行2間(3.23m)、桁行3間(4.88m)、面積15.76m²ほどで、主軸方向はN-7°-Eである。柱穴のピット番号は北西コーナーをP1とし、北西から北東まわりで「匁」状に番号をP1-P9まで仮称する。梁行2間の柱間寸法は、南側のP5-P6-P7間で1.55m+1.68mを測り、桁行3間の東側柱間寸

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P1	55	45	30	主柱穴	P6	62	43	17	主柱穴
P2	90	76	20	主柱穴	P7	88	86	23	主柱穴
P3	70	55	26	主柱穴	P8	63	62	40	主柱穴
P4	90	72	30	主柱穴	P9	45	42	32	主柱穴
P5	75	50	25	主柱穴					

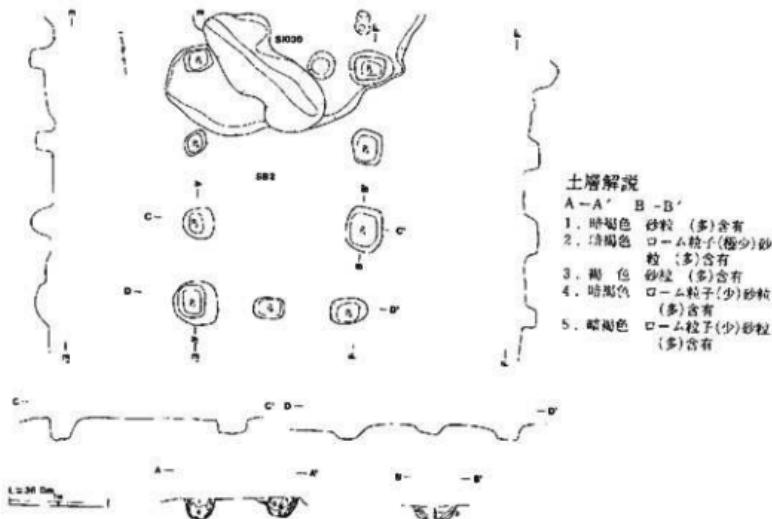
法はP2-P3-P4-P5間で1.78+1.60+1.50ほどの間隔である。柱穴の掘り方は一辺が42cm~88cmほどの正方形ないし、長方形を呈し、深さは22cm~55cmを測る。柱痕は掘り方の中央より北壁側に位置し、柱穴内にはロームブロック、ローム粒子を含む褐色土・暗褐色土を充填している。

本址に伴う遺物の出土がないため時期不明である。

5 方形周溝遺構

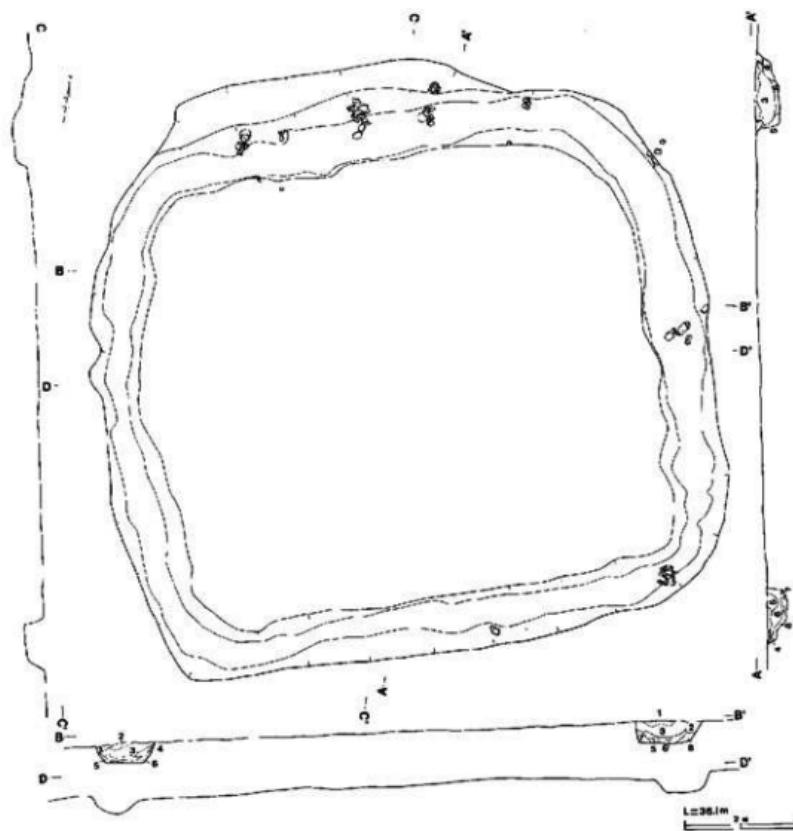
第1号方形周溝遺構(図174・175)

本遺構は、調査区の中央部C3区e8, e9, f7, f8, f9, f0, g7, g8, g9, g



第173図 第2号掘立柱建築実測図

0, h 7, h 8, h 9 に確認された。周構の外辺は東西11.12m, 南北10.65m 程で、内辺は東西で9.25m, 南北8.20m 測る。南北の周溝でN-17°-W, 周溝の上幅は1.42cm~1.02cmを測り、深さは約38cm~45cmで、底面は110cm~96cmで平坦である。断面形状は「U」状を呈し、内辺掘り込みが直角となる。南東、南西コーナーは、直角に近く、北東、北西コーナーは鈍角となる。内線はおおむね直線となる。埋葬施設（主体部）は墳丘と思われるところが削平されており確認できなかったが、中央から北側に浅い土壤状の掘り込みが確認された。その規模は長辺約70cm、短辺約120cm、深さ約25cmで、桑の根等による搅乱を受け、大半が失なわれていた。遺物は皆無で本址の主体部と考えられない。周溝の覆土は8層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土・暗褐色土で少量のローム粒子と極少量の炭化粒子と少量の砂粒を含み、中層は暗褐色土で多量のローム粒子と極少量のロームブロック、炭化粒子、焼土粒子を含む。下層は暗褐色土・褐色土で多量のローム粒子と少量のロームブロック、多量の炭化粒子、極少量の焼土粒子を含んでいる。出土遺物は、北側の周構内中央部から甕（図175-5）、壺（図175-2）、瓶片（図175-3）、北側周構内の覆土から埴（図175-6）、甕口縁部（図175-1）、器台片（図175-4）、石製模造品の勾玉（図175-9）、他に周構内覆土から手挽土器（図175-7）、支脚片、埴片、器台片、紡錘車（図175-8）などを出土している。その他、覆土から弥生式土器の破片が出上している。本址は出土遺物から古墳時代五領期に比定される遺構と思われる。

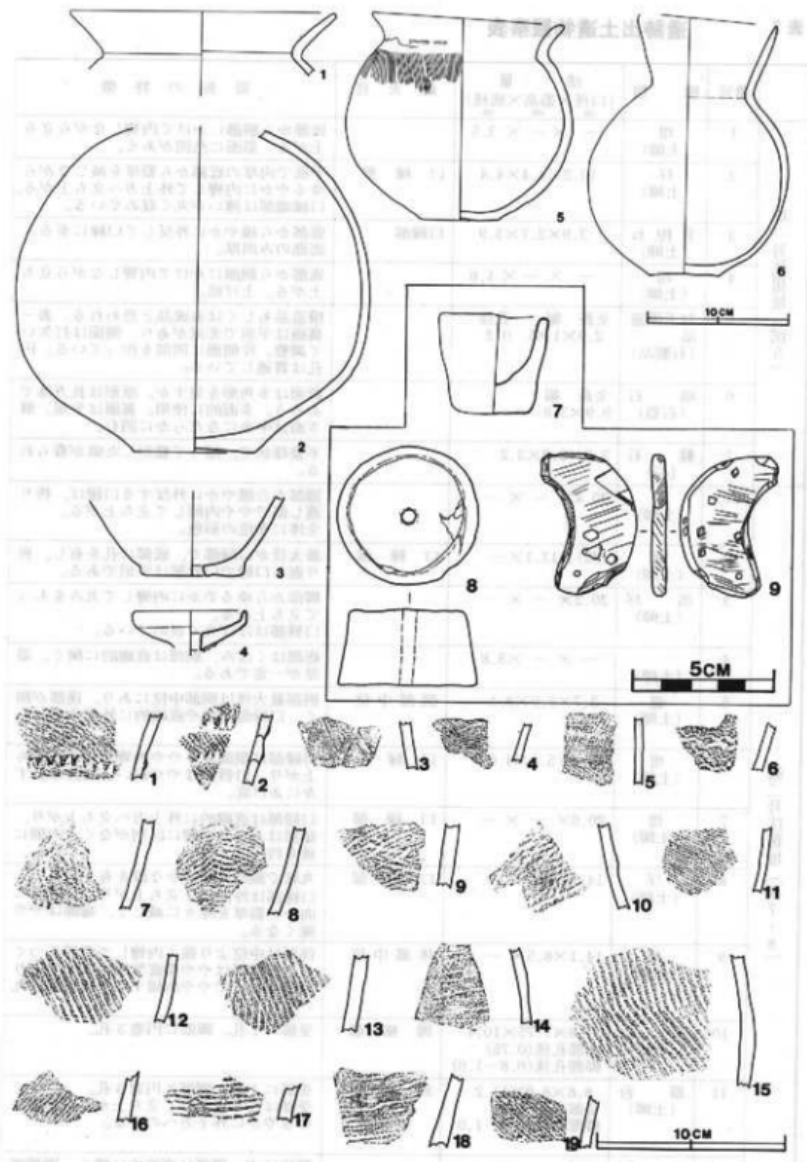


1. 層解説

- A-A' B-B'
1. 黒褐色
ローム粒子(多)炭化粒子(極少)砂粒(少)
含有
- 2. 暗褐色
シルト粒子(多)炭化粒子(極少)砂粒子(少)
含有
- 3. 結構角
ローム粒子(多)ロームブロック(極少)炭化
粒子(極少)砂粒(少)鐵土粒子(極少)含有
- 4. 暗褐色
ローム粒子(多)炭化粒子(極少)鐵土粒子
(極少)含有

- 5. 暗褐色
ローム粒子(多)炭化粒子(少)鐵土粒子(極
少)含有
- 6. 暗褐色
ローム粒子(多)炭化粒子(多)鐵土粒子(極
少)砂粒(少)含有
- 7. 黑色
ローム粒子(多)ロームブロック(極少)炭化
粒子(多)鐵土粒子(極少)含有
- 8. 黑色
ローム粒子(多)ロームブロック(少)炭化粒
子(多)鐵土粒子(極少)含有

第174図 第1号方形周溝構実測図



第175図 第1号方形周溝遺構出土遺物実測図

表2 遺跡出土遺物観察表

	番号種類	法最 (口徑×器高×底径) cm cm cm	最大径	器形の特徴
第一号住居址 (図5)	1 増 (土師)	— × — × 3.5		底部から胸部にかけて内縛しながら立ち上がる。器面に凸凹がある。
	2 砥 (土師)	10.2×4.4×4.4	口縁部	平底で肉厚の底部から器底を減じながらゆるやかに内縛して外上方へ立ち上がる。口縁部は薄いが丸く收めている。
	3 手挽ね (土師)	3.9×2.7×3.9	口縁部	底部から緩やかに外反して口縁に至る。底部のみ肉厚。
	4 増 (土師)	— × 1.6		底部から胸部にかけて内縛しながら立ち上がる。上げ底。
	5 勾玉模造品 (石製品)	全長 幅 孔径 2.9×1.65 0.2		模造品もしくは未成品と思われる。表面は平坦で光沢があり、側面は打欠いて調整。片側面に凹部を作っている。円孔は貫通している。
	6 砥石 (石器)	全長 幅 9.9×3.8		断面は多角形を呈するが、原形は長方体であろう。多面的に使用。裏面は欠損。磨き面は中央になだらかに凹む。
	7 軽石 (石)	3.2×2.9×3.2		不整球状で、擦って整形した痕が看られる。
第二号住居址 (図7・8)	1 蓋 (土師)	20.4×— × —		腹部から緩やかに外反する口縁は、折り返し部でやや内縛して立ち上がる。全体に赤色の彩色。
	2 瓶 (土師)	(22)×12.1×—	口縁部	最大径が口縁部で、底部に孔を有し、折り返し部で口縁部は平坦である。
	3 高杯 (土師)	20.2×— × —		腹部からゆるやかに内縛して丸みをもつて立ち上がる。 口縁部はほぼ丸く收めている。
	4 増 (土師)	— × × 3.8		底部はくぼみ、胸部は直線的に開く。器厚が一定である。
	5 蓋 (土師)	3.7×9.9×8.1	胸部中位	胸部最大径は胸部中位にあり、径部が細く、口縁部はやや直線的に外反する。
	6 増 (土師)	10.4×5.0×4.0	口縁部	口縁部は頭部よりやや内縛しながら立ち上がり、口唇部はやや鋭い。底部はわざかにあげ底。
	7 増 (土師)	20.6×— × —	口縁部	口縁部は直線的に外上方へ立ち上がり、頭部はあまり明瞭に区別なく、内側に傾を持つ。
	8 瓶 (土師)	14.7×5.5×—	口縁部	丸底で頭部にわざかな段を有す。 口縁部は外反して立ち上がり、口唇部に向かい器底を除々に減じて、端部はやや鋭くなる。
	9 棚 (土師)	14.1×8.5×—	体部中位	体部は中位より強く内縛して底部をつくる。口縁部はやや垂直気味に立ち上がり口唇部近くでやや内縛する。口唇部は丸い。
	10 蓋台 (土師)	7.8×7.75×10.4 受部孔径(0.75) 脚部孔径(0.8~1.0)	脚 横部	受部に1孔。脚部に円窓3孔。
	11 蓋台 (土師)	8.8×8.9×11.2 受部孔径 0.9 脚部孔径 0.8~1.0	脚 横部	受部に1孔。脚部に円窓3孔。 受部は丸みをおびて立ち上がり、脚部はゆるやかに外下方へのびる。
	12 支脚 (土師)	5.5×— × —		筒抜けで、脚部は直線的に開く。脚端部は平坦である。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 上	備 考
外 面	内 面				
ヘラミガキ	ナデ	明赤褐	普通	砂粒・雲母 石英含	
ヘラナデ	ナデ	橙	良 好	砂 粒 雲母含	
ナデ	ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
横ナデ	横ナデ	橙	普通	砂粒・雲母 長石含	脚部下半に煤付着
表面面に横方行 の擦痕有り。					瑪瑙製
口一折り返し部 純文 下一へ タキガキ	ヘラミガキ	灰赤	良 好	砂 粒 長石 石英含	成形一丁本。 頭部に磨減
ヘラミガキ	ナデ	明赤褐	普 通	砂粒・長石 石英含	底部煤付着
ヘラミガキ	ヘラナデ	赤褐	普 通	砂粒含	
ハケ日後ナデ	ハケ日後ナデ	にぶい橙	良 好	砂粒・スコ リア含	
口一横ナデ 胴一ヘラ磨キ	口一ヘラミガキ 胴一ナデ	にぶい橙	普 通	砂粒・雲母 長石含	小型
ナデ	ローナデ 胴一ヘシ磨キ	にぶい橙	普 通	砂粒・雲母 長石・石英 含	
	胴一ヘラナデ	にぶい黄橙	良 好	砂粒含	
ローナデ 底一ヘラ削り	ヘラ磨キ	橙	良 好	砂粒含	
ロ一横ナデ 中位一ナデ 底一ヘラ削り	ヘクナデ	にぶい橙	普 通	砂粒含	
ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	赤褐	良 好	砂 粒 雲母含	丹彩
ヘラナデ	受一ナデ 脚一横ナデ	にぶい黄橙	普 通	砂粒・雲母 長石含	
ハケ日の後ナデ	ヘラナデ	褐	やや不良	砂粒・雲母 長石含	

	番号	種類	法量 (口縁×器高×底径)	最大径	器形の特徴
第二号住居址	13	支脚 (土師)	孔径 1.8		孔を有する。
	(1)	壺 (弥生)	13.9×26.2×8.4 26.0	胴部 中位	口縁は頸部からほぼ直線的に外反する。
	1	壺 (土師)	13.0×27.5×5.4	胴部 中位	口縁は頸部からほぼ直角に立ち上がり、口唇部は丸味を持つ。頸部内面には棱を有す。
	2	壺 (土師)	— × 10.5 × 4.0	胴部 中位	胴部はやや強く張り出し、ほぼ中位に最大径をもち、底部へ向かう。器厚は一定している。底部はわずかに上げ底。
	3	壺 (土師)	— × — × 2.0	胴部 中位	胴部はやや強く張り出し、中位に最大径を持ち、底部へ下る。器厚は一定である。上げ底。
	4	壺 (土師)	— × — × 5.6		底部から緩やかに内傾して立ち上がる。
	5	壺 (土師)	— × 6.8 × 3.0		胴部はやや強く張り出し、平底の底部に至る。
	6	壺 (土師)	(20.6) × — × —	口縁部、胴部 中位下	胴部から口縁下位にかけてはやや垂直となり立ち上がり、それから強く外反する。口唇部は丸い。
	7	壺 (土師)	20.7 × — × —	胴部 中位	頸部で「く」の字状に外反する。頸部は球形。
	8	小形壺 (土師)	10.8×10.0×6.0	胴部 上位下	口縁部は頸部で僅かに肥厚し、外反する。胴部は頸部から張り出し、底部に至る。底部はわずかに上げ底。
第三号住居址 (図10) (1) (2)	9	壺 (土師)	17.0×17.7×6.5 孔径 2.2	胴部 中位	頸部で絞れ、外上方へのびる。口縁部はほぼ直線的にのび、口唇部は平坦である。胴部は緩やかに張り出し、底部に孔有り。
	10	壺 (土師)	10.7×8.0×2.5	口縁部	口縁部は頸部よりほぼ直線的に外反する。頸部内外に棱を有する。口縁に比べて体部が大きい。平底。
	11	壺 (土師)	(18.8) × — × —		口縁部は頸部より直線的に外傾し、中位でさらに外反する。胴部は強く張り出しやや偏平な球状を呈する。
	12	鉢 (土師)	10.8×10.0×4.8	体部 上位	上げ底から内傾して立ち上がる胴部。胴部内壁からわずかに外反して口縁となる。端部は丸い。
	13	籠器 (土師)	(17.2) × — × —		脚部附近から大きく外方へ開く。受部口縁は欠損している。脚部先端は鋭くなっている。
	14	壺 (土師)	12.7×4.3×—	口縁部	底部から体部にかけて緩やかに内傾し、口縁は僅かに外傾して立ち上がる。
	15	壺 (土師)	14.1×5.7×—	口縁部	体部は僅かに内傾し、口縁はほぼ直立する。
	16	壺 (土師)	14.0×5.5×—	口辺部	口縁は内傾して外面にわずかな棱をつくり、端部は丸い。
	17	手提ね (土師)	5.2×3.2×3.5	口縁部	肥厚な底部から体部にかけてやや内傾しながら、器厚を減じ口縁に毛る。平底。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 上	備 考
外 面	内 面				
ハケ日整形	ヘラナデ	に赤い橙	良 好	砂粒含	
ナデ	ナデ	に赤い褐	普 通	砂粒含	焼付着
口一指ナデ 削一ヘラナデ	口一指ナデ 削一ヘラナデ	明赤褐	良 好	砂粒含	
ハケ日整形の後 ナデ	ナデ	に赤い黄橙	不 良	砂 粒 長 石 石英等含	
ヘラミガキ	ナデ	赤	良 好	砂 粒 長 石 石英等含	丹彩
ヘラケズリ後ナ デ	ヘラナデ	に赤い赤褐	普 通	砂粒含	
ナデ 輪横痕あり	ナデ	橙	普 通	砂 粒 长 石 石英等含	成形不良
口一ナデ 削一ヘラケズリ	口一ナデ 削一ヘラナデ	に赤い黄橙	良 好	砂粒等含	
口一指ナデ、上 胸部一ヘラナデ、 下胸部へラ削り	口一指ナデ 削一ヘラナデ		普 通	砂 粒 长 石含	
口一横ナデ 削一ハケ日	口一横ナデ 削一ナデ	に赤い黄橙	普 通	砂粒等含	完形
口一横ナデ 削一ハケ日	口一ヘラ削り、 ハケ日 削一ヘラ削り	に赤い黄橙	普 通	砂粒等含	完形
ヘラミガキ	ナデ	に赤い橙	良 好	砂粒等含	ほぼ完形
口一指ナデ 削一ハケ日の後 ナデ	口一指ナデ 削一ヘラナデ	灰褐	普 通	砂粒等含	
ナデ	横ナデ、ナデ	に赤い橙	良 好	砂粒等含	
ナデ	ナデ	に赤い赤褐	普 通	砂 粒 青母含	
口一横ナデ 底一ヘラケズリ	ナデ	に赤い橙	普 通	砂 粒 青母 スコリア含	
口一ナデ 底一ヘラケズリ	ナデ	浅黄橙	普 通	砂 粒 スコリア含	ほぼ完形
ナデ	ヘラミガキ	赤橙	良 好	砂粒含	
ナデ	ナデ	に赤い橙	普 通	砂粒含	ほぼ完形

番号	種類	法量 (口徑×高さ×底径) cm	最大径	器形の特徴	
				口縁部	口縁部
第二号住居址 (國10 (1) (2))	手捏ね (土師)	5.7×3.6×3.8	口縁部	底部から体部にかけてはば直線的に立ち上がり、口縁で内傾している。	
	手捏ね (土師)	7.6×3.2×5.6	口縁部	不整形な手捏ねで、口唇部は尖がっている。平底。	
第二号住居址 (國10 (1) (2))	土長	往2.7 円孔径0.35		球形。貫通孔有り。	
	有孔円板 (石製)	303.4×3.9×厚0.5 円孔径0.15		円板状で貫通孔2つ有り。	
第三号住居址 (國13 (1) (2))	磁石	長幅 10.2×7.2		磨ぎ面のみ残存した破片。磨ぎ面は良く磨かれており、溝状のキズ有り。	
	壺 (土師)	20.0×—×—		口縁部は頸部から垂直に立ち上がり、口唇部近くで外傾する。口唇部は丸い。肩部はやや強く張り出す。	
第四号住居址 (國13 (1) (2))	壺 (土師)	18.4×—×—		口縁部は頸部から垂直に立ち上がってからやや外反する。	
	壺 (土師)	—×—×8.4		肩部は強く張り出し、中位で最大径となり、平底に至る。	
第四号住居址 (國13 (1) (2))	壺 (土師)	10.0×12.4×—	胸部中位	丸底で、口縁部はほぼ直線的に外反する。	
	壺 (土師)	11.8×15.6×6.9	胸部中位	球形で平底である。	
第四号住居址 (國13 (1) (2))	壺 (土師)	(16.2)×—×—	胸部中位上	口縁部は緩やかに外反し、胸部は中位上で最大径をもつ。	
	壺 (土師)	22.5×29.5×28.0	口縁部	口縁部は僅かに外反し、口唇部は丸い。胸部はあまり膨らまない。	
第四号住居址 (國13 (1) (2))	壺 (土師)	19.2×20.0×—	口縁部	口縁部は垂直気味に立ち上がり、口唇部近くで外反する。胸部は直線的に内傾する。	
	壺 (土師)	14.9×4.5×—	口縁部	口縁部は外反し、体部は弧状を呈する。境の内外面に棱脊り。	
第四号住居址 (國13 (1) (2))	壺 (土師)	13.8×5.0×—	口縁部	口縁部はやや直線的に外反し、口唇部は尖がる。体部との境に僅かな段をもち、体部はやや偏平な弧状を呈する。	
	壺 (土師)	15.1×5.2×—	口縁部	口縁部は外反し、口唇部は内側につまみ上げられる。体部は直線的で、丸底である。	
第四号住居址 (國13 (1) (2))	壺 (土師)	(10.4)×—×—		器肉がやや厚く、口縫は緩やかに内傾し、口唇部は丸い。	
	壺 (土師)	15.0×5.7×—	口縁部	口縁部は外反し、体部と口縫との境内外に棱有り。体部は偏平な弧状を呈する。	
第四号住居址 (國13 (1) (2))	壺 (土師)	14.8×5.2×—	口縁部	口縁部は直線的に外傾し、体部との境に棱をもつ。体部は偏平である。	
	壺 (土師)	15.2×5.5×—	口縁部	口縁部は直線的に外傾し、体部は直線的で偏平である。体部と口縫との境に棱有り。	
第四号住居址 (國13 (1) (2))	壺 (土師)	11.6×5.2×—	口縁部	口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部近くで外傾する。口唇部はやや尖がる。体部は弧状を呈する。丸底である。	
	壺 (土師)	11.8×6.9×—	口邊部	口縁部は内傾して立ち上がり、体部は深みのある半球形。	
第四号住居址 (國13 (1) (2))	壺 (土師)	11.8×5.2×—	口縫部	口縫部と体部の境に棱をもち、体部は偏平である。	

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	被 者
外 面	内 面				
ナデ	ナデ	明赤褐	普 通	砂 粒 雲母等含	胸下半から底部に煤付 着。ほぼ完形
指ナデ (指文あり)	口一指ナデ 底一ヘラ磨き	にぶい橙	良 好	砂 粒 スコリア含	
					石製模造品
					粘板岩
口 指ナデ 刷一ヘラ削り	口一指ナデ 刷一ヘラナデ	黒褐	普 通	砂 粒 砂れき含	
口一指ナデ	口一指ナデ	橙	不 良	砂粒含	
ヘラナデ	ヘラナデ	橙	普 通	砂粒含	
口一横ナデの後 ヘラ磨き 刷一ヘラナデ	口一ヘク磨き 刷一ヘラナデ ハケ日	明赤褐	良 好	砂粒含	ほぼ完形
ナデ	ナデ	にぶい赤褐	普 通	砂粒含	
口 指ナデ 刷一ヘラ削り後 ナデ 下削部一ヘラ削り	口一指ナデ 刷一ヘラナデ 頭一輪轆の痕	赤褐	普 通	砂粒含	
口一横ナデ 底一ナデ	口一横ナデ 刷一ナデ	黄 橙 極暗褐	普 通	砂粒含	ほぼ完形
口一横ナデ 刷一ヘラナデ	ナデ	にぶい橙	普 通	砂 粒 長石含	ほぼ完形
口一横ナデ 底一ヘラ削り	ヘク磨き	赤褐	良 好	砂 粒 雲母等含	
口一ヘラ磨き 底一ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	普 通	砂 粒 雲母等含	完形
口一横ナデの後 ヘリ磨き 底一ヘラ削り	ヘラ磨き	橙	良 好	砂 粒 長石等含	
口一横ナデ 以下一ヘラ削り	ヘリ磨き	にぶい橙	良 好	砂 粒 雲母等含	
口一横ナデ 底一ヘシナデ	ヘラ磨き、底部 放射状ヘラ磨き	橙	良 好	砂粒等含	ほぼ完形
口一横ナデ 底一ヘラナデ	ヘラ磨き	明赤褐	不 良	砂 粒 石英等含	
口一横ナデ 底一ヘラナデ	ヘラ磨き 摩滅している	明赤褐	不 良	砂 粒 雲母等含	ほぼ完形
口一横ナデ 底一ヘラナデ	ヘラ磨き (摩滅している)	橙	普 通	砂粒・雲母 長石 石英等含	完形 片形
口一横ナデ 底一ヘラ削り	横ナデ	赤	普 通	砂粒・長石 石英等含	丹形。ほぼ完形
ヘラナデ	ヘラ磨き (摩滅している)	明赤褐	不 良	砂 粒 雲母等含	

	番号	種類	法量 (口徑×高さ×底径) cm cm cm	最大径	器形の特徴
第19号	19	有孔円板 (石製)			皮孔を穿ち、欠損した痕がみられる。 さらに中央よりに2孔を穿つてある。
第19号 第20号 第21号 第22号 第23号 第24号 第25号 第26号 第27号	1	甕 (土師)	(21.0) × - × -	胴部中位	口縁部はやや直線的に外反し、口唇部はほぼ平坦である。胴部は僅かにふくらみ中位で最大径をもつ。
	2	甕 (土師)	19.4 × - × -		口縁部は頸部から、外反気味に直立して僅かに内擣する。口唇部は丸い。胴部は緩やかに張る。
	3	甕 (土師)	× - × - (8.8)		平底で副部は僅かに内擣して立ち上がる。
	4	盆 (土師)	13.5 × 4.5 × -	口縁部	体部は僅かに内擣して立ち上がり。口唇部近くでやや外傾する。口唇部は尖がる。体部と底部との境は丸みを帯び、不明瞭であるが底底。
	5	杯 (須恵質 土師)	19.4 × 4.6 × 6.6	口縁部	平底で、体部は直線的に開き、口唇部近くでやや外傾する。口唇部は丸い。
	6	高台付杯 (土師)	15.0 × 6.3 × 8.4	口縁部	体部は、僅かに内擣して立ち上がり。口縁部は若干外反し、頸部は丸い。体部と底部との境は丸みを帯び、外方へのびる高台を付す。
	7	杯 (土師)	12.1 × 5.5 × -	口唇部	口縁部はやや内擣し、体部は半球状を呈する。
	8	杯 (土師)	13.8 × 5.6 × -	口縁部	偏平な丸底から内擣して立ち上がり、頸部でわずかに折れ、さらに内擣しながら上方へのびる。
	9	杯 (土師)	14.8 × 5.0 × -	口縁部	口縁部は外反し、口唇部近くで僅かに内傾角度となる。口唇部は丸味を有す。頸部に明瞭な棱を有し、偏平な丸底へ続く体部となる。
第28号 第29号 第30号 第31号	10	盆 (土師)	14.4 × 4.6 × -	口縁部	ゆるやかに内擣して立ち上がり。体部が頸部で彼を有し、口縁部で外反する。口唇部は若干器底を減じて丸みを有す。
	11	盆 (土師)	13.6 × 5.2 × -	口縁部	口縁部は外反し、口唇部は尖がる。体部は較った弧状を呈する。頸部は括れ明瞭な棱を有す。
	12	杯 (土師)	14.8 × 5.0 × -	口縁部	口縁部はほぼ直面に立ち上がってから直線的に外反し、口唇部はやや尖がる。体部はやや偏平な弧状を呈する。
	13	壺 (土師)	× - × 5.1		口縁部は直線的に広がり、頸部は「く」の字状にくびれ、胴部は強く張り出し、中位上で最大径をもち、平底に至る。
第32号 第33号 (1) (2) (3) (4)	14	甕 (土師)	- × - × 7.1		やや凹凸のある底部で、胴部は緩やかに内擣して、中位上に最大径をもち、口縁部は頸部から若干外反しながら立ち上がる。
	15	甕 (土師)	(19.0) × - ×		口縁部はやや外反し、頸部内面に明瞭な棱をもつ。肩部は丸みをもって張り出す。
	16	甕 (土師)	- × - × 8.6		底部は平底で、側面に突出し、胴部は緩やかに内擣して立ち上がる。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				石製模造品
口一指ナデ 胴一ヘラケズリ	口一指ナデ 胴一ナデ	橙	不 良	砂粒含	
口一指ナデ 胴一ヘラ削り	指ナデ	浅黄橙	やや不良	砂 粒 長石含	
ヘラ削り	ヘラナデ	外一明黄褐 内一にぶい黄橙	普 通	砂粒(多) スコリア (少)含	
ナデ	ナデ	外面 にぶい橙 内面 黑	普 通	砂粒含	内黑
口一ナデ 弱い水挽き痕	口一ナデ 弱い水挽き痕	にぶい黄橙	やや不良	砂粒含	ほぼ完形
ろくうナナデ ミズビキ痕 (弱い)	坏一ヘラ磨キ 脚一回転ヘラケ ズリ	橙	良 好	砂 粒 長石等含	ほぼ完形 内黑
口一横ナデ 底一ヘラケズリ	ヘラミガキ	橙	良 好	砂粒含	完形
口 横ナデ 底一ヘラケズリ	ヘラミガキ	明赤褐	普 通	砂 粒 雲母等含	ほぼ完形
口一横ナデ 底一ヘラケズリ	ヘラミガキ	明赤褐	普 通	砂 粒 長石 石英等含	
口 横ナデ 底一ヘラ削り	ヘラ磨キ	橙	良 好	砂粒含	
口一横ナデ 底一ヘラケズリ	ヘラミガキ	橙	良 好	砂 粒 スコリア等 含	
口一横ナデ 胴一ヘラケズリ	ヘラミガキ (摩擦している)	橙	普 通	砂 粒 長石等含	
口一ヘラケズリ (版) 胴一ヘラケズリ の後ヘラミ ガキ(換) 底一ヘラケズリ	横ナデ	褐	良 好	砂 粒 雲母含	
ナデ	ナデ	橙	不 良	砂粒含	
口一指ナデ 胴一ヘラナデ	口一指ナデ 胴一ヘラナデ	赤	普 通	砂粒含	
ヘラ削り	ヘラナデ	橙	不 良	砂 粒 雲母含	

番号	種類	法量 (口徑×高さ×底径) cm	最大径	器形の特徴
17	瓶 (土師)	(27.0) × — × —		口縁部は強く外反し、口輪部はさらに強くひきだされ、口唇部は丸い。体部はやや内側して立ち上がる。
18	环 (土師)	(12.2) × — × —		口縁部は緩やかに内脣する。器肉はやや厚い。底部欠損。
19	环 (土師)	12.0 × × —	体部	口縁部はやや内脣して立ち上がり、口唇部は内傾する。体部は、偏平な弧状を呈する。
20	环 (土師)	(13.2) × — × —	体部	口縁部はやや内脣して立ち上がり、口唇部近くでわずかに器唇を減じる。体部はやや偏平な弧状を呈する。
21	瓶 (須恵)	24.1 × ×	口縁部	ほぼ直線的に立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は断面方形状に収めている。
22	瓶 (須恵)	25.5 × — × —	口縁部	体部は直線的に外上方へのび、口縁部は端部がやや内傾し、内・外両端はそれぞれやや突出し、断面三角形状を呈する。
23	(須恵)			体部上半に把手状のものをつけている。丁寧な作りである。
24	瓶 (須恵)	15.2 × 2.2 × 10	口縁部	体部は短く、外反し上方へのびるが、1.4cmほどで口縁部に至る。口縁端部は外方へ向いている。体部と底部との境は明瞭に屈曲する。
25	环 (須恵)	15.3 × — × 11.6	口縁部	体部は外反しつつ外上方へ立ち上がる。口縁端部は向外を向く。体部と底部との境にはふい枝をなす。
26	环 (須恵)	11.0 × 3.4 × 7.6	口縁部	体部はほぼ直線的に立ち上る。口縁部は丸く收めている。内面は底部と体部との境が大きく屈曲する。
27	环 (須恵)	11.1 × 4.4 × 7.2	口縁部	体部は、ほぼ直線的に外の方へ立ち上がる。口縁部は、わざかに外反気味で端部はほぼ丸く收めている。
28	环 (須恵)	13.2 × 4.6 × 6.2	口縁部	体部は水挽き痕を良く残し下半部は内済氣味に上半部は外反気味に上方へ立ち上がる。端部は若干外反し、僅かに覗きを有す。
29	环 (須恵)	13.5 × 4.4 × 8.5	口縁部	丁寧で水挽き痕はあまり残さない。体部は直線的に外上方へ立ちあがり。端部はやや鋭い。
30	环 (須恵)	13.3 × 4.0 × 7.7	口縁部	丁寧で水挽き痕を良く残す。体部はやや内済氣味に外方へ立ちあがり、器厚をしだいに減じる。
31	环 (須恵)	12.3 × 5.0 × 5.7	口縁部	体部は器厚を減しながら直線的に外方へ立ち上がる。端部はやや覗きを残す。
32	环 (須恵)	13.1 × 5.5 × 5.5		体部は直線的に上方に立ち上がる。口縁部は器厚をやや増し、端部は丸く收めている。

整 形 法		色 調	焼 成	胚 土	備 考
外 面	内 面				
指ナデ 整形不良	指ナデ	浅黄橙	良 好	砂粒含	
口一横ナデ 底一ヘラケズリ	ヘラ磨キ マメツしている	赤	不 良	砂 粒	
口一横ナデ 底一ヘラ削り	ヘラミガキ	明赤褐	普 通	砂 粒 雲母等含	
口一ナデ 底一ヘラケズリ	ヘラミガキ (摩滅している)	燈	不 良	砂 粒 長石含	
幅3cm内外の粘 土紐、巻き上げ 回転による指成 形	指による成形		不 良	長石 細砂粒含	
	丁寧に整形して いる		不 良	長石粒 細砂粒	
沿外面は緑色の 自然釉が付着し 調整痕等不明			良 好 黒色斑点あ り	精 麗	
底部一回転ヘラ 削り			普 通	長石・砂粒 雲母未含	水焼き痕、弱い
底部一回転ヘラ 削り		青灰	良 好	長石粒 細砂粒含	水焼き痕、弱い
自然釉が付着し ている為、瓶底 が圓錐である。 底部は回転ヘラ 削りが施されて いる。	底 底部及び体部に 黄緑の自然釉付 着		良 好	長石粒 (多)	水焼き痕、弱い 物の状態から底部を上 にして焼成したことが 判明
底一丁寧に回転 ヘラ削り	底		良 好	細砂粒を含 む、小さな 黒色斑点あ り	水焼き痕、弱い 体部から底部に自然釉 付着
底一回転ヘラ切 り後、手持ちヘ ラナデが多方向 から。	底一ラセン状水 底一丁寧 口一横ナデ	底オリーブ	良 好	長石粒 細砂粒(多)	ヘラ記号有り
底一回転ヘラ削 り 境一回転ヘラ削 りで面取り	体一横ナデ	底オリーブ	やや不良	石英粒を若 干含むが精 製されている。	
底一静止ヘラナ デ	底部内面にはラ セン状の水焼き 痕を良く残す	底オリーブ	良 好	石英粒、 細砂粒含 精製	
底一回転ヘラ切 り後ナデ 水焼き痕強	口一指ナデ 水焼き痕弱		良 好	長石粒含 精製	
底一回転ヘラ削 り後手持ヘラ削 り	底・体部の境一 強いアテ		普 通	長石粒を含 むが、精製 されている	水焼き痕弱 ヘラ記号有り 焼成時にヒビ割れ有り

	番号	種類	法量 (口径×器高×底径) cm	最大径	器形の特徴
	33	环 (須恵)	13.2×—×9.0	口縁部	体部は直線的に外上方へ。端部は丸く收めている。 内側底・体部との境は彎曲し明瞭。 外側底・体部との境は丸味有り。
	34	环 (須恵)	14.4×—×7.9	口縁部	体部は直線的に器厚を減じて立ち上がる。 口縁端部は丸くおさめている。底部は外周部にアテの入った若干丸みを有する。 底・体部境は明瞭な屈曲
第十九号 第一分井戸 第五住居址、 第一分井戸 状況表	35	台付長颈 壺 (須恵)	—×—×8.0		体部は外上方へ立ち上がる。平底、短い 断面上角形の凸台。
	36	壺 (土師)	11.2×—×—		頸部以下欠失。 口縁部器厚は極めて薄く、内側して立ち 上がり、口唇部は尖る。
	37	高 环 (須恵)			环部は器厚を減じながら大きく外方に開 き、口縁端部は方形状で垂直に上がる。 内面に浅い回線状のものが窺る。
	38	高 环 (須恵)			体部と脚部を接合した後に、四方に透 窓を廻っている。
	39	長 頸 壺 (須恵)			体部と口頸部の境は剛腹に屈曲し、口頸 部は器厚を減じながら外反しつつ上方へ のびる。
	40	長 頸 壺 (須恵)			頸部から口縁部付近まであるが、頸部上 半はほぼ直線的に上方へ、上半は厚を減 じながら外反し、上方へのびる。
	41	有孔円板 (石製)	径 2.4 厚 0.5 孔径 0.15		欠損は著しいが外縁部から円板と判断。 欠損部に孔麻があるため双孔。
	42	鉄 錆 (鉄器)	長4.6×3.2 幅0.7~0.5~0.4		42・43は接合可能。頸部は隅丸方形で、 断面は矩形の角柱状を呈し、下に向かっ て細くなる。
	44	砥 石	5.8×4.5×2.55		不定形で多面に使用。磨き面ははとんど ゆるやかな凹面。
第六号住居址 (図16)	1	壺 (土師)	19.0×—×—		頸部で強く外反し、口縁部でわずかに内 傾角度となり、外面二条、内面に一条の 棱をつくる。肩部は丸い。胴部は、緩や かに内側する。
	2	壺 (土師)	19.4×—×—		頸部器厚は薄くなり、外反し、口縁端外 面に一条の凹線が廻る。
	3	壺 (須恵)	28.1×—×—	口縁部	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口 縁端部は水平で内外ににおい棱をなす。
	4	环 (須恵)	12.7×5.3×6.2	口縁部	体部は器厚を減じながら、わずかに内側 気味に外上方へ立ち上がる。口縁部はほ ぼ直線的で端部は丸く收めている。水挽 き痕は弱い。
第九号住居址 (図19)	1	壺 (土師)	(17.6)×—×—		頸部は「く」の字に外反し、口唇部近く から、内傾する。口唇部は、やや尖がる。 胴部は緩やかに膨らみ、底部は欠損して いる。
	2	壺 (土師)	(24.2)×—×—	口縁部	頸部は直立して、口縁部はやや外反 し、さらに外傾する。口唇部は丸い。胴 部は序々に内側する。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
底一丁掌回転 ヘラ削り 底・体部擦一回 軸ヘラ削り	底・体・水挽き 痕若干残す	灰	良 好	長石 砂粒含 精 製	ヘラ記分有り
水挽き痕- 刷潔 底一回転ヘラ削 り	水挽き痕- 刷	灰	やや不 良	長石粒 若干含む 精 製	
底一回転ヘラ削 り		灰白	良 好	長石粒 細砂粒含	
ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	にぶい橙	普 通	砂粒含	
			良 好	長石粒 細砂粒含 精 製	赤-緑色自然釉
环下手一回転ヘ ラ削り		灰	良 好	長石粒 細砂粒含	
			良 好	長石粒 細砂粒を 含む	
		青灰	良 好	長石粒 細砂粒含 (多)	水挽き痕一削
					サビが著しい
口一指ナデ 胴一ヘラケズリ	口一指ナデ 胴一ヘラナデ	橙	良 好	砂粒含	
口一指ナデ 胴一ヘラケズリ	口一指ナデ 胴一ヘラナデ	にぶい橙	普 通	砂 粒 長石含	
			良 好	長石粒 細砂粒含	
底一切り離し後 手持ヘラ削り		にぶい黄橙	やや不 良	長石 細砂粒含	
口一指ナデ 胴一ヘラケズリ	口一指ナデ 胴一ヘラナデ	にぶい赤褐	普 通	砂 粒 雲母等含	
口一指ナデ 胴一ヘラケズリ	口一指ナデ 胴一ナデ	にぶい黄橙	良 好	砂粒等含	

	番号	種類	法 尺 (口徑×器高×底径)	最 大 径	器 形 の 特 徴
第九号住居址 (図19)	3	甕 (土師)	× - × 6.2		平底で、胸部は丸みを帯びて内側しながら立ち上がる。
	4	杯 (土師)			体部はやや偏平な弧状を呈し、口縁部上位は欠損。
	5	杯 (土師)			体部は凸凹で、歪みがある。
	6	杯 (土師)	11.7×4.1 ×	口辺部	口縁部は短かく、直線的に内傾する。体部は偏平である。
	7	杯 (土師)	(13.0)×4.4 ×	口辺部	体部は偏平な弧状を呈し、口縁部は僅かに内側に傾き、口辺部はやや尖る。
	8	杯 (土師)	13.6×4.4 4.3 × -	口縁部	口縁部はやや内側気味で、口辺部は尖る。体部は弧状を呈する。
	9	砥 石	(長)8.4×(幅)4.8		不定形であるが、原形は長方体であろう。表・裏・側面とも良く使用されている。
	1	甕 (土師)	6.8×7.3 6.8 × 3.6	口縁部	口縁部は外反し、胴部は中位に強く張り出で最大径となる。歪みがある。
	2	小型 甕 (土師)	- × - × 5.3		平底で、立ち上がり部はややくぼみ、胴部は中位下まで最大径をもつ。
第十一号住居址 (図20)	3	器 台 (土師)	9.8 × × - 孔径 1.4		受部はわずかに内側に傾き、口縁部に凹窓が廻る。受部孔をもち、底部に円窓がある。
	4	支 稚 (土師)	13.2×13.9×7.6 孔径 1.6	脚 底 部	孔を有し、脚部は直線的に開く。
	5	皿 (土師)	19.2×3.8 × -	口縁部	底部は凸凹で、体部は極めて浅く、口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部は器身を護じ丸みを帯びる。
	1	壺 (土師)	(15.5)× - × -		頸部から直線的に外反し、口縁部で器厚を減じた折り返し口縁となる。
	2	鉢 (土師)	11.7×8.5 × -	口辺部	口縁部はやや内側に傾き、体部は歪みがあり底となる。外曲の頸部に棱をもつ。
第十四号住居址 (図22)	1	勾玉墳遺品 (石製品)	全長 2.5 cm 孔径 3.35×0.76 × 0.2		板状の石材を削って成形している。裏面に沟面カリの擦痕を残す。
	2	甕 (土師)	(12.6)× - × -	胴 部	口縁部はやや外反し、中位で僅かに内側する。胴部は強く張り出し、球形を呈する。頸部に凸窓をもち、凸窓上面にキザミ有り。
第十二号 (図24) 五(1) 五(2) 号住居址	2	甕 (土師)	14.1 × - × -		頸部から口縁部にかけては緩やかに外反し、肩部は強く張り出す。 複合口縁
	3	甕 (土師)	24.0 × - × -	脚 部	口縁部はやや外反し、胴部は強く張り出している。
	4	甕 (土師)	17.2 × - × -	脚部中位	口縁部は直線的に開き、中位でさらに外側する。口縁部は平坦である。胴部はほぼ球形を呈すると思われる。底部欠損。

盤形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
ヘラ削り	ヘラナデ	浅黄橙	普通	砂粒 雲母含	
ナデ	丁寧なナデ	にぶい黄橙	普通	砂粒含	
口一横ナデ 底一七ヘラナデ 下ヘラ削り	ナデ	褐灰	やや不良	砂粒含	
口一横ナデ 底 ヘラナデ	丁寧なナデ	浅黄橙	普通	砂粒 長石 石英等含	ほぼ完形
口一横ナデ 底一ヘラケズリ	口一横ナデ 底一ナデ	浅黄橙	普通	砂粒 雲母等含	ほぼ完形
口一横ナデ 底 ヘラナデ	丁寧なナデ	浅黄橙	普通	砂粒 スコリア 石英等含	全体に黒付着
ヘラ磨キ(粗)	口一ヘラ磨キ 胴 ナデ	にぶい橙	普通	砂粒 スコリア含	ほぼ完形
ナデ	ナデ	外一にぶい褐 内 褐灰	普通	砂粒 スコリア含	
受部 摺ナデ 脚部 ハケ目整 形	受部一ヘラナデ 脚部一ハケ目整 形	明赤褐	普通	砂粒含	
ハケ目整形	ナデ	外一橙 内一明赤褐	普通	砂粒・雲母 長石・石英 等含	
口一横ナデ 底一ナデ	口一横ナデ 底一ナデ	にぶい黄橙	普通	砂粒含	
ハケ目後ナデ	ヘラナデ	にぶい橙	不良	砂粒 長石含	
口一横ナデ 胴一ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	橙	良 好	砂粒 雲母含	ほぼ完形
口一ハケ目整形 胴一ハケ目の後 ナデ	ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
口一ハケ 胴一ヘラナデ 胴一ヘラナデ	口一ヘラナデ 胴一輪積み振	赤	不良	砂粒 石英含	丹彩
ハケ目整形	口一ハケ目整形 ヘラナデ	明赤褐	やや不良	砂粒 長石含	
口一ハケ目整形 胴一ハケ日の後 ナデ	口一ハケ目整形 胴一ヘリナデ	にぶい赤褐	やや不良	砂粒含	

	番号	種類	法量 (口径×高さ×底径) cm × cm × cm	最大径	器形の特徴
第十二号・二十一号住居址 (図41(1)・(2))	5	甕 (土師)	22.2 × - × -	胸部中位	口縁部は直線的にやや外傾し、中位でさらに外傾する。口唇部は平坦である。胴部は緩やかにふくらむ。 底部欠損
	7	甕 (土師)	15.3 × - × -		頸部は直線的に開き、折り返し口縁である。口唇部はやや丸味をもつ。
	8	甕 (土師)	- × - × 8.4		胴部は横に張る球形を呈し、底部との境はわずかに括れ、平底となる。
	9	甕 (土師)	- × - 4.8		底部はわずかなあげ底。胴部はほぼ球形である。
	10	甕 (土師)	9.4 × 11.9 × 3.8	胸部中位下	口縁部はやや直線的に広がり、頸部はほぼ「匂」の字状に彫れる。胴部は頸部から、最大径をもつ中位下までほぼ直線的に張り、中位下で強く張り出し、底部へ向かう。
	11	器台 (土師)	7.4 × 7.2 × 12.3 円窓径 1.2	脚部 緩	受け部は、下位に僅かな棱を有し、緩やかに内彎して、口唇近くでやや内傾する。脚部は頸部から緩やかに外反し、胴部で大きく述べ開がる。受け部孔を有し、円窓は3ヶ所に穿たれている。
	12	杯 (土師)	15.6 × - × -	II 緯部	体部は直線的で、底部近くでやや丸味をもち、底部は欠損している。口唇部はやや尖がる。
	13	高杯 (土師)			縁部は直線的に外上方へ伸びる。
	14	支脚 (土師)	- × - × (12.2)		脚部はほぼ直線的に外下方へ開き、下端部で内傾する。
	15	支脚 (土師)	12.9 × 17.0 × 7.0 孔径 2.1	II 緯部	孔を有し、脚部は内彎しながら外下方へ開き、下端部近くで内傾し、底部は平坦。
第十六号住居址	1	甕 (土師)	17.7 × 31.8 × 8.6	胸部中位	頸部は、肩から内彎して、口縁部は強く外反する。胴部は緩やかにふくらみ、中位で最大径をもつ。平底である。
	2	甕 (土師)	(19.0) × - × -	胸部中位上	頸部で外反し、口縁近くでさらに外反する。胸部中位で最大径。
	3	甕 (土師)	- × - × 8.0	胸部中位上	頸部は強く張り出して、中位上で最大径をもち、底部に向かってやや直線的である。
	4	瓶 (土師)	27.8 × 24.9 × -	口縁部	口縁部はやや強く外反し、体部は直線的に内傾する。
	5	瓶 (土師)	(12.3) × 8.8 × 7.5	胸部中位上	II 緯部はほぼ直立し、口唇部でやや外傾する。体部は強く張り出し、中位上に最大径をもつ。平底である。
	6	手押ね (土師)	- × - × 5.7		平底から体部は直線的に外上方へ伸びる。
	7	珪石	長幅厚 10.5 × 4.2 × 2.3		不整形を呈し、表・裏・両側面等多面的に使用。側面はゆるい内彎カーブ。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
口一指ナデ ハケ日整形 削一ハケ日目の後 ヘラナデ	口一ハケ日その後 指ナデ 削一ヘラナデ	灰赤	不 良	砂 粒 長石含	
ハケ日	ハケ日	棕		砂 粒 長石 雲母含	
ハケ日整形	ヘラナデ ハケ日整形	にぶい棕	普 通	砂 粒 雲母含	
ハケ日整形	ヘラナデ	にぶい黄棕	普 通	砂 粒含	削部下半に媒付着
口一横ナデ 削一ヘラ削り後 ナデ	口一横ナデ 削一ナデ	明赤褐	良 好	砂 磨 スコリア 雲母含	ほぼ完形
ヘラナデ	ヘラナデ	明赤褐	普 通	砂 粒 雲母含	
ろくろナデ	ていねいな ヘラミガキ	外一にぶい棕 内一黒	良 好	砂 粒 石英 長石含	内黒
ナデ	ヘラ磨キ	棕	やや不良	砂粒含	
ハケ日輪形	ヘラナデ	棕	普 通	砂 粒 砂 磨 長石含	
ハケ日整形	ナデ	にぶい棕	普 通	砂粒含	
口 横ナデ ヘラナデ	口一横ナデ ヘラナデ	にぶい棕	良 好	砂 磨 長石 石英 スコリア含	
口一横ナデ 削一ヘラナデ	ナデ	明赤褐	不 良	砂 磨 スコリア 雲母含	ほぼ完形
口一横ナデ 削一ナデ(下から上へ)	口一横ナデ 削一ヘラナデ	棕	やや不良	砂 粒 長石 石英含	
ナゲ(摩滅して いる)	口一横ナデ	にぶい黄褐	不 良	砂 磨 スコリア含	
口一横ナデ 削一ヘラ削り	口一横ナデ 削一ヘラ削り	にぶい棕	良 好	砂 粒 スコリア含	
指ナデ	指ナデ	明赤褐	普 通	砂粒含	
—	—	—	—	—	泥岩

番号	種類	法景 (口徑×器高×底径)	最大径	器形の特徴
8	紡錘車 (石製品)	2.6×1.25 3.8 円孔 0.65		円錐台形を呈し、上・下面、側面ともノミ模様の痕跡が認められる。
9	紡錘車 (石製品)	2.8×1.9 円孔 0.8		円錐台形を呈し、上・下・側面とも良く磨いて整形されている。
10	鉄製品	長 輪 3.75×0.85		扁平な板状であり、上・下とも欠損。
11	平鏡 (鉄製品)	長 輪 4.7×3.25		平鏡の一部と思われる。下端は薄く、刃部と思われる。
12	环 (須恵)	9.2 × - × -	口縁部	口縁部附近に浅い凹線状のものが一周している。口縁端部はにぶい棱を呈している。底部と体部との境は明瞭でなく、底部から内側して口縁に至る。
13	环 (土師)	13.4×(3.0)× -	口 縁 部	口縁部は内傾して立ち上がり、体部との境に棱をもつ。体部に極めて浅く、肥厚で偏平である。
14	环 (土師)	11.2×3.5 × -	口 縁 部	口縁部は直立し、体部との境に棱をもつ。体部は直線的な内傾である。
15	环 (土師)	13.7×3.4 × -		口縁部は内傾して立ち上がり、口唇部外側に棱を有し、内側は丸みを帯びる。
16	环 (土師)	11.4×4.5 ×	口 縁 部	口縁部はほぼ直立し、口唇部近くでやや外傾する。体部は弧状を呈する。
17	环 (土師)	14.3×4.5 × -	口 縁 部	口縁部は直線的に内傾し、口唇部は丸くなる。口縁部と体部との境に明瞭な棱をもつ。体部はやや偏平な弧状を呈する。
18	环 (土師)	12.0×3.5 × -	口 縁 部	口縁部はほぼ直立し、口唇部は僅かに外傾し、体部は弧状を呈す。頸部外側に棱有り。
19	环 (土師)	13.2×4.7 4.2 × -	口 縁 部	口縁部は頸部から内傾し、頸部外側に棱を有する。体部は偏平な弧状。
20	环 (土師)	14.2×4.5 × -	口 縁 部	口縁部は僅かに内傾し、体部はやや偏平な弧状を呈する。
21	环 (土師)	14.0×5.8 × -	口 縁 部	口縁部は直線的に内傾し、体部との境に棱をもち、体部は弧状を呈する。
22	輪 (土師)	15.7×7.9 × -	口 縁 部	体部は、まろやかな半球状を呈し、口縁部は内傾し、口唇部は丸みを帯びる。
23	支脚 (土師)	孔径 1.2		脚部は直線的に外下方へ伸びる。円窓有り。
24	环 (須恵)	12.9×5.9×8.3	口 縁 部	体部はやや直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反氣味で、端部は丸く取めている。外方へふんばる高台、体部と底部の境は外面丸味を有し、内面は明瞭に屈曲を呈す。

概 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
					滑石製
					滑石製
底部径 7 cm に渡り回転ヘラ削り	灰	良 好	長石粒 細砂粒含	水焼き痕弱い	
口一横ナデ 胴一ヘラ削り	口一横ナデ 胴一ヘラ磨キ	明赤褐	良 好	砂 粒 雲母 スコリア含	
口一横ナデ 底一ヘラ削り	ていねいな ヘラ磨キ	赤褐	良 好	砂粒含	
口一ヘラ磨キ ヘラ削り	口一ヘラ磨キ	赤	良 好	砂粒含	
口一横ナデ 底一ヘラケズリ	口一横ナデ 底一ナデ	にぶい褐	普 通	砂粒含	
口一横ナデ 底一ヘラナデ	口一横ナデ 底一ナデ	にぶい赤褐	良 好	砂 粒 雲母 長石 石英含	ほぼ完形
口一横ナデ 胴一ヘラ削り	口一横ナデ 胴一ナデ	にぶい褐	普 通	砂粒含	
口一横ナデ 底一ヘラ削り	口一横ナデ 底一ナデ	にぶい橙	良 好	砂 粒 雲母含	
口一横ナデ 胴一ヘラ削り	ヘラミガキ	橙	良 好	砂 粒 スコリア含	
		にぶい橙	良 好	砂粒含	
口一横ナデ 底一ヘラ削りの 後ヘラナデ	口一横ナデ 底一ヘラ磨キ	明赤褐	普 通	砂 粒 雲母含	
ハケ目の後ヘラ ナデ	ヘラナデ	にぶい橙	普 通	砂 粒 石英含	
底部は回転ヘラ 切りの後回転ヘ ラ削り		暗青灰	良 好	長石及び細 砂粒(多)含	水焼き痕弱い

番号	種類	法量 (口径×高さ×底径) cm cm cm	最大径	器形の特徴
25	环 (須恵)	17.1×6.0×11.1	口縁部	底部と体部は鋭い棱をなす明瞭な屈曲によって区別される。体部は、わずかに器厚を減じながらほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は若干外反している。底部外縁より2cm内側に外方へふんばった高台。
26	环 (須恵)	15.1×5.5 ×—	口縁部	体部は、わずかに器厚を減じながら、やや外反気味に立ち上がる。口縁端部は、わずかに外方を向く。底部全体は丸味を有す。体部との境は内外面とも明瞭に屈曲する。
27	环 (須恵)	14.0×5.35×7.8	口縁部	体部は器厚を減じながら、やや内輪気味に立ち上がり、体部上位でやや外反する。口縁部は直線的にのび、端部は丸く収めている。
28	环 (須恵)	14.4×4.8×8.6	口縁部	肉厚の底部から体部へ明瞭に屈曲し、わずかに器厚を減じながらほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部はほぼ丸く収めている。
29	瓶 (須恵)	23.8×4.7×13.7	口縁部	底部と口縁部とは鋭い棱をなす屈曲によって明瞭である。口縁部はわずかに外反し、端部は外方を向く。底部は丸味をもつ。外方へふんばった高台。
30	円 瓶 (須恵)	20.0 ×— ×—		円筒状。側面に一束の隠帯を有す。
1	甕 (土師)	17.2×30.0 29.0	胴部中位	口縁部は大きく外反し、口唇部は丸い。胴部は、中位に最大径をもち、やや強く張ってから丸味をもって平底に至る。
2	甕 (土師)	24.1×26.4 ×—	胴部中位	口縁部は緩やかに外反し、口唇部はやや薄くなる。胴部は、中位に最大径をもつてふくらむ。
3	瓶 (土師)	20.5×15.2 ×—	口縁部	口縁部はやや直線的に外傾し、体部はほぼ直線的に内傾し、下平からやや丸味を帯びる。
4	环 (土師)	(12.8)×4.4 ×—	口辺部	口縁部は直線的にやや内傾し、体部との境に棱をもつ。体部は弧状を呈する。
5	环 (土師)	13.0×5.0 ×—	口辺部	口縁部はやや内傾し、口唇部はわずかに丸くなる。体部は凸凹があり、やや偏平な弧状を呈する。
6	环 (土師)	13.3×6.0 ×—	口辺部	口縁部は内寄し、体部は弧状を呈する。
7	环 (土師)	14.0×5.7 ×—	体部	口縁部はやや内寄し、口唇部は丸い。体部は弧状を呈する。
8	环 (土師)	14.8×4.9 ×—	口辺部	口縁部はやや内傾し、口唇部はわずかに丸くなる。体部は偏平な弧状を呈する。
9	高 环 (土師)	11.4×7.1×9.0	環体部上半	口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、体部は偏平な弧状。脚部は細かく、ゆるやかに外下方へのびる。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
底部は回転ヘラ削り		灰白	良 好	長石粒 細砂粒 (多) 含	水焼き痕弱い
底部は回転ヘラ削り		灰白	不 良	長石粒 細砂粒 (多) 含	水焼き痕弱い
底部は粗い回転 ヘラ切りのまま である		灰黄褐	普 通	長石粒を多 く含み粗い	水焼き痕弱い
水焼き痕はやや 強い。底部外縁 まで焼き出し、 底部のやや内側 で回転ヘラ削り によって切り離 した後外周部を ナデ	水焼き痕は弱い	浅黄	やや不良	長石、細砂 粒は比較的 少ない	
底一回転ヘラ削 り			普 通	長石粒 細砂粒を含 む	水焼き痕弱い
		黄灰	良 好	長石粒 細砂粒を少 し含む	
口一ヘラミガキ 胴一ヘラケズリ	口一ヘラミガキ 胴一ヘラナデ	棕	良 好	砂 粒 雲母含	ほぼ完形
ヘラケズリ	ナデ	棕	不 良	砂 粒 スコリア含	
口一指ナデ 胴一ヘラケズリ	口一指ナデ 胴一ヘラナデ	明赤褐	不 良	砂 粒含	
口一横ナデ 底一ヘラナデ	口一横ナデ 底一ヘラケズリ	淡赤棕	良 好	砂 粒含	
口一横ナデ 底一ヘラ磨キ	口一横ナデ 底一ヘラミガキ	明赤褐	良 好	砂 粒 スコリア含	ほぼ完形
口一横ナデ ヘラ削り	口 横ナデ ヘラミガキ	にぶい赤褐	普 通	砂 粒 スコリア 雲母等含	ほぼ完形
口一横ナデ 底一ヘラケズリ ヘラミガキ	口一横ナデ 底一ヘラミガキ	にぶい棕	普 通	砂 粒 雲母 長石 英 スコリア含	完形
口一横ナデ 底一ヘラケズリ	ナデ	にぶい棕	やや不良	砂 粒 雲母 スコリア含	
口一横ナデ 底一ナデ 脚部一ヘラナデ	口一ヘラ磨キ 脚部一ヘラ磨キ	棕	良 好	砂 粒含	ほぼ完形

番号	種類	法量 (口徑×器高×底径)	最大径	器形の特徴
10	环 (須恵)	14.2×4.5 ×—	口縁部	体部はほぼ直線的に外上方へ伸び、口縁部は器厚を減じ、僅かに外反する。端部は丸く取めている。
11	环 (須恵)	14.3×4.7×8.3	口縁部	体部はわずかに外反気味に上外方へ立ち上がる。口縁端部はほぼ丸く收めている。底部と体部との境は丸味を有する。
12	环 (須恵)	10.8×3.9×6.9	口縁部	体部はほぼ直線的に外上方へ伸びる。口縁端部は丸く取めている。
13	蓋 (須恵)	16.4×3.95 ×—		天井部は器厚を減じながら、外下方へ開いてゆく。口縁部は下方へ短く屈曲し先端にはよい棱をなす。天井部には中央に握室球状のつまみを付す。
14	羽口 (土師)	長 種 12.0×5.5 円孔径 2.3		円柱状を呈し、中央に円孔が貫けている。
15	羽口 (土師)	長 種 12.1×6.9 円孔径 3.25		円柱状を呈すが、下端が広がりをみせる。円孔が貫けている。
16	模造品 (石製)	長 幅 厚 4.5×2.15×0.5 孔径 0.2		板状で船形を呈す。円孔を有す。
17	羽口 (土師)	長 3.1		羽口小片と看られる。
18	鉄 器	長 幅 5.35×0.9 2.3		両側面から折り曲げて柄の固定としている。刃部は欠失している。
19	鉄 器	長 5.25×6.55 柄幅 0.45, 0.7, 0.5 尖刃幅 0.9		19・20は接合可能と看られる。柄は断面四角形で、途中、一度段を有して点くなり、さらに尖頭部にむかって細くなる。尖頭部は本葉形、断面は中位でレンズ状。
20	鉄 器	長 幅 4.05×0.75 0.85		小片で、器種等明瞭には断定し難い。断面は角が丸くなる長方形。
1	台付甕 (土師)	18.0 ×— ×—	口縁部	口縁部は頸部から「く」の字に直線的に開く。頸部はゆるやかに内湾。
2	台付甕 (土師)	— ×— ×脚径 9.4		台部はやや内寄気味に広がり、端部は平坦。
3	高 瓶 (土師)	円窓径 1.2		瓶部は緩やかに内寄して立ち上がる。脚部は大きく広がる。脚部に円窓が穿たれる。
4	脚 器 台 (土師)	19.1×— ×— 円窓径 1.2		受け部は外面に裝飾用の突帯をもち、受け部底部より直線的に開き、明瞭な棱をもって大きく外反する。口縁部は平坦である。脚部は緩やかに外反し、円窓が3ヶ所に穿たれる。

第十八号住居址

第一十二号住居址

(図35)

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
底部は回転ヘラ切りの後外周部に同軸ヘラ削り		灰白	不 良	長石粒 細砂粒含	水焼き痕弱い
底一回転ヘラ切り後手持ちヘラ削り 水焼き痕強い			普 通	長石粒 細砂粒含	土師質須恵器
体一下半手持ち ヘラ削り(粗) 底部は切り離し 後輪にナデ		褐色	良 好	長石粒(少) 比較的キメ 細かい	
大舟部には、径 11cmに渡って回 転ヘラ削り		灰	良 好	長石粒 細砂粒含	内面に灰緑色の吹き出 し袖、重ね焼き痕
		灰黄		砂粒含	鉛津付着
					鉛津付着
表面側面とも擦 痕が顕著					外面に鉛津付着
					サビが著しい
					サビが著しい
口一横ナデ 脚一ヘラナデ	口一横ナデ 脚一ヘラナデ	棕	不 良	砂粒含	
ナデ	ナデ	にぶい棕	普 通	砂 粒 長石等含	
ヘラ磨キ	环一ヘラ磨キ 脚一上ナデ 下ハケ日	棕	普 通	砂粒含	
ヘラ磨キ	环部一ヘラナデ 脚部一ハケ日の 後ヘラミガキ	にぶい棕	普 通	砂 粒 長石等含	

	番号	種類	法量 (口徑×器高×底径) cm cm cm	最大径	器形の特徴
第二十四号住居址 (図36)	1	壺 (弥生)	16.8 × - × -		頸部は殆んど括れず、ゆるやかに外反して口縁に至る。5条の櫛描沈線で胸部と区画。口縁複合口縁、口唇部に原体の側面扁平痕。複合口縁の隆起帶下端に棒状工具による割突文。肩一ほとんど膨らまない。
	2	壺 (弥生)	15.8 × - × -		頸部はほとんど括れをもたず、ゆるやかに外反して口縁に至る。口縁部は複合口縁であり、隆起帶には無文施文。口唇及び隆起帶下端には原体の側面扁平痕。
第二十六号住居址 (図45)	1	壺 (土師)	16.2 × - × -		頸部から口縁部にかけてやや外反し、口唇部は丸い。胸部は強く張り出す。
	2	壺 (土師)	- × - × (7.2)		底部は若干くぼみ、胸部はわずかに外反した後、緩やかに内傾して立ち上がる。
第二十六号住居址 (図45)	3	壺 (土師)	14.6 × - × -	胸 部	口縁部は、僅かに外反し、口唇部は平坦である。胸部はやや強く張り出す。底部欠損。
	4	壺 (土師)	- × - × (7.2)		平底で、胸部は内傾しながら立ち上がる。肉厚。
第二十六号住居址 (図45)	5	小型壺 (土師)	(8.0) × - × -		頸部から口縁にかけて直立し、肩部は強く張り出す。全体に肉厚。
	6	小型壺 (土師)	12.9 × 9.8 × 5.2	口縁部	頸部はほぼ直立し、口唇部近くで内側しながら外方へ開く。体部は上位に最大径をもち、半球状を呈する。平底である。
(1)	7	小型壺 (土師)	11.6 × 14.3 × 7.0	体部中位上	口縁部は極めて短かく、外傾する。体部は中位上に最大径をもつ。ほぼ球状を呈する。底部の沿肉は厚く平底。
	8	小型壺 (土師)	× - × 8.0		平底で、底部のみ器内が厚く、胸部は緩やかに内傾する。
(2)	9	壺 (土師)	- × - × 9.6		底部は上げ底。胸部は内傾しながら大きく膨らむ。
	10	壺 (土師)	孔径 2.8		底部壠は肉厚であり、胸部は内側して立ち上がる。
(3)	11	壺 (土師)	11.6 × 5.2 × -	体部上位	口縁部は内傾して立ち上がり、体部は偏平な弧状を呈す。
	12	壺 (土師)	12.4 × 5.4 × -	口縁部	口縁部と体部の区切れがなく、底部から丸味をもって立ち上がり、口唇部も丸味をもつ。
	13	壺 (土師)	12.8 × 5.8 × -	体部上位	口縁部は内側して立ち上がり、体部は半球形を呈する。
	14	壺 (土師)	(12.2) × (5.6) × -	II 辺 部	体部と口縁部の境が不明瞭で、体部は半球状を呈し、口縁部はやや内傾する。体部には僅かな浅い凹線が見られる。

裝形法		色調	焼成	胎上	備考
外面	内面				
頭一無文 櫛捺文 胴一捺糸文	丁寧なナデ	橙	良好	緻密	外一煤付着
頭一4条の備描 沈線の波状文が 3段 胴一捺糸文	丁寧なナデ	外一黒褐色 内一暗褐色	良好	石英粒を含 格	外一口沿部まで全体に 煤付着
口一指ナデ 胴一ヘラ削り	口一指ナデ 胴一ヘラナデ	橙	普通	砂粒 スコリア含	
ヘラ削り	ヘラナデ	にぶい黄橙	良好	スコリア 長石・石英含	一部煤付着
口一指ナデ 胴一横ヘラナデ ヘラナデ	口一指ナデ 胴一横ヘラナデ	内面一橙 外面一明赤褐	良好	砂粒 砂礫(少)含	
ヘラ削り	ヘラナデ	橙	不良	砂粒 長石・石英含 雲母含	
ヘラ磨キ	ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
口一横ナデ ヘラナデ	口一横ナデ ヘラナデ	内面一褐 外面一にぶい赤 橙	良好	砂粒 長石・石英含	
ナデ	ナデ	にぶい黄橙	不良	砂粒 スコリア 雲母含	成形不良
ヘラケズリ	ヘラナデ	明赤褐	不良	砂粒 スコリア含	
ヘラナデ	ヘラナデ	橙		長石・砂粒 スコリア (少)含	黒斑有り
ヘラ削り	ヘラナデ	橙	不良	砂粒 雲母含	
口一横ナデ 胴一ヘラ削り	ヘラ磨キ	橙	良好	砂粒 石英含 雲母含	
口一横ナデ 体一ヘラ削り	ヘラ磨キ	橙		砂粒 スコリア含	
口一ヘラ磨キ 胴一ヘラ削り	ヘラ磨キ	橙	良好	砂粒含	ほぼ完形
口一ハケ目整形 後ナデ 胴一ヘラ削り	ナデ	橙	普通	砂粒含	

番号	種類	法 量 (口徑×器高×底径) $\text{mm} \times \text{mm} \times \text{mm}$	最大径	器形の特徴
15	碗 (土師)	12.3×7.0 × —	口辺部	口縁部は外反気味に内傾し、口唇部がやや外傾する。口唇部は丸い。体部はやや歪んだ半球状を呈する。
16	碗 (土師)	13.3×7.5 × —	口縁部	口縁部は僅かに内傾するが、ほぼ直立。口唇部はやや尖る。体部は大きく内傾し偏平な丸底である。
17	杯 (土師)	15.5×5.3 × —	口縁部	底部から体部下位にかけては内傾ぎみに立ち上がり、口縁にかけてはほぼ直線的に外反する。
18	杯 (土師)	13.0×5.0 × —	口縁部	口縁部は外反し、中位から内傾ぎみに外傾し、口唇部内面に僅かな棱をもって直立する。体部とは、僅かな棱で区分される。
19	杯 (土師)	13.4×6.1 × —	口縁部	口縁部は直線的に開き、体部は弧状を呈する。口唇部と体部の境は段を有する。
20	杯 (土師)	14.3×6.3 × —	口縁部	口縁部は大きく外反し、体部との境に棱をもつ。体部は弧状を呈す。
21	杯 (土師)	13.6×4.7 × —	口縁部	口縁部はやや外反し、体部との境に棱をもつ。体部は浅く、直線的である。
22	杯 (土師)	13.0×4.2 × —	口縁部	口縁部は外反し、口唇部附近でさらに外傾する。体部と口縁部の境に棱をもち、体部は浅い弧状を呈す。
23	杯 (土師)	13.4×4.5 × —	口縁部	口縁部は直線的に外反し、口唇部は尖がる。体部との境には棱を有し、体部は浅い弧状を呈す。
24	杯 (土師)	14.8×4.7 × —	口縁部	口縁部は直線的に外傾し、口唇部はやや尖がる。口縁部と体部との境に棱をもつ。体部は弧状を呈す。
25	杯 (土師)	14.4×5.0 × —	口縁部	体部と口縁部の境に僅かな棱をもち、口縁部は直線的に開き、体部は緩やかに内傾して丸底の底部に至る。
26	杯 (土師)	15.3×5.0 × —	口縁部	口縁部は体部との境に棱を有し、ほぼ直線的に外反して立ち上がり。体部は緩やかに内傾する。
27	杯 (土師)	16.6×4.5 × —	口縁部	体部と口縁部の境に僅かな棱を有し、口縁は緩やかに外反しながら立ち上がり、腹部附近で棱を有する。体部は偏平な弧状を呈す。
28	杯 (土師)	12.3×4.2 × —	口縁部	口縁部は直線的に開いた後、口唇部近くでやや内傾する。体部は浅く、偏平である。
29	杯 (土師)	14.2×5.0 × —	口縁部	口縁部はやや外反した後、中位下からわずかに内傾し、尖がった口唇部に至る。口縁部と体部の境に棱をもち、体部は弧状を呈す。
30	杯 (土師)	14.2×4.6 × —	口縁部	口縁部はやや強く外反し、体部との境で棱をもち、体部は極めて偏平な弧状を呈す。
31	杯 (土師)	14.7×4.2 × —	口縁部	体部は偏平、体部に比して口縁部が発達し、大きく外反する。体部と口縁部の境に棱を有する。
32	杯 (土師)	14.0×4.5 × —	口縁部	口縁部は外反して立ち上がり、口唇部は尖る。体部は極めて浅く偏平である。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 表	内 表				
口一横ナデ 削一ヘラ削り	ヘラ磨キ	橙	やや不良	砂 粒 石英 雲母含	
ケズリ後ナデ	粗ナデ	にぶい褐	普 通	砂 粒 長石含	
ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	明赤褐	良 好	砂 粒 雲母 スコリア含	ほぼ完形
口一横ナデ 削一ヘラ削り	ヘラ磨キ	明赤褐	良 好	砂 粒 長石含	
口一ヘラナデ 底一ヘラ削りの 後ヘラナデ	ヘラ磨キ	赤 褐	良 好	砂粒・石英 雲母(黒)含	
口一ヘラ磨キ 底一ヘラ削り	ヘラ磨キ	明赤褐	不 良	砂 粒 雲母含	
口一横ナデ 底一ヘラ削り	ヘラ磨キ	橙	普 通	砂粒含	
口一ヘラ磨キ 削一ヘラ削り	ヘラ磨キ	明赤褐	普 通	砂粒含	
口一横ナデ 削一ヘラ削り	ヘラ磨キ	明赤褐	普 通	砂粒含	
口一ヘラ磨キ 底一ヘラ削り	ヘラ磨キ	橙	良 好	砂粒含	完形
口一横ナデ 底一ヘラ削り	ヘラ磨キ	にぶい黄橙 底部一黒	良 好	砂粒含	
口一横ナデ 削一ヘラ削り	ヘラ磨キ	明赤褐	普 通	砂粒含	
口一横ナデ 削一ヘラ削り	口一横ナデ 削一ヘラ磨キ	橙	良 好	砂粒含	
口一横ナデ 底一ヘラ削り	ヘラ磨キ	明赤褐	やや不良	砂粒含	
口一横ナデ 底一ヘラ削り	ヘラ磨キ	明赤褐	良 好	砂粒含	完形
口一横ナデ 削一ヘラ削り	ヘラ磨キ	赤褐	やや不良	砂 粒 長石等含	
口- 指ナデ 底一ヘラ削り	ヘラ磨キ	赤	良 好	砂粒含	
口一横ナデ 底一ヘラ削り	ヘラ磨キ	明赤褐	普 通	砂 粒 長石等含	

番号	種類	法量 (口径×器高×底径) cm cm cm	最大径	器形の特徴
33	环 (土師)	15.4×5.4 ×—	口縁部	体部と口縁部の境は突出し、段を有し、やや偏平な体部の割には口縁が長く、大きく外反する。
34	环 (土師)	14.3×4.4 ×—	口縁部	口縁部は一度直立気味に立ち上がってから、直線的に外反し、口唇部は尖る。口縁部と体部の境に棱をもつ。体部は浅く偏平である。
35	环 (土師)	14.0×4.5 ×—	口縁部	口縁部は直線的に大きく開き、体部は浅い弧状を呈する。
36	环 (土師)	14.9×4.6 ×	口縁部	口縁はほぼ直線的に開き、体部との境に棱をもち、体部は緩やかに内傾して浅い弧状となる。
37	环 (土師)	13.3 ×— ×—	口縁部	口縁部は、体部との境に僅かな棱をもち直線的に外反する。口唇部は劣がる。
38	环 (土師)	14.2×4.0 ×—	口縁部	口縁部は外反し、体部との境は棱を有し、体部は偏平な弧状を呈する。
39	环 (土師)	14.8×4.6 ×—	口縁部	口縁部は瓶部から一度直立してから直線的に外傾する。体部との境に棱を有し、体部は浅い弧状。
40	环 (土師)	12.4×4.9 ×—	口縁部	体部は、外曲に僅かな棱を作り出し、ほぼ直線的に立ち上がり、瓶部でやや内傾気味となる。底部は偏平な弧状である。
41	环 (土師)	10.4×5.1 ×—	口縁部	口縁部は一度直立してから直線的に外傾し、体部は直線的に内傾して、平坦な底部となる。
42	环 (土師)	12.2×3.2 ×—	口縁部	口縁部は、垂直に立ち上がり、口唇部は薄く尖っている。体部は極めて浅く、平底氣味である。
43	环 (土師)	11.8×5.3 ×—	口縁部	口縁部は、直線的に内傾し、口唇部は尖る。体部はやや深みのある弧状。
44	椭 (土師)	10.4×4.7 ×—	口縫部	口縫部は外反しながら強く内傾して、中位からさらに外反。体部との境に明瞭な棱をもつ。体部は偏平な弧状。
45	高 环 (土師)	—×— × 13.4		脚部は円柱状で、瓶部はゆるやかに丸味を帯びて広がる。
46	高 环 (土師)	—×— × 10.7		脚部は低く、瓶部は大きく開き、瓶部は薄く尖る。
47	高 环 (土師)	—×— × 12.0 (瓶部径)		脚部はわずかな柱状部から直線的に大きく外反してのびる。
48	器 台 (土師)	7.0 ×— ×— 受部孔径 1.1 円窓径 0.9		受部は直線的に外上方へ開き、脚部も「く」の字に括れた接合部から直線的に外下方へ開き、内窓 3ヶ所穿っている。
49	砥 石	長 幅 9.95×5.6		表面及び両側面とも使用されている。上端はほぼ原形。原形は長方体と考えられる。
50	手 捧 瓷 (土師)	5.0×2.3(左) 2.7(右) ×—	口縁部	平底部から口縁部にかけてやや内傾しながら立ち上がる。

第一十六号住居址(図45)
(1)
(2)
(3)

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
ヘラ削り	ヘラ磨キ	赤褐	普通	砂粒含	
口一横ナダ 刷一ヘラ削り	ヘラ磨キ	棕	良 好	砂粒含	完形
口一横ナダ 刷一ヘラ削り	ヘラ磨キ	棕	不 良	砂 粒 スコリア 雲母含	完形
口一横ナダ 刷一ヘラ削り	ヘラ磨キ	明赤褐	普 通	砂 粒 スコリア含	
口一横ナダ 底一ヘラナダ	ヘラ磨キ	明赤褐	普 通	砂粒含	
口一ヘラ磨キ 刷一ヘラ削り	ヘラ磨キ	明赤褐	良 好	砂粒含	
刷一ヘラ削り 刷一ヘラ磨キ	口一ヘラ磨キ	明赤褐	普 通	砂粒含	
口一ヘラ磨キ 底一ヘラ削り	口一所によりヘ ラ磨キ 横ナダ 底一ヘラ磨キ	明赤褐	普 通	砂 粒 雲母 スコリア 長石含	ほぼ完形
ヘラ磨キ 底の一部ヘラ削 り	ヘラ磨キ	明赤褐	普 通	砂 粒 長石含	
口一横ナダ 底一ヘラ削り	口一横ナダ 底一ナダ	赤褐	普 通	砂 粒 雲母 石英含	
口一横ナダ ヘラナダ	ヘラ磨キ	灰赤 赤黒	普 通	砂 粒 長石含	
口一ヘラ磨キ 刷一ヘラ削り	ヘラ磨キ	明赤褐	普 通	砂 粒 雲母含	ほぼ完形
ヘラ磨キ	ナダ	明赤褐	良 好	砂粒含	
ヘラ削り 底一指ナダ	ヘラ磨キ	明赤褐	やや不良	砂粒含	
ヘラ削り	指ナダ	明褐	普 通	砂 粒 雲母含	
受部一ナダ 脚部一ヘラ磨キ	受部一横ナダ 脚部一ナダ	にぶい黄橙	普 通	砂 粒 スコリア 雲母含	
指ナダ	指ナダ	にぶい黄橙	不 良	砂 粒 長石含	完形

	番号	種類	法規 (口径×器高×底径) mm	最大径	器形の特徴
第一上六号住居址	51	手捏ね (土師)	4.5×2.8 × — 2.4	口縁部	平底部から口縁部にかけて、ほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、口唇部は薄く実る。
	52	手捏ね (土師)	6.1×3.3 × —	口縁部	体部は緩やかに外傾する。
	53	手捏ね (土師)	— × 2.9×4.2		底部は上げ底となり、やや厚みのある底部から隠手の胸部がわずかに内傾して立ち上がる。
	54	塔 (土師)	— × — × 2.0		底部から緩やかに内傾しながら頸部に至り、頸部はほぼ直線的に外反する。底部は上げ底。器厚は一定して薄い。
	55	鉄器	長径 7.95×1.5, 1.0		柱状を呈し、下端に向かって細くなる。先端は細くなるが、端部はやや丸味を帯びる。頭部は平坦に近い。
第二五三(1)号住居址	1	瓶 (土師)	20.1 × — × —	口縁部	体部はわずかな内傾で、外上方へ大きく開き、口縁部は折り返し口縁。口縁内側は凸凹有り。
	1	甕 (土師)	17.9×29.0×8.5	胴部	底部から頸部にかけて内傾し、頸部中位はやや直線的で、頸部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がり、口縁部の上位でやや外反し、口唇部は丸い。
	2	甕 (土師)	14.8 × — × —		口縁部は僅かに外反し、頸部はあまり張らない。器厚は一定である。
第三五三(2)号住居址	3	甕 (土師)	17.6 × — × —		口縁部は、頸部から一度やや外反気味に立ち上がり、さらに大きく外反する。頸部は頸部から直線的に膨らむ。
	4	甕 (土師)	17.0 × — × —		頸部は直角に近く括れ、内面に稜をもち、ほぼ垂直気味に立ち上がる。口縁部はやや外反し、口唇部近くで一束の凹線を廻らす。口唇部は丸い。
	5	甕 (土師)	15.8×26.5 × —		底部は欠損しており、頸部中位は垂直ぎみに、上位は内傾し、頸部から口縁部にかけて垂直ぎみに立ち上がり、口縁部上位から口唇部にかけて外反する。
	6	甕 (土師)	22.0×21.0 × —	頸部中位下	頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部はわずかに外反するが、中位でさらに外傾する。口唇部は丸い。頸部は中位下で最大性をもち、下ぶくれとなる。
	7	甕 (土師)	16.6 × — × —		頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は平坦である。
	8	甕 (土師)	14.8 × — × —		頸部は「く」の字に括れ、口縁部は緩やかに外反する。口縁上位外側に僅かな凹線を廻らす。胴部は強く張り出し、器肉は厚い。
	9	甕 (土師)	23.5 × — × —		頸部はほとんど括れず、口縁部は外反して立ち上がり、上位でさらに外反する。口唇部は丸い。
	10	甕 (土師)	— × — × 7.2		平底で、胴部は緩やかに大きく内傾して立ち上がる。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
指ナデ	指ナデ	にぶい黄橙	不 良	砂粒等 石英含	
指ナデ	指ナデ	にぶい黄橙	不 良	砂 粒 長石含	
指ナデ	指ナデ	にぶい橙	良 好	砂 粒 長石含	
ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	赤褐	やや不良	砂 粒 石 長石含	ほぼ完形
口一指頭圧痕 削 ヘラナデ	口一指頭圧痕 削一ヘラナデ	橙	不 良	砂粒含	
口一横ナデ 削一ナデ	口一横ナデ 削一ナデ	にぶい黄橙	良 好	砂 粒 長石 母含	完形
口一指ナデ 削一ヘラ削り	口一指ナデ 削一ヘラナデ 輪積痕残る	にぶい橙	普 通	砂 粒 石 英 スコリア含	
口一指ナデ 削一ヘラ削り	ヘラナデ	にぶい黄橙	普 通	砂粒含	
口一指ナデ 削一ヘラ削り	口一指ナデ 削一ヘラ削り	にぶい褐	やや不良	砂 粒 石 長石 石英等含	
口縫部一横ナデ 削一ナデ	口縫部一横ナデ 削一ナデ	橙	良 好	砂 粒 砂粒含	
口一縫ヘラ削り 削一ヘラ削り	口一ヘラナデ	にぶい橙	普 通	砂 粒 石母(少)含	
口一指ナデ 削一ヘラ削り	口一指ナデ 削一ヘラナデ	にぶい橙	良 好	石 英 スコリア 長石含	
口一指ナデ 削一ヘラナデ	口一指ナデ 削一ヘラナデ	黄褐	やや不良	砂 粒 長石含	
口一指ナデ 削一ヘラナデ	ヘラ磨キ	橙	普 通	砂 粒 長石含	
削一ヘラ削り後 磨キ 底 ヘラ削り		赤	やや不良	砂 粒 長石 石母含	

番号	種類	法量 (口径×器高×底径) mm	最大径	器形の特徴
11	壺 (土師)	— × — × 9.1		平底で、胴部は緩やかに内側して立ち上がる。
12	壺 (土師)	11.1 × — × —	胴部中位	口縁部は僅かに内側して立ち上がり、口唇部近くで直立し、口唇部は尖る。胴部はやや偏平な球状を呈する。
13	小型壺 (土師)	10.6 × 15.7 × 7.5	肩部	底部はやや突出し、胴部はあまり張らない。口縁部は内傾し、口唇部はやや尖る。
14	壺 (土師)	18.8 × 14.5 × 5.8 孔径 3.4	口縁部	底部中央に孔を有し、体部は緩やかに内側して立ち上がり、口縁部は直線的に広がって、口唇部はやや外傾し、外面にわずかな棱をもつ。
15	壺 (土師)	12.0 × 8.5 × 4.8	体部上位	口縁部は短かく、ほぼ直立し、口唇部は丸い。体部は上位で張り、緩やかに内側して底部に至る。平底である。
16	壺 (土師)	14.3 × 5.0 × —	口縁部	口縁部はほぼ直線的に外反し、口唇部はやや尖る。体部は浅く、弧状を呈する。体部と口縁部との境に棱をもつ。
17	壺 (土師)	10.8 × 5.8 × —	口縁部	体部は弧状を呈し、口縁部は内側する。口縁部のみ垂みがある。
18	壺 (土師)	13.4 × 5.0 × —	口縁部	口縁部は垂直気味に立ち上がってから中位で外反し、体部との境に棱をもつ。体部は弧状を呈する。
19	壺 (土師)	14.0 × 4.9 × —	口縁部	口縁部は垂直に立ち上がり、口唇部はやや外傾する。体部は弧状を呈する。
20	壺 (土師)	15.9 × 5.7 × —	口縁部	口縁部と体部との境が不明瞭で、口縁部はやや強く外反する。体部は弧状を呈する。
21	高壺 (土師)	13.2 × 10.4 × 8.8	口縁部	体部は弧状を呈し、口縁部はやや外反して口唇部は丸い。脚柱部は垂みのある円柱状を呈し、底部は緩やかに開く。
22	鉄鑄 (鉄製品)	長幅 11.3 × 0.45, 0.6		断面は正方形で、途中から段をつけて細くなる。上・下とも欠損しており、形態は不明。
23	刀子 (鉄製品)	長刃幅柄幅 6.05 × 1.1 × 0.65		刃部、背部ともサビが著しく、形態は明確ではないが、刀子状と看られる。
1	壺 (土師)	19.8 × 25.3 × 9.4	胴部中位下	頸部は「く」の字に括れ、口縁部は外反し、口唇部でさらに外傾する。胴部はゆるやかに膨らみ、やや下ぶくれ氣味で平底に至る。
2	壺 (土師)	17.0 × 10.3 × —		頸部はゆるやかに括れ、区切りなく外反して口縁部となり、口唇部近くでさらには外傾する。胴部は留厚をやや減じて、なだらかに膨らむ。
3	壺 (土師)	19.6 × — × —		頸部はほぼ直立し、口縁部は緩やかに外反するが、口唇部近くでやや外傾している。口唇部は平坦である。
4	壺 (土師)	23.0 × — × —		口縁部は僅かに外反し、口唇部近くできらに外反する。口唇部はやや尖る。

第三十五分作原址(國53)(1)(2)

第三十六分作居址(國56)(1)(2)

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
ヘラ磨キ 輪削痕	ヘラ磨キ	外面一赤褐色 内面一橙	普通	砂 磨 長 石 スコリア含	
ヘラ磨キ	口一ヘラ磨キ 刷一ナダ	赤	良 好	砂粒含	
口一横ナダ ヘラナダ	口一横ナダ ヘラナダ	にぶい黄橙	普 通	砂 粒 石 英 長 石 スコリア含	成形不良 ほぼ完形
口一横ナダ 刷一ヘラ削り	口一横ナダ 刷一ナダ	にぶい橙	良 好	砂粒含	完形
口一指ナダ 刷一ヘラナダ	ヘラ磨キ	赤褐色	普 通	砂粒含	
口一横ナダ 刷一ヘラ削り	ヘラ磨キ	橙	良 好	砂粒含	
口一指ナダ 刷一指ナダ	口一指ナダ	明赤褐色	不 良	砂 粒 スコリア 雲 母 長 石含	ほぼ完形
口一横ナダ ヘラ削り	口一横ナダ ヘラ磨キ	明赤褐色	良 好	砂粒含	ほぼ完形
口一指ナダ ヘラ削り	ヘラナダ	橙	不 良	砂 粒 雲母含	ほぼ完形
ヘラナダ	ヘラ磨キ	暗赤褐色	良 好	石 英 砂 粒 雲母含	
口一指ナダ ヘラ削り 脚一縦ヘラ削り 端一指ナダ	環一指ナダ 刷一指ナダ	浅黄橙	良 好	砂粒含	
					サビが著しい
					サビが著しい
口一横ナダ 刷一ハケ目後ナダ	口一摩滅 刷一ナダ	橙	普 通	砂 粒 長 石 雲母(黒)含	
口一指ナダ 刷一ヘラ削り	口一指ナダ 刷一摩滅が激しい	明赤褐色	不 良	砂れき 雲母(少)含	
ヘラ削り ヘラナダ	口縫一指ナダ ヘラナダ 輪削痕			砂 磨 スコリア 雲母・長石 石英含	
指ナダ	指ナダ	にぶい橙	やや不良	砂 粒 雲 母 スコリア	

番号	種類	法量 (口徑×高さ×底径) mm	最大径	器形の特徴
5	瓶 (土師)	— × × 6.0		底部は中央に孔を有し、胴部はやや直線的に内傾する。
6	甕 (土師)	19.2×30.0×6.2	胴部中位	頸部はほぼ直立し、口縁部はやや外反する。口唇部は平坦である。胴部は最大径をもつ中位に向かって張り、胴長である。平底。
7	瓶 (土師)	24.0×21.8×6.6	口縁部	口縁部はやや外反し、口縁部は丸い。体部は直線的に内傾する。
8	杯 (土師)	12.8×5.2 ×—	口縁部	口縁部は体部と区切れなく、口縁はわずかに外反し、体部は扁平な弧状の底部から直線的に立ち上がる。
9	杯 (土師)	14.0×5.9 ×	口縁部	口縁部は直線的に開き、体部は半球状を呈する。
10	杯 (土師)	13.0×5.0 ×—	口縁部	口縁部は直線的に外傾し、口唇部は丸い。体部との境に棱を有し、体部は浅い弧状を呈する。
11	杯 (土師)	13.3×4.6 ×—	口縁部	口縁部は外反し、口唇部は尖る。体部との境に棱を有し、体部は浅い弧状を呈する。
12	碗 (土師)	14.0×7.9 ×	体部中位	口縁部は器厚を増して直立し、端部に向かって器厚を減じ、先端は丸い。頸部は器厚を減じて内傾しておあり、体部は張り出してもから浅い弧状となる。頸部外面には棱をもつ。
13	桶 (土師)	13.4 × — × —		口縁部は短かく、僅かに外反する。体部は丸味をもった球状を呈するものと思われる。器厚は薄く、一定している。
14	高 16 (土師)	17.8×14.6×13.3	口縁部	口縁部は大きく外反し、なだらかに内傾して底部に至る。体部と口縁部との境を有する。底部は杯底部からなるやかに外反して下方へのび、器部は平坦で大きく広がる。
15	手 捺ね (土師)	4.3×2.5×—	口縁部	口縁部は平底から内傾して立ち上がる。器厚は底部から口唇部に向かって序々に器厚を減じて、口唇部はやや尖る。
16	手 捺ね (土師)	— × — × 2.8	口縁部	平底からわざかに内傾して立ち上がりて口縁部に至り、一度括れてから外反する。器厚は底部から序々に減じる。胴部器厚は薄手である。
17	手 捺ね (土師)	4.4×2.5×3.7	口縁部	平底で、体部はほぼ直立する。口唇部は尖る。
18	手 捺ね (土師)	4.6×1.7×3.8	口縁部	口縁部は外反し、口唇部は尖る。胴部と底部の境は、外面は明瞭で内面はゆるい内壁で不明瞭。平底。
19	手 捺ね (土師)	4.8×2.1×4.3	口縁部	平底からほぼ直立して口縁部となり、口唇部はやや尖る。胴部と底部との境は外側は明瞭で、内側はゆるい内壁を呈し、不明瞭。器厚は底部で厚く、口唇部に向かって序々に減じる。
20	手 捺ね (土師)	5.3×2.6×4.5	口縁部	平底からやや外傾して立ち上がり、口縁部となる。口唇部は丸味を帯びる。底部と胴部の境は、外面で明瞭であり、内面は内傾して立ち上がり、不明瞭。器厚は底部中央でやや薄くなる。

第三十六分作房場一圖
56
(1)
(2)

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 表	内 表				
ヘラ磨キ	ヘラ削り	赤	不良	砂粒 雲母含	
ロ一指ナデ ヘラナデ	ロ一指ナデ ヘラナデ	にぶい黄橙	不良	砂粒 スコリア 長石 石英含	
ヘラナデ(粗)	ヘラ磨キ(粗)	橙	普通	砂粒含	ほぼ完形
ロ一ヘラ磨キ 胴一ヘラ削り	磨滅で不明		普通	砂粒 長石含	
ロ一ヘラ磨キ 底一ヘラ削りの 後ナデ	ヘラ磨キ	にぶい橙	良 好	砂粒含	
ロ一指ナデ 底一ヘラ削り	ヘラ磨キ	明赤褐	不良	砂粒 雲母 長石含	
ロ一ヘラ磨キ 胴一ヘラ削り	ヘラ磨キ	明赤褐	不 良	砂粒 長石含	
ヘラナデ	ロ一ヘラ磨キ ヘラ削り	橙	良 好	砂粒 雲母含	完形
ヘラ削り	ナデ	橙	普通	砂粒 雲母 長石含	
ロ一指ナデ 以下ヘラナデ 脚部一ヘラ削り 襟部一ヘラ削り	脚部一ヘラ磨キ 胴部一ヘラナデ	橙	普通	砂粒含	
指頭压痕	指頭压痕	赤褐	良 好	砂粒 雲母含	ほぼ完形
指ナデ	指頭压痕	にぶい橙	不 良	砂粒含	
指頭压痕	指頭压痕	橙	不 良	砂粒含	ほぼ完形
指ナデ	指頭压痕	にぶい赤褐	良 好		ほぼ完形
指ナデ	指ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	完形
指ナデ	指ナデ	明赤褐	普通	砂粒含	完形

番号	種類	法量 (口径×高さ×底径) mm	最大径	器形の特徴
第二十六号住居址(國56) (1)・ (2)	手捏ね (土師)	5.2×2.2×4.5	口縁部	平底からやや外傾して立ち上がりの口縁。器厚は底部が最も厚く、口縁部に向かって徐々に薄くなり、口軽部でやや尖る。
	手捏ね (土師)	4.8×2.5×3.8	口縁部	平底からやや外傾して立ち上がり、口縁部となる。底部と胴部の境は外側で明瞭であり、内面は内擣して不明瞭。器厚は口軽部に向かって徐々に薄くなり、口軽部でやや尖る。
	手捏ね (土師)	5.1×2.0×4.5	口縁部	平底から内擣して立ち上がり、口縁部となる。器厚は底部で薄く、胴部との境で厚くなり、胴部から口縁部に向かって薄くなる。底部と胴部の境は外側で明瞭であり、内面は内擣してあり、不明瞭。口縁部は不整形で波状を呈す。
	手捏ね (土師)	6.4×3.0×5.0	口縁部	平底から内擣して立ち上がり、口縁部に至る。器厚はほぼ一定で、口縁部は丸い。胴部と底部の境は、外側で明瞭であるが、内側はやや不明瞭。口縁部は不整形のため波状を呈す。
	手捏ね (土師)	5.5×3.5×5.0	口縁部	平底からほぼ直立して口縁部に平ら。器厚は底部で厚く、口縁部に向かって徐々に薄くなり、口縁部は丸い。底部と胴部の境は、外側で明瞭、内面では内擣して不明瞭。
	紡錘車 (弥生)	径 3/4 5.05×1.65		円みのある円板状で中央に孔を有す。側面は丸味をもつ。表・裏・側面とも刺突文を施しているが、表・裏面は円形に4条刺突、側面は円周に沿って2条前後施文している。
	勾玉 (石製模造品)	長幅 厚 3.05×1.65×0.65		板状で、表・裏・側縁とも成形のための擦痕が明瞭。
第二十七号・二十八号住居址(國58)	壺 (土師)	17.9×—×—		口縁部は「S」字状を呈し、胴部はやや直線的に広がり、胴部中位あたりからやや内擣。
	壺 (土師)	—×—×20.4		筒抜けの底部で、胴部は直線的である。
	壺 (土師)	20.2×—×		口縁部は「S」字状を呈し、胴部は頭部から直線的に下方へ広がる。
	环 (土師)	13.9×—×—	口縁部	体部は僅かに内擣し、口軽部は丸い。平底である。
	环 (須恵)	13.7×4.8×6.4		体部は僅かに内擣気味に直線的に外方へ大きく開く。 口縁部は僅かに外反し、端部はほぼ丸く取めている。 底・体部の境は内外面とも丸味を有す。
	环 (須恵)	14.0×4.5×7.0	口縁部	底部から丸味をもって体部へ移行し、内擣気味に大きく外方へ開く。口縁部は削きが若干小さくなるが、やや外反し端部に至る。
	高台付环 (土師)	16.0×5.7×—	口縁部	体部は僅かに内擣して立ち上がり、口軽部近くで器肉が厚くなり、やや外傾する。口軽部は丸い。体部と高台の境は丸味を有し外反している。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
指ナデ	指頭圧痕	褐灰	良 好	砂長石含 數	完形
指ナデ	指ナデ	明赤褐	普 通	砂粒含	ほぼ完形
指ナデ	指ナデ	棕	普 通	砂粒含	完形
指ナデ	指ナデ	にぶい棕	普 通	砂粒含	完形
指ナデ	指ナデ	にぶい褐	普 通	砂粒含	ほぼ完形
		褐	普 通	砂粒含	土製
口 指ナデ 胸一ヘラ削り	口一指ナデ 胸一ヘラ小デ	にぶい棕	普 通	砂 母 長 石 スコリア含	
上部 ヘラナデ 下部一ヘラ削り	ヘラナデ	棕	普 通	砂 母 長 石 雲母含	
口一指ナデ 胸一ヘラ削り	口一指ナデ 胸一ヘラナラ	にぶい棕	良 好	砂 母 スコリア 長 石 英 長石含	
ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい赤褐	普 通	砂粒含	
底一回転ヘラ削 り後、外周部 をナデ			不 良	長石粒 細砂粒含	水抜き痕弱い 上師質須原器 ヘラ記号有り
底一回転ヘラ切 り後鍼なナデ 体一下半水焼き 痕強	底・体部境一ア チが認められる が丸みを持つ	灰白	普 通	長石粒 細砂粒含	ヘラ記号有り
ミズビキ痕	ミズビキ痕	にぶい赤褐	普 通	砂 母 含	

	番号	種類	法 量 (口徑×器高×底径) cm	最大径	器形の特徴
	8	环 (須恵)	13.8×4.8×7.1	II 緑部	体部は内縛気味に外上方へ立ち上がる。口縁部はやや外反し、端部は丸く取めている。内面一底・体部との境が不明瞭。
第四十号 居住址(國 社)61	1	高台付环 (須恵)	14.1×5.6×7.5	II 緑部	体部はわずかに外反しつつ外上方へのびる端部は厚く、丸く取めている。体部と底部との境は紐曲し棱を有す。高台は底部から直ぐに下がり、端部が厚く丸味をもつ。
	2	刀子 (銅製品)	長 刀部 ナカゴ 4.3×1.05×0.75		刃部及びナカゴと看られる。刃部は先端を欠いている。
	1	高台付环 (須恵)	14.0×5.3×9.0	口 緑部	体部は大きく外方へ開いた後棱を有し、大きくなっている。外上方へ外縛気味に立ち上がる。端部は若干外反気味でII特は丸く取めている。高台有り。
第二四四 号(國 社)64	1	盤 (土師)	× × 10.2		平底で、武部は突出している。内縁で脇部との境は多面で内縛カーブ。内面はゆるやかな内縛を示す。
	2	环 (須恵)	14.4×4.4×6.5	口 緑部	丸味をもって底部から体部へ移るが、体部中央部で器厚が厚く、ほぼ直線的に外方へ立ち上がる。II縫端部はやや難い。
	3	环 (須恵)	11.3×3.6×6.7	II 緑部	平底で、体部は直線的に外上方へのびている。II縫端部外縁に棱を有し、端部はやや尖る。
第四十一 号住居址(國 社)66	4	环 (須恵)	13.1×4.9×5.8	II 緑部	体部は器厚を減じながら、ほぼ直線的に外方へ大きく開く。口縁部はやや外反し端部に至る。
	5	蓋 (須恵)	16.9×4.15 × -	II 緑部	口縁部は、わずかに内縛気味に外下方へのび、端部は丸く取めている。天井部中央に偏平なフタミを有す。内側に返りの退化した短かい突出。
	6	蓋 (須恵)	15.9×3.85 × -	II 緑部	やや内縛気味に外下方へ伸びる。II縫端部は下方へ屈曲し、棱を有する。先端はやや丸くおさめている。偏平な擬宝珠状つまみ。ロクロ
第四十二 号住居址 國 社)67	1	皿 (土師)	10.0×3.0×5.7	II 緑部	体部は僅かに内縛し、II縫部近くで直立する。II特部は平坦である。
	2	皿 (土師)	9.4×2.4×4.3	口 緑部	平底であり、体部は緩やかに内縛しながら立ち上がる。底部器厚は薄く、口縁部はやや深くなる。
	3	皿 (土師)	9.8×1.9×5.0	II 緑部	平底であり、体部下位でややふくらんだ後、直線的に広がり、II縫部近くでやや外傾する。
第四十三 号住居址 國 社)68	4	皿 (土師)	10.4×2.0×5.5	II 緑部	体部は僅かに内縛し、口縁部は器厚を増し、丸味をもつ。底部は上げ底である。
	5	皿 (土師)	10.3×2.5×5.0	口 緑部	平底部はやや凸凹で、体部は若干内縛し、II縫部近くから直線的になり、II縫部は平坦である。器厚は薄手。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
底一輪を回転ヘラ切りのまま		オリーブ灰	不 良	長石粒少含 長石粒細砂粒(多) 含	水焼き痕弱 土師質須恵
体部と底部との境と高台外輪部は焼成後研磨 底一回転ヘラ削り	内面から口唇部にかけては、ナゲている		良 好		
					サビが著しい
底一回転ヘラ削り		オリーブ灰	良 好	石英 長石 砂粒含	ヘラ記号有り
底一本革直 ヘラ削り	ヘラ削り	灰黄褐	不 良	砂 粒 母含	
底一回転ヘラ削り	底一本挽き機 体部と底部との境はアテが強く残る	灰	良 好	長石粒 細砂粒含 きめ細い	
底一回転ヘラ削り 口一横ナデ 体部との境一回転ヘラ削りで面取り	ロ一横ナデ		良 好	長石・砂粒 及び細砂粒 を含むが精 製されている。	
底一回転ヘラ削り 口一横ナデ	底部と体部との境にアテが強く認められる ロクロ口は弱い		良 好	長石粒等を 含む、小さな黒色斑点 多数認む	
天井部は径11cm に渡り回転ヘラ削り	調整痕不明瞭	灰白	不 良	長石粒 細砂粒含	
天井部は径10cm に渡り、回転ヘラ削り	水焼き痕	灰白	やや不良 甘い	長石粒・青 母含 きめ粗い	
ロクロナデ	内黒	にぶい橙	普 通	砂粒含	内黒
ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい橙			
ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい橙	普 通	砂粒含	
ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい橙	普 通	砂 粒 スコリア 青母含	完形
ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい橙	普 通	砂 粒 スコリア含	完形

	番号	種類	法量 (口幅×高さ×底厚)	最大径	器形の特徴
第四十二号住居址(岡67)	6	皿 (土師)	11.0×1.4×6.0	口縁部	体部は直線的に広がり、口縁部は平出である。底部は上げ底。浅く広がる体部。
	7	高台付环 (土師)	16.1×7.2×8.3	口縁部	体部は内側して立ち上がり、口縁近くで外反して口縁部はさらに外傾し、端部はやや鋸くなる。高台は外下方へ伸び、比較的薄子である。
	8	盃 (須恵)			頸部のみ。器厚を減じながら外反し、外上方へ立ち上がる。頸部中位に2条の浅い凹痕がある。
	9	盤 (須恵)	16.3×3.9×8.8	口縁部	体部は丸味をもつ底部から外反気味に立ち上がり、口縁下で「く」の字に外反し、口縁部は平出である。器高は一定で比較的薄子である。
	10	砥石	長 幅 9.2×3.2		磨ぎ面は中央にゆるく凹み、幅3mm前後の浅い溝状のくぼみがある。
	11	砥石	長 幅 8.7×3.0		10と同一個体であろう。11の磨ぎ面にはなだらかな段があるが、ほぼ平坦に磨かれている。
	1	台付盤 (土師)	-- × -- × 10.7		直線的に開き、器厚は一定で薄い。下端部は平出で内側にかえし有り。
	2	小型环 (土師)	8.6×3.6×3.4	口縁部	先底に近い平出な底部から内側して立ち上がり、体部は外反気味に口縁部に主。器厚は口縁部に向かって減じ、端部は尖る。
	3	高 环 (土師)	断部 × - × 10.5		环部欠損。脚柱部が比較的細く、裾部は直線的に開く、断部に円窓を有する。裾部端にかえし有り。
第四十四号住居址(岡68)	4	広口臺 (須恵)	23.85 × - × -		口縁部のみ。頸部からわざかに外反しながら大きく外上方へ立ち上がり、口縁部に有る。頸部は、3cm程の幅で微隆起線によって区切られた中に9条の横筋による波状文が現る。口縁部は観角に屈曲し、端部は内傾し、下端は鋭く突出する。上部端にちによい接をなす。
	5	広口臺 (須恵)	15.2 × - × -		中型環の口縁部のみ。直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は断面三角形状を呈し、端部は内傾し、下端は鋭く突出する。上端にちによい接をなす。頸部にヘラ状工具による粗い波状文をもつ。
	6	炉 石	長 幅 29.45×7.65		長方形圓形の棒状を呈す。自然縁で加工痕なし。
	7	手 指ね (土師)	2.6×1.7×1.5	口縁部	平底で、器厚は薄く、口縁部は丸い。内面は内側して体部となり、外面は内側した後、口縁部が直立する。
	8	釘 (鉄製品)	長 幅 6.0×0.65		断面がやや角の丸味を帯びる正方形を呈する角柱状。下端に向かって細くなり、下端部は平出である。
	9	砥石	長 幅 厚 5.8×3.8×2.9		下面はほぼ原形をとどめていると思われる。裏、裏面及び側面とも使用。上半部は欠損。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい黄橙	普 通	砂粒含	ほぼ完形
ロクロナデ	ヘラ磨キ 内 黒	外一にぶい黄橙 内一黒	良 好	砂粒含	内黒 ほぼ完形
		灰黃褐	良 好	長石粒 細砂粒含	
回転ヘラ削り 底一回転ヘラ削 り 高台一横ナデ	体・水引き成形 後横ナデ	灰	良 好	石 砂 多 精 粒 含 多 精 製	内面に重ね焼き痕跡有 り 内面外周に自然釉的付 着石引（風化して白色） 泥質
					泥岩
ハケ目	ハケ目	にぶい赤褐	良 好	砂 粒 長 石 石 粉 含	
ナデ	ナデ	にぶい橙	普 通	砂粒含	
脚一ヘラ削り 脚一ハケ目整形 の後ナデ	ハケ目整形	明赤褐	普 通	砂粒含	
黄黒色の自然釉 状のものが全面 に付着			良 好	長石粒 細砂粒含	波状文は現在2段であ るが3・4段である可 能性有り。
		オリ・ブ黒	良 好	長石粒 細砂粒含	
					全面が焼けている。 部分的に煤付着。
ナデ	ナデ	暗赤灰	不 良	砂粒含	ほぼ完形
					曲がっている サビが著しい

番号	種類	法量 (口幅×器高×底径)	最大径	器形の特徴	
				第四十五号住居址(図版69)	第四十七号・四十八号住居址(図版73(1)・(2))
1	壺(身生)	— × — × 9.8	胸部中位上	頸部はほとんど膨らみ、肩部から胸部はなだらかに膨らみ、胸部中位上で最大径となる。ゆるいカーブで平底に至る。頸部上位に無文の粘土帶を貼り付けている。粘土帶にきざみ有り。	
	壺	— × — × 4.2	胸部中位	口縁部は頸部から「く」の字状に直線的に外反し、胸部は扁平な球状であり、やや下ぶくれ気味。平底。	
1	壺(土師)	12.7×13.3×5.0	胸部中位	やや丸味をもつ平底。胸部は横長な球形で、頸部は内傾してから外反気味に直立し、口縁部はさらに外反して口唇部はやや窪くなる。	
2	壺(土師)	14.5×12.9×6.6	口縁部	平底、胸部は丸味をもって膨らみ、頸部は「く」の字にゆるく流れ外反し、口縁部でできさらに外傾する。口唇部は丸い。器底は底部のみ早く、他はほぼ一定。	
3	壺(土師)	26.2×25.0×12.0	口縁部	頸部で器底が薄くなり、口縁部は僅かに外反する。体部は直線的で、中位下から底部にかけて丸味をもつ。肩抜けである。	
4	壺(土師)	11.7×7.1×—	口縁部	体部は半球形を呈す。器底は底部から陥れに厚みを増し、底部で薄くなり、口縁部は比較的厚く、端部は尖る。	
5	壺(土師)	15.0×5.0×—	口縁部	体部は浅い弧状を呈し、口縁部は大きく外反する。頸部外側に棱を有し、内側はなだらかな内壁。器底はほぼ一定し、口縁部に向かって薄くなり、端部は覗くなる。	
6	壺(土師)	14.9×5.4×—	口縁部	体部は浅い弧状を呈し、口縁部は大きく外反する。頸部外側に棱を有し、内側はなだらかな内壁。器底はほぼ一定し、口縁部に向かって薄くなり、端部は覗くなる。	
7	壺(土師)	28.2×—×—	胸部中位上	頸部に比べて口縁部はやや強く外反し、口唇部は丸い。底部は中位で最大径をもつてふくらむ。	
8	壺(土師)	22.7×—×—		頸部はほぼ直立し、口縁部は大きく外反する。口縁部外面に回線が選る。胸部はほとんど膨らまない。	
9	壺(土師)	14.5×—×—		頸部は外反気味に直立し、中位できさらに外反する。口縁部端部は丸い。肩部は直線的に膨らむ。	
10	壺(土師)	15.4×—×—		頸部は「く」の字に傾れ、口縁部は直線的に外傾し、口唇部近くでさらに外反し、端部は丸い。口唇部外面に棱を有す。	
11	壺(土師)	15.8×—×—		肩部で内傾し、頸部はほぼ直立し、口縁部は僅かに外反して、口唇部近くの器底が早く膨らみ、口唇部は丸い。	
12	壺(土師)	20.0×—×—		頸部のみ。頸部は大きく外反し、器底は中位で膨らみ、口唇部に向かって器底を減じるが、端部は丸くしている。	
13	壺(土師)	13.7×5.8×—	口縁部	体部は浅い弧状を呈す、口縁部との境外面に棱を有し、口縁部は外反する。器底は口縁端部に向かい陥れに薄くなり、端部は覗くなる。	

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
頭—4 条帯描文 (縦直線、波状 文)	丁寧なナデ	浅黄橙	普通	砂粒 石英粒含 精緻	胸部に煤が付着
指子文、5 条帯 描文(連弧文) 刷一撫手文					
口—ハケ日後ナ デ	口一横ナデ 刷一ナデ	橙	普通	砂粒含	ほぼ完形
刷一ハケ日後磨 キ					
口一横ナデ 刷一ヘラナデ ナデ	口一横ナデ 刷一ヘラナデ ナデ	にぶい褐	普通	砂粒含	ほぼ完形
口一横ナデ	口一横ナデ 刷一ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
口一横ナデ 刷一ヘラナデ	口一ヘラナデ 刷一ヘラ磨キ	橙	良 好	砂粒 スコリア含	
口一指ナデ 底一ヘラ削り	ヘラミガキ	橙	良 好	砂粒含	
口一指ナデ 底一ヘク削り	ヘク磨キ	橙	不 良	砂粒含	ほぼ完形
口一指ナデ 刷一ヘラ削り	ヘラ磨キ	橙	普 通	砂粒含	
口一横ナデ 刷一ヘラ削り後 ナデ	ナデ	明赤褐	やや不良	砂 長石 雲母含	
口一指ナデ 刷一ヘラ削り	口一指ナデ 刷一ヘラナデ	橙	良 好	砂 雪 母 長石含	
ヘク磨キ	ヘク磨キ	橙	良 好	砂粒含	
口一指ナデ 刷一ヘラナデ	口一指ナデ 刷一ヘラナデ	にぶい橙	やや不良	砂 母 長石含	
口一指ナデ 刷一ヘラナデ	口一指ナデ 刷一ヘラナデ	明赤褐	普 通	砂 母 長石含	
口縁一縦ヘラ削 リの後指ナデ	口縁一指ナデ 刷一ヘラナデ 輪積痕	橙	良 好	砂 母 長石含	
口一横ナデ 底一ヘラ磨キ後 ナデ	ヘラ磨キ	明赤褐	普 通	砂粒含	

	番号	種類	法量 (口径×高さ×底径) cm×cm×cm	最大径 cm	器形の特徴
第四十七号・四十八号住居址(図73)(1)(2)	14	楕(土師)	14.2×6.4×—	口縁部	体部は半球形を呈し、口縁部は外傾する。体部との境内面に棱をもつ。器厚は底部から餘々に厚くなり、境で最厚。口縁端部はやや尖る。
	15	楕(土師)	20.2×8.0×—	口縁部	口縁部は外反し、口唇部は僅かに外傾する。体部は弧状を呈し、口縁部との境に明瞭な棱をもつ。
	16	楕(土師)	14.8×4.2×—	口縁部	口縁部はやや直線的に開き、口唇部は尖る。体部に極めて浅く偏平で、口縁部との境に棱をもつ。
	17	楕(土師)	15.8×4.9×—	口縁部	口縁部は直線的に外傾し、器高は中位で厚く、端部はやや尖る。体部は偏平であざかに弧状を呈す。
	18	楕(土師)	14.7×—×—	口縁部	口縁部は直線的に開き、口唇部は丸い。口縁部と体部との境に明瞭な棱をもち、体部はやや偏平な弧状を呈する。
	19	楕(土師)	13.2×4.7×—	口縁部	口縁部は内擣し。体部は内側端部で偏平、底部はわずかな上げ底状となる。
	20	砥石	長 細 扇 12.3×6.65×6.2		幅3mm、深さ1~2mm前後の溝状のくぼみがあり、板もししくは棒状のものを擦った痕跡と思われる。表・裏面とも中央にゆるやかなくぼみをもつ。全体として船形に近い形状。
	1	皿(土師)	10.8×2.0×6.8	口縁部	底部はわずかな上げ底。体部は直線的に外反し、体部と底部の境は丸味をもつ。器厚はほぼ一定し、口縁端部は丸い。
	2	楕(土師)	13.7×4.1×4.8	口縁部	底部は丸底に近く、体部との境は不明瞭。体部はほぼ直線的に外傾し、口縁端部は平底に近い。器厚は体部中位で若干薄くなる他はほぼ一定。
	3	楕(土師)	13.0×4.5×7.0	口縁部	底部は平底。体部はほぼ直線的に外反し、口縁部でさらりと外反する。体部と底部の境は丸味をもつ。器厚は境が最も厚く他のほぼ一定。口縁端部はやや鋭くなる。
第四十九号住居址(図75)	4	楕(須恵)	13.4×4.5×6.8	口縁部	平底。体部はわずかに内擣しながら上方へ立ち上がる。体部と底部の境は丸味をもつ。底部から口縁部に向かって沿厚を減じ、端部はやや鋭くなる。
	5	蓋(須恵)	26.2×45.5×—	胸部中位上	底部から胸部にかけては丸く、胸部最大径は底部から約前後にあり、肩部はなだらか、底部にはアーブ状の膨張がみられる。胸部から口縁部にかけて丸味をもって移行し、腹部は外反しつつ上方へ伸びる。口縁部は断面三角形状で、端部は丸味をもつ。わずかに内傾する。下端は鋭く、上端はにぶい棱をなす。
第五十号住居址(図78)(1)(2)	1	甕(土師)	16.5×28.0×6.5	胸部中位上	底部は若干上円底となる。胸部はゆるやかに内擣して膨らみ、頸部は「く」の字に括れ。口縁部は外反して、口縁端部は丸い。
	2	甕(土師)	18.2×28.6×7.3		底部から胸部にかけて外反しながら立ち上がり、頸部中位はやや直線的に胸部上位は内擣する。頸部は「く」の字に括れ。口縁部は外反し、端部は丸い。
	3	小型甕(土師)	10.0×10.0×4.5	胸部中位上	底部は平底で胸部は内擣して立ち上がり中位上部で最大径となる。更に内擣して端部となり口縁部は直立する。器厚は口縁中位で厚く口唇部で薄くなりやや尖る。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
口一横ナデ 底一ヘラ削り後 ナデ	ヘラ磨キ	明赤褐	普通	砂粒含 長石含	ほぼ完形
口一指ナデ 体一ヘラ削り	ヘラ磨キ	赤褐	普通	砂粒 長石含	
口一横ナデ 底一ヘラ削り	ヘラ磨キ	赤褐	普通	砂粒 長石含	
口一横ナデ 底 ヘラ削り	ヘラ磨キ	明赤褐	不 良	砂粒含	ほぼ完形
口一横ナデ 底一ヘラナデ	ヘラ磨キ	棕	良 好	砂粒含	ほぼ完形
口一横ナデ 底一ヘラ削り	ヘラ磨キ	明赤褐	良 好	砂粒 長石含	
					砂岩
ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい棕	普 通	砂粒含	
ロクロナデ	内 黑	棕	普 通	砂粒含	内 黑 ほぼ完形
摩滅で不明	内部一内 黑	にぶい棕	不 良	砂 粒 長石含	ほぼ完形 一部焼けている。
ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい黄棕	普 通	砂粒含	完形
刷・底一叩き目 を丁寧に消して いる	叩き目を丁寧に 消している	灰褐	良 好	長石粒 細砂粒 (多)含	
口一指ナデ 刷一ヘラ削り	口一指ナデ 刷一ヘラナデ		普 通	砂 粒 長石含	
刷一ヘラナデ 口一横ナデ	刷一ヘラナデの 後ナデ 口一横ナデ	にぶい赤褐	良 好	砂 粒 長石含	完形
口一横ナデ ヘラナデ	口一横ナデ ヘラナデ	にぶい棕	普 通	砂 粒 長石含	刷一様付着

番号	種類	法量 (口徑×器高×底径) mm	最大径	器形の特徴
4	甕 (土師)	14.4×13.0×6.4	胸部中位上	平底。胸部は、上部に膨らみのある球形で、頸部の括れは少なく、口縁部はやや外反する。口縁部端部に向かって器厚を薄くするが、端部は丸味を帯びる。口縁外面に棱をもつ。
5	甕 (土師)	— × — × 8.3	胸部上位	平底であるがやや丸味をもつ。胸部は横に張る球形。腹部は「く」の字に括れ。口縁部は外反する。
6	甕 (土師)	27.6×23.2×—	口縁部	胸部はほとんど膨らまず、頸部も括れない。口縁部は大きく外反し、口縁端部外面には若干の段を有した隆起部が窺る。
7	甕 (土師)	15.0×—×—	—	頸部は「く」の字に括れ。口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部は丸く収めである。
8	甕 (土師)	19.4×—×—	—	頸部は「く」の字に括れ、口縁部は直線的に外傾し、中位からさらに外反し、端部は丸く収めている。
9	环 (土師)	12.7×5.8×—	体部上位	体部は深みのある弧状を呈し、口縁部内面は直立。外面は器厚を減じ、端部はやや鋸くなる。体部との境に若干の膨らみはあるが棱はみられない。
10	环 (土師)	12.6×5.5×—	体部上位	体部は深みのある弧状を呈す。口縁部直立するが、器厚を外面から内面に向かって減じているため口縁と体部の境はやや突出した感がある。しかし、なだらかで棱はみられない。
11	环 (土師)	11.8×—×—	体部上位	体部は弧状。口縁部は直立し、器厚を外面から口縁部に向かって減じていているため体部との境外面に若干膨らみがあり、棱はみられない。
12	环 (土師)	12.7×6.2×—	体部上位	底部は半球形。口縁部は短かく内傾し、器厚は外側から口縁部に向かって減じ、端部はやや鋸くなっている。体部との境、外面はやや膨らみのある感じであるが棱はみられない。
13	环 (土師)	13.0×5.0×—	体部上位	口縁部、体部の区別は不明瞭。偏平な丸底からやや内側して立ち上がり、直立して口縁部となる。全体に肉厚で、口唇部は平坦に近い。
14	环 (土師)	12.6×5.7×—	体部	底部分中央が若干尖る弧状。体部は強く内側してからやや内側して直立し、口縁端部はごくわずかに内傾し、丸味を帯びている。
15	环 (土師)	12.2×6.2×—	体部上位	体部は半球形を呈するが、若干凹凸がある。口縁部は体部からの丸味のまま内傾し、器厚を薄くして端部はやや尖る。
16	环 (土師)	13.4×5.6×—	体部上位	体部は弧状。口縁部はほぼ直立し、口唇部は丸い。
17	环 (土師)	12.8×5.6×—	口辺部	体部は弧状。口縁部との境は不明瞭であるがやや内傾して、口縁に至ると思われる。
18	环 (土師)	13.3×5.0×—	口縁部	体部は浅い弧状を呈する。口縁部との境は棱を有し、口縁部は外反する。器厚は体部より口縁部が厚く、口唇部に向かってやや薄くなり、端部はやや尖る。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
口一指ナデ 刷一ヘラ削り	口一指ナデ 刷一ナダ	灰褐	普 通	砂粒含	
口一横ナデ 刷一ヘラナデ	口一横ナデ 刷一ナデ	明赤褐	やや不良	砂粒含	
口一指ナデ 刷一ヘラ削り	口一指ナデ 刷一ヘラナデ	にぶい橙	良 好	砂 粒 砂粒含	
口一指ナデ 頬・刷一ハケ目 の後ナデ	口一ヘラナデ 刷一ヘラナデ	黒褐	普 通	雲母 石英 スコリア 長石含	
口一指ナデ ナデ	口一指ナデ ヘラ削り	にぶい橙	良 好	砂 粒 長石含	
口一指ナデ 底一ヘラ削り	口一指ナデ 底一ヘラナデ	にぶい褐	普 通	砂粒含	ほぼ完形
口一横ナデ 底一ヘラ削り	口一横ナデ 底一ナデ	にぶい橙	普 通	砂 粒 長石 石英含	ほぼ完形
口一横ナデ 底一ヘラ削り	口一横ナデ 底一ヘラナデ	にぶい橙	普 通	砂 粒 母 長石含	
口一指ナデ 底一ヘラ削り	口一指ナデ 底一ヘラナデ	にぶい橙	普 通	砂粒含	ほぼ完形
不明	ヘラ磨キ	橙	不 良	砂 粒 長石含	ほぼ完形
口一指ナデ 底一ヘラ削り	口一指ナデ 底一ナデ	にぶい橙	良 好	砂 粒 長石 石英含	
口一横ナデ 底一ヘラ削り	口一横ナデ 底一ナデ	にぶい橙	普 通	砂粒等	
口一横ナデ 刷一ヘラ削り	口一横ナデ 刷一ナデ	にぶい橙	普 通	砂粒含	完形
口一指ナデ 刷一ヘラ削り		橙	普 通	砂粒含	ほぼ完形
口一横ナデ 刷一ヘラ削り	ヘラミガキ	橙	普 通	砂 粒 長石 石英含	

番号	種類	法 量 (口徑×高さ×底径)	最大径	器形の特徴
第五十 号住居址 (図 78 (1) (2))	19 环 (土師)	14.4×5.5×—		体部は浅い弧状。口縁部は外反し、体部の境に棱をもつ。口縁部に向かって器厚を減じ、口唇部は鋸くなる。
	20 环 (土師)	13.8×—×—		口縁部は浅い体部から立ち上り、中位から外反する。器厚は端部に向かって減じ、口唇部は尖る。
	21 环 (土師)	14.0×5.5×—	II 縁部	体部は浅い弧状。口縁部との境、頸部に浅い凹窓が廻る。II縁部は外反し、口唇部は尖る。
	22 环 (土師)	15.0×—×—		体部は偏平な弧状。口縁部との境に棱をもつ。口縁部は外反し、II縁部はやや尖る。
	23 环 (土師)	15.1×4.7×—		体部は浅い弧状。口縁部との境に棱をもつ。口縁部は外反し、II縁部に向かって器厚を減じるが端部はやや丸味をもつ。
	24 环 (土師)	15.7×—×—		体部は浅い弧状を呈し、II縁部との境に棱をもつ。II縁部は外反し、II縁部に向かって徐々に器厚を減じるが端部はやや丸味をもつ。
	25 瓶 (土師)	19.1×13.5×— 底部孔 3.0	II 縁部	頸部は若干内傾しながら外上方へ廻り、頸部をわずかに括る。II縁部は内側のみに外方へ開く。底部中央に孔をもつ。
	26 手 持 ね (土師)	—×—×3.4		平底で、内側して立ち上がる。肉厚。
	27 手 持 ね (土師)	4.7×2.2×3.0	体部上位	平底。内側して短かく立ち上がる体部。II縁部は尖る。
	1 瓶 (土師)	16.1×29.6×6.6	II 縁部	頸部最大径は中位であるが、やや長めで球形を呈さない。II縁部は「く」の字を呈し、わずかに外反ぎみである。II縁部は丸くなる。
第五十一 号住居址 (図 31)	2 瓶 (土師)	16.0×—×—		頸部は直立し、中位からII縁部が外反する。II縁部は肉厚で丸い。
	3 瓶 (土師)	13.6×10.0×5.5	口 迂 部	わずかに内傾ぎみに立ち上がる。
	4 环 (土師)	11.6×5.0×—	II 縁 部	底部からはゆるやかに内傾し、II縁下4cm前後から急角度で内傾しながら立ち上がる。器厚は、立ち上がり部からわずかにつぶくなり、II縁部において薄くなる。
	5 环 (土師)	13.4×5.2×—	口 迂 部	丸底で、ゆるやかに内傾しながらII縁に続く。II縁下に幅5mm前後のココナツによってわずかに棱をつくる。
	6 环 (土师)	13.7×5.3×—		
	7 瓶 (土师)	12.6×6.4×—		II縁下のココナツにより頸部にわずかに棱がみられる。
	8 环 (土师)	15.0×5.3×—	口 縁 部	底部からゆるやかに内傾し、頸部に強いココナツによって棱がつくれ。II縁部で大きく外反する。II縁下は特に外反が大きい。

外 油	内 面	色 調	焼 成	胎 上	備 考
口一指ナデ 底一ヘラ削り	ヘラミガキ (摩減している)	赤	普通	砂粒含	
口一横ナデ 胴一ヘラ削り後 ナデ	ヘラミガキ	橙	普通	砂粒含 長石含	
口一横ナデ ヘラ磨キ	口一横ナデ ヘラ磨キ	赤	普通	砂粒含	
口一横ナデ 底一ヘラ削り	板、ヘラ磨キ	橙	良好	砂粒含	
口一横ナデ 胴一ヘラ削り	ヘラ磨キ	橙	良好	砂粒含	
口一ヘラ磨キ 底一ヘラ削り	ヘラ磨キ (摩減している)	明赤褐	不良	砂粒含	
口一ナデ ヘラ削り	口一ナデ				完形
ナデ	ナデ	にぶい橙	不良	砂粒含	
ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	赤褐	普通	砂粒含	
口一指ナデ後板 ヘラ削り 胴一縦ヘラ削り	口一横ヘラナデ 胴一ヘラナデ	橙		砂粒 長石含	成形普通
口一下から上に ヘラナデ 胴一ヘラ削り	口一指ナデ 胴一ヘラナデ	にぶい赤	良好	砂粒 スコリア含	
ヘラ削り	ヘラナデ	赤	普通	砂粒含	成形不良 ほぼ完形
口一横ナデ 胴一ヘラ削り	口一横ナデ 胴一ヘラ磨キ	明赤褐	良好	砂粒 長石含	
口一横ナデ ヘラ削り	ヘラ磨キ	赤	普通	砂粒含	成形普通
口一横ナデ ヘラ削り	ヘラ磨キ	赤	普通	砂粒含	
口一横ナデ 底一ヘラ削り 沈線アリ	口一横ナデ 底一ナデ 沈線アリ	赤褐	普通	砂粒 スコリア 長石 石英含	完形
口一横ナデ 胴一ヘラ削り	ヘラ磨キ	明赤褐	不良	砂粒含	ほぼ完形

番号	種類	法 量 (口径×器高×底径) <small>mm</small>	最大径	器形の特徴
9	杯 (土師)	12.9×5.4×—	口一横ナデ	立ち上がりは内傾しながら口縁下で外反する。
	杯 (土師)	14.0×7.2×—		底部は丸底で深めの胴部、括れはみられず口縁部は外反し、唇厚は薄くなり、口部は丸い。
1	甕 (土師)	22.7×—×—	胸部中位上	底部からゆるやかに内傾して立ち上がり、肩附近から大きく内傾して頸部に続く。口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、わずかに外反する。口縫部は丸くなる。
2	甕 (土師)	20.3×—×—		口縁部は短く直線的に外傾し、口縫部外側に凹痕が建る。頸部は「く」字に括れ、胴部は直線的ではほとんど膨らまない。
3	杯 (土師)	12.5×3.5×6.2		平底から体部が内傾して立ち上がり、器厚を途中で一たん薄くして、口縫部で厚みを増し、端部は丸くおさめている。
4	高台付杯 (土師)	15.5×6.2×—		底部からゆるやかに内傾して立ち上がり、一たん器厚を薄くして、口縫部で厚みを増し、端部は丸くなる。高台をつけた瓶跡あり。底部は丸底に近い。
5	梅 (土師)	14.4×7.2×—	口縫部	口縫部はほぼ直立し、口縫部はやや尖がある。体部は半球形を呈する。
6	甕 (土師)	16.0×—×—		口縫部は中位から外反し、肉厚であるが口縫に向かって器厚を減じ、端部は丸い。頸部は機械に括れて直線的であり、肩から胴部にかけて丸く膨らむ。
7	瓶 (土師)	—×—×7.8		頸部は直線的に開き、底部は筒抜け。
8	甕 (土師)	—×—×7.4		底部は肉厚で貼りつけが明瞭。頸部は底部から餘々に垂れを残す。胴部はほとんど膨らまない。
9	盆 (土師)	13.6×5.3×—	口縫部	底部からゆるやかに内傾し、頸部において外反しながら立ち上がり、頸部に強い接をもつ。
10	杯 (土師)	13.9×3.9×7.7	口縫部	体部は底部から内傾して外上方へ立ち上がり、底部との境は内側は不明瞭、外側には若干の棱有利。口縫部は丸い。
11	杯 (須恵)	13.8×5.3×7.8		研磨あるいは削減と思われる痕跡が認められる。体部はほぼ直線的に外上方へ伸びる。口縫部はほぼ丸く収めている。
12	蓋 (須恵)	12.5×4.1×—		天井部はほぼ平坦で、径約10cmに渡り同軸ヘラ削りを施し、中央部に擬宝珠形のつまみを有する。大井部と口縫部とはにぶい棱ではあるが明瞭に屈曲し、口縫部はほぼ垂直に下がる。
13	台付長颈瓶 (須恵)	—×—×8.2		器面の磨減が著しいので調整痕不明。短く外下方にふんばる高台を有する。体部は球形に近く、最大径は中位にある。
14	(須恵)			外上方へ器厚を減じながら直線的にのびる体部。厚い円板状の底部とからなる。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
口一指ナデ 刷一ヘラ磨き	口一指ナデ 刷一ヘラナデ	明赤褐	普通	砂 粒 長石含	ほぼ完形
口一指ナデ 刷一ヘラ削り 底一さみ抜	口一横ナデ	明赤褐	普通	砂粒含	ほぼ完形
口一指ナデ 刷一ヘラ削り後 ヘラナデ	ヘラ磨き	明赤褐	やや不良	砂粒含	成形一良好 焼成を受けているか。
口一指ナデ 刷一ヘラ削り	口一指ナデ 刷一ヘラナデ	に赤い模	不 良	砂 粒 青 母 長石含	
底一回転ヘラ削 り					内黒 火だしき模あり
底一回転ヘラ削 り					内黒 火だしき模あり
口一指ナデ 刷一ヘラ削り	口一指ナデ 刷一ヘラ磨き	赤	普通	砂粒含	ほぼ完形
口一指ナデ 刷一ヘラ削り	口一指ナデ 刷一ヘラナデ	明赤褐	普通	砂 粒 青 母 長石含	焼付着
ヘラ磨き	ヘラ磨き	模	普通	砂 粒 青母含	
ヘラ削り	ヘラナデ	灰褐	不 良	砂 粒 青母含	
口一横ナデ 底一ヘラナデ	ヘラ磨き	模	良 好	砂粒含	成形良好
底一回転ヘラ削 り	ヘラ磨き	浅黄			
底部は切り離し (回転ヘラ削りと 思われる)後丁 寧なヘラナデを 施している。		灰	良 好	長石粒 細砂粒を含む	水挽き痕弱
		灰白	良 好	長石粒 細砂粒を含む 黒色斑点が 少々認めら れる	水挽き痕弱
		灰白	不 良	長石粒 黑青母 紙砂粒含	
底部は手持ちヘ ラナデを施して いる	底面にはすり減 った使用痕あり	暗青灰	良 好	長石粒含	水挽き痕弱

	番号	種類	法量 (口徑×器高×底径) mm	最大径	器形の特徴
第五十二号・五十四号・五十五号・五十六号・五十七号	15	杯 (須恵)	9.8×3.9×5.8		体部はほぼ直線的に器厚を減じて伸び、口縁部附近で若干外反する。
	16	支脚 (土師)	全長16.1		円柱状を呈し、下面是平坦。上面はほぼ平坦をなし、下端から上方に向かってわずかに細くなる。
	17	砥石 (石器)	端長 3.8×17.4		表面・側面とも良く使用されている。磨き面はほぼ平坦である。
	18	刀子 (鉄器)	全長6.1+5.5 刃部幅1.0 ナカゴ幅0.7		2点は接合可、刀子とみられる。刃部はほぼ原形と思われる。トカゲ断面は梢円形を呈す。
	19	平鍬 (鉄器)			平鍬の柄着裝部とみられる。
第五十八号・五十九号・六〇号	1	甕 (土師)	15.4×—×		頸部は直立ぎみ。口縁部は外反した後、口唇近くでわずかに立ち上がる。
	2	甕 (土師)	19.0×—×		頸部は直線的に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口唇部は肉厚のままで端部は平坦。
	3	甕 (土師)	17.0×—×		頸部は直立ぎみ。口縁部は頸部から頸部に外反する。口唇部はやや瘦くなる。
	4	甕 (土師)	—×—×7.2		平底で頸部はやや直線的に内傾する。
	5	甕 (土師)	—×—×7.4		平底から内傾して立ち上がり、頸部は球形となる。最大径は中位になると思われる。
	6	甕 (土師)	24.0×24.6×8.0		口縁部はほぼ直線的に外傾し、胴部は中位にかけてやや膨らみ、底部にかけてやや強く内凹する。笠抜けの底部である。
	7	甕 (土師)	15.5×11.5×—	口縁部	底部から内傾しながら立ち上がり、頸部はほとんど結れず、口縁部は若干外反する。口唇部は鋭くなる。底部は先細くなり、下端に孔をもつ。
	8	甕 (土師)	12.5×8.2×	体部 中位	底部は丸底。体部は横に膨らみ、頸部は「く」の字に括れ、口縁部は直線的に外反する。口唇部は丸い。
	9	甕 (土師)	11.7×10.0×2.7	体部 中位上	口縁部は直線的に外傾し、口唇部は尖がる。体部はやや歪みのある球状を呈する。丸底である。
	10	甕 (土師)	13.0×—×	体部 中位	底部は丸底で、体部は直立ぎみに立ち上がり頸部は若干括れ。口縁部はわずかに外反し、底部はやや尖がる。
	11	甕 (土師)	12.5×6.2×—	体部 中位	平底に近いが体部との境が不明瞭である。下ぶくれの体部で頸部は若干括れ、口縁部は直線的にわずかに外反で立ち上がり口縁部は平頂ぎみ。
	12	杯 (土師)	13.0×3.4×	口縁部	口縁部は僅かに内傾しながら立ち上がる。口唇部近くでさらには内傾する。体部は強状を呈する。器内は薄い。
	13	杯 (土師)	15.4×5.6×	口縁部	丸底で体部はやや偏平な弧状。口縁部との境はあまり明確でないがわずかな棱有り。口縁部は外反し、やや肉厚で底部は丸い。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
底部は回転ヘラ 切り抜を若干残 し、手持ちヘラ 削りを行なって いる	内面の水洗き痕 は弱いが底部と 体部との境はア ナが強くみられ る。水洗き痕は ほとんど無い	褐灰	良 好	長石粒 砂粒多 黒色小斑点 多含	
鉛なナデ		にぶい橙	良 好	砂粒含	完形
					粘板岩
					サビが著しい
指ナデ	口一指ナデ 胴一ヘラナデ	棕	普 通	砂 粒 雲母含	
口一指ナデ 胴一ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	不 良	砂 粒 母 長石含	
口一指ナデ 胴一ヘラ削り	口一ヘラ磨き (摩減) 胴一ヘリオット	棕	不 良	砂 粒 母 長石含	
ヘラ削り	ヘラナデ	明赤褐	不 良	砂 粒 母 長石 石英含	
ヘラ削り	ヘラナデ	明赤褐	不 良	砂 粒 母 長石 云母含	煤付着
口一横ナデ 胴一ヘラナデ	口一横ナデ 胴一ヘラ磨き	棕	不 良	砂粒含	ほぼ完形
口一横ナデ ヘリオット	口一横ナデ ヘラナデ	明赤褐	普 通	砂 粒 雲母含	
口一横ナデ 胴・底一ナデ	口一横ナデ 胴・底一ヘラ磨 き	棕	不 良	砂 粒 雲母含	
口一横ナデ 胴一横ヘリ削り	口一輪積痕 胴一ナデ暗紋				黒斑有り ほぼ完形
口一指ナデ 胴一ヘラ削り	口一指ナデ 胴一ナデ	にぶい棕	普 通	砂粒含	
口一横ナデ 胴一ヘラナデ	口一横ナデ 胴一ヘラ磨き	赤	普 通	砂 粒 母 長石 石英含	
口一横ナデ 底 ヘラ削り	ヘラ磨き	棕	良 好	砂粒含	
口一横ナデ 底一ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	不 良	砂 粒 雲母含	

番号	種類	法 量 (上縦×下縦×底径) cm cm cm	最 大 径	器形の特徴
14	瓶 (土師)	13.9×5.9×—	口縁部	口縁部はほぼ直線的に外反し、口唇部近くで僅かに内傾する。口縁部と体部の境に明瞭な棱をもち、体部は丸味をもった弧状を呈する。
15	杯 (土師)	14.4×5.3×—	口縁部	丸底で、体部は浅い弧状を呈す。頸部に棱を有し、棱がみられる。口縁部は外反し、口唇部は丸い。
1	甕 (土師)	—×—×9.0		上げ底。肩部はなだらかに外反して立ち上がり、中位で膨らみ、肩部はなだらかな傾斜。頸部は内傾して立ち上がる。
2	甕 (土師)	—×—×8.0	胴部 中位	上げ底。中位で尖がるように膨らむ胴部。底部に向かって急にすぼむ。頸部は内傾し、括れしている。
3	甕 (土師)	16.0×19.0×8.5	胴部 中位	頸部は平底から直線的に立ち上った後内傾して膨らみ、胴部で括れてから直線となり。口縁部は若干外反する。肉厚で口唇部はやや鋭くなる。
4	甕 (土師)	24.8×23.9×6.6	口縁部	口縁部は僅かに外反し、口唇部は丸い。底部は笠抜けで、体部は底部からやや直線的に広がる。
5	甕(増) (土師)	7.9×13.5×—	胴部 中位	頸部は横に張る球形。頸部は若干内傾ぎみに外傾して立ち上がり、中位から外反して口唇部はやや鋭くなる。
6	杯 (土師)	13.2×5.2×—	体部 上位	偏平な体部から内傾する口縁部。口縁端部は筋目を減じて尖がる。口縁と体部の境は不明瞭。
7	杯 (土師)	13.0×5.6×—	口 端 部	口縁部は内傾し、体部は弧状を呈する。
8	杯 (土師)	12.1×5.0×—		体部は浅い弧状を呈し、頸部に丸味のある棱を有す。口縁部はわずかな外傾で立ち上る。底厚は口縁部中位でふくらみ頸部は若干鋭い。
9	杯 (土師)	14.6×—×—	口縁部	口縁部はわずかに外反し、体部との境に棱をもつ。体部は浅く、扁平な弧状を呈するものと思われる。
10	杯 (土師)	15.4×5.5×—	口縁部	浅い弧状。口縁部との境に棱をもち、口縁部は大きく外反する。器は体部より口縁部中位が厚く、口唇部は薄く尖る。
11	杯 (土師)	14.8×4.0×—	口縁部	極度に浅い弧状の体部。頸部に棱を有し、口縁部は大きく述べる。底厚は体部で薄く、口縁部中位で最も厚く、口唇部は薄く尖る。
12	高 杯 (土師)	17.1×—×—		頸部体部に直線的に開き、口縁部も直線的に外傾する。口唇部は丸い。
13	器 台 (土師)	8.0×—×— 孔深 1.1		受部は直線的な外傾で開き、口縁部は垂直ぎみに立ち上がり、外側に棱を有し、曲部から急に器厚を減じて口唇部は尖がる。
1	鉢 (土師)	15.2×12.4×9.2	胴部 中位	丸底で、やや丸みをもつ。頸部はあまり膨らまず、口縁部は短く外反する。端部は丸みをもつ。
2	鉢 (土師)	16.0×—×—		
3	鉢 (土師)	13.4×3.6×—	口縁部	体部は弧状を呈し、口縁部との境は不明瞭。口縁部はほぼ直立し、端部は尖る。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
ヘラ磨き 底一ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	普通	砂粒合	ほぼ完形
口一横ナデ 底一ヘラ削り	ヘラ磨き	棕	普通	砂粒合	ほぼ完形
口一指ナデ 刷一ヘラ削り後 ナデ	口一指ナデ 刷一ナデ	棕	普通	砂 粒 長石合	
口一指ナデ 刷一ヘシナデ	口一指ナデ 刷一ナデ	にぶい棕	良 好	砂 粒 长石 石英合	
ヘラナデ	ヘラナデ	口一棕 刷一暗赤褐	普通	砂 粒 スコリア合	煤付着 完形
ヘラ磨き	ヘラ磨き	棕	普通	砂粒合	
ヘラナデ	ヘラナデ	赤褐	普通	砂 粒 母 石合	
ヘク削り後磨き	ヘク削き	にぶい赤褐	普通	砂 精 スコリア合	
口一横ナデ 底一ヘラ削り	ヘラ磨き	棕	普通	砂 粒 スコリア合	
口一ヘラ磨き 底一ヘラ削り	ヘラ磨き	赤褐	普通	砂 粒 云母合	ほぼ完形
口一横ナデ 刷一ヘラ削り	ヘラ磨き	棕	良 好	砂 粒 云母合	
口一横ナデ ヘラナデ	口一横ナデ ナデ	棕	普通	砂 粒 長石合	ほぼ完形
口一横ナデ 底一ヘラナデ	ヘラ磨き	明赤褐	普通	砂粒合	
环部 口一ヘラ磨き 底一ヘラ削り	环部一ヘク削き	棕	普通	砂粒合	
横ナデ	ナデ	にぶい棕	良 好	砂粒合	
口一横ナデ 刷一ナデ	ナデ	にぶい黄褐	不 良	砂粒合	
口一横ナデ 刷一ヘラ削り	口一横ナデ 刷一ヘラナデ	にぶい棕	普通	砂粒合	
ヘラ削り後ナデ	ナデ	にぶい棕	良 好	砂粒合	

	名号種類	法 規 (口縁×底高×底径) <small>cm cm cm</small>	量大徑	器形の特徴
第六十二号住居基準圖 99	4 瓶 (土師)	16.4×5.4×—	口縁部	体部はわずかに内厚しながら開き、口縁部となる。口縁部は外反し、口軒部は肉厚のままで丸い。
	5 瓶 (土師)	14.7×5.4×—	口縁部	深めの弧状を呈し、口縁部との境は不明瞭。口軒部は丸味を帯びる。
第六十四号住居基準圖 102	1 麦 (土師)	23.3×—×—	脇部上位	頭部で直立した後、口縁部はやや強く外反する。脇部は上位で最大径をもつ。
	2 麦 (土師)	19.3×—×—		口縁部は大きく外反し、口軒部は丸い。脇部はあまりふくらまない。
	3 瓶 (土師)	11.5×2.9×—	口縁部	浅い形である。口縁部はやや内厚し、体部との境に稜をもつ。体部はやや偏平な弧状を呈する。
	4 瓶 (土師)	14.5×6.0×—	口縁部	口縁部は直線的に開き、口軒部は尖る。体部は弧状を呈する。
	5 瓶 (須磨)	13.8×4.0×9.0		体部はやや直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部はほぼ丸く収めている。全体に丁寧な作りである。ロクロ
	6 刀子 (鉄器)	0.9×2.6		小型利器の刃部のみ残存。上下端とも欠損。
第六十五号住居基準圖 104	1 瓶 (土師)	12.7×5.5×—	口縁部	口縁部は僅かに外反し、口軒部は丸い。体部は偏平な弧状を呈する。
	2 瓶 (土師)	15.3×6.0×—	口縁部	口縁部は直立した後、直線的に外傾し、口軒部は尖る。体部は弧状を呈する。
	3 瓶 (土師)	13.6×7.0×—	口返部	口縁部はやや内厚しながら立ち上がるが口軒部附近で器肉が薄くなり、直立に立ち上がる。口軒部は鋭く尖る。体部は半球状を呈する。
	4 瓶 (土師)	14.3×5.2×—	口縁部	口縁部は直線的に開き、体部との境に稜をもつ。体部はやや偏平な弧状を呈す。
	5 瓶 (土師)	13.8×7.9×—	口縁部	口縁部はやや内厚し、口軒部は丸い。体部は偏平な半球状を呈する。
第六十六号住居基準圖 106	1 瓶 (土師)	8.8×9.3×3.4	脇部中位	口縁部は直線的に外傾し、体部は偏平な稜状を呈し、底部はわずかにくぼむ。器肉が薄い。
	2 瓶 (土師)	9.9×10.3×3.5	脇部中位	口縁部は僅かに内厚し、体部は偏平な稜状を呈する。下底でややくぼむ。
	3 高 瓶 (土師)	15.7×—×—		瓶部は直線的に開き、口軒部は丸い。器肉が薄い。
第六十七号住居基準圖 107	1 麦 (土師)	20.3×27.4×—	口縁部	口縁部は外反し、脇部はあまりふくらまず、脇長である。底部は不安定。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
口一横ナデ 削一ナゲ	ナデ	にぶい橙	普通	砂 粒 雲母含	
削り後磨き	ヘラミガキ	にぶい黄橙	良 好		ほぼ完形 内黒
口一横ナデ 削一ナゲ	ナデ	にぶい黄橙	普通	砂 粒 スコリア含	
口一横ナデ 削一トから上ハ ナゲ	口一横ナデ 削一ナラ	にぶい赤褐	普通	砂 粒 長石 石英含	
口一横ナデ 底一ヘラ削り	ナデ	にぶい赤褐	普通	砂 粒 雲母含	不明の模様あり
口一ヘラ磨き 削一ヘラ削り後 磨き	ナデ	橙	良 好	砂 粒 雲母含	
水焼き痕はやや 強い。底部は削 軸へラ切り後丁 寧に回転ヘラ削 りを施し、更に 体部との境を削 取りしている	水焼き痕削	灰	良 好	長石粒・細 砂粒を含む が比較的精 製されている	
					サビが著しい
口一ハケ口整形 後横ナデ ヘラ磨き	ヘラ磨き	橙	普通	砂 粒 雲母 長石等含	ほぼ完形 外面底部一割み日がある
口一横ナデ 底一ヘラ削り	ヘラ磨き	にぶい赤褐	普通	砂粒含	
口一ナデ 削一ヘラ削り	口一ナデ 削一ヘラ磨き	にぶい粉	良 好	砂 粒 長石 スコリア含	ほぼ完形
口一横ナゲ		明赤褐	不 良	砂粒含	
口一横ナデ 底一ヘラ磨き	ヘラ磨き	橙	普通	砂粒含	
口一ヘラ磨き後 ハケ口整形 削一ハケ口整形	口一ヘラ磨き 削一ナゲ	にぶい橙	普通	砂 粒 スコリア含	ほぼ完形
ヘラナデ 横ナデ	ヘラナデ 横ナデ	明赤褐	普通	砂 粒 雲母含	ほぼ完形
ナデ	ヘラ磨き	明赤褐	普通	砂粒含	
口一指ナデ 削一ヘラ削り	口一指ナデ 削一ヘラナゲ	にぶい橙	不 良	砂 粒 長石含	

	番号	種類	法量 (口縁×器高×底径) mm	最大径	器形の特徴
第六十六号住居址(図107)	2	甕 (土師)	20.4×—×—		頸部で直線的に僅かに外傾した後、口縁部でさらに外傾する。口縁部は丸い。胴部は直線的にやや聞く。
	3	甕 (土師)	23.0×—×—		口縁部は「S」字状を呈し、胴部はやや大きくなる。
	4	盆 (土師)	14.2×5.3×—	口縁部	口縁部はやや外反し、口縁部は丸い。体部は弧状を呈する。
	5	盆 (須恵)	13.8×4.6×9.8		体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く取めている。
第六十七号住居址(図110)	1	甕 (土師)	18.8×30.5×7.0	胴部中位下	頸部はほぼ直立し、口縁部は直線的に外傾した後、中位からさらに外傾する。肩部はなで肩で、胴部は中位で最大径をもつ。底部はややくぼむ。
	2	瓶 (土師)	26.8×23.2×8.6	口縁部	頸部は直線的にやや外傾し、口縁部はさらに外反する。口縁部は丸い。体部は最大径を上位にもつ。縁やかに底部に移行する。底部は筒抜けである。
	3	盆 (土師)	13.2×4.6×5.0	口縁部	口縁部は直線的に聞く。平底の底部からやや内側して立ち上がる。
	4	盆 (土師)	14.4×4.9×—	口縁部	口縁部は直線的に外傾し、体部との境に明瞭な棱をもつ。体部は弧状を呈する。
	5	盆 (土師)	12.7×5.2×—	口縁部	口縁部はほぼ直立し、体部はやや偏平な弧状を呈する。
	6	瓶 (土師)	12.4×6.1×—	口縁部	口縁部は直線的に外傾し、体部は偏平な半球状を呈する。
第六十八号住居址(図113)	1	壺 (土師)	5.2×8.8×3.7	胴部中位	頸部は厚手で、口縁部は外反する。胴部はやや偏平な球状を呈する。平底である。
	2	鉢 (土師)	10.7×11.9×7.4	体部中位	底部のみ厚手で不安定である。体部は半球状を呈し、口縁部は内側する。口縁部は尖る。
	3	甕 (土師)	17.0×—×—	胴部中位上	頸部は直線的にやや内傾し、口縁部は外反する。胴部はやや延長の算盤玉形を呈する。
	4	甕 (土師)	—×—×6.4		体部は歪みのある球状を呈する。平底である。
	5	壺 (土師)	10.7×12.0×—	体部中位	口縁部は僅かに内側し、体部は中位で僅かにふくらみ、底部近くで丸味をもつ。底部の中央に孔を有する。
	6	甕 (土師)	—×—×6.2		底部は厚手で、胴部は球状を呈する。
	7	瓶 (土師)	9.8×6.5×7.0	体部上位	口縁部はやや強く内側し、体部は縁やかに内側して、平底気味である。
	8	环 (土師)	13.8×5.4×—	口縁部	口縁部は外反し、体部との境に棱をもち体部は浅く、弧状を呈する。体部のみ肥厚である。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 上	備 考
外 面	内 面				
口一指ナデ 胴一ヘラ削り	口一指ナデ 胴一ヘラナデ	褐灰	普通	砂粒含	胴長堅
口一指ナデ 胴一ヘラナデ	口一指ナデ 胴一ヘラナデ	にぶい褐	普通	砂 粒 青 長石含	
口一横ナデ 底一ヘラ削り	口一横ナデ 底一ナデ	棕	良 好	砂粒含	
底部は回転ヘラ 削りで調製され 体部との境は回 転ヘラ削りで面 取りしている	内部の底部と 体部は明瞭に屈 曲している 水焼き疲弱い	灰白	不 良	細砂粒を含 むのみで比 較的精製さ れている	
ハケ目整形後ナ デ (下から上へ)	ナデ	棕	普 通	砂 粒 長 石 石英含	
口一横ナデ 胴一ヘラ日後ヘ シナデ	口一横ナデ 胴一ナデ	赤褐	普 通	砂粒含	
口一横ナデ 胴一ヘラナデ		明赤褐	不 良	砂粒含	
口一横ナデ ヘラ削り	口一横ナデ ヘラ磨き	明赤褐	普 通	砂粒含	ほぼ完形
口一横ナデ 底一ナデ ヘラ削り		棕	不 良	砂粒含	ほぼ完形
口一ヘラ磨き 削一ナデ	ヘラ磨き	赤褐		砂 粒 長石含	
口一横ナデ 胴一ハケ目整形 後ナデ	口一横ナデ 胴一ナデ	にぶい棕	良 好	砂粒含	ほぼ完形
口一横ナデ 胴一ヘラ削り	口一横ナデ 胴一ヘラナデ	赤褐	普 通	砂粒含	
口一指ナデ 胴一ヘラ削り	口一指ナデ 胴一ヘラナデ	棕	不 良	砂 粒 長 石 雲母含	
口一横ナデ 胴一ヘラ削り	ナデ	明赤褐	良 好	砂粒含	
ヘラ削り	口一横ナデ 胴一ヘラナデ 輪積歎あり	明赤褐		砂 粒 雲母含	完形
ナデ 底部一木葉痕あ り	ナデ	棕	普 通	砂 粒 長 石 石英含	
ナデ	ハケ目整形	明赤褐	普 通	砂粒含	
口一ヘラ磨き 胴一ヘラナデ	ヘラ磨き	棕	普 通	雲 母 砂粒含	

	番号	種類	法量 (口径×器高×底径) mm	最大径	器形の特徴
第七十号住居址(図116)	9	杯 (土師)	11.6×5.3 × -	口辺部	口縁部は直立し、口特部はやや尖る。体部はまろやかな弧状を呈する。
	10	杯 (土師)	14.0×5.0 × -	口縁部	口縁部は直線的に外傾し、口特部は尖り、体部との境に棱をもつ。体部は極めて浅く扁平である。器肉は厚い。
	11	盃 (須恵)	26.8 × - × -		頭部は朝顔形に外反し、口縁部は内傾し、上下に棱を有する。口はすぐ下に断面三角形の凸唇をめぐらす。その下には橢状工具によるものとみられる斜方の細い痕がみられる。
	1	杯 (土師)	12.6 × - × -	口辺部	口縁部は内脣し、口特部は尖る。体部は弧状を呈する。
	2	杯 (土師)	13.0 × - × -	口縁部	口縁部は僅かに外反し、口特部は丸い。体部は半球状を呈する。底部欠損。
	3	杯 (土師)	13.0×5.2 × -	口縁部	口縁部は直線的に開き、口特部は尖る。体部は弧状を呈する。
	4	杯 (土師)	14.4×6.0 × -	口縁部	口縁部は僅かに外反し、体部は扁平である。
	5	杯 (土師)	13.6 × - × -	口縁部	口縁部は直線的に開き、体部は扁平な弧状を呈するものと思われる。
	6	碗 (土師)	13.0 × - × -	体部中位	口縁部は直線的に外反し、口特部近くで直立し、口特部は尖る。体部は半周円球状を呈する。底部欠損。
	7	土器 (土製品)	長さ 3.2 孔径 0.5		中位で膨らむ、円柱状を呈し、中央に孔が貫通している。全体的に成形が丁寧ではない。
第七十一号住居址(図119)	1	盃 (土師)	16.9×17.0×8.4	腹部中位	口縁部は頭部から直線的に外傾した後、中位でさらに外傾する。腹部は中位に最大径をもつ。やや扁平な球状を呈する。平底である。
	2	杯 (土師)			口縁部はほぼ直線的に外反し、体部との境に棱をもつ。体部は浅く、直線的な弧状を呈する。
	3	高杯 (土師)	23.8 × - ×		口縁部は直線的に開き、口縁部で大きく外反する。頭部は直線的に開く。
	4	杯 (土師)	13.0 × - × -	口辺部	口縁部は内脣し、体部は弧状を呈する。底部欠損。
	5	杯 (土師)	14.8 × - × -	口縁部	口縁部は垂直に立ち上った後、やや外反する。体部は弧状を呈するものと思われる。底部欠損。
	6	杯 (土師)	16.0×4.6 × -	口縁部	口縁部は直線的にやや外反した後、内側気味に外傾する。口特部は尖る。体部は極めて浅く扁平である。
	7	杯 (土師)	13.3 × - × -	口縁部	口縁部は一度直立してから直線的に大きく外反する。口特部は尖る。体部は浅く扁平である。
	8	杯 (土師)	15.2×4.4 × -	口縁部	口縁部は直線的に大きく開き、口特部は尖る。口縁部と体部との境に棱をもつ。体部は極めて浅く、扁平である。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
口一ヘラ磨き 胴一ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	不 良	砂粒含	ほぼ完形
口一横ナデ 胴一ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	良 好	砂 粒 雲母含	完形
外面一灰緑色の 軸が付着し、調 整痕は不明瞭	内面一灰緑色の 軸が付着し調整 痕は不明瞭		良 好	長石粒 細砂粒含	
口一横ナデ 胴一ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	良 好	砂粒含	内黒
口一横ナデ 中位一ナデ 底一ヘラ削り	口一横ナデ 位下 ヘラ磨き	明赤褐	普 通	砂粒含	
口一横ナデ 胴一ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	普 通	砂 粒 雲母含	
口一横ナデ 胴一ヘラ削り後 ナデ	口一横ナデ 胴一ヘラ磨き	外一赤褐 内一棕	不 良	砂 粒 雲母含	ほぼ完形
口一横ナデ 胴一ナデ 刷一ナデ	ヘラ磨き	明赤褐	不 良	砂 粒 雲母含	
口一横ナデ 胴一ナデ (上~下)	口一横ナデ 刷一ナデ	赤	普 通	砂 粒 石英含	ほぼ完形
口一横ナデ 底一ヘラナデ	ヘラ磨き	明赤褐	良 好	砂粒含	
口一横ナデ ヘラナデ 脚一ナデ(縫)	口一ヘラ磨き 脚一ヘラナデ	外一にせい黄粉 内一明赤褐	良 好	砂粒含	
口一横ナデ 底一ヘラ削り後 ナデ		明赤褐	不 良	砂 粒 雲母含	
口一整形痕あり 底一ヘラ削り後 カキ目調整	ヘラ磨き	棕	良 好	砂粒含	
口一横ナデ 底一ヘラナデ	ヘラ磨き	明赤褐	不 良	砂 粒 スコリア含	
底一ヘラ削り		明赤褐	不 良	砂粒含	
口 横ナデ 胴一ナデ	ヘラ磨き	棕	普 通	砂粒含	ほぼ完形

番号	種類	法量 (口徑×器高×底径) cm	最大径 cm	器形の特徴
9	环 (土師)	15.3×5.7×	11 緑部	口縁部は直線的に外反した後、内轉気味に外傾する。口唇部は尖る。
10	环 (土師)	15.3×—×	11 緑部	口縁部はやや強く外反し、体部との境に棱をもつ。体部は弧状を呈する。
11	环 (土師)	14.6×—×	11 緑部	口縁部は緩やかに外反し、体部との境に棱をもつ。体部は弧状を呈するものと思われる。
1	甕 (土師)	21.9×—×		胴部はあまりふくらまず、口縁部は受け口状を呈する。
2	甕 (土師)	21.6×—×		口縁部はほぼ受け口状を呈し、肩部に明顯な棱をもつ。
3	甕 (土師)	24.0×13.9×7.6	11 緑部	口縁部は受け口状を呈し、平底で体部は緩やかに内傾して立ち上がる。
4	甕 (土師)	23.0×—×		口縁部は受け口状を呈し、強く外反する。胴部は僅かにふくらむ。底部欠損。
5	甕 (土師)	12.1×—×		頸部は内傾し、口縁部は受け口状を呈し、強く外反する。肩部に明瞭な棱をもち、胴部は直線的に開く。
6	小甕甕 (土師)	12.6×—×		頸部で器肉を薄くし、口縁部は外反する。体部は緩やかに内傾しながら立ち上がる。底部欠損。
7	高台付环 (須恵)	10.6×5.0×6.2		体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は丸く取っている。
8	环 (須恵)	11.2×3.5×7.5		体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は鋭い棱をなす。
9	高台付环 (須恵)	—×—×9.4		
10	蓋 (須恵)	17.2×3.6×—		天井部は径11cmに渡って回転ヘラ削りを施し、やや偏平な擬宝珠状のツマミを付けている。口縁部は若干内下方へ向じ、端部は丸くおさめている。丁寧な作りである。
11	蓋 (須恵)	16.5×—×		天井部は径12cmに渡って回転ヘラ削りが施されている。口縁部は断面三角形状で、端部はやや内傾し、下端にはにぶい棱をなしやや突出する。
12	环 (須恵)	14.3×4.8×8.2		体部はわずかに凸厚を減じながら直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部はにぶい棱をなす。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
口一横ナデ 胴一ヘラ削り後 ナデ	ヘラ磨き	赤褐色	不 良	砂粒含	
口一横ナデ 胴一ヘラ削り	口一横ナデ 胴一ナデ	棕	普 通	砂粒含	
口一横ナデ	ヘラ磨き	口一黑 底一明赤褐	不 良	砂粒含	
口一指ナデ 胴一ヘラナデ	口一指ナデ 胴一ヘラナデ	にぶい赤褐	不 良	砂 長石 石英含	
口一指ナデ 胴一ヘラ削り	口一指ナデ 胴一ヘラナデ	にぶい褐	普 通	スコリア 長石 砂粒多含	
口一横ナデ 胴一ヘラ磨き	口一横ナデ 胴一ヘラナデ	にぶい褐	普 通	砂 粒 云母含	
口一指ナデ 胴一ヘラナデ	口一指ナデ 胴一ヘラナデ	にぶい赤褐	普 通	砂 長石 云母含	
口一指ナデ 胴一ヘラナデ	口一指ナデ 胴一ヘラナデ	にぶい棕	普 通	长石 云母 スコリア含	
口一横ナデ 胴一ヘラナデ	口一横ナデ 胴一ナデ	棕	不 良	砂粒含	
底部は回転ヘラ 削りの後、ほぼ 垂直に立てる高 台を付けている。 体部との境は明 瞭に屈曲し、鋭 い棱をなしてい る		灰白		長石粒 細砂粒含	黑色斑点有り
底部は切り離し 後、一方からの ヘラ削りを行な っている		暗灰黄	良 好	長石粒 細砂粒含	水挽き痕はやや強い
底部は回転ヘラ 削りの後外下方 へややふんばる 高台を付けてい る		灰白	良 好	長石粒 細砂粒含	水挽き痕は弱い
		灰	良 好	長石粒 細砂粒含	水挽き痕は弱い
		灰	普 通	長石粒 細砂粒含	水挽き痕は弱い
底部は回転ヘラ 切りのままであ る		灰	不 良	長石粒 細砂粒 多含	水挽き痕は弱い

番号	種類	法量 (口幅×器高×底径)	最大径	器形の特徴
13	盤 (須恵)	— × — × 12.8		高台部より上方は、器壁を減じながら大きく外上方へ開く。
14	杯 (須恵)	14.5 × 3.6 × 9.2		体部はほぼ直線的に外方へ開く。体部下端は手持ちハラ開きで面取りしている。 口端部はほぼ丸く取めている。
15	盤 (須恵)	— × — × 15.8		高台部より上方は器壁同じにして、大きく外上方へ開く。 体部との境は屈曲し、にびい縁をなす。
16	碗 石	長さ 6.3 最大幅 3.1		上面は原形面であり、下面部欠損。平頂に切られてい。原形は長方体と思われる。 表裏・側面とも良く使用されている。 磨ぎ面はゆるい内側を示す。
第七十 四号 住居址 図126	盤 (土師)	17.0 × — × —	胴部 中位	口縁部は直線的に外傾した後、口唇部近くでやや外反する。底部は欠損しているが、胴部はほぼ球状を呈するものと思われる。
	盤 (土師)	19.8 × — × —		口縁部は直線的に開き、口唇部近くでやや外傾する。口唇部は丸い。肩部は張らず、器やかに内擣する。胴部中位下欠損。
	盤 (土師)	17.4 × 6.9 × —		口縁部はやや外反し、口唇部は平頂である。
	鉢 (土師)	9.8 × 7.3 × 4.5	体部 上位	平底で、底部のみが円下であり、体部は平底状を呈する。口縁部は中位でやや外傾する。口唇部は尖る。
	器 石	— × — × 6.9		受け部は僅かに内擣し、口縁部でさらに内擣する。受け部孔を有する。
	盤 (土師)	19.8 × — × 5.2	口 縁 部	底部は平底で、中央に孔を有し、体部は浅やかに内擣しながら開く。口唇部はやや尖る。
	小型 豆 (土師)	— × — × 2.3		平底で、胴部は中位でふくらむ。
第七十五 号 住居址 (内 壁128 壁)	手 振 瓷 (土師)	4.1 × 2.0 × 3.9	口 縁 部	平底で、口縁部は直立する。口唇部は尖る。
	盤 (土師)	15.4 × 15.3 × 4.2	胴部 中位	口縁部は器面が内凹であるが、直線的に外反し、胴部は重む。平底である。
	高 环 (土師)	14.3 × — × —		口部は僅かに内擣しながら立ち上がり、器、柱部はほぼ円柱状を呈する。
	碗 石	長 2.0 × 2.3 × 11.2		四面とも良く磨かれ、側面と上下面との接する角はほぼ90°前後である。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
水焼き痕は強く底部は回転ヘラ削り後短かく、外下方へわずかにふんばる高台を付けている	水焼き痕弱	にぶい黄橙	普 通	長石粒 細砂粒 雲母含	
底部は手持ちヘラ削り（一方方向からの）を施している			不 良	長石粒 雲母含	水焼き痕はやや弱い
底部は回転ヘラ削り後外下方へふんばる高台を付けている。		灰	良 好	長石粒 細砂粒多含	黑色斑点有り
					泥岩
ハケ目整形	ヘラナデ	にぶい橙	普 通	砂粒含	
口一指ナデ ヘナナデ	口一指ナデ ヘナナデ	灰白	不 良	砂 粒 長 石 雲母含	
口一指ナデ 頭～胴～ハケ目 整形	口一ハケ目整形 胴一指ナデ	橙	普 通	砂 粒 長 石 スコリア含	
ハケ目後ナデ	口一ハケ目後ナ デ 胴一ナデ	橙	不 良	砂粒含	小形變
磨き	磨き	灰黄褐	普 通	砂粒含	
ハケ目	ヘラナデ	橙	不 良	砂 粒 長石含	丹彩
ナデ	ナデ	橙	良 好	砂 粒 雲母含	ほぼ完形
指ナデ	指ナデ	にぶい褐	普 通	砂 粒 雲母含	完形
口一横ナデ 胴一ヘラ削り	口一横ナデ 胴一ナデ	橙	不 良	砂粒含	
口一ヘラ磨き 頭一縦一ヘラ削り	縦一ヘラ削り	にぶい褐	不 良	砂 粒 長 石 石英含	
					金属性用磁石である

	番号	種類	法器量 (口幅×器高×底径) mm	最大径	器形の特徴
第二十七号住居址(圖3)	1	蓋 (土師)	18.8×—×—		頭部はほぼ「く」の字状にくびれ、口縁部に向かってやや直線的に外傾する。口縁部は折り返し口縁で口唇近くで直立する。底部はやや強く張りだす。
	2	甕 (土師)	23.6×—×—		頭部は直立し、口縁部は直線的に開き、口唇部は尖る。底部は張り出し、器内は底部のみ膨らむ。
	3	壺 (土師)	8.8×14.3×4.3	体部中位	口縁部は直線的に外傾し、口唇部はやや平用である。体部は最大径をもつ中位に向かって張り出し平底の底部に至る。
	4	壺 (土師)	8.8×—×—		口縁部はやや外反し、口唇部近くで僅かに内傾する。底部はやや偏平な球状を呈するものと思われる。底部欠損。
	4	豆合 (土師)	7.2×7.8×10.0 孔径 0.8		受け部は直線的に開き、口唇部は平用である。脚部は直線的に開いた後、底部近くでやや外反する。
	5	支脚 (土師)	8.0×16.8×13.7	脚部	体部は直線的に開く。
	7	足 (土師)	8.2×14.9×13.5	脚部	器形が一定である。
第二十七号住居址(圖136)	1	高台付杯 (土師)	14.5×6.9×8.4	口縁部	体部は僅かに内傾しながら立ち上がり、口唇部は丸い。体部と高台の境は丸味をもつ。
	1	椀 (土師)	12.6×5.6×—	口縁部	口縁部は外反気味に内傾した後、強く外反する。口唇部は丸い。体部は偏平な半球状を呈する。
第二十八号住居址(圖139)	2	杯 (土師)	14.0×5.6×—	口縁部	口縁部は直線的にやや外傾し、体部との境に明瞭な棱をもつ。体部は弧状を呈する。
	3	小型壺 (土師)	—×—×2.7		体部は緩やかに内傾して立ち上がった後強く外傾する。小さな平底である。
	1	小型壺 (土師)	11.4×—×—		口縁部は僅かに内傾して立ち上がり、口唇部は平用である。頭部は「く」の字状にくびれる。底部はほぼ球状を呈するものと思われる。
第二十九号住居址(圖140) (1)(2)	2	壺 (土師)	20.8×—×—		口縁部は折り返し口縁で、口唇はややくぼむが平坦である。
	3	杯 (土師)	9.6×3.9×3.9	口縁部	平底で、体部は直線的に開き、口縁部は内傾しながら大きく開く。
	4	椀 (土師)	11.4×5.8×—	口縁部	口縁部は内傾し、口唇部は尖る。口唇部近くに内面と、頭部の内外面に棱をもつ。体部は偏平な半球状を呈している。
	5	甕 (土師)	19.3×20.6×6.4	脚部上位	口縁部はやや外反気味に立ち上がってから直線的に外傾する。口唇部は平出である。頭部は上位に最大径をもって張り、平底である。
	6	瓶 (土師)	23.0×9.0×5.6 孔径 1.5		鉢形の瓶。口縁部は折り返し口縁で、体部は僅かに内傾しながら立ち上がる。平底の中央に孔をもつ。
	7	高台杯 (土師)	19.2×—×—		杯部は僅かに内傾しながら開く。口唇部は平出である。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
口一横ナデ 胴一ハケ目の後 ナデ	口一ハケ目整形 胴一ナデ	にぶい黄橙	良 好	砂 粒 長 石英含	
ハケ目整形	ヘラナデ	橙	普 通	砂粒含	
口一ヘラ磨き第 胴一ヘラ磨き第	口一ヘラ磨き第 胴一磨き	橙		砂粒含	
ハケ目後ナデ	口一ヘラナデ 胴一ナデ	にぶい黄橙	普 通	砂粒含	
縦位のヘラ磨き	受一ナデ 脚 ハケ目整形 の後ナデ		不 良	砂粒含	
ハケ目後ナデ	ハク日	にぶい赤褐	不 良	砂 粒 雲母含	
ハケ目整形	ハケ目整形	にぶい橙	良 好	砂 粒	
口クロナデ	ヘラ磨き(密)	にぶい橙	良 好	砂粒含	
		橙	不 良	砂 粒 スコリア 雲母含	ほぼ完形
口一横ナデ 胴一ヘラ削り	横ナデ		普 通	砂粒含	
ヘラナデ	ナデ	にぶい橙	不 良	砂 粒 雲母含	
ハケ目整形	口一ハケ目後ナ デ 胴一ヘリナデ	橙	良 好	砂粒含	
口一ハケ目整形 胴一ハケ目の後 ヘラ磨き	ハケ目整形の後 ナデ	にぶい赤褐	不 良	砂粒含	
ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい橙	普 通	砂粒含	
口一ハク日後横 ナデ 胴一ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい橙	普 通	砂粒含	ほぼ完形
口一ハケ日の後 横ナデ 胴一ハケ目整形	口一ハケ日の後 横ナデ 胴一ナデ	にぶい褐	普 通	砂粒含	
ハケ目整形 (太い)	ナデ	にぶい橙	普 通	砂 粒 スコリア含	
丁寧なナデ	ヘラ削き	赤	普 通	砂 粒 石英含	

番号	種類	法量 (口縁×器高×底径) cm	最大径	器形の特徴
8	瓶 (土師)	22.8×11.8×5.4	口縁部	口縁部は折り返し口縁で、口軒部は平坦である。底部は平底で、中央に孔を有する。体部は底部近くで丸味をもつが、後は直線的に開く。
9	器台 (土師)	8.4 × - × - 孔径 1.1	-	受部は内縫しながら立ち上がり、口軒部は丸い。受部孔を有し、脚部は内縫氣味に広がる。脚部に内窓が3ヶ所穿たれる。
10	器台 (土師)	7.5×7.8×8.6	脚部	受け部は僅かに内縫し、口軒部は尖る。脚部は直線的に開き、脚部近くで小さく外反する。
11	高杯 (土師)	- × - × 8.4(脚) 孔径 1.1	-	脚部に3つの円窓を有する。脚部は直線的に開いた後、脚部近くでやや外反する。
12	高杯 (土師)	- × - × 6.8 孔径 0.8	-	杯部は内縫し、脚部はゆるやかに外反する。脚部に内窓が3ヶ所穿たれている。
13	高杯 (土師)	- × - × 10.3	-	脚部は緩やかに開く。
14	支脚 (土師)	5.7×13.5×11.3	脚部	体部はほぼ直線的に開く。踏抜けである。
15	支脚 (土師)	5.0×13.3×11.6	脚部	孔をもち、脚部は直線的に開いた後、ほぼ垂直に降りる。
16	支脚 (土師)	- × - × 11.0	-	中位でややふくらむが、底部にかけては直線的である。
17	支脚 (土師)	- × - × 12.4	-	垂みがあるがほぼ直線的である。
1	支脚 (土師)	幅 長さ 6.4×8.2	-	円柱状を呈す。支脚下半と思われる。下端面は平坦。
2	支脚 (土師)	幅 長さ 5.8×8.6	-	円柱状を呈す。支脚下半と思われる。上半部欠損。
3	片 (須恵)	12.8 × - × -	-	体部は内縫しつつ外方へ開く。口縁部は外反し、端部は丸く收めている。
4	片 (須恵)	13.5×4.4×6.1	口縁部	体部下半に明瞭な屈曲点を有し、やや外縫氣味に立ち上がる。口縁部はやや厚みを増し、端部はわずかに鋸歯を有する。
5	高付片 (須恵)	12.5×4.8×8.5	口縁部	体部下半に明瞭な屈曲点を有し、やや外縫氣味に立ち上がる。口縁部はやや厚みを増し、端部はわずかに鋸歯を有する。
6	片 (須恵)	12.6×4.8×5.8	口縁部	体部はほぼ直線的に外方へ開く。口縁部はやや厚みを増し、端部はやや鋸歯。
7	片 (須恵)	13.6×5.0×5.8	口縁部	体部はわずかに内縫氣味に外方へ開く。口縁部は端部を丸く收めている。水挽き痕は弱い。

第八十号住居址(國140)

第八十四号住居址(國144)

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
ナデ	ナデ	明赤褐	普 通	砂粒合	
受一横ナデ 脚一横ナデ	受一横ナデ 脚一ハラナデ	赤	不 良	砂粒合	
ヘラナデ	受一ハナナデ 脚一ナデ粗	にぶい橙	普 通	砂 粒 長石合	完形
縦位のナデ	ハケ日整形	明赤褐	不 良	砂粒・雲母 長石・石英 スコリア合	
脚一ハラ磨き	脚一ハケ日整形	橙	不 良	砂 粒 雲母合	
ヘラナデ	ハケ日整形	赤褐	普 通	砂 粒 スコリア合	
ハケ日	ヘナナデ	明赤褐	不 良	砂 粒 雲母合	
ヘナナデ 底一横ナデ	ヘナナデ	明赤褐	普 通	砂 粒 石英 長石合	完形
ハケ目痕あり	ヘナナデ 輪積痕有り	明赤褐	普 通	砂 粒 長石 英 スコリア合	
ハケ目	ヘナナデ	にぶい赤褐	不 良	砂 粒 長石 英合	
ナデ		にぶい橙	普 通	砂 粒 石英合	
ナデ		にぶい赤褐	不 良	長 石 スコリア合	
水挽き痕、外面 はやや強い。 底部は回転ヘラ 切りのままと思 思われる	水挽き痕。 内面は弱い	オリーブ灰	普 通	長 石 砂粒を含む	
底部回転ヘラ 切りの後ナデで いる		灰	良 好	長 石 細砂粒合	水挽き痕一やや弱い 二次焼成を受けている
底部は回転ヘラ 削り後、外方へ やや高く高台を 貼りつけている	内面は底部にラ ンゼン状の水挽き 板を残し、体部と の間に席点を 明顯に有する	灰褐	普 通	長石・砂粒 を含むが精 製されている	
底部は切り離し 後手持ちヘラ削 りを施している	内面は底部と体 部との境に強い アテを有する	橙	良 好	長 石・砂粒 を多く含み きめあらい	
底部は回転ヘラ 切り後外周をナ ゲている		暗オリーブ灰	普 通	長 石・砂粒 細砂粒を含む	二次焼成を受けている

	番号	種類	法量 (口徑×器高×底径)	最大径	器形の特徴
第八十四号住居址(図14)	8	高台付环(須恵)	15.8×8.9×8.5	口縁部	高台と体部とは低い紐曲を有し、体部は器厚を減じながら直線的に外方へ開く。口縁部はやや外反し、端部は丸く收めている。
	9	环(須恵)	13.2×—×—		体部はやや直線的に外方へ開く。口縁部は僅かに厚みを増し、丸く收めている。
	10	环(須恵)	13.6×5.2×5.6		体部は器厚を減じながら、わずかに内縁気味に外方へ開く。口縁部は器厚を増し、大きく外反する。端部は丸く收めている。
	11	勾玉(石製模造品)	長幅厚 3.7×1.4×0.3 孔径 0.2		板状であり、表裏・側面とも成形のため擦痕明晰。
	12	鉄鑿(鉄器)	現全長 5.5 刃部 4.2 ナカゴ 1.3		鉄鑿状の刑器と考えられるが、刃部上半が欠損しているため形態不明。ナカゴ部も下部が欠損している。
第八十七号住居址(図19)	1	甕(土師)	15.0×—×—		口縁部はやや内縁気味に立ち上がり口唇部付近に僅かな凹窓が残る。腹部は僅かにふくらむ。
	2	甕(土師)	15.9×—×—		口縁部は受け口状を呈し、腹部はあまり張らない。
	3	环(須恵)	13.8×5.0×6.7	口縁部	体部は水焼き痕を強く残し、僅かに器厚を減じながら外方へ大きく開く。口縁部は僅かに外反し、端部はおむね丸く收めている。
	4	环(須恵)	17.2×4.6×7.2	口縁部	体部は僅かに内縁気味に外上方へ立ち上がる。口縁部は僅かに外反し、端部はほぼ丸く收めている。
	5	高台付环(須恵)	13.5×6.0×8.6	口縁部	体部は、底部との間に明瞭な紐曲を有し、僅かに外反気味に立ち上がる。口縁部はやや外反し、端部は丸く收めている。
第八十八号住居址(図21)	1	甕(土師)	18.8×—×	胴部 中位	頸部は「く」の字状にくびれ、口縁部は中位で僅かにふくらみ、やや尖った口縁部に生る。胴部は中位に最大径をもち、やや偏平な球形を呈する。
	2	甕(土師)	26.8×—×—		口縁部はほぼ受け口状を呈し、腹部は内縁しながら立ち上がる。底部欠損。
	3	器台(土師)	6.8×—×—		受け部は腹部から僅かに内折し、口縁部はほぼ直立する。受け部孔を有する。
	4	高环(土師)	12.1×8.9×9.8	口縁部	受け口は直線的に広がった後、中位から内折する。口縁部は平坦である。受け部と脚部の境は垂直に立ち上がり、脚部は直線的に開く。
	5	筋垂串(土製品)			

整 形 法		色 調	焼 成	胎 上	備 考
外 面	内 面				
底部は回転ヘラ削り後、外下方へ開く高台を貼りつけている		オリーブ灰	やや不良	長石・砂粒 細砂粒を含む	水焼き痕は弱い
底部は切り離し後軸方向からの手持ちナデ			普 通	細砂粒を少 量含むが精 製されている	水焼き痕はやや弱い
水焼き痕はやや 強い。底部は回 転ヘラ切り後、 外成部をナデで いる	水焼き痕は弱い 内面は底部と体 部との境に強い アザを有する	灰 黄	不 良	長石・砂粒 雲母未他不 純物多い	須恵質土器
口一指ナデ 胴一へラナデ	口一指ナデ 胴一へラナデ	暗	不 良	砂 粒 長 石 英 スコリア含	
口一指ナデ 胴一へラナデ	指ナデ	明赤褐	不 良	砂 粒 長 石 雲母含	
底一回転ヘラ切 り		淡黄	不 良	長石類 細砂粒含	
底部は切り離し 後、手持ちヘラ 削りを施してい る		黄灰	良 好	長石類 細砂粒多含	水焼き痕弱
底部は回転ヘラ 削りの後、高台 を貼り付けてい る		灰 黄	良 好	長石類 砂粒含	水焼き痕弱
口一指ナデ 胴一ハケ目後ナ デ	口一指ナデ 胴一ハケ目後ナ デ	にぶい褐	普 通	砂 粒	煤付着
口一指ナデ整形 (ろくろ使用に よる) 胴一へラ削り	指ナデ (ろくろ使用に よる)	にぶい黄橙	良 好	砂粒含	
受一へラ磨き	受一へラ磨き 脚一ナデ	赤	良 好	砂 粒 スコリア含	
受一ナデ 脚一ハク磨き	受一ナデ 脚一ハケ目後ナ デ	明赤褐	不 良	砂 粒 長 石 英含	
					40g 破損・摩滅が著しい

番号	種類	法量 (口徑×頂高×底径)	最大径	器形の特徴
1	蓋 (土師)	11.3×13.8×—	胴部中位	丸底で、口縁部はほぼ直線的に外反する。胴部は梢円球状を呈する。
2	小型甕 (土師)	12.0×14.5×6.4	胴部中位	口縁部は僅かに外反し、口唇部は丸い。胴部はあまりふくらまず。平底の底部に至る。
3	甕 (土師)	—×—×4.7		底部はくぼみ、胴部はほぼ球状を呈するものと思われる。
4	环 (土師)	12.0×5.2×—	口縁部	口縁部はほぼ直立し、口唇部近くでやや外反する。体部は瓶状を呈する。
5	环 (土師)	12.4×—×—	口縁部	口縁部は一度やや内傾した後、直線的にやや外傾し、口唇部で明瞭な棱をもつ。体部は瓶状を呈する。
6	椭 (土師)	12.8×8.0×—	口縁部	口縁部はやや外反し、体部は深い。丸底で、器肉は薄い。
7	环 (土師)	14.7×5.0×—	口縁部	口縁部は直線的に開き、口唇部は尖る。体部は直線的である。
8	碗 (土師)	12.6×—×—		口縁部は外反気味に内傾した後、やや外反する。体部は半梢円球状を呈するものと思われる。
9	环 (土師)	15.3×5.8×—	口縁部	口縁部は一度直立した後、やや外反する。口縁部と体部との境に棱をもち、体部は瓶状を呈する。
10	高环 (土師)	21.2×—×—		环部は僅かに内傾し、棱をもった後、口縁部は外反する。
11	高环 (土師)	—×—×—		环部は僅かに内傾しながら立ち上がり、脚柱部は短かい。
12	手捏ね (土師)	3.6×2.4×2.0	口縁部	底部はくぼむ。体部は僅かに内傾しながら立ち上がる。
13	刀子 (鉄器)	幅長 1.1×3.8		刃部をもつ利器とみられるが、先端部を欠損しているため明瞭ではない。柄部断面は偏円形を呈する。先端部の丸味はサビによるもの。
14	不明 (鉄器)	長さ 4.3 刃部幅 1.1 ナカゴ 1.0		内刃部をもつ利器とみられる。先端部欠失。
1	甕 (土師)	21.8×—×—		口縁部は大きく外反し、口唇部が突出している。胴部は中位でふくらむ。
2	环 (土師)	13.6×—×—	口縁部	口縁部は垂直気味に立ち上がってから、やや強く外反し、体部との境に棱をもつ。体部は瓶状を呈する。
3	环 (土師)	15.5×—×—		口縁部は外反気味に内傾した後、やや外反する。口唇部は尖る。口縁部と体部の境に棱をもつ。
4	壺 (須恵)			口縁部は方形に作られ、わずかに内傾気味に内下方につぼまる。体部上半部には2方向に把手が付く。 底部は(?)形になると思われ、端部は丸く取めている。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
刷一ヘラナデ 刷一ヘラナデ	口一ヘラ磨き 刷一ナデ	橙	不 良	砂粒含	ほぼ完形
口一横ナデ 刷一ヘラナデ	ナデ	明赤褐	普 通	砂粒含	
ヘラ磨き	ヘラ磨き	に赤い褐	良 好	砂粒含	
口一横ナデ 刷一ヘラ削り	口一横ナデ 刷一ヘラ磨き	明赤褐 外刷一に赤い黄 橙	良 好	砂 粒	ほぼ完形 丹彩
口 横ナデ 底一ヘラ削り後 ナデ	ヘラ磨き	明赤褐	不 良	砂粒含	
口一横ナデ 底一ヘラ削り	口一横ナデ 底一ヘラ磨き	橙	良 好	砂 粒 長 石英含	
磨き	磨き	橙	良 好	砂粒含	完形
口一指ナデ 底一ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	良 好	砂粒含	
口一横ナデ 底一ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	普 通	砂粒含	ほぼ完形
口 横ナデ 以下一ハケ日後 ナデ	ヘラ磨き	に赤い褐	普 通	砂 粒 石英・雲母 長石含	
口・脚一磨き	环・脚一磨き	明赤褐	良 好	砂 粒 母 长石含	
指ナデ	指ナデ	褐	普 通	砂 粒	
口一指ナデ 刷一(上)ナデ (下)ヘラ磨き	口一指ナデ 刷一ナデ	灰黄褐	良 好	砂 粒 长 石英含	脚部中～下は煤付着
口一指ナデ 底一ヘラ削り	ヘラ磨き	橙	普 通	砂 粒 石英含	
口 指ナデ	磨き	明赤褐	不 良	砂粒含	
体部下半から端部 にかけてはやや斜 め方向にヘラ削り を行なっている。 体部下端は横方向 のヘラ削りを行な っている。	内面には粘土組 まき上げ痕が残 り粗らな整形であ る。粘土組の幅は、 2 cm前後である		不 良	長石粒 細砂粒多	

	番号 種類	法 墓 (口縁×器高×底径) cm	最 大 径	器 形 の 特 徴
第九十三号住居址(図156)	5 环 (須恵)	13.5×4.6×6.7	口縁部	体部は僅かに内縁氣味に外方へ開く。口縁部は若干外反し、端部は丸く收めている。
	6 环 (須恵)	14.0×4.7 ×—		体部はほぼ直線的に外方へ開く。口縁部はわずかに鋸きを残す。全体的につくりが丁寧で、水挽き痕は残さない。
	7 环 (須恵)	14.0×4.5×8.0	口縁部	体部は水挽き痕を強く残しながら、ほぼ直線的に外方へ開く。口縁端部はわずかに鋸きを残す。
	8 磁 石	長 幅 厚 16.0×9.0×2.9	最大幅	上面はほぼ平坦に磨かれ、側面はゆるい内縁氣味にカーブしている。
	9 鉄 片 (鉄器)	長 幅 厚 4.7×3.7×1.5		鉄板を折り曲げた柄を着装する部分と考えられる。刃部は欠損しており、機能不明。
	1 貝 (土師)	14.6×19.3×9.4	胴部中位上	平底で、胴部は中位上で最大径をもつ。
	2 貝 (土師)	16.4×4.0 ×—		口縁部は短く、僅かに外反する。胴部は僅かにふくらむ。
	3 环 (土師)	14.0×4.4×6.2	口縁部	平底で、体部は緩やかに内縁しながら立ち上がり、口縁部は肥厚でやや丸い。
第九十四号住居址(図158)	4 环 (須恵)	14.8×4.7×6.8	口縁部	体部は直線的に開いた後、口縁部近くで外反する。口縁部は丸い。平底である。
	5 环 (土師)	15.3×4.8×7.3	口縁部	体部は直線的に開き、口縁部は丸い。平底である。
	6 环 (須恵)	14.0×4.3×6.2	口縁部	体部は若干内縁氣味に大きく外方へ開く。口縁部はやや外反し、端部はやや鋸い。水挽き痕は弱い。
	7 环 (須恵)	13.8×4.7×6.8	口縁部	体部は底部との間に段を有し、當厚が僅かながら直線的に外方へ大きく開く。口縁部はわずかに外反し、端部は丸い。体部下半の外周には細かい水渦き模様がある。
	8 高台付环 (須恵)	— × 4.7×7.0		体部下半に回転ヘラ削りを施している。体部は内縁しつつ外方へ開く。
	9 环 (須恵)	13.2×4.8×6.5	口縁部	体部は底部との間に明瞭な切欠を有し、わずかに内縁氣味に外方へ大きく開く。口縁部は若干外反し、端部は丸く收められている。
	10 环 (須恵)	14.2×4.5×6.2	口縁部	体部は直線的に大きく外方へ開き、立ち上がる。口縁部はやや當厚が厚くなり、端部は丸く收められている。
	11 环 (須恵)	14.0×4.9×7.0	口縁部	体部はやや内縁氣味に大きく外方へ開く。口縁部は丸く收めている。水挽き痕はやや強く残っている。

整 形 法		色 調	燃 成	胎 七	備 考
外 面	内 面				
底部は彎な回転ヘラ切りのままである		灰オリーブ	良 好	長石 砂 粒 細砂粒合	
底部は回転ヘラ切りの後、丁寧にナデている		灰黄褐	良 好	長石・砂粒 細砂を多く含が全体の きめは細かい	
底部は回転ヘラ切りの後わずかにナデしている	内面は底部と体 部の境にやや強 いアテを有する	にぶい黄褐	良 好	長石等 細砂粒合	器面が内外ともにザラ ザラで手ざれ感が認め られず 安山岩
口一ヘラナデ 刷一ヘラ削り	ヘラナデ	にぶい赤褐	普 通	砂粒合	
口一指ナデ 胴一ヘラ削り	口一指ナデ 胴一ナデ	にぶい橙	不 良	砂 粒 雲母合	
					内墨 水掻き痕弱
ミズビキ模	ミズビキ痕	にぶい橙	不 良	砂 粒 スコリア合	
ミズビキ痕	ミズビキ痕	にぶい橙	普 通	砂 粒 スコリア合	ほほ完形
底部は回転ヘラ 切りのままで底 径は小さい		灰オリーブ	不 良 燃成時のヒ ビ割れが底 部に有り	長石粒 細砂粒合	水掻き痕弱
底部は回転ヘラ 切りの後、手持 ちヘラナデ 水掻き痕弱	水掻き痕は弱い	灰オリーブ	良 好	長石等の 細砂粒合	
底部は回転ヘラ 削りの後、外下 方へ聞く高台を 貼り付けている		灰	普 通	長石等の 細砂粒合	水掻き痕弱
底部は回転ヘラ 切りのままであ る。水掻き痕は やや強い	内面け底盤と体 部の境に強いア テが認められる	灰	良 好	長石等 砂粒多含	水掻き痕弱
底部はほとんど 切り離しのま で小さい			不 良	長石粒等 不純物が多 くきめ粗い	水掻き痕弱
底部は回転ヘラ 切りのままであ る	内面は底部と体 部との境が不明 瞭である		不 良 土師質須恵 器状を呈す る	長 石 細砂粒多含	

	番号	種類	法量 (口徑×器高×底径)	最大径	器形の特徴
	12	环 (須恵)	14.6×4.6×6.2	口縁部	体部は底部との境に段を有し、少し内側氣味に大きく外方へ開く。口縁端部は丸く取めている。
	13	底石	長 縱 5.3×3.4		正面はよく磨かれている。上下面も磨かれている。
	1	壺 (土師)	8.4 × - × -		口縁部はやや外反し、口唇部は内傾する。
	2	壺 (土師)	11.5 × - × -		頸部で直立した後、口縁部は直線的に開き、口部近くで水平に近くなる。
	3	台付壺 (土師)	12.8 × - × -	口縁部	口縁部は折り返し口縁で、口唇部は中央でくぼむがやや平坦である。頸部は中位に最大径をもつ。底部欠損。
	4	壺 (土師)	10.5 × - × -		口縁部は僅かに外反し、胸部は球状を呈するものと思われる。
	5	壺 (土師)	10.4 × - × -		口縁部は外反し、口唇部は丸い。胸部は強く張り出す。
	6	壺 (土師)	21.8 × - × -		口縁部は外反し、肩部は強く張る。
	7	壺 (土師)	16.2 × - × -		口縁部はやや外反し、口唇部は平坦である。肩部はややふくらむ。底部欠損。
	8	壺 (土師)	- × - × 6.6		平底で、胸部は僅かに内傾しながら大きく開く。
	9	壺 (土師)	12.9 × - × -		頸部は「く」の字状にくびれ、胸部は張る。
	10	壺 (土師)	- × - × 3.2		平底で、まろやかに内傾しながら立ち上がる。
	11	手挽ね (土師)	4.4×2.3×3.7	口縁部	平底である。
	12	手挽ね (土師)	5.0×2.5×3.8	口縁部	体部はほぼ直立し、口唇部は尖る。平底である。
	13	手挽ね (土師)	5.1×2.7×3.6	口縁部	体部は直線的に開き、口唇部は尖る。平底である。
	14	羽口 (土製品)	長さ 10.8 径 5.4 内径 1.8		円錐状を呈し、中央に孔を有す。端部は焼けて鉢溝付着。
	15	环 (須恵)	12.8×4.2×7.8	口縁部	体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部はややにぶい棱を呈する。
	16	壺 (須恵)	21.8×4.7 × -	口縁部	天井部はやや丸味をもち、径14cmに渡って回転ヘラ削りを施し、螺旋状のツマミを付けている。口縁部端部はほぼ垂直で両端は丸く取めている。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 滴	内 面				
底部は回転ヘラ 削りを施されて いる			普通	長石類等、 細砂粒多含	体部に褐色有り 水抜き強弱
口一指ナデ 削一削り後ナデ	ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
口一へラ削り 削一へラ削り後 ナデ	口一へラナデ 削一ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
口一指ナデ 削一ハク目整形 削一ナデ	口一ハケ目整形 削一ナデ	にぶい橙	普通	砂 粒 スコリア含	
口一たてにナデ 削一削り	ナデ	橙	良 好	砂 粒 雲母含	
口一ハケ目ナデ (タテ) 削一へラ削り	ロ一ハケ目後ナ デ 削一ナデ	橙	普通	砂粒含	
口一指ナデ 削一ハク目後ナ デ	ロ一指ナデ へラ削り	明赤褐	不 良	砂 粒 長石 雲母含	
		明黄褐	普通	砂 粒 スコリア含	
ヘラナデ	ヘラナデ	浅黄褐	不 良	砂 粒 長石 石英含	
	ロ一指ナデ	褐	不 良	砂粒含	
削一ヘラナデ 底一ヘラ削り	ヘラナデ	橙	普通	砂 粒 長石含	
指ナデ	指ナデ	褐灰	普通	砂粒含	完形
指ナデ	指ナデ	赤灰	普通	砂粒含	ほぼ完形
指ナデ	指ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	完形
		暗灰 中・下一浅黄褐	普通	砂 粒 長石 石英含	
底部は回転ヘラ 削りのまま、 体部との境はあ まり明瞭でない		灰白	良 好	長石粒 細砂粒含	水抜き強弱
		灰白	不 良	長石粒 細砂粒含	水抜き極弱

	番号	種類	法量 (口幅×器高×底径)	最大径	器形の特徴
第一 九作(一 十四 七世)	1	高台付碗 (須恵)	17.8×7.8×11.2	口縁部	体部はわずかに外方へ伸びた後、大きく屈曲し、ほぼ直線的に上方へ立ち上がる。口縁部は丸く收めている。
	1	环 (土師)	12.5×4.2×5.8	口縁部	平底部は緩やかに内側し、口縁部は丸い。
	2	环 (土師)	12.6×5.4×6.0	口縁部	平底部は直線的に開き、口縁部は丸く肥厚である。
	3	环 (土師)	13.5×—×—		平底。体部は内側しながら立ち上がり、口縁部近くで器肉がぐっと薄くなり口唇部は丸く肥厚である。
	4	盤 (須恵)	17.0×3.2×9.0	口縁部	口縁部との境はにない様ではあるが明瞭に屈曲している。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く收めている。
	5	盤 (須恵)	—×—×9.5		水挽痕は深く丁寧を作りである。
	6	曲物 (木器)	長 幅 厚 9.4×9.0×0.8		ほぼ完形に近い円形の蓋で、柾目(ひのき目)の板材を用いている。両面を鏝(やりがんな)で整え、縁端から幅1cm、厚さ0.5cmほど周縁を薄くし、側板と曲物本体を木皮で固定している。縫孔は4孔である。側板の厚さは0.3cm、幅2cmほどで、両端を重ねて両端2箇所を木皮で縫じ合せている。
	7	曲物 (木器)	長 幅 厚 8.5×8.4×1.1		柾目の板材を用い、両面を鏝(やりがんな)で整え円形に作っている。縁端から幅1cm、厚さ0.5cmほど周縁を薄くし、木皮で側板を固定していたと思われる。縫孔は5孔確認することができる。(復原では7孔と思われる)
	8	(木製品)	長 幅 厚 39.5×13.0×3.2		木材を鋭利な刃物で裁断したままのものである。何に使用したものか不明であるが、裁断面に磨滅痕がある。
	9	(木製品)	長 幅 厚 49.8×5.8×1.6		木材は著しく腐蝕し凹凸している。木口から約3cmの位置に長径6.5cm、短径3.0cmほど表裏に貫通して不整形に枘穴風の加工が施されている。また一方の木口には長辺9.7cm、短辺4.0cmほどの方形を呈する切り欠き部か枘穴の破損したものか不明の加工痕がある。
第二 号井戸 状 道 構 171	10	(木製品)	長 幅 厚 42.7×9.4×3.0		木材を鋭利な刃物で裁断したままのものである。裁断面に用途不明であるが磨滅痕がある。
	1	环 (須恵)	14.0×4.5×7.2	口縁部	体部は器底を渡じながら内側に向いて大きく外上方へ開く。口縁部はわずかに外反をみせ、端部は丸くおさめている。
	2	环 (須恵)	13.8×4.8×6.8	口縁部	ロクロ回転(時計回り)

	番号 種類	法 周 長 (口径×器高×底径) cm cm cm	最 大 径	器 形 の 特 殊
第二号井戸状造構(図1)	3 蛇(須恵)	16.5×3.4×11.0	口縁部	口縁部はやや外反し、端部は丸く収めている。底部は丸味を持つ。底部外周部はやや外反し、にぶい棱を呈する。口縁部との境に主筋。
	4 高台付环(須恵)	14.4×6.0×8.2	口縁部	底部と体部とは屈曲によって明瞭であるが、屈曲部附近を焼成後研磨して面取りしている。体部はほぼ直線的に外上方へのびる。口縁端部はやや鋸さを残している。
	5 高台付环(須恵)	—×—×5.0		体部は器厚を渡しながら直線的に外へ立ち上がる。体部との境は屈曲し、明瞭な棱をしている。
	6 高台付环(須恵)	—×—×8.6		
	7 高 手 槌(須恵)	—×—×—		底部は丸味をもつて口縁部に至る。脚部の円錐部は細くしばり、底部は大きく外方へ開くと思われる。
	1 製(土師)	18.8×—×—		頸部から「く」の字に直線的に外反する。
	2 製(土師)	—×—×8.5		底部は上げ底。胴部は球形。全体に傳手で成形が丁寧。
	3 製(土師)	—×—×7.3 孔径 1.3		
第一号方形周邊構(図14)	4 器 台(土師)	8.1×—×—		受け部は直線的に外傾した後、口縁部で直立し、口特部は尖る。受け部孔を有している。
	5 製(土師)	13.4×14.2×5.2	胴部 中位	底部は平底で中央が若干上げ底状。胴部は横に張る球形。頸部は「く」の字次に括れる。口縁部は外反する。器厚はほぼ一定しているが口縁部のみ厚みがあり、端部は丸い。
	6 増(土師)	9.7×17.0×5.0	胴部 中位	底部はやや上げ底。胴部はほぼ球形。頸部は「く」の字次に括れる。口縁部は直線的に外反し、口特部はやや鋸くなる。器厚は全体的に薄手である。
	7 手 槌 ね(土師)	—×—×2.5		厚みのある平底から直立して立ち上がり、外側は直角に内傾して底部との境は不明瞭。口縁端部は平出。
	8 紡錘 庫	上面溝 器高 下面孔 4.0×2.7×5.0 孔径 0.5		上製、円錐台形で、成形は比較的丁寧。中央に貫通孔を有し、円孔周縁に若干の擦痕が認められる。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 上	備 考
外 面	内 面				
回転ヘラ削りの後、短かく外方へふんばる高台が貼り付けられている。	重ね焼きの痕跡 がみられる。	緑灰	良 好	長石粒 細砂粒多含	水焼き痕跡 高台内側に焼成時の焼き割れがみられる。
底部は回転ヘラ削りの後、わざかに外方へ開く高台を貼り付けている。		にぶい橙	普 通	長石含	水焼き痕跡
底部は回転ヘラ削りの後、外方へふんばる高台を貼り付けている。		暗青灰	良 好	長石粒 細砂粒含	水焼き痕跡
底部が回転ヘラ削りの外は回転を利用したナダ(横トテ)ロクロ回板(時計回り)	内面は人念	にぶい橙	不 良 (生焼き)	石英・長石 類等の砂粒を含むが、かなり精製されている	底部下面に1印のヘラ記号有り。焼きが甘いこともあるがかなり手ずれ痕あり。
高台下部は回転ヘラ削りを行なっていいると思われるが、底緑色の吹き出し物が斑点状に付着しているため明瞭でない。		灰	良 好	長石粒 細砂粒含	水焼き痕跡
口一指ナデ	口一指ナデ	にぶい黄褐	不 良	砂粒含	
ヘラ磨き	ヘラナデ	にぶい橙	不 良	砂 粒 雲母含	
ヘラ削り	ヘラナデ	にぶい黄褐	良 好	砂 粒 石英含	
口一指ナデ ヘラ削り	口一指ナデ ヘラナデ	橙	良 好	砂粒(多) スコリア含	
口一指ナデ ハケ目	ナデ	にぶい橙	不 良	砂 粒 雲母 長石含	ほぼ完形
ヘラ磨き	明一ヘラナデ後 磨き	明赤褐	普 通	砂 粒 雲母 長石含	作りは全体に丁寧であるが、器形に差みあり
ヘラ削り	指圧板	赤褐	普 通	砂粒含	
					80g

	番号	種類	法量 (口徑×器高×底径)	最大径	器形の特徴
第九号土器図版	9	勾玉 (石製模造品)	長さ 5.0 最大幅 3.4 厚さ 0.5		板状。両面、側縁とも成形時の擦痕あり。 片面に3mm方眼前後の凹みをもつ。
	1	壺 (土師)	14.1×—×—		肩は丸味をもち、頸部に「く」の字に括れ、直線的に外傾する口縁部は上位で折り返しなり、折り返し部はやや鋸くなっている。
	2	壺 (土師)	11.8×6.8×2.2	口縁部	平底は若干上げ底氣味。頸部は半球形に近い。頸部は若干括れ、口縁部は直線的に外傾し、口唇部は丸い。
第十号土器図版	3	壺 (土師)	17.7×—×—		肩部はなだらかな内傾で頸部に至り、頸部は直立し、中位から若干外反し、口唇部は丸味をもつ。
	4	壺 (土師)	15.9×—×—	頸部下位	輪植の痕か? 表面に凸凹がある。
	5	壺 (土師)	13.8×—×—		頸部はやや張り、丸味がある。頸部は直立し、上位で外反する。口唇部の基部は変化せず平坦。
第十一号土器図版	6	壺 (土師)	14.5×—×—		頸部からなだらかに内傾して頸部に至り、頸部は直立し中位から外反する。口唇部は肉厚のままでは端部はやや丸味をもつ。
	7	壺 (土師)	15.4×6.3×—	口縁部	体部は弧状で、若干括れ、口縁部は外反して開く。口縁端部はやや唇厚を減じるが丸味をもつ。
	8	壺 (土師)	12.6×5.4×—	口縁部	やや偏平な瓶状。頸部は若干の段を有し、口縁部は直線的に外傾して立ち上がり、口唇部はわずかに尖がる。
第十二号土器図版	9	壺 (土師)	12.6×—×—	頸部中位	頸部はほとんど膨らまず、頸部の括れは「く」の字を呈し、口縁部は外反して、口唇部は平坦である。

整 形 法		色 制	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				完形
ローナデ 頭部一ハケ目	ローナデ	にぶい黄橙	普通	砂 粒 石 英 スコリア含	
II一ハケ目整形 の後ナデ 刷一ハケ目整形 の後ヘラナデ 底一ヘラ削り	II一ハケ目整形 の後ナデ 刷一ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂 粒 少 含	
ローナデ 刷一ナデ	ローナデ 刷一ヘラナデ	橙	普通	砂 粒 スコリア含	
II一ナデ 刷一削り後ナデ	II一ナデ 刷一ヘラナデ	にぶい橙	不 良	砂 粒 石 英 青 梅 (白) スコリア含	
ローナデの後ヘ ラ磨き 刷一ヘラ削りの 後ナデ	ローナデの後ヘ ラ磨き 刷一ナデ	にぶい橙	普通	砂 粒 スコリア含	
ローナデ後ヘリ 磨き 刷一ヘラ磨き	ナデ	にぶい橙	良 好	砂粒含	
ロ一横ナデ 刷一削り	ロ一磨き 刷一磨き	外一にぶい橙 内一橙	良 好	砂粒含	完形
ローナデ ヘラ削り	ヘラ磨き	橙	普通	砂 粒 スコリア含	
刷一ハケ目調整	ヘラナデ	橙	普通	砂 粒 スコリア含	

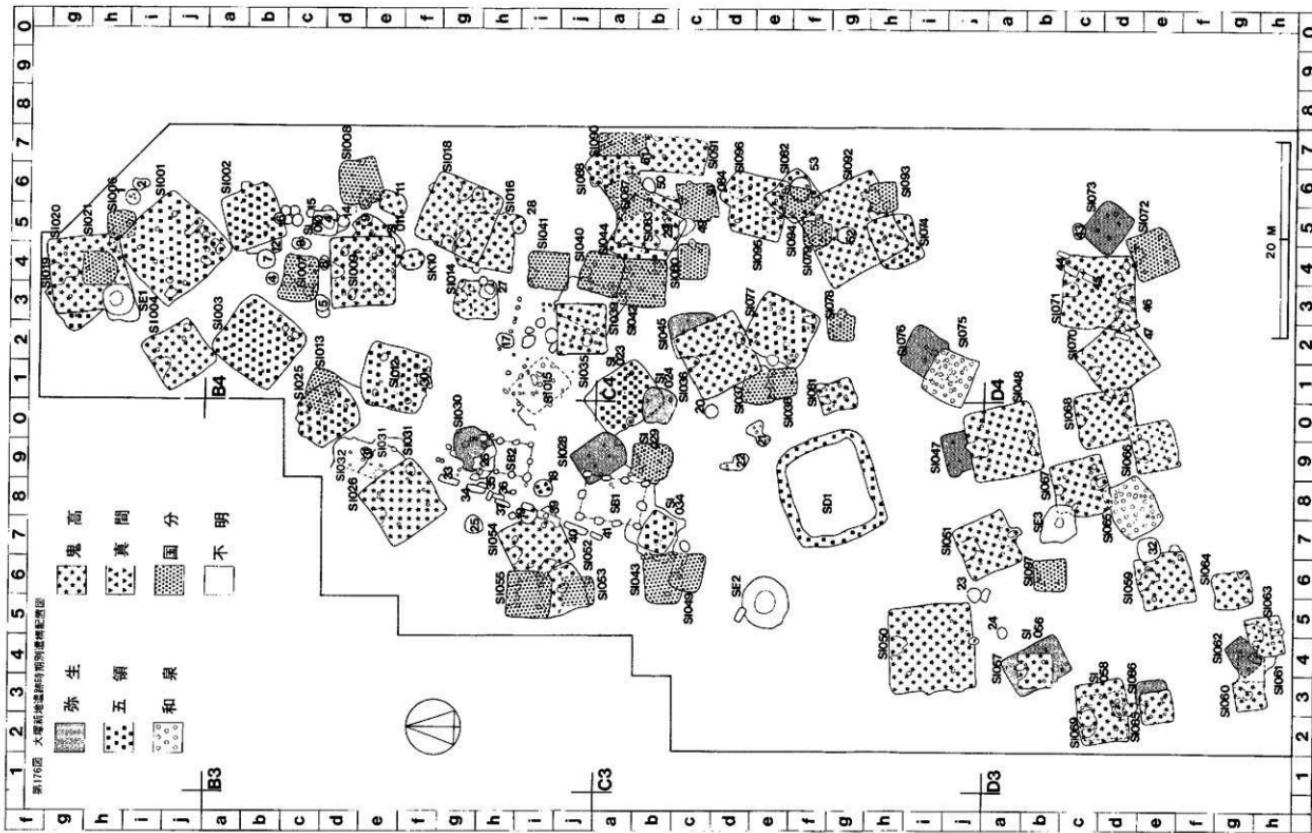
表3 大塚新地遺跡住居址一覧表

遺構	位 置	形 種	長軸×短軸 m	面積 m ²	壁高 cm	卡軸方向	炉 カマド	柱 穴	貯藏穴	出 土 造 物	時 期	備 考
001	A3i4	隅 丸 正方形	8.85×8.83	63.8	53~72	N-47-E	炉	8	3	土器(盆、碗) 陶石、切瓦	五 領	壁溝・火災
002	B4i5	隅 丸 正方形	5.56×5.32	23.7	50~61	N-70-W	炉	4		矢先 骨器(環、鋸齿、 箭、頭)	五 領	壁溝・火災
003	B4b2	隅 丸 正方形	7.35×7.28	43.9	45	N-38-E	炉	5	1	土器(瓶、罐、盆、 器)	五 領	壁溝・火災
004	A4j2	隅 丸 正方形	5.68×5.60	26.7	60	N-30-W	カマド	4	1	上部(瓶、罐、器) 炭化材	鬼 高	壁溝・火災
005	A4h3	隅 丸 正方形	2.83×2.74	5.9	25	N-9-W	カマド	1		土器(盆、手型) 兔牙(猪耕事)	国 分	壁溝
007	B4e3	隅 丸 長方形	4.46×3.30	14.5	25~31	N-30-E	カマド	3	1	土器(盆、手型) 兔牙(猪耕事)	国 分	
008	B4d6	隅 丸 正方形	4.57×4.24	17.3	18~34	S-75-E	カマド	2	1	土器(瓶) 鉄製品	国 分	壁溝
009	B4d4	隅 丸 反方形	6.90×6.35	39.0	40~50	N-1-E		4		土器(盆、土器、支 脚)、陶石	鬼 高	壁溝・火災
010	B4c5	隅 丸 正方形	2.45×2.55	7.8	36~23	N-1.5-W	カマド	4		陶石		
011	B4c5	隅 丸 長方形	4.80×4.40		30	N-45-E	カマド	2		土器(瓶小、支脚、 石臼)	五 領	
C12	B4e1	隅 丸 長方形	5.52×6.32	22.4	18~36	N-10-E	炉	4		土器(瓶)	五 領	壁溝
013	B4d1	方 形	3.32×2.98	8.67	15	N-18-E	カマド			土器(瓶)	国 分	
014	B4g3	隅 丸 正方形	3.90×3.70	17.0	32~45	N-1.5-W	カマド	4				貞間
015	B4a1	隅 丸 正方形	6.30×4.98	20.0	26~11	N-44-W	炉			青銅鏡		
016	B4h4	正方形	5.58×5.84	31.0	32	N-6-E	カマド	4		土器(盆、甕、罐、 豆、盤)、須恵器(盆、 豆、盤)	鬼 高	南洋中央部 に上陸あり 火災
017	B4i2	不 明				不 明	炉			土器(台付盤片) 土器(手形の齊玉式 上部)	不 明	
018	B4g5	隅 丸 長方形	7.30×7.05	46.6	30~65	N-63-W	カマド	4	東ゴー 子-1	土器(甕、盆、罐、 豆、盤)、須恵器(盆、 豆、盤)	鬼 高	壁溝・火災
019	A4g3	隅 丸 反方形	5.13×4.80	22.7	30	N-34-W		1		土器(盆)	五 領	
020	A4g4	正方形	7.95×7.90	48.3	36~70	N-7.5-W	カマド	3	1	墨書き 鉄製品	鬼 高	壁溝・火災
021	A4h4	長方形	3.28×3.03	6.2	15	N-10-E	カマド		1	須恵器(瓶、罐、器) 鉄製品	国 分	
023	C3a0	隅 丸 長方形	7.08×5.86	34.7	26~42	N-34-W	炉	4		土器(台付盤、許器 台)	五 領	
024	C3b0	隅 丸 長方形	3.60×2.93	5.3	40~50	N-2-E	不 明	1		骨器(器) 石製品	勞 生	
025	B3d0	隅 丸 長方形	5.85×5.53	29.5	15~30	N-36-W	炉	4		土器(器、甕、支脚、 豆、盤)、器台	五 領	
026	B3f8	隅 丸 正方形	6.82×6.81	38.4	75~100	N-38-W	カマド	4	1	土器(盆、甕、罐、 豆、盤)、鐵石	鬼 高	火災
028	C3a9	隅 丸 長方形	5.03×3.70	15.0	15~40	N-34-W	炉	4	1	骨生(骨、甕、支脚、 豆、盤)	勞 生	
029	C3b9	方 形	3.98×3.35	11.4	?	N-3-E	カマド			須恵器(盆) 結石	國 分?	
030	B3g9	円 形	4.22×3.45		20~37	N-1-E	炉	4		骨生(骨、甕、支脚、 豆、盤)、鐵石	勞 生	

遺構	位置	形態	長軸×短軸 m	面積 m ²	埋深 cm	主軸方向	炉 カマド	柱穴	貯藏穴	出土遺物	時期	備考	
												火葬場	土師器
031	B3e9	隅丸形	不明	不明	不明	N-31°-E	炉				不明		
032		隅丸形	不明	不明	不明	N-25°-E	炉			火葬式土器片、頭骨片、上部器片、小玉	不明		
034	C3e7	隅丸及方形	3.96×3.18	11.1	36	N-63°-W	カマド	4		土師(窓)、火葬式土器片	五輪		
035	B4j2	隅丸正方形	5.07×5.05	21.1	24~56	N-92°-W	カマド	4		七輪(窓、窓、高环、火葬式土器片、鐵石、灰燼)	鬼高	壁溝・火災	
036	C4d2	正方形	7.08×6.92	43.5	53~60	N-25°-W	カマド	4		七輪(窓、窓、火葬式土器片、鐵石、灰燼)	鬼高	壁溝・火災	
037	C4e1	隅丸長方形	4.30×3.37	8.55	39	N-88°-W	カマド			頭窓(火葬式土器片、高台付石)	国分	號溝	
038	Cte1	隅丸長方形	3.64×2.81	6.0	60	N-5°-W	カマド			頭窓(火葬式土器片、高台付石)	国分	壁溝	
039	B4j3	長方形	6.50×4.10	24.5	38	N-25°-E					不明	壁溝	
040	C4a4	隅丸正方形	4.15×4.00	13.5	34~85	N-18.5°-E	カマド	4		土師(窓)、方子(鐵製)、頭窓(高台付石)	国分		
041	B4i4	長方形	4.20×3.85	11.0	27~65	N-6°-E	カマド	4		頭窓(火葬式土器片、高台付石)	国分		
042	C4a4	正方形	4.79×4.82	20.0	45~55	N-4°-E	不明	4	1	頭窓(火葬式土器片)	国分		
043	C3e6	隅丸長方形	4.79×4.82	12.3	40~45	N-85°-E			1	土師(高台付石)、頭窓(火葬式土器片)、鐵石	国分	壁溝	
044	C4a5	隅丸正方形	6.35×6.45	37.3	45~60	N-71°-W	炉	4		1.5m小壁溝、高环、白石(鐵)、鐵鋤頭、鐵石	五輪	號溝	
045	C4e2	隅丸形	4.99×4.41	17.6	30~34	N-12°-W		2		火葬式(火葬)	佛生(土台付)		
047	C3j9	隅丸長方形	4.93×4.00	19.2	20	N-8°-W	炉	2		土師(窓、高环、火葬式土器片)	佛生後	壁溝・火災	
048	D3a9	隅丸長方形	7.21×7.02	43.6	60	N-10°-W	カマド	4	2	土師(火葬、鐵、頭窓)、鐵石	鬼高	火災	
049	C3e6	隅丸長方形	4.02×3.09	7.8	45	N-14.5°-E	カマド		1	土師(火葬、頭窓)、頭窓(火葬、火葬)	国分	號溝	
050	C3i4	隅丸正方形	9.01×9.00	65.8	50	N-3°-W	カマド	4		土師(窓、火葬、火葬)、鐵石	鬼高	壁溝	
051	D3a7	隅丸形	5.70×5.60	25.9	35~45	N-27°-W	カマド	4		土師(火葬、火葬、頭窓)、鐵石	鬼高	壁溝・火災	
052	B3j6	隅丸正方形	4.46×4.35	17.6	40	N-11Z-E	カマド	1	1	土師(火葬、火葬)	鬼高		
053	B3j6	隅丸長方形	3.70×3.10	10.1	10~52	N-2°-W	カマド	1	1	頭窓(火葬)、鐵製品、鐵石	国分		
054	B3i7	隅丸正方形	3.96×5.94	33.0	50	N-31°-W	カマド	4		土師(火葬、火葬)、頭窓(火葬)、鐵製品	鬼高	壁溝・火災	
055	B3i5	隅丸正方形	4.83×4.70	18.5	72	N-0°-E	カマド	4		頭窓(火葬、火葬)、土師(火葬)	国分	號溝	
056	D3e4	隅丸正方形	3.55×3.50	9.9	35	N-3°-W	カマド	4		土師(火葬)、頭窓(火葬)、鐵製品、鐵石	鬼高	壁溝	
057	D3e4	隅丸長方形	6.30×4.20	25.1	17	N-30°-W		2		火葬式土器片、鐵石	佛生後期		
058	D3e3	長方形	6.25×5.10	26.0	40~50	N-82°-E	カマド	4	1	土師(窓、火葬、火葬)、鐵石	鬼高	壁溝・火災	
059	D3e6	長方形	5.42×5.25	26.5	22~56	N-18°-W	カマド	4	1	土師(窓、火葬、火葬)、鐵石	鬼高	火災	

遺構・位置	形態	長軸×短軸 m	面積 m ²	壁高 cm	主軸方向	掘 カマド	柱穴	着底穴	出土遺物	時期	層 序
060 D3g3	長方形	3.15×2.72	8.5	10~15	N-8°-W	カマド			土師付灰、甕、鉢	鬼高	
061 U3h4	長方形	2.90×2.60	7.8	20~25	N-9°-W	カマド			土器片(輪郭車) 灰陶瓦片、瓦片 須恵器片	不明	
062 U3g4	長方形	3.97×2.70	6.4	20~25	N-49°-E	炉 坑	2		弥生式土器片、石	弥生	
063 D3h5	隅 丸 長方形	4.18×3.70	14.4	23~31	N-10°-W	カマド	3		土師付灰、甕 須恵器片 須恵器(刀子)	真間	
064 D3g6	隅 丸 正方形	3.88×3.80	12.8	12~22	N-101°-W	カマド		1	土師付灰、甕 須恵器(石製)	鬼高	火災
065 D3d8	隅 丸 長方形	5.22×4.84	21.2	16~35	N-31.5°-W	炉	4		土師付灰、甕(白)	都泉	壁溝・火災 炭化物
066 U3e9	隅 丸 長方形	4.74×4.45	18.5	45	N-8°-W	カマド	4		土師付灰、甕 須恵器(白)	真間	壁溝・火災 炭化物
067 U3e8	隅 丸 長方形	5.82×5.63	29.3	23~39	N-16°-W	カマド	4	1		鬼高	火災
068 U3d0	正方形	5.26×5.11	23.8	44~50	N-11°-W	カマド	4	1	土師付灰、甕、甕、壺 灰(白)	鬼高	壁溝・火災
069 D3d2	正方形	4.73×4.67	20.24	?	N-71°-E	カマド	4			不明	
070 D4d2	正方形	6.50×6.21	36.0	26~55	N-38°-W	カマド	3	1	土師付灰、甕 上部 砂石	鬼高	壁溝・火災
071 D4c3	隅 丸 長方形	7.67×7.40	47.6	35~72	N-2°-E	カマド	4	1	土師付灰、甕、高脚 土師付灰、小型甕、 支脚	鬼高	壁溝・火災
072 D4c4	隅 丸 長方形	4.65×4.39	16.6	50	N-2°-W	カマド	4		須恵器(白) 瓦石 土師付灰、小型甕、 支脚	国分	壁溝
073 D4d5	隅 丸 長方形	4.83×3.92	17.2	21~29	N-56°-W	炉 坑	5		弥生式土器片	寄生	
074 C4h5	隅 丸 方形	5.55×4.50	23.5	15~30	N-68°-E	炉 坑	2		土師付壺、环、器台、 鉢	五頭	
075 C4j1	正方形	4.92×4.60	21.6	16~31	N-68°-W	炉	4	1	土師付壺、高脚 砂石	都泉	火災
076 C4i2	正方形	4.35×4.15	16.9	15~26	N-62.5°-W	炉 坑	2		弥生14片 瓦4 瓦石	寄生後期 (上古式)	
077 C4c2	隅 丸 方形	6.53×6.25	37.2	15~26	N-27°-E	炉 坑	4	1	土師付灰、支脚、 縫合付、壺	五頭	壁溝・火災 炭化物
078 C4g2	隅 丸 正方形	2.70×2.65	5.3	35	N-91°-E	カマド	1		須恵器片	国分	壁溝
079 C4f5	隅 丸 長方形	2.81×2.50	6.1	28~37	N-89°-E	カマド	4		土師付高台(白) 砂石、須恵器片	国分	
080 C4c4	隅 丸 長方形	3.80×3.15	11.1	40	N-86°-E	カマド	2		土師付灰、 砂石、須恵器片	国分	
081 C4g1	隅 丸 長方形	3.66×3.11	9.8	14~18	N-13°-W	カマド	4		土師付壺、 砂石	鬼高	壁溝
082 C4f6	隅 丸 正方形	4.62×4.50	18.7	20~30	N-44°-W	炉	2	1	土師付壺、支脚、 甕、壺、環、环 高脚、砂石	五頭	
083 C4h5	隅 丸 方形	6.40×6.35	38.1	50	N-8°-E	カマド	3		須恵器(白) 瓦、高脚 土師付壺、砂石 鐵器(劍、盾)	鬼高	壁溝・火災
084 C4e6	長方形	3.90×3.75	12.1	35~60	N-5°-W	カマド	1		須恵器(白) 瓦、高脚 刀子、瓦玉、砂石	国分	火災
085 U3e3	正方形	3.30×3.23	9.5	17~32	N-9°-W	カマド	1		土師器片 須恵器片	鬼高	
086 D3e3	隅 丸 長方形	3.32×2.41	6.7	25	N-3°-W				弥生式土器片 (小口式)	弥生	

通番	位置	形態	長軸×短軸 mm	面積 mm ²	壁高 cm	主軸方向	炉 カマド	炉 穴	野廻穴	出土遺物	時期	備考
087	C4a6	正方形	4.10×3.90	14.4	45	N-3.5°-E	カマド			埴造(16) 土師(甕)	国分	
088	C4a6	正方形	4.90×4.75	21.3	40	N-53°-E	炉 坑			土師(甕), 磨石, 石器(磨石), 鉄製品(鍛錬炉)	五箇	
089	C4a7	不明					カマド			黑陶土器	不明	
090	C4a7	楕圓丸 正方形	4.73×4.70	20.3	35	N-S°-W	カマド	2		埴造(16, 橙) 土師器片 鉄製品(刀子)	国分	號満
091	C4c7	長方形	6.40×3.37	19.0		N-3°-E	カマド	2		土師(16) 研石, 嵌造器片 鉄製品(刀子)	鬼高	周満
092	C4e5	正方形	9.15×9.10	77.4	42~68	N-16°-W	カマド	6		土師(16, 橙) 研石, 小體 鉄製品(刀子)	鬼高	A.I施設 あり
093	C4h6	楕 圓 長方形	3.00×2.60	7.0	10~38	N-4°-W	カマド			埴造(16, 橙) 土師(16, 甕) 土師(16, 甕) 研石	国分	
094	C4f6	楕 圓 長方形	2.93×2.72	6.8	58	N-1.5°-E	カマド			土師(16, 甕) 研石, 嵌造(16) 鉄製品(刀子)	国分	北西の位置 に號満
095	C4e6	楕 圓 長方形	6.20×5.80	33.3	32~48	N-9°-E	炉 坑	3		土師(16, 甕) 研石, 研石 鉄製品(刀子)	五箇	
096	C4d6	長方形	3.80×3.50	11.8	35~50	N-26°-E	不 明				不明	
097	D3b6	正方形	3.42×3.26	9.8	36~48	N-2°-E	カマド	3		埴造(甕) 土師(甕)	国分	



第4節 まとめ

本遺跡は、西側の谷津田に面した標高34.0m～36.4mほどの緩やかに傾斜する台地の縁辺部に遺構が集中している。確認された遺構は、竪穴式住居址94軒、土塗50基、井戸状遺構3基、掘立柱建築址2基、方形周溝遺構1基である。

弥生式時代に比定される住居址は10軒ほどであり、その内遺構・遺物の良好な状態で出土したのは第24号住居址と第73号住居址のみである。他の住居址は新しい遺構と複合して検出されている。住居址の中で、円形の形態を呈する住居址は第30号住居址で他は方形の住居址である。

方形の住居址の中で隅丸方形の住居址は4軒である。住居址からの出土遺物は第24号住居址を除いて破片のみで量は少ない。第2号住居址の五頭期と思われる遺構の床面から弥生式土器（土王台式土器）を出土している。第34号住居址の北側から弥生時代の壺棺が出土し、その中から人骨と思われるものを検出しており、弥生時代中期に比定されるものと思われる。長岡系に比定されると思われる上器を出土している住居址は4軒で、土王台式土器を出土している住居址は1軒であり、破片のみではっきりと時期決定はできないが、土王台式土器よりも古い形式と思われる上器片を出土している住居址は3軒である。その他弥生式土器の細片のみ出土しており、時期不明の住居址が2軒である。

古墳時代五頭期に比定される住居址は16軒で、他に土塗2基、方形周溝遺構1基である。その内、遺構・遺物とも良好な状態で検出された住居址は第1号住居址、第2号住居址、第3号住居址、第12号住居址、第23号住居址、第77号住居址である。他は新旧の住居址と複合している。五頭期に比定される住居址は第1号住居址（8.85m×8.83m）のように大型で、長辺が約5m以上の住居址が11軒を数える。これらの竪穴式住居址ではかげを有し、調査区の北部から中部にかけて多く検出されている。

和泉期に比定される住居址は南部に2軒ほど検出されている。住居址の規模はどちらも長辺が3m内外の方形の住居で床のほぼ中央にかげを有し、柱穴は4個所確認されている。出土遺物は、土器、壺、高杯、壺と瓶石などで量は多くない。

鬼高二期に比定される住居が28軒を数え、全住居址中の約30%を占めている。鬼高二期の住居址は主に北壁の中央部にカマドを有し、長辺が約5mを超える住居址が21軒と、大型の住居址が多い。他は長辺が5cm以下の住居址が7軒検出されている。時期が新しくなるにしたがって大型の住居址が構築され、鬼高二期の終末になると長辺が5m前後の住居址が構築されている。鬼高二期に比

定される。住居址は調査区全体に分布しているが、中部から南部にかけて時期の新しい住居址が多く分布している。この時期の住居址には、南壁中央付近に出入入口の施設と思われる一段高いベルトが半周し、その中心部に土壙を有している。そのような住居址が、8軒検出されて、これらの住居址は大型で、土壙に竪溝が連結されて、雨水等が流れ込むような工夫がなされていたと思われる。鬼高窓の第8号・第16号・第26号・第35号・第54号・第91号・第92号住居址などからは鍛冶と関係のある羽口、鉄滓や刀子など鉄製品を出土している。石製の勾玉などの模造品を出土している住居址は、第4号・第14号住居址で、上製・石製の鍛錬車を出土している住居址は第16号・第36号・第64号・第70号住居址である。鬼高窓の住居址で、新と旧の2期に分離するすれば、古い時期の住居址は第12号・第18号・第52号・第58号・第59号・第64号・第67号・第68号・第70号・第71号・第81号・第91号・第92号住居址と13軒を数え、その内でも第12号・第18号住居址が最も古い時期の住居址と思われる。新しい時期の住居址は第4号・第9号・第16号・第20号・第26号・第35号・第36号・第47号・第48号・第50号・第51号・第54号・第60号住居址の13軒であり、ほぼ同数をかぞえる。第56号・第85号住居址は時期決定の出土遺物は少なく、破片のみであるが、鬼高窓の範疇に入るものと思われる。これらの住居址からの出土遺物は鬼高窓になり急激に多くなってくるようと思われ、土師器は壺、甕、瓶、壺、高杯、堆、鉢、碗、器台、手捏、支脚などを出土し、特に甕、瓶、壺などの出土量が多い。加えて須恵器の出土量も多くなり、甕、壺などを多量に出土している。第16号住居址からは須恵器の鏡の残欠を出土している。

真間期に比定される住居址は調査区の中央部に1軒、南部に2軒ほど検出され、規模は、長辺が4m内外の小型の住居址で、北壁にカマド有し、柱穴は4個所検出され、土師器の甕や壺と、須恵器の壺等を共伴している。開分期のどの住居址も北壁中央部にカマドを有し、長辺が3.0～2.0mの住居址が4軒、長辺が4.0～3.0mの住居址が9軒、長辺が5.0～4.0mが12軒検出されている。中規模以下の住居址が多く、鉄製品を出土している住居址は6軒、石製鍛錬車を出土している住居址が1軒、石製模造品を出土している住居址が1軒である。

大塚新地遺跡全体を通じて、遺構の検出量・遺物の出土量も多く、弥生時代から、古墳時代、奈良平安時代と長期にわたって、当時の人々の生活の場であったことを物語っている。そして、人々の生活の基盤は台地西側の沖積低地にあったと思われる。



遺跡全景

1



作業風景

2

写1

大塚新地遺跡作業風景

上第



第1号住居址



第3号住居址

2



第4号住居址

3



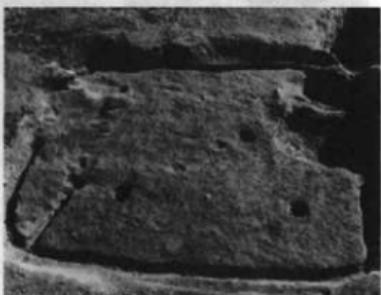
第4号住居址出土状况

4



第7号住居址

5



第8号住居址

6

写 2

大塚新地遺跡竪穴住居址



第9号住居址

1



第12号住居址

2



第14号住居址

3



第16号住居址

4



第18号住居址

5

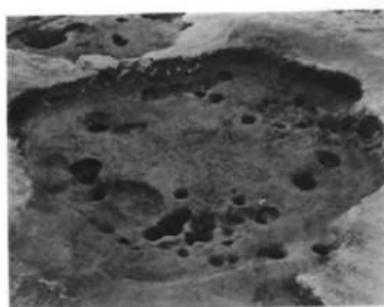


第20号住居址

6

写3

大塚新地遺跡竪穴住居址



第13·25号住居址



第25号住居址出土状况



第26号住居址出土状况



第43·49号住居址



第35号住居址



第35号住居址出土状况

写4

大塚新地遺跡竪穴住居址



第36·45号住居址

1



第38(左)·37号住居址

2



第39号住居址

3



第42号住居址

4



第47(手前)·48号住居址

5



第45号住居址出土状况

6

写 5

大塚新地遺跡堅穴住居址



第49号住居址出土状況



第50号住居址

1



50号住居址出土状況

3



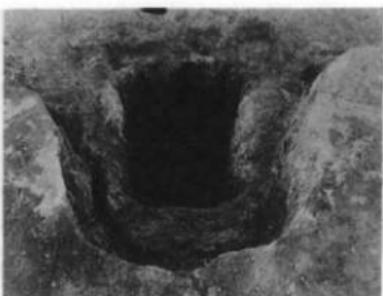
第50号住居址カマド内出土状況

4



第51号住居址

5



第51号住居址ピット

6

写 6

大塚新地遺跡竪穴住居址



第51号住居址出土状況

1



第51号住居址カマド内出土状況

2



第52号住居址出土状況

3



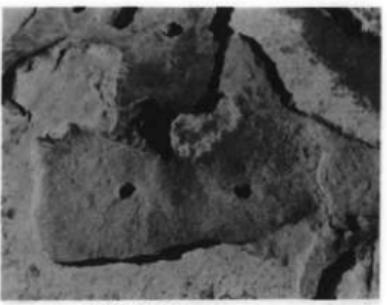
第56(内側)・57号住居址

4



第58号住居址

5



第60号住居址

6

写7

大塚新地遺跡竪穴住居址



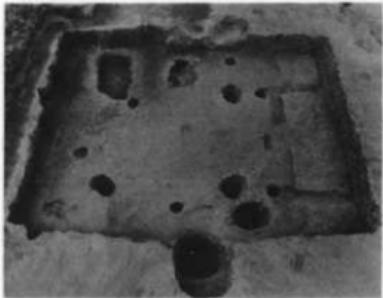
第63号住居址



第65号住居址



第68号住居址



第69号住居址



第71号住居址



第72号住居址

写 8

大塚新地遺跡竪穴住居址



第73号住居址

1



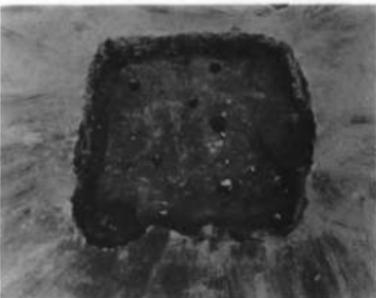
第76号住居址

2



第77号住居址

3



第78号住居址

4



第1号方形周溝

5

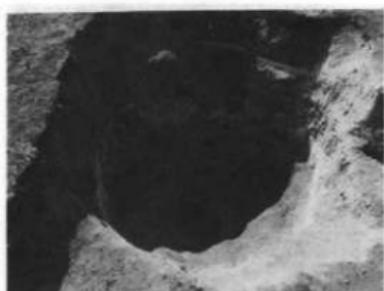


第34号住居址付近埋設土器

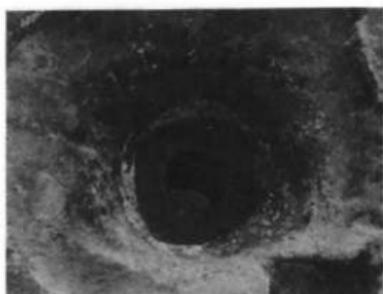
6

写 9

大塚新地遺跡竪穴住居址その他



第 1 号 井 戸 1



第 2 号 井 戸 2



第 2 号 井 戸 出 土 状 況 3



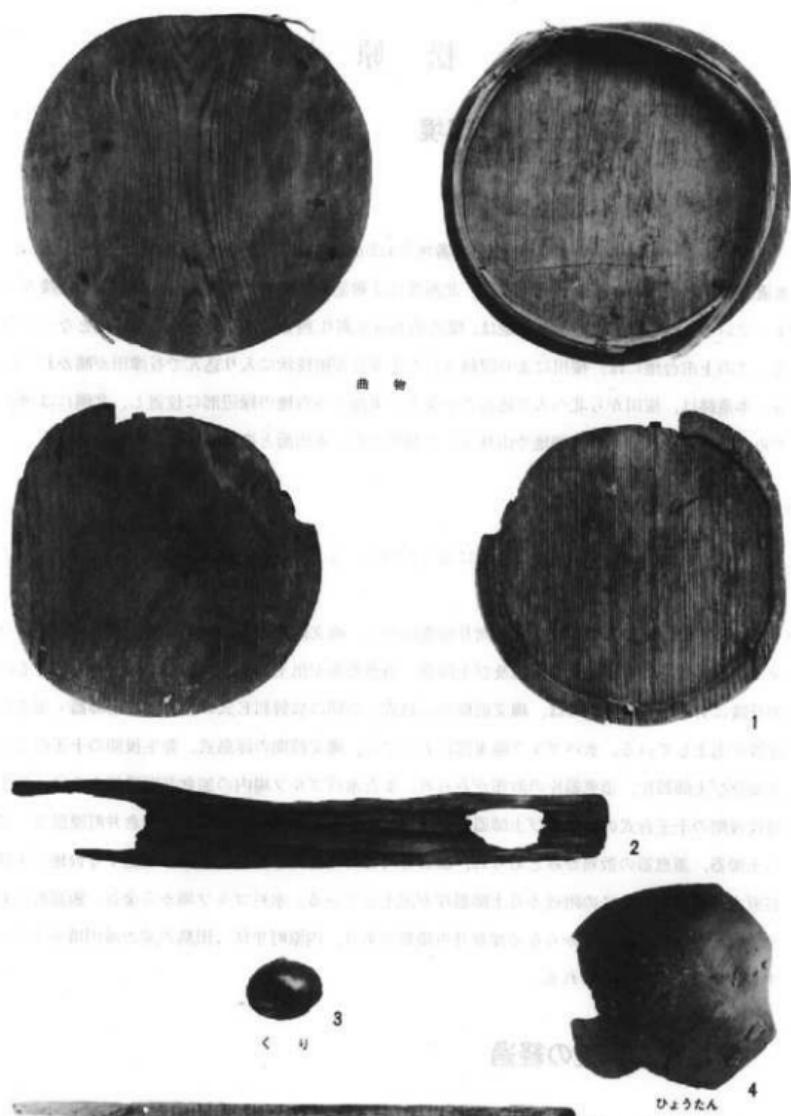
第 2 号 井 戸 出 土 状 況 4



第 1 号 挖 立 柱 四 方 施 工 場 5



第 1 号 挖 立 柱 柱 穴 セ ク シ ョ ン 6



写11 大塚新地遺跡井戸出土遺物・2号井戸(1~4)・3号井戸(5)

第6章 松原遺跡

第1節 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

松原遺跡は、水戸市加倉井町字元町447番地の4ほかに所在し、調査対象面積は3,200m²である。本遺跡は、水戸市の中西部端に位置し、北西部には鶴足山地塊の外縁部をなす第三紀の丘陵がせまっている。本遺跡の立地する台地は、標高約43mを測り、西から東へ緩やかな傾斜地となっている。この上市台地には、桜川により浸蝕された小支谷が樹枝状に入り込んで谷津田が開かれている。本遺跡は、桜川から北へ入り込んだ小支谷に東面する台地の縁辺部に位置し、北側には湧水がみられる。この台地は、畑地や山林として利用され、水田面との比高差は約5mを測る。

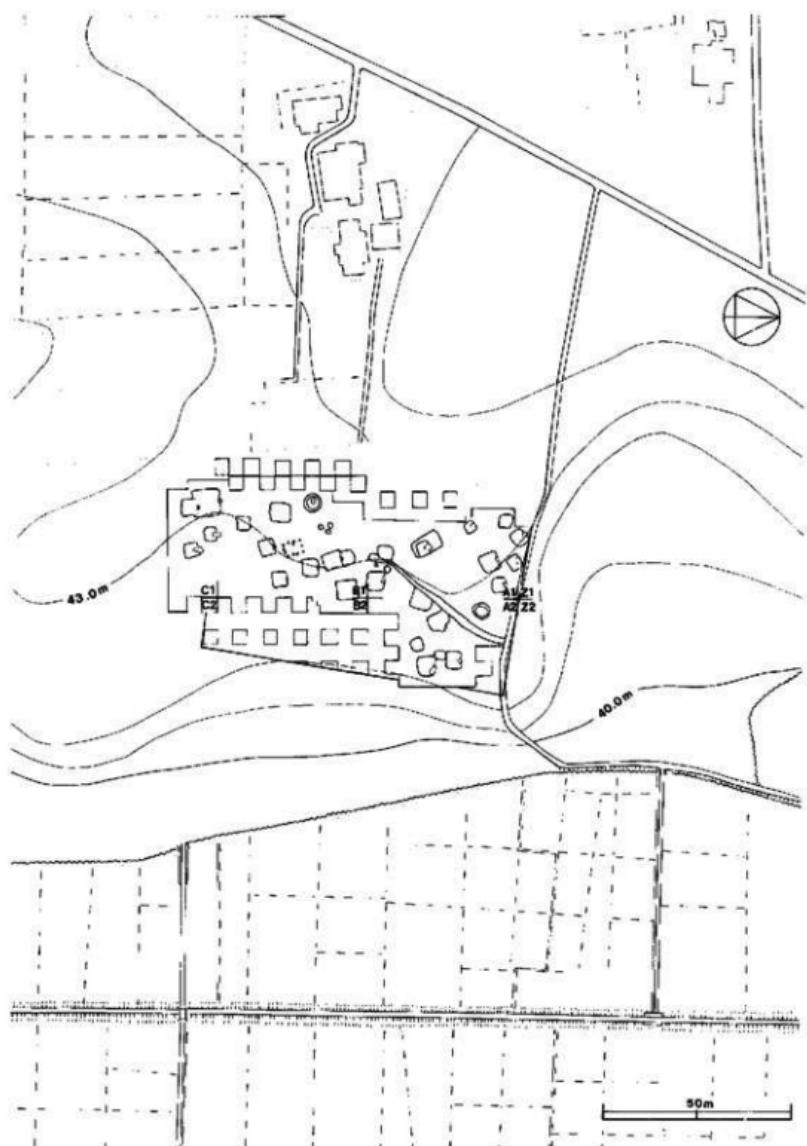
2 歴史的環境

水戸市の歴史的環境についてはすでに述べたので、ここでは松原遺跡に隣接する遺跡についてのみ記してゆきたい。

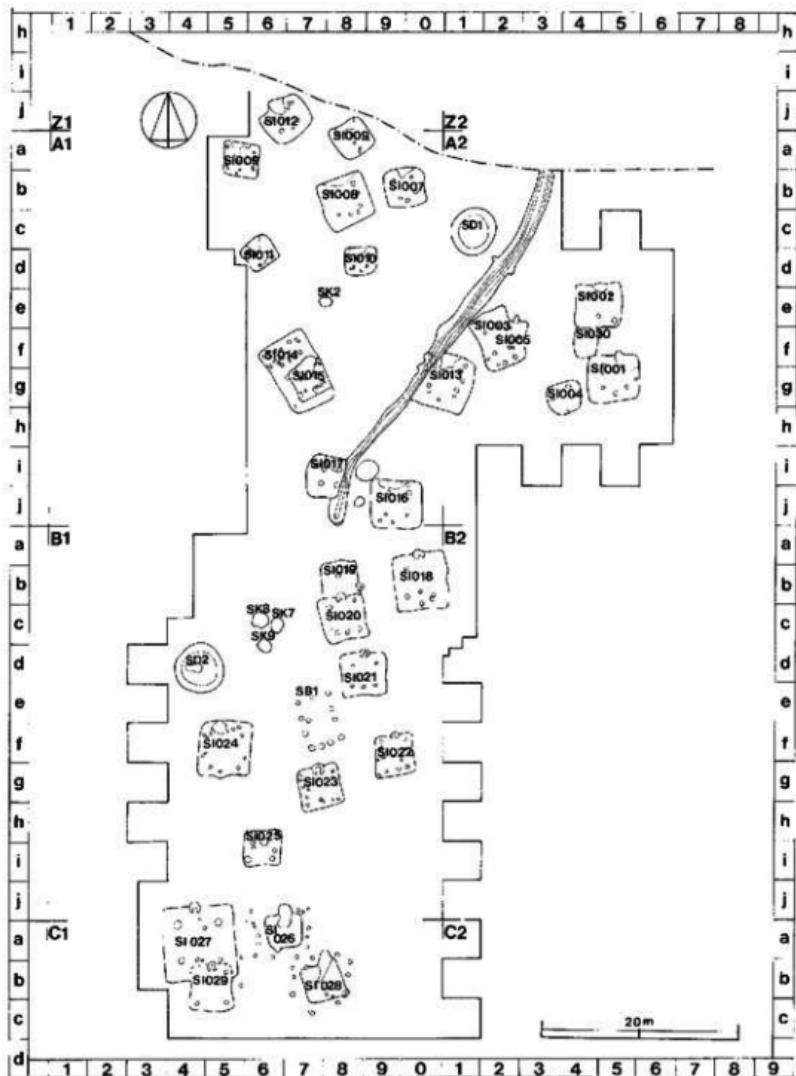
双葉台団地の建設の際調査された向井原遺跡から、縄文前期の浮島式、弥生中期の女方、クロマタギ式、後期の十王台式の上器及び土師器・須恵器等が出土した。全隈町から立野をこえる岬の丘陵にある村境遺跡からは、縄文前期の浮島式、中期の加曾利E式の上器及び土師器・須恵器片等が出土している。水戸ゴルフ場東部においては、縄文前期の浮島式、弥生後期の十王台式の土器及び上師器片、須恵器片の散布がみられ、また水戸ゴルフ場内の加倉井町遺跡からは、弥生時代後期の十王台式の土器及び上師器片、須恵器片が出土している。なお、加倉井町原部落一帯に上師器、須恵器の散布がみとめられ、加倉井町と開江町のさかいの水田に東面する台地に毛勝谷原古墳群があり、この附近から土師器片が出土している。水戸ゴルフ場から金谷、飯富町に対する台地上には円墳21基からなる加倉井古墳群があり、内原町牛伏・出島の前方後円墳を中心とする古墳群の支群とみられる。

第2節 調査の経過

松原遺跡の調査対象面積は3,200m²で、現状は楠やクヌギ等の雜木林である。本遺跡の調査は、昭和55年2月14日から3月21日までの予定で現場作業を行なった。先ず、遺跡の概要を把握するため、中心杭「STA278-60」を起点として、磁北方向に約70の小調査区を設けて遺構の確認作



第1図 松原遺跡全体図



第2図 松原遺跡遺構配置図

業を行なった。調査の結果検出された遺構は竪穴住居址30軒、土壙6基、円形周溝遺構2基、井戸状遺構1基、溝状遺構1条である。以下、調査経過の概要を記す。

55年2月 発掘調査に必要な機材の搬入と諸準備。雜木や草の焼却後調査区を設定するため、調査区分割抗を打ち込む作業を行なう。調査の第1段階として小調査区発掘を行ない、遺構の確認作業を実施する。その結果、竪穴住居址23軒、土壙2基、溝1条が検出された。また、北東部A2区内の第1号住居址～第5号住居址、第1号土壙などの調査を実施する。続いてB1区内の遺構確認作業を行ない、竪穴住居址10軒、土壙3基、円形周溝遺構1基が検出された。A1区内の表土除去作業を進め、竪穴住居址3軒、溝1条を確認する。A1区内の拡張作業は2月下旬まで実施し、その結果、竪穴住居址10軒、円形周溝1基、土壙3基が確認され、第7号住居址～第10号住居址および第2号円形周溝遺構の調査を終了し、第3号溝の調査を開始する。

55年3月 第3号溝の精査および第6号住居址、第11号住居址から第25号住居址の調査を実施し、遺物出土状況実測、遺構の平面・断面実測を行なう。第2号土壙～第6号土壙、第1号井戸の精査を終了する。さらに、第26号住居址～第30号住居址の調査をし、カマドを所有する竪穴住居址20軒の精査を行ない、平行して遺構配置図を作成する。現場の発掘機材、テントを大塚新地遺跡に撤収し、松原遺跡の調査を終了する。

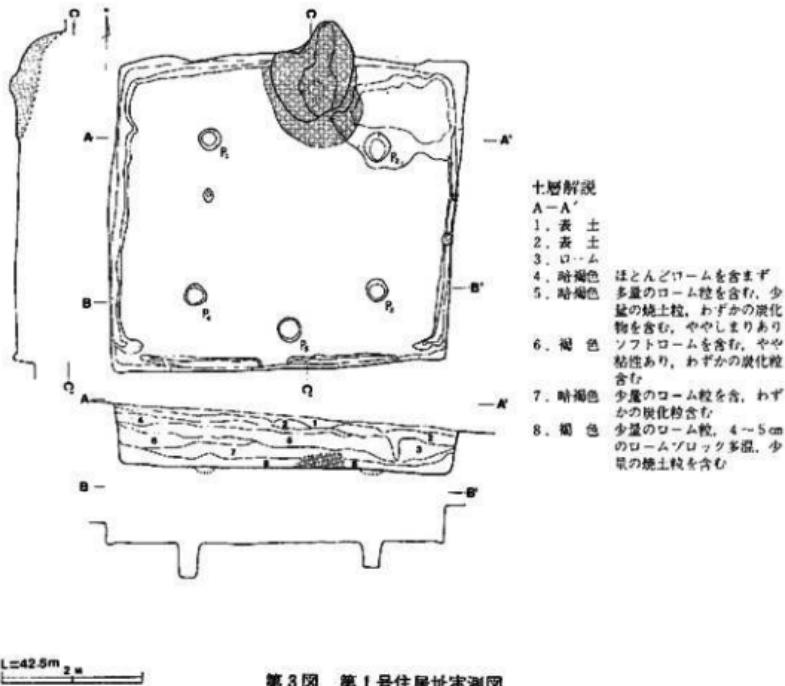
第3節 遺構・遺物

1 住居址

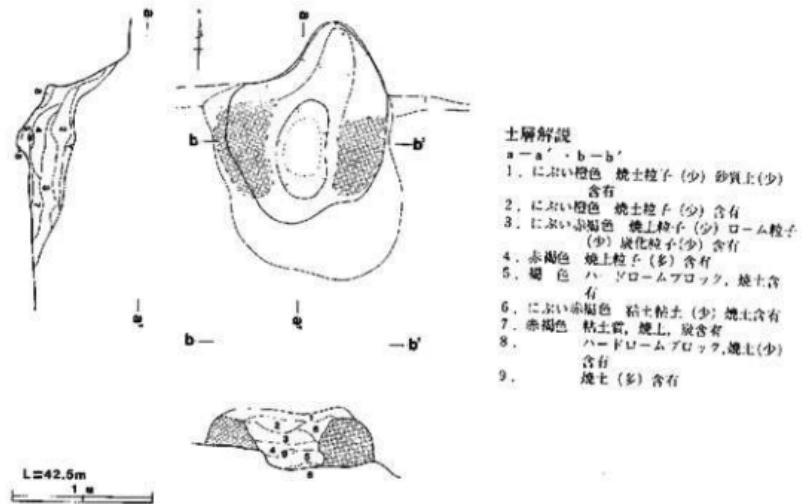
第1号住居址(図3・4・5)

本住居址は、調査区の北東部A2区f4、f5、f6、g4、g5、g6に確認され、本址の北西コーナーにおいて第30号住居址の南壁と接し、南西1.0mに第4号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN-90°-Wで、規模は長軸4.93m、短軸4.52m、面積19.5m²を測り、ほぼ正方形を呈している。壁は確認面で壁高31cm～65cmを測り、西側が高くほぼ垂直に立ち上がっている。壁面にはカマドの部分と北東コーナーを除いて幅13cm、深さ6cm内外の「U」字形をした壁溝が廻っている。床面はほぼ平坦で踏み固められた状態を示しているが、北東コーナー附近は貼り床となっている。ピットは5個所確認され、P1～P4は主柱穴と考えられるが、南壁中央部付

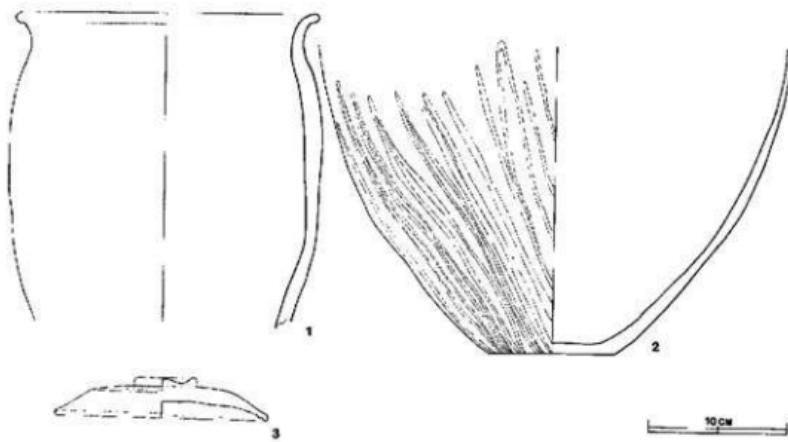
ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P 1	34	32	33	主柱穴	P 4	32	30	38	主柱穴
P 2	42	41	34	主柱穴	P 5	35	35	26	主柱穴
P 3	32	30	53	主柱穴					



第3図 第1号住居址実測図



第4図 第1号住居址カマド実測図



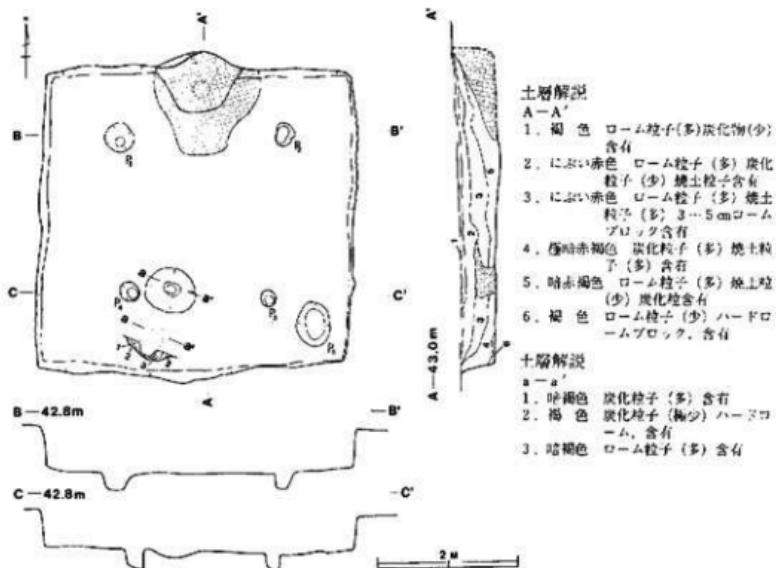
第5図 第1号住居址出土遺物実測図

近のP5は出入口の施設に伴う柱穴と思われる。覆土は8層からなり、自然堆積を示している。上層は暗褐色上でローム粒子を含む。中層は暗褐色上で、ローム粒子と炭化粒子を含む。下層は褐色上で、ローム粒子、ロームブロック、焼上粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央から東よ

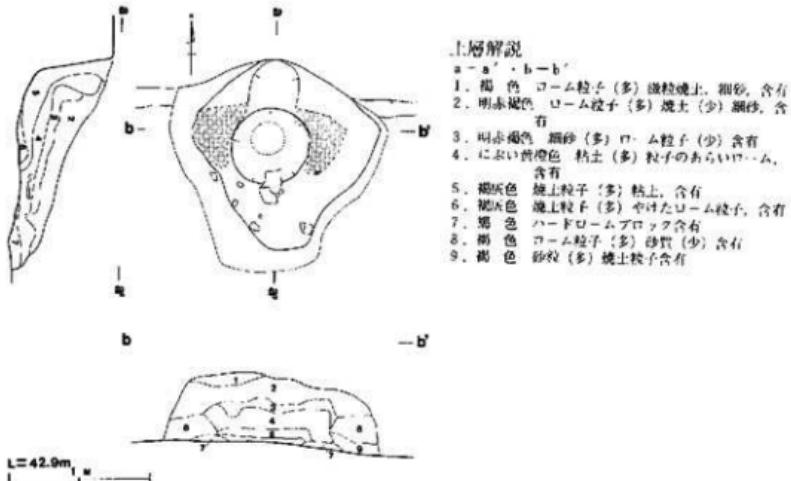
りに付設され、南向きに構築されている。カマドの規模は長径125cm、短径120cm、北壁を75cm、幅で、50cm程度掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径75cm、短径35cm、深さ10cmで梢円形に掘りくぼめている。袖部は少量のローム粒子、ハードロームブロックを含む砂質粘土で築かれているが、非常に破壊された状態で、砂質粘土が北東コーナーにまで散れている。カマドの東側に炭化材がかたまって出土していた。出土遺物は土師器と須恵器が共伴している。中央部床面より須恵器の蓋（図5-3）と土師器の甕片（図5-1）を床直上より出土している。他に覆土から須恵器の蓋、环などの細片と土師器の甕などの破片が数点出土している。その他の出土遺物は弥生式土器の細片を数点である。本址は出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。

第2号住居址（図6・7・8）

本住居址は、調査区の北東部A2区d4、d5、e4、e5、f4、f5に確認され、南壁西寄りに第30号住居址と複合しているが、第30号住居址より新しい遺構である。本址の主軸方向はN=0°で、規模は長軸4.41m、短軸4.48m、面積18.1m²を測り、ほぼ正方形を呈している。壁は確認面で壁高約55cmあり、ほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で、かなり踏みかためられた状態を示している。ピットは4箇所確認され、P1～P4は主住穴と考えられる。南東コ



第6図 第2号住居址実測図

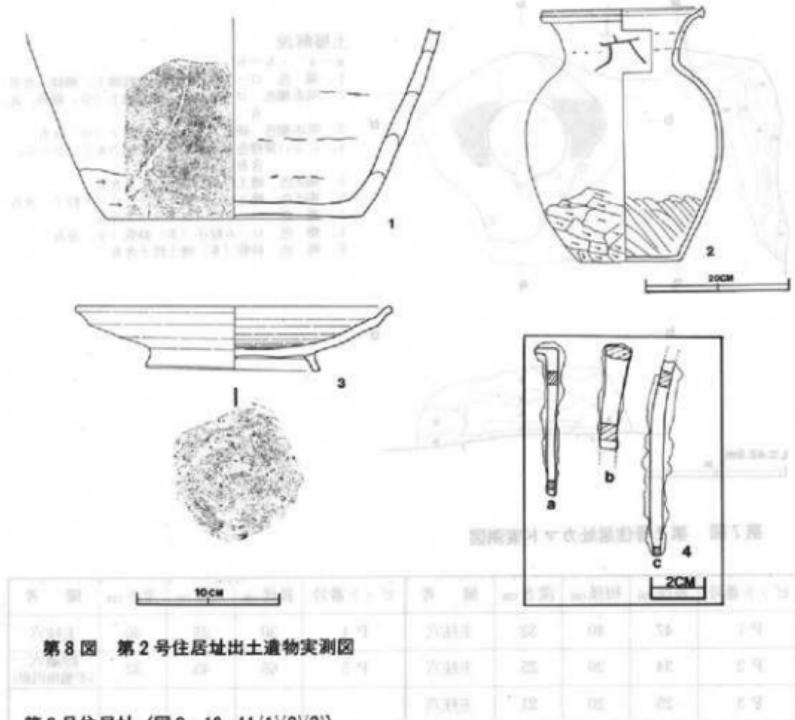


第7図 第2号住居址カマド実測図

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P 1	47	40	32	主柱穴	P 4	30	25	30	主柱穴
P 2	34	26	25	主柱穴	P 5	65	45	32	貯蔵穴 (不整円形)
P 3	25	20	21	主柱穴					

一のP 5は貯蔵穴と思われ、不整円形を呈している。カマドは北壁の中央にあり、南向きに構築されている。規模は長径110cm、短径90cmで、北壁を25cm幅で、30cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径24cm、短径23cmで深さ2cmを測り、円形に掘りくぼめている。袖部はローム粒子を含む砂質粘土である。覆土は8層からなり、自然堆積の状態を示している。上層は褐色土でローム粒子、比較的多量のロームブロックと少量の焼土粒子、炭化粒子を含み、下層は暗褐色土・褐色土で、多量のローム粒子、炭化粒子、ロームブロック、ハードロームブロック、を含んでいる。

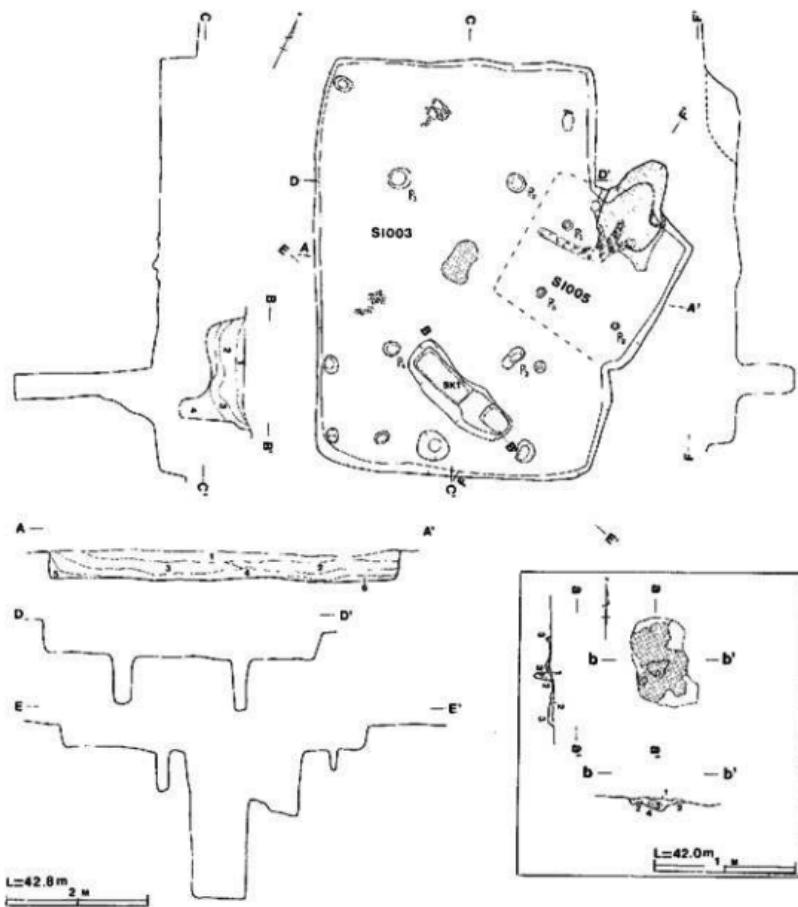
出土遺物は、南部中ほどP 4附近床面より甕(図8-2)を出土し、甕の中には焼骨と炭が多量に入っており、須恵器の盤(図8-3)を蓋として利用していた。他には、覆土中から須恵器の环・蓋などの破片を多数出土している。覆土中から弥生式土器の十王台式より古い型式の土器片を数点出土している。本址は、出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。



第8図 第2号住居址出土遺物実測図

本住居址は、調査区の北東部A2区e1, f1, f2, f3, g2に確認され、東壁の中ほどに第5号住居址が、南側の中ほどに第1号土壙が複合している。本址は第5号住居址より古く、第1号土壙より新しい造構である。北西コーナーは第3号溝状造構に接し、南西1.0mには第13号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN-20°-Eで、規模は長軸5.48m、短軸3.98m、面積22.0m²を測り、長方形を呈している。壁は確認面で壁高35cm-56cmを測り、緩やかに外傾して立ち上がっている。床面は平坦であり、かなり踏みかためられた状態を示している。床面下から第1号土壙が検出された。炉址は床面の南側中央部に位置し、規模は長径61cm、短径40cmで不整規円形を呈している。燃焼部はロームが赤く焼け焼土が多量に含まれていた。ピットは11箇

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P 1	34	30	68	主柱穴	P 3	38	17	62	主柱穴
P 2	30	25	70	主柱穴	P 4	23	20	64	主柱穴



上解説

- A-A': 灰褐色 ローム粒子（多）炭化粒子（少）
透土様子含む
- B-B': 黑 色 シン・ト粒子（多）炭化粒子（少）
透土様子含む
- C-C': 灰褐色 ハードコーム（少）炭化粒子（少）
透土様子含む
- D-D': 灰褐色 ローム粒子（少）炭化粒子（少）
含む
- E-E': 黑 色 ローム粒子（透少）ハードコーム
ムブリック含む
- F-F': 灰褐色 ローム粒子（多）炭化
粒子、透土（少）含む

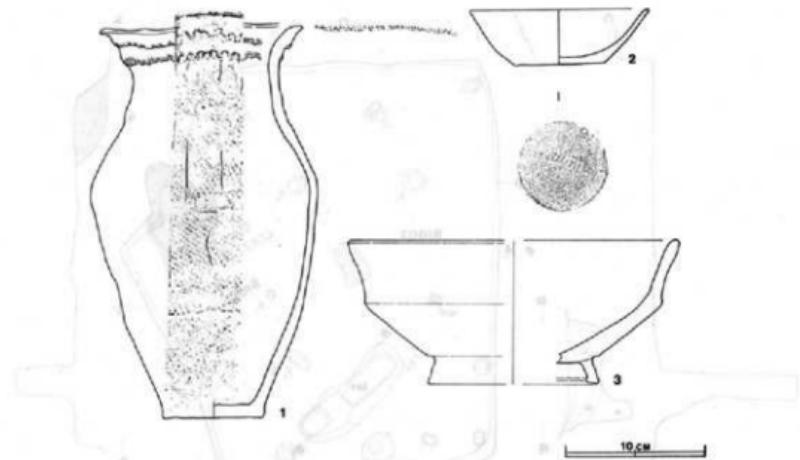
中解説

- a-a' b-b': 1. 灰褐色 土粒子（多）ハードコーム
ロック「やけたもの」炭化粒子
(少) 含有
2. 灰褐色 透土様子（少）ハードコーム
透土含む
3. 黑 色 ローム粒子（少）透土
4. 黑 色 ハードコームがかなりかけ部分

下解説

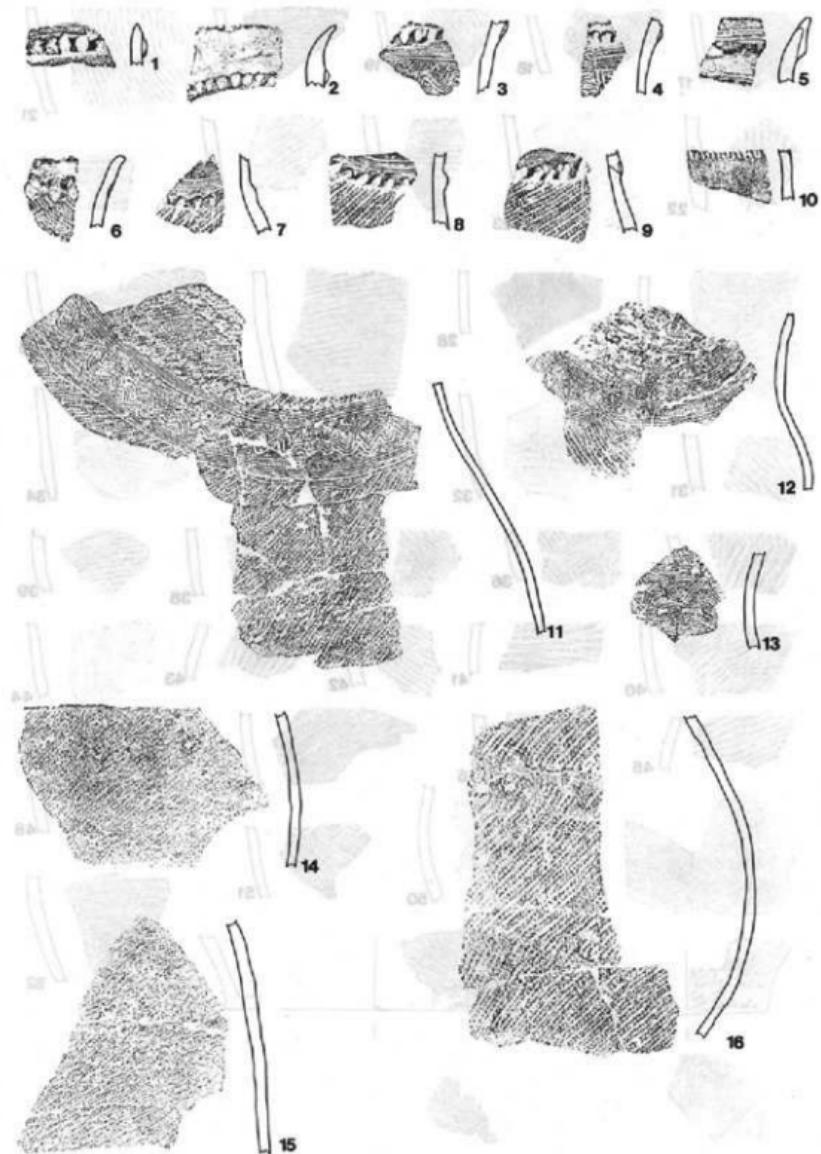
- B-B': 1. 灰褐色 コーム粒子（少）透土粒子（少）
含有
2. 黑 色 ローム粒子（少）透土（少）炭
化粒子含む
3. 黑 色 ローム粒子（少）炭化粒（少）
含有
4. 黒褐色 ソフトソーフ（少）ローム
粒子、炭化粒（少）含む

第9図 第3号・5号住居址、第1号土壤実測図



第10図 第3号・第5号住居址出土遺物実測図

所確認され、P1～P4は主柱穴と考えらる、貯蔵穴は検出されなかつた。覆土は6層からなり自然堆積の状態を示している。全体的に黒色を呈し、覆土内の下部には弥生式土器片が、上部には須恵器の細片が混在している。上層は褐色土でローム粒子と極少量の炭化粒子を含み、中層は暗褐色土で多量のローム粒子と少量の炭化粒子、焼土粒子を含み、下層は褐色土で少量のローム粒子と焼土粒子を含む。出土遺物は弥生式土器の東中根式に比定される變形の完形土器（第10図-1）を、北東コーナー東壁際床面から出土している。他には、弥生式土器の十王台式より古い型式と思われる土器片を床面や床面上から多数出土している。本址は出土遺物等から弥生時代後期の遺構と思われる。



圖版十一(1) 第3号住居址出土遺物拓影圖

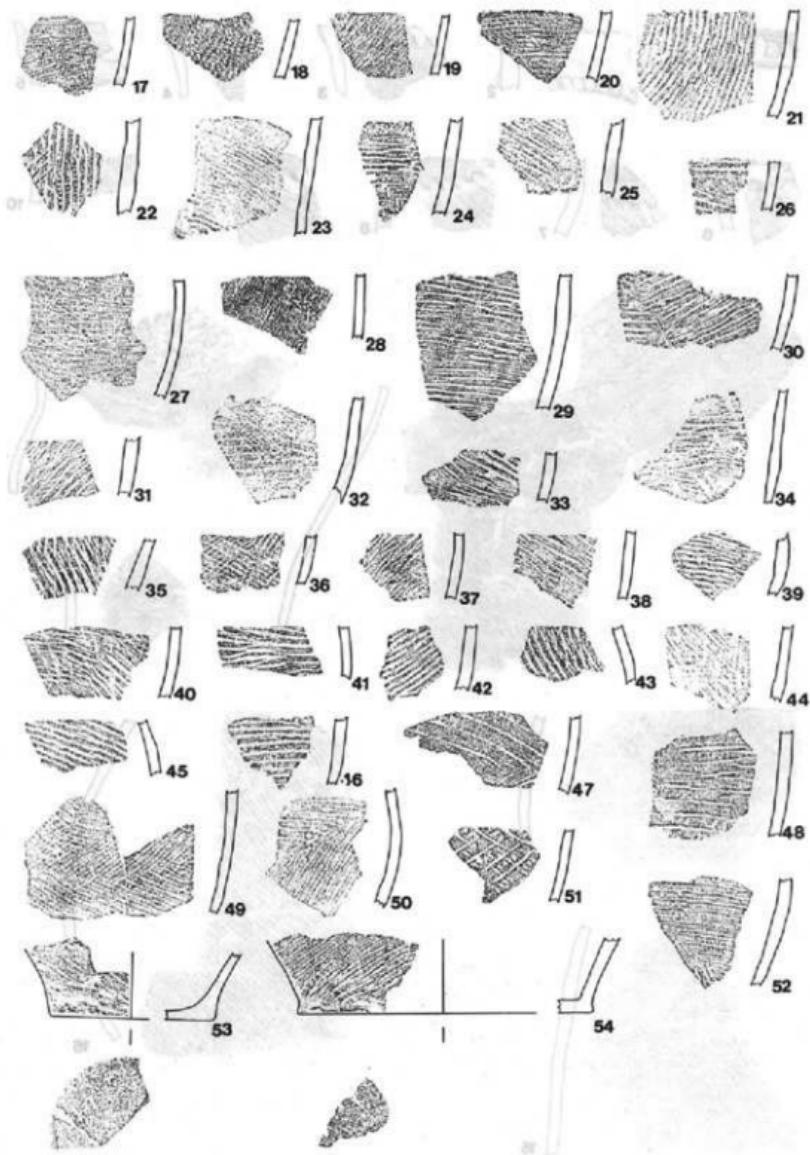
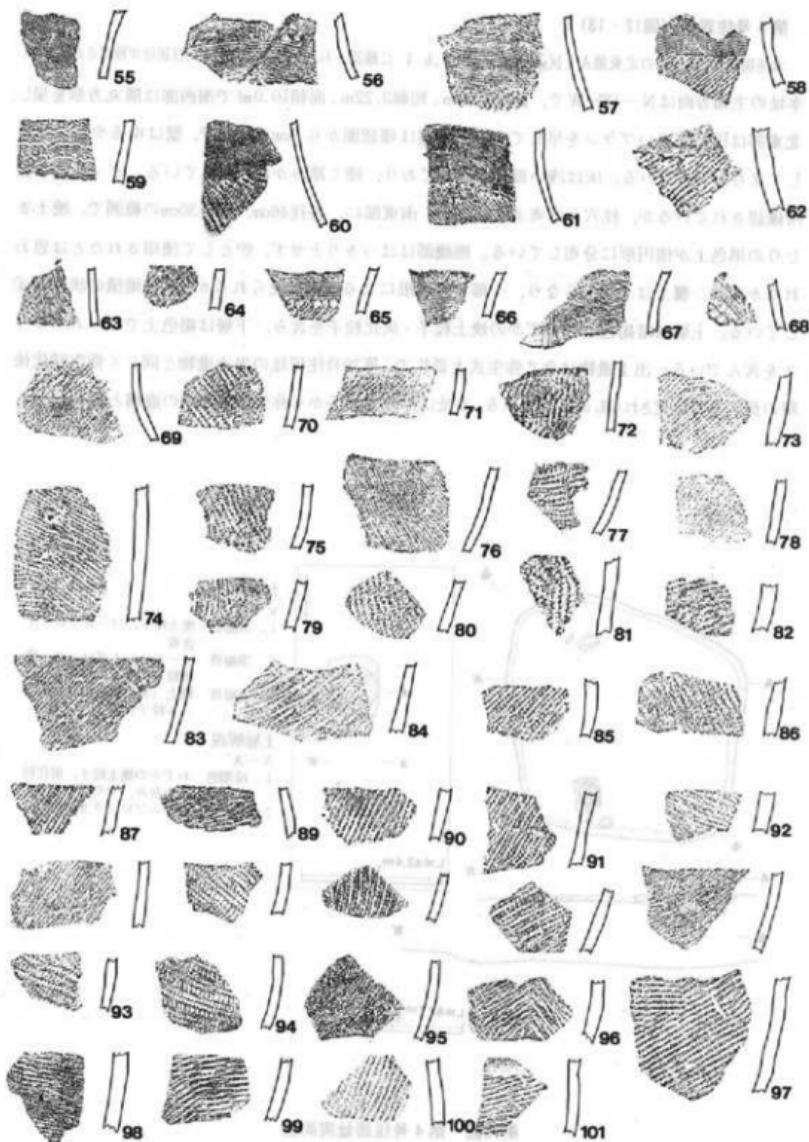


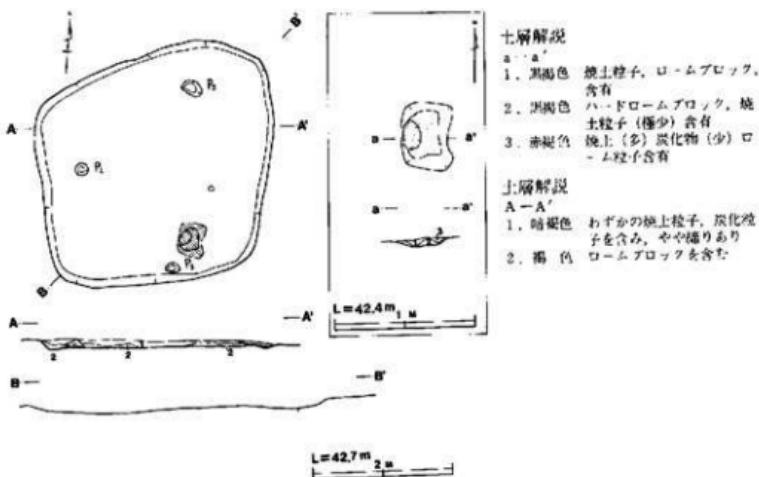
图11(2) 第3号住居址出土遺物拓影図



第11図(3) 第3号住居址出土遺物拓影図

第4号住居址（図12・13）

本住居址は、調査区の北東部A 2区g 3,g 4,h 3,h 4に確認され、東側10mには第1号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN-12°-Wで、長軸3.30m、短軸3.22m、面積10.0m²で南西部は隅丸方形を呈し、北東部は円形に近いプランを呈している。壁高は確認面から5cm~10cmで、壁はゆるやかに外傾して立ちあがっている。床は浅い凹状を示しており、硬く踏みかためられている。ピットは3箇所確認されているが、柱穴とは考えられない。南東部に、長径46cm、短径30cmの範囲で、焼土まじりの黒色土が梢円形に分布している。燃焼部ははっきりとせず、炉として使用されたとは思われなかった。覆土は5層からなり、一部に木の根による擾乱も見られるが、自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土でわずかの焼土粒子・炭化粒子を含み、下層は褐色土でロームブロックを含んでいる。出土遺物は全て弥生式土器片で、第30号住居址の出土遺物と同じく弥生時代後期の長岡系に比定されるものと思われる。本址は出土遺物等から弥生時代後期の遺構と思われる。



第12図 第4号住居址実測図



第13図 第4号住居址出土遺物拓影図

第5号住居址(図9・10・14)

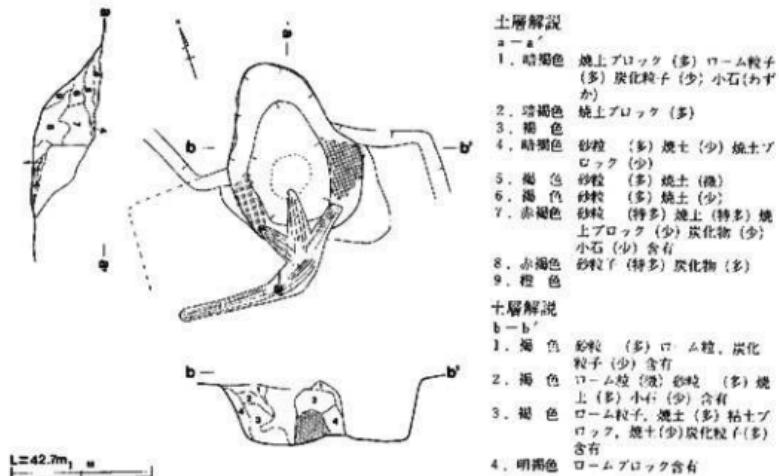
本住居址は、調査区の北東部A2区 e 2, e 3, f 2, f 3に確認され、カマドと北東コ一ナ一部と東壁は残存し、約50%ほど第3号住居址の東壁中央部に切り込んでいる。本址の主軸方向はN-6°-Wで、規模は推定で長軸2.25m、短軸2.27m、面積は4.16m²で、隅丸方形を呈している。壁高は確認面から36cm内外で、壁はゆるやかに外傾して立ち上がっている。床面は平坦で踏みかためられた状態を示しており、第3号住居址の床面とほぼ同じレベルであり、その床面を一部利用して本址が構築されている。カマド際から炭化材が検出されていることから、火災に遭遇していると思われる。主柱穴と思われるピットは3箇所確認されているが、貯蔵穴は検出され

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P 1	14	11	17	主柱穴	P 3	15	12	10	主柱穴
P 2	10	10	20	主柱穴					

（図9・10・14）主柱穴

（図9・10・14）主柱穴

主柱穴



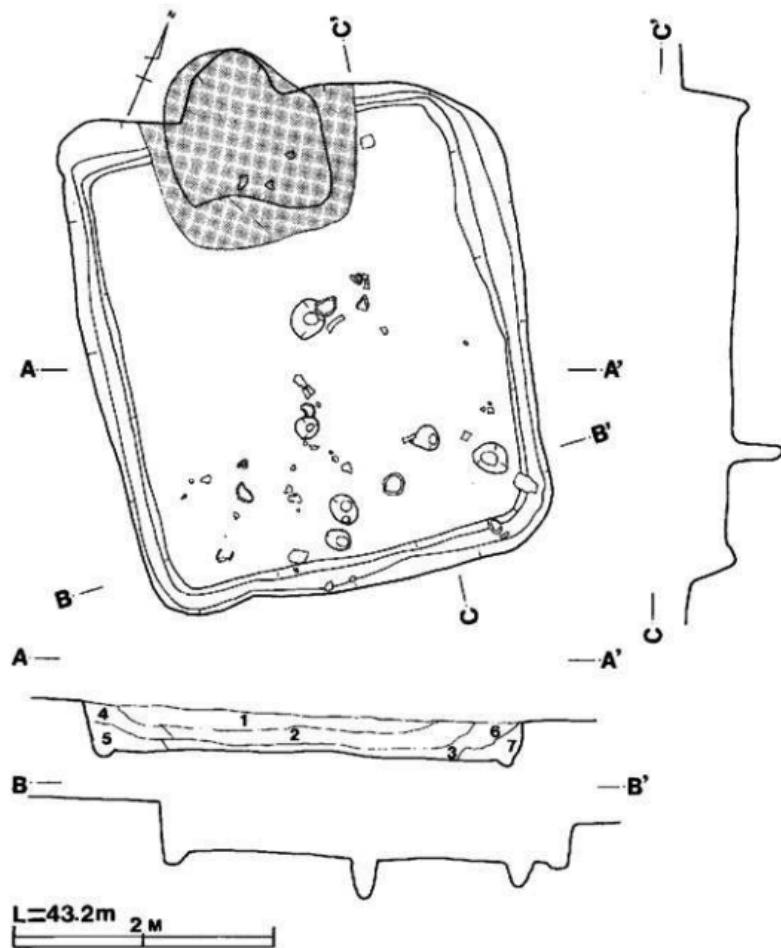
第14図 第5号住居址カマド実測図

ない。覆土は4層からなり、自然堆積の状態を示している。上層は褐色土で多量のローム粒子、極少量の炭化粒子、焼土粒子を含有し、中層は、暗褐色土で多量のローム粒子・炭化粒子、少量の炭化物、焼土粒子を含み、下層は褐色土であり、わずかのローム粒子とハードロームブロックを含んでいる。カマドは北壁の中央部に付設され、南西向向きに構築されている。規模は、長径120cm、短径95cm、北壁を80cm幅で、86cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は、長径32cm、短径26cm、深さ2cmほど円形に掘りくぼめている。袖部は少量のローム粒子、ハードロームブロック混りの砂質粘土である。

出土遺物は、土師器と須恵器を出土しており、土師器は内黒の环(図9-2)と环・甕等の破片、須恵器は高台付鉢(図9-3)と环などの破片を数点出土している。本址は、出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第6住居址(図15・16・17)

本住居址は、調査区の北部中ほどのZ1区j8, j9, A1区a8, a9に確認され、北西2.0mに第12号住居址が、南1.0mには第8号住居址が検出されている。主軸方向はN-35°Wで、規模は長軸3.90m、短軸3.38m、面積9.4m²で、隅丸長方形を呈している。壁高は、確認面で約43cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁下には幅17cm、深さ11cm内外の壁溝が周囲している。床面は、ほぼ平坦でかなり踏みかためられた状態を示している。ピットは4箇所確認されたが、柱穴と思われるものは検出されなかった。第26号住居址・第28号住居址と同じように竪穴住居址

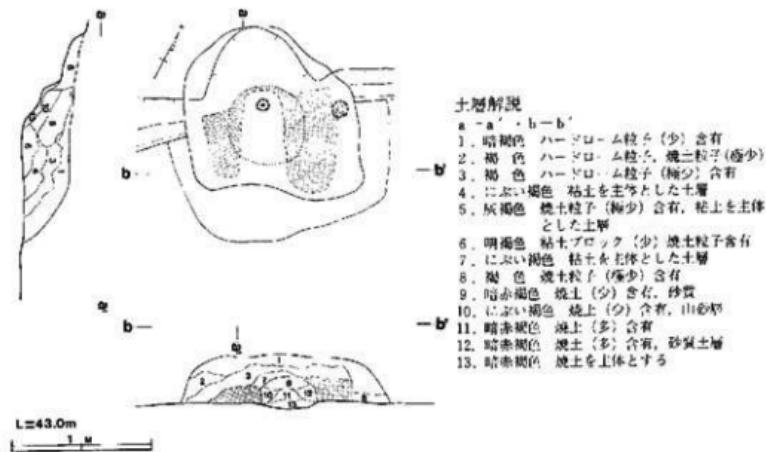


土層解説

A-A'

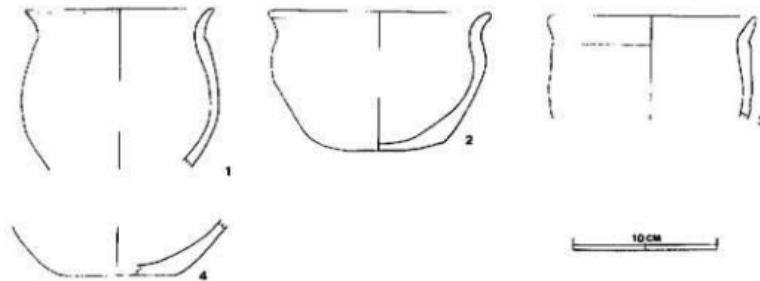
1. 淡褐色 ローム粒子（極少）含有
2. 黄褐色 ローム粒子（少）焼上粒子（少）含有
3. 暗褐色 ローム粒子（少）含有
4. 褐色 ローム粒子（多）ハードロックブロック（少）含有
5. 灰褐色 ローム粒子（多）含有
6. 墓褐色 ローム粒子（少）焼土粒子（少）含有
7. 黑色 ローム粒子（多）ソフトロームブロック（多）含有

第15図 第6号住居址実測図

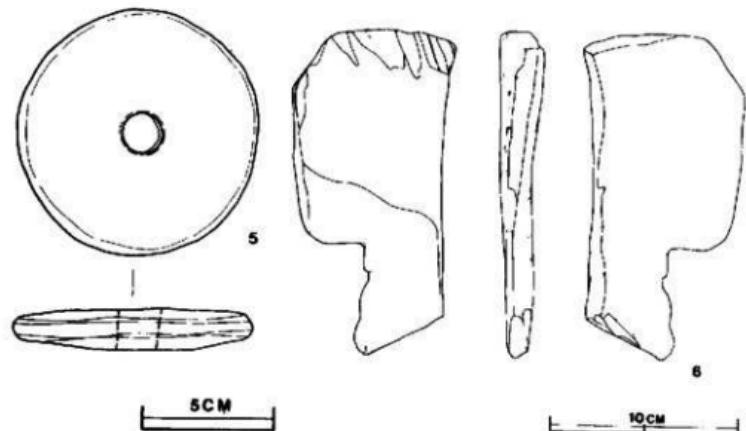


第16図 第6号住居址カマド実測図

の施設外に柱穴を有しているものと思われる。覆土は7層からなり、自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で、極少量のローム粒子を含み、中層は暗褐色土で、少量のローム粒子、焼土粒子を含み、下層は暗褐色土で少量のローム粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央から西よりに付設され、南東向きに構築されている。規模は長径126cm、短径90cmで、北壁を80cm幅で、43cmほど掘り込んで煤道としている。燃焼部は長径56cm、短径53cmで、深さ2cmほど円形に掘り進めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土である。



第17図(1) 第6号住居址出土遺物実測図



第17図(2) 第6号住居址出土遺物実測図

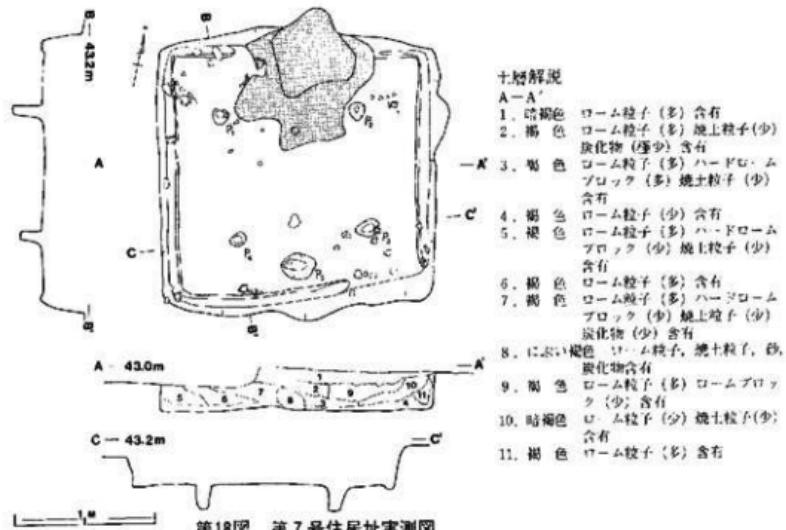
出土遺物は、土師器の壺2個体分(図17-1), カマド内から鉢(図17-2), カマド附近から有孔円板(図17-5), 他に甕の底部, 环口縁部と底部, 楼口縁部など数点を出土している。須恵器は片・蓋などの破片が数点出されている。その他、砥石片(図17-6)と弥生式土器の土台式壺前と思われる刷部, 底部片を数点出土している。本址は古墳時代の鬼高間に比定される造構と思われる。

第7号住居址(図18・19・20)

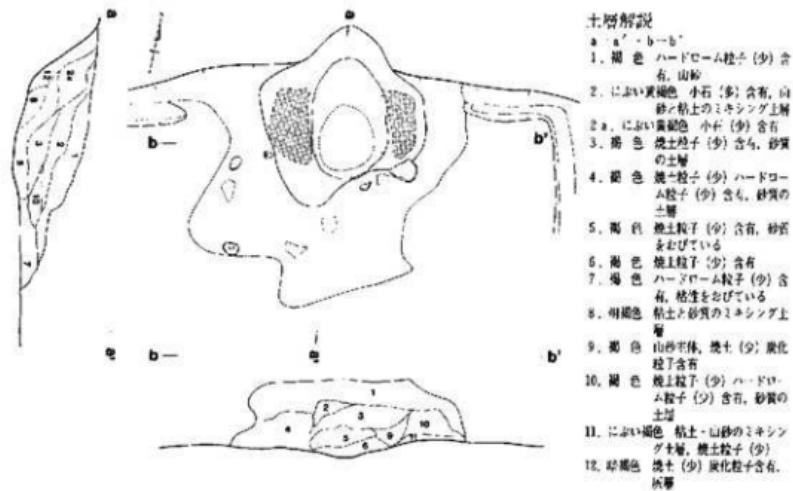
本住居址は、調査区の北部A1区 a 9, a 0, b 9, b 0 に確認され、西側1.7mには第8号住居址が検出されている。主軸方向はN-E-Wで規模は長軸4.0m, 短軸3.95m面積11.8m²の正方形を呈している。壁高は40~62cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁下には幅15cm, 深さ5cm内外の壁溝が残っている。床面はほぼ平坦で、かなり踏みかためられた状態を示している。ビットは4個確認され、P 1~P 4は主柱穴と考えられる。貯藏穴は有していない。

ビット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ビット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P 1	25	22	45	主柱穴	P 4	23	20	37	主柱穴
P 2	23	20	35	主柱穴	P 5	45	40	28	
P 3	35	25	40	主柱穴					

覆土は11層からなり、自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で多量のローム粒子と少量の焼土粒子、炭化粒子を含み、中層は褐色土で多量のローム粒子、ハードロームブロックと少量の焼土粒子を含み、下層は褐色土で少量のローム粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央から



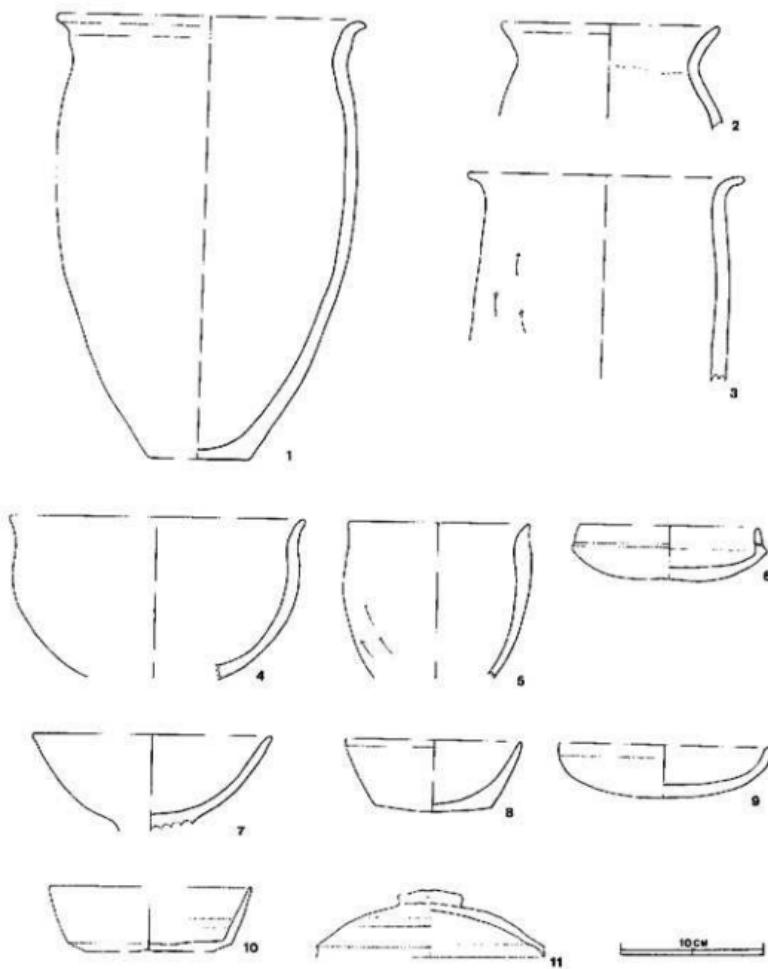
第18図 第7号住居址実測図



第19図 第7号住居址カマド実測図

東よりに位置し、南向きに構築されている。規模は長径104cm、短径102cm、北壁を56cm幅で、23cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径47cm、短径40cm、深さ4cmほどで円形に掘り落めている。袖部はローム粒子と小石混りの砂質粘土である。

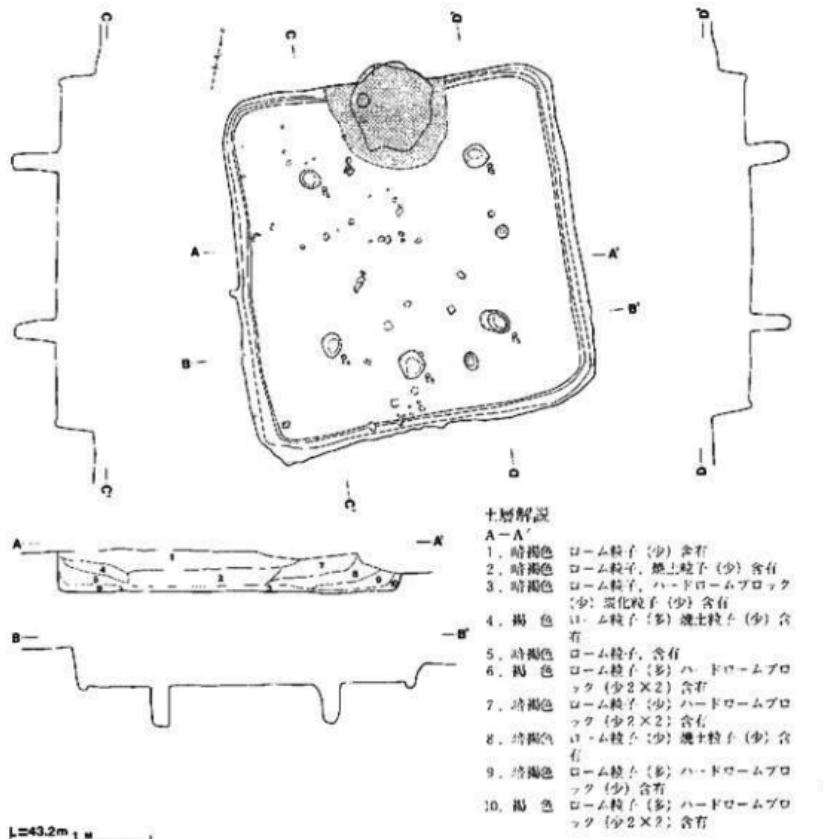
出土遺物は、土師器を中心に須恵器を出土している。北壁カマド際から土師器の甕（図20-1）、北東コーナー床面直上から土師器の鉢（図20-5）、南東コーナーP3付近床面直上から土師器



第20図 第7号住居址出土遺物実測図

の环(図20-8)、南西コーナー壁際床面より鉢(図20-4)、西壁際床面直上から土師器环(図20-6)、須恵器环片(図20-10)、覆上から土師器の甕口縁部(図20-2)、北西壁際床面直上から上師器の甕片(図20-3)と須恵器の蓋(図20-11)、他に土師器の内墨の高环(図20-7)を床面から出土し、甕、环などの破片多数と須恵器の蓋と环などの破片多数を出土した。その他の出土遺物は、北西コーナー床面及び南東コーナー床面より砥石を出土し、他に铁滓を数点と弥生式土器片の十王台式より古い型式の頸部・肩部・底部片を数点出土しており、底部片には布目の圧痕がみられる。本址は出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。

第8号住居址(図21-22・23)

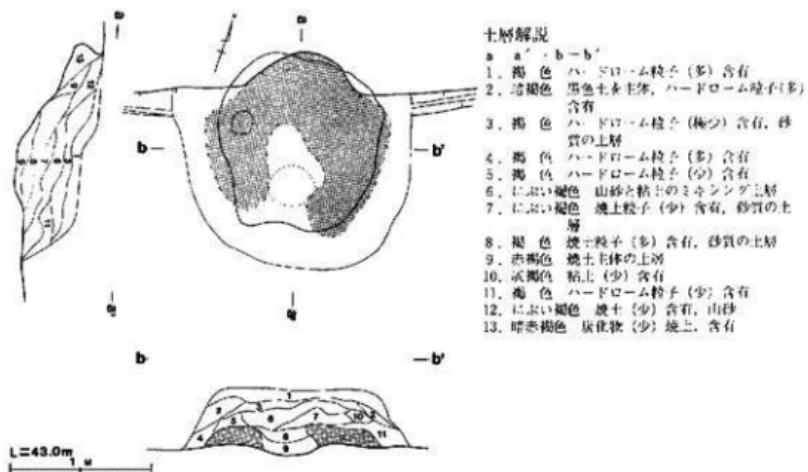


第21図 第8号住居址実測図

本住居址は、調査区北部中ほどA-I区b7, b8, b9, c7, c8, c9に確認され、西側1.5mには第7号住居址が、北側1.0mには第6号住居址が、南側2.0mには第10号住居址が検出されている。上軸方向は、N-21°-Wで、規模は長軸5.10m、短軸4.83m、面積17.3m²を測りほぼ開丸反方形を呈している。壁高は33cm-57cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、遺存状態は良好である。壁下には幅14cm、深さ5cm内外の壁溝がカマドの部分を除いて残っている。床面は平坦で、踏みかためられた状態を示している。ピットは7箇所確認され、P1-P4は主柱穴と考えられる。南壁付近中央部のP5は出入口の施設に伴う柱穴と思われる。

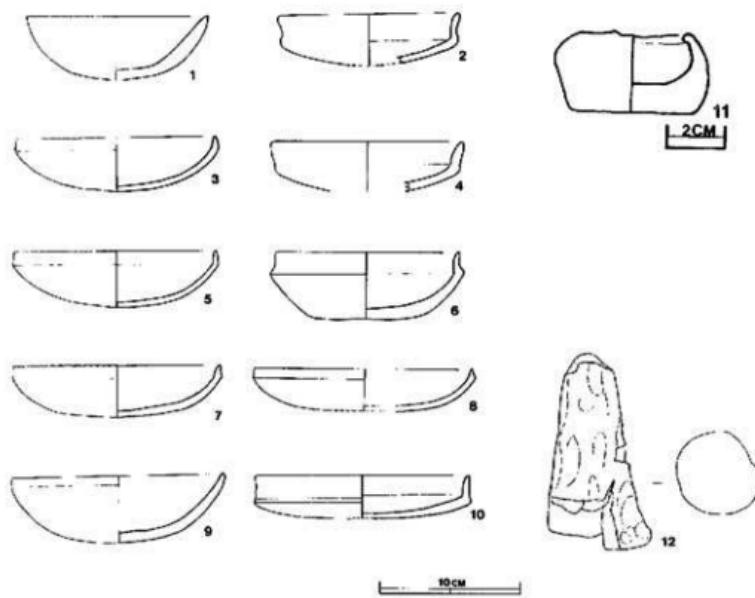
ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P1	33	27	65	主柱穴	P3	43	30	55	主柱穴
P2	36	34	50	主柱穴	P4	35	27	55	主柱穴

覆土は暗褐色土で10層からなり、自然堆積の状態を示している。上層は少量のローム粒子、中層はローム粒子、焼土粒子を含み、下層はローム粒子と少量のハードロームブロック、炭化粒子を含んでいる。カマドは北壁のほぼ中央部に付設され、南東向きに構築されている。規模は長径125cm、短径122cmで、北壁を80cm幅で、28cm掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径32cm、短径30cm、深さ6cmほど円形に掘りくぼめている。袖部は少量のローム粒子、ハードロームブロック混りの粘土である。



第22図 第8号住居址カマド実測図

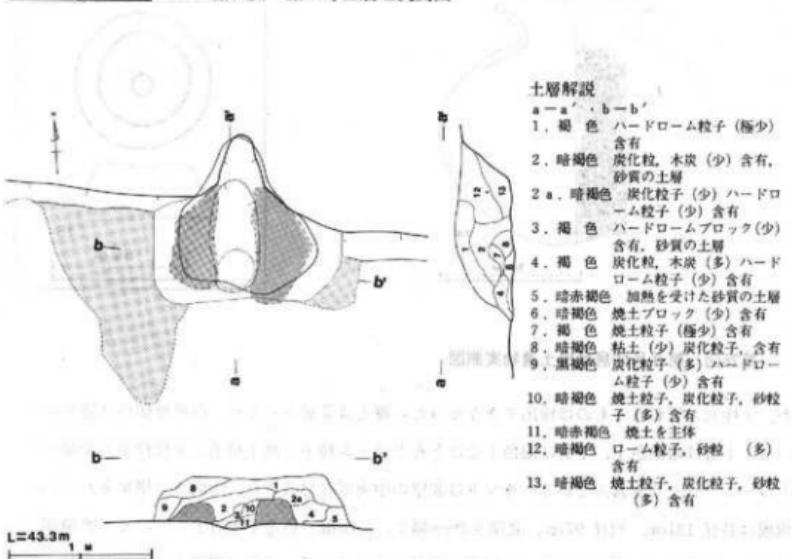
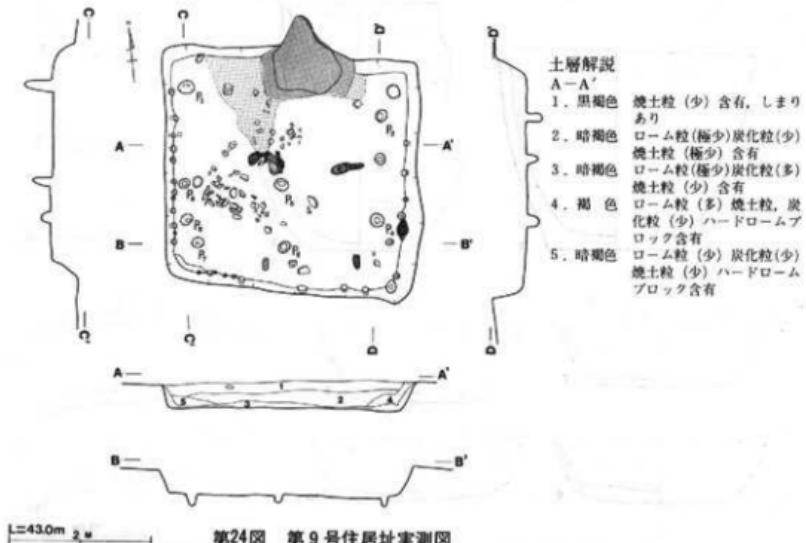
出土遺物は、上部器が主であるが、須恵器の蓋と环の破片も出土している。カマド内から手捏上器(図23-11),と环2個体分(図23-2・10),北コーナーカマド際から环(図23-4),西コーナー床面直上から环(図23-6),南コーナー床面直上から环(図23-3)を、南西部床面から环(図23-8)を、中央部床面直上から环(図23-1)を出土し、他に环(図23-5・7・9),甕・蓋などの破片を多数出土している。その他、砥石、支脚(図23-12)等を出土し、弥生式土器の長岡系に比定される變形土器の破片(口縁部、胴部)を数点出土している。本址は、出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。

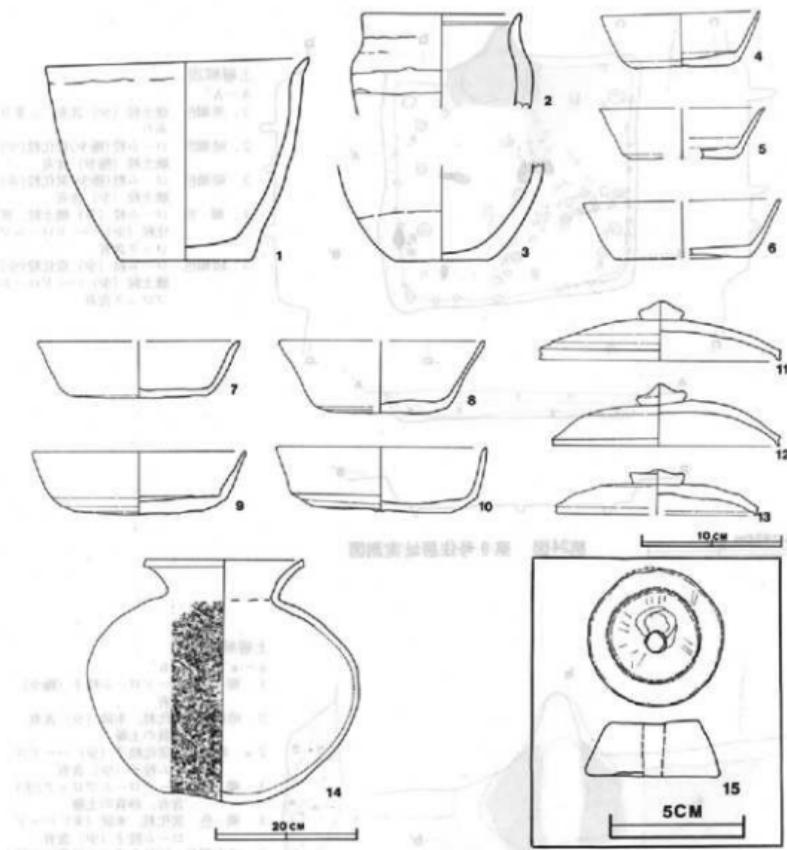


第23図 第8号住居址出土遺物実測図

第9号住居址(図24・25・26)

本住居址は、調査区の北部西端A1区a5, a6, b5, b6に確認され、南東1.5mに第15号住居址が検出されている。主軸方向はN-2°-Eで、規模は、長軸3.56m、短軸3.30m、面積10.4m²を測り、ほぼ正方形を呈している。壁高は確認面から33cm~43cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がり造存状態は良好である。床面は軟らかく、カマド付近から多量の焼土を出土し、中央部や東壁際から炭化材が多量に出土しているので火災に遭遇していると思われる。ピットは34箇所確認されている。





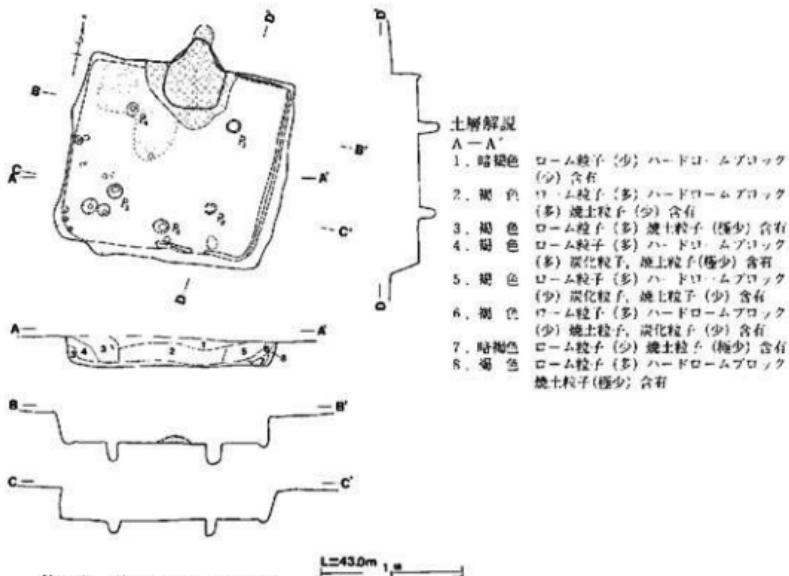
第26図 第9号住居址出土遺物実測図

が、主柱穴と思われるものは検出できなかった。覆土は5層からなり、自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土、下層は褐色土でほとんどローム粒子、焼土粒子、炭化粒子と少量のハイドロームブロックを含んでいる。カマドは北壁の中央部に付設され、南向きに構築されている。規模は長径121cm、短径97cm、北壁を29cm幅で、25cm掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径30cm、短径25cm、深さ8cmほどの円形に掘りくぼめている。袖部は黒色土混りの砂質粘土である。出土遺物は、須恵器を中心に土師器が共伴している。須恵器は北西コーナー付近床面直上から壺7個体分（図26-4・5・6・7・8・9・10）、カマド内から壺を、南東コーナー付近床面

直上から蓋3点（図26-11・12・13）を、南西部床面直上から壺（図26-14）を出土し、他に細片を多数出土している。土師器は西壁際床面直上から小形壺（図26-2）と床面直上から鉢（図26-1）を出土し、他に壺、壺などの破片を多数出土している。その他、石製の紡錘車（図26-15）が西壁附近の床面直上から出土している。本址は、出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。

第10号住居址（図27・28）

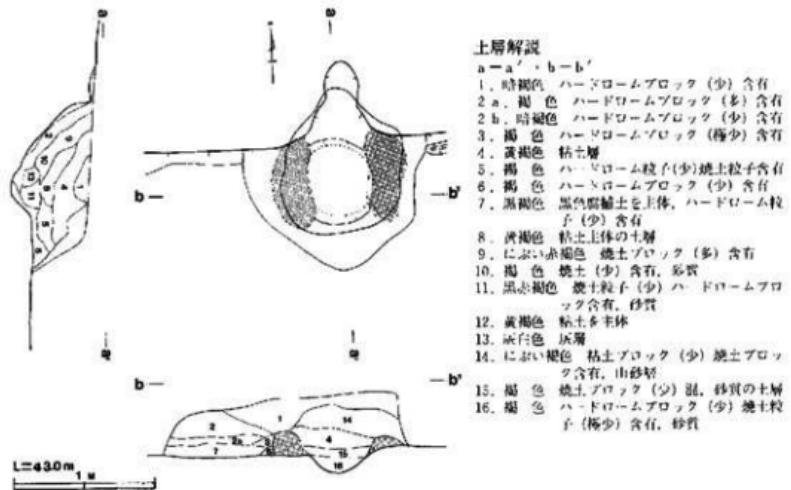
本住居址は、調査区の北部中ほどA1区c8, c9, d8, d9に確認され、北側2.0mに第8号住居址が検出されている。主軸方向はN-2°-Eで、規模は長軸3.05m、短軸2.78m、面積6.9m²を測り、長方形を呈している。壁高は確認面から37cm～45cmほどで、壁は垂直に立ち上がっている。壁下には東壁と南壁の一部に幅13cm、深さ5cm内外の壁溝を有し、床面はかたく、南にゆるやかに傾斜している。ピットは11箇所確認され、P1～P4は主柱穴と考えられる。南壁中央部付近のP5は出入口に伴う施設の柱穴かと思われる。壁側穴と思われるものを4箇所検出している。覆土は9層からなり、上層にはローム粒子、ハードロームブロックを多量に含み、遺構の確認が難しいほどであった。本址は廃棄された後埋めもどされた可能性が充分に考えられる。下層は多量のローム粒子とごく少量の焼土粒子を含んだ褐色土である。カマドは北壁の中央から東よりに、



第27図 第10号住居址実測図

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P 1	19	18	28	主柱穴	P 3	21	20	16	主柱穴
P 2	16	15	23	主柱穴	P 4	20	17	38	主柱穴

南向きに構築され、遺存状態は良好である。規模は長径122cm、短径95cmで、北壁を52cm幅で、50cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径50cm、短径48cm、深さ15cmで円形に掘りくぼめている。袖部は少量のローム粒子、ハードロームブロックを含む砂質粘土で、カマドの西側から多量の焼土が検出されている。出土遺物は、須恵器が主で、南壁際床面直上などから細片を数点出土している。その他、砥石片が北西床面直上から2点出土している。本址は出土遺物等からほぼ国分期に比定される遺構と思われる。



第28図 第10号住居址カマド実測図

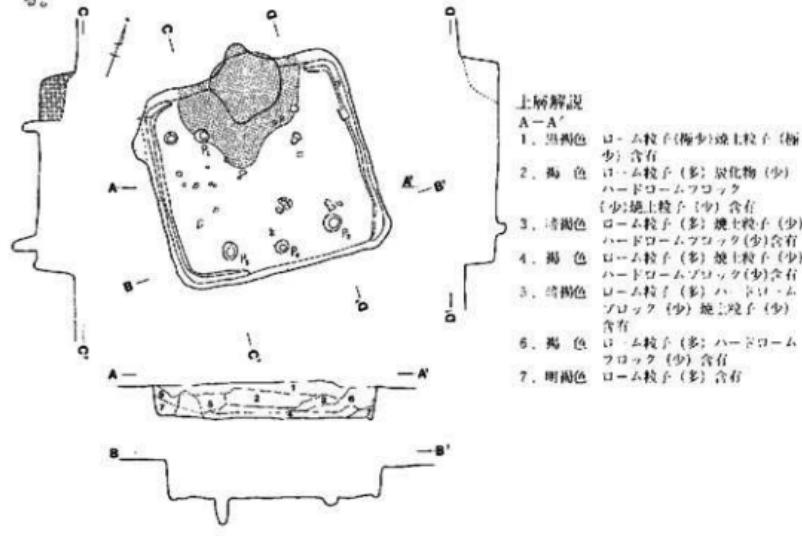
第11号住居址 (図29・30・31)

本住居址は、調査区の北西部中ほどA 1区 c 5, c 6, d 5, d 6に確認され、東側6.5mには第10号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN-35°Wで規模は長軸3.70m、短軸2.90m、面積は6.9m²ほどで正方形を呈している。壁高は確認面から40cm~55cmほどで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、遺存状態は良好である。壁下にはカマドと南壁の一部を除いて幅10cm、深さ5cm内外の壁溝を有している。床は南に傾斜し、硬く踏みかためられた状態を示している。ピットは5箇

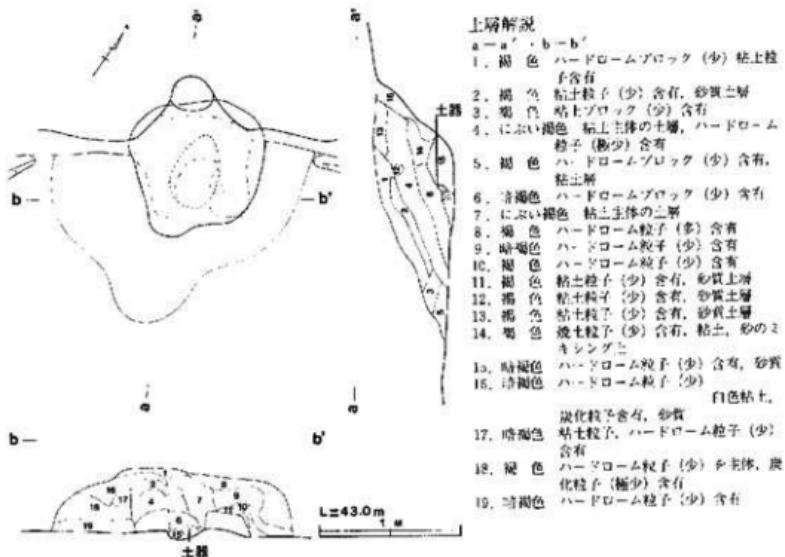
ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P 1	20	18	29	主柱穴	P 3	27	20	40	主柱穴
P 2	25	23	17	主柱穴					

所確認されP 1～P 3は主柱穴と考えられるが、南壁中央付近のP 4は出入口の施設に伴う柱穴と思われる。覆土は9層からなり、自然堆積の状態を示し、上層は黒褐色上で極少量のローム粒子、焼土粒子を含み、中層は褐色土で多量のローム粒子、少量の焼土粒子、ハードロームブロックを含んでいる。カマドは北壁中央から東よりに付設され、南向きに構築されている。規模は長径103cm、短径81cm、北壁を65cm幅で、27cm程度掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径52cm、短径34cm、深さ6cmで梢円形に掘り削めている。袖部は少量のローム粒子、ハードロームブロック混りの砂質粘土である。

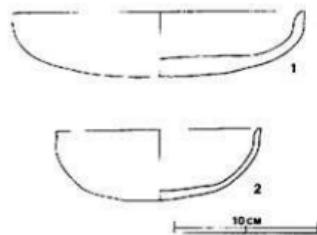
出土遺物は、土師器を主とし須恵器は破片のみ若干出土している。北壁付近床面直上から土師器の环、北東部床面直上から环(図31-1)、南壁附近床面から环(図31-2)を出土し、他には甕・壺などの破片を数点出土している。本址は出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。



第29図 第11号住居址実測図



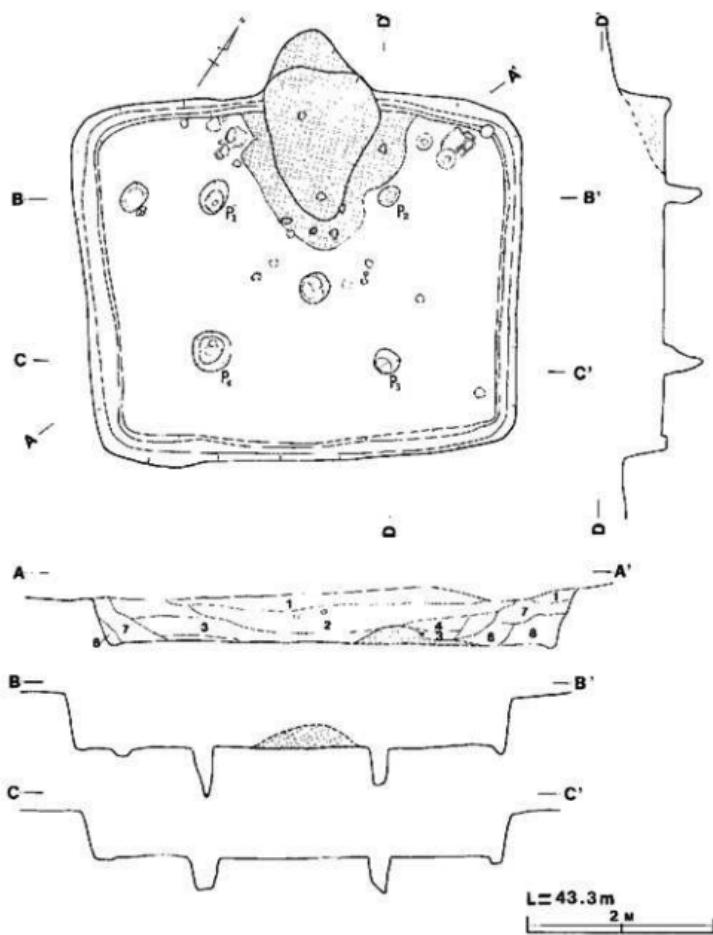
第30図 第11号住居址カマド実測図



第31図 第11号住居址出土遺物実測図

第12号住居址 (図32・33・34)

本住居址は、調査区の北端Z1区j6, j7, A1区a6, a7に確認され、北西2.0mには第6号住居址が、北東1.5mには第9号住居址が検出されている。主軸方向はN-36°Wで規模は、長軸は4.65m 短軸3.90m、面積14.4m²ほどで隅丸長方形を呈している。壁は北西が高く、壁高は確認面から43cm~62cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には、カマドを除いて幅10cm、深さ5cm内外の豊溝を有している。床面はほぼ平坦で、硬く踏みかためられた状態を示している。



土層解説

A-A'

- | | |
|--|---------------------------------|
| 1. 淡褐色 ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子(極少)
含有 | 6. 暗褐色 ローム粒子(多) 焼土粒子(少)
粘土含有 |
| 2. 黒褐色 ローム粒子(少) 炭化粒子(極少) 含有 | 7. 黑褐色 ローム粒子、焼土粒子、含有 |
| 3. 橙褐色 ローム(多) 粘土含有 | 8. 褐色 |
| 4. 黑褐色 ローム粒子、焼土粒子、含有 | |
| 5. 黑褐色 ローム粒子(多) 烧土ブロック、ローム
ブロック(少) 含有 | |

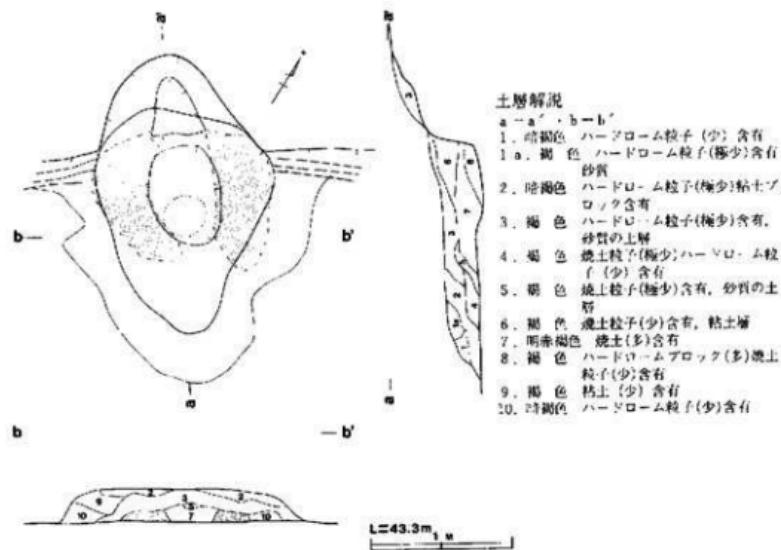
第32図 第12号住居址実測図

ピットは8箇所確認され、P1～P4までは主柱穴と考えられ、貯蔵穴は有していない。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P1	40	27	52	主柱穴	P3	27	25	38	主柱穴
P2	24	19	43	主柱穴	P4	46	45	35	主柱穴

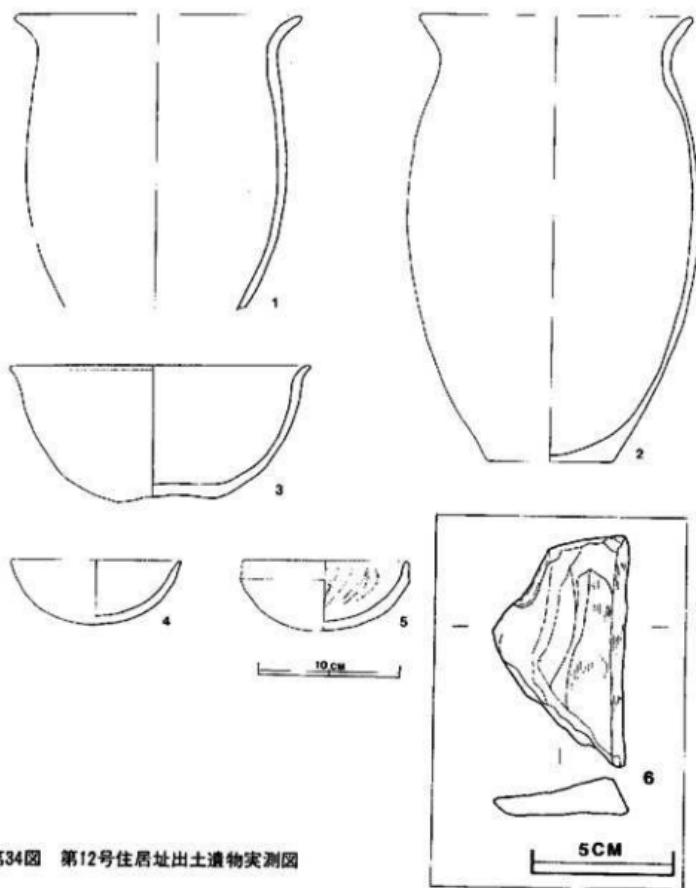
覆土は14層からなり、自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土でローム粒子、焼土粒子と極少量の炭化粒子を含み、中層は黒褐色土で少量のローム粒子、極少量の炭化粒子を、下層は暗褐色土で多量のローム粒子を含んでいる。北側には白色粘土が満っている。カマドは北壁中央から東よりに付設され、南東向きに構築されている。規模は長径155cm、短径126cmで、北壁を112cm幅で、58cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径32cm、短径33cm、深さ8cmほど円形に掘り溝めている。袖部は、ローム粒子とハードロームブロック混りの小石を含む砂質粘土である。焚口部からは粘土の焼けたものを多量に出土している。

出土遺物は、土師器を主とし須恵器を共伴して出土している。須恵器は环や蓋などの破片のみであるが、土師器の遺存率の高いものをあげると、北西コーナー床面から要(図34-2)、北壁中



第33図 第12号住居址カマド実測図

央付近床面上から甕片(図34-1),鉢片(図34-3), 西壁中央附近床面上から壺(図34-4), 他に床面上から壺(図34-5), 甕, 壺などの破片と, その他北東部床面上から砥石片(図34-6)を出土している。本址は, 出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。



第34図 第12号住居址出土遺物実測図

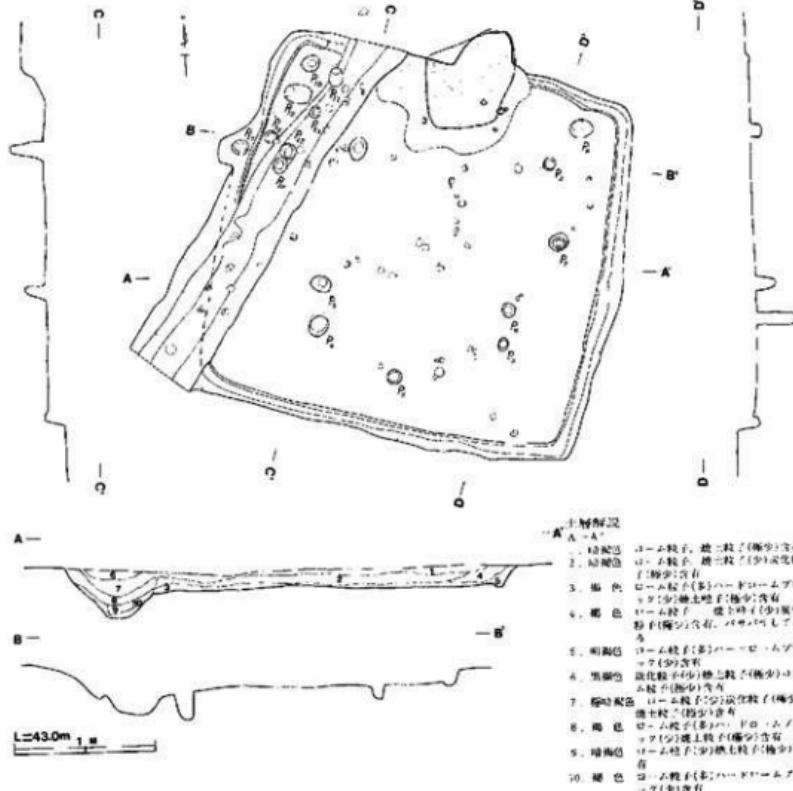
第13号住居址 (図35・36・37)

本住居址は, 調査区北部中ほどA 1区 b 0, g 0, A 2区 g 1, h 1に確認され南西1.2mには第3号住居址が検出されている。主軸方向はN-18°-Eで, 規模は長軸5.78m, 短軸5.35m, 面積21.0m²を測り, 残り長方形を呈している。本址の西側は南西から北東へ幅約82cm, 深さ約30cmの第3号溝が切ってあり, 北西コーナーの一部が残存している。本址は第3号溝より古い遺構

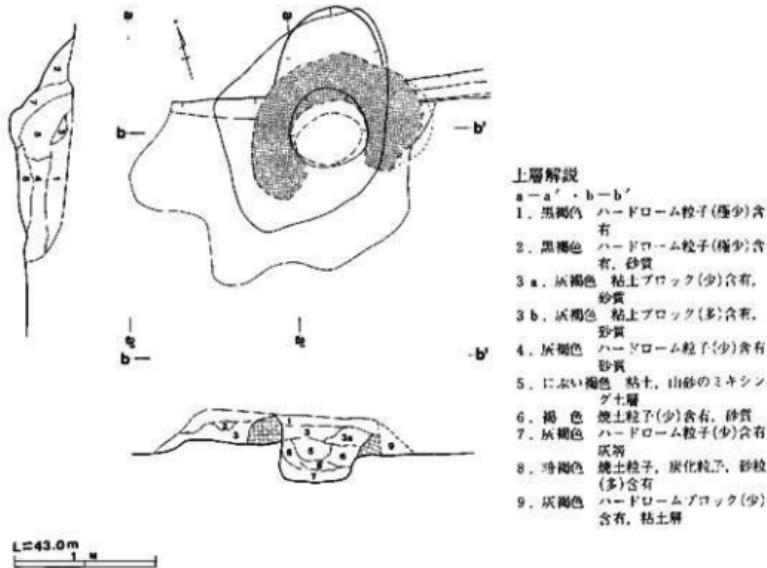
である。壁高は西側が高く15cm～35cm前後確認され、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁下にはカマドの西壁を除き幅16cm、深さ10cm内外の壁溝が廻っている。床面は木の根などによる擾乱を受けた状況で、全体的に南に傾斜している。ピットは17箇所確認され、P 1～P 4 は主柱穴と考えられる。南壁中央付近のP 5 は出入り口の施設に伴う柱穴と思われる。

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考	ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	31	25	40	主柱穴	P 3	20	15	60	主柱穴
P 2	18	16	15	主柱穴	P 4	30	25	57	主柱穴

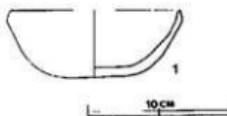
覆土は5層からなり、自然堆積状態を示している。上層は暗褐色土・褐色土でローム粒子、ハートドロームブロック、焼土粒子、炭化粒子を含み、下層は明褐色土でローム粒子、ハードドローム



第35図 第13号住居址実測図



第36図 第13号住居址カマド実測図



第37図 第13号住居址出土遺物実測図

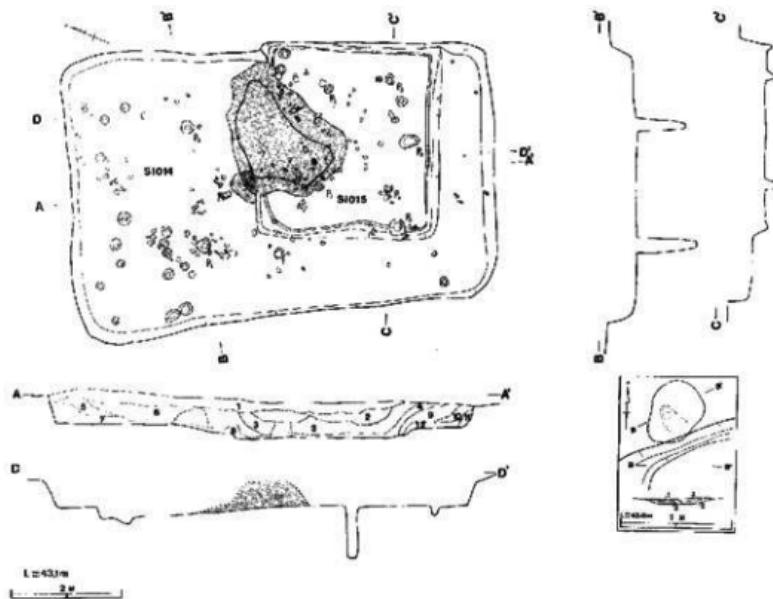
ブロックを少量含んでいる。カマドは北壁の中央から東よりに付設され、南西向きに構築されている。規模は長径128cm、短径117cmで、北壁を77cm幅で、35cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径45cm、短径52cm、深さ19cmで円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの小石を含む砂質粘土で塗かれている。焚口部からはローム粒子の焼けたものを多量に出土している。

出土遺物は非常に少なく、南東部床面から土師器の壊(図37-1)、床面直上から壺、壺、甕などの破片を出土している。須恵器はすべて破片である。その他、弦文式土器の長岡系に比定されると思われる菱形土器の口縁部、胴部など数点を出土している。壁土の焼けたものと思われる焼上塊を少量出土していることから、本址は火災に遭遇していると思われる。本址は、出土遺物等から

真間期に比定される造構と思われる。

第14号住居社（図38・40(1)・(2)）

本住居址は、調査区の北西部A1区e7, f6, f7, g6, g7, g8, h7に確認され、本址の南よりには東壁の一部を利用し、第15号住居址が床面を22cmほど掘り込んでっぽりと複合している。本址は第15号住居址より古い遺構である。南側5.0mには第17号住居址が検出されている。



上層解說

1. 黒褐色 ハーフロームブロック少量、焼土粒、炭火粒子を多量に含有し、よりあり
 2. 海色 多量のいし・ム粒子を含有し、粘性あり
 3. 焼土

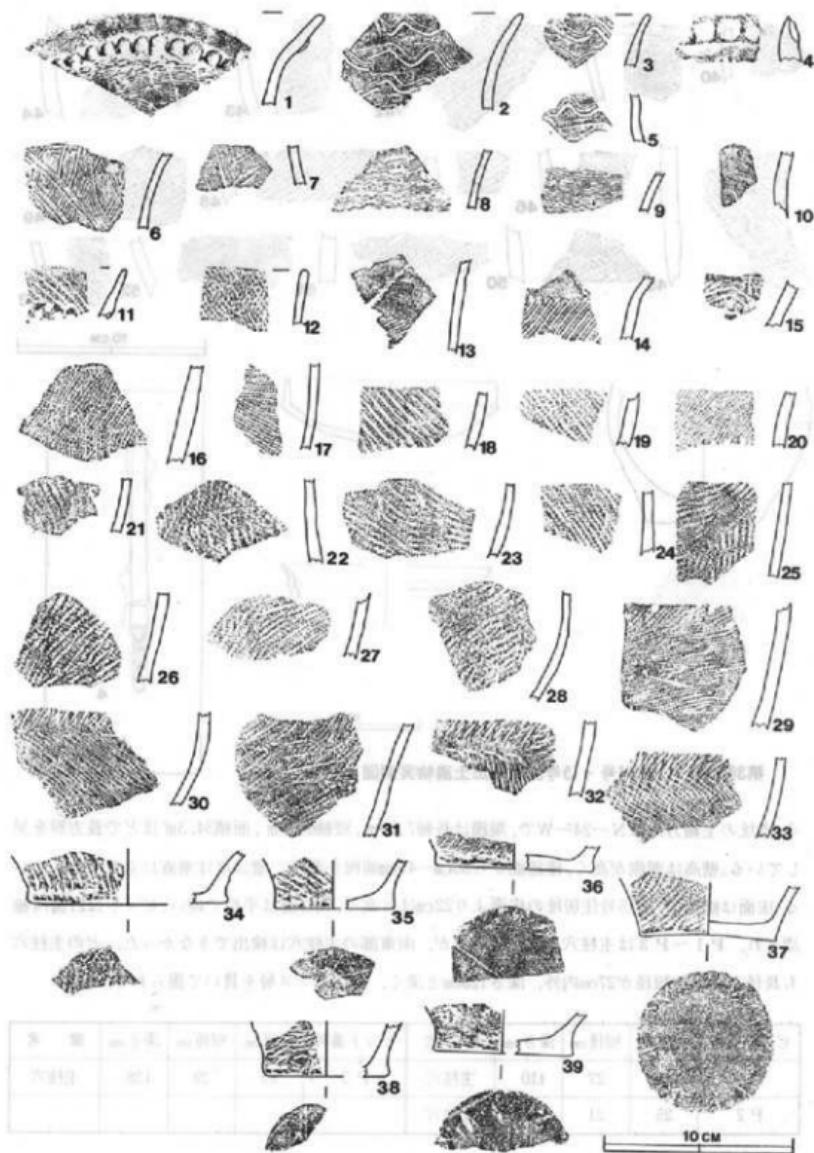
十一、解說

- A-A'

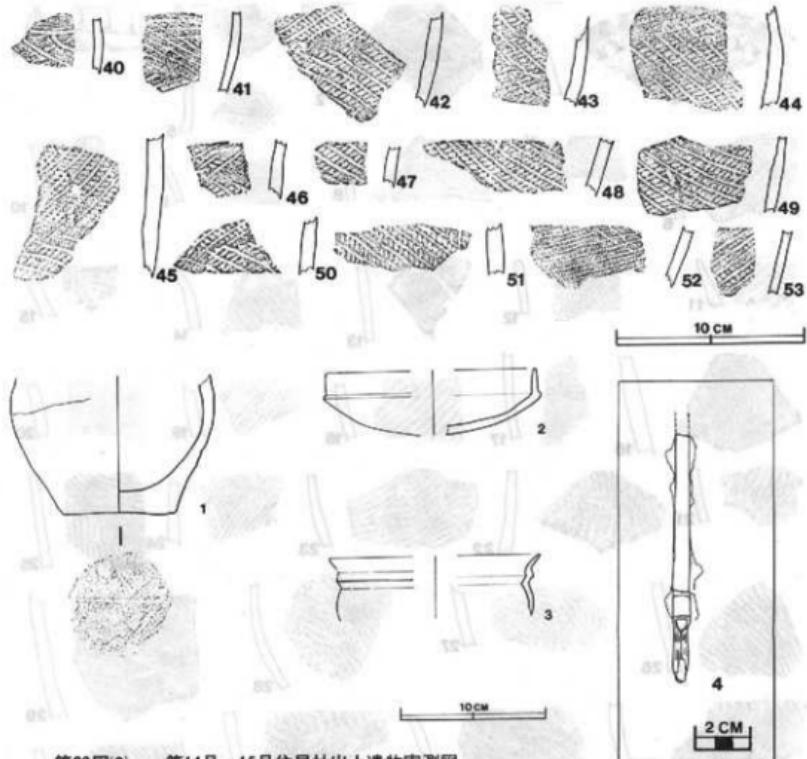
 1. 淡褐色 ローム粒子(少)焼土粒子(極少)炭化粒子(少)含有
 2. 黑褐色 ローム粒子(極少)焼土粒子(極少)炭化粒子(少)含有
 3. 暗褐色 ローム粒子、燒土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
 4. 極暗褐色 ローム粒子、焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有

- 褐色 ローム粒子(多)燒土粒子(極少)炭化粒子(極少)
 - 褐色 ローム粒子(少)燒土粒子(極少)炭化粒子(極少)ソフトローム・ブロック含有
 - 明湖色 ハードローム・ブロック 燃土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
 - 褐色 ローム粒子(多)燒土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
 - 明褐色 ローム粒子(多)燒土粒子(極少)ハードコーム含有
 - 褐色 ローム粒子(多)燒土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有

第38図 第14号・15号住居址実測図



第39圖(1) 第14號住居址出土遺物拓影圖



第39図(2) 第14号・15号住居址出土遺物実測図

る。本址の主軸方向はN-24°-Wで、規模は長軸7.60m、短軸6.00m、面積34.3m²ほどで長方形を呈している。壁高は西側が高く、確認面から36cm~49cm前後を測り、壁はほぼ垂直に立ち上がっていいる。床面は褐色で、第15号住居址の床面より22cmほど高く、残存部は平坦で硬い。ピットは21箇所確認され、P 1~P 3は主柱穴と考えられるが、南東部の主柱穴は検出できなかった。どの主柱穴も長径が28cm、短径が27cm内外、深さ128cmと深く、鹿沼バミス層を貫いて掘られている。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備 考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備 考
P 1	28	27	110	主柱穴	P 3	29	29	128	主柱穴
P 2	25	21	88	主柱穴					

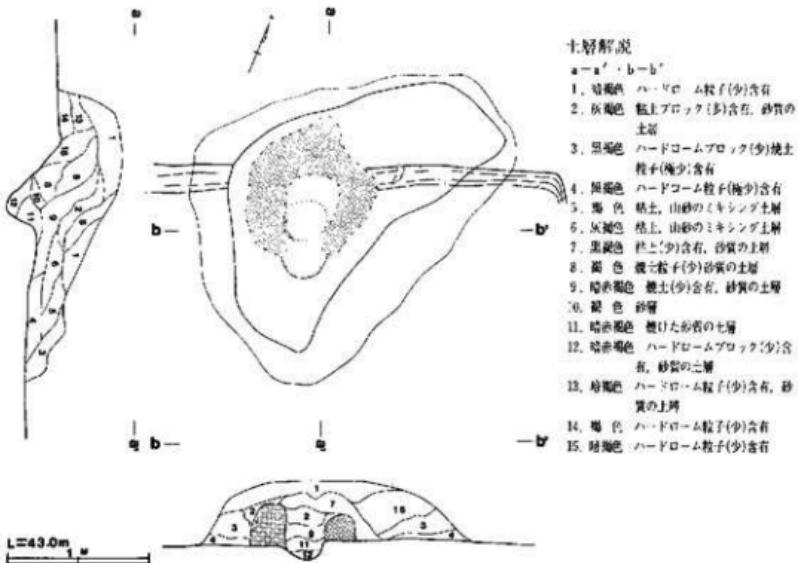
覆土の状態は第15号住居址に切られているが、他は自然堆積の状態を示している。覆土の上層は極暗褐色土でローム粒子、ハードロームブロック、焼土粒子を極少量含み、下層は暗褐色土で

ローム粒子を多量に、焼土粒子、炭化粒子をごく少量含んでいる。炉址は床面の中央部にあり、第15号住居址に約半分ほど削除されているが、長径58cm前後ではほぼ楕円形を呈していたものと思われる。燃焼部はローム土が赤く焼け、焼土が多量に含まれていた。

出土遺物は弥生式土器の壺形土器口縁部、頸部、胴部、底部などの破片数点で、底部には布目压痕がみられる。本址は弥生時代の長岡系に比定される遺構と思われる。

第15号住居址（図38・39(1), (2)）

本住居址は、調査区の北西部A 1区f 7, g 7, g 8に確認され、本址は第14号住居址の東壁の一部を利用し、床面を22cmほど掘り下げて構築されており、第14号住居址より新しい遺構である。南側5.0mには第17号住居址が検出されている。主軸方向はN-25°Wで規模は長軸3.50m、短軸3.30m、面積8.8m²のはば正方形を呈している。北・西・南の残存壁高は22cmほどで、東壁は約50cmであり、壁は垂直に立ち上がり、壁下にはカマドの部分をのぞき幅15cm、深さ8cm内外の壁溝が廻っている。床面は黒褐色の貼り床で、硬く踏みかためられた状態を示しているが凸凹が著しい。ピットは9箇所確認され、主柱穴はP 1～P 4、P 5は出入口の施設に伴う柱穴と思われる。貯蔵穴は有していない。



第40図 第15号住居址カマド実測図

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P 1	16	14	?	主柱穴	P 3	18	16	25	主柱穴
P 2	17	14	?	主柱穴	P 4	16	15	16	主柱穴

覆土は8層からなり自然堆積の状態を示している。上層は極暗褐色土・黒褐色土で少量のローム粒子、極少量の炭化粒子、焼土粒子とハードロームブロックを含み、中層は暗褐色土でローム粒子と極少量の焼土粒子、炭化粒子、ハードロームブロックを含み、下層は極暗褐色土でローム粒子と極少量の焼土粒子と炭化粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央部に付設され、南東向きに構築されている。規模は長径232cm、短径182cmで黒色土と小石混りの砂質粘土で築かれている。燃焼部は長径60cm、短径55cmで、40cmほど円形に掘りくぼめている。焚口部にはローム粒子の焼けたものが多量に出土している。出土遺物は少なく、土師器を主とし須恵器が少量出土している。須恵器は全て蓋や环などの破片である。土師器の遺存状態の良好なものあげると、東壁付近床面直上から小型甕(図39(2)-1)、西壁際床面直上から壺(図39(2)-2)出土している。他には甕(図39(2)-3)、器台などの破片を数点出土している。また、鉄製品(図39(2)-4)を南西コーナー床面直上から出土している。

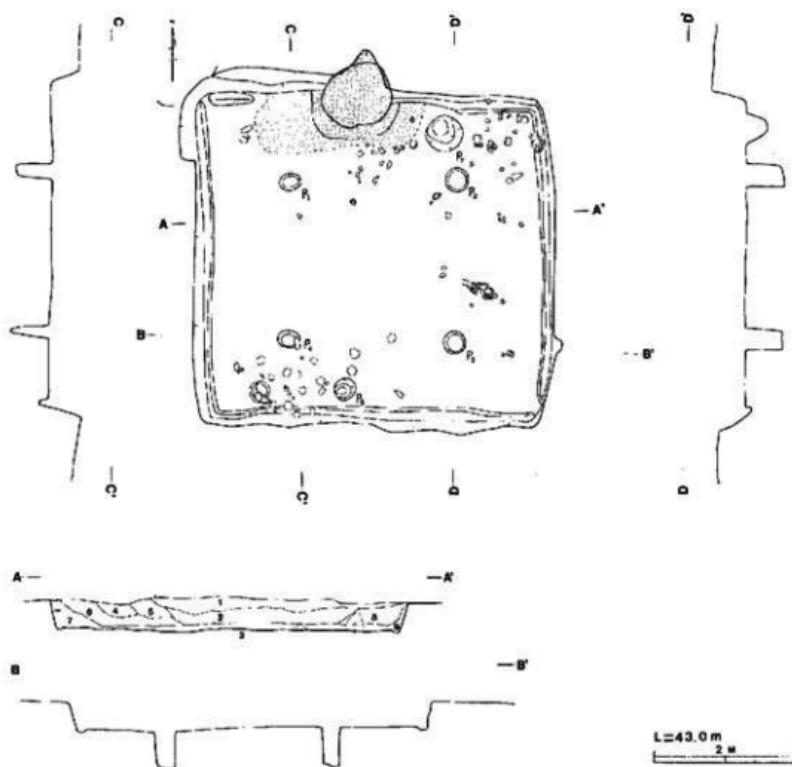
本址は、古墳時代の鬼高間に比定される遺構と思われる。

第16号住居址(図41・42・43)

本住居址は、調査区の中央部A1区 i 9, i 0, B1区 a 9, a 0に確認され、北西コーナーは第1号井戸に接し、南側3.0mには第18号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN1°-Wで規模は長軸5.10m、短軸4.60m、面積20m²ほどの長方形を呈している。壁高は確認面から38cm~45cmであり、壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁下には北壁を除き幅15cm、深さ13cm内外の壁溝が廻っている。

床面は平坦で踏みかためられた状態を示している。ピットは6箇所確認され、主柱穴はP 1~P 4、南壁付近のP 5は出入口の施設に伴う柱穴と思われる。カマド東側のP 6は貯蔵穴とみられ、規模は長径54cm、短径53cm、深さ30cmほどで円形を呈している。本址はカマド付近から焼土を多量に出土しているので火災に遭い廃棄された後、ローム土で埋めもどされた可能性も考えられる。覆土は9

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P 1	30	25	55	主柱穴	P 4	30	24	55	主柱穴
P 2	36	31	30	主柱穴	P 6	54	53	30	貯蔵穴 (小壁際円形)
P 3	32	31	55	主柱穴					



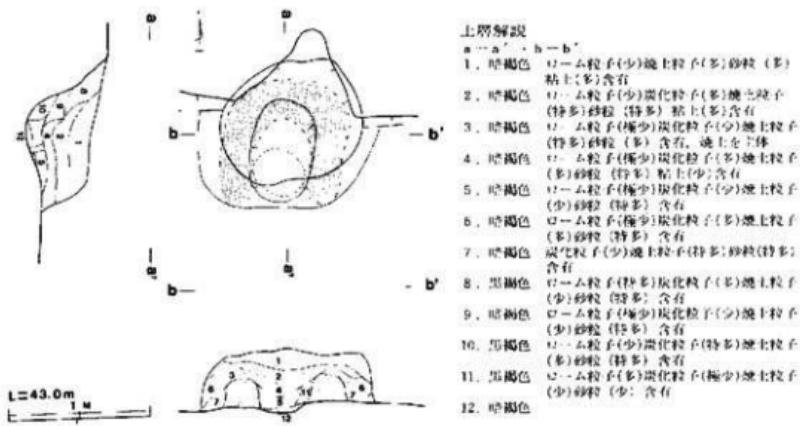
上層解説

A-A'

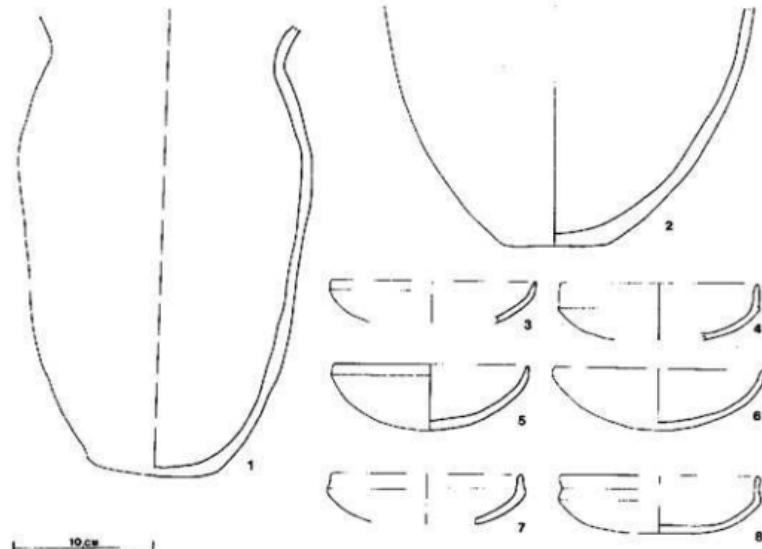
1. 暗褐色 ローム粒子、焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
2. 暗褐色 ローム粒子、焼土粒子(少)炭化粒子(少)含有
3. 褐色 ローム粒子、焼土粒子(多)炭化粒子(多)炭化物、含有
4. 褐色 ローム粒子、焼土粒子(少)炭化粒子(少)サラサラしている、ハードロームブロック(少)含有

5. 明褐色 ローム粒子(多)焼土粒子、炭化粒子、ハードロームブロック(多)含有、ロームでうめた感じ
6. 褐色 ローム粒子(多)焼土粒子(少)炭化粒子(多)含有
7. 褐色 ローム粒子(多)焼土粒子(極少)炭化粒子(多)含有
8. 褐色 ローム粒子(多)焼土粒子、炭化粒子、ハードロームブロック(少)含有
9. 明褐色 ローム粒子(多)焼土粒子、ハードロームブロック(多)含有

第41図 第16号住居址実測図



第42図 第16号住居址カマド実測図



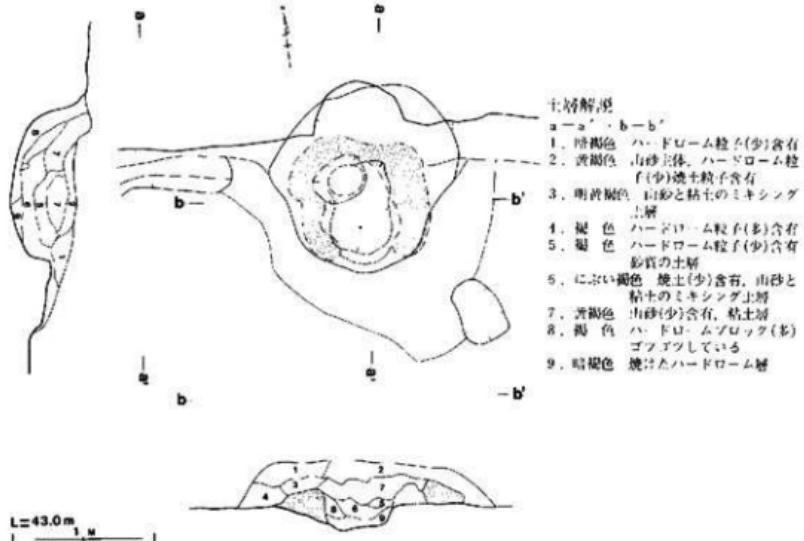
第43図 第16号住居址出土遺物実測図

層からなり、自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土でローム粒子、焼土粒子、炭化粒子を含み、下層は褐色土でローム粒子、焼土粒子、炭化粒子を含んでいる。

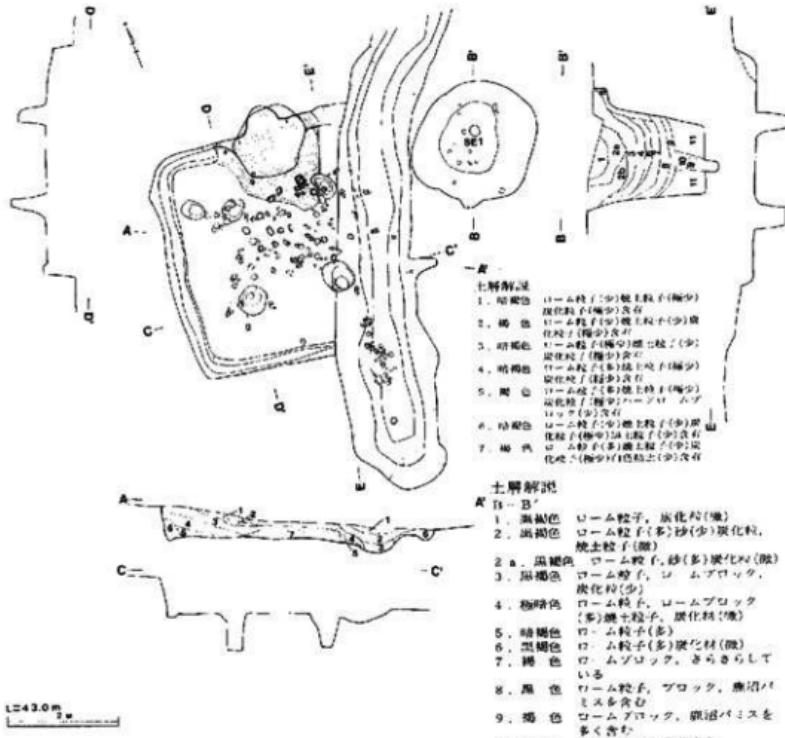
カマドは北壁の中央部に付設され、南向きに構築されている。規模は長径125cm、短径88cmで北壁を83cm幅で、54cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径71cm、短径50cm、深さ8cmほど掘りこぼめている。袖部は黒色土と小石混りの粘土で築かれている。出土遺物は、土師器が主で須恵器は全て环などの破片や細片のみである。遺存状態の良好な土師器をあげると、カマド内より裏片(図43-2)、南西壁附近床面直上より甕(図43-1)、北東コーナー床面や床面直上から环4個(図43-4・7)、内黒の环2個(図43-5・6)と、南東コーナー床面直上から环(図43-8)のほかに甕と环(図43-3)などの破片を多数を出土している。その他、クルミと思われる炭化物と鉄滓、軽石などと弥生式土器の十王台式より古い型式の土器片数点が出土し、底部には布目压痕がみられる。本址は、出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。

第17号住居址(図44・45・46)

本住居址は、調査区の中央部A1区i7, i8, j7, j8に確認され、東側は溝状遺構に切られており、本址は溝状遺構より古い遺構である。南側5.0mには第14号住居址が、北側7.0mには第19号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN-6°-Eで、規模は長軸4.15m、推定短



第44図 第17号住居址カマド実測図



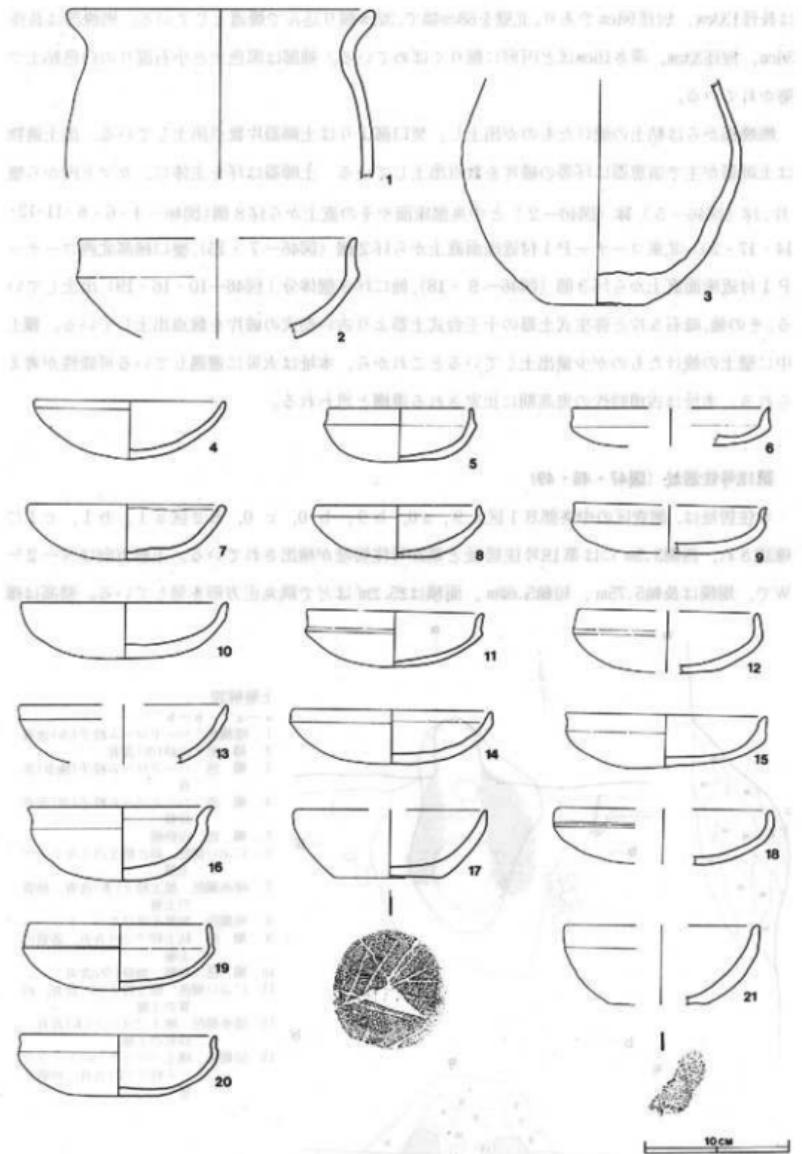
第45図 第17号住居址・第1号井戸状構造実測図

幅4.0m、推定面積15.01m²を測り、ほぼ隅丸正方形を呈している。東側の床と壁は溝状遺構に切られ確認することができない。壁高は確認面から37cm~64cmを測り、壁は西側が高く、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には東部を除き幅18cm、深さ5cm内外の壁溝を有している。

ピットは5箇所確認され、主柱穴はP1~P4と考えられる。貯蔵穴は有していない。覆土は7層からなり、自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土でローム粒子、焼土粒子、炭化粒子を含み、下層は褐色土で、多量のローム粒子、ハードロームブロック、焼土粒子、炭化粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央付近に付設され、南向きに構築されている。

規模

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P 1	46	37	49	主柱穴	P 3	62	50	61	主柱穴
P 2	50	35	51	主柱穴	P 4	55	52	60	主柱穴



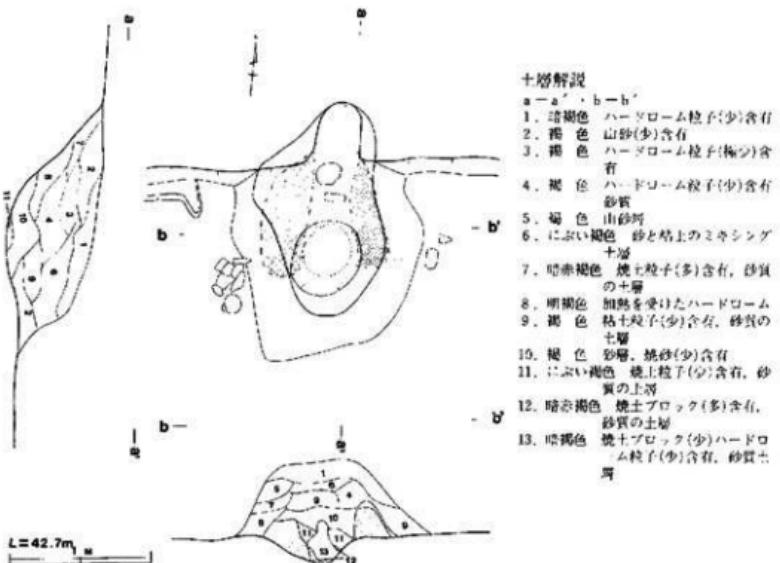
第46図 第17号住居址出土遺物実測図
（絞糸、骨、貝類）

は長径133cm、短径98cmであり、北壁を68cm幅で、32cm掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径36cm、短径33cm、深さ16cmほど円形に掘りくぼめている。袖部は黒色土と小石混りの白色粘土で築かれている。

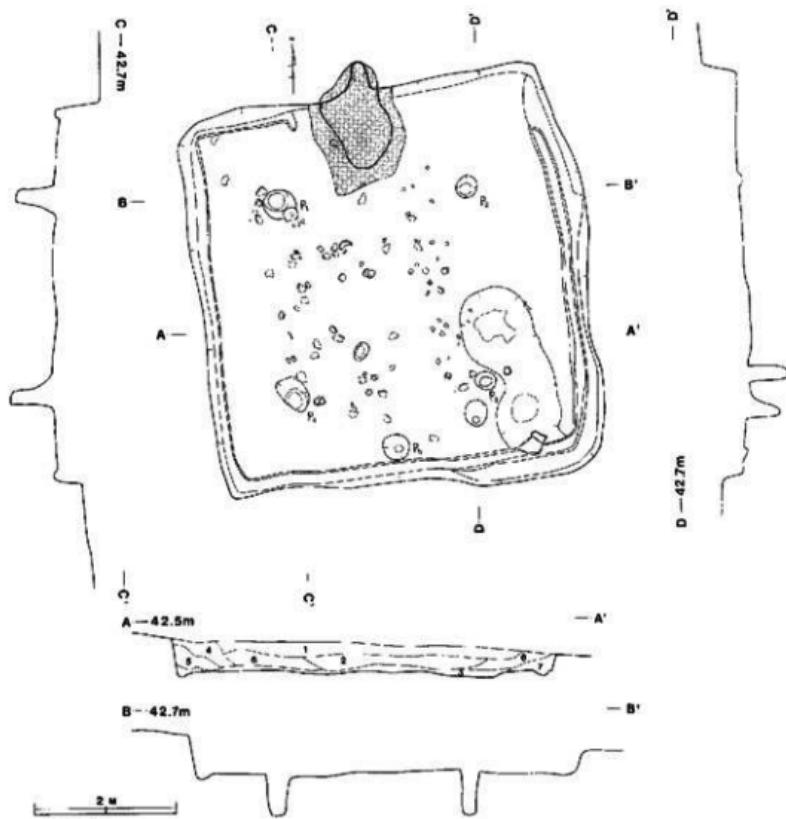
燃焼部からは粘土の焼けたものが出土し、焚口部よりは上師器片数点出土している。出土遺物は上師器が上で須恵器は壺等の破片を数点出土している。土師器は壺を主体に、カマド内から甕片、壺(図46-5)鉢(図46-2)と中央部床面やその直上から壺8個(図46-4・6・8・11・12・14・17・20)、東北コーナーP1付近床面上から壺2個(図46-7・15)、窓口縁部北西コーナーP1付近床面上から壺3個(図46-9・18)、他に壺3個体分(図46-10・16・19)出土している。その他、砥石5片と弥生式土器の十土台式土器より古い型式の破片を数点出土している。覆土中に壁土の焼けたものが少量出土しているとこれから、本址は火災に遭遇している可能性を考えられる。本址は古墳時代の鬼高窯に比定される構造と思われる。

第18号住居址(図47・48・49)

本住居址は、調査区の中央部B1区a9, a0, b9, b0, c0, B2区a1, b1, c1に確認され、西側3.5mには第19号住居址と第20号住居址が検出されている。主軸方向はN-E-Wで、規模は長軸5.75m、短軸5.60m、面積は25.2m²ほどで隅丸正方形を呈している。壁高は確



第47図 第18号住居址カマド実測図



土層解説

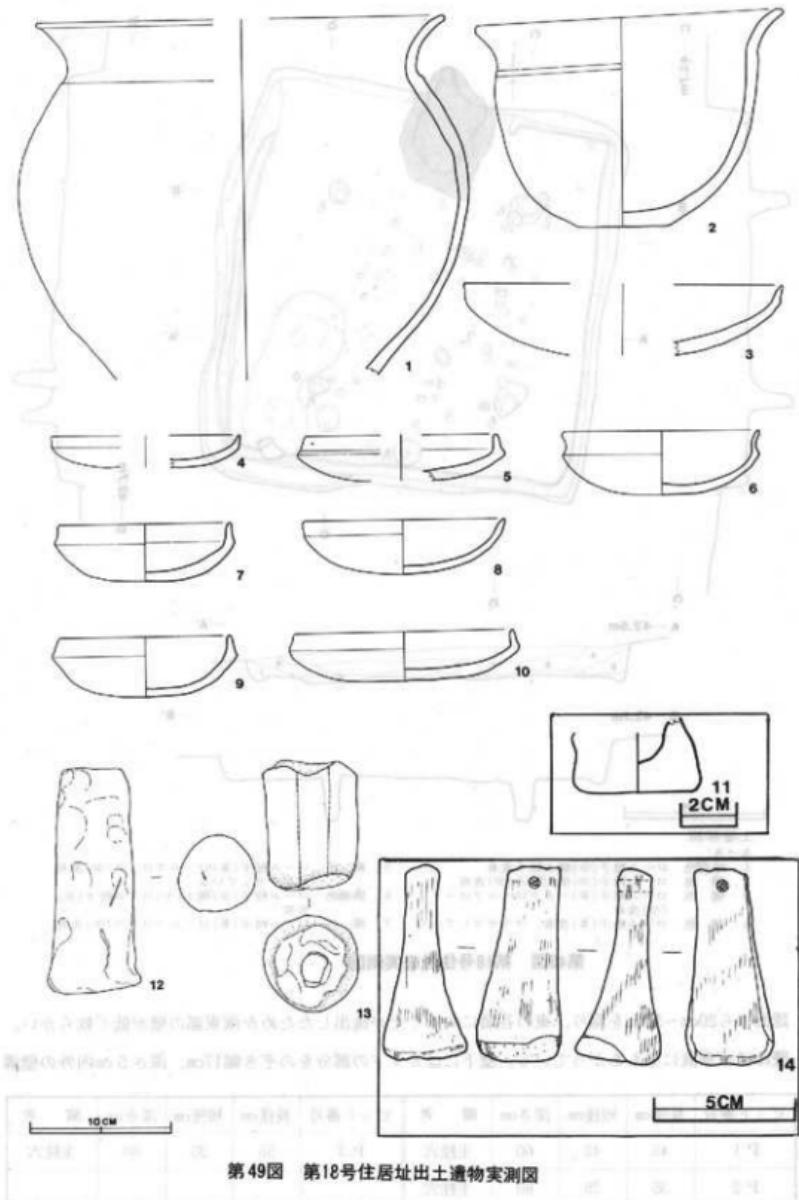
A-A'

- | | | | | | | |
|---------------------------|-----------------------------|-----------------------------------|-------------------------------|---|-----------------------------------|-------------------------------|
| 1. 黒褐色
ローム粒子(少)燒土粒子(少) | 2. 黑褐色
ローム粒子(少)燒土粒子(少)含有 | 3. 黑褐色
ローム粒子(多)ハーフロームブロック(少)含有 | 4. 黑褐色
ローム粒子(多)含有、ササナラしている | 5. 黑色
ローム粒子(多)ロームブロック(少)含有
ササナラしている | 6. 黑褐色
ローム粒子(少)燒土(少)ローム粒子(少)含有 | 7. 黑色
ローム粒子(多)ロームブロック(少)含有 |
|---------------------------|-----------------------------|-----------------------------------|-------------------------------|---|-----------------------------------|-------------------------------|

第48図 第18号住居址実測図

認面から20cm～50cmを測り、東の谷間に向って土が流出したためか南東部の壁が低く軟らかい。壁はほぼ垂直に立ちあがっている。壁下にはカマドの部分をのぞき幅17cm、深さ5cm内外の壁溝

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P 1	45	42	60	主柱穴	P 3	55	35	60	主柱穴
P 2	35	25	60	主柱穴					



第49図 第18号住居址出土遺物実測図

が残っている。

床面は暗褐色を呈し、西半分は硬く、東半分は軟らかく貼り床となっている。ピットは7箇所確認されP1～P4は主柱穴と考えられ、P5は出入口の施設に伴う柱穴と思われる。覆土は8層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土・褐色土でローム粒子少量、焼土粒子を含み、下層は褐色土でローム粒子、ハードロームブロックを少量含んでいる。

カマドは北壁の中央部に付設され南東向きに構築されている。規模は長径150cm、短径90cmほどで北壁を74cm幅で、40cmほど掘り込み煙道としている。燃焼部は長径51cm、短径47cmで床を円形に深さ1.6cmほど掘り深めている。袖部は白色粘土に小石を混せて築かれている。出土遺物は土器が中心で須恵器は壊などの破片を極少量出土している。完存率の良好な土器をあげると、南東コーナーP2付近床面から壺(図49-7)、北西コーナーP1付近床面直上から壺2個(図49-5・6)、中央部から甕片(図49-1)、カマド内から甕(49-2)、羽口(図49-13)、支脚(図49-12)、壺6個(図49-3・4・8・9・10)、南西部床面直上から手挽土器が出土している。他に甕、壺、支脚などの破片を多数出土している。さらに床面から有孔の砾石(図49-14)、弥生式土器片で、十手台式土器より古い型式の頭部、胴部、底部などを数点出土している。底部には木葉痕がみられる。本址は古墳時代鬼高期に比定される遺構と思われる。

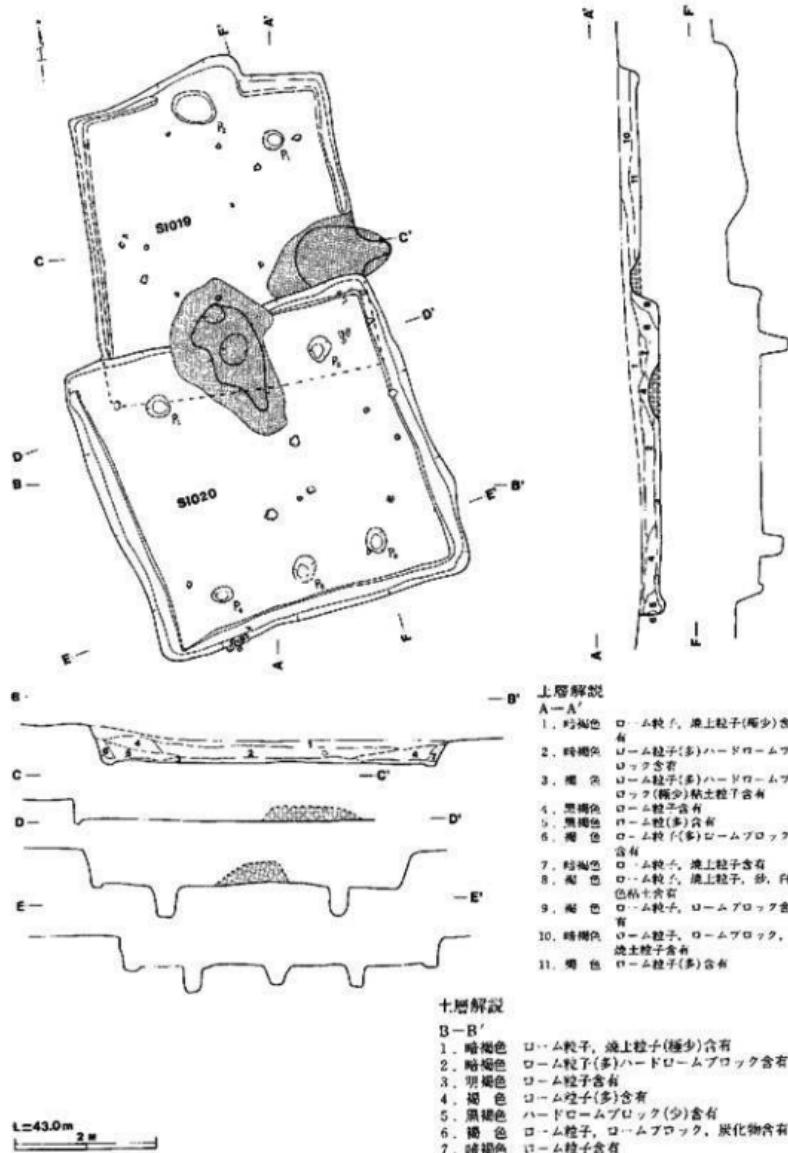
第19号住居址(図50・51)

本住居址は、調査区の中ほどB1区a7, a8, b7, b8に確認され、南部は第20号住居址と複合している。東側3.5mには第18号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN-87°E、規模は推定で長軸4.15m、短軸3.65m、面積13.6m²ほどで長方形を呈している。壁高は確認面から12cm～22cmを測り、西壁が高く北壁はあまりはっきりとした壁でなく軟らかい、北壁にそつて2mほどローム土で埋めもどされていた。また北壁の中央部は半円形にはりだしている。壁下には東壁と北壁に幅15cm、深さ8cmの聖溝を有している。

ピットは2箇所だけ確認され、北壁付近中ほどのP2は貯蔵穴と思われ、規模は長径62cm、短

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P1	30	28	20	主柱穴	P2	62	45	15	貯蔵穴 (半円形)

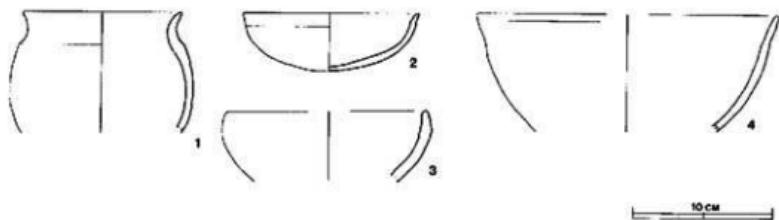
径45cm、深さ15cmを測る。床面は暗褐色土を呈し平坦で、カマド付近は軟らかく凸凹がある。覆土は3層からなり、第20号住居址の構築時にローム土で埋めもどされたと思われる。上層は暗褐色土でローム粒子、ロームブロックを多量に含み、焼土粒子を含んでいたためボロボロしている。下層は褐色土でローム粒子を多量に含んでいる。カマドは東壁に付設され、西南西向きに構築されている。第20号住居址によって約半分ほど切られ、焚口部と思われるところから焼土を多量に



第50図 第19号・第20号住居址実測図

出土している。袖部は黒色土混りの砂質粘土で表かれている。出土遺物は少なく土器が中心で、須恵器は、瓶と少量の破片が出土している。土器の完存率の良好なものをあげると、カマド内から小型壺片(図51-1)と环(図51-2・3)、南西コーナー床面から鉢(図51-4)、他に、甕杯などの破片を少量出土している。さらに鐵滓を覆土から出土している。

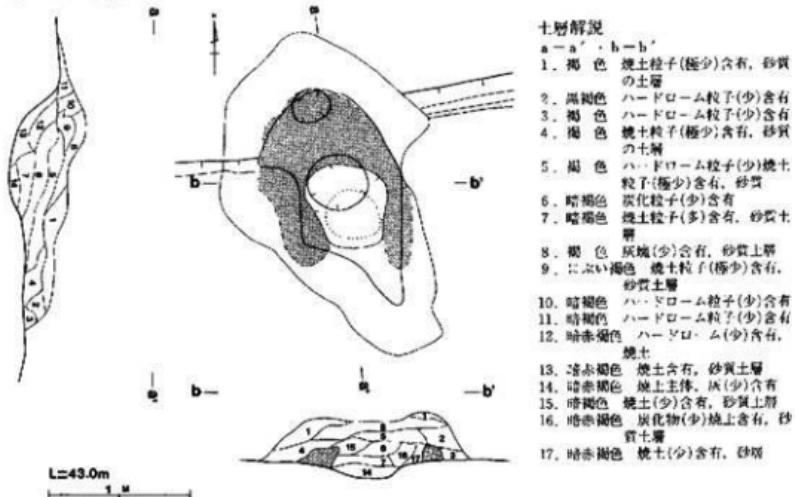
本址は出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。



第51図 第19号住居址出土遺物実測図

第20号住居址(図50・51・52・53)

本住居址は、鶴立区の中央部B1区b7, b8, b9, c7, c8, c9に確認され、東側約3.0mには第18号住居址が、南側1.5mには第21号住居址が検出されている。本址は、第19号住居址の南部の床面を約30cmほど掘り下げて構築されている。主軸方向はN-15-Wで、規模は長軸4.65m、



第52図 第20号住居址カマド実測図

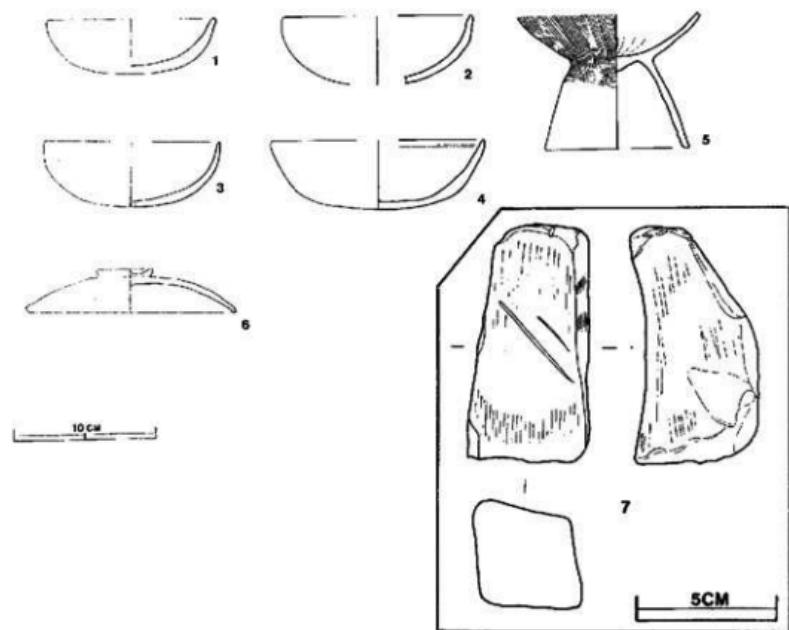
面積4.50m²、面積17.0m²内外で、ほぼ正方形を呈している。確認壁高は西側が高く40cm~48cmで壁は垂直に立ちあがっている。壁下にはカマドの部分を除き幅15cm、深さ5cm内外の壁構が削っている。

床面は暗褐色土を呈し硬く東に傾斜している。ピットは5個所確認されP.1~P.4は主柱穴と

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号				備考
					長径cm	短径cm	深さcm	備考	
P.1	34	33	43	主柱穴	P.3	38	27	30	主柱穴
P.2	39	29	40	主柱穴	P.4	30	25	38	主柱穴

考えられるが、P.5は出入りの施設に伴う柱穴と思われる。貯藏穴は有していない。覆土は9層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で極少量のローム粒子、焼土粒子を含み、中層は暗褐色土で多量のローム粒子、ハードロームブロックを含み下層は褐色土で多量のローム粒子、極少量のハードロームブロックと焼土粒子を含んでいる。

カマドは北張の中央部に付設され南東向きに構築されている。規模は長径122cm、短径95cmほどで、北張を77cm幅で、37cmほど掘り込み煙道としている。燃焼部は長径42cm、短径95cmほどの円形状を呈し約8cmほど床を掘り削めている。袖部は黒色土と小石混りの白色粘土で築かれている。燃焼部よ



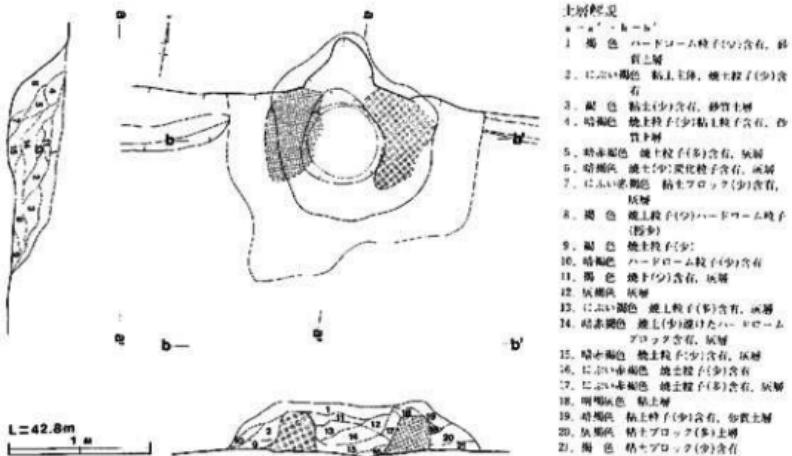
第53図 第20号住居址出土遺物実測図

り环が出土している。出土遺物は土師器と須恵器が共伴して出土している。土師器の完成率の良いものをあげると、北東コーナーP2付近床面直上から环(図53-1・2・4)、他に壺、内黒の壺などの破片を少量出土している。須恵器は中央部床面直上から蓋(図53-6)と环などの破片を少量出土している。その他、覆土から鉄滓、磁石(図53-7)、台付磨片(図53-5)を出土している。本址は出土遺物等から考えて真間期に比定される遺構と思われる。

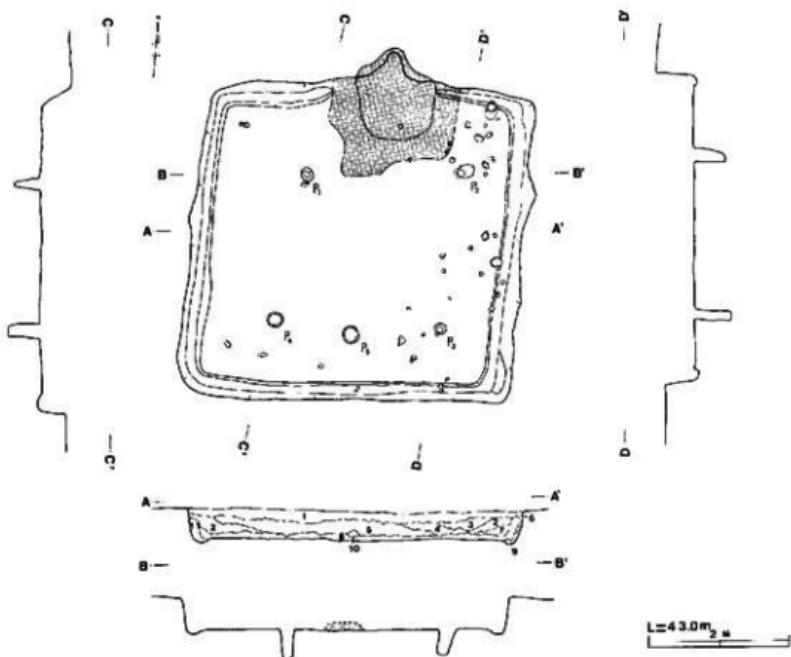
第21号住居址(図54~56)

本住居址は、調査区の中央部B1区d8, d9, e8, e9に確認され、北側1.5mには第20号住居址が、南西1.5mには第1号井戸状遺構が検出されている。本址の主軸方向はN-2°Eで、規模は長軸4.70m、短軸4.50m、面積16.0m²程ではば正方形を呈している。壁高は北側が高く43cm~54cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には幅17cm、深さ7cm内外のU字形をした壁溝がカマドを除き廻っている。床面は平坦で暗褐色土を呈し硬く踏み固められた状態を示している。

ピットは5個所確認されP1~P4は生柱穴と考えられ、P5は出入口の施設に伴う柱穴と思われる。貯藏穴は有していない。覆土は12層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で多量のローム粒子と焼土粒子を含み、下層は褐色土で多量のローム粒子、ハードロームブロックを含んでいる。カマドは北壁中央部に付設され、ほぼ南向きに構築されている。規模は長径



第54図 第21号住居址カマド実測図



土層解説

A-A'

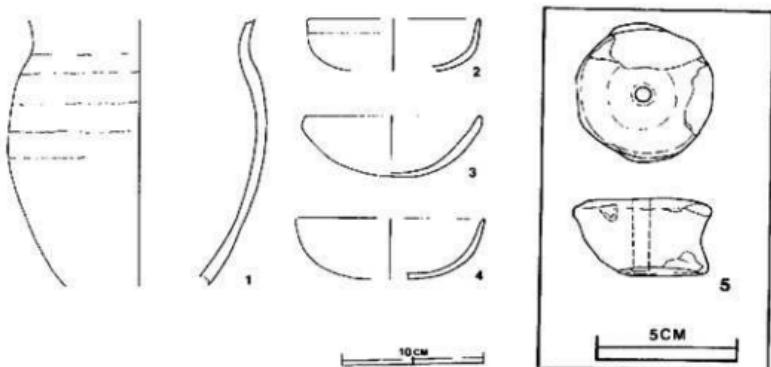
1. 暗褐色 ローム粒子を含む。繊りをおびている
2. 暗褐色 多量のローム粒子を含み繊りをおびている
3. 桃褐色 多量のローム粒子、少量の焼土粒子を含み、繊りない
4. 褐色 多量の炭化粒子、ローム粒子、焼土粒子を含む、ザザザしている
5. 暗褐色 多量のローム粒子、焼土粒子を含み、繊りをおびている
6. 明褐色 多量のローム粒子、少量の焼土粒子を含み、ザザザしている
7. 褐色 多量のローム粒子、少量の焼土粒子を含み、繊りをおびている
8. 暗褐色 少量のローム粒子、焼土粒子を含み、繊りをおびている
9. 明褐色 多量のローム粒子、ハードロームブロックを含み粘性をおびている
10. 底褐色 白色粘土を含み、繊りあり
11. 明褐色 多量のローム粒子を含み、繊りをおびている

第55図 第21号住居址実測図

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P 1	19	16	37	主柱穴	P 3	16	15	52	主柱穴
P 2	25	19	45	主柱穴	P 4	22	21	47	主柱穴

121cm、短径120cmほどで、北壁を114cmの幅で、56cmほど掘り込み煙道としている。燃焼部は長径56cm、短径59cmほどの円形状を呈し約6cmほど掘り深めている。袖部は白色粘土に小石をまぜて築かれている。

出土遺物は土師器が主で、須恵器は床面直上から櫛目刺突文のある壺の残欠と、他に破片少量を出土している。土師器の完存率の良好なものをあげると、北東コーナー床面直上から壺(図56-1)、東壁付近から壺2個(図56-3・4)、南西コーナー床面直上から壺(図56-2)と、他に甕、壺など破片を数点出土している。その他、土製紡錘車(図57-5)を覆土中から出土している。本址は出土遺物等から考えて真間期に比定される遺構と思われる。



第56図 第21号住居址出土遺物実測図

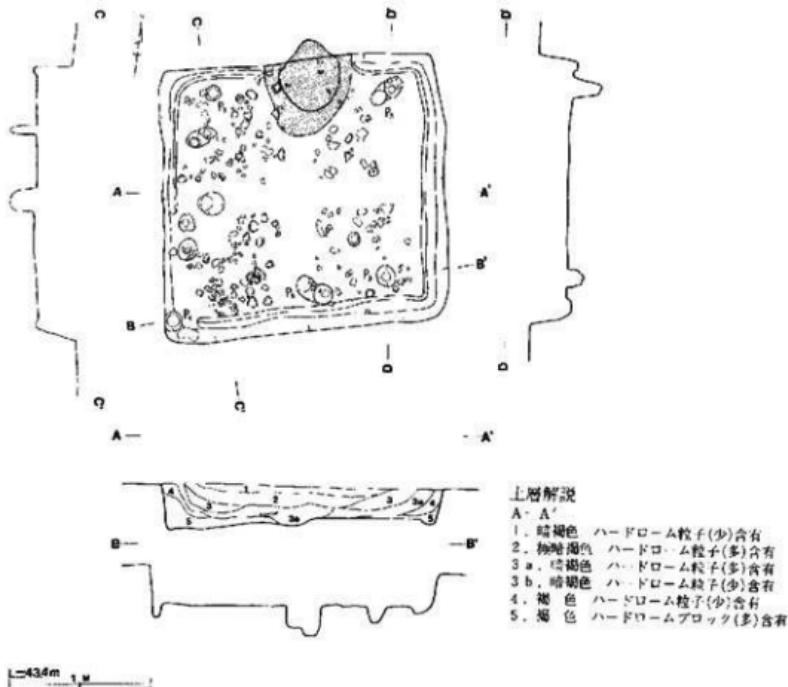
第22号住居址(図57・58・59(1)(2))

本住居址は、調査区の中ほどB1区f9, f0, g9, g0に確認され南西4.0mには第23号住居址が、3.0mには第1号掘立柱建築址が確認されている。本址の主軸方向はN 4°Wで、規模は長軸4.00m、短軸3.85m、面積11.7m²で、ほぼ正方形を呈している。壁高は41cm~55cm前後で壁は西側が高くほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には幅15cm、深さ10cm内外の壁溝がカマドと西壁一部を除いて巡っている。床面は平均で暗褐色土を呈し、硬く踏み固められた状態を示している。

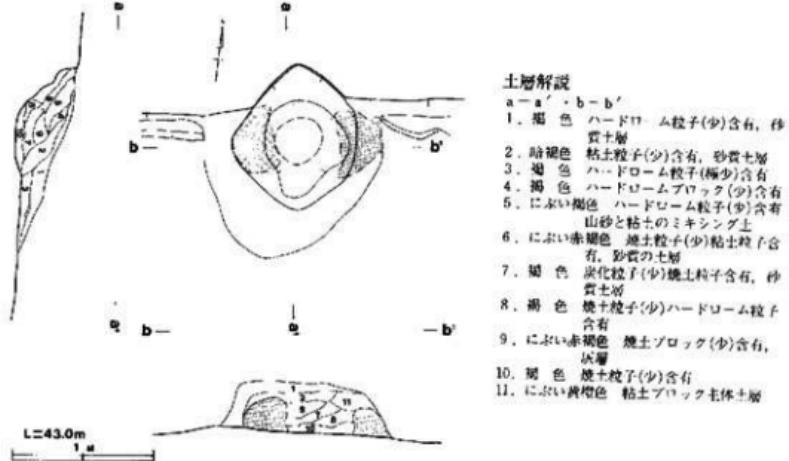
ピットは12箇所確認されP1~P4は主柱穴と考えられる。P5は出入口の施設に伴う柱穴と思わ

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P 1	23	22	40	主柱穴	P 3	35	27	24	主柱穴
P 2	33	26	43	主柱穴	P 4	24	20	74	主柱穴

れる。貯蔵穴は有していない。覆土は10層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色上で比較的多量のハードロームブロックを含み、下層は褐色土で、ハードロームブロックを含んでいる。カマドは北壁の中央に付設され南南東向きに構築されている。規模は長径105cm、短径100cmほどで、北壁を66cmの幅で25cmほど掘り込み煙道部としている。燃焼部は長径35cm、短径34cmほどの円形に掘り窪めている。



第57図 第22号住居址実測図

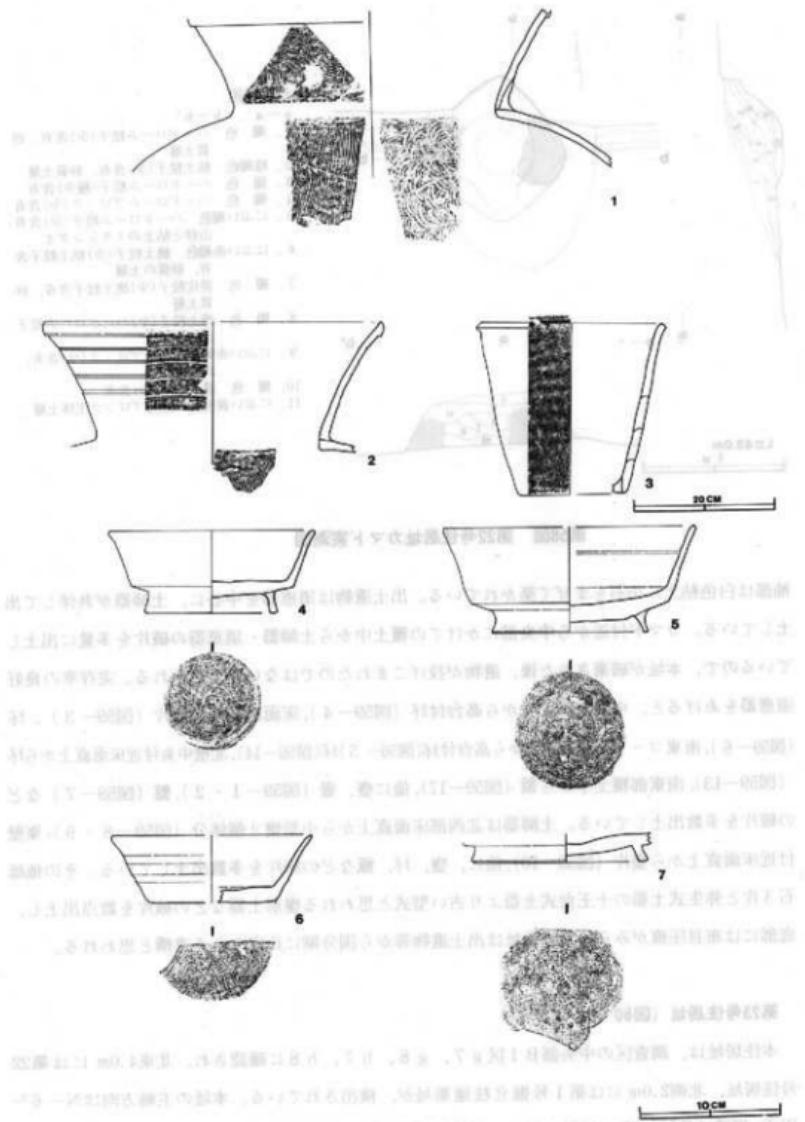


第58図 第22号住居址カマド実測図

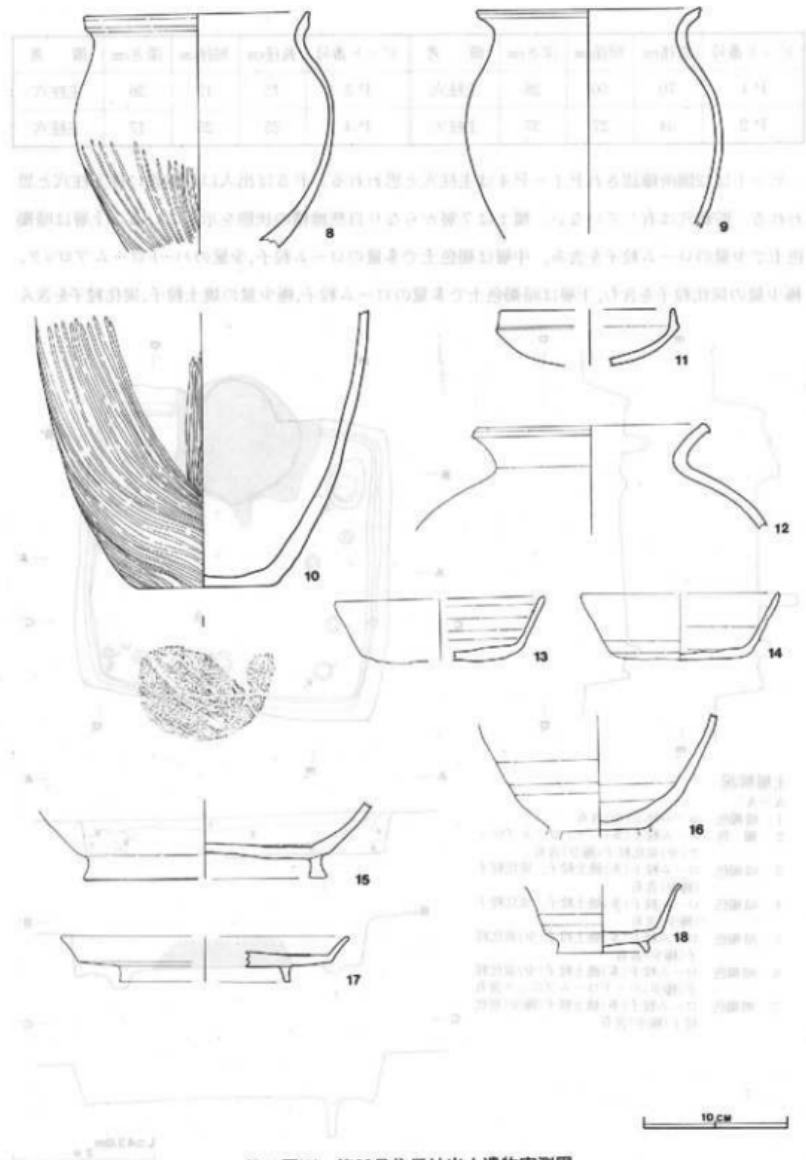
袖部は白色粘土に小石をまぜて築かれている。出土遺物は須恵器を中心に、土師器が共伴して出土している。カマド付近から中央部にかけての覆土中から土師器・須恵器の破片を多量に出土しているので、本址が破壊された後、遺物が投げこまれたのではないかと思われる。完存率の良好な須恵器をあけると、中央部覆土中から高台付环(図59-4)、床面直上から盤片(図59-3)、环(図59-6)、南東コーナー・床面直上から高台付环(図59-5)、(図59-14)、北壁中央付近床面直上から环(図59-13)、南東部覆土中から盤(図59-17)、他に甕、壺(図59-1・2)、盤(図59-7)などの破片を多数出土している。土師器は北西部床面直上から小型甕2個体分(図59-8・9)、東壁付近床面直上から甕片(図59-10)、他に、甕、壺、盤などの細片を多数出土している。その他砥石3片と弥生式土器の十王台式土器より古い型式と思われる變形土器などの破片を数点出土し、底部には布目圧痕がみられる。本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第23号住居址(図60・61・62)

本住居址は、調査区の中央部B1区g7, g8, h7, h8に確認され、北東4.0mには第22号住居址、北側2.0mには第1号掘立柱建築址が、検出されている。本址の主軸方向はN-6°Wで、規模は長軸4.45m、短軸4.30m、面積13.2m²ほどでほぼ正方形を呈している。壁高は49cm~62cmほどで、壁は西側が高くほぼ垂直に立ちあがり、壁下には幅15cm、深さ10cm内外の壁溝がカマドの部分を除き廻っている。床面は平坦で褐色を呈し、北西コーナー部が貼り床となっている。



第59図(1) 第22号住居址出土遺物実測図

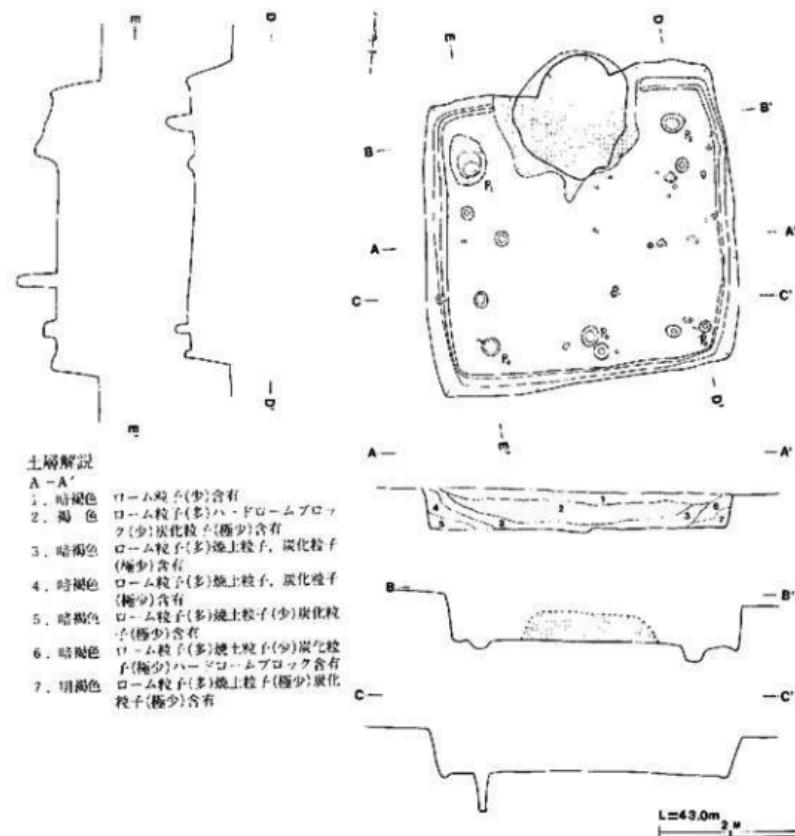


第59図(2) 第22号住居址出土遺物実測図

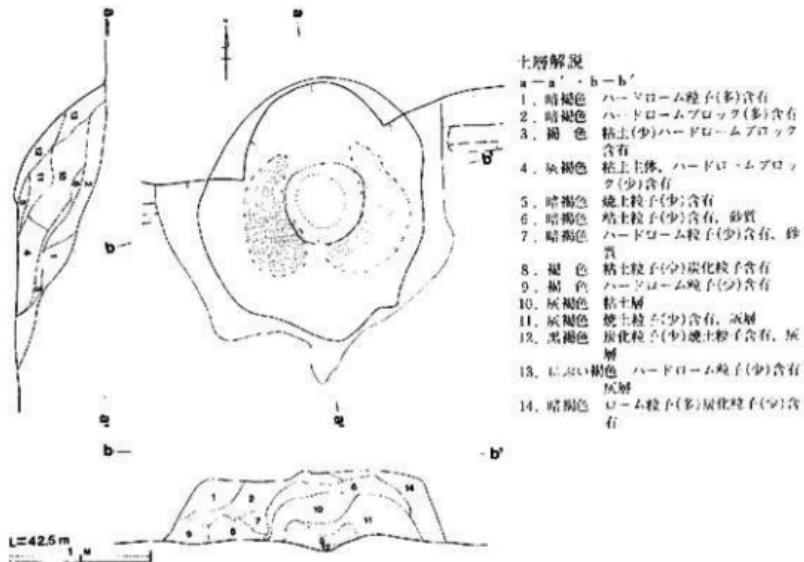
國立高麗歴史遺跡研究 国立博物館

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P 1	70	50	28	主柱穴	P 3	15	15	36	主柱穴
P 2	34	27	37	主柱穴	P 4	25	25	17	主柱穴

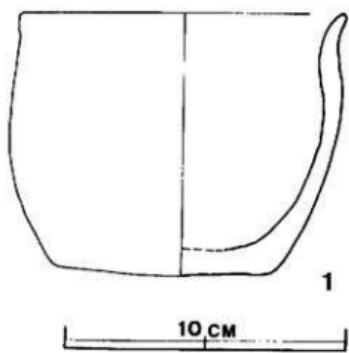
ピットは12個所確認されP 1～P 4は主柱穴と思われる。P 5は出入口の施設に伴う柱穴と思われる。貯藏穴は有していない。覆土は7層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で少量のローム粒子を含み、中層は褐色土で多量のローム粒子、少量のハードロームブロック、極少量の炭化粒子を含む、下層は暗褐色土で多量のローム粒子、極少量の焼土粒子、炭化粒子を含む。



第60図 第23号住居址実測図



第61図 第23号住居址カマド実測図



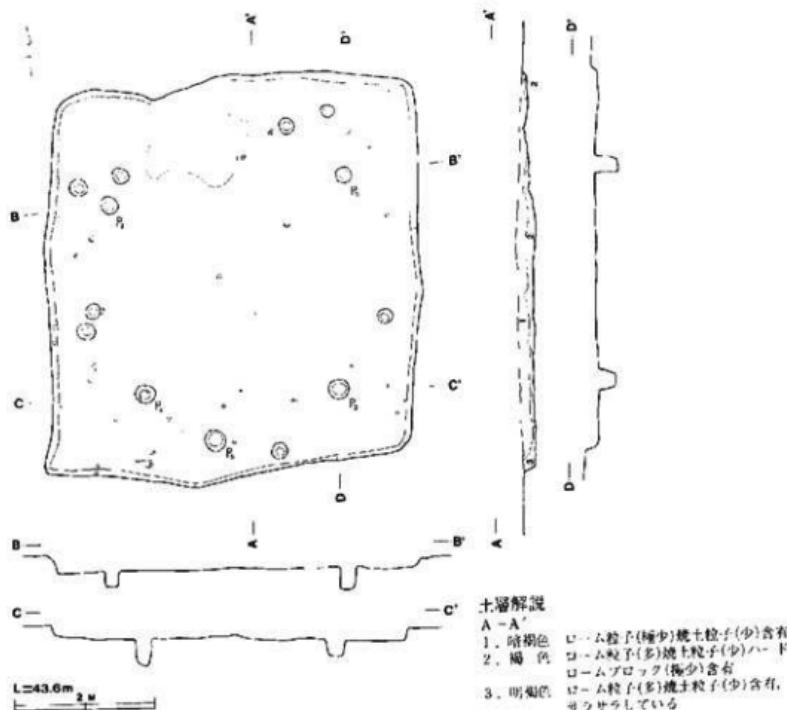
第62図 第23号住居址出土遺物実測図

でいる。カマドは北壁の中央に付設され、規模は長径140cm、短径100cmほどで北壁を105cm幅で、47cmほど掘り込み煙道部としている。燃焼部は長径57cm、短径56cmほどの円形状に掘り進めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土でカマドはほぼ南東向きに構築されている。出土遺物は土師器と須恵器を共伴しているがどちらも出土量は少ない。土師器は内黒の鉢(図62-1)を床面直上から、他には、环などの破片を数点出土している。須恵器は蓋などの破片を数点出土している。

本址の時期を決定しうるにたる遺物の出土は少ないが、ほぼ真間期に比定される遺構と思われる。

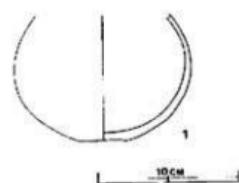
第24号住居址(図63・64)

本住居址は、調査区の西侧中ほどのB1区e4, e5, f4, f5, f6, g4, g5,



第63図 第24号住居址実測図

g. 6に確認され、北側約3.0mには第2号円形周溝追構が東側5.0mには第1号掘立柱造構が、南東3.0mには第23号住居址が検出されている。主軸方向はN-5°Eで規模は長径5.65m、短径5.25m、面積26.7m²を割り長方形を呈している。壁は軟かくはっきりとしない。壁高は15cm~20cm内外



第64図 第24号住居址出土遺物実測図

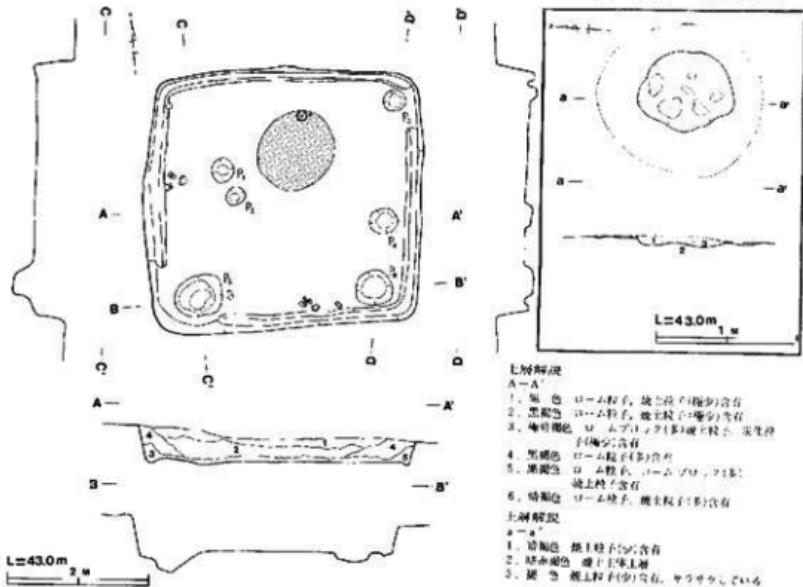
ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P 1	25	23	23	主柱穴	P 3	30	30	22	主柱穴
P 2	25	23	35	主柱穴	P 4	28	26	39	主柱穴

で、壁溝は有していない。床面は半壇で褐色のローム土であるが軟らかくはっきりとしない。

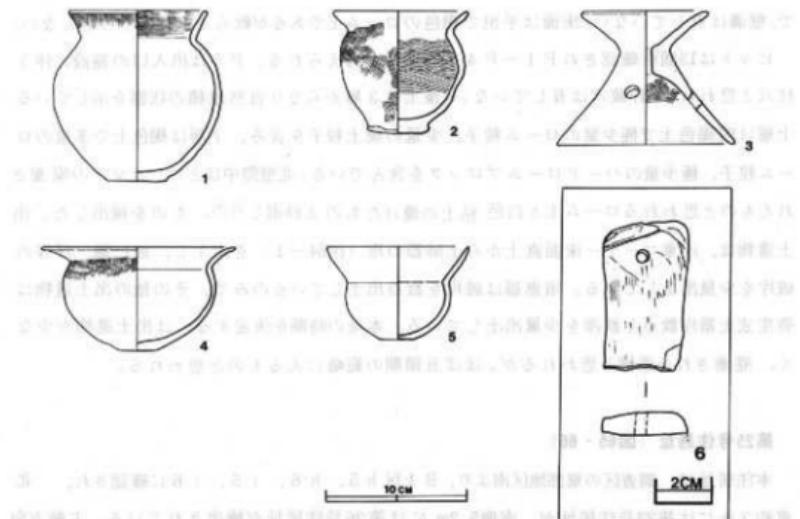
ピットは13箇所確認されP 1～P 4は主柱穴と考えられる。P 5は出入口の施設に伴う柱穴と思われる。貯蔵穴は有していない。覆土は3層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で極少量のローム粒子、少量の焼土粒子を含み、下層は褐色土で多量のローム粒子。極少量のハードロームブロックを含んでいる。北壁際中ほどに、カマドの廢棄されたものと思われるローム土と白色粘土の焼けたものと砂混じりの、ものを検出した。出土遺物は、南東コーナー床面直上から土師器の組（図64-1）を出土し、他に甌、壺等の破片を少量出土している。須恵器は破片を数点出土しているのみで、その他の出土遺物は旁生式土器片数点と鉄滓を少量出土している。本社の時期を決定するには出土遺物が少なく、廢棄された遺構と思われるが、ほぼ五頭期の範疇に入るものと思われる。

第25号住居址（図65・66）

本住居址は、調査区の東部地区南より、B 1区 h 5, h 6, i 5, i 6に確認され、北東約3mには第23号住居址が、南側5.2mには第26号住居址が検出されている。主軸方向はN-3°Eで、規模は長軸3.95m、短軸3.75m、面積10.6m²を測り、ほぼ開丸正方形を呈している。壁は北側が高く南が低くなっている、壁高は37cm～51cm内外で壁下には幅11cm、



第65図 第25号住居址実測図



第66図 第25号住居址出土遺物実測図

深さ5cm内外の壁溝が北東・南西コーナーを除き廻っている。床面は軟らかく、褐色を呈し東に傾斜している。ピットは5個所確認されたが主柱穴と考えられるものは床面上には検出できなかった。第26号住居址・第28号住居址と同じように外部施設として主柱穴を有しているものと思われる。南西コーナーP5は貯蔵穴と思われ、規模は長径74cm、短径55cm、深さ30cmを測る不整

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P 5	74	55	30	貯蔵穴 (不整梢円形)					

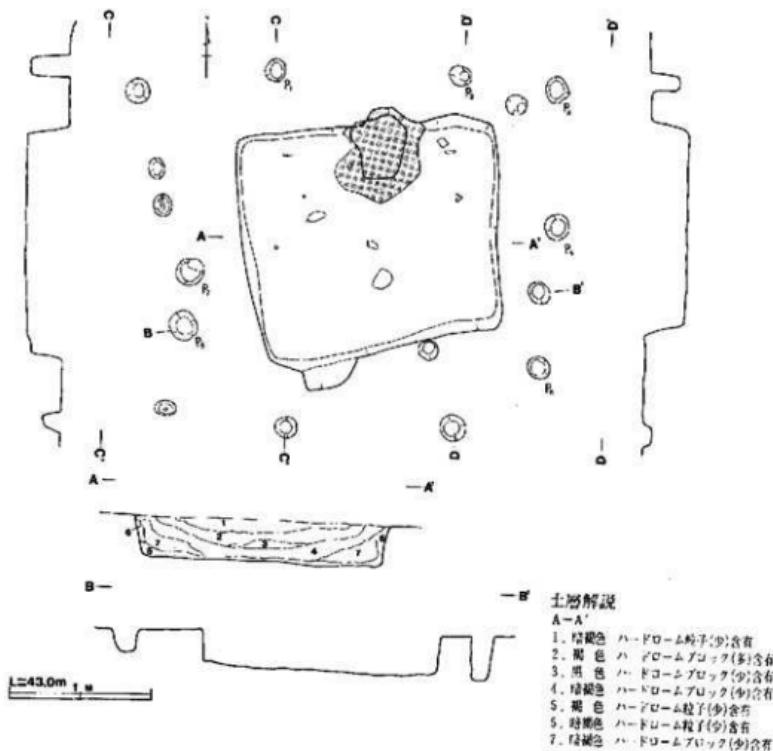
梢円形形状を呈している。覆土は6層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土でローム粒子、極少量の焼土粒子を含有し、下層は極暗褐色土で多量のロームブロック、焼土粒子、炭化粒子を含有している。炉址は中央よりやや北側に有しており、規模は長径120cm、短径108cmではば円形を呈し、焼成部は約7cmほど掘り盛めており、焼土が充満していた。出土遺物は土師器が主で、南壁付近床面直上から小型甕(図66-4)、南西コーナー床面直上から小型甕(図66-1)、壺(66-5)、西壁付近床面直上から小型甕(66-2)炉址付近直上より器台(図66-3)を出土している。その他有孔の砥石1片(図66-6)と粘土を多量に出土している。本址は古墳時代の五領期に比定される遺跡と思われる。

第26号住居址(図67・68・69)

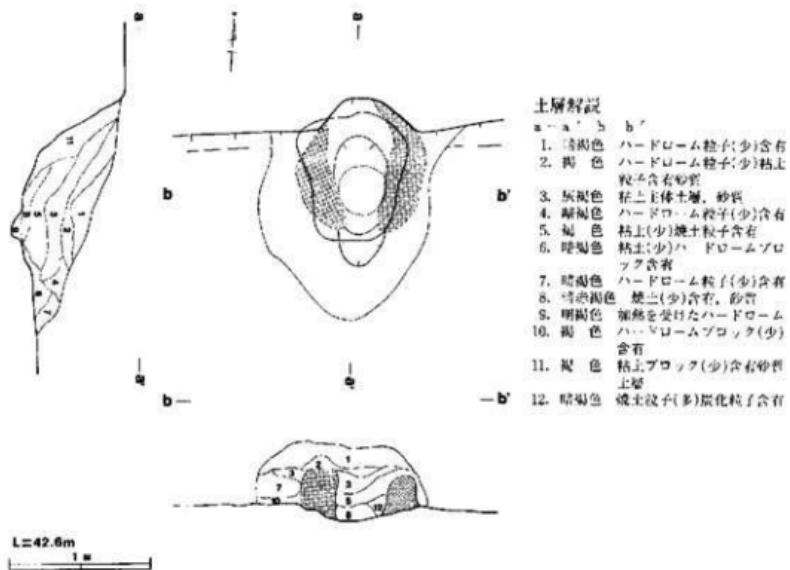
本住居址は、調査区の南部西寄りのB1区j6, j7, C1区a6, a7に確認され、西側

約3.0mには第27号住居址が、北側約5.2mには第25号住居址が、南東2.5mには第28号住居址が検出されている。主軸方向はN-0°で、規模は長軸3.70m、短軸3.20m、面積10.6m²程で隅丸長方形を呈している。壁は北側が高く南側が低くなっている。壁高は約43cm~60cm内外で壁は垂直に立ち上がっている。壁溝は有していない。床面は褐色を呈し、緩やかに南に傾斜している。ピットは床面からは検出されなかったが、住居址の施設外に13個所検出している。煙道部の両脇には、2個所の柱穴を有している。貯蔵穴は有していない。覆土は9層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色上で少量のハードロームブロックを含み、中層は褐色土・暗褐色土で多量のハードロームブロック、黒色土を含み、下層は褐色土でハードローム粒子を含んでいる。

カマドは北壁の中央に付設され、規模は長径117m、短径90cmほどで北壁を85cm幅で、38cmほど



第67図 第26号住居址実測図



第68図 第26号住居址カマド実測図



第69図 第26号住居址出土遺物実測図

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P 1	35	28	54	主柱穴 (施設外)	P 5	33	30	58	主柱穴 (施設外)
P 2	32	30	30	主柱穴 (施設外)	P 6	42	38	33	主柱穴 (施設外)
P 3	38	32	47	主柱穴 (施設外)	P 7	40	39	90	主柱穴 (施設外)
P 4	37	35	47	主柱穴 (施設外)					

掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径35cm、短径34cmほどで円形状に深さ約14cmほど掘りこめている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で、カマドは南東向きに構築されている。焚口部より多量の焼土を検出している。出土遺物は須恵器を中心に土師器を共伴しているが、土師器は網片のみである。須恵器は、北東コーナー床面直上から盤(図69-1)、南西部床面直上から高杯片(図69-2)を出土し、他には环、甕などの破片を数点出土している。

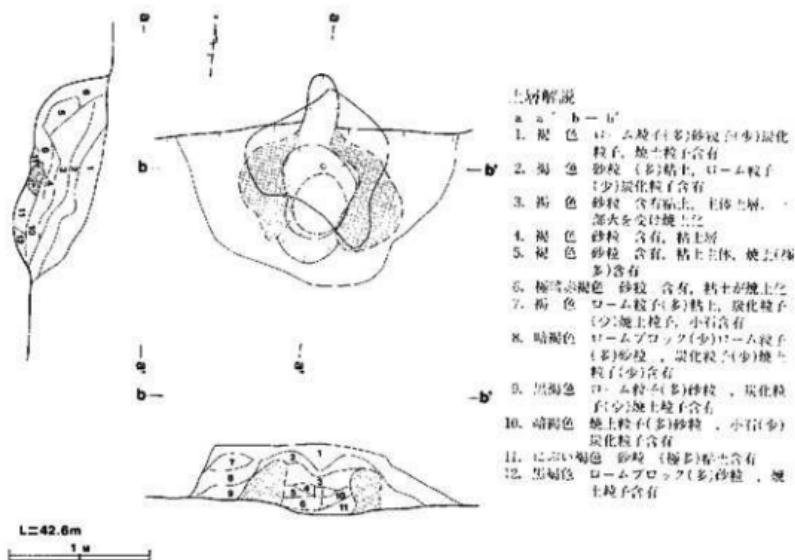
本址は出土遺物等から同分期に比定される遺構と思われる。

第27号住居址（図70・71・72(1)(2)）

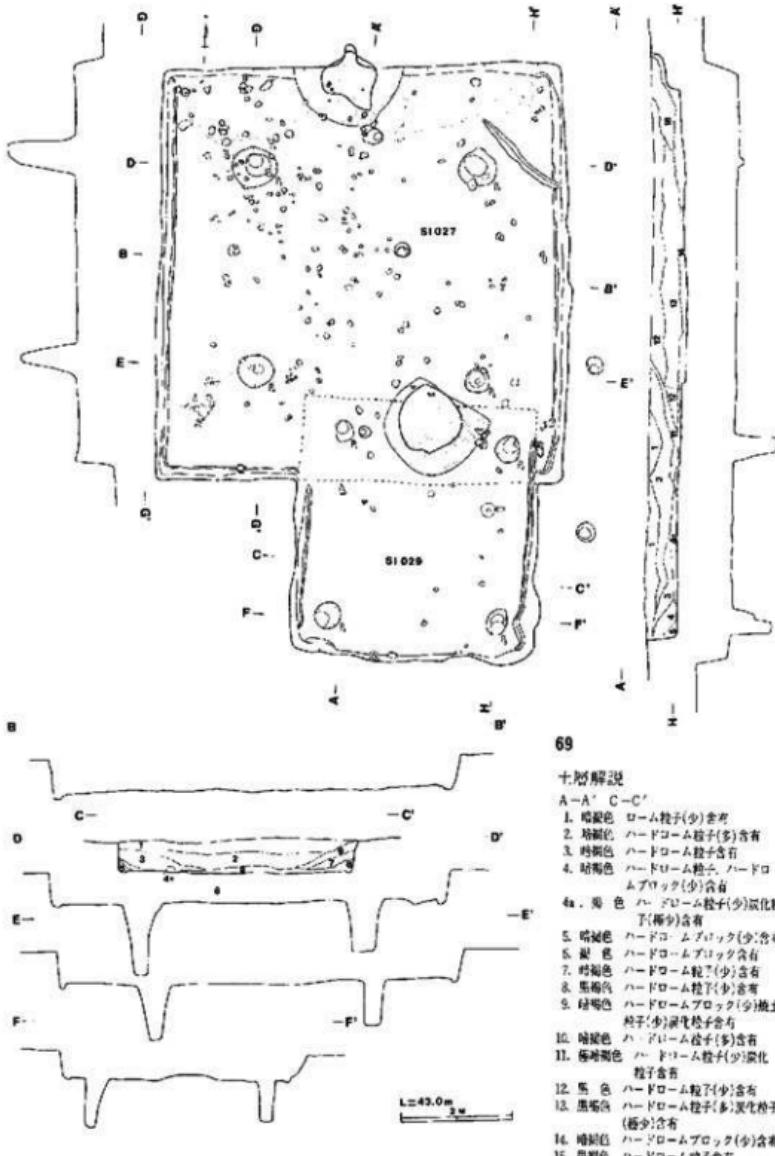
本住居址は、調査区の南部西よりのB 1 区 j 3, j 4, j 5, C 1 区 a 3, a 4, a 5, b 3, b 4, b 5 に確認され、南壁の東よりに本址より古い第29号住居址が複合している。東側3.2mには第26号住居址を検出している。主軸方向はN-3°-Wで規模は長軸7.45m, 短軸7.40m, 面積47.3m²を測り正方形を呈している。櫛高は55cm~65cm内外で、櫛は南側が高くほぼ垂直に立ちあがっている。櫛下には幅12cm, 深さ9cm内外の壁溝が、南櫛の一端と北櫛を除いて残っている。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P 1	80	75	125	主柱穴	P 3	45	44	80	主柱穴
P 2	67	65	92	主柱穴	P 4	63	58	97	主柱穴

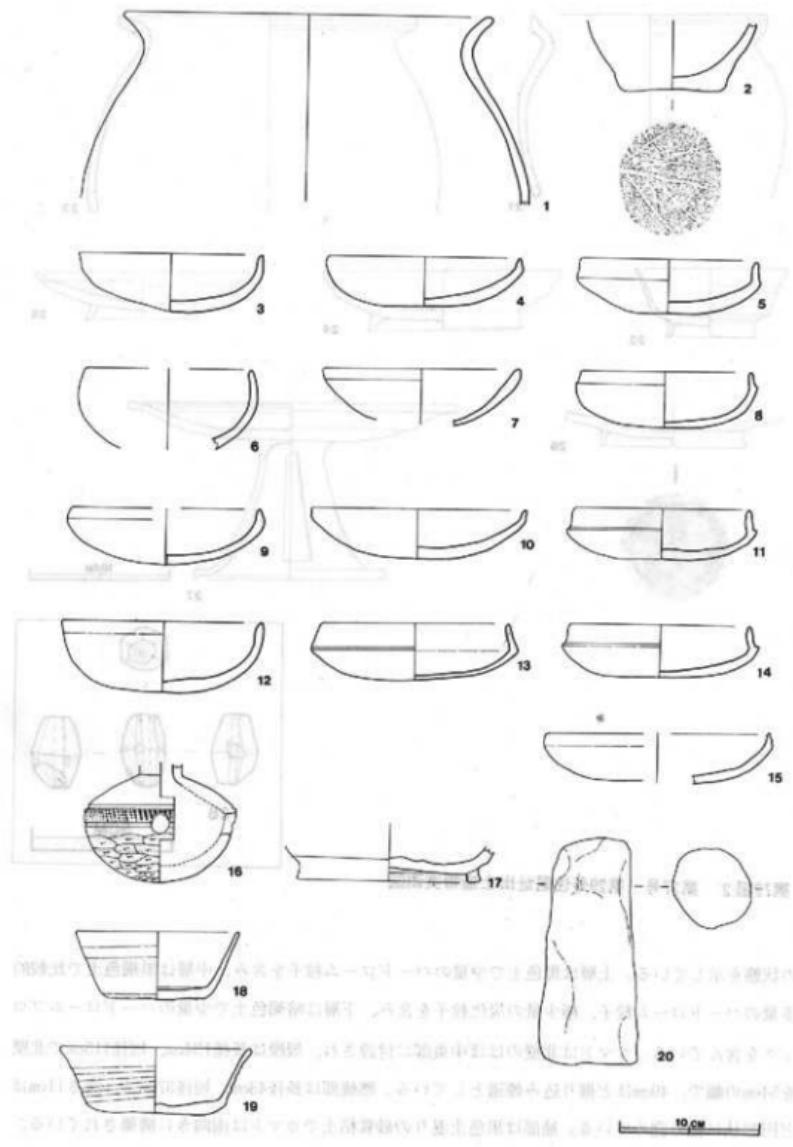
北櫛際に幅約1mの焼土が分布し、南東コーナーに炭化材を出土しているので、本址は火災に遭遇していると思われる。床面は暗褐色を呈し平坦である。ピットは6個所確認されP 1~P 4はほぼPi形を呈する主柱穴で、深さは約120cmである。貯蔵穴は有していない。覆土は14層で自然堆積



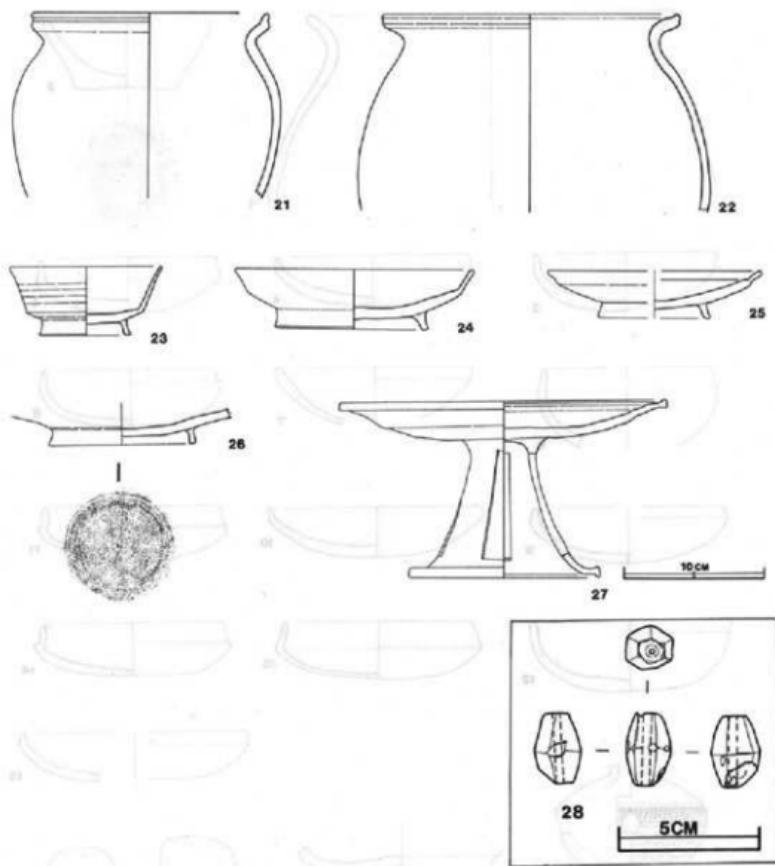
第70図 第27号住居址カマド実測図



第71図 第27号・29号住居址実測図



第72(1) 第27号·29号住居址出土遺物実測図



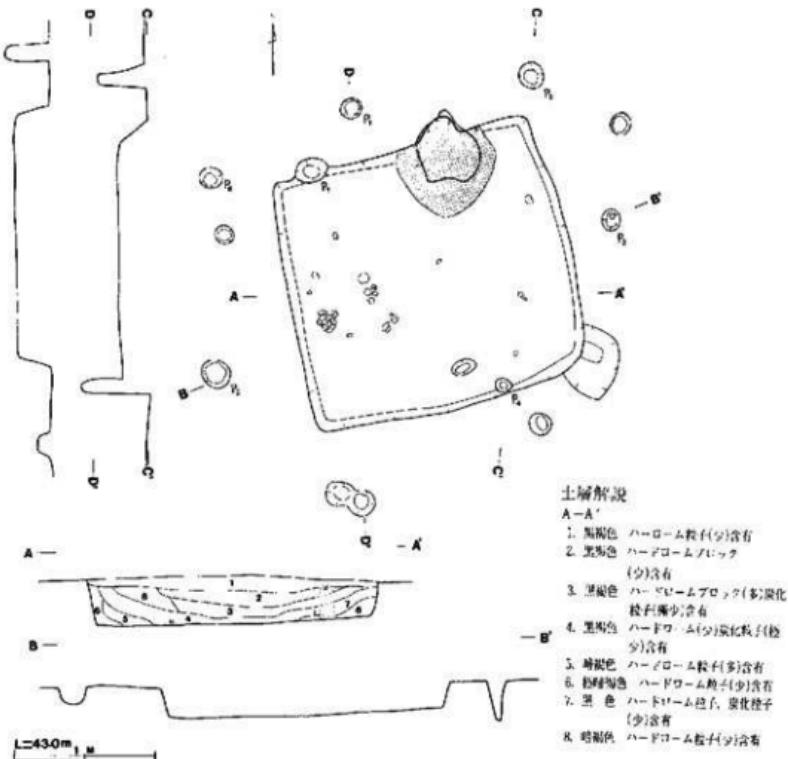
第72図(2) 第27号・第29号住居址出土遺物実測図

の状態を示している。上層は黒色土で少量のハードローム粒子を含み、中層は黒褐色土で比較的多量のハードローム粒子、極少量の炭化粒子を含み、下層は暗褐色土で少量のハードロームブロックを含んでいる。カマドは北壁のほぼ中央部に付設され、規模は長径134cm、短径115cmで北壁を54cmの幅で、49cmほど掘り込み煙道としている。燃焼部は長径43cm、短径37cmで、深さ11cmほど円形状に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土でカマドは南向きに構築されている。

出土遺物は土師器と須恵器が共存して多量に出土している。北西コーナー床面・床面上直から土師器の壺を3個(図72-5・10・12)、甕2個体分(図72-1・2)と、須恵器の壺(図72-18)を出

土し、北壁付近の床面から土師器の壺、北東コーナー床面直上より土師器の壺4個(図72-3・6・8・9)、南東コーナー床面直上より土師器の壺2個(図72-11・13)、須恵器の甕(図72-16)、P3付近から壺(図72-19)、南西コーナー床面直上から土師器の甕、須恵器の瓶を出土している。他には、土師器の甕(図72-21)、壺(図72-4・14・15)、支脚(図72-20)などの破片多数と、須恵器の甕、台付臺(図72-17)、蓋、高壺(図72-27)などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は中央部床面直上から切子玉1個(図722)-28)を出土している。本址は古墳時代 鬼高期の新しい時期に比定される遺構と思われる。

第28号住居址(図73・74・75)

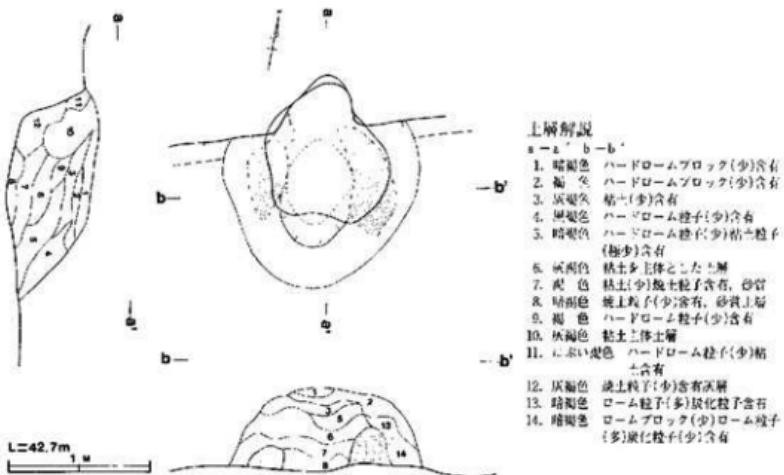


第73図 第28号住居址実測図

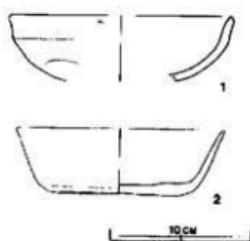
本住居址は、調査区の南部中ほどC1区a7, a8, b7, b8, C7, C8に確認され、北側2.5mには第26号住居址が、西側7.5mには第29号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN-16°-Wで、規模は長軸4.10m、短軸3.70m、面積12.7m²を測り長方形を呈している。壁高は38cm~47cm内外で壁は緩やかに外反して立ち上がっている。駆溝は有していない。床面は暗褐色を呈し平坦で硬く、竪穴住居内からは柱穴と考えられるものは検出されなかったが、施設外から本址に關係あるピットを13個所検出した。煙道部の東西のピットP1とP2、北西コーナーのP7と、南壁東よりのP4は、本址に伴う主柱穴と思われる。貯藏穴は有していない。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P1	30	27	59	主柱穴 (施設外)	P5	43	38	25	主柱穴 (施設外)
P2	40	35	69	主柱穴 (施設外)	P6	33	32	43	主柱穴 (施設外)
P3	32	26	56	主柱穴 (施設外)	P7	46	37	57	主柱穴
P4	25	22	52	主柱穴					

覆土は9騎からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土で極少量のハードローム粒子を含み、中層は黒褐色土で比較的多量のハードロームブロックを含み、下層は黒褐色土で少量のハードロームブロックと極少量の炭化粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央部に付設され規模は長径115cm、短径104cmほどで北壁を40cm幅で、25cm掘り込み煙道としている。燃焼部は長径60cm、短径46cmの円形状に、深さ7cmほど掘り窪めている。袖部はローム粒子混りの砂質粘土で、カマドは南東向きに構築されている。



第74図 第28号住居址カマド実測図



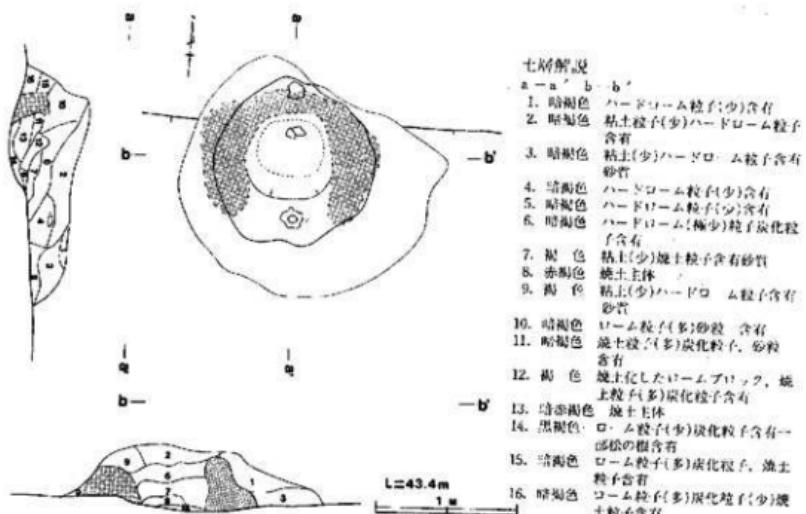
第75図 第28号住居址出土遺物実測図

出土遺物は須恵器と土師器が共伴して出土している。須恵器の完存率の良好なものをあげると中央部床面から壺(図75-2)を出土し、他に蓋、壺などの破片を少量出土している。土師器は西壁付近床面から甕を、北西部床面直上から壺(図75-1)を出土し、他に甕、壺などの破片を多数出土している。その他、粘土を南部から少量出土している。

本址は、出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。

第29号住居址(図70・72(1)(2)・76)

本住居址は、調査区の南部西よりのC1区b4, b5, c4, c5に確認され、本址の北側約30%は第27号住居址と複合している。東側7.5mには第28号住居地が検出されている。本址は第27号住居址より新しい遺構と思われる。主軸方向はN-2°Wで、規模は長軸4.55m、短軸4.35m、面積19.6m²を測り長方形を呈している。壁高は45cm~55cmほどで壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁下には幅11cm、深さ6cm内外の壁溝が北壁と南壁を除いて廻っている。床面は暗褐色を呈し硬く、



第76図 第29号住居址カマド実測図

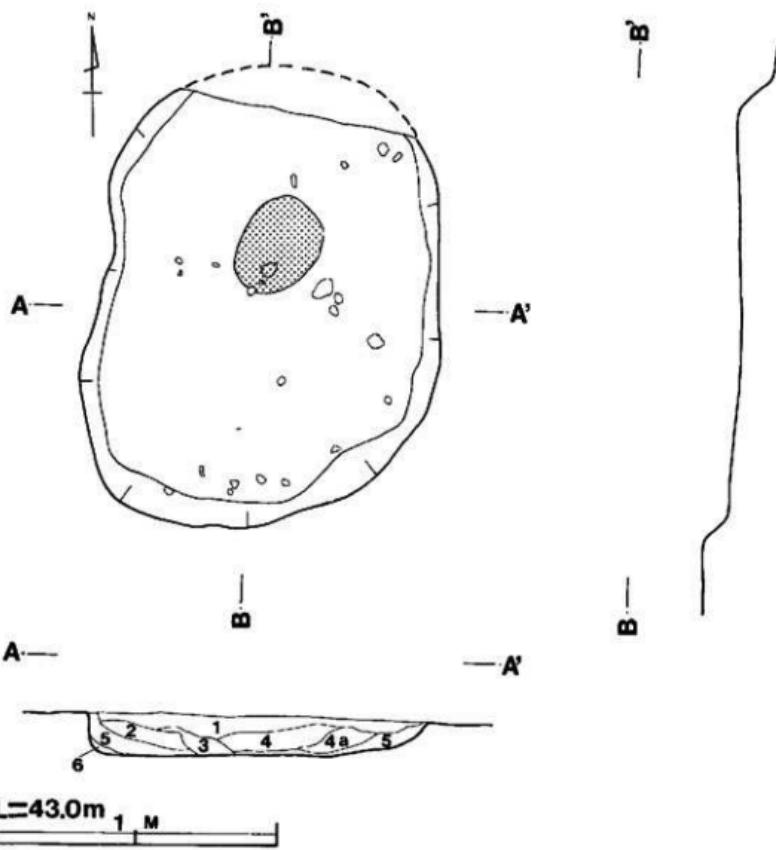
ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P 1	40	33	83	主柱穴	P 3	45	35	74	主柱穴
P 2	47	41	80	主柱穴	P 4	47	45	87	主柱穴

第27号住居址の床面に7cmほどローム土で貼り床をして構築されている。ピットは7個所確認され、P 1～P 4は主柱穴と考えられる。貯藏穴は有していない。覆土は9層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で少量のローム粒子を含み、中層は暗褐色土で多量のハードロームブロックを含み、下層は暗褐色土で少量のハードロームブロックと少量の炭化粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央部に付設され、規模は長径130cm、短径126cmで北壁を83cm幅で、37cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径146cm、短径40cmで円形状に約13cmほど掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で、カマドは南向きに構築されている。出土遺物は、須恵器を中心に、土師器を共伴している。須恵器は北壁際から盤（図72-24）、北東コーナー床面直上から盤（図72-26）、南壁際から盤（図72-25）を出土し、他には壺、环などの破片を少量出土している。土師器は、カマド内より壺片（図72-22）を、他に壺、环、支脚などの破片を数点出土している。その他、南壁中央付近から粘土を多量に出土している。本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第30号住居址（図77・78）

本住居址は、調査区の北東部中ほどA 2区f 4に確認され、北部は第2号住居址と複合し、南東部は第1号住居址と接している。本址は第1号住居址、第2号住居址より古い遺構である。西側0.5mには第5号住居址が検出されている。主軸方向はN-15°-Eで、規模は長径3.10m、短径2.55m、面積6.3m²ほどで小判形を呈している。壁高は約20cmで壁は緩やかに外傾して立ちあがっている。床面は皿状を呈し、暗褐色で硬く踏み固められた状態を示している。ピットは検出されなかった。覆土は7層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土でハードローム粒子、炭化粒子を含み、下層は褐色土でハードローム粒子を含んでいる。炉址は中央よりやや北に確認され、規模は長径70cm、短径53cmの楕円形を呈し、焼土と黒色土混りの暗褐色土が極薄く分布している。

出土遺物は弥生式土器片が主で、床面から木葉痕のある弥生の菱形土器の底部を出土し、他には頸部、胴部などの破片を数点出土している。これらの弥生式土器片は十王台式土器よりも古い型式に属するものと思われる。



上層解説

A-A'

1. 暗褐色 ハードローム粒子(極少)含有
2. 黄褐色 ハードローム粒子(少)炭化粒子(極少)含有
3. 黒褐色 ハードローム粒子(少)含有
4. 黑褐色 ハードローム粒子(少)炭化粒子含有
- 4a. 暗褐色 ハードローム粒子(少)含有
5. 灰色 ハードローム粒子(少)含有
6. 灰色 ハードロームブロック(多)含有

第77図 第30号住居址実測図



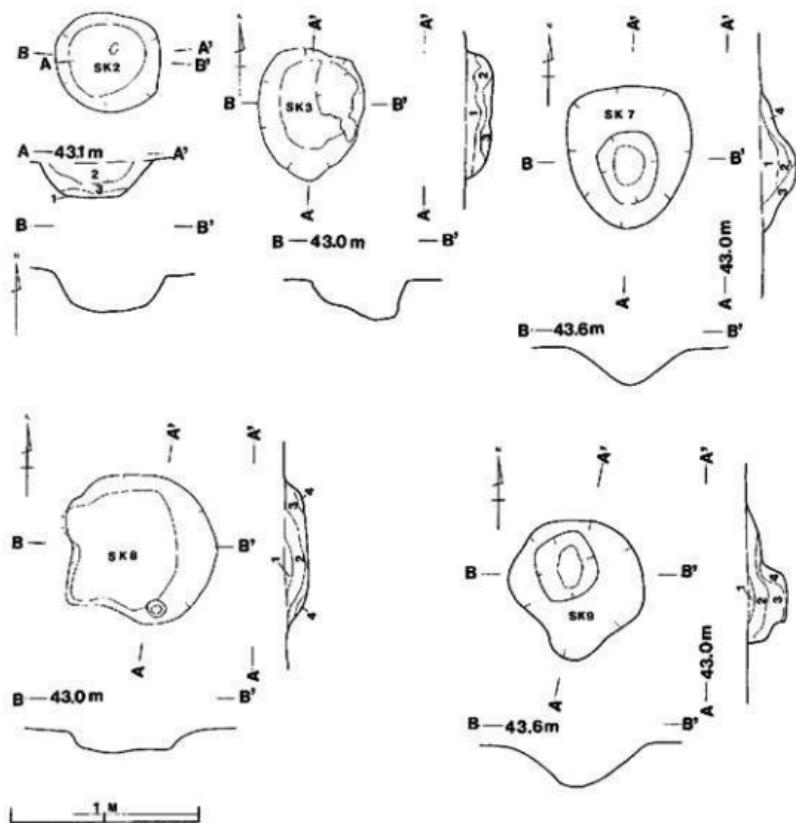
第78図 第30号住居址出土遺物拓影図

2 土 壤 (図79・80)

松原遺跡からは6基の土壤が検出された。第1号土壤は、弥生時代の遺構である第3号住居址の床面下より検出され、出土遺物は皆無であり、縄文時代の遺構と思われる。第2号・第3号土壤からの出土遺物は皆無で、第8号土壤からは环を3個(図80-1~3)出土し、その底部には木葉痕があり、第2号円形周溝遺構と何らかの関係ある土器と思われる。

表1 松原遺跡土壤一覧表

No	位 置	形 状	長径×短径 cm × cm	長 径 方 向	深 さ cm	底	出 土 遺 物	時 期	備 考
1	A2 f 2	不整椭円	176×53	N-73°-W	上 95 F205	平 垦		不明	図9
2	A1 e 7 e 8	円 形	115×102	N-55°-W	36	皿 状	須恵 弥生	不明	図80
3	A1 j 8	円 形	140×113	N-4°-E	38	平 垦	石器 剝片	不明	図80
7	B1 c 6	椭 圆 形	150×130	N-35°-E	42	すりば ち状		不明	図80
8	B1 c 8	不整円形	168×145	N-54°-W	23	皿 状	土師(环)	真間	図80
9	B1 d 6 d 6	不整円形	150×145	N-11°-E	46	すりば ち状	土師(环)	真間	図80



第2号土壤上層解説

A-A'

1. 明褐色 もろい土層
2. 淡褐色 組織な褐色土粒子(多)含有やわらかい
3. 暗褐色 小粒な褐色土粒子(少)細緻な褐色土層(多)含有、やわらかい

第3号土壤上層解説

A-A'

1. 暗褐色色 ローム粒子(極少)含有きらさりしている
2. 暗褐色 ローム粒子(多)含有きらきらしている
3. 明褐色 ローム含有

第7号土壤上層解説

A-A'

1. 暗褐色 ハードローム粒子(極少)含有
2. 暗褐色 ハードローム粒子(少)含有
3. 暗褐色 ハードロームブロック(多)含有
4. 黒色 ハードローム粒子(少)含有

第8号土壤上層解説

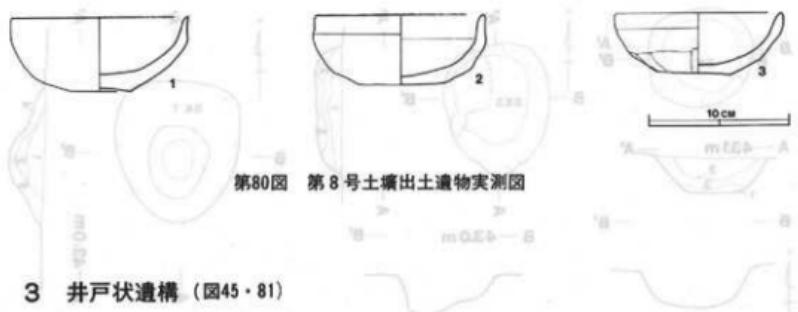
A-A'

1. 暗褐色 ハードローム粒子(極少)含有
2. 黑色 ハードロームブロック(少)含有
3. 暗褐色 ハードローム粒子(少)含有
4. 黑色 ハードロームブロック(少)含有、ゴツゴツしている

第9号土壤上層解説

1. 暗褐色 ハードローム粒子(極少)含有
2. 暗褐色 ハードロームブロック(少)含有
3. 黑色 ハードローム粒子(少)含有
4. 黑色 ハードロームブロック(少)含有

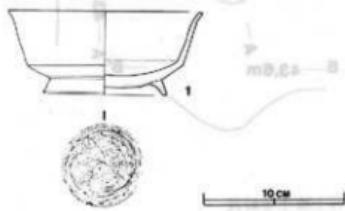
第79図 第2・3・7・8・9号土壤実測図



第80図 第8号土壤出土遺物実測図

3 井戸状遺構 (図45・81)

本井戸状遺構は、調査区の中央部A 1区 i 8, i 9に確認され、東側は第16号住居址の北西コーナー、西側は第3号溝状遺構と接している。南側約1.7mには第3号土壙が検出されている。本址は、ほぼ円形状を呈し、掘り方は、上縁で長径2.38m、短径2.13m、深さ2.32mほど垂直に掘り下げられて、底部は長径1.27m、短径1.62mを測り、楕円形を呈している。底面の中央から南よりに約直径20cm、深さ25cmのピットがあり、當時水が湧いている。覆土は13層からなり、自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土でローム粒子と極少量の炭化粒子、焼土粒子を含み、中層は極暗褐色土、黒褐色土、褐色土でロームブロック、ローム粒子と微量の炭化粒子、焼土粒子を含み、下層は褐色土、黒色土で、ローム粒子、ロームブロック、鹿沼バミスを含んでいる。

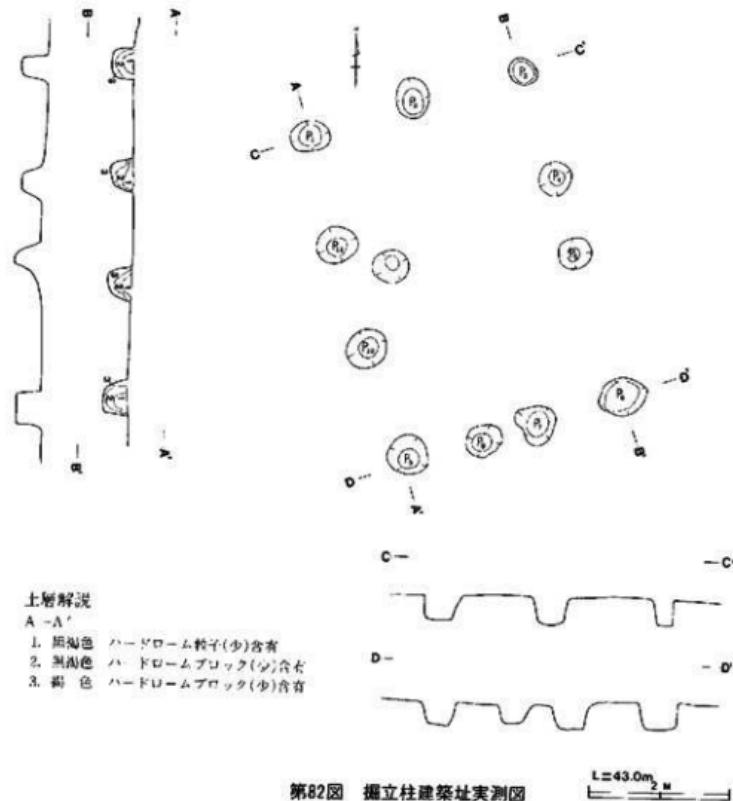


第81図 第1号井戸状遺構出土遺物実測図

出土遺物は、覆土中から縄文式土器片が4点、弥生式土器片が4点、土師器の破片が1点、須恵器の高台付环片(図81-1)、石器が28点出土している。いずれも本址の時期を決定する出土遺物ではなく、底部からの出土遺物も皆無で時期は不明である。

4 堀立柱建築址 (図82)

本建築址は、調査区の中央部南側B 1区 e 7, e 8, f 7, f 8に確認され、北東1.5mには第21号住居址が、南側1.8mには第23号住居址が検出されている。規模は桁行3間(4.84m)、梁行2間(3.07m)、面積15.0m²ほどで、主軸方向はN-17°-Wである。柱痕のピット番号は北西コーナーをP 1とし、北西から北東まわりで「匁」状に番号をP 1～P 10まで仮称する。梁行2間の柱間寸法は、北側のP 1・P 2・P 3は1.53m+1.54mを測り、南側梁行3間のP 6・P 7・P 8・



第82図 挖立柱建築址実測図

P 9 は $1.24m + 0.83m + 1.14m$, 柱行 3 間の西側寸法, P 9 · P10 · P11 · P 1 は $1.172m + 1.51m + 1.61m$ ほどの間隔である。柱穴の掘り方は一辺が $72cm \sim 38cm$ ほどの方形状を呈し、深さは約

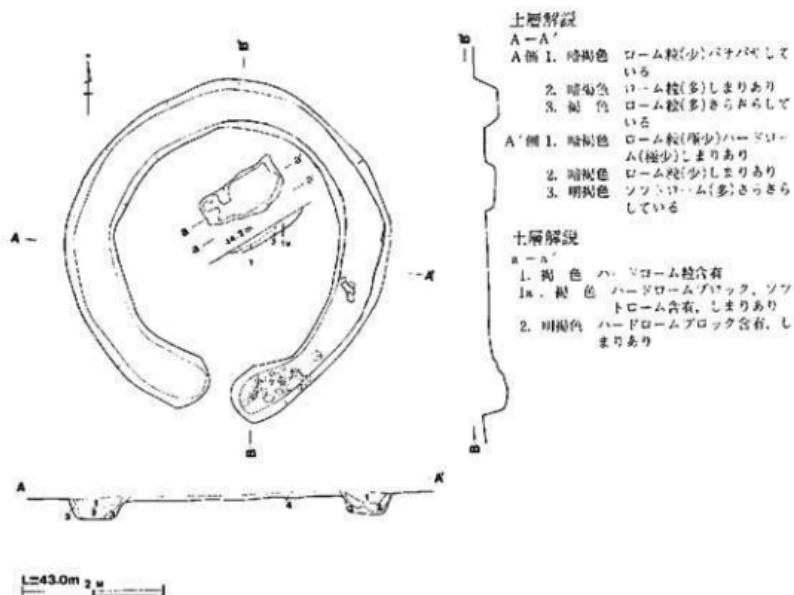
ピット番号	長辺cm	短辺cm	深さcm	形 状	ピット番号	長辺cm	短辺cm	深さcm	形 状
P 1	56	45	35	楕円形	P 7	59	50	32	不整楕円
P 2	58	47	39	椭円形	P 8	52	43	26	椭円形
P 3	51	38	38	楕円形	P 9	56	56	34	楕円形
P 4	49	48	29	円 形	P10	60	53	33	円 形
P 5	48	44	36	円 形	P11	59	52	32	円 形
P 6	70	54	35	椭円形					

38cm～25cmを測り、柱痕はほぼ明確に確認することができた。柱穴内にはロームブロック、ローム粒子を含む褐色、暗褐色土を充填していた。柱穴内から土師器と須恵器の細片を数点出土しているが、時期決定の遺物となりえなかった。

5 円形周溝造構

第1号円形周溝造構 (図83・84)

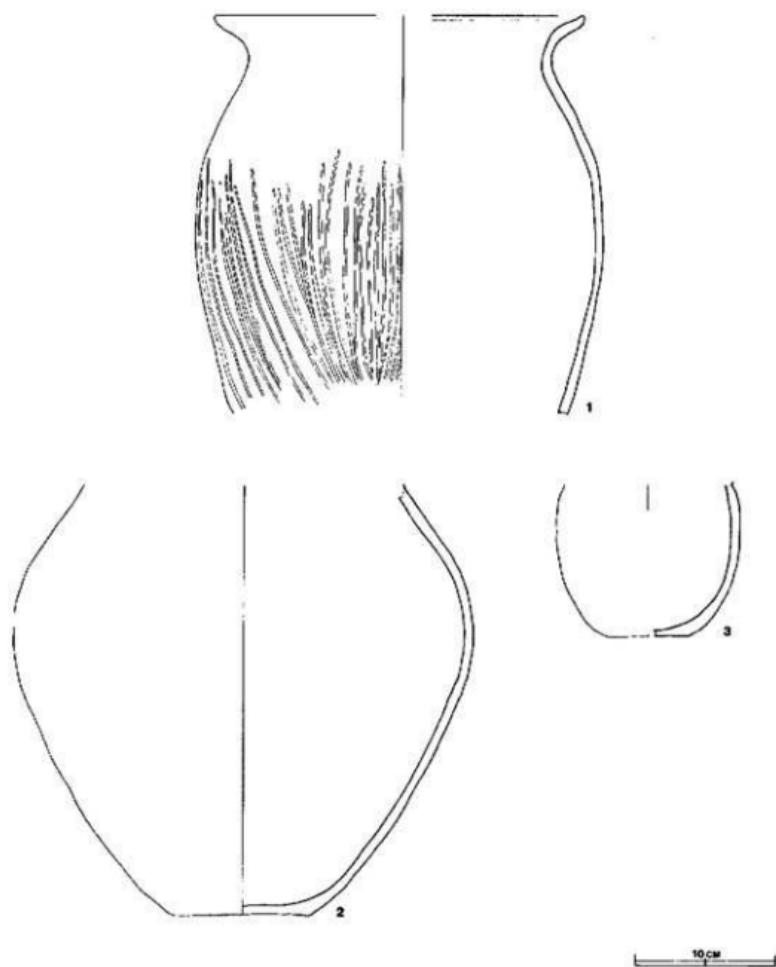
本円形周溝造構は、調査区の北部 A 2×b 1, c 1, c 2, d 1 に確認され、南側から北東に第3号溝状造構が走り、北東部3.5mには第7号住居址が検出されている。本址の規模は外周直径4.85m～4.52m、内周の直径3.38m～3.26mを測る。周溝の上幅は約70cm、底面の幅約50cm、深さは30cmで周溝の底面は「U」状を呈している。周溝の南側中央部のみが切れており、その部分



第83図 第1号円形周溝造構実測図

はブリッジと見られ、幅は約35cmである。中央から北よりに長辺1.23m、短辺0.5m、深さ12cmの浅い土壤状の掘り込みを確認したが、遺物は皆無で本址の主体部とは思われない。

覆土は4層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色上で少量のローム粒子と極

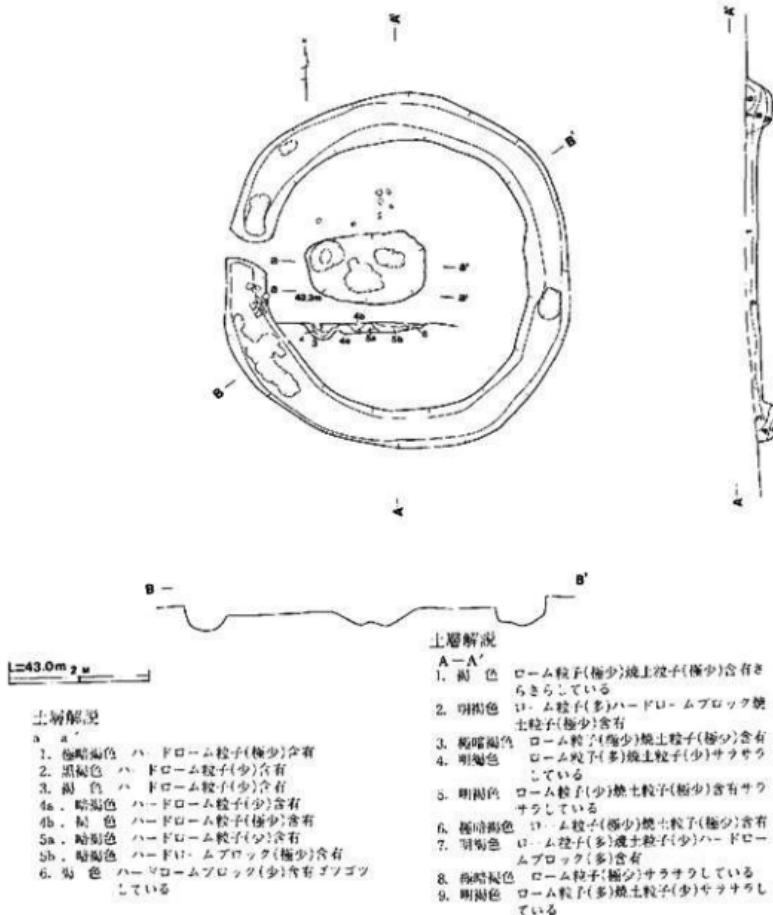


第84図 第1号円形周溝遺構出土遺物実測図

少量の焼土粒子を含有し、下層は褐色土で多量にソフトロームを含んでいる。出土遺物はブリッジの東側からの出土遺物が多く、土器師の小型甕（図84-3）、甕片2点（図84-1・2）と細片を数点出土している。これらは供獻土器とは思われず、本址の性格は不明である。

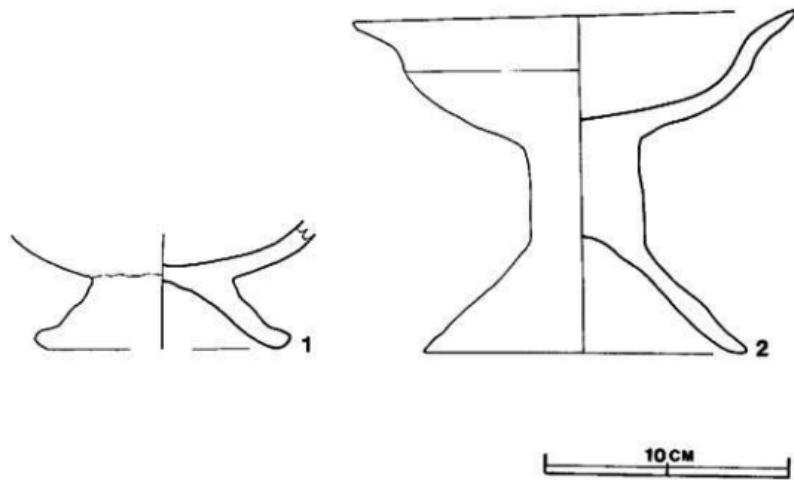
第2号円形周溝遺構（図85・86）

本円形周溝は、B1区c4, c5, d4, d5, e4, e5に確認され、北東4.0mに第9号上



第85図 第2号周溝遺構実測図

據が、南東3.0mには第24号住居址が検出されている。本址の規模は外周の直径約4.85m～5.0mで、内周の直径が3.9m～4.0mを測り、主軸方向はN-15°-Eである。周溝の上幅は62cm、深さは30cm、底面は幅30cmで、「U」状を呈している。ブリッジの幅は約25cmである。中央から西よりに長辺165cm、短辺100cm、深さは13cm～20cmほどの浅い土壤状の掘り込みを確認したが、遺物は皆無で本址の上体部とは考えられない。周溝内の覆土は4層からなり、自然堆積の状態を示している。土層は極暗褐色土で、極少量のローム粒子と焼土粒子を含み、下層は褐色土で多量のローム粒子、少量のハードロームブロック、焼土粒子を含んでいる。出土遺物はブリッジの南部からの出土が多く、土師器の内黒の高坏片(図86-1)、高坏片(86-2)、他には甕、坏などの細片を数点出土している。これらは供獻「器」とは思われず、本址の性格は不明である。

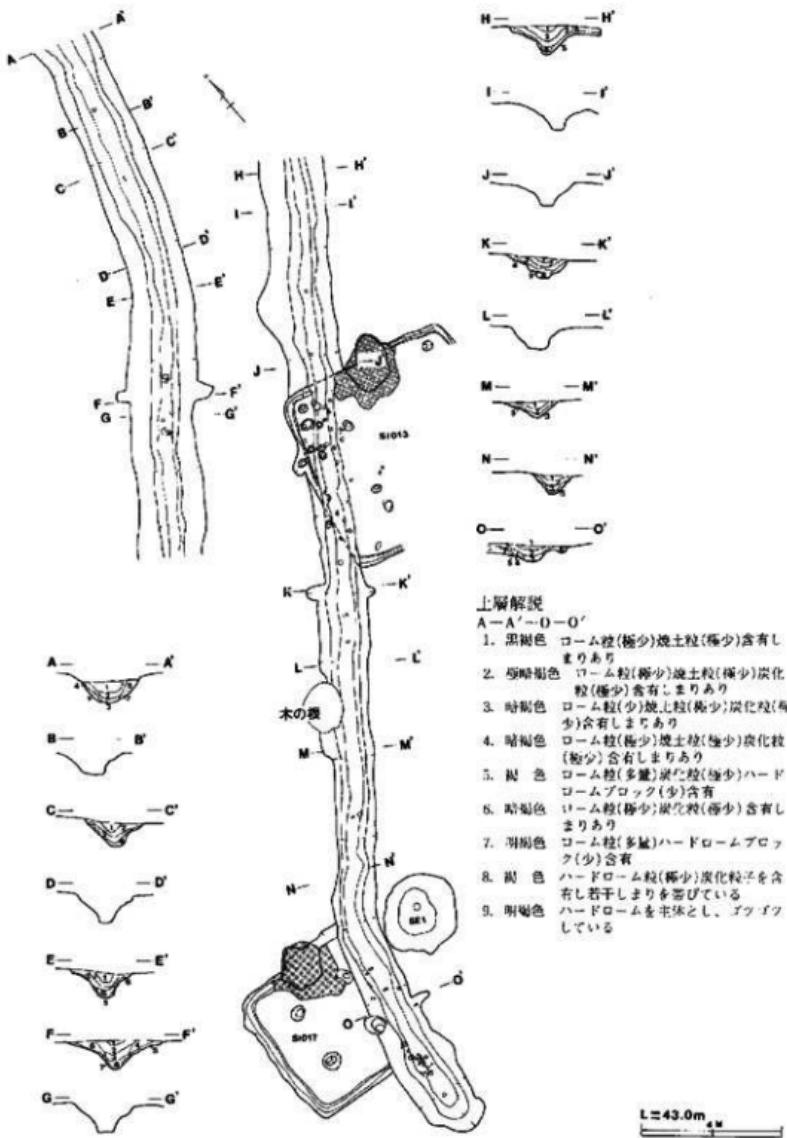


第86図 第2号周形周溝遺構出土遺物実測図

6 溝状遺構

第1号溝状遺構(図87・88)

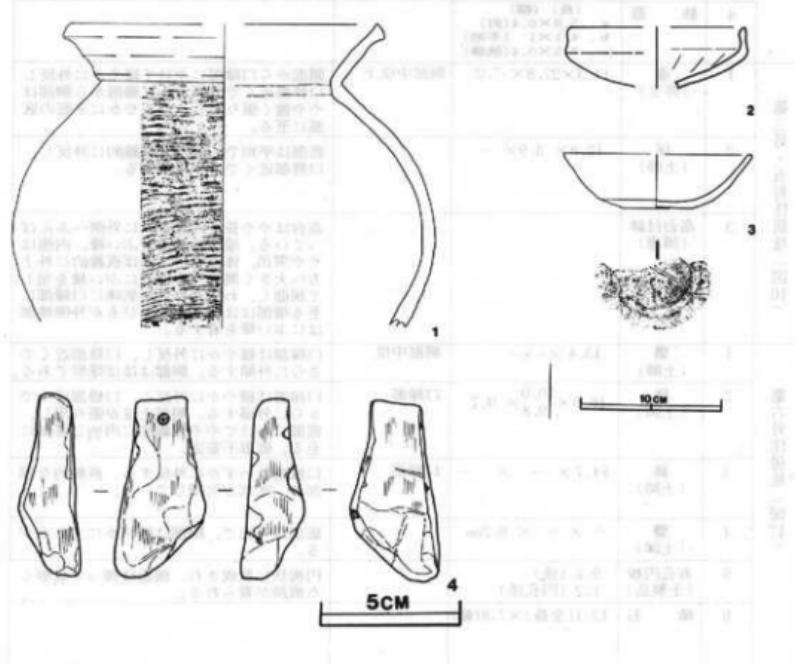
本溝状遺構は、A1区、A2区に確認され、遺跡の中央部西よりから北東方面に走り、北部の谷に向って構築されたものと推定される。第17号住居址の南東部A1区j8から始まり、規模は上幅が1.65m、下幅0.45m、深さ0.60mほどで、主軸方向はN-18.6°-Eを向き、北北東に緩やかな傾斜をし、約6.70mほど進み(A1区i8)、N-35.5°-Eの方向にかえ、第13号住居址の西側を削除



第87図 第1号溝状遺構実測図

し、規模は上幅128cm、下幅35cm、深さ80cmで、北東へ30.8mほど伸び、第1号溝の北東部でN-14°Eに角度をかえ(A-2区c3)、規模は上幅16.5cm、下幅51cm、深さ約50cmで北北東へ6.75mほど伸び緩やかな傾斜をなして谷へ向っているものと思われる。確認した本址の全長は44.25mで、底面のレベルはA-Aで42.46m、L-Lで42.51m、O-Oで42.54mを測り、本址の中央部と北部との比高は8cmで、南西から北東に向うにしたがって緩やかな傾斜をなしている。本址は第13号住居址、第17号住居址より新しい造構で、覆土は8層からなり、自然堆積の状態を呈している。上層は黒褐色土、極暗褐色土で、極少量のローム粒子、焼土粒子、炭化粒子を含有し、中層は暗褐色土で多量のローム粒子、極少量の焼土粒子、炭化粒子を含有し、下層は褐色土で、極少量のハードローム粒子、炭化粒子を含有している。

出土遺物は、覆土中から須恵器を中心に石器、縄文式土器片、弥生式土器片、土師器片を出土している。須恵器は壺6個体分(図88-2・3)と、細頸壺、大型甕(図88-1)などの破片と、砥石(図88-4)を出土している。これらは溝が廃棄された後、投棄されたものと思われる。本溝状造構の性格は不明であるが、時期は国分期に廃棄された造構と思われる。



第88図 第1号溝状造構出土遺物実測図

表2 松原遺跡出土遺物觀察表

住居址	番号	種類	法量 (口幅cm×器高cm×基底cm)	最大径	器形の特徴	
第一号住居址 (図8)	1	甕 (土師)	21.5×—×—	胴部中位上	口縁部は頸部から直立し、口縁部上位で外傾する。口唇部は外を向き丸い。	
	2	甕 (土師)	8.9×—×—		小型の平底から内轉してあるやかに立ち上る。	
	3	蓋 (須恵)	15.1×2.9		大井部は径10cmに渡って回転ヘラ削りの後、扁平で、中央部を残して内側が凹むつまみを有している。	
第二号住居址 (図8)	1	甕 (須恵)	—×—×19		底部は平底で、体部は底部との境は凹曲して緩やか。体部は多少内壁ぎみに外上方へ立ち上る。	
	2	甕 (須恵)	22×35.2×9.8	胴部中位上	底部は平底で、体部は最大径を器高の附近に有し、肩部はなだらかで、下部はゆるやかに内傾してくる。口縁部との境は明瞭でない。口縁部は外反しつつ外上部へのび、口縁部は断面三角形状につくり上・下端はするどい。	
	3	盤 (須恵)	21.7×4.4×11.8	口縁部	外側へふんばる高台。底部と体部との境にはよい稜をなし、口縁部はわずかに外反し、端部はほぼ丸く取めている。内面は底部と体部との境にによい屈曲を呈する。	
	4	鉄 瓶	(高)(幅) a. 5.9×0.4(鉄) b. 4.1×1 (不明) c. 7.5×0.4(鉄瓶)			
第二号・五号住居址 (図10)	1	蓋 (芦生)	14.3×27.8×7.2	胴部中位上	頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、口唇部近くで外傾する。頸部から胴部はやや強く張り出し、ゆるやかに平底の底部に至る。	
	2	环 (土師)	12.8×3.9×—		底部は半円で、体部は直線的に外反し、口唇部近くでやや外傾する。	
	3	高台付鉢 (須恵)			高台はやや長く内壁ぎみに外側へふんばっている。端部外側にはよい稜。内側はやや突出、体部下半はほぼ直線的に外上方へ大きく開き、中位でによい稜を呈して屈曲し、わずかに外反気味に口縁部に沿る端部はほぼ丸味を帯びるが外周縁部にはよい稜を有する。	
第六号住居址 (図17)	1	甕 (土師)	13.4××—	胴部中位	口縁部は緩やかに外反し、口唇部近くでさらに外傾する。胴部はほぼ球形である。	
	2	鉢 (土師)	16.0×10.0 9.8×9.7	口縁部	口縁部は緩やかに外反し、口唇部近くでさらに外傾する。胴部上位が張り出し、底部にかけてやや直線的に内折し底部に至る。底部不安定。	
	3	鉢 (土師)	14.7×—×—	口縁部	口縁部はわずかに外反する。直線的な胴部で、底部が欠損している。	
	4	甕 (土師)	—×—×8.2cm		底部は平底で、胴部は緩やかに立ち上がる。	
	5	有孔円板 (土製品)	9.2(桂) 1.2(円孔桂)		円板状に形成され、裏面は擦って成形した痕跡が残られる。	
	6	磁 石	17.1(全長)×7.8(幅)			

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 国	内 面				
口一指ナデ 胴一ヘラケズリ	口一指ナデ 胴一ヘラナデ	にぶい橙	不 良	砂 粒 合	胴長妻
ヘラミガキ	ナデ		普 通		
回転ヘラケズリ	水挽き痕		良 好	長石粒・糊 砂粒を含み キメ粗い	水挽き根は弱い
体部下端は幅3 cm前後で回転ヘ ラケズリ	粘土紐の巻き上 痕を残すナデ		不 良	長 石 粒 糊 砂 粒 合	ヘラ記号有
底一多方向から のヘラ削り 体部下半・左上 からのヘラ削り	ヘラナデ	にぶい橙			頭部に六のヘラ記号 藏骨器に利用
底一径16cmに渡 って回転ヘラ削 り		暗オーラープ灰			水挽き痕弱い 底部に升印のヘラ記号 有り
口唇部 > 横文 脇 部	ナデ	にぶい橙	普 通	砂 粒 合	
底部 ヘラ切り 外面一指ナデ、 ヘラ削り	内黒、ミガキ	にぶい黄橙	普 通	砂 粒 合	
底部一回転ヘラ 削り 体部下半一回転 ヘラ削り		灰	普 通		水挽き痕は弱い。 体部に焼成時のヒビ割 れ有り
口一指ナデ 胴一ヘラケズリ	口一指ナデ 胴一ヘラケズリ	にぶい橙	不 良	砂 粒 等 合	
口 指ナデ 脇 ヘラケズリ	指ナデ 胴一ヘラケズリ	にぶい黄橙	良 好	砂 粒 等 合	
口一指ナデ 胴一摩滅により 不明 ヘラ削り	口一指ナデ 胴一ヘラナデ ナデ	橙	不 良	砂 粒 母 合	
		橙	やや不良	砂 粒・スコ リテを少量 含む	底部破片のみ
					上面他。側面を多面的 に使用している。

住居址	番号	種類	法量 (口径cm×器高cm×底径cm)	最大径	器形の特徴	
					口縁部	口唇部
第 七 号 住 居 址 (図 20)	1	甕 (土師)	21.5×30.6×6.8	口縁部	口縁部は僅かに外反し、口唇部近くで強く外傾する。頸部で僅かに「く」の字状にくびれた後中位であまり膨らまず内傾して底部に続く。	
	2	甕 (土師)	15.0×—×—		頸部は「く」の字状にくびれ口縁部ではば直線的に外反する。	
第 八 号 住 居 址 (図 23)	3	甕 (土師)	19.0×—×—	口縁部	頸部は直線的で膨らまず、口縁部は細やかに外反し、口唇部近くで強く外傾する。底部欠損	
	4	鉢 (土師)	20.4×—×—	口縁部	口縁部はわずかに外反し、胴部は球形になる。底部は欠損している。	
第 九 号 住 居 址 (図 24)	5	鉢 (土師)	12.6×—×—	口縁部	器厚は頸部近くで厚くなり、口唇部端で急に薄くなる。口縁部は器厚の変化により外傾する。底部欠損	
	6	壺 (土師)	12.4×3.7×—	口縁部	口縁部はやや内傾して直線的に立ち上がり、体部との境に段を持ち、やや盤平な体部となる。	
第 十 号 住 居 址 (図 25)	7	高 环 (土師)	16.0×—×—	口縁部	环部は横を持たず緩やかに内湾する。	
	8	环 (土師)	12.2×—×—	口縁部	底部はわざかに丸味を持つ半底で、体部は直線的に広がり口縁部近くにナテによる核を持つ。	
第 十一 号 住 居 址 (図 26)	9	环 (土師)	14.7×3.6×—	頸部下	扁平な底部からゆるやかに立ち上がり頸部が直立する。口縁部は丸味を帯びる。	
	10	环 (須恵)	13.8×4.6×8.9	口縁部	底部は外周部まで陥き出し切り難い部は小さい。体部との境にはぶい屈曲で体部はわざかに器厚を減じながらほぼ直線的に口縁部に至る。口縁部はやや親い。内面底部外縁には鋸いアテが見られる。	
第 十二 号 住 居 址 (図 27)	11	蓋 (須恵)	15.9×4.65×	口縁部	天井部は全体的に丸味を持ち円錐状の扁平なつまみを貼りつけている。天井部と口縁部の境は鋸く屈曲し核をなす。口縁部はやや内傾し、下方へ下がり端部は覗きをもつ。	
	1	环 (土師)	12.9×4.5×—	口縁部	丸底の底部からほぼ直線的に外傾し口唇部に至って器厚が薄くなるが全体的に肉厚で体部は厚みがある。	
第 十三 号 住 居 址 (図 28)	2	环 (土師)	13.0×—×—	口縁部	体部は扁平であり、口縁部は直角に立ち上がる。器厚は体部との境で厚くなり内側に核をつくる。頸部で薄く口縁部で丸みをねびる。	
	3	环 (土師)	14.2×3.9×—	口辺部	口縁部は直線的で、体部との境に核を持つ。体部は偏平な弧状を呈する。	
第 十四 号 住 居 址 (図 29)	4	环 (土師)	13.8×—×—	口縁部	口縁部はわざかに外傾して立ち上がり体部との境外面にゆるやかな凹みを持つ。内面に僅かな核をもつ。	
	5	环 (土師)	14.3×4.0×—	口辺部	口縁部はやや内傾して直線的に立ち上がる。口縁部と体部の境に核を持ち、体部は斜やかに内傾する。	
第 十五 号 住 居 址 (図 30)	6	环 (土師)	13.0×4.7×6.5	口辺部	底部はやや平底気味で、体部は直線的に内傾する。口縁部は体部との境から外反して立ち上がる。境の外周面に核を有する。口縁部にスリット状のものあり。	
	7	环 (土師)	14.7×3.7×—	肩部	体部は扁平でゆるやかに内傾して立ちあがり体部との境(外側)には核を持つ。口縁部はナテによって作られ、口唇部は非常に深い。	
第 十六 号 住 居 址 (図 31)	8	环 (土師)	15.4×—×—	口辺部	口縁部は	

整 形 法		色 調	焼 成	胎 上	備 考
外 面	内 面				
口一指ナデ 胴一ヘラケズリ	口一指ナデ 胴一ヘラナデ	棕	普 通	砂 粒 含	胴長
II 指ナデ 胴一ヘラケズリ	II 指ナデ 胴一ヘラナデ	灰 黄	不 良	砂	粒 含
口一指ナデ 胴一ヘラケズリ	口一指ナデ 胴一ナデ	棕	普 通	砂 粒	母 含 胴 長
口一指ナデ 胴一ヘラケズリ	口一指ナデ 胴 ナデ	灰 黄	良 好	砂 粒 等	
口一指ナデ 胴一ヘラケズリ	口一指ナデ 胴一ナデ	にぶい 棕	不 良	砂	粒 含
口一指ナデ 胴一ヘラケズリ	指 ナ デ	にぶい 棕	普 通	砂 粒 等	ほぼ完形
口一指ナデ 胴一ヘラケズリ (上から下へ)	ハラミガキ (内墨)	にぶい 黄 棕	普 通	砂 粒・長 石 石英等 含	
ヘラケズリ	指 ナ デ	明赤褐	良 好	砂 粒 等	含
口一指ナデ 底一ヘラケズリ (の後組なナデ)	ヘラミガキ (摩滅)	褐	普 通	砂	粒 含
底部回転ヘラ削 り外面底部と体 部との境一回転 ヘラ削りによる 面取り	水焼き痕跡弱い	灰	良 好	長 粗 石 砂	水焼き痕は弱い 粒 粒 含
中央部回転ヘラ 削り			普 通	長 石 粒	水焼き痕は弱い 細 砂 粒 含
II 指ナデ 底一ヘラケズリ	ヘラミガキ (摩滅)	褐	普 通	砂 粒	粒 含
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	指 ナ デ	灰 褐	不 良	砂 粒	等 含
口一指ナデ 全体に摩滅が 著しい	口一指ナデ 全体に摩滅が著 しい	にぶい 黄 棕	不 良	砂 粒	等 含 ほぼ完形 焼付着
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	ヘラミガキ (摩滅)	にぶい 黄 棕	不 良	砂 粒	等 含
II 指ナデ 底一ヘラケズリ	ヘラミガキ (摩滅している)	灰 白	や、不良	砂	粒 含
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	ヘラミガキ (摩滅している)	褐	不 良		
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	II 指ナデ 底一ナデ	にぶい 黄 棕	普 通	砂	粒 含

住居地	番号	種類	法 最 (口幅cm×高さcm×底面cm)	最大径	器形の特徴
第八号住居地 (図23)	9	环 (土師)	15.1×4.8×-	口縁部	丸底からゆるやかに内側して立ち上がりナデにより体部との境に棱を有する。口縁部は丸みをおびている。
	10	环 (土師)	15.3×-×-	口縁部	口縁部は微直気味に立ち上がり、体部は偏平である。
	11	手 捶 (土師)	3.5×2.7×4.4	体部中段	体部は強く内側し、口縁部内面に棱を持つ。
	12	支 脚 (土師)			底部からゆるやかに細くなる棒状で、手づくねとナデによって成形されている。
第九 住居	1	钵 (土師)	18.6×14.0×9.4	口縁部	口縁部は極めて短く直線的に外反する。体部は底部から僅かに内側して広がる。平底である。
	2	甕 (土師)	11.2×-×-		口縁部は肩からわずかに外側して立ち上がり、口縁部内側には一筋の沈縫が廻る。胎厚は全体として厚く、口縁部から口唇部に向かって徐々に薄くなる。
	3	鉢 (土師)	-×-×5.4		器肉が厚く、脚部は底部からゆるやかに内側しながら立ち上がる。上部欠損。
	4	环 (須恵)	11.2×3.8×7	口 縁 部	底部と体部の境は口縁部へより面取りしている。体部は器底を彫じながらほぼ直線的に立ち上がる。口縁部はやや盛りを有する。
第十 住居	5	环 (須恵)	11.8×3.6×7.5	口 縁 部	体部は胎厚を彫じながらわずかに外反しつつ上方へ立ち上がる。口縁部はきらんに外反し、端部は鋭い。内部底部外周には鋭いアテがみられる。
	6	环 (須恵)	14×4.05×10	口 縁 部	体部との境はにぼい縁をなす。体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部はほぼ丸く收めている。底部中央は若干上げ底ぎみである。
	7	环 (須恵)	14.3×4×10	口 縁 部	体部との境はやや不明瞭な扭曲である。体部はほぼ直線的に外上方へのび、口縁部はわずかに外反する。端部はやや鋭きを有する。丁寧な作りである。
	8	环 (須恵)	14.6×5.2×6.6	口 縁 部	体部は外周部まで残さ出している。体部との境は不明瞭で体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は丸く收めている。
十一 住居	9	环 (須恵)	15.1×4.4×6	口 縁 部	底部は外周まで残さ出している。体部との境は丸味を有している。体部は胎厚を彫じながらほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は丸く收めている。内部底部と体部との境は鋭いアテがみられる。
	10	环 (須恵)	15.0×4.6×		底部と体部との境が不明瞭で、口縁部はややすどさをもつ。
	11	蓋 (須恵)	17.2×4.2×-		天井部は比較的扁平である。宝珠状つまみを付けている。
	12	蓋 (須恵)	16.2×4.4×-		若干焼きビズミが有られるが、天井部はやや丸味を有する。宝珠状つまみを付けている。口縁部は短く、外下方へふんばる。端部は鋭く突出する。作りは丁寧である。
(図26)	13	蓋 (須恵)	14.9×3.1×-	口縁・体部の 境	天井部は扁平で胎厚は厚い。扁平な擬宝珠状つまみを付けている。口縁部は短く下方へだがり、端部は丸く收めている。

裝形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
口指ナデ 底へラケズリ	摩滅が激しく不明	にほい黄澄	不良	砂粒含	ほぼ完形
口指ナデ 底へラケズリ	口指ナデ 底へリナデ	灰 黄 橙	普通	砂 粒 含	
指整形	指整形	にほい橙	普通	砂 粒 含	完形
指ナデ		にほい黄澄	普通	砂 粒 等含	
口指ナデ 削へラケズリ	口指ナデ 削へナデ	にほい橙	普通	砂 粒 含	
口指ナデ 削へナデ 輪積み底残る	指ナデ	灰 橙	普通	砂 粒 母含	
ヘラケズリ (摩滅)	ヘラケズリ (摩滅)	にほい橙	不良	砂 粒 含	
底一回転へラ 削り 底部と体部の境 一回転へラ削り による面取り		灰	良好	長石粒 細砂粒含	水洗き痕は弱い
底一回転へラ 削り 底部・体部の境 一回転へラ削り による面取り		灰 白	良好	長石粒 細砂粒含	水洗き痕は弱い
底一径10cmに 渡って回転へラ 削り 口脚部 横ナデ		オリーブ灰	普通	長石粒 細砂粒含む	水洗き痕は弱い
底一径10cmに 渡り、回転へラ 削り		灰	良好	細砂粒を含 むが精製さ れている	水洗き痕は弱い
底一回転へラ 削り		灰 白	不良	長石粒 細砂粒含	水洗き痕は弱い
底一中央部6 cmに渡って回転 へラ削り		灰 白	良好	長石粒 細砂粒含	水洗き痕は弱い 焼成時の焼き割れあり
体部下半に回転 へラ削りをほど こしている					完形
天井部径11cmに 渡って回転へラ 削り		灰 白	不良	細砂粒を含 むが精製さ れている	水洗き痕は弱い
天井部中央は径 11cmに渡って回 転へラ削り		灰 白	好 ½不良	精製されて いる	水洗き痕は弱い
天井部径8cmに 渡り回転へラ削 り		淡 黄	普通	長石粒 細砂粒 母末含む	色調から土師質に看ら れる

住居址	番号	種類	法量 (10cm×器高cm×底径cm)	最大径	器形の特徴
第九 号(國 住26 居址)	14	甕 (須恵)	22.3×33.9×—	胴部	底部はゆるやかに内傾しながら立ち上がる。胴部で頸部は「く」の字状に大きく外反する。口縁部は断面三角形状に作り、上下端は鋭い。
	15	結 瓢車 (石製品)	上面形×高さ×下面形 3.4×2.1× 5	底面	裁頭円錐形で良く研磨されており、中央に径8mmの円孔。
第十 号(國 住27 居址)	1	环 (土師)	20.2×—×—	口縁部	口縁部は垂直に立ち上がり体部は、極めて浅く僅かに膨らみ扁平な底部に至る。
第十一 号(國 住28 居址)	2	环 (土師)	14.3×4.9×—	口縁部	ゆるやかに内傾しながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。体部は扁平な弧状を呈する。
	1	甕 (土師)	20.0×—×—	胴部	口部は急角度で外反し、口軒部は丸く収めている。胴部はあまり膨らまない。底部欠損。
第十二 号(國 住29 居址)	2	甕 (土師)	19.1×31.0×8.6	胴部中位	頸部は垂直に立ち上がり、口縁部は直線的に外傾する。胴部中位で僅かにふくらみ、平底の底部に至る。
	3	鉢 (土師)	21.0×9.2×—	口縁部	口部は外反し、体部は僅かにふくらみ、平底にいたる。口軒部外面に棱をもつ。
第十三 号(國 住30 居址)	4	环 (土師)	11.8×4.5×—	口縁部	口縁部は僅かに外傾し、体部は整った半球形を呈する。
	5	环 (土師)	11.6×4.8×—	口辺部	口縁部は、やや内傾して立ち上がり、体部は半球状を呈する。
第十四 号(國 住31 居址)	6	砥 石 (金長) (幅) 8.1×4.7			上面および側面も使用。使用面はなだらかに凹む。
	1	环 (土師)	12.0×4.7×—	口辺部	口縁部は短かくやや内傾し、口軒部は尖る。体部は直線的で、平らな底部に至る。
第十五 号(國 住32 居址)	1	小型 甕 (土師)	—×—×7.6		底部が極めて肥厚、胴部はゆるやかに内傾する。
第十六 号(國 住33 居址)	2	环 (土師)	14.3×4.4×—	口辺部	口縁部は垂直に立ち上がり、体部との境に絞を有し、体部は扁平である。
	3	瓶 (土師)	14.4×—×—	口縁部	口縁部は「S」状である。
第十七 号(國 住34 居址)	4	鐵 燭 (鉄器)	(長) (幅) 8.7×5~6		柄と思われる。
	1	甕 (土師)	—×—×9.6		頸部は「く」の字状で、明顯な肩部を持たず、底部は不安定な平底である。
	2	甕 (土師)	—×—×9.6		頸部は平底から緩やかに内傾しながら立ち上る。
	3	环 (土師)	14.8×3.0×—	口縁部	口縁は外面に僅かな縫を作り、小さく外反している。 口唇部は丸い。
(國 43)	4	环 (土師)	14.0×—×—	口縁部	口縁部はやや内脣気味に立ち上がり、体部との境に棱を持つ。体部は緩やかに内傾する。 底部欠損。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
刷一タタキ 彫一ココナデ 底一ナデ	ナデ				
					滑石製結晶車 60g
					撮影
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	口一指ナデ 底一ヘラナデ	にぶい褐	良 好	砂 粒 母 合	
体一ヘラ削り 口一指ナデ	指ナデ	灰 白	普 通	砂 粒 粒 合	ほほ完形
口一指ナデ 刷一ヘラケズリ (下から上へ)	口一指ナデ 刷一ヘラナデ	明赤褐	普 通	砂 粒 長 石 英 合	
口一指ナデ 刷一ヘラケズリ	ヘラナデ	明赤褐	不 良	砂 粒・雲母 長 石・石英 合	網長壁
口一指ナデ 刷一ヘラナデ	口一指ナデ 刷一ヘラナデ	にぶい橙	普 通	砂 粒・長 石 合	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	ヘラミガキ (摩滅)	にぶい黄 橙	普 通	砂 粒 合	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	ヘラミガキ	赤	普 通	砂 粒・長 石 石英 合	暗面有り
					板状に剥離が著しく、磨き面はわずかに残存している。
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	指ナデ	黑 褐	普 通	スコリア・ 砂 粒を多量 に含む	
					撮影
ヘラ削り、輪積 痕あり	ヘラナデ (摩滅)	橙	普 通	砂 粒 合	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	指ナデ	にぶい黄 橙	良 好	砂 粒 粒 合	
口一指ナデ 刷一ヘラナデ	口一指ナデ 刷一ヘラナデ	赤 褐	や・不良	砂 粒 合	
ヘラケズリ	ヘラナデ	赤 褐	不 良	砂 粒 粒 合	
ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい橙	普 通	砂 粒・長 石 石英 合	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	指ナデ	褐 灰	良	砂 粒 粒 合	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	口一指ナデ 底一ヘラナデ	にぶい黄 橙	不 良	砂 粒、全体 に炭化材付 着	全体に煤付着

住居址	番号	種類	法量 (口幅cm×器高cm×底径cm)	最大径	器形の特徴
第十六号住居址 (国43)	5	环 (土師)	14.9×47×-	口邊部	口縁部は極めて短かく、やや内側味に立ち上がり、体部との境に棱を持つ。体部は弧状。
	6	环 (土師)	14.9×44×-	口邊部	口縁部は明瞭な棱を持たざる内縫。口唇部が僅かに尖る。
	7	环 (土師)	13.5×-×-	口邊部	口縁部はやや内側味に立ち上がり、体部との境に棱を持つ。
	8	环 (土師)	14.2×4.1×-	口邊部	口縁部は、体部との境の稜と、口唇部の中位にくぼみを持ち、体部は直線的に内傾する。底部は平底気味である。
第二十号住居址 (国46)	1	甕 (土師)	21.0×11.5×-		口縁部「く」の字形に外反し、体部はあまり立ちあわせをもたない。
	2	鉢 (土師)	19.1×-×-	口邊部	口縁部は明瞭で口唇部は丸く收めている。
	3	甕 (土師)	-××6.4		口縁部はほぼ直立し、口唇部近くでわずかに外反する。体部との境に棱を持つ。体部は弧状とするが平底状である。
	4	甕 (土師)	13.2×4.0-	口縁部	極めて肥厚な底部である。
第二十一号住居址 (国47)	5	环 (土師)	11×3.7×-	口縁部	口縁部は極めて短かく、体部との境に棱を持ち、体部は弧状とする。
	6	环 (土師)	13.9×-×-	口縁部	口縁部はわずかに内傾し直立する。口縁部と体部との境に稜を持つ。体部は中位でややふくらむが偏平である。
	7	环 (土師)	13.9×3.8×-	口縁部	平底から内側しながら立ち上がり、器底も底部から序々に薄くなる。体部との境内外面に稜有り。口縁部は外彎して立ち上る。口唇部は尖っている。
	8	环 (土師)	11.4×3.7×3.4	口縁部	外面に棱が見られず、口唇部は平坦である。体部は偏平で、器底は一定である。
第二十二号住居址 (国48)	9	环 (土師)	13.6×5.5×6.6	口縁部	体部は平底からゆるやかに内彎して立ち上り、口縁は外彎しているがわずかに内傾する。口唇部は鋭い。
	10	环 (土師)	14.5×3.8×-	口縁部	口縁部はわずかに外反し、口唇部は丸く收めている。丸底である。器底は全体に弧形。
	11	环 (土師)	12.2×3.7×-	口縁部	口縁部は直線的にやや外反し、体部は偏平な弧状。
	12	环 (土師)	12.6×4.2×-	口縁部	口縁部は直線的に内傾し、口唇部は尖る。体部は偏平である。
第二十三号住居址 (国49)	13	环 (土師)	14.4×4.0×-	口縁部	口縁部は、直立に立ち上り、体部との境に棱を持つ。体部は偏平である。
	14	环 (土師)	13.8×3.7×-	口縁部	口縁部は短かく、直線的に内傾し、口唇部はやや尖る。体部は弧状。
	15	环 (土師)	13.8×3.6×-	口縁部	口縁部は、直立し、体部は極めて浅く偏平である。
	16	环 (土師)	12.7×5.1×-	口縁部	口縁部は外反し。体部はやや偏平な弧状を呈する。体部との境の器内外面共に明瞭な稜を持つ。
第二十四号住居址 (国50)	17	盆 (土師)	13.2×4.7×7.2	口縁部	底部は平底で、体部は直線的に広がり、口縁部は直立氣味に立ち上る。口唇部は鋭くなっている。

盤形法		色調	焼成	胎土備考	
外面	内面			粒含	粒含
口一指ナデ 底一ヘラケズリ の後ナデ	指ナデ	明赤褐	普通	砂粒含	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	摩滅している	明褐灰	不良	砂粒含	
口一指ナデ 底一ヘラナデ	摩滅のため不明	淡黄	不良	砂粒含	
口一指ナデ 底一ヘラナデ	口一指ナデ 底一ヘラナデ	にぶい赤褐	普通	砂粒含	
		明赤褐	不良	砂粒含む	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	口一指ナデ 底一摩滅してい る	外一橙 内一浅黄橙 口一黒褐	軟弱	砂粒(長石) 含	
摩滅大	ヘラナデ	赤褐	不良	砂粒・雲母 石英含	
口一指ナデ 底一ヘラナデ	ヘラナデ	外面一橙 内面一明赤褐	や、不良	砂粒・雲母 石英含	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	ミガキ	灰白	普通	砂粒 雲母含	全体に煤付着
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	口一指ナデ 底一ヘラケズリ	にぶい褐	普通	砂粒含	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	口一指ナデ 底一ヘラナデ	内一黒 外一橙	普通	スコリア少 量と砂粒を 多量に含む	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	口一指ナデ 底一ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
口一指ナデ 脚一ヘラケズリ	口一指ナデ 脚一ヘラナデ	にぶい橙	良好	砂粒 (石英) 含む	底一木葉痕あり
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	口一指ナデ 底一ヘラナデ	赤灰	普通	砂粒含	
口一指ナデ 脚一ヘラケズリ	口一指ナデ 脚一ヘラミガキ	にぶい赤褐	や、不良	砂粒・雲母 石英含	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	口一指ナデ 底一ミガキ	にぶい橙	普通	砂粒を含む	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	口一指ナデ 底一ヘラナデ	橙	普通	砂粒含	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ の後ナデ	口一指ナデ 底一摩滅	にぶい橙	普通	砂粒を含む	ほぼ完形
口一ナデ 底一ヘラケズリ	口一ナデ 摩滅している	にぶい橙	普通	砂粒・ス コリアを含む	ゆがみ有り
口一指ナデ 脚一ヘラケズリ	口一指ナデ 脚一ヘラケズリ	黒褐	普通	砂粒を含む	ほぼ完形
口一指ナデ 脚一ヘラケズリ	ヘラナデ	浅黄橙	不良	砂粒 (少)・雲 母含	底部・木葉痕あり

住居番号	番号	種類	法量 (長さ×幅さ×高さcm)		最大径	器形の特徴
			横	縦		
第十七号住居	18	环 (土師)	14.8×3.8×	—	口辺部	口縁部は、僅かに内傾し、体部との境に二条の凹線が現れる。体部は浅く偏平である。
	19	环 (土師)	12.2×4.8×	—	口辺部	口縁部はほぼ直線的にわずかに内傾し、体部との境に僅かな段を持つ。体部はやや偏平である。
	20	环 (土師)	13.6×4.2×	—	口辺部	口縁部は「S」状にくびれ、体部との境に段を持つ。体部は半球形を呈し、底部はほぼ平底となる。
四六	21	例 (土師)	13.4×3.3	—	—	体部はゆるやかに内傾しながら平底の底部から立ち上がり、口縁部との境に棱を有す。全体に肉厚で口縁部に向かって稍厚を傾じている。口唇部は丸味を帯びている。
	1	甕 (土師)	29.0×—×	—	胴部中位上	口縁部は頸部から大きく外反する。肩部に僅かな段を持ち、肩部は強く張り、球形となる。
第十八号住居	2	甕 (土師)	22.0×14.9×6.3	—	口縁部	平底から内擫しながら立ち上がり、頸部でゆるやかに外反し、口縁部は丸くなっている。肩部はほとんど膨らみをもたない。
	3	环 (土師)	22.8×5.0×	—	口縁部	口縁部はやや外傾し、体部は浅く偏平である。
	4	环 (土師)	13.4×—×	—	口縁部	口縁部は直立し、口唇部は厚みを増し丸くなる。体部は極めて浅く偏平である。
	5	环 (土師)	13.8×3.2×	—	口辺部	口縁部は直線的に内傾し、体部は僅かな段を持ち、浅く偏平である。
	6	环 (土師)	14×14.5×	—	口縁部	口縁部は外擫して立ち上がり、口唇部近くでさらに外傾する。口縁部と体部との境に明瞭な稜を持つ。体部はやや丸味のある弧状を呈する。
十九号住居	7	环 (土師)	12.3×—×	—	口辺部	口縁部はやや内傾気味に立ち上がる。体部は弧状を呈する。
	8	环 (土師)	14.6×3.8×	—	口縁部	口縁部は直線的に外傾し、体部は浅く丸底である。
	9	环 (土師)	12.2×4.25×	—	口辺部	口縁部は直線的に内傾し、体部との境に稜を持つ。体部はやや偏平な弧状を呈す。
四九	10	环 (土師)	15.6×3.4×	—	口辺部	口縁部は内傾し、体部との境に棱を持ち、体部は極めて浅く偏平である。
	11	手 指 (土師)	— × 4.6	—	—	器内は厚い。口縁部欠損。平底。
	12	支 腿 (土師)	— × 15.8 × —	—	—	—
第十九号住居(51)	13	羽 口	孔径 2.6 1.6	—	—	—
	14	砾 石	(長) 6.9	—	—	径 4 mm の円孔を持つ。 四面とも良く使用されている。
	1	小 型 甕 (土師)	11.2×—×	—	胴部中位	口縁部は外反し、肩部に棱をもつ。体部はあまり膨らみをもたない。
	2	环 (土師)	12.4×4.1×	—	口縁部	口縁部は短く、やや外傾し、体部はやや丸味のある弧状を呈す。
	3	环 (土師)	14.3×—×	—	口縁部下位	口縁部は、内傾気味に直立し、体部下位を欠損する。明瞭な稜を持たない。
	4	钵 (土師)	21.8×8.3×	—	口縁部	口縁部近くで僅かな段を持ち、体部はゆるやかに内傾する。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
内 面	外 面				
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	指ナデ	浅 黄 棕	普 通	砂 粒 合	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	指ナデ	浅 黄 棕	良 好		ほぼ完形
口一指ナデ 底一ヘラナデ	口一指ナデ 底一ヘラナデ	浅 黄 棕	普 通	砂 粒 合	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	口一指ナデ 底一摩滅	明 赤 棕		砂 雪母 (少) 粒 合	
口一指ナデ 柄一ヘラケズリ	口一指ナデ 柄一ヘラナデ	明 棕	不 良	砂 粒 合	
口一指ナデ 柄一ナデ 摩滅	口一指ナデ 柄一ナデ 摩滅	棕	不 良	砂 粒 合	底部一木薙痕あり
口一指ナデ 底一ヘラナデ	ヘラミガキ (摩滅)	灰 棕	や・不良	砂粒・スコリ アリ 合	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	口一指ナデ 底一ヘラナデ	棕	不 良	雪母・石英 長心を含む	
口一指ナデ 底一ヘラナデ	指ナデ	棕	普 通	雪母・砂粒 砂塵を含む	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	指ナデ	にぶい棕	良 好	砂 粒 合	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	口一指ナデ 底一摩滅	褐 灰	不 良	砂 粒 合	全面にて煤付着
口一指ナデ 毛一ヘラケズリの後ナデ	摩 滅	褐 灰	良 好	砂 粒 合	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	口一指ナデ 底一ヘラナデ	棕	や・不良	砂 雪母合	
口一指ナデ 底一ヘラケズリの後ナデ	口一指ナデ 底一摩滅	棕	不 良	砂 雪母合	
指整形	指整形	灰 棕	不 良	砂 粒 合	ほぼ完形
指ナデ		にぶい棕	普 通	砂 雪母合	完 形 土製支脚
外面一ヘラケズリ		にぶい棕	普 通	砂粒・雪母 長石・石英合	
口一指ナデ 柄一ヘラケズリ	指ナデ	にぶい棕	普 通	砂 粒 合	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	摩滅している	棕	不 良	砂 粒 合	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	ヘラナデ	赤	普 通	砂 長石少量合	
口一指ナデ 柄一ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい棕	不 良	スコリア・ 砂粒を含む	

住居 址 (図 53)	番号	種類 (名前×基部cm×底径cm)	法量 (上高cm×最高cm×底径cm)	最大径	器形の特徴	
					口縁部	口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、体部は半球形を呈する。
第一 十 号 住 居 址 (図 53)	1	环 (土師)	11.8×3.85×—	口縁部	扁平な底部から外傾して立ち上がり。口縁部は丸い。底厚は肉厚である。	
	2	环 (土師)	13.4 × —	口縁部	口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、体部は半球形を呈する。	
	3	环 (土師)	12.4×4.6×—	口縁部	口縁部はやや尖がり、口縁部内面に一条の凹線が通る。体部は直線的に扁平な底部となる。	
	4	环 (土師)	14.8×4.85×—	口縁部	口縁部はやや尖がり、口縁部内面に一条の凹線が通る。体部は直線的に扁平な底部となる。	
	5	台付窓 (土師)	— × — × 10.0		窓底部からわずかに内傾して広がり、安定した脚部となる。	
第一 十一 号 住 居 址 (図 56)	6	蓋 (須恵)	14.9×3.1×—	口縁	天井部は全体に丸味を有し、つまみは扁平で内側がくぼみ中央部がやや突出する。口縁部外側端は縁を有し、端部は外傾する。内側にも縁を有す。	
	7	砥石 (長) (幅) 8.5×4.2			多面(5面)使用	
	1	壁 (土師)		胴部中位	頸部はやや垂直気味に立ち上がり外反する。胴部は緩やかに張り、中位に最大径を持って底部に向かう。	
	2	环 (土師)	12.2×3.6×—	口縁部	口縁部は僅かに内傾し、口縁部は尖がる。体部はややふくらむが扁平である。	
	3	环 (土師)	12×4.4×—	口邊部	口縁部は極めて短く、直立し、体部はほぼ直線的に外上方へ開く。底厚は底部で薄く、体部は厚みがある。	
第一 二 号 住 居 址 (図 59) (1)	4	环 (土師)	13.4×4.3×—	口縁部	口縁部は極めて短く直線的に外傾して口縫部は、やや尖がる。体部は扁平な底部から内傾して立ち上がる。	
	5	軽量車 (土製品)	(径) (内孔径) 4.9 0.5		円柱形に近い形態であるが側面は上下面から中央に向かってくぼみ、上面は中央の内孔に向かってあるやかにくぼむ。	
	1	壺 (須恵)			体部上半は大きく内傾し、口縁部との境は「く」の字状に屈曲する。口縁部はわずかに外反し、外上方へ立ち上がる。	
	2	広口壺 (須恵)			頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反しつ外上方へのびる。口縁端部は断面三角形状で、上下端はにぶい縁となる。頸部は4条の凹線を運らし、その内に棒状工具で割りし、綾杉文状に施す。	
	3	瓶 (須恵)	25.5×24.1×14.5	口縁部	体部、直線的に外上方へ開く。口縁部は断面三角形で外反する。口縁上下端部は鋭い。底開口部は一本のブリッジが中央に渡る。	
(2)	4	高台付环 (須恵)	14.6×5.85×9.8 (高台)	口縁部	やや長めで外下方へふんばる高台を有す。底部と体部の境は鋭く屈曲。体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く收めている。	
	5	高台付环 (須恵)	17.8×7.45×10.85 (高台)	口縁部	外下方へふんばるやや長めの高台。底部と体部との境は屈曲し、にぶい縁をなす。体部はわずかに外反気味に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く收めている。	

整 形 法		色 調	焼 成	胎 上	備 考
外 面	内 面				
摩 滅	ヘ テ ミ ガ キ		普 通	細 砂 粒 合 芽 母 含 む	内 黑 土 器
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	指ナデ	明 赤 福	普 通	砂 (石英) 含	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	口一指ナデ 底一ヘラナデ	赤 福	良 好	砂 較 合	
口一指ナデ 以下ヘラケズリ	ヘラナデ	灰 福	普 通	砂 較 合	
側部 ハケ日發形 脚部 ハケ日の後ナ デ(末透免のハケ日残 る)	側一ヘラナデ 脚部一ヘラナデ	にぶい橙	普 通	砂 芽 母 合	成形良好
中央から 9 cm に 渡って回転ヘラ ケズリ		灰	普 通	長 石 粒 細 砂 粒 を 含 む	ロクロ右回転 水抜き痕は弱い 右
口一指ナデ 脚一ヘラケズリ	口一指ナデ 脚一ヘラナデ	にぶい橙	不 良	砂 芽 母 長 石 合	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	口一指ナデ 底一ヘラナデ	灰 福	普 通	砂粒(多) スコリア(少)	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	口一指ナデ 底一ヘラナデ	にぶい黄白	普 通	砂 芽 母 合	はは完形
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	指ナデ	灰 黄 福	良 好	砂 較 合	
指ナデ		明 赤 福	良 好	砂 較 合	57.5g
縦方向 の印さ日が残されて いる。頭部外面は印 さ日が部分的に残 されている。	内面にはあて只 の同心円文が残 されている。	浅 灰 福	不 良	長 石 粒、細 砂 粒を少 量 含み比較的 精選	
縦方向の印さ日	あて只の同心円 文が残されてい る	灰	良 好		
体部下へラナ デ	体部下へラナ デ 口跡へクナデ	福 灰	良 好	石 砂 較 合	
底一回転ヘリケ ズリ		灰 白	良 好	長 石 砂 較 合	底部にヘラ記号有り
		灰 白			水抜き痕は弱い。 底部 ヘラ記号有り

住居番号	種類	法量 (横×高×奥深)	最大径	器形の特徴
第 二 十 号 住 居 地 図 59	6 环 (須恵)	14.05×7.45×10.85	口縁部	体部との境は丸味をもつ。体部はわずかに器厚を減じながら、ほど直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く取めている。
	7 环 (須恵)	- × - × 11.8		外下方へふんばる高台。
	8 小型甕 (土師)	15.35× - × -	胴部中位上	口縁部は、あまい「S」字状を呈し、器厚の薄い胴部は中位上で最大径をもつ。
	9 小型甕 (土師)	15.35× - × -	胴部中位	口縁部は、緩やかに外反し、口縁部に一束の凹線が現れる。胴部は緩やかに張り、胴部中位に最大径をもつ。
	10 瓢 (土師)	- × - × 9.4		平らな底部から緩やかに内傾して胴部へと移行する。
	11 瓢 (土師)	12.8	口縁部	口縁部は、僅かに内傾して立ち上がり、体部との境に接を持つて、体部は扁平な弧状を呈する。
	12 広口盃 (須恵)	15.6× - × -		体部から口縁部にかけては丸味をもって「く」の字状に移行し、口縁部はほぼ直線的に外方へのびる。腹部は内傾し、両端にはよい稜をなす。
	13 环 (須恵)	14.3×4.25×9	口縁部	底部外縁まで挽き出し、体部との境は不明瞭。体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く取めている。
	14 环 (須恵)	13.5×4.6×7.8		体部との境は明瞭でなく丸味をもつ。体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く取めている。底部外縁には強いアケがみられる。
	15 瓢 (須恵)	- × - × 16.6 (高台)		体部は内傾気味に外上方へ立ち上がる。底部は円弧へ引け後はは垂直で端部がゆがむくなる凸台を付けている。
第 三 十 号 住 居 地 図 60	16 古付長颈甕 (須恵)	4.75× - × -		底部は回転ヘリ削りの後、高台を付けているか欠損。
	17 盆 (須恵)	19.7×3.15×11.65 (高台)	口縁部	短く外下方へわずかにふんばる高台。体部との境は明瞭に屈曲する。体部はわずかに外反し、短く外上方へのび肩部は方形につくっている。
	18 高台付环 (須恵)	- × - × 6.2	口縁部	外下方へ若干ふんばる高台。体部との境によい稜。体部はわずかに器厚を減じながらほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部邊は欠失する。
第 三 十一 号 住 居 地 図 61	1 钵 (土師)	11.5×9.4×7.8	体部上位	口縁部は外傾して立ち上がる。体部は内傾し、底部平坦。
	1 盆 (土師)	- × - × 3.5		底部不整、椭円形。肩部は、緩やかに張り出し、中位に最大径をもつ。平らな底部へ至る。
第 三 十二 号 住 居 地 図 62	1 小型甕 (土師)	10.6×12×4	胴部中位	口縁部は直線的に開き、口縁部は平底である。胴部は緩やかに張り出し、胴部中位に最大径をもつ。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
底一切り離し後 カキ目状工具で ナデ、さらにナ デている。	内面底部外縁に は強いアテがみ られる	緑灰			水挽き痕は外面にや 強い 底部にヘラ記号有り
回転ヘラケズリ		灰白	良 好		底部にヘラ記号有り
口一指ナデ 脇一ヘラナデ後 <small>くわ</small> いだが	口一指ナデ 脇一ヘラナデ	灰黄褐	善 通	砂粒・雲母 アスコリア 石英 合	
口 指ナデ 底一ヘラみがき	口一指ナデ 底一ヘラナデ	にぶい赤褐		砂粒・雲母 合	
ヘラミガキ	ヘラナデ	にぶい橙	善 通	砂粒・長石・ 石英・空母合	底部- 木葉痕
口一指ナデ 底- ヘラケズリ	口 指ナデ 底- 摩減のため 不明	にぶい黄橙	善 通	砂粒・スコリア 砂礫を含む	
		褐灰	良 好	長石粒・細 砂粒を含む	器外面には灰・色、自 然軸
底部中央径 9 cm に渡って回転ヘ ラケズリ		オリーブ灰	良 好	長 石 細 砂 粒 合	水挽き痕は弱い
底一切り離し後 回転ヘラケズリ		緑灰	良 好	長 石 細 砂 粒 合	水挽き痕は弱い
底 小軸ヘラ 削り		灰	良 好	長 石 細 砂 粒 合	器外面には灰緑色の自 然軸付着
底部下端幅 3.5 cmに渡って回転 ヘラケズリ	内面底部に自然 軸が付着してい る	灰白	良 好	長 石 細 砂 粒 合	底部に自然軸付着 水挽き痕は弱い
底一回転ヘラ ケズリ			良 好	長 石 細 砂 粒 合	小片のみ。水挽き痕弱 い。丁寧な作りである。 ヘラ記号有り。
底 回転ヘラケ ズリ		暗赤灰	善 通	長 石 細 砂 粒 木目が継い	水挽き痕
ヘラケズリ	ヘラミガキ	にぶい黄橙	善 通	砂 粒 粒 合	ゆがみ有り
ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい褐	や 不良	砂粒・砂礫 を含む	
口一ハケ目の後 指ナデ(未消化 のハケ目残る) 脇一ハケ目の後 ヘラナデ	口 ハケ目整形 脇一底 ハケ目の後ヘ ラナデ	褐	善 通	砂粒・ 雲母 合	ほぼ完形

住居番	番号	種類	法量 (口徑mm×高さmm×底径mm)	最大径	器形の特徴	
第一十五号住居址	2	小型甕 (土師)	9.5×8.6×4.4	口縁部	口縁部はやや直線的に外傾し、口縁部近くでやや内傾する。胴部は頸部から張り出し、胴部上位下に最大径を持ち、僅かに突出した底部にまる。	
	3	器台 (土師)	9.0×9.3×1.1	脚部	受部は直線的に開き、上位でやや外傾する。口縁部は平坦である。受部孔を有し、脚部は直線的に開く。円窓は脚部中位上に三カ所穿たれる。	
	4	小型甕 (土師)	13.0×7.3×2.5	口縁部	口縁部は大きく外反し、胴部はやや強く張り出し、胴部上位に最大径をもつ。底部は極めて小さく底平である。	
(図66)	5	壺 (土師)	10.2×6.5×2.1	口縁部	口縁部は僅かに内傾する。胴部は緩やかに張り出して、胴部上位下に最大径をもつ。	
	6	砥石 (石器) 全長 最大幅	5.3×3		使用痕は上面側面などに残る。径4mmの円孔を有す。	
第二十六号住居址	1	盤 (須恵)	21×3.5×14.1	口縁部	外下方へ若干ふんばる。高付を回転ヘラ削り後付けている。体部との境は粗糲しないで接をする。口縁部はわずかに外反、底部は丸く吸めている。	
	2	高環 (須恵)	21.8×—×—		縁部一四方に透し窓を穿つ。盤部は大きめ外方へ開き、口縁部は直立し、端部はわざかに内傾する。上端部にはよい接をする。	
第二十七・二十九号住居址	1	甕 (土師)	26.2×—×—		口縁部は緩やかに外反し、胴部は大きく膨らむ。	
	2	甕 (土師)	—×—×6.8		底で側部はゆるやかに内傾して立ち上がる。	
	3	环 (土師) (復)	13.0×4.0×—	口縁部	口縁部は垂直気味に立ち上がり、体部は偏平である。	
	4	环 (土師)	13.7×3.5×—	口邊部	口縁部は短く、やや内傾する。体部は浅く偏平である。	
	5	环 (土師)	12.6×3.8×—	口邊部	口縁部はほぼ直立し、体部は偏平である。全体に肉厚で口縁部は丸い。	
(図72)	6	环 (土師)	12×—×—	体部上位	口縁部はやや内傾し、体部は半球形を呈する。	
	7	环 (土師)	13.8×—×—	口邊部	口縁部は僅かに内傾し、体部との境に接を持つ。体部は直線的である。	
(1)	8	环 (土師)	12.0×3.9×—	口邊部	口縁部は内傾し、体部との境に段をつくる。体部は偏平である。	
	9	环 (土師)	13.5×—×—	口邊部	口縁部は器厚を減じて内傾し、口縁部はわずかに外反気味。体部との境に接を持つ。体部はやや深く偏平である。	
(2)	10	环 (土師)	15.2×3.6×—	口縁部	口縁部は極めて短かく垂直気味。体部は浅く、偏平である。	
	11	环 (土師)	12.4×3.6×—	口邊部	口縁部は直線的にやや内傾し、体部との境に僅かな段を持つ。体部は偏平である。	
	12	环 (土師)	14.2×5.0×	口縁部	口縁部は器厚を増しほぼ直立する。体部はやや偏平を半球形を呈し、丸底である。	
	13	环 (土師)	13.3×4.4×—	口邊部	口縁部は直線的に内傾し、口縁部の割には体部が浅く偏平である。口縁部と体部の境に僅かな段を持つ。	
	14	环 (土師)	13×3.7×—	口邊部	口縁部が内傾し、体部との境に段を持ち、体部は極めて浅く偏平である。	

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
口一ハケ日以後 指ナデ	口一ハケ日以後 諸ナデ	にぶい橙	善 通	砂 粒 合	
胴一ハケ日整形	胴一太いハケ日 整形				
受部一ヘラナデ 脚部一ヘラクズ リ	受部一ヘラミガ キ 脚部一ハケ日以後 ナデ		や、不良	砂 粒 合	
口一ヘラナデ 胴一(頭部にハケ日が 見られる)ヘラナデ	口一ヘラナデ 胴一ヘラナデ	にぶい黄橙		砂 粒 雲母 合	
口一指ナデ 胴一ハケ日以後ナデ	指ナデ	浅 黄 橙	善 通	砂 粒 白 雲母 合	
					さけ砥石 16g
底 径18cmに渡 り回転ヘラ削り		灰	良 好	長 石 粒 細砂粒含む	水焼き痕剥い
盤一径13cm:倒 り回転ヘラ削り		灰	良 好	長 石 粒 細砂粒含む	脚部ほとんど欠失 水焼き裏面はやや強 い。盤部に焼成時のビ ビ割れ有り。
口一指ナデ 胴一ヘラナデ	ヘラナデ	灰 黄 橙	不 良	砂 粒 合	
	ヘラナデ	橙		砂粒・石英 合	底一木葉痕 整形不良
口一指ナデ 胴一ヘラ削り	指ナデ	にぶい橙	や、不良	砂 粒 合	成形不良
口一指ナデ 胴一ヘラ削り後 ナデ	ロ一指ナデ	浅 黄 橙	善 通	砂粒・雲母 合	ほぼ完形 裏面は磨滅している
口一指ナデ 底一ヘラ削りの 後ヘラナデ	指ナデ	にぶい橙	良 好	砂 粒 スコリア等 合	ほぼ完形
口一指ナデ 底一ヘラ削り	ロ一指ナデ 底一不明	外一にぶい黄橙 内 にぶい橙	不 良	砂粒(石英) を含む	
ヘラ削り ロ一指ナデ	ヘラミガキ ロ一指ナデ	浅 黄 橙	善 通	砂 粒 合	
ヘラケズリ ロ一指ナデ	指ナデ	にぶい橙		砂 粒 合	
ロ一指ナデ 体一ヘラケズリ	ナデ	にぶい橙	良 好	砂 粒 雲母(少) 合	
ロ一指ナデ 体一ヘラケズリ 後ナデ	ナデ	にぶい橙	善 通	砂 粒 スコリア 合	
ロ一指ナデ 底一ヘラケズリ	ロ一指ナデ 底一ヘラナデ	にぶい黄橙	善 通	砂 粒 合	ほぼ完形
ロ一指ナデ 底一ヘラケズリ	ナデ	明 橙	善 通	砂 粒 合	底一薄付着
ロ一指ナデ 底一ヘラケズリ	ナデ	にぶい黄橙	良 好	砂 粒 合	
ロ一指ナデ 底一ヘラケズリ	ナデ	浅 黄	善 通	砂 雲母 合	ほぼ完形

住居場	番号	種類	法 量 (口幅cm×高さcm×底径cm)	最大径	器形の特徴
第一 二 十 七 ・ 一 十 九 号 住 居 場 北	15	环 (土師)	16.0×—×—	口辺部	口縁部は短くやや内傾する。体部は浅く偏平である。
	16	環 (須恵)			体部中位に2条の凹線を残らせ、その間に横状工具による刺次を行っている。刺突後に孔を穿っている。体部と口頭部境に痕有り。
	17	台付環 (須恵)	—×—×12.5 (高台)		底部には短くやや外側へふんばる高台を有する。体部は内窪しながら立ち上がる。
	18	环 (須恵)	11.3×4.8×6.7	口縁部	底部と体部との境はあまり明瞭でなく、体部はわずかに高厚を減じながら直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は丸く収めている。
	19	环 (須恵)	13.2×4.6×8	口縁部	底部は肉厚で底部から体部にかけて不明瞭である。体部はわずかに外反しながら上方へ立ち上がる。口縁部はほぼ丸く収めている。
	20	支脚 (土師)	全長 15.9×5.6		柱状で上部に向かってわずかに細くなる。底部平面。
	21	甕 (土師)	16.6×—×—	胴部中位	口縁部は「S」字状を呈する。胴部は緩やかに盛り、底部を欠損している。
	22	甕 (土師)	21.2×—×—		口縁部はやや強く外反し、口縁、内外に凹線が残る。胴部は緩やかに盛り、底部が欠損している。
	23	高台付环 (須恵)	10.6×4.85×6.1	口縁部	外下方へふんばる高台。体部との境は明瞭に屈曲し、縫をなす。体部はわずかに外反しつつ、外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く収めている。
	24	盤 (須恵)	16.7×4.2×10.2	口縁部	外下方へふんばる高台。体部との境は丸味をもち、ゆるやかに屈曲し、口縁部はほぼ直線的に外上方へのびる。端部は丸く収めている。
(1) (2) 一	25	盤 (須恵)	14.9×3.4×7.7	口縁部	底部は丸く、底部からゆるやかに内窪し、大きく外上方へ開き、口縁部との境は、わずかに屈曲し、口縁部はわずかに外反。端部は丸く収めている。内面底部と口縁部の境は凹線状となり、明瞭である。高台は外下方へふんばる。
	26	盤 (須恵)	—×—×10.9 (高台)		細く、わずかに外下方へふんばる高台を付している。端部は方形を呈する。
	27	高 环 (高环)	22.9×12.45×13.45	口縁部	盤部へフ削り後、外下方へ斜めに開いて行く脚を付す。脚部下位は大きく外反、端部はわずかに内傾し、下端はぶい縫。脚部は四方に一段の透し窓。盤部はわずかに内窓気味に外方へのびる。
	28	切子玉 (石製品)	長 最大幅 2.5×1.7		水滴形で横断面略六角形。上面中央から下面まで幅2mmの円孔が貫通している。
	1	环 (土師)	15.4×4.6×—	口縁部	口縁部はやや外反し、口縁部は僅かに内傾する。体部は弧状を呈す。
第二 十八 分 住 居 場 北 75 號	2	环 (須恵)	14.4×4.55×8.6	口縁部	底部から体部にかけて丸窓有り。体部はわずかに器厚を減じながらほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く収めている。
第二 十 四 分 住 居 場 北 78 號					

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
II-指ナデ 底-ヘラケズリ	指ナデ	にぶい桜	善 通	アスコリア 砂粒・砂糖 を含む	
底-手持ちヘラ ケズリ		灰	良 好	長石粒 細砂粒含む	底-手持ヘラ削りで丸く調整
調整痕不明		灰 白	良 好	長石粒・細 砂粒含む	自然軸の付着
底-回転ヘラ切 り後外周部をナ デ		灰	良 好	長石粒 細砂粒含む	
底-手持ち、数 回のヘラケズリ		緑 灰	善 通	長石粒 細砂粒含む	水挽き痕 内曲は弱い。 外面はやや強い。 焼成時のヒビ割れ
手づくね		にぶい赤褐	善 通	砂粒 含	
II-指ナデ 胴-ヘラケズリ	口 指ナデ 胴-ヘラケズリ	にぶい赤褐	不 良	砂粒・長石 含	
口-指ナデ 胴-ヘラナデ	口-指ナデ 胴-ヘラナデ	桜	善 通	砂粒・長石 石英・スコ リア 含	器厚は一定、成形は良 好
底-回転ヘラケ ズリ		灰オリーブ	良 好	長石粒 細砂粒含む	水挽き痕弱い。底部に 焼成時のヒビ割れ。 表面はザラザラで未使 用の可能性が強い。
底-回転ヘラケ ズリ		オリーブ灰	善 通	長石粒 細砂粒含む	水挽き痕弱い。
底-回転ヘラケ ズリ		灰オリーブ	良 好	長石粒 細砂粒含 む	水挽き痕弱い。 丁寧な作り。
底部-回転ヘラ ケズリ		黄 灰	善 通	長石粒・細 砂粒を含む	ヘラ記号有り、水挽き 痕、成形丁寧
盤部下面-径14 cmに渡り回転ヘ ラケズリ		灰	善 通	長石粒 細砂粒含む	水挽き痕弱い。 上縁部はわずかに内擣 し、上下端は丸く收め ている。
口-指ナデ 底-ヘラケズリ	口 摩擦している 底 ヘラナデ	桜	善 通	砂粒(少)含	所々欠損有り。全体に 摩滅している。
底-径11cm回転 ヘラケズリ		青 灰	良 好	長石粒 細砂粒含む	水挽き痕弱い。

生器名	番号	種類	法 量 (口徑cm×高さcm×底径cm)	最 大 径	器形の特徴
第八号土壙(図80)	1	环(土師)	12.0×4.8×6.0	口縁部	口縁部はほぼ直立し、口唇部は丸い。体部との境に棱を持ち、凸凹があつて平底上に至る。
	2	环(土師)	11.9×4.3×—	口縁部	口縁部はほぼ直立し、凸凹の体部から平らな底部に至る。
	3	环(土師)	12.5×5×—	口縁部	口縁部はやや外反し、体部はほぼ直線的で平底へ来る。
第一号(図81)遺構	1	高台付环(須恵)	13.5×5.9×8.3	口縁部	外側へ大きくふんばる高台。底部と体部との境は明瞭に屈曲。体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部はわずかに外反し、端部はやや外方に向き鋭い。
第二号(図84)遺構	1	壺(土師)	26.2×—×—	胸部中位	口縁部は強く外反し、口唇部近くで内傾する。肩部は緩やかに張り、中位で最大径を持つ。
	2	壺(土師)	—×—×9.8		平らな底部でゆるやかに膨らみ、胸部中位に最大径。
	3	小型壺(土師)	—×—×5.8		平らな底部から緩やかに内溝して、胸部中位に最大径をもつが、あまり膨らまない。
第三号(図86)遺構	1	高环(土師)	—×—×10.4(脚)		底部はゆるやかに内溝しながら立ち上がり、脚部は低く、大きく外下方へふんばる。全体に肉厚である。
	2	高环(土師)	18.2×13.8×13.2(腹部径)	口縁部	环部口縁は、緩やかに外反し、体部との境に棱を持ち、体部は偏平である。脚部は円柱状を呈し、壺部はほぼ直線的に開く。
溝状遺構(図88)	1	壺(須恵)	21.6×—×—	肩部中位下	体部はほぼ環形。口縁部との境は「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に外上方へ立ち上がる。壺部は内傾し、上下端にはよい棱をなす。
	2	环(土師)	13×—×—	口縁部	口縁部は直線的に内傾しながらわずかにふくらみ、壺部に向かってやや叢くなる。体部は扁平な弧状。
	3	环(須恵)	13.1×3.85×5	口縁部	体部と底部との境は不明瞭。体部は内溝しつつ外上方へ大きく聞く。口縁部はほぼ丸く收めている。
	4	砾石	6.4(全長)×3(幅)		不定形で多面的に使用している。径4mm前後の円孔が貫通している。

整 形 法		色 調	焼 成	胎 土	備 考
外 面	内 面				
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	指ナデ	にぶい橙	普 通	砂粒・雲母含	ほぼ完形 底部に木葉痕あり
ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい赤褐	普 通	スコリア・ 石英・雲母含	ほぼ完形 底部一本葉痕有り
口一指ナデ 刷一ヘラケズリ 底 木葉痕有り	指ナデ	にぶい橙	良 好	砂粒・石英 含	ほぼ完形 底部一本葉痕有り
底・回転ヘラケズリ			普 通	長石・粒 細砂粒含	水挽き痕弱い。 丁寧な作りである。 底部へラ記号有り。
口 指ナデ 刷部下位 ヘラミガキ	口 指ナデ 刷一ヘラナデ	にぶい褐	普 通	砂粒・雲母 スコリア含	
ヘラケズリ	ナデ	にぶい赤褐	不 良	砂粒含	
ヘラケズリ	ヘラナデ	灰 褐	普 通	雲母・スコ リア・砂粒 含	
环部一マツツさみ 脚部一巻ヘラケズリ	环部一ヘラミガキ 脚部一ヘラケズリ	にぶい黄橙	普 通	雲母・スコ リア・砂粒 含	内里
环口一指ナデ 底 ヘラミガキ 脚一ヘラケズリ 脚部 陶 布ナデ	ヘシナデ	浅 黄 橙	普 通	砂粒・長石 石英含む	口縁部内外の一部に黒 斑
横方行 印き目		灰オリーブ	良 好	長石粒・細 砂粒含	
口 指ナデ 底 ヘラケズリ	口 指ナデ 底一ヘラナデ	にぶい黄橙	普 通	砂粒(石英) 含む	
底一径 9 cm回転 ヘラケズリ				長石粒・細 砂粒含	水挽き痕弱い。 底面にヘラ記号有り。
					さけ紙石

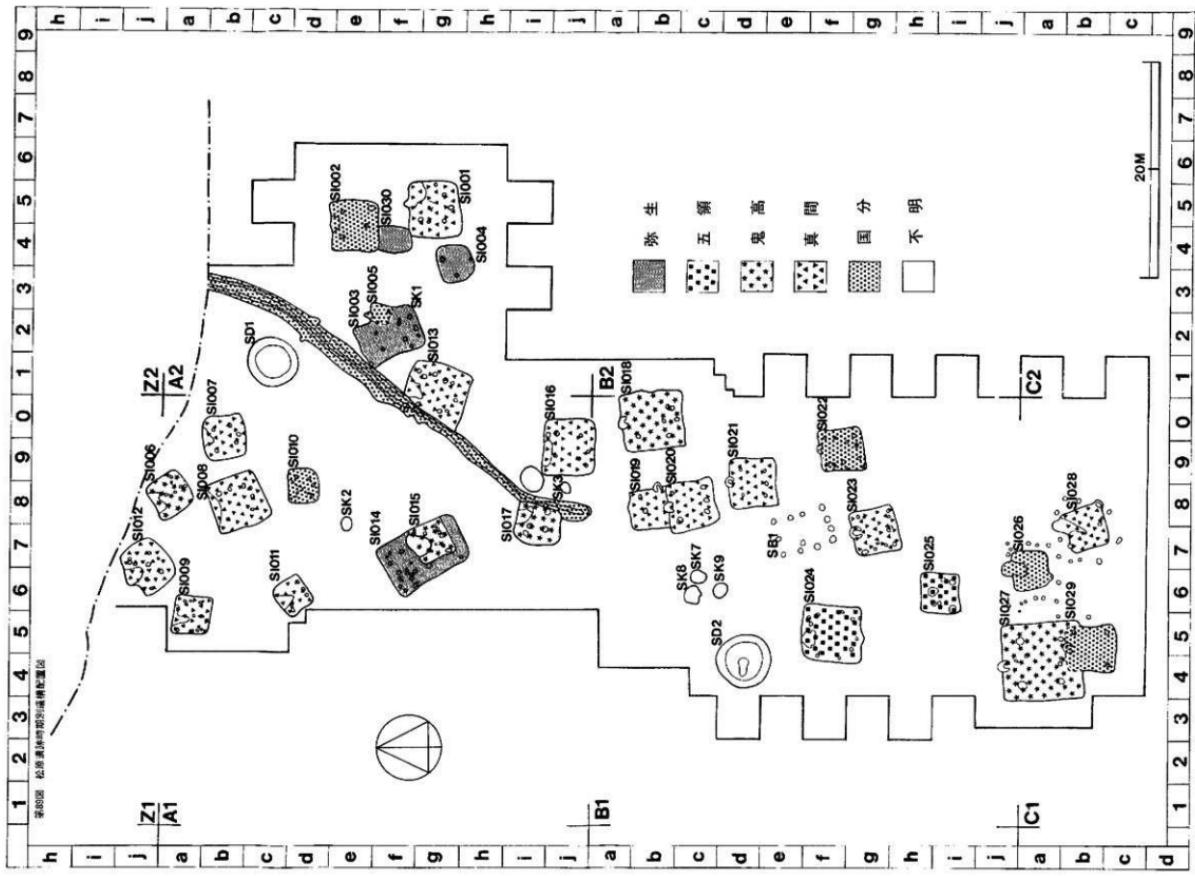


表3 松原遺跡住居址一覧表

遺構	位置	形態	長軸×短軸 m × m	面積 m ²	壁 cm	高 cm	主軸方向	部 分	柱穴	出土遺物	時期	備考
001	A2e5	方形	4.93×4.52	19.5	31~75	N-15°-W	カマド	1	土師(甕)、石器 須恵(瓦)、竹生	真間		
002	A2e4	方形	4.41×4.48	18.1	50~56	N-3°-E	カマド	1	須恵(甕)、 石器、鉄器	国分		
003	A2f1	長方形	3.48×3.98	22.0	35~56	N-24°-E	セト	1	竹生	弥生		
004	A2g4	隅丸方	3.30×3.22	10.0	5~10	N-12°-W	セト	1	弥生 石器	弥生		
005	A2f2	隅丸方	2.25×不明	5.4	36~47	N-8°-E	カマド	3	土師(小甕、环) 須恵(瓦)	国分	火災	
006	A1a8	隅丸長方形	3.90×3.38	9.4	43~	N-35°-W	カマド	1	土師(甕、钵、小甕) 鐵石	鬼高	壁溝	
007	A1b9	正方形	4.00×3.95	11.8	40~62	N-8°-W	カマド	4	漆器(环)、土師 (环、盆、碗)、瓦片	真間		
008	A1b8	隅丸長方形	5.10×4.83	17.3	33~57	N-21°-W	カマド	4	土師(环、盆、支脚、小 甕)、鐵石	真間		
009	A1a5	正方形	3.56×3.50	10.4	33~43	N-2°-E	カマド	1	土師(甕、钵) 須恵(环、盆、甕)、鐵石	真間	火災	
010	A1d8	長方形	3.05×2.78	6.9	37~45	N-2°-E	カマド	1	漆器(环) 鐵石、石器	国分		
011	A1d6	隅丸長方形	3.07×2.90	6.9	40~55	N-33°-W	カマド	1	土師(环) 鐵石	真間		
012	Z1j6	隅丸長方形	4.65×3.90	14.4	43~62	N-36°-W	カマド	1	土師(环、盆、甕) 鐵石	真間		
013	A1g0	隅丸長方形	5.78×5.35	21.0	15~35	N-18°-E	カマド	1	土師(环)	真間	壁溝	
014	A1f6	方形	3.32×3.30	34.3	36~49	N-21°-W	セト	1	弥生	弥生		
015	A1g7	隅丸方形	7.60×6.00	8.8	18~77	N-25°-W	カマド	1	土師(小甕、环)	鬼高		
016	A1j9	長方形	5.10×4.60	20.0	38~45	N-1°-W	カマド	1	土師(环、甕) 須恵化物	真間	火災	
017	A1i7	隅丸正方形	4.15×4.00	15.0	37~64	N-6°-E	カマド	1	土師(环、甕)	鬼高		
018	B1h6	隅丸方形	5.75×5.60	25.2	20~59	N-17°-W	カマド	1	土師(环、坐、支撑 脚)、甕	鬼高		
019	B1h8	長方形	4.15×3.35	13.6	12~28	N-87°-E	カマド	1	須恵 土師(环、小甕)	真間	壁溝	
020	B1c8	正方形	4.65×4.50	17.0	40~48	N-15°-W	カマド	1	須恵(环)、鐵石 上師(环、盆、台脚、甕)	真間	壁溝	
021	B1h8	正方形	4.70×4.50	16.0	43~54	N-2°-E	カマド	1	土師(小甕、环、甕) 須恵(环、甕)	国分	壁溝	
022	B1f9	正方形	4.00×3.85	11.7	41~55	N-4°-W	カマド	1	土師(小甕)	五傾		
023	B1g7	正方形	4.45×4.30	13.2	49~62	N-6°-W	カマド	1	土師(小甕)	真間		
024	B1f5	長方形	5.65×5.25	26.7	15~20	N-5°-E			土師(环)	五傾		
025	B1i6	隅丸正方形	3.95×3.75	10.6	37~51	N-3°-E	セト	1	土師(小甕、坐、若台) 鐵石	五傾	壁溝	
026	C1a6	隅丸長方形	3.70×3.20	10.6	43~60	N-3°-	カマド	1	須恵(甕、高环)	国分	柱穴設外	
027	C1e4	正方形	7.45×7.40	47.3	55~65	N-3°-W	カマド	1	土師(环、甕)、須恵 (环、甕、高环)	鬼高	火災	
028	C1b7	長方形	4.10×3.70	12.7	38~47	N-17°-W	カマド	1	土師(环、甕) 須恵(环)	真間	柱穴設外	
029	C1b5	長方形	4.55×4.35	18.6	45~55	N-2°-W	カマド	1	土師(甕) 須恵(环、甕)	国分		
030	A2f4	楕円形	3.10×2.95	6.3	16~45	N-15°-E	セト	1	弥生 石器	弥生		

第4節　まとめ

本遺跡から検出された遺構は、住居址30軒・円形周溝遺構2基・土塙6基・井戸状遺構1基・溝状遺構1条・掘立柱建築址1軒である。遺構の位置する台地は標高約43mを測り、北側は泉に向って緩斜面になってしまい、泉の水は東側の谷津川に向って流れ込んでいる。水田面との北高は、約5mほどで遺構の中中央部は緩斜面となっており、緩斜面に沿って、馬蹄形状に住居址が23軒ほど確認されている。北側の泉と何らかの関係があると思われる住居址は7軒である。また、規模的に見ると5m内外の住居址が多いが、時期別に分けると弥生時代の住居址が4軒、古墳時代五輪期の住居址が2軒、鬼高窓の住居址が9軒と土塙が1基である。奈良・平安時代の真間・区分間に比定される住居址のうち、真間間に比定される住居址が13軒で一番多く検出され、全体の43.3%を占めている。区分間に比定される遺構は、住居址6軒と溝状遺構1条を検出した。第1号土塙は、弥生時代の住居址の床面下より検出された遺構である。上塙4基と第1号井戸状遺構と円形周溝遺構2基は出土遺物が少なく、時期については不明である。掘立柱建築址については、上師器片と須恵器片を数点出土しているが時期については不明である。本遺跡は全体的に新しい時期の遺構が多いように思われる。松原遺跡は、縄文時代から奈良・平安時代にかけての複合遺跡である。

松原遺跡出土の土器（図90(1)～(3)）

縄文時代に属すると思われる土器のほとんどは、表面採集あるいは、縄文以後の遺構覆土中より出土したもので、残念ながら当土器を伴出する遺構等は確認できなかった。しかし、土器のほとんどは早期の沈線文系に属するものであり、資料の重要性を考え、あえて紹介するものである。出土した土器は、次のように分類できた。

1群土器（1～23）

無文土器を一括した。1～5は口縁部である。1はやや外反し、焼成後の穿孔が見られる。2～5はほぼ直立し、口縁が若干丸味を帯びるものである。全体的に器表面はザラつくが裏面整形は良く、特に口縁部は入念に整形がなされている。色調は灰褐色・褐色・赤褐色であり、長石・石英を含み、焼成は割り良い。6～19は竈状工具による縦（6～8）、斜（9～19）方向の擦痕が見られる。胎土には、石英・長石を多く含み、厚手のつくりがほとんどであり、焼成は良い。20～23は鐵密には、無文とは言えないかもしれないが、器面整形の一一種と見られるため本類に含めた。20～22は半截竹箸による斜位の整形がなされている。22は部分的に格子目状になっている。23は棒状工具による斜位の整形痕と思われる。色調は褐色・赤褐色で、裏面整形、焼成は全体的に良好である。23は器内外面ともに入念な整形が行なわれている。

2群土器 (24~79)

沈線のみで文様構成がなされるものを本類とした。沈線の太さにより、更に2類に分類できる。
A類 (24~44) 太めの並行沈線文が横位、あるいは斜位に施文されるものを本類とした。ほとんどが棒状施工工具による沈線であるが、29は半截竹管によるものである。色調は褐色・赤褐色・灰褐色であり、胎土には石英・長石を含み、焼成・成形ともに良好である。

B類 (45~79) 細かい沈線で文様構成がなされるものを本類とした。45~47は同一個体と思われる。口縁部は平縁で直行し、口唇直下より斜位の並行沈線が交互に三段施文され、各段とも横位の沈線によって区切られる。50~53も斜位及び横位の並行沈線の組み合わされたものであるが、口唇形態及び施文が若干異なる。49・51・52・54・60・61・63・66・69・71は、一方向の横位あるいは斜位の並行沈線を持つものである。48・57・59・67・68・70・72・73は、格子目状に施文されたものであり、特に59・67・68は格子口を意識したものと思われる。75~78は平行沈線と太めの短沈線を複合したものである。74は横位・縱位・斜位に施文されるもので底部に近い部分と思われる。色調は明褐色・赤褐色・灰褐色を呈し、全体に成形・焼成と共に良好であり、特に口縁部の成形は入念に行なわれている。

3群土器 (80~124)

沈線と貝殻文を組合せて施文したものを本類とした。詳細に観察すると、貝殻腹縁文・背面疣痕文とに分けられようが、3群として一括した。背面疣痕文をもつものは、80・82・86・90・92・94・102・106・110・112・114・118・124であるが、いずれも細めの沈線を施文している。他は貝殻腹縁文である。いずれも1~3本の平行沈線間に施文される。貝殻文を施文する個体は、大半が細めの平行沈線文と組み合わされる場合が多いが、80のように太めの沈線と複合するものもある。色調は褐色・明褐色・灰褐色であり、焼成・成形共に良好である。

4群土器 (125~127)

底部及びその他を一括した。125・126は底部である。125は小形土器の底部と思われる。126は、尖底部まで細めの平行沈線文を施文する。色調は赤褐色・灰褐色で焼成・成形共に良好である。127は若干太めの沈線による直線文・懸垂文を持つ波状口縁の深鉢形土器と思われる。胎土に少量纖維を混入する。繩文式土器は、早期沈線文系(田戸下層式土器)前後の時期のものである。

1群土器とした無文土器は、早期にみられる無文土器のグループであり、近隣例としては栃木県天矢場遺跡(注1)・茨城県祝町Ⅲ遺跡(注2)等があげられよう。これらは、神奈川県平坂貝塚出土(注3)の土器に類似性を見いだすことができ、早期沈線文系土器より一段古くなるものと思われる。

2群土器・3群土器・4群土器 (125~126) としたものは、田戸下層式土器である。当遺跡出土の田戸下層式土器の特色を言うならば、半截竹管による爪形文・刺突文・円形竹管文等は、1

片も確認されなかった。また、千葉県西の城貝塚(注4)・城ノ台貝塚(注5)例等に見られるような波状口縁を持つ土器も見あたらない。同一型式内に於けるこのような差は、単に地域差としてかたがちてしまうには、複雑な様相を呈している。ここでは、文様要素及び口縁形態等により細分されうる可能性を含むものと理解して置きたい。資料の増加により解明できるものと思われる。

4群上器(127)は、山戸上層式土器に比定できるものである。ただ一点の出土である。

注1 天矢場遺跡 柄木県教育委員会 1977年

注2 那珂川下流の石器時代研究Ⅱ 藤本彌城著 1980年

注3 相模平坂貝塚 駿台史学第3号 1953年

注4 千葉県西之城貝塚 石器時代 第2号 1955年

注5 千葉県城ノ台貝塚 石器時代 第1号 1960年

松原遺跡出土の石器 (第91図)

図91-1. 両面の中央部に素材時の剝離面を残す。周縁部は両面より調整加工をほどこしており、階段状剝離が著しい。短冊形に仕上げられた打製石斧である。上辺部は斜めに古い欠損がみられ、刃縁部も使用により欠損していると思われる。全長13.0cm・幅4.5cm・厚さ1.7cm・重さ115g (SI023.No.1, 1039)

図91-2. 素材は不明である。両面ともに周辺より荒く加工を行ない、片面のみ縁辺部を調整しており、階段状剝離が顕著である。左岡上辺部および右下辺部に自然面を残す。両刃の打製石斧で完形品。石材は安山岩質である。全長は12.4cm・幅4.9cm・厚さ2.1cm・重さ215g (SI016.804)。

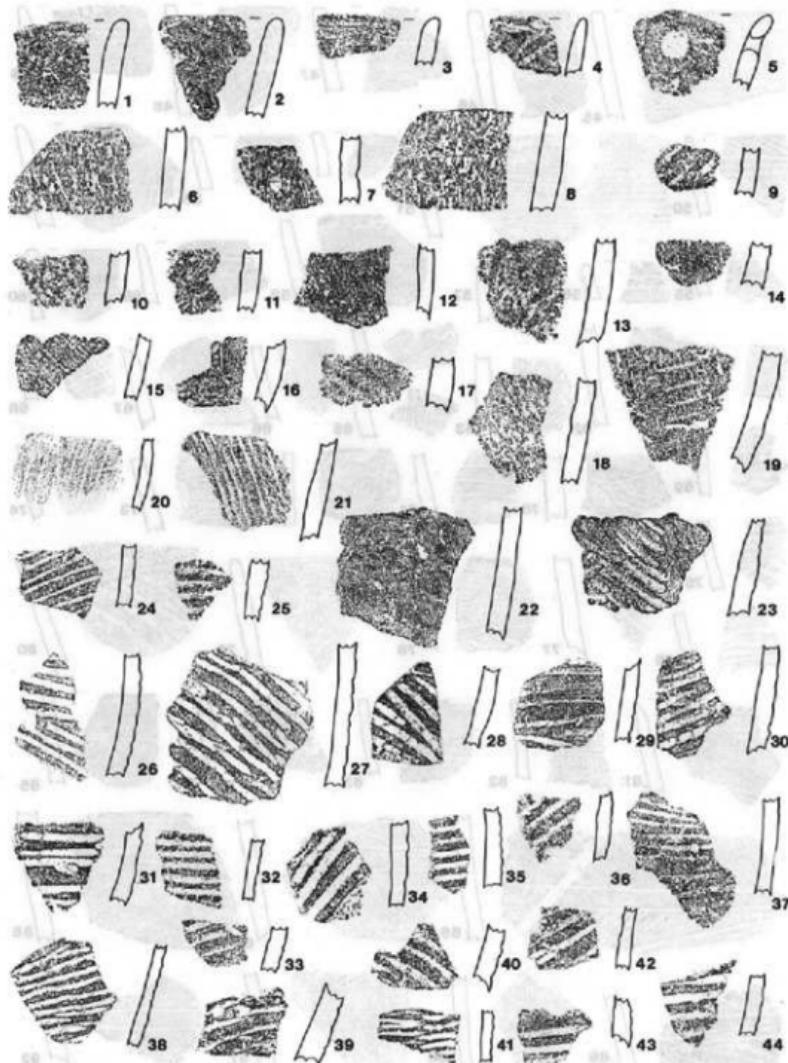
図91-3. 素材は不明であるが片面にはぼ原礫面を残している。裏面は周囲から大きく加工を行なった後、縁辺部の調整に至っており、階段状剝離が明瞭である。側面観察および刃縁部の状態から円盤形打製石斧と推定される。石材は安山岩かと思われる。全長105cm・幅4.5cm・長さ2.8cm・重さ125g。

図91-4. 調整打面より剥取られた縦長剝片で下辺部は蝶番剝離を呈する。打瘤裂痕が観察できる。背面の剝離は腹面の剝離方向と同様である。使用石材は瑪瑙。全長6.4cm・幅2.2cm・厚さ1.1cm・重さ17g。

図91-5. 横長状の剝片を素材としている。刃縁部の形成はネガティブ面より加撃され、ポジティブ面側に整形加工痕が観察される。外刃カサイドスクリイバーである。淡緑色頁岩製。全長4.5cm・幅2.9cm・厚さ0.8cm・重さ9g。

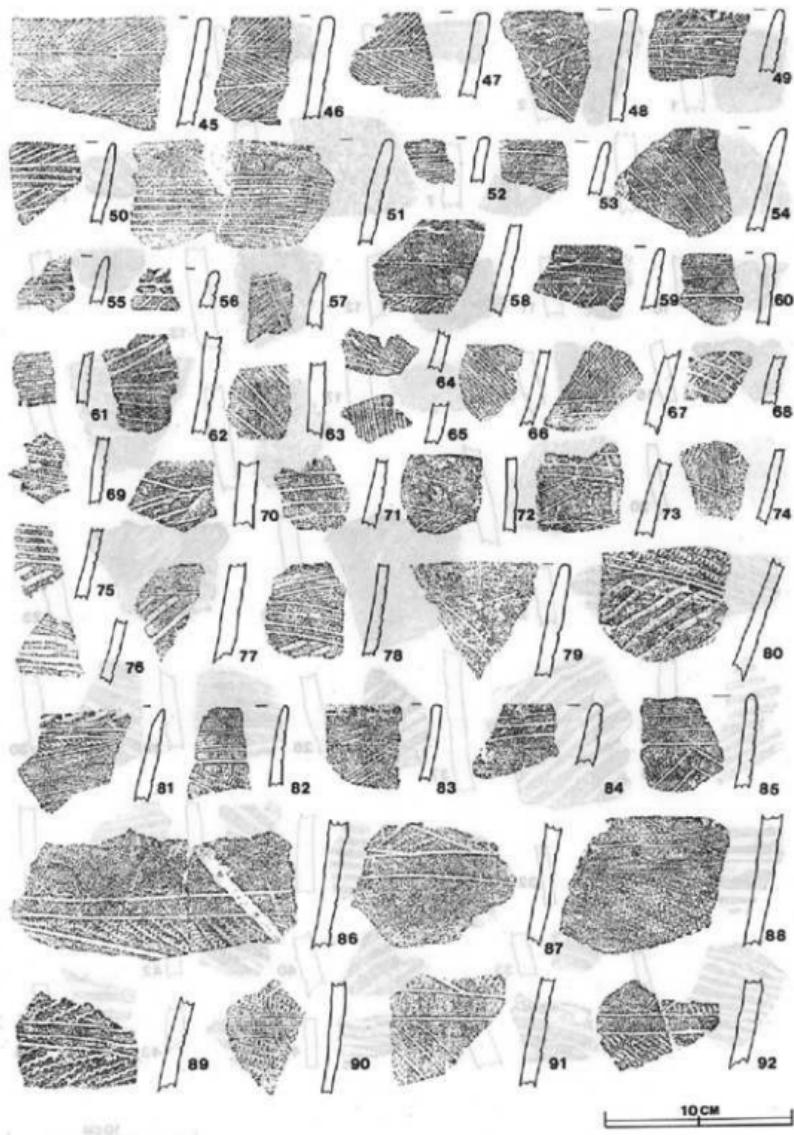
弥生時代

弥生時代に比定される遺構は住居址4軒が検出されている。このうち遺構・遺物の良好な状態

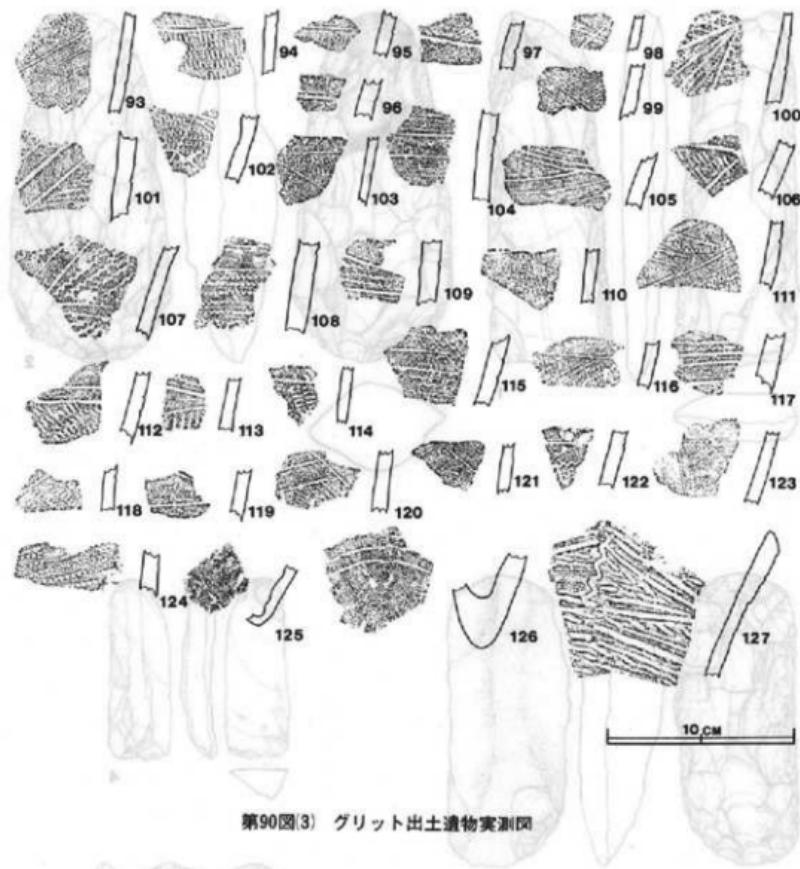


10 CM

第90図(1) グリット出土遺物実測図



第90図(2) グリット出土遺物実測図
（井戸内井戸出土）

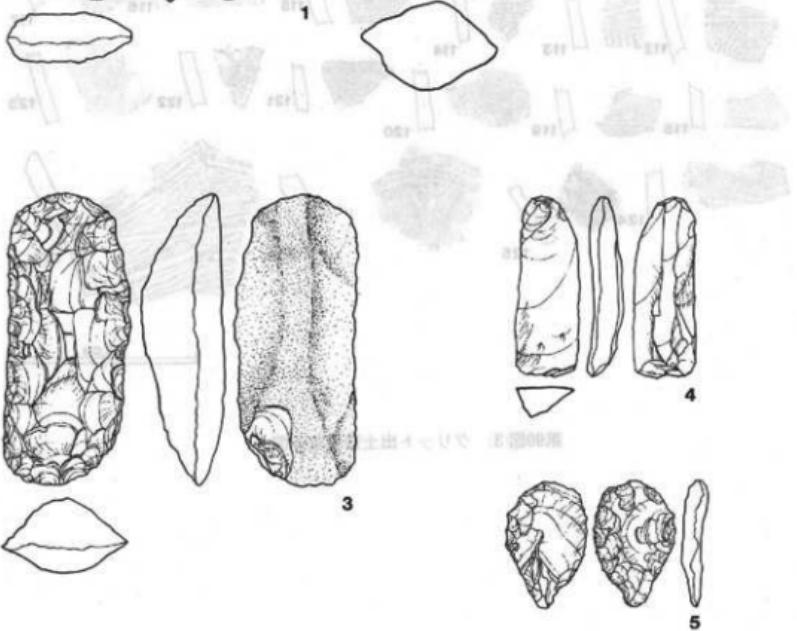
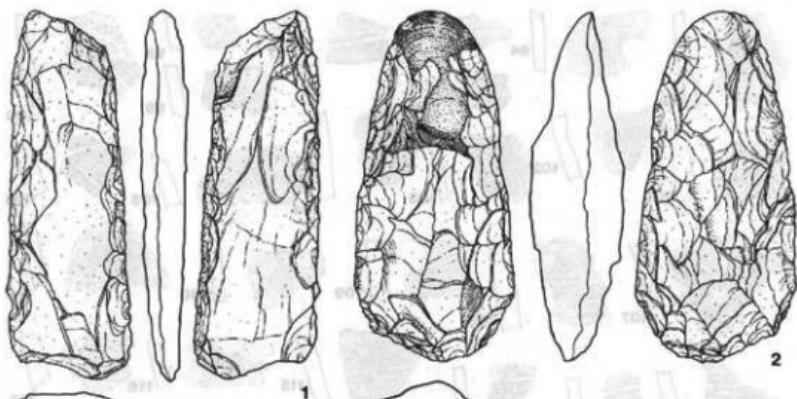


第90図(3) グリット出土遺物実測図



Mo. 01

・國藏美術出土品より 一 図10選



10 CM

第91図 グリット出土遺物実測図

で検出されている住居址は、第3号・第14号住居址である。第3号住居址と第14号住居址は、一边が7.60m×6.00mほどの大きな長方形の住居址であるが、第4号住居址・第30号住居址は平面形が小判型を呈し、規模は3.30m×3.22mほどで、本遺跡の住居址の中では小型のものである。また、いずれの遺構も中央部がやや盛んで皿状を呈している。長方形の第3号住居址・第4号住居址は本遺跡の北部に検出され、第3号住居址の北東コーナー床面から完形の「斐形土器」が出土し、その他弥生式土器片を約270片ほど出土している。また、構築された時期については、遺物より東中根期に比定されるものと思われる。第14号住居址は覆土中より破片のみ約120片ほど出土しており、長岡式に比定されると思われる。小判形の第4号住居址と第30号住居址は本遺跡の北東部より検出され、第4号住居址からは長岡式に比定されると思われるII線部を一点と、その他の破片数点を出土しており、本址は第14号住居址と同時期の遺構と思われる。第30号住居址からは弥生式土器片約80片ほどを出土し、長岡系に比定される上器片であると思われる。各住居址が構築された時期については出土遺物等から時間差はあるまいと思われるが、住居址の規模に差があり、当時の社会に貧富の差・隸属的関係などが発生していたのではないかと思われる。

古墳時代

五領期に比定される遺構は、本遺跡の南側に検出された第24号住居址・第25号住居址である。第24号住居址は堆が床面直上より出土しており、他は、細片のため不明である。また、確認面より床面までの深さは非常に浅いものである。第25号住居址は床面ほぼ中部に炉址を有し、出土遺物は小形甕3個。その他、堆・器台などを出土している。

鬼高期に比定される住居址は、第6号住居址・第15号住居址・第17号住居址・第18号住居址・第27号住居址など5軒である。住居址は北壁の中央部にカマドを有し、規模は長辺が5m内外の竪穴式住居が多い。その内で第27号住居址が一番大きく長辺7.45m・短辺が7.40mである。これらの住居址から土師器の壺・壺・鉢などを多量に出土し、その中で壺の出土量が多い。鬼高期になり、須恵器の壺・壺・高台付壺などの出土が多くなっている。その他の出土遺物は砾石を数点出土している。第27号住居址は、規模も大きく、土師器・須恵器の出土量も多く、床面中央部からは水晶の切子玉を出土しており、鬼高期の住居址の中でも「長」的な竪穴式住居ではないかと思われる。

奈良・平安時代

真間期に比定される住居址は、13軒検出され、遺跡中央の緩やかな傾斜に面し弓なりに8軒検出され、北部の泉に面すると思われる住居址が5軒ほど検出されている。住居址の規模は、長辺が約5m以上の住居址が3軒、約4m以内の住居址が7軒、3m以下の住居址が3軒である。全体的に住居址は小規模の住居址が多く、これらの住居址は南壁中央部付近に出入りの施設と思われる柱穴を確認し全て北側にカマドを有し、カマド内から土師器片・須恵器片を出土している。

土師器の出土遺物は壺や甕の出土量が多く、他に甌・高壺・鉢・椀などが出土している。須恵器の出土量は比較的少なく、壺・鉢・蓋などを出土している。

国分期に比定される遺構は住居址が6軒、溝が1条である。これらの遺構は溝をはさんで、東部に住居址が2軒、西側に住居址が1軒、南側に住居址が3軒検出されている。これらの住居址はいずれも北側にカマドを有し、第26号住居址は床面にピットは有せず、竪穴住居址の施設外に柱穴を有し、カマドの両脇に2本の柱穴が検出されている。出土遺物は全体的に土師器の出土量が少なく、須恵器の出土量が多い。住居址の規模は全体的に小さい。

以上、松原遺跡は縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代にまたがって集落が営まれていた複合遺跡である。そして、当時の人々の生活基盤は東側の谷津田及び、北東部の山地にあったと思われる。



遺跡全景

1



作業風景

2

写!

松原遺跡



第1号住居址



第2号住居址

2



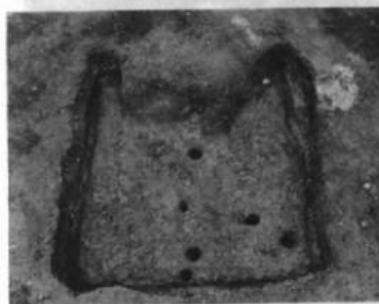
第2号住居址出土状況

3



第4号住居址出土状況

4



第6号住居址

5

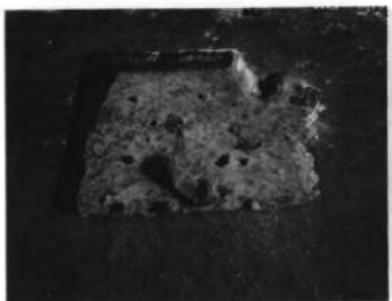


第6号住居址カマド

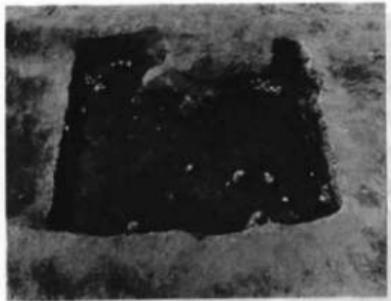
6

松原遺跡竪穴住居址(1)

写2



第3・5号住居址



第7号住居址

2



第8号住居址カマド

3



第9号住居址

4



第11号住居址

5



第12号住居址

6

写3

松原遺跡竪穴住居址



第13号住居址

1



第13号住居址カマド

2



第14・15(内側)号住居址

3



第15号住居址カマド

4



第16号住居址

5



第17号住居址

6



第18号住居址

1



第18号住居址カマド

2



第19(上)・20号住居址

3



第21号住居址

4



第22号住居址出土状況

5

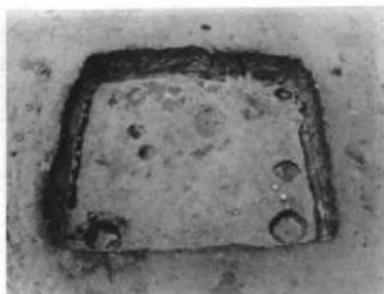


第23号住居址

6

写5

松原遺跡竪穴住居址



第25号住居址

1



第25号住居址出土状況

2



第26号住居址

3



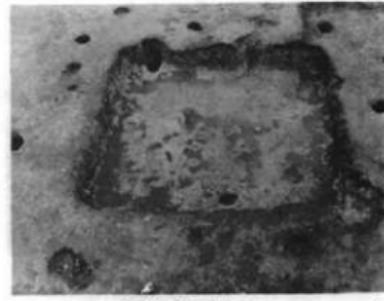
第27号住居址

4



第27号住居址カマド

5



第28号住居址

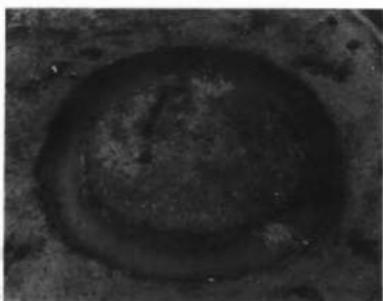
6

写 6

松原遺跡竪穴住居址



第1号柱立建築址 1



第1号円形周溝 2



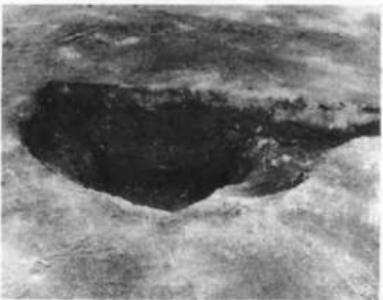
第1号円形周溝出土状況 3



第2号円形周溝 4



第3号溝状遺構 5



第9号土壤 6

写7 柱立建築址その他の遺跡
— 1号柱立建築址、2号円形周溝、3号溝状遺構、4号圓形周溝、5号土壤 —

第7章 南原古墳

第1節 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

南原古墳群は、茨城県水戸市田野町字南原1044-1ほかに所在している。市の北西部中ほどに位置し、現在山林となっている。調査対象は古墳2基である。本遺跡は、上市台地の北西部、標高46m内外の台地に位置し、北側と東側は、那珂川の支流田野川によって浸蝕された小支谷が樹枝状に入り込み、この支谷には谷津田が開かれている。南側は、千波湖附近で桜川と合流する沢渡川の支流が北上し、浸蝕によって支谷を形成している。西側は、鷲足山地塊の外縁部の丘陵がせまっている。この山地塊は阿武隈山脈の本塊が深く関東平野に入ってくる部分に相当し、かつては準平野を形成していたが、現在は開拓されて丘陵地が連続している。本遺跡は田野川や沢渡川の浸蝕によって形成された台地に立地している。

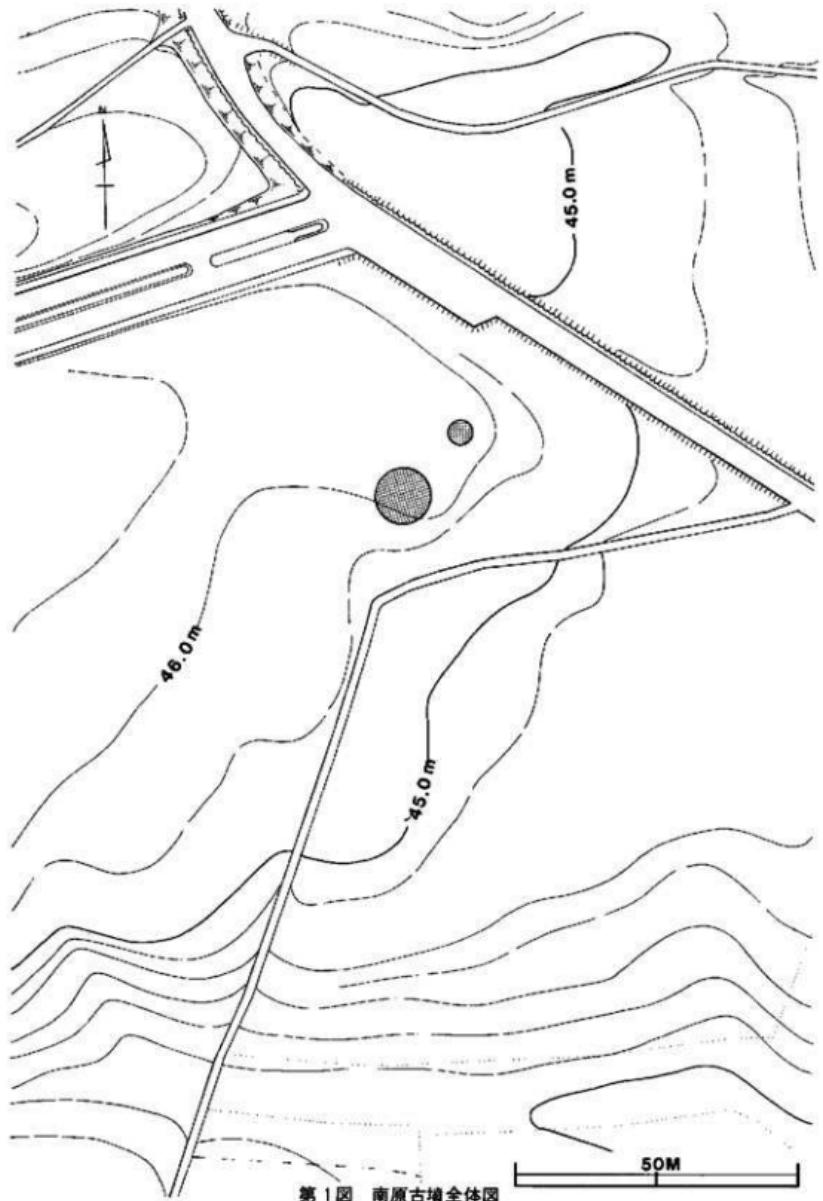
2 歴史的環境

本遺跡に隣接する前山田遺跡は、開江町の北側丘陵にあり、縄文前期關山式土器と、土師器、須恵器片とメノウ製の剝片が出土しており、先上器時代の包蔵地も重複している。

田野遺跡は、田野町の台地にあり、縄文早期のうち撚糸文系の花輪台、福荷台、沈線文の田戸下唇の各式、中期加曾利E式から壠ノ内式にかけての土器が出土している。弥生後期の十王台式器、土師器、須恵器片も出土している。飯富安戸星の台地のつらなる丘陵に馬場尻遺跡があり、縄文早期の子母口式が出土している。古土巻の集落附近からは、縄文前期、中期の土器片が出土している。弥生時代に属する遺跡は田野町台地と古土巻台地の中間に所在する田野遺跡で、弥生後期の十王台式土器片が出土している。古墳時代の鬼高式土器なども出土している。市営浜見台靈園の附近には三児塚古墳群、山田古墳群があり、どちらも群集墳である。後山田池の下流に山田墓址群がある。3基以上の墓址群が認められ、その1基からは横瓶が出土している。

第2節 調査の経過

南原古墳群は、昭和55年2月10日から3月31日までの予定で調査を実施した。調査は、中心杭「SAT-368」を起点として磁北方向に小調査区を設定して行なった。2基の古墳はいずれも円形

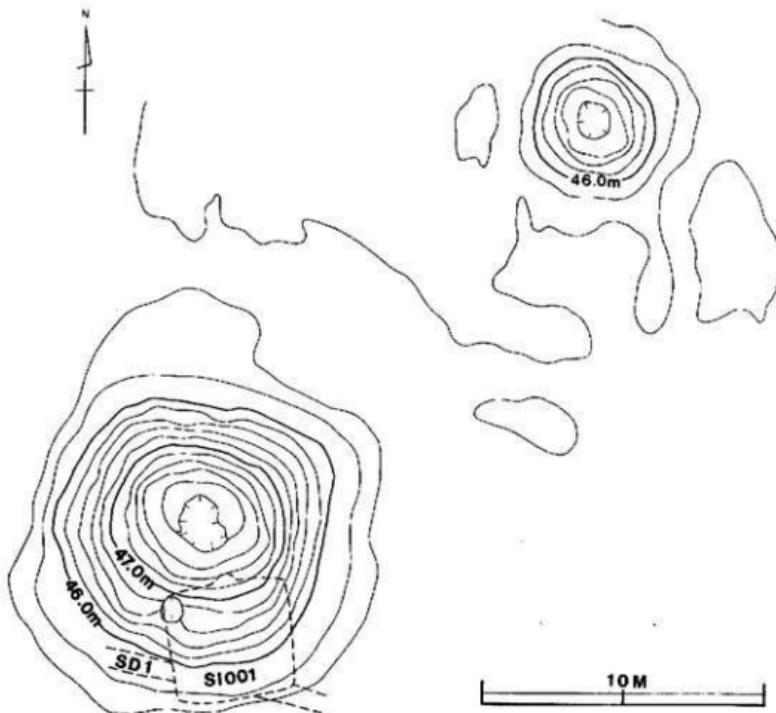


第1図 南原古墳全体図

を呈しており、しかも以前に盗掘を受けた痕が顕著に見られた。2基のマウンドのうち、西側に位置するものを1号墳、東側に位置するものを2号墳とした。

55年2月 テント設営、発掘調査器材の整備と準備をする。調査区の草刈り、雑木の焼却を行ない、鍛入れ式を行なった。14日—1号墳のセンター実測作業を行ない四分割法によって調査を開始する。埋葬施設は確認できず、墳頂より1.5m掘り下げたところから布目瓦を検出する。覆土の状態から古墳ではなく塚と認定する。24日—2号墳の調査を開始する。盛土中より須恵器片等を検出し覆土の状態から塚と認定する。

55年3月 1号墳の墳丘の下に竪穴住居址を確認する。竪穴住居址の遺物配置図、平面図、断面図を作成し、カマドの精査を行ない、調査を終了する。6日—発掘調査に使用した器材を大塚新地遺跡に搬出して本遺跡の調査を完了する。



第2図 南原古墳配置図

第3節 遺構・遺物

1 塚

第1号塚 (図3・5)

調査区域の南西部に位置し、2号塚に比べるとはるかに大きな規模であり、平面形は東西12m、南北13mの円形を呈し、現地表面との比高は約2.50mを測る。塚頂部には盗掘と思われる豊穴が掘られている。発掘調査の結果、本塚の下部、ソフトローム層の上部に約20~30cmの黒色土の旧表土が存在し、Cトレンチ及びDトレンチの裾部は擾乱を受けており、Dトレンチのものは近代の墓穴と思われる。またBトレンチ裾部には、旧表土下に溝状及び住居址と思われる落ち込みが見られた。

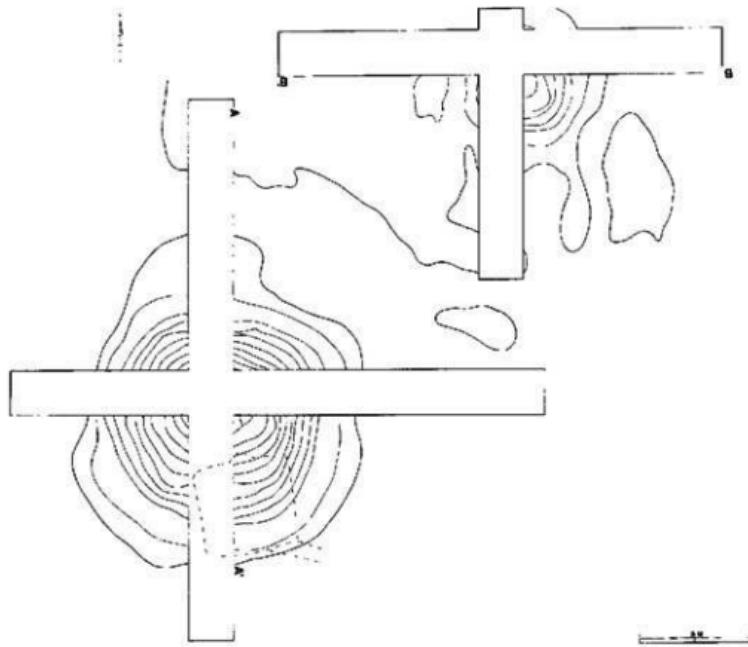
旧表土上面と塚頂部までの高さは約2.65mを測り、マウンドはこの旧表土の上に、主として黒色土、黒褐色土が盛られている。盛土は約30層に分けられ、最初の盛土の上にマウンド中位まで外縁を中央部よりやや高くしながら盛っているが、それより上の土層はほぼ水平に盛られている。旧表土下には、ソフトローム層が認められるが、盛土中にはソフトロームは検出されず、意識的に黒色の土を盛土したように見受けられる。

遺物は、盛土中より少量の土師器片(図5-1・2)、須恵器片、磁石(図5-3)、布目瓦が出士しているが、塚の構築時期、性格等決定できる遺物の出土は見られなかった。

第2号塚 (図3・5)

1号塚の北東部に位置し、平面形は径約5mの円形を呈し、1号塚と同じく、塚頂部に盗掘と思われる豊穴が掘られている。現地表面との比高は約1mで1号塚に比してかなり小型である。発掘調査の結果、本塚も1号塚と同様、ソフトローム層上部に旧表土と考えられる黒色土が見られる。旧表土上面からの高さは約1.25mである。マウンドは、この旧表土の上に、主として黒色土を盛って構築され、13層に分けられる。土層断面を見ると、旧表土面とほぼ並行に盛土され、1号塚と同じく意識的に黒色土を用いている。

Bトレンチ裾部に落ち込みが見られたが、これは1号塚Dトレンチで確認されたものと同じく後世の墓壙と考えられる。出土遺物は、少量の土師器(図5-1・2・4)、須恵器片及び縄文期に属すると思われる分銅形の大型打製石斧(図5-5)があるが、いずれも構築時期及び性格等が決定できる資料ではない。構築時期については不明と言わざるを得ないが、1・2号ともに同一の旧表土上に構築されているため、ほぼ同時期に構築されたものと思われる。



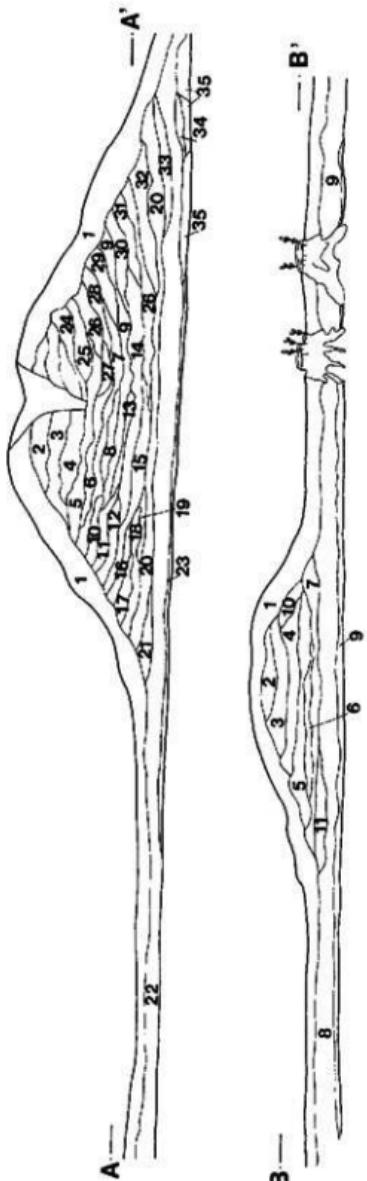
第3図 第1・2号塚遺構実測図（その1）

第2号塚出土石器

扁平な擦を両面から打ち欠いて仕上げた分銅形打製石斧であり、表、裏面とも自然面を残している。石材は安山岩。大型で重量のある石斧である。分銅形に仕上げ、抉り部分の鋭角な剝離箇所にはつぶし加工を施しており、固定時につるを保護するためであろう。上下の刃部には使用によると思われる磨滅痕が認められる。（全長13.6cm、幅11.5cm、厚3.4cm）

2 溝状遺構

1号塚Bトレンチ底部において検出された遺構であり、幅約75cm、深さ約20cmを測る。方向はほぼ東西に走り、1号塚旧表土下において検出され、1号住居址の覆土を切っていることから、1号塚よりも古いものであるが、遺物の出土をほとんど見ないため、性格、時期等は不明である。



土層解説	
A-A'	1 黒色 水の痕などによる擾乱が著しい 白色微粒子(極少)含有
2 黒色 白色微粒子(少)含有	
3 黒色 黒色ハードブロック(多)白色微粒子(極少)含有	
4 黒色 黒色ハードブロック(多)白色微粒子(極少)含有	
5 黒色 基本的に3層と同じである	
6 黒色 基本的に4層と同じである	
7 黒色 基本的に3層と同じである	
8 黒色 基本的に4層と同じである	
9 黒色 基本的に2層と同じである	
10 黒色 8層と同じである	
11 黒色 基本的に3層と同じである	
12 黒色 基本的に4層と同じである	
13 黒色 基本的に4層と同じである	
14 深色 基本的に2層と同じである	
15 黒色 基本的に3層と同じである	
16 黒色 基本的に2層と同じである	
17 黒色 基本的に4層と同じである	
18 黒色 基本的に2層と同じである	
19 黒色 基本的に2層と同じである	
20 黒色 深色ハードブロック(多)セーモ粒子	
21 黒色 基本的に3層と同じである (少)含有	
22 黄色 セーモ粒子(少)炭化粒子(少)壤土粒子含有 セーモ被覆層(いわゆる褐色土)	
23 黄褐色 2層と同じである。	
24 黑褐色 基本的に4層と同じである。	
25 黑褐色 基本的に4層と同じである。	
26 黑褐色 基本的に2層と同質であるが23層のブロック(少)含有	
27 黑褐色 基本的に3層と同質である	
28 黑褐色 基本的に4層と同質である	
29 黑褐色 基本的に4層と同質である	
30 灰褐色 基本的に2層と同質である	
31 基本的に2層と同質である	
32 基本的に2層と同質である	
33 基本的に2層と同質である	
34 基本的に3層と同質である	
35 黑褐色 少量のYP、焼土粒子(極少)含有(作付地層上 と思われる)	

上層解説

B-B'

1 黒色	水の痕などによる擾乱が著しい
2 黒色	白色微粒子(少、スコリア)含有、やわらかい
3 黒色	2層と基本的に同じであるが、セーモ粒子(少) 含有
4 黒色	4層と基本的に同じであるが、セーモ粒子(多)含有
5 黒色	3層と同質である
6 黒色	4 層と同質である
7 白黒色	白色微粒子(少)セーモ微粒子含有
8 黒色	白色微粒子(少)セーモ微粒子焼土粒子(極少)含有
9 黄褐色	セーモ薄荷層
10 黒色	2層と同質である
11 黒色	9層と同じだが、ハードセーモブロック多 く含有

第3図 第1・2号塚実測図(その2)

3 住居址(図4・5・6)

1号塚旧表土下において検出され、覆土上面を一部1号溝によって切られている。中心軸の方位はN-8°-Wで、平面形は東西4.25m、南北3.9mの方形を呈している。1号溝を有しているが、北東部コーナー附近では消滅する。覆土は、主として黒色土及び黒褐色土で構成されている。柱穴は4箇所確認され、P1-P4は主柱穴と考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、北壁で60cm、南壁で55cmを測る。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P1	31	28	53	主柱穴	P3	29	25	52	主柱穴
P2	38	28	51	主柱穴	P4	30	38	43	主柱穴

カマドは北壁のほぼ中央に位置し、北方へ丸く約30cmほど切り込み、袖部は、床面に褐色土を置き、その上に粘土を盛って作られており、大きさは右袖幅約25cm、左袖幅約20cm、高さ15cmを測る。右袖部裏側にハードローム塊が置かれているが、これはカマド構築の際使用したものであろうか。焚口の幅は約45cm、長さ約60cm、深さ5cmで、燃焼部はほぼ平坦である。煙道部は、昇角約55°で、煙出口は径約15cmの円形を呈するものと思われる。

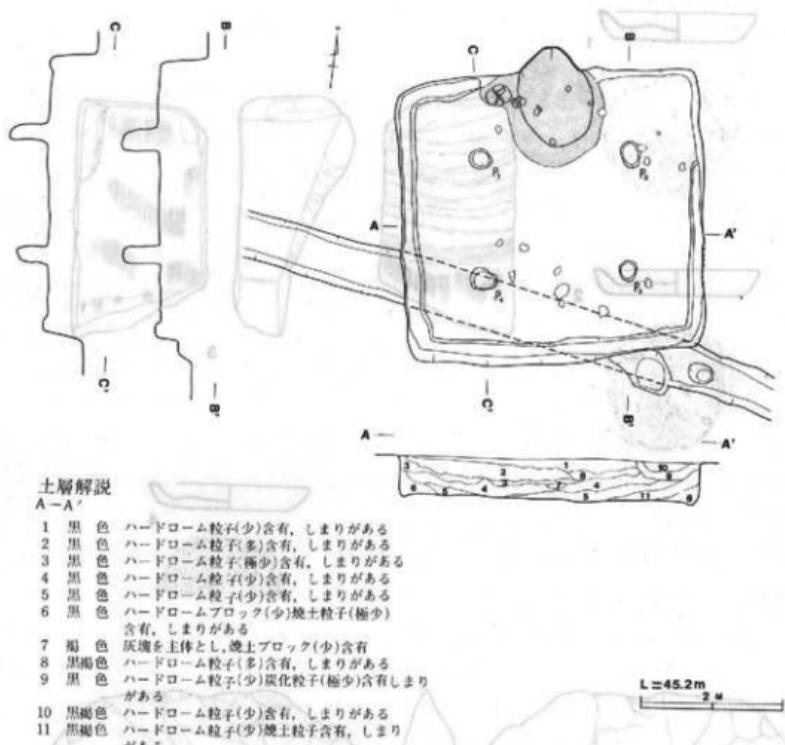
なお、遺物としては燃焼部の中央、火床に接するように、復元可能な甕が口縁を焚口に向けるように出土している。

出土遺物は、須恵器が多量に出土し、カマド内から蓋(図6-2)を、南壁中央部附近床面直上から盤(図6-7)と、覆土から甕(図6-5)を出土している。中央部床面から甕(図6-4)を、北東部覆土から(図6-6)、南壁中央部付近覆土から盤(図6-8)を、南東コーナーP4付近覆土から蓋(図6-3)を出土し、他に甕、蓋、甕などの破片を数点出土している。土師器は、カマド内から甕(図6-1)の完成品を出土し、他には甕、甕などの破片を多数出土している。

第1号住居址出土土器

土師器甕形土器(図6-1)は口径30.7cmで、口縁部にはあまい「S」字状を呈し、やや強く外反している。胴部は緩やかに張り、胴部中位に最大径を持っている。底部は平坦で木葉痕があり、口縁部は内外とも指ナデ整形が施され、胴部は内外ともヘラナデで整形されている。

須恵器の甕形土器(図6-6)は、口径6.7cmを測り、底部は回転ヘラ削りの後、外側へふんばる短かい高台を貼りつけている。下端部は外側を向き丸く收めている。体部は器厚を減じながら内側気味に外上方へ開き、中位でにぶい棱をなしている。口縁部は僅かに外反し、端部は外側ににぶい棱を持っている。水挽き痕は弱い。

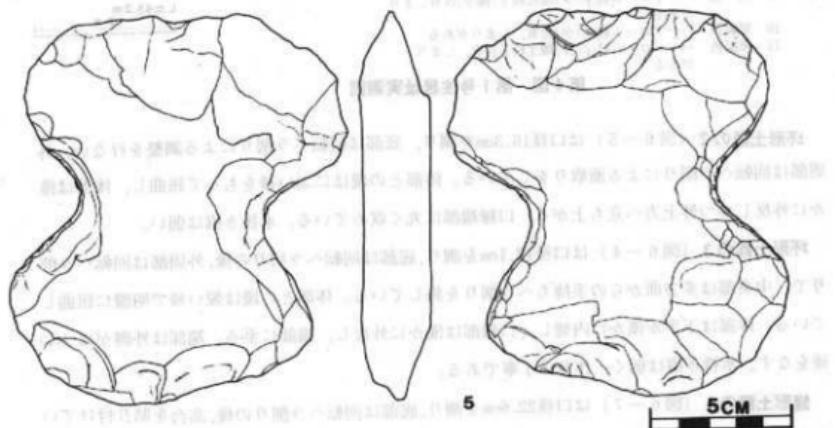


第4図 第1号住居址実測図

环形土器の2(図6-5)は口径16.3cmを測り、底部は回転ヘラ削りによる調整を行ない、外周部は回転ヘラ削りによる面取りをしている。体部との境はにぶい棱をもって屈曲し、体部は僅かに外反しつつ外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く收めている。水挽き痕は弱い。

环形土器の3(図6-4)は口径13.1cmを測り、底部は回転ヘラ切りの後、外周部は回転ヘラ削りで、中央部は多方面からの手持ちヘラ削りを施している。体部との境は鋭い棱で明瞭に屈曲している。体部は下半が僅かに内側し、口縁部は僅かに外反し、端部に至る。端部は外側がにぶい棱をなす。水挽き痕は弱く、作りは丁寧である。

盤形土器の1(図6-7)は口径22.6cmを測り、底部は回転ヘラ削りの後、高台を貼り付けているが、現在は剥落しており、断面三角状の短かいものと思われる。底部から口縁部にかけては丸味を持って屈曲し端部に至る。端部は外側端が僅かに張り出しがほぼ丸く收めている。水挽き痕は弱い。

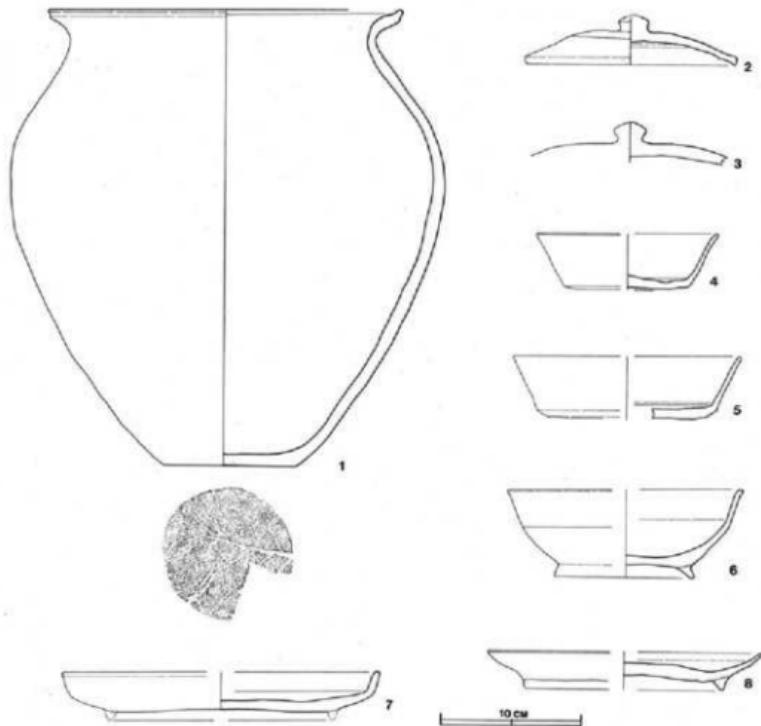


第5図 第1・2号塚覆土の出土遺物実測図

盤形土器の2(図6-8)は口径19.6cmを測り、底部は粘土紐まき上げ痕を残す難な回転ヘラ削りを施した後。断面三角形の短い台を雜に貼り付けている。底部と口縁部の境は不明瞭で、僅かに器厚を減じながら大きく外方へ開き端部に至る。端部はおおむね丸く収めている。水挽き痕は弱い。

蓋の1(図6-2)は口径14.9cmを測り、天井部は径9cmにわたって回転ヘラ削りを施し、中央部に擬宝珠状のつまみを有する。天井部は内側気味に下外方へ開いてゆき、口縁部は若干内側へ向って下がる。端部はやや鋸さを持つ。水挽き痕は弱い。

蓋の2(図6-3)は、天井部は回転ヘラ削りの後丸味を持つ。擬宝珠状のつまみを有する。水挽き痕は弱い。天井部にはにぼい黄緑色の自然釉が付着している。



第6図 第1号住居址内出土遺物実測図

その他、須恵器の环・甕・蓋の破片数点と土師器の甕・蓋・环などの破片を多数出土している。本址は、出土遺物等から国分期に比定される造構と思われる。

第4節　まとめ

本遺跡は当初、2基の古墳を調査対象として発掘調査を実施したが、調査が進むに従って周溝も検出されず、1号墳とした盛土の下部からは国分期の住居址が検出され、2号墳とした盛土からは縄文時代の分銅形の大型打製石斧などが出土しているので、1号塚、2号塚とも古墳ではなく何らかの目的で構築した塚であると思われる。1号塚、2号塚共、構築時期と性格等については明らかでない。



第1号塚



第1号塚セクション



第2号塚



第2号塚セクション



第1号住居址



作業風景

写1

南原古墳群

参考・引用文献

- ・茨城県史編集委員会「茨城県史料 考古学資料編・先土器・縄文時代」茨城県 昭和54年
- ・茨城県史編集委員会「茨城県史料 考古学資料編・古墳時代」茨城県 昭和49年
- ・井上義安『茨城県喜上山遺跡』昭和54年
- ・井上義安『茨城県大洗町長塚遺跡』昭和48年
- ・佐藤次男・井上義安・宮田一義『弥生式土器一闇東・東関東1-1』『考古学ジャーナル』146号 昭和53年
- ・村田健『千代・天洗地区遺跡調査会』昭和55年
- ・小林行里・移原莊介編『弥生式土器集成図録』弥生式土器集成刊行会 昭和48年
- ・茂木雅博編『小澤野』茨城県支海村教育委員会・東海村小澤野遺跡調査会 昭和53年
- ・移原莊介・大塚初重編『土師式土器集成図録 本編1』東京堂出版 昭和46年
- ・移原莊介・大塚初重編『土師式土器集成図録 本編2』東京堂出版 昭和47年
- ・移原莊介・大塚初重編『土師式土器集成図録 本編3』東京堂出版 昭和48年
- ・移原莊介・大塚初重編『土師式土器集成図録 本編4』東京堂出版 昭和49年
- ・水戸市史編纂委員会『水戸市史』上巻 昭和38年
- ・中村治也『歴史』大阪府文化財調査報告書第28集 大阪府教育委員会 昭和51年
- ・鹿島町木瀬台遺跡発掘調査会『木瀬台遺跡、桜山古墳、埋蔵文化財発掘調査報告書』鹿島の文化財第6集 昭和53年
- ・永山義造他『国道一福島県大采村における奈良・平安時代集落址の発掘』『国造遺跡発掘調査同』昭和53年
- ・埼玉県教育委員会『国道17号熊谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告』埼玉県設跡発掘調査報告書第11集 昭和52年
- ・勝田市教育委員会『高野寺附遺跡調査報告書』昭和54年
- ・勝田市教育委員会『遠原貝塚調査報告書』昭和55年
- ・勝田市教育委員会『市内遺跡発掘調査報告書』昭和55年
- ・勝田市教育委員会『堀川遺跡発掘調査報告書』昭和55年
- ・日本地誌研究所『日本地誌5』昭和50年
- ・藤本彌城編『那珂川下流の石器時代研究I』昭和52年
- ・藤本彌城編『那珂川下流の石器時代研究II』昭和55年
- ・井上義安編『延暦一鹿島線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報一』昭和55年
- ・平田堅三『本邦地下式壙の類型学的研究』『伊知波良2』
- ・木下重成・小川留太郎『標準原色図鑑全集第6巻』昭和49年
- ・佐久間信・井刊考古学ジャーナルNo.53 昭和53年9月
- ・佐久間信・井刊考古学ジャーナルNo.182 昭和55年10月
- ・豊良岐考古同人会『豊良岐考古第1号』昭和55年4月
- ・茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』昭和52年3月

茨城県教育財団文化財調査報告 XI

昭和 56 年 3 月 27 日 印刷

昭和 56 年 3 月 31 日 発行

発行 財團法人 茨城県教育財團

水戸市南町 3-4-57

印刷 株式会社 高野高速印刷

水戸市東原 2-8-1